長崎県文化財調査報告書　第74集

諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

Ⅱ

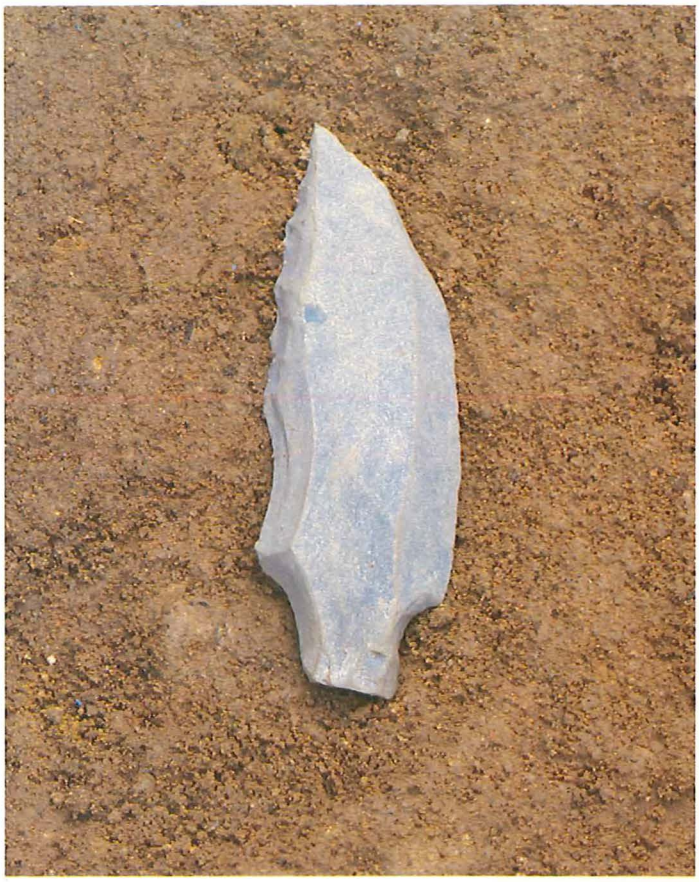
西輪久道遺跡

1985

長崎県教育委員会

遺跡周辺の航空写真

B－18区 第Ⅳ層出土 玉



D－19区 第Ⅶ層出土 剝片尖頭器

西輪久道遺跡遠景

はじめに

このたび，西輪久道遺跡の調査報告書を公刊することになりました。この報告書は，長崎県教育委員会が，事業主体である地域振興整備公団の要請を受けて緊急発掘調査を行なった成果を，調査報告書の第Ⅱ集として取りまとめたものであります。

発掘調査は，昭和53年４月から昭和57年１月まで，工業団地予定区域内の西輪久道，鷹野，平の３遺跡について実施いたしました。

地下の埋蔵文化財は，私たちが遠い祖先から受け継いだ遺産であり，これを損なわないで，後世に引き継ぐことは私たちに課せられた責務であります。

開発事業は，規模の大小にかかわらず遺跡破壊の問題を抱えておりますが，文化財サイドと開発サイドとの緊密な連絡と調整によって不作為の遺跡破壊は回避できる余地が十分ありますし，その実績も多く持っております。

諫早中核工業団地については，計画段階から埋蔵文化財の保護には地域振興整備公団に，特に配慮していただき，長牟田遺跡（２ha）は緑地公園として現状保存し，また鷹野遺跡内の炉跡３基は移築復元し，諫早市郷土館に展示されています。

本調査に御協力を賜りました関係の皆様に厚くお礼を申し上げますとともに，この調査報告を通して埋蔵文化財についての理解を深めていただければ幸いです。

昭和60年３月

長崎県教育長

伊　藤　昭　六

例　　言

1．本書は諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書の第Ⅱ分冊である。

2．調査遺跡，期間，所在地は次のとおりである。

西輪久道遺跡　昭和50年12月４日～昭和50年12月10日（試掘調査）
昭和53年４月24日～昭和54年11月１日（本調査）

長崎県諫早市津久葉町に所在する。

3．発掘調査の事業主体は地域振興整備公団で，調査指導を長崎県教育委員会が行い，副島和明（文化財保護主事），稲富和裕（現，大村市教育委員会），中村和正（現，外海町教育委員会），中田敦之（現，松浦市教育委員会）が担当した。

4．整理作業は長崎県教育委員会が調査主体で，副島，伴　耕一朗（文化財調査員）が行った。

5．本書は分担執筆した。Ⅰ，Ⅱ，Ⅵ―１・２・３・５，Ⅴを副島，Ⅲ・Ⅳ―４を伴が執筆した。

土壌の花粉分析結果についてはパリノサーヴェイ㈱より巻末に附した報告を受けた。

6．遺物の実測・整図は副島，伴，中村が行った。

発掘調査の写真撮影・整理作業の遺物写真撮影は副島が行った。

7．出土遺物は，長崎県教育委員会が保管している。

8．本書の編集は副島，伴が担当した。

本 文 目 次

Ⅰ．調査に至るまで…… 1
Ⅱ．調査経過…… 2
　1．　試掘調査…… 2
　2．　本調査…… 3
Ⅲ．遺跡の地理的歴史的環境…… 7
Ⅳ．西輪久道遺跡の調査…… 11
　1．　調査概要…… 11
　2．　層　位…… 12
　3．　先土器時代…… 16
　　①　遺構…… 16
　　②　遺物…… 18
　　③　遺物の分布について…… 57
　　④　小結…… 81
　4．　縄文時代…… 86
　　①　遺構…… 86
　　②　遺物出土状況…… 97
　　③　土器…… 132
　　④　石器…… 141
　　⑤　遺物の分布について…… 182
　　⑥　出土遺物について…… 195
　　⑦　検出遺構について…… 201
　　⑧　小結…… 202
　5．　落ち込み・ドーナツ状土壙について…… 207
Ⅴ．まとめ…… 220
Ⅵ．西輪久道遺跡試料花粉分析結果報告…… 221

挿 図 目 次

付図1　先土器時代の遺物分布図（第Ⅵ～Ⅹ層）
付図2　先土器時代の遺物分布図（第Ⅲ～Ⅴ層）
付図3　先土器時代の遺物分布図（第Ⅲ層）
付図4　先土器時代の遺物分布図（第Ⅱ層）
付図5　縄文時代の遺物分布図（第Ⅱ層）
付図6　縄文時代の遺物分布図（第Ⅲ層）

Fig. 1　位置図
Fig. 2　諫早中核工業団地関係遺跡及び試掘壙…… 2
Fig. 3　長崎県地形図及び遺跡位置図…… 6
Fig. 4　長崎県地質図…… 6
Fig. 5　周辺の遺跡…… 9
Fig. 6　遺跡周辺地形図…… 10
Fig. 7　西輪久道遺跡土層模式図…… 12
Fig. 8　層位図……13，14
Fig. 9　下層検出礫群Ⅰ（D—10・11区）…… 16
Fig. 10　下層検出礫群Ⅱ（D—12～14区）…… 17
Fig. 11　上層検出礫群Ⅲ（D—16区）…… 17
Fig. 12　先土器時代の石器・表採，ドーナツ状土壙出土…… 19
Fig. 13　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（1）～ナイフ形石器（2/3）　21
Fig. 14　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（2）—台形・台形様石器
　　尖頭器類（2/3）…… 23
Fig. 15　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（3）—尖頭器類・
　　細石刃（2/3）…… 24
Fig. 16　先土器時代・上層出土石器（1）—ナイフ形石器
　　台形石器（2/3）…… 26
Fig. 17　先土器時代・上層出土石器（2）—台形様石器（2/3）…… 27
Fig. 18　先土器時代・上層出土石器（3）—尖頭器類（2/3）…… 29
Fig. 19　先土器時代・上層出土石器（4）—尖頭器類（2/3）…… 30
Fig. 20　先土器時代・上層出土石器（5）—掻器・削器・
　　使用痕のある剝片（2/3）…… 31

Fig. 21　先土器時代・上層出土石器（６）―剥片（2/3）…… 32
Fig. 22　先土器時代・上層出土石器（７）―細石核・細石刃（2/3） 33
Fig. 23　先土器時代・下層出土石器（１）―ナイフ形石器・
台形・台形様石器（2/3）…… 35
Fig. 24　先土器時代・下層出土石器（２）―剥片尖頭器・
三稜尖頭器・掻器・使用痕のある剥片（2/3）…… 36
Fig. 25　先土器時代・下層出土石器（３）―剥片・細石刃（2/3）… 37
Fig. 26　先土器時代・下層出土石器（４）―石核①（2/3）…… 38
Fig. 27　先土器時代・下層出土石器（５）―石核②（2/3）…… 39
Fig. 28　先土器時代・下層出土石器（６）―石核③（2/3）…… 40
Fig. 29　ナイフ形石器計測図（１）…… 48
Fig. 30　ナイフ形石器計測図（２）…… 48
Fig. 31　台形・台形様石器計測図（１）…… 48
Fig. 32　台形・台形様石器計測図（２）…… 48
Fig. 33　尖頭器類計測図（１）…… 48
Fig. 34　台形・台形様石器計測図（３）…… 49
Fig. 35　尖頭器類計測図（２）…… 49
Fig. 36　尖頭器類計測図（３）…… 49
Fig. 37　細石刃計測図（１）…… 49
Fig. 38　細石刃計測図（２）…… 49
Fig. 39　下層出土遺物の集中範囲位置図…… 56
Fig. 40　下層遺物出土区…… 59
Fig. 41　Ｃ～Ｆ―10・11区・下層遺物分布図（１）…… 60
Fig. 42　Ｃ～Ｆ―12・13区・下層遺物分布図（２）…… 61
Fig. 43　Ｃ～Ｆ―14・15区・下層遺物分布図（３）…… 62
Fig. 44　Ｂ～Ｅ―16・17区・下層遺物分布図（４）…… 63
Fig. 45　Ｂ～Ｅ―18・19区・下層遺物分布図（５）…… 64
Fig. 46　Ｂ～Ｅ―20・21区・下層遺物分布図（６）…… 65
Fig. 47　上層出土遺物の集中範囲位置図…… 66
Fig. 48　上層遺物出土区…… 69
Fig. 49　Ｄ～Ｇ―10・11区・上層遺物分布図（１）…… 70
Fig. 50　Ｃ～Ｆ―12・13区・上層遺物分布図（２）…… 71
Fig. 51　Ｃ～Ｆ―14・15区・上層遺物分布図（３）…… 72
Fig. 52　Ｂ～Ｅ―16・17区・上層遺物分布図（４）…… 73

Fig. 53　B～E—18・19区・上層遺物分布図（5）…… 74
Fig. 54　B～E—20・21区・上層遺物分布図（6）…… 75
Fig. 55　G～J—12・13区・上層遺物分布図（7）…… 76
Fig. 56　G～J—14・15区・上層遺物分布図（8）…… 77
Fig. 57　K～M—12・13区・上層遺物分布図（9）…… 78
Fig. 58　K～N—14・15区・上層遺物分布図（10）…… 79
Fig. 59　I・J—16区　　・上層遺物分布図（11）…… 80
Fig. 60　K—12区　　・下層遺物分布図（7）…… 80
Fig. 61　西輪久道遺跡・先土器時代　上・下層出土遺物……83，84
Fig. 62　1号集石遺構（1/40）…… 87
Fig. 63　2号集石遺構（1/20）…… 87
Fig. 64　3号集石遺構（1/20）…… 88
Fig. 65　4号集石遺構（1/10）…… 89
Fig. 66　5号集石遺構（1/40）…… 90
Fig. 67　6号集石遺構（1/20）…… 91
Fig. 68　第Ⅱ層・第Ⅲ層検出遺構位置図…… 91
Fig. 69　1号炉址（炭化物集中遺構）（1/40）…… 92
Fig. 70　2号炉址（炭化物集中遺構）（1/20）…… 93
Fig. 71　3号炉址（石組炉）（1/20）…… 94
Fig. 72　溝状遺構（1/80）…… 96
Fig. 73　第Ⅱ層における遺物分布図の順番と記号…… 98
Fig. 74　B～E—8・9区・第Ⅱ層遺物分布図1…… 99
Fig. 75　C～F—10・11区・第Ⅱ層遺物分布図2…… 100
Fig. 76　C～F—12・13区・第Ⅱ層遺物分布図3…… 101
Fig. 77　C～F—14・15区・第Ⅱ層遺物分布図4…… 102
Fig. 78　B～E—16・17区・第Ⅱ層遺物分布図5…… 103
Fig. 79　B～E—18・19区・第Ⅱ層遺物分布図6…… 104
Fig. 80　B～E—20・21区・第Ⅱ層遺物分布図7…… 105
Fig. 81　G～J—12・13区・第Ⅱ層遺物分布図8…… 106
Fig. 82　G～J—14・15区・第Ⅱ層遺物分布図9…… 107
Fig. 83　F～I—16・17区・第Ⅱ層遺物分布図10…… 108
Fig. 84　K～M—12・13区・第Ⅱ層遺物分布図11…… 109
Fig. 85　K～N—14・15区・第Ⅱ層遺物分布図12…… 110
Fig. 86　J～M—16・17区・第Ⅱ層遺物分布図13…… 111

Fig. 87　N～O—16・17区，Q—22区・第Ⅱ層遺物分布図14…… 112
Fig. 88　N～P—18・19区・第Ⅱ層遺物分布図15…… 113
Fig. 89　O～Q—20・21区・第Ⅱ層遺物分布図16…… 114
Fig. 90　C～D—6・7区，F—18・19区・第Ⅱ層遺物分布図17… 115
Fig. 91　G～I—9・10区・第Ⅱ層遺物分布図18…… 116
Fig. 92　第Ⅲ層における遺物分布図の順番と記号…… 117
Fig. 93　C～F—10・11区・第Ⅲ層遺物分布図1…… 118
Fig. 94　C～F—12・13区・第Ⅲ層遺物分布図2…… 119
Fig. 95　C～F—14・15区・第Ⅲ層遺物分布図3…… 120
Fig. 96　B～E—16・17区・第Ⅲ層遺物分布図4…… 121
Fig. 97　B～E—18・19区・第Ⅲ層遺物分布図5…… 122
Fig. 98　B～E—20・21区・第Ⅲ層遺物分布図6…… 123
Fig. 99　G～J—12・13区・第Ⅲ層遺物分布図7…… 124
Fig.100　G～J—14・15区・第Ⅲ層遺物分布図8…… 125
Fig.101　F～I—16・17区・第Ⅲ層遺物分布図9…… 126
Fig.102　K～M—12・13区・第Ⅲ層遺物分布図10…… 127
Fig.103　K～M—14・15区・第Ⅲ層遺物分布図11…… 128
Fig.104　J～M—16・17区・第Ⅲ層遺物分布図12…… 129
Fig.105　C～D—6・7区，F—18・19区・第Ⅲ層遺物分布図13… 130
Fig.106　G～I—9区　　・第Ⅲ層遺物分布図14…… 131
Fig.107　縄文時代の土器—押型文土器（1/2）…… 133
Fig.108　縄文時代の土器—塞ノ神式土器（1/2）…… 135
Fig.109　縄文時代の土器—貝殻条痕文土器（轟式系土器）（1/2）… 137
Fig.110　縄文時代の土器—その他の土器（1/2）…… 138
Fig.111　各地区出土石鏃…… 141
Fig.112　縄文時代の石器—石鏃①（2/3）…… 142
Fig.113　縄文時代の石器—石鏃②（2/3）…… 143
Fig.114　縄文時代の石器—石鏃③（2/3）…… 144
Fig.115　縄文時代の石器—石鏃④（2/3）…… 145
Fig.116　縄文時代の石器—石鏃⑤（2/3）…… 146
Fig.117　縄文時代の石器—石鏃⑥（2/3）…… 147
Fig.118　縄文時代の石器—石鏃⑦（2/3）…… 148
Fig.119　石鏃長幅比…… 148
Fig.120　石鏃抉り長幅比…… 149

Fig.121 石鏃石材別依存度…… 153
Fig.122 石鏃幅・長さ・重量・先端角度グラフ…… 156
Fig.123 縄文時代の石器—石匙①（1/2）…… 158
Fig.124 縄文時代の石器—石匙②（1/2）…… 159
Fig.125 各地区出土石匙…… 160
Fig.126 各地区出土スクレイパー…… 160
Fig.127 縄文時代の石器—スクレイパー①（1/2）…… 161
Fig.128 縄文時代の石器—スクレイパー②（1/2）…… 162
Fig.129 縄文時代の石器—スクレイパー③（1/2）…… 163
Fig.130 縄文時代の石器—加工痕ある石器・使用痕ある剝片（2/3） 166
Fig.131 縄文時代の石器—使用痕ある剝片・石槍・石錐・
異形石器（2/3）…… 167
Fig.132 各地区出土加工痕ある石器・使用痕ある剝片…… 169
Fig.133 各地区出土石槍・石錐・異形石器…… 169
Fig.134 縄文時代の石器—磨石・敲石・砥石（1/3）…… 171
Fig.135 縄文時代の石器—石皿（1/3）…… 172
Fig.136 縄文時代の石器—石斧（2/3）…… 173
Fig.137 各地区出土磨石・敲石・砥石・石皿・石斧…… 173
Fig.138 縄文時代の石器—剝片①（2/3）…… 175
Fig.139 縄文時代の石器—剝片②（2/3）…… 176
Fig.140 縄文時代の石器—石核①（2/3）…… 177
Fig.141 縄文時代の石器—石核②（2/3）…… 178
Fig.142 縄文時代の石器—石核③（2/3）…… 179
Fig.143 玉（1/1）…… 182
Fig.144 第Ⅱ層における遺物集中範囲…… 184
Fig.145 第Ⅲ層における遺物集中範囲…… 185
Fig.146 第Ⅱ層遺物集中範囲における石器組成比…… 186
Fig.147 第Ⅲ層遺物集中範囲における石器組成比…… 187
Fig.148 第Ⅱ層・第Ⅲ層出土の各石器対比グラフ…… 187
Fig.149 各遺物出土区①…… 188
Fig.150 各遺物出土区②…… 189
Fig.151 各遺物集中範囲における各石器の出土数グラフ……191，192
Fig.152 第Ⅱ層・第Ⅲ層における土器分類比…… 196
Fig.153 石鏃破損度比…… 198

Fig.154 異形石器出土の遺跡…… 200
Fig.155 西輪久道遺跡の発掘区と遺物が出土した範囲…… 203
Fig.156 落ち込み・ドーナツ状土壙配置図……209，210
Fig.157 ドーナツ状土壙（1）(1/60)…… 211
Fig.158 ドーナツ状土壙（2）(1/60)…… 212
Fig.159 ドーナツ状土壙（3）(1/60)…… 213
Fig.160 ドーナツ状土壙（4）(1/60)…… 214
Fig.161 ドーナツ状土壙（5）(1/60)…… 215
Fig.162 落ち込み・ドーナツ状土壙出土石器（1）…… 216
Fig.163 落ち込み・ドーナツ状土壙出土石器（2）…… 217

表　目　次

Tab. 1 諫早中核工業団地関係試掘調査遺跡…… 3
Tab. 2 諫早中核工業団地関係遺跡一覧表…… 4
Tab. 3 周辺遺跡地名表…… 8
Tab. 4 ナイフ形石器の層位別出土一覧表…… 42
Tab. 5 台形・台形様石器の層位別出土一覧表…… 45
Tab. 6 尖頭器類の層位別出土一覧表…… 47
Tab. 7 先土器時代の石器計測表……50～56
Tab. 8 出土石器石材別，層位別出土一覧表…… 85
Tab. 9 土器一覧表…… 140
Tab. 10 石鏃破損部位別一覧表…… 141
Tab. 11 石鏃分類表…… 149
Tab. 12 石鏃計測表……150～153
Tab. 13 石匙計測表…… 159
Tab. 14 スクレイパー計測表…… 164
Tab. 15 加工痕ある石器・使用痕ある剥片・石槍
・石錐・異形石器一覧表…… 168
Tab. 16 磨石・敲石・砥石・石皿一覧表…… 172
Tab. 17 剥片・石核一覧表…… 180
Tab. 18 ドーナツ状土壙一覧表……218，219
Tab. 19 落ち込み一覧表…… 219

Tab. 20 西輪久道遺跡試料表…… 221
Tab. 21 西輪久道遺跡試料花粉分析結果報告（1）…… 222
Tab. 22 西輪久道遺跡試料花粉分析結果報告（2）…… 223

図 版 目 次

巻頭図版1　遺跡周辺の航空写真
巻頭図版2　上　遺物出土状況
　　下　西輪久道遺跡遠景

ＰＬ．1　調査前の遺跡周辺航空写真…… 227
ＰＬ．2　西輪久道遺跡遠景（試掘調査時），遺跡遠景（中核工業団地・九州横断自動車道関係調査区），遺跡遠景（中核工業団地関係調査区）…… 228
ＰＬ．3　Ｅ—12・13区北壁面，Ｄ—13・14区北壁面，Ｄ—20区西壁面…… 229
ＰＬ．4　Ｅ—８・９区北壁面，Ｅ—19・20区北壁面，Ｋ—12区北壁面…… 230
ＰＬ．5　上層検出礫群（3）（Ｄ—16区），Ｄ—13・14区遺物出土状況（東より），Ｄ—13・14区遺物出土状況（東より）…… 231
ＰＬ．6　Ｄ—12・13区遺物出土状況（北より），Ｄ—10・11区遺物出土状況（北より）…… 232
ＰＬ．7　先土器時代の石器・表土・ドーナツ状土壙出土（表）(1/1)…… 233
ＰＬ．8　先土器時代の石器表土・ドーナツ状土壙出土（裏）(1/1)…… 234
ＰＬ．9　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（1）—ナイフ形石器（表）(1/1)…… 235
ＰＬ．10　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（1）—ナイフ形石器（裏）(1/1)…… 236
ＰＬ．11　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（2）—台形・台形様石器・尖頭器類（表）(1/1)…… 237

ＰＬ．12　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（２）―台形・台形様
石器・尖頭器類（裏）(1/1) …… 238
ＰＬ．13　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（３）―尖頭器類・
細石刃（表）(1/1) …… 239
ＰＬ．14　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（３）―尖頭器類・
細石刃（裏）(1/1) …… 240
ＰＬ．15　先土器時代・上層出土石器（１）―ナイフ形石器・
台形石器（表）(1/1) …… 241
ＰＬ．16　先土器時代・上層出土石器（１）―ナイフ形石器・
台形石器（裏）(1/1) …… 242
ＰＬ．17　先土器時代・上層出土石器（２）―台形様石器
（表）(1/1)…… 243
ＰＬ．18　先土器時代・上層出土石器（２）―台形様石器
（裏）(1/1)…… 244
ＰＬ．19　先土器時代・上層出土石器（３）―尖頭器類
（表）(1/1)…… 245
ＰＬ．20　先土器時代・上層出土石器（３）―尖頭器類
（裏）(1/1)…… 246
ＰＬ．21　先土器時代・上層出土石器（４）―尖頭器類
（表）(1/1)…… 247
ＰＬ．22　先土器時代・上層出土石器（４）―尖頭器類
（裏）(1/1)…… 248
ＰＬ．23　先土器時代・上層出土石器（５）―掻器・削器・
使用痕のある剥片（表）(1/1) …… 249
ＰＬ．24　先土器時代・上層出土石器（５）―掻器・削器・
使用痕のある剥片（裏）(1/1) …… 250
ＰＬ．25　先土器時代・上層出土石器（６）―剥片（表）(1/1) … 251
ＰＬ．26　先土器時代・上層出土石器（６）―剥片（裏）(1/1) … 252
ＰＬ．27　先土器時代・上層出土石器（７）―細石核・細石刃
（表）(1/1)…… 253
ＰＬ．28　先土器時代・上層出土石器（７）―細石核・細石刃
（裏）(1/1)…… 254
ＰＬ．29　先土器時代・下層出土石器（１）―ナイフ形石器・
台形・台形様石器（表）(1/1) …… 255

ＰＬ．30　先土器時代・下層出土石器（１）―ナイフ形石器・
台形・台形様石器（裏）(1/1) …… 256
ＰＬ．31　先土器時代・下層出土石器（２）―尖頭器類・掻器・
使用痕ある剥片（表）(1/1) …… 257
ＰＬ．32　先土器時代・下層出土石器（２）―尖頭器類・掻器・
使用痕のある剥片（裏）(1/1) …… 258
ＰＬ．33　先土器時代・下層出土石器（３）―剥片・細石刃
（表）(1/1)…… 259
ＰＬ．34　先土器時代・下層出土石器（３）―剥片・細石刃
（裏）(1/1)…… 260
ＰＬ．35　先土器時代・下層出土石器（４）―石核（表）(1/1) … 261
ＰＬ．36　先土器時代・下層出土石器（４）―石核（裏）(1/1) … 262
ＰＬ．37　先土器時代・下層出土の遺物接合資料―石核・
三稜尖頭器 (2/3)…… 263
ＰＬ．38　１号炉址（炭化物集中遺構）（Ｋ―13区）・
２号炉址（炭化物集中遺構）（Ｎ―15区）…… 264
ＰＬ．39　３号炉址（石組炉）（Ｉ・Ｊ―13・14区）・
３号炉址・石組状況…… 265
ＰＬ．40　１号集石遺構（Ｄ・Ｅ―20・21区）１号集石遺構
（Ｄ・Ｅ―20・21区）…… 266
ＰＬ．41　２号集石遺構（Ｉ―15区）３号集石遺構・断面
（Ｂ―21区）…… 267
ＰＬ．42　４号集石遺構（Ｃ―17区）４号集石遺構・土壙部分…… 268
ＰＬ．43　６号集石遺構（Ｂ―17区）縄文時代・第Ⅱ・Ⅲ層
遺物出土状況（Ｋ―12区）…… 269
ＰＬ．44　溝状遺構（Ｄ―13・14，Ｅ・Ｆ―12・13区）
溝状遺構内覆土…… 270
ＰＬ．45　縄文時代の土器―押型文土器 (1/2)…… 271
ＰＬ．46　縄文時代の土器―塞ノ神式土器 (1/2)…… 272
ＰＬ．47　縄文時代の土器―貝殻条痕文土器（轟式系土器）・
その他の土器 (1/2)…… 273
ＰＬ．48　縄文時代の石器―石鏃（１）（表）(1/1)…… 274
ＰＬ．49　縄文時代の石器―石鏃（１）（裏）(1/1)…… 275
ＰＬ．50　縄文時代の石器―石鏃（２）（表）(1/1)…… 276

ＰＬ．51　縄文時代の石器―石鏃（２）（裏）（1/1）…… 277
ＰＬ．52　縄文時代の石器―石鏃（３）（表）（1/1）…… 278
ＰＬ．53　縄文時代の石器―石鏃（３）（裏）（1/1）…… 279
ＰＬ．54　縄文時代の石器―石鏃（４）（表）（1/1）…… 280
ＰＬ．55　縄文時代の石器―石鏃（４）（裏）（1/1）…… 281
ＰＬ．56　縄文時代の石器―石鏃（５）（表）（1/1）…… 282
ＰＬ．57　縄文時代の石器―石鏃（５）（裏）（1/1）…… 283
ＰＬ．58　縄文時代の石器―石鏃（６）（表）（1/1）…… 284
ＰＬ．59　縄文時代の石器―石鏃（６）（裏）（1/1）…… 285
ＰＬ．60　縄文時代の石器―石匙（１）（表）（1/1）…… 286
ＰＬ．61　縄文時代の石器―石匙（１）（裏）（1/1）…… 287
ＰＬ．62　縄文時代の石器―石匙（２）（表）（1/1）…… 288
ＰＬ．63　縄文時代の石器―石匙（２）（裏）（1/1）…… 289
ＰＬ．64　縄文時代の石器―スクレイパー（１）（表）（1/1）…… 290
ＰＬ．65　縄文時代の石器―スクレイパー（１）（裏）（1/1）…… 291
ＰＬ．66　縄文時代の石器―スクレイパー（２）（表）（1/1）…… 292
ＰＬ．67　縄文時代の石器―スクレイパー（２）（裏）（1/1）…… 293
ＰＬ．68　縄文時代の石器―スクレイパー（３）（表）（1/1）…… 294
ＰＬ．69　縄文時代の石器―スクレイパー（３）（裏）（1/1）…… 295
ＰＬ．70　縄文時代の石器―スクレイパー（４）（表）（1/1）…… 296
ＰＬ．71　縄文時代の石器―スクレイパー（４）（裏）（1/1）…… 297
ＰＬ．72　縄文時代の石器―加工痕ある石器・使用痕ある剝片
（表）（1/1）…… 298
ＰＬ．73　縄文時代の石器―加工痕ある石器・使用痕ある剝片
（裏）（1/1）…… 299
ＰＬ．74　縄文時代の石器―使用痕ある剝片・石槍・石錐・
異形石器（表）（1/1）…… 300
ＰＬ．75　縄文時代の石器―使用痕ある剝片・石槍・石錐・
異形石器（裏）（1/1）…… 301
ＰＬ．76　縄文時代の石器―剝片（１）（表）（1/1）…… 302
ＰＬ．77　縄文時代の石器―剝片（１）（裏）（1/1）…… 303
ＰＬ．78　縄文時代の石器―剝片・石核（表）（1/1）…… 304
ＰＬ．79　縄文時代の石器―剝片・石核（裏）（1/1）…… 305
ＰＬ．80　縄文時代の石器―石核（表）（1/1）…… 306

ＰＬ．81　縄文時代の石器―石核（裏）（1/1）…… 307
ＰＬ．82　縄文時代の石器―磨石・敲石（1/2）…… 308
ＰＬ．83　縄文時代の石器・玉類―敲石・砥石・石皿（1/2）
　　・玉類（1/1）…… 309
ＰＬ．84　ドーナツ状土壙32号，Ｍ―13・14区・ドーナツ状土壙，
　　Ｉ・Ｊ―12～14区・ドーナツ状土壙…… 310
ＰＬ．85　ドーナツ状土壙25・26号，ドーナツ状土壙22・35号，
　　ドーナツ状土壙13～15号…… 311
ＰＬ．86　ドーナツ状土壙40号，ドーナツ状土壙22号，
　　ドーナツ状土壙37号…… 312
ＰＬ．87　ドーナツ状土壙検出状況12号，ドーナツ状土壙断面
　　22号，ドーナツ状土壙断面44号，ドーナツ状土壙断面
　　38号…… 313
ＰＬ．88　ドーナツ状土壙断面32号，ドーナツ状土壙断面12号，
　　ドーナツ状土壙断面２号…… 314
ＰＬ．89　ドーナツ状土壙断面11号，ドーナツ状土壙断面13号，
　　ドーナツ状土壙断面７号，ドーナツ状土壙断面45号… 315
ＰＬ．90　調査風景…… 316
ＰＬ．91　調査風景…… 317
ＰＬ．92　花粉・胞子化石名・状況写真…… 318
ＰＬ．93　状況写真…… 319

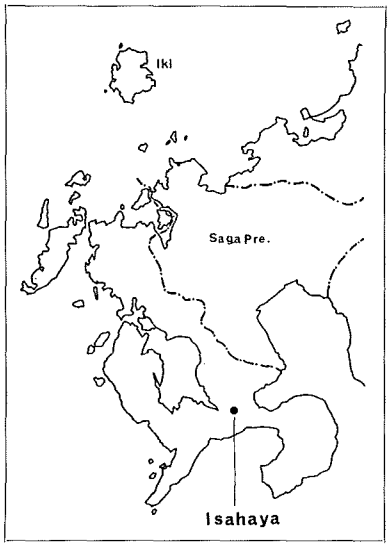


Fig. 1　位 置 図

Ⅰ．調査に至るまで

諫早市の西部地区である貝津，久山町に諫早市による内陸工業団地造成が計画され，昭和49年５月27日に諫早市長より予定地域内の埋蔵文化財についての調査の依頼を受けた。長崎県教育委員会（以下，県教委とする。）は昭和49年６月14日～同年６月15日までの２日間，計画区域内の現地踏査を実施し，３箇所の遺跡を確認した。

その後，昭和50年に「県央新都市開発整備構想」が策定され，種々の計画の中で内陸工業団地計画も諫早中核工業団地として構想を新たにし，同年２月に長崎県知事，諫早市長の要請を受けた地域振興整備公団（以下，地域公団とする。）によって，工業再配置政策推進の一環として，長崎県とくに「県央新都市」開発整備の展開される県央部の適正な発展，地域形成を図る中核的な機能を果すように計画策定されたのが，諫早中核工業団地造成計画で，同時に事業主体が諫早市・諫早市土地開発公社から地域公団に移管された。

当該団地の計画面積は約230haで，工業用地は，約109haにおよぶ大規模な工業団地の造成計画であった。

昭和50年２月以降，県教委は地域公団と造成予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ね，地域公団の要請を受けて，昭和50年12月４日～同年12月20日までの17日間にわたり，現地踏査で確認した３箇所と試掘調査時に発見した１箇所を含む４遺跡についての試掘調査を実施した。（調査結果についてはⅡ，および Tab. 1 を参照）

県教委は調査結果に基づいて，地域公団と協議を重ね，４箇所の遺跡のうち，長牟田遺跡については緑地公園として現状のまま残すことになり，他の遺跡については記録保存処置を行うことになった。

また，諫早中核工業団地造成に伴う発掘調査については，調査の事業主体は地域振興整備公団諫早開発所で，調査の指導を長崎県教育委員会が行うことで，昭和53年４月より昭和57年１月まで発掘調査を実施した。

註１　長崎県教育委員会，地域振興整備公団　1981「西輪久道遺跡・鷹野遺跡」諫早中核工業団地関係埋蔵文化財発掘調査

Ⅱ．調査経過

1．試掘調査

昭和50年12月４日～同年12月20日までの17日間，現地踏査で確認した遺跡の調査を実施した。

西輪久道遺跡　現状は畑地と果樹園・荒地で，標高約20ｍ～24ｍ程で南から北へ傾斜する丘陵部にＡ～Ｄトレンチを４本設定した。（Ａ．Ｃ．Ｄトレンチは２ｍ×８ｍ，Ｂトレンチは２ｍ×20ｍの計88㎡。）

Ａ．Ｂトレンチは斜面のためか土層の堆積が薄く約５㎝～35㎝で小粒砂岩礫を含んだ赤褐色粘質土（地山）に至る。遺物の包含状況も悪い。

Ｃ．Ｄトレンチは丘陵の平坦部にあたり，上層より縄文時代早期の土器片と石鏃，剥片などの石器類が出土し，下層よりナイフ形石器，剥片などの先土器時代の遺物が出土した。

鷹野，長牟田，平遺跡の試掘調査も実施した。(Tab. 1 を参照)

以上の調査結果を踏まえ，協議を重ねた結果記録保存をすることになった。

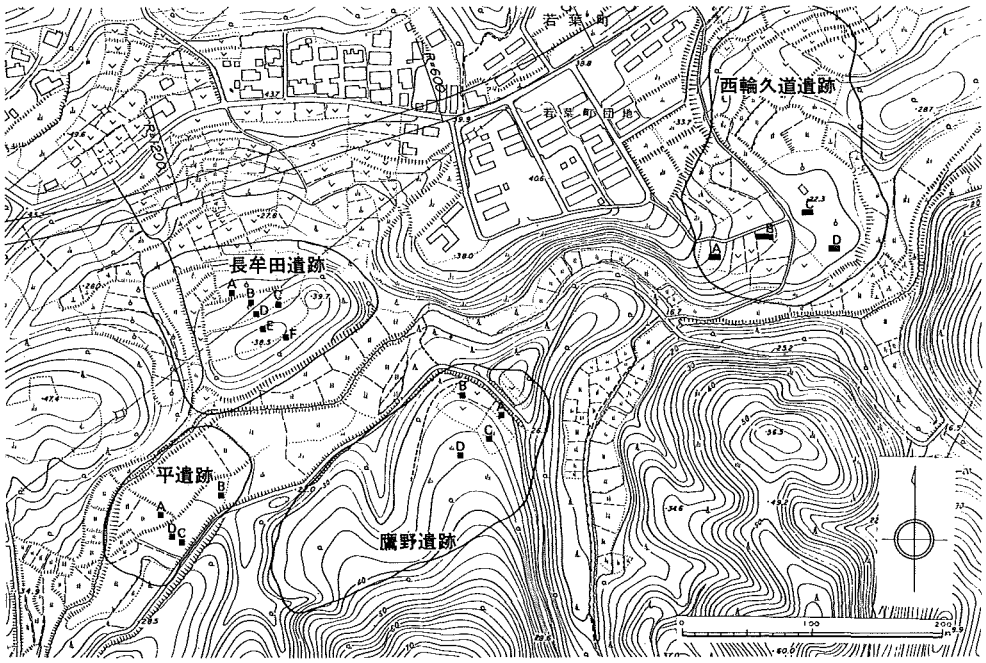


Fig. 2　諫早中核工業団地関係遺跡及び試掘壙

Tab. 1　諫早中核工業団地関係試掘調査遺跡

番号	遺跡名	所在地	確認した分布面積㎡	試掘面積㎡	時期・内容
1	西輪久道遺跡	諫早市貝津町字西輪久道	8,000	88	先土器～縄文時代の包蔵地。ナイフ形石器、剥片、土器片
2	鷹野遺跡	〃 貝津町字鷹野	10,000	28	縄文時代の集落跡。炉址、土器片(縄文早期)
3	長牟田遺跡	〃 若葉町字長牟田	25,000	24	先土器～縄文時代の包蔵地。中世の山城。複合遺跡。
4	平遺跡	〃 貝津町字平	7,000	16	縄文時代の包蔵地。
計			45,000	156	

2. 本調査

発掘調査は西輪久道，鷹野，平遺跡の順序で，昭和53年４月24日から西輪久道遺跡の調査を実施した。

西輪久道遺跡　遺跡は約13,000㎡の分布面積を呈し，遺跡の北東際に九州横断自動車道建設予定地（昭和57年11月開始。大村↔東長崎間，長崎自動車道日本道路公団）が含まれ，九州横断自動車道建設関係5,000㎡，諫早中核工業団地関係8,000㎡と遺跡を２分した開発状況であった。発掘調査も同様に事業主体を異にして実施した変則的な調査体制であった。（当該遺跡は調査の事業主体別に調査班を編成して調査を行うことで，すでに九州横断自動車道建設関係の発掘調査は昭和52年11月より，長崎県教育委員会で実施していた。）

諫早中核工業団地造成関係の調査は長崎県教育委員会の指導で，地域振興整備公団が実施することになり，昭和53年４月～昭和54年２月，昭和54年４月～５月，同年８月～10月まで実施し終了した。（調査は工業団地造成計画に基づいて一時中断し，鷹野遺跡の調査を実施した。）

他の当該遺跡についての調査の詳細は，諫早中核工業団地造成に伴う「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　Ⅰ」に掲載しているので除くことにする。（鷹野遺跡の調査報告書は，昭和60年度に刊行を予定している。）

調査関係者は次の通りである。

昭和58年度　調査総括　伊藤昭六　長崎県教育長
中村康次　長崎県教育次長
辻田肥佐雄　長崎県教育庁文化課長
園田　孝　〃　〃課長補佐

Tab. 2　諫早中核工業団地関係遺跡一覧表

調査年度	遺　跡　名	分布面積 m²	調査面積 m²	調　査　期　間	調査担当者	調査補助員
昭和53年度	西輪久道遺跡	8,000	3,375	S53.4.24～S54.2.9	副島	稲富 中村
昭和54年度	西輪久道遺跡	(8,000)	1,525	S54.4.9～S54.11.1	副島	中村 中田
	鷹野遺跡	10,000	1,785	S54.11.1～S55.1.30	副島	中村 中田
昭和55年度	鷹野遺跡	(10,000)	3,625	S55.4.8～S56.1.30	副島	中村 中田
	平　遺　跡	7,000	23	S56.1.20～S56.1.30	副島	中村 中田
昭和56年度	鷹野遺跡	(10,000)	500	S56.4.7～S56.5.30	副島	中村 中田
	平　遺　跡	(7,000)	2,800	S56.6.1～S57.1.20	副島	中村 中田
昭和57年度	平　遺　跡 長牟田遺跡	報告書作成		S57.4.1～S58.2.28	副島	片山
昭和58年度	西輪久道遺跡	整理作業		S58.4.1～S59.3.31	副島	伴
	鷹野遺跡					
昭和59年度	西輪久道遺跡	報告書作成		S59.4.1～S60.3.31	副島	伴
	鷹野遺跡	整理作業				

	森　茂	長崎県教育庁文化課調査係長		
事務担当	田尻虎夫	〃	〃	副参事兼総務係長
	野田正博	〃	〃	主事
	飯島裕見子	〃	〃	〃
整理担当	副島和明	〃	〃	文化財保護主事
	伴　耕一朗	〃	〃	文化財調査員
調査協力	松尾守重	地域振興整備公団諫早開発所長		
	原　敏紘	〃	〃	総務課長
	水田和憲	〃	〃	〃 課長代理
	高野　耀	〃	〃	〃 〃
	勝谷重俊	〃	〃	〃 主任

		吉岡　司	地域振興整備公団諫早開発所事業課長
		末松充安	〃　〃　〃 課長代理
昭和59年度	調査総括	伊藤昭六	長崎県教育長
		梅田和郎	長崎県教育次長
		石田　直	長崎県教育次長
		辻田肥佐雄	長崎県教育庁文化課長
		田上武廣	〃　〃課長補佐
		森　茂	〃　〃　副参事兼調査係長
	事務担当	小林秀則	〃　〃　〃　総務係長
		野田正博	〃　〃　主事
		飯島裕見子	〃　〃　〃
	整理担当	副島和明	〃　〃　文化財保護主事
		伴　耕一朗	〃　〃　文化財調査員
	調査協力	松尾守重	地域振興整備公団諫早開発所長
		原　敏紘	〃　〃　総務課長
		北原邦彦	〃　〃　〃 課長代理
		高野　耀	〃　〃　〃　〃
		勝谷重俊	〃　〃　〃 主任
		吉岡　司	〃　〃　事業課長
	内業	広川裕子　細田純代　冨田知江　渡辺由里子　松浦揚子	
		森　洋子　小森廣美　戸村真喜子　中川信子　松平和子	
		大平靖子　徳永幸代　荒木寿美香　大石文子　後田潤子	
		小森貞子　浦川早苗　北野佳代子　川上園子　本田邦子	
		有山弘美　井津美喜子　横田まり子　都々木典子	
		川島千代子　松尾美代子　浜田美都子　鍬塚美千代	
		大渡敏子　仮屋浩子　山下いづみ	

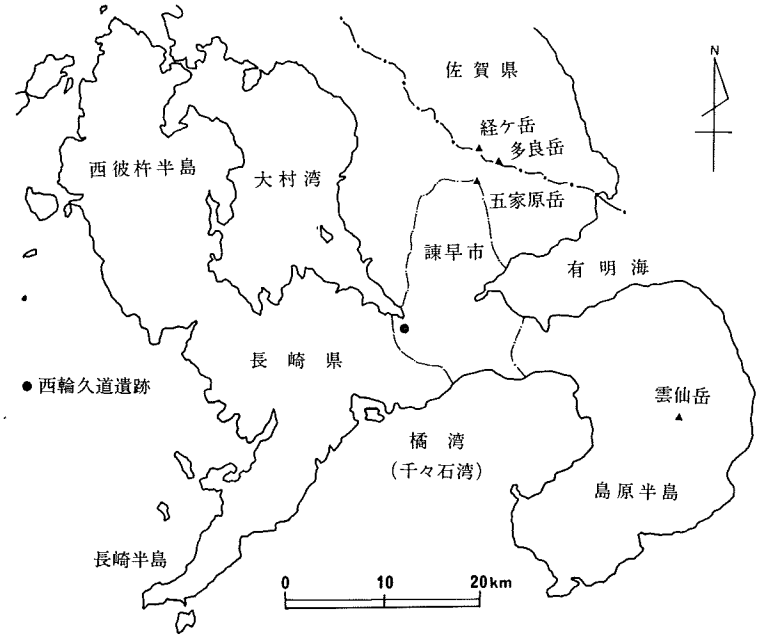


Fig. 3　長崎県地形図及び遺跡位置図

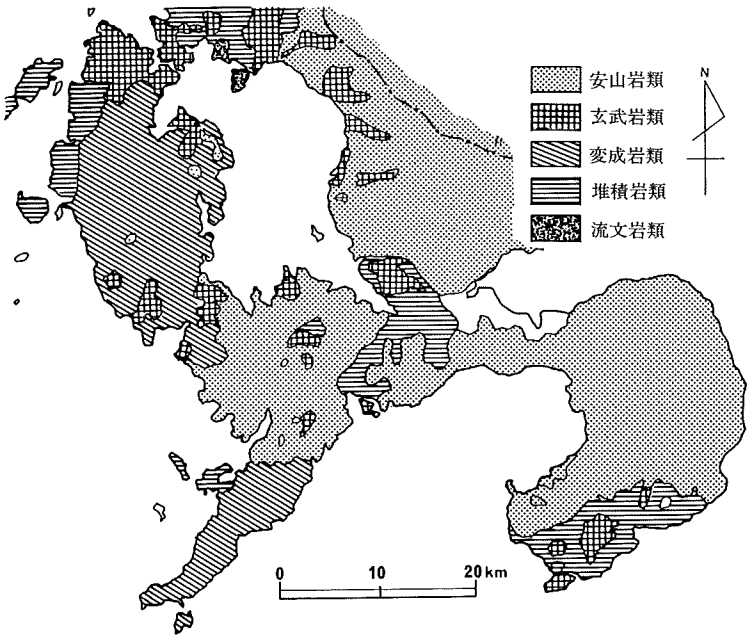


Fig. 4　長崎県地質図

Ⅲ．遺跡の地理的歴史的環境

西輪久道遺跡は，諫早市津久葉町（旧若葉町）に所在する。

長崎県のほぼ中央に位置する諫早市は，有明海・橘湾（千々石湾）・大村湾により三方を海でとり囲まれ，島原半島・長崎半島・西彼杵半島の付け根にあたる。古くより，海上・陸上の交通の要として今日に至っており，最近においては，都市化の波とともに開発が著しい所でもある。

地質図（Fig. 4）を見るとわかるように，諫早市の基盤は，北東部の島原半島・多良山麓一帯にみられる安山岩地帯と，南西部の古第三紀諫早層である化屋層砂岩[註1]の上に火山灰が堆積してできた堆積岩地帯に大別することができる[註2]。特に後者は，広範囲に渡って低地丘陵を形成し，遺跡群が立地する。中でも，碁盤の辻丘陵より流れ下る西大川流域には多くの遺跡が点在しており，本遺跡も，その中流西岸の河岸段丘上，標高約20m～30mに立地している。

周辺の遺跡は，先にも述べたように多種にわたり多くの遺跡が報告されている。各時代別に分けてみると，先土器時代から縄文時代にかけてのものが，東久保遺跡（4）・浜田遺跡（19）[註3]・雀ノ倉遺跡（20）[註3]・牛込A遺跡（22）[註3]・牛込B遺跡（21）[註3]・柿崎遺跡（24）[註3]，また，同じ中核工業団地造成に伴って発掘調査した，平遺跡（12）[註5]・鷹野遺跡（11）[註4]がある。弥生時代から古墳時代にかけては，箱式石棺を出土した，貝津横島A遺跡（3）[註6]・滑川遺跡（5）・化屋大島遺跡（16）[註7]などや，久山古墳が知られている。中世においては，長牟田遺跡（9）の長牟田城跡や，久山城[註8]・真崎城跡が残存している。

註1　西村暉希　1971「貝津の火山灰層」『長崎県の地学』所収　長崎県地学会

註2　鎌田泰彦　1974「表層地質図」『大長崎都市圏総合開発地域土地分類基本調査　肥前小浜』所収　長崎県企画部

註3　長崎県教育委員会　1982「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」

註4　地域振興整備公団・長崎県教育委員会　1981「西輪久道遺跡・鷹野遺跡」

註5　長崎県教育委員会　1983「諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書　Ⅰ」

註6「諫早市史」　1巻　1955　諫早市役所

註7　井上和夫　1974「化屋大島遺跡」多良見町教育委員会

註8「日本城郭大系」17　1980　新人物往来社

Tab. 3　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡所在地	時代	種別	遺構・出土遺物等	備考
1	西佐竹遺跡	諫早市貝津町西佐竹	縄文	祭礼遺跡？	石斧4本が一括埋納	諫早市教育委員会所蔵
2	貝津横島B遺跡	〃　貝津町横島	縄文	散布地	黒曜石剥片	
3	貝津横島A遺跡	〃　貝津町横島	弥生~古墳	墓址	箱式石棺	
4	東大久保遺跡	〃　貝津町東大久保	先・縄文	散布地	細石核・石鏃	
5	滑川遺跡	〃　久山町滑川	縄文~古墳	墓址・包蔵地	箱式石棺・石匙・土器	
6	赤島遺跡	〃　久山町	縄文	散布地	削器・剥片	
7	久山城	〃　久山町	中世	山城	本丸・馬場	
8	笹原遺跡	〃　久山町	縄文	散布地	黒曜石剥片	
9	長牟田遺跡	〃　津久葉町長牟田	縄文・中世	包蔵地・山城	土器・石鏃等	緑地保存
10	西輪久道遺跡	〃　津久葉町	先・縄文	集落址	炉址・土器・細石刃等	本書
11	鷹野遺跡	〃　津久葉町	先・縄文	集落址	集石遺構・炉穴・工房址	
12	平遺跡	〃　津久葉町	先・縄文	包蔵地	土器・細石刃・石匙・石鏃等	
13	久山古墳	〃　久山町	古墳	古墳		上部が削平されている。
14	下後古場遺跡	〃　土師野尾町	縄文	散布地	黒曜石剥片	
15	船蔵石遺跡	〃　土師野尾町		積石塚		
16	化屋大島遺跡	西彼杵郡多良見町化屋名	弥生	墓址	箱式石棺7基・副葬土器2	
17	化屋遺跡B	〃　〃	縄文	散布地	黒曜石剥片	
18	合戦場遺跡	〃　〃	縄文	散布地	黒曜石剥片	
19	浜田遺跡	諫早市貝津町	先・縄文	包蔵地	土器・掻器・石鏃等	調査により消滅
20	雀ノ倉遺跡	〃　貝津町	先・縄文	包蔵地	石鏃・石核・細石刃等	〃
21	牛込B遺跡	〃　貝津町	先~古墳	包蔵地	土器・石鏃・台形石器等	〃
22	牛込A遺跡	〃　貝津町	先・縄文	包蔵地	土器・ナイフ形石器等	〃
23	岩下遺跡	〃　貝津町	縄文・近世	包蔵地	石垣・建物址・陶磁器等	
24	柿崎遺跡	〃　貝津町	先・縄文	包蔵地	礫群・ナイフ形石器・楔形石器	調査により一部消滅

Fig. 5 周辺の遺跡 (1/25,000)

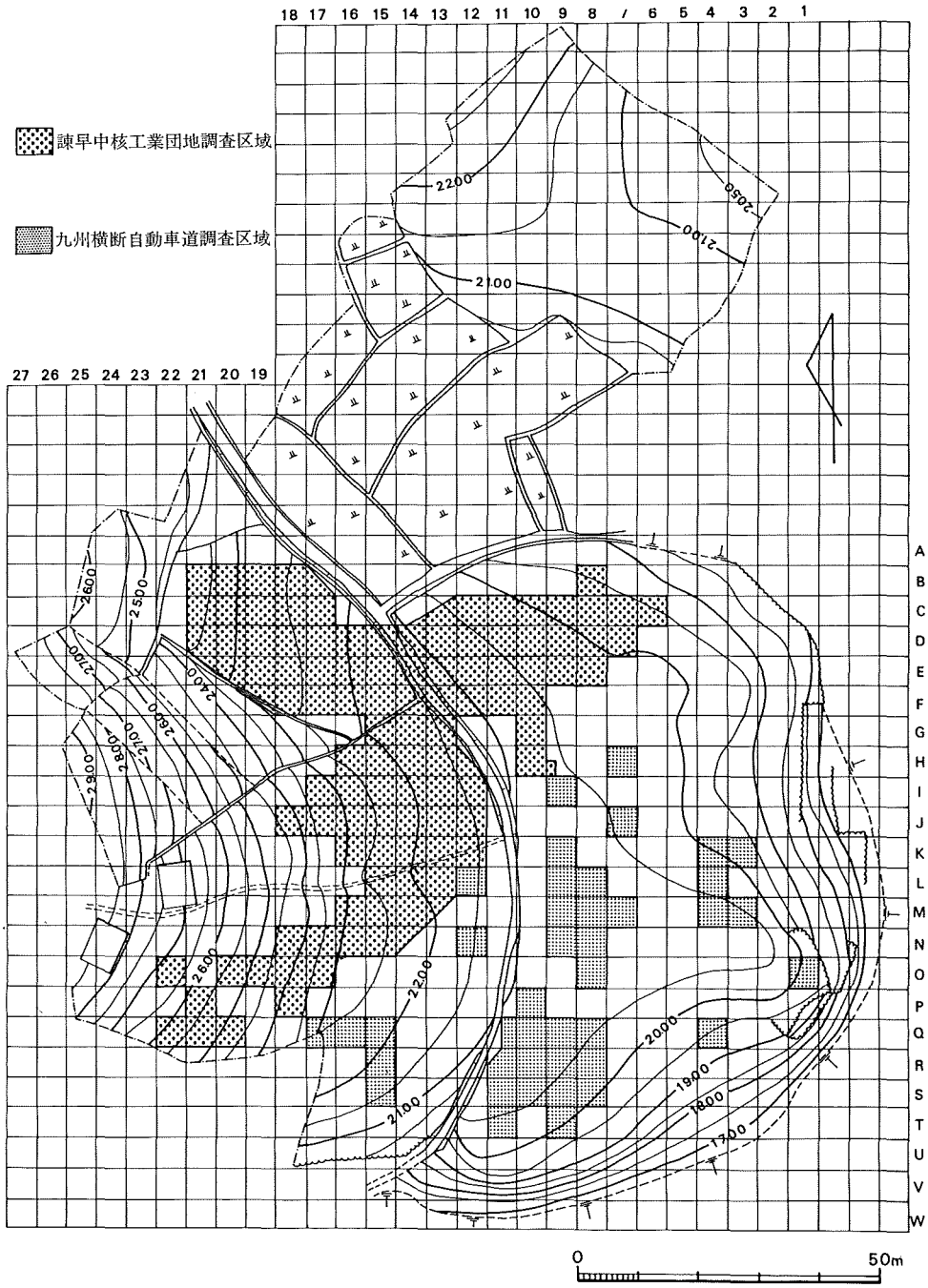


Fig. 6 遺跡周辺地形図

Ⅳ．西輪久道遺跡の調査

1．調査概要

遺跡は西大川により形成された標高20～24ｍ程の低丘陵上に当り，西大川流域に形成された先土器時代から縄文時代早期にかけての鷹野遺跡，平，長牟田，柿崎遺跡群の中の１つである。

調査は先述したとおり，九州横断自動車道建設予定地の発掘調査が，昭和52年11月より開拓されていたので，調査グリッド・グリッド呼称はそのまま利用することにした。

遺跡は諫早市津久葉町に所在する。分布面積は約13,000㎡で，中核工業団地造成関係の対象面積の8,000㎡の内，約5,000㎡について調査を実施した。

調査はグリッド方法で実施し，グリッドの基準点は九州横断自動車道の中心杭（ＳＴＡ—45）を利用して磁化を南北・東西軸に各５ｍ単位の網目方眼にグリッドを組む。グリッドの表記は５ｍ×５ｍの25㎡単位で，北→南へＡ～Ｑ，東→西へ１～22と番号を付して記号で表わした。（例，Ａ—１区，Ａ—22区）

発掘調査は遺跡の中心を南北に走る農道の西側（Ａ～Ｑ—15区）より掘り始めたが，Ｉ～Ｑ—17区以西は包含層が浅く，表土下約30cm内外で地山に到るので調査は東側（Ｉ～Ｎ—12～16区）および北側（Ｂ～Ｈ—６～21区）を中心にして拡げた。

遺構は表土下に溝状遺構と遺跡の北側を主体に先土器時代・縄文時代の遺物・遺構が検出された。

第Ⅱ層・Ⅲ層に縄文早期の石組炉址１基，炉穴２基，集石遺構４基と土器・石器が出土し，Ⅲ層の一部および第Ⅳ層・Ⅴ層（上層）と第Ⅵ層下部・Ⅶ層（下層）にかけて先土器時代の遺物および集石・礫群が検出された。

また遺跡のほぼ全面に渡ってドーナツ状土壙が先土器および縄文時代の包含層を壊わすような状況で検出されたので，調査中の遺物の取り上げは慎重に区別をしながら行った。

調査は昭和53年度に3,375㎡，昭和54年度に1,525㎡（Ｂ～Ｈ—13～21区）の4,900㎡について実施し終了した。

2. 層　　位

遺跡は地理的歴史的環境の中で触れているように，高岳，基盤，辻からなる丘陵部より北西に4つの尾根が延び，その谷部からの流れを集水して大村湾（津水湾）に注ぐ西大川が走り，その上流域に位置している。

遺跡の立地する南東側を西大川が流れ，北側には浅い谷が入り込み，東西に張り出した丘陵部分に当る。西→東側へと傾斜を呈し，中央部はテラス状に平坦部を成している。

土層の堆積状況はこのような地形的要因により遺跡内で若干の相違を示している。

遺跡は西から東への傾斜面標高2,300mまでは表土下すぐに砂岩の基盤に至り，中央部の平坦部分が凹地を呈し，丘陵先端部に至り砂岩の基盤層が東側へ立ち上って西大川に至る。その凹地は遺跡を2分するように帯状に南北に延びる。その基盤上に礫層が厚く凹地状に堆積をなし，その上に第Ⅱ層～Ⅶ層まで堆積状況を示す。

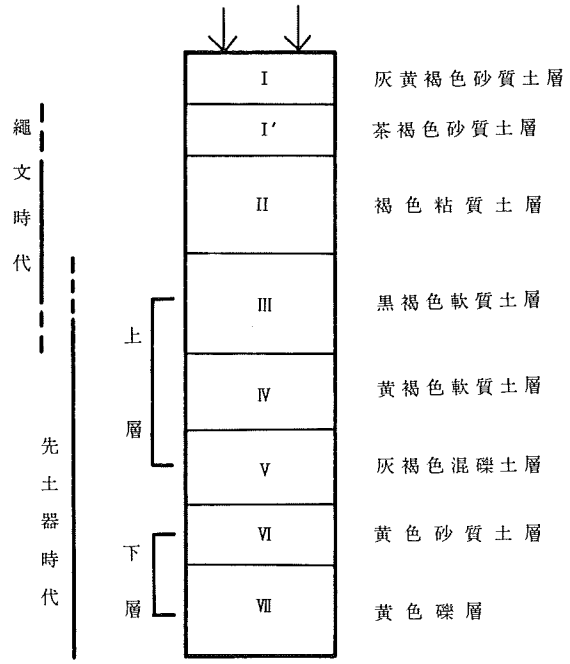


Fig. 7　西輪久道遺跡土層模式図

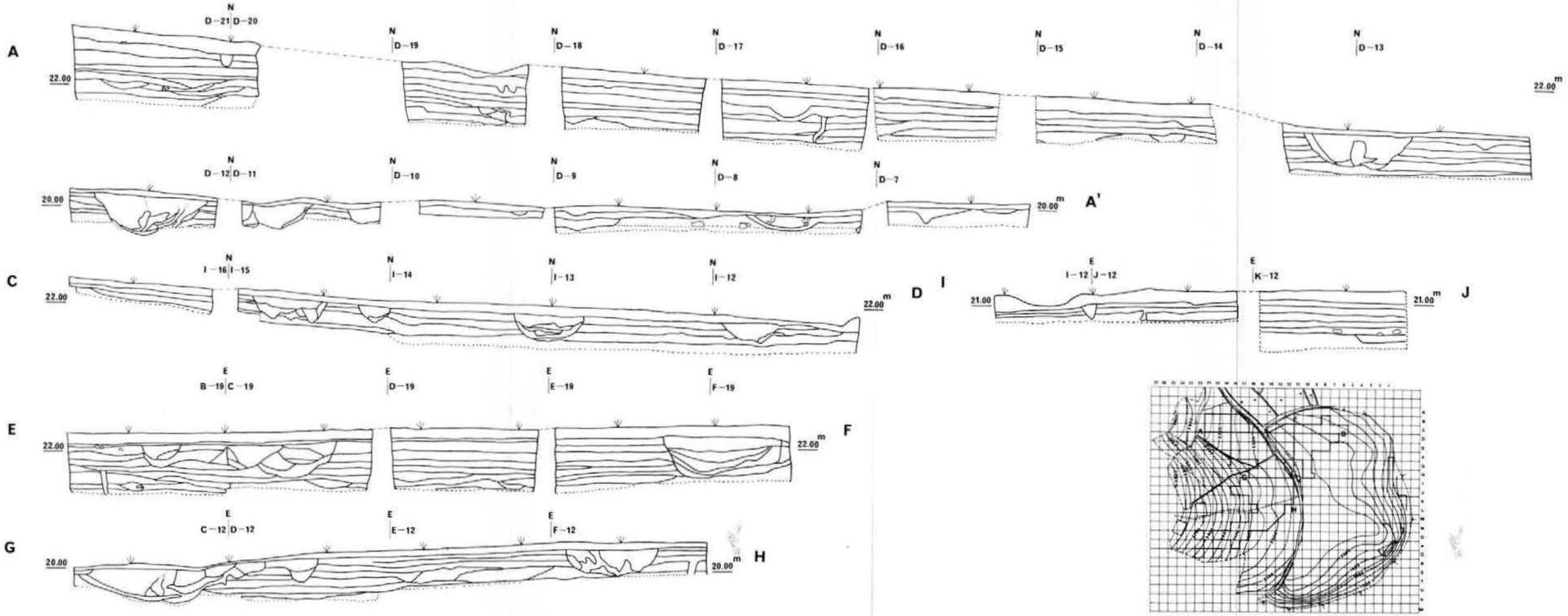

A
A'
C
D
I
J
E
F
G
H
22.00
20.00
21.00
22.00m
20.00m
21.00m
N
D-21 D-20
D-19
D-18
D-17
D-16
D-15
D-14
D-13
D-12 D-11
D-10
D-9
D-8
D-7
I-16 I-15
I-14
I-13
I-12
I-12 J-12
K-12
B-19 C-19
D-19
E-19
F-19
C-12 D-12
E-12
F-12

Fig. 8 屑 位 図 (1/80)

また，C—6・7区で観察されるように第Ⅱ層下に礫層が東側へ延びている。更に九州横断自動車道建設予定地部分の調査により，K～M—3～4，T—9区でも同様な礫層が出ており，新たに第Ⅱ層堆積前に，遺跡を南北に帯状に礫層が堆積している。

以上のことは，西大川の旧河川が遺跡の中央部を南北に帯状に横断した川床の痕跡と考えられ，その後に再度，縄文早期の段階に遺跡の東端部分を流れた痕跡が考えられる。

縄文早期に形成されたと考えられるドーナツ状土壙を切り離しては考えられない環境の変化が起きたのであろう。

また，先土器時代の遺跡は中央部から北側にかけ，若干の凹地状を呈す地点に生活の場を持っていたことが窺われ，縄文時代早期では現状とほぼ同様な状況下に生活の場を形成していたことが窺われる。

遺跡の基本層序は Fig. 7 のように，第Ⅱ層～第Ⅶ層以下の砂礫層となり砂岩の岩盤に達する。

遺物は第Ⅱ層と第Ⅲ層にかけて縄文時代の包含層，第Ⅲ層～第Ⅶ層までが先土器時代の包含層で，第Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層が上層文化層，第Ⅵ層下部・Ⅶ層が下層文化層として捉えられる。

D—19区の最下層の礫層より検出した埋れ木をC—14年代測定（日本アイストープ協会）をした結果 ＞37,800 YB. P という年代が得られた。

3. 先土器時代

① 遺　　構

先土器時代の礫群が下層中で3箇所に検出されている。

これらの礫群はいずれも遺物の集中範囲内の下層1群，下層Ⅱ～1，2群内に存る。

礫群1
（D—10・11区）
(Fig. 9)

下層遺物集中範囲Ⅰの石器群の東端部分に当り，北西に帯状に分布する。この礫群の周囲には石核（4点接合資料）と剥片・砕片類のみ出土する地点に当る。

礫群の礫は10～20cm程の角礫が多く，石材は玄武岩・安山岩がほとんどである。礫自体に熱を受けた痕跡は観察されず，接合例もない。

Fig. 9　下層検出礫群Ⅰ（D—10・11区）

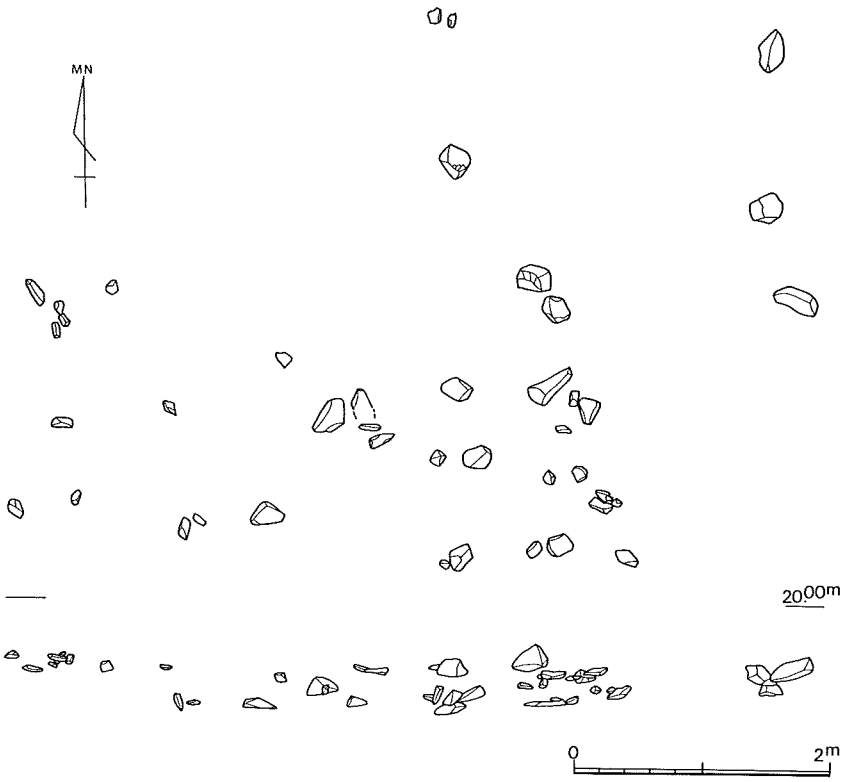


Fig. 10　下層検出礫群Ⅱ（D—12～14区）

Fig. 11　上層検出礫群Ⅲ（D—16区）

これらの礫群の中でもD—10区の東西隅に集石状況がみられるが，炭化物および土壙の掘り込みなどはみられない。礫総数は46個である。

礫群2
（D—12・13区）
(Fig. 10)

礫群1と同様に下層遺物集中範囲Iの石器群のほぼ中央部で検出された。特にD—12区の南西隅に集中傾向が見られる。礫群内および周囲には遺物が集中して出土している。

礫群1と同様に焼礫および炭化物，土壙の掘り込みもない。

礫群3
（D—16区）
(Fig. 11)

遺物集中範囲上層—Ⅳの石器群の東端部分に当る。D—16区の北東から南西へ帯状に検出された。

この礫群も同様に焼礫群の火熱を受けた痕跡はない。

以上の礫群1～3は遺物が集中する範囲内に検出され，また礫群の周囲に遺物が集中して出土している。

これらの礫群については，各地で遺物と共に出土し，食物を加熱料理する施設およびその他とされているが，西輪久道遺跡では性格付けするだけの積極的な根拠はないが，生活の場の中での生活関連遺構であることが十分考えられる。

② 遺　　物

1　表採・ドーナツ状土壙出土の石器

西輪久道遺跡の先土器時代の採集遺物は少なく，またドーナツ状土壙内出土の遺物も縄文時代のものに比して少ない。

ナイフ形石器
(Fig. 12—1～4)

1～4はいずれも二側縁加工を施したナイフ形石器である。1，2は縦長剥片に刃潰し加工を施したもので，幅狭で柳葉形状をなす。3，4は刃部が器長に比べて短い切出形状のナイフ形石器である。

台形・台形様石器
(Fig. 12—5～8)

5～8は台形・台形様石器で，5は刃部を残し刃潰し加工を施し，7は曲線的な刃部と一側縁部が湾曲し，側縁部の2次加工は錯交剥離による。また器表面に肥厚部除去の為の平坦剥離を施すという特徴を持っている。8は一側縁部のみ2次加工を施し，刃部が器長に比べて幅狭の石

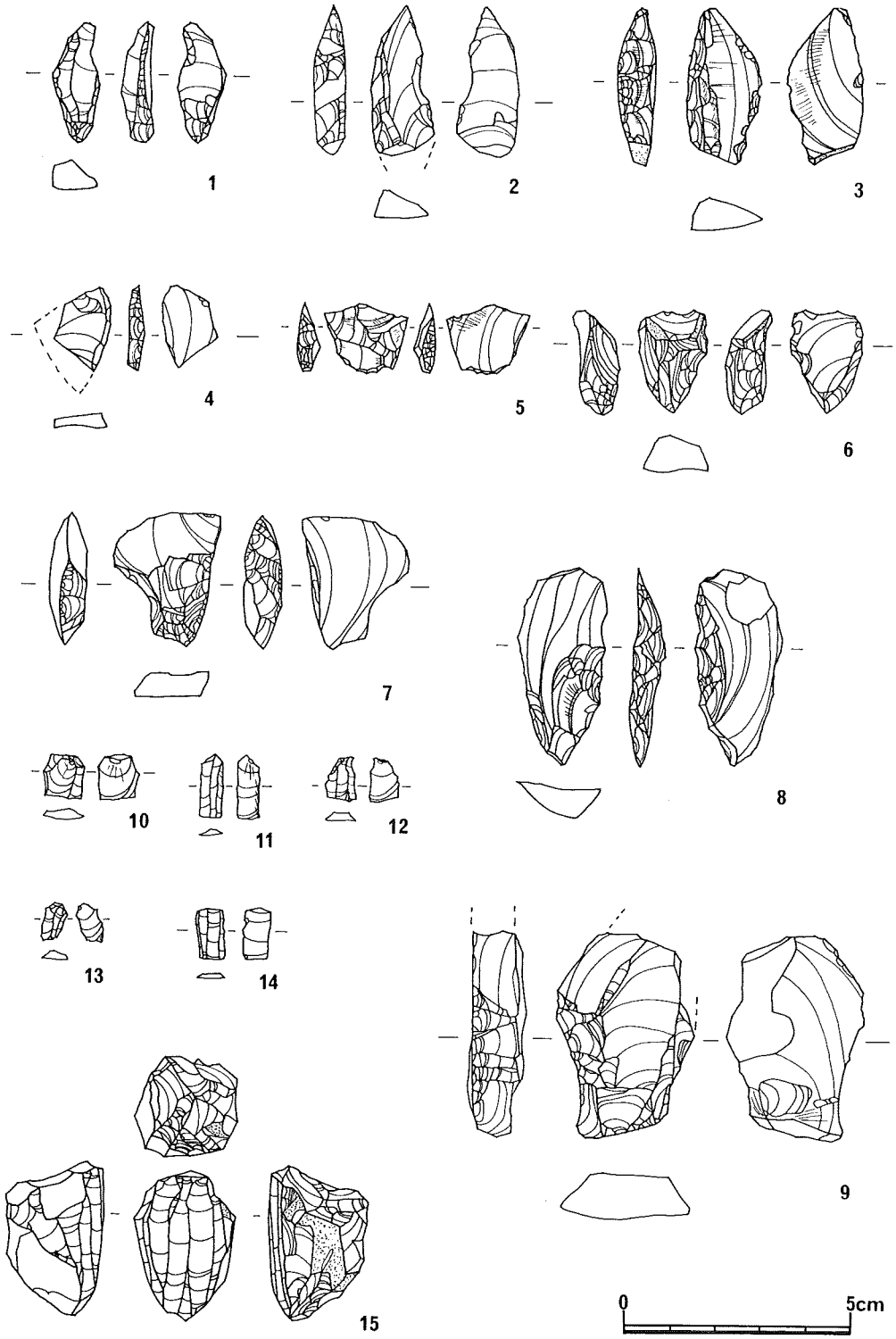


Fig. 12　先土器時代の石器・表採，ドーナツ状土壙出土（2/3）

器である。8を除き側縁部の2次加工が錯交剥離によって作出される特徴をもつものである。

剥片尖頭器
(Fig. 12—9)

9は剥片尖頭器で先端部を欠損しているが，一側縁部から基部にかけ2次加工を施すという特徴をもつ。

細石核・細石刃
(Fig. 12—10〜15)

10〜14は細石刃の頭部片4点と中間部1点で，幅が1cmを越えないものである。

15は細石核で舟底形の形状を呈し，両側面部および背面部に自然面を残している。側面部の調整加工は下縁辺より施し，打面部は調整打面で一側面部より調整し，打面に細調整を施している。細石刃剥離痕は，正面から側面部にかけみられ，細石刃剥離面と打面のなす打角は約90度に近い。

以上1〜15の石材は黒曜石製である。

第Ⅱ層出土石器
(Fig. 13〜15—16〜72)

このⅡ層は縄文時代早期〜前期にかけての文化層で，先土器時代の遺物が混入したものであるが，下位文化層の遺物集中地点と同様な出土状況もみられる。

ナイフ形石器
(Fig. 13—16〜27)

ナイフ形石器の側縁部の2次加工部位により，二側縁加工のものと一側縁加工のものと剥片の一端に切断加工を施したものがある。

二側縁加工のナイフ形石器は素材の剥片に2次加工を施すもの16〜20・27と切出形の形状を呈す22〜24がある。

24は器長に比べて刃部が幅狭で，一側縁部の2次加工は急角度に施し，断面が三角形状を呈すもので，器表面および主要剥離面側に調整加工を施している。これは台形様石器の調整加工と同様な技術基盤によるものであろう。

16・27は縦長剥片の打面を基部に利用して，二側縁に2次加工を施すもので，他に比べて器長および胴部の幅が大きい。

一側縁加工のナイフ形石器は19・21の2点で，瀬戸内的な影響を受けたナイフ形石器とは違って，剥片の一側縁部に2次加工を施したものである。

剥片の一端に折断加工を施したナイフ形石器は25・26である。

25は横長剥片，26は安山岩製の縦長剥片を利用。

台形・台形様石器　　台形・台形様石器は28〜33・36の刃部と基部がほぼ平行し，両側縁に
(Fig. 14—28〜41)　刃潰し加工を施したもの。形状は台形状を呈す。

この中でも，28・31は両側縁共に急角度の刃潰し加工を施し，28の側

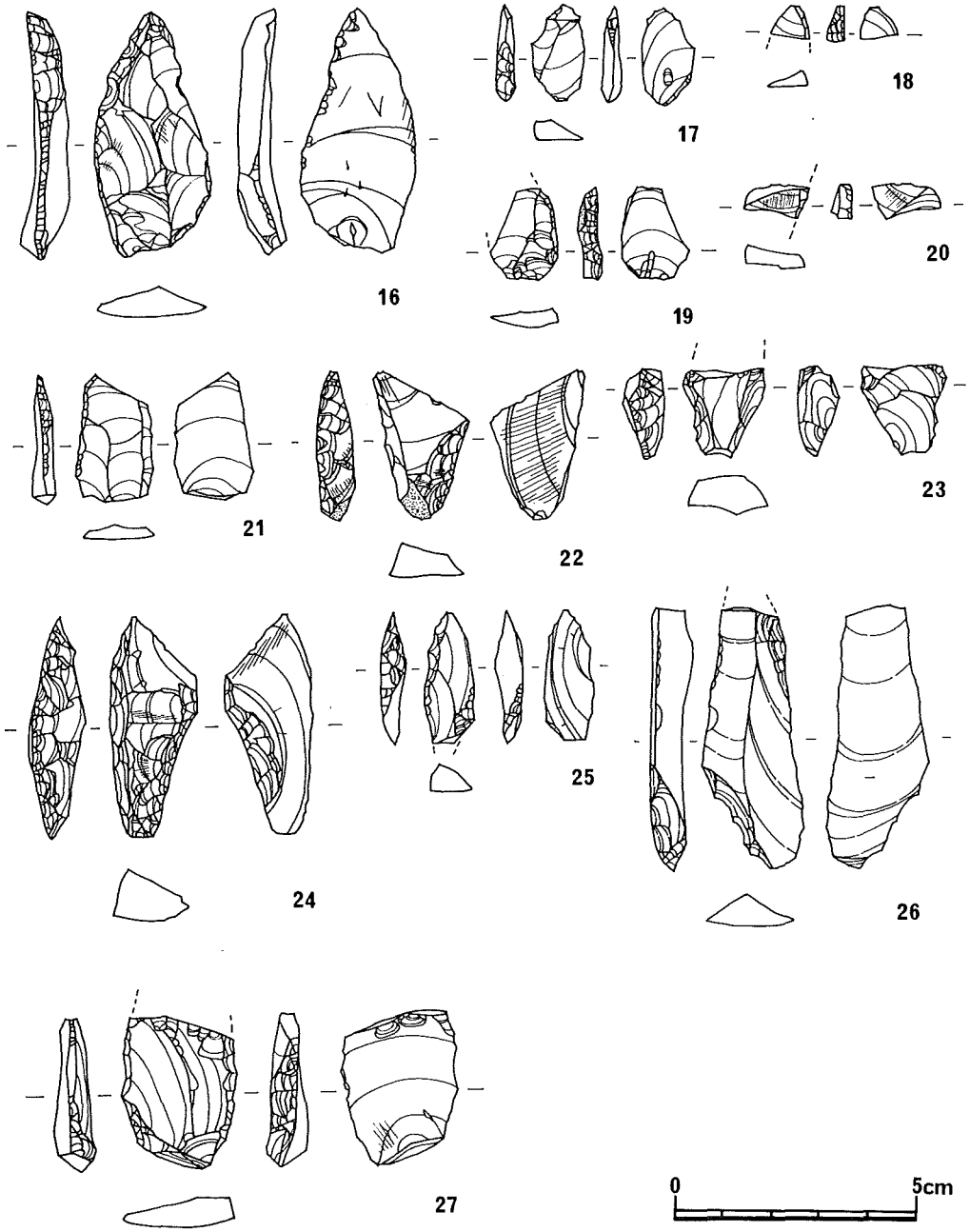


Fig. 13　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（1)〜ナイフ形石器 (2/3)

縁部加工は主要剥離面側からで，31は錯交剥離が施されるという特徴をもつ。29・32・33は側縁部の2次加工が一方は急角度の刃潰し加工で，他方は鈍角に近い面的な加工を施すという特徴をもつものである。

34～39・41の台形様石器は曲線を呈す刃部の一端および両端が突出する特徴をもつものである。特に34・41は刃部の一端が突出し「へ」の字状を呈し，側縁部の2次加工は錯交剥離を施すという特徴をもつ。

40は斜行する刃部が器長に比べて幅狭で，折断面を両側縁部に利用し，器表面に平坦剥離を施すものである。

尖頭器類

尖頭器類は剥片尖頭器2点，三稜尖頭器2点，尖頭状石器2点，その他の尖頭器2点の計8点を数える。

剥片尖頭器
(Fig. 14—42・43)

42，43は剥片尖頭器で縦長剥片の打面部を基部に利用して，左右対称的に両側縁より刃潰し加工を施し湾曲した基部を作り出すもので，42は先端～胴部を欠損，43は先端部を欠損しているが，一側縁部に先端部から胴部にかけて2次加工を施す特徴をもつものである。

三稜尖頭器
(Fig. 15—44・46)

44・46は三稜尖頭器で横長剥片を利用し，主要剥離面側より2次加工を施したもので，断面が三角形を呈す。特に44は側縁の一端に幅広く切出形の形状を呈す。

尖頭状石器
(Fig. 15—47・48)

横長剥片を利用し，打面側に急角度の粗い2次加工を施したもので，形状は不定形を呈す。47は二側縁に渡って2次加工が施されたもの。48は一側縁部のみ2次加工を施す。

その他の尖頭器
(Fig. 15—45・49)

45・46は器表面の両側縁部より粗い2次加工を施したもので，断面が半円状を呈すもの。また主要剥離面側に調整加工を施している。

細石刃
(Fig. 15—50～72)

細石刃は頭部・中間部・先端部という部位名称で記す。
頭部9点，中間部13点，先端部1点の総数23点を数える。

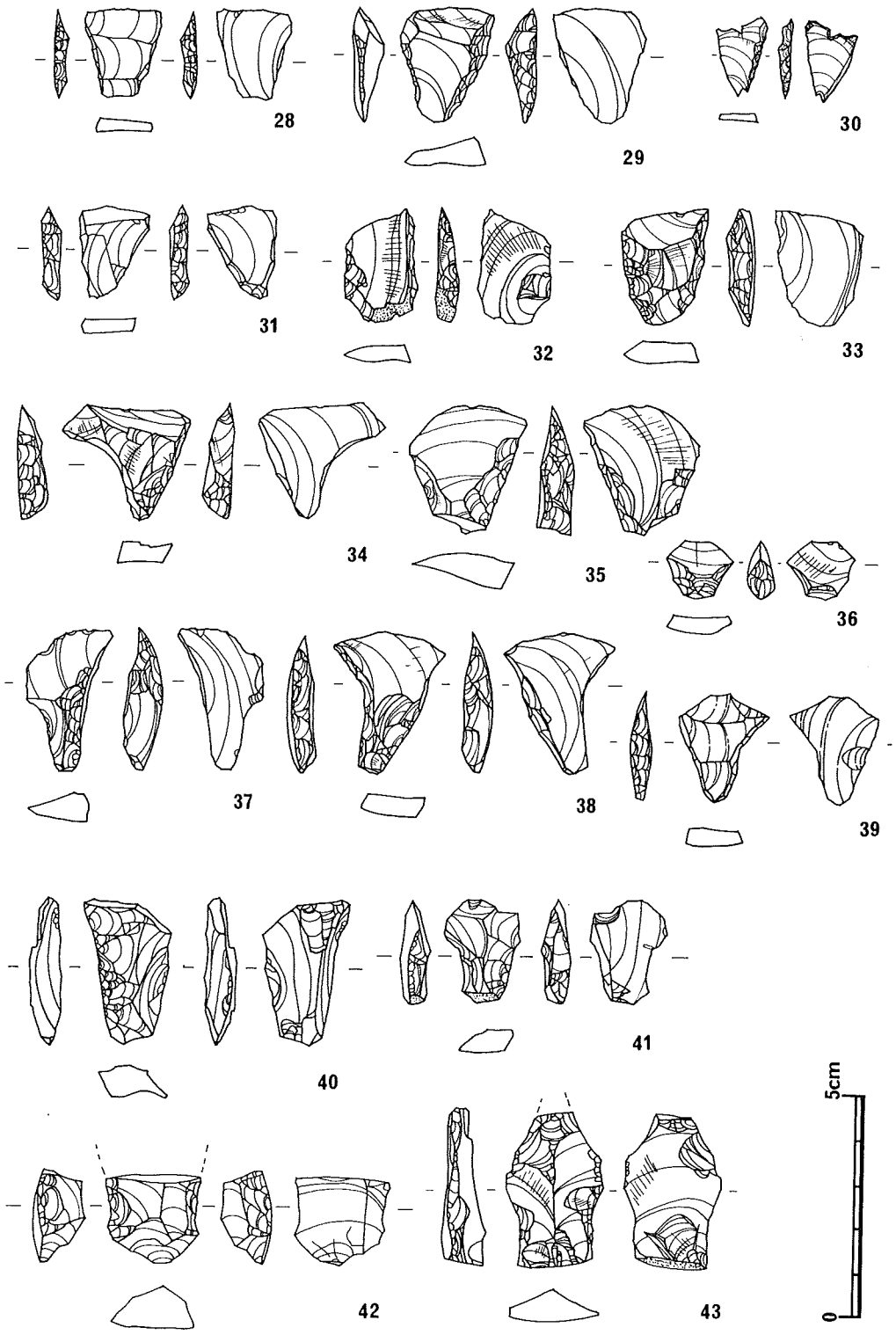


Fig. 14　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（2）—台形・台形様石器・尖頭器類（2/3）

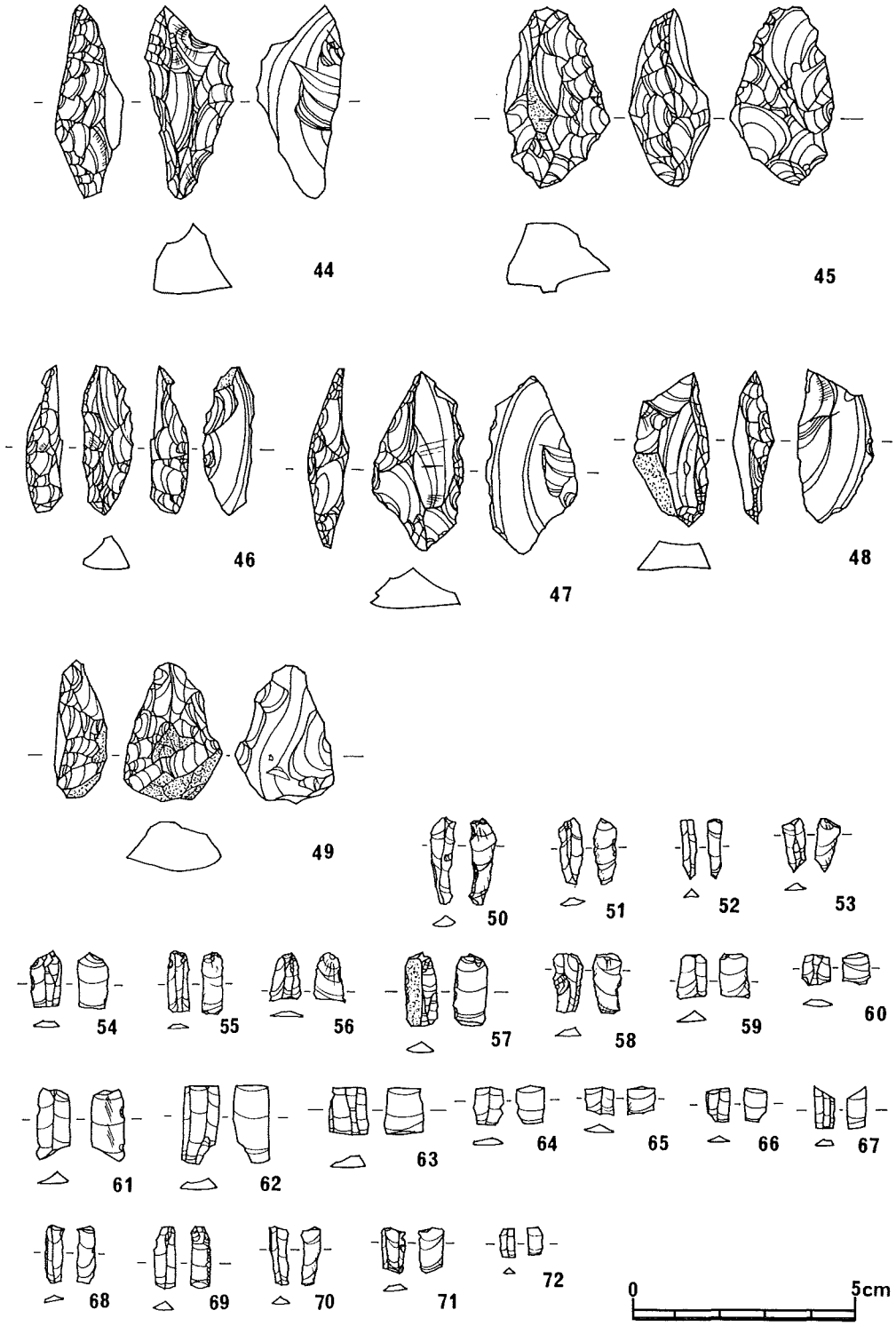


Fig. 15　先土器時代・第Ⅱ層出土石器（3）—尖頭器類・細石刃（2/3）

西輪久道上層出土石器　上層出土石器は第Ⅲ層～第Ⅴ層出土の遺物を一括して取扱うことにする。

ナイフ形石器
(Fig. 16—73～85)

ナイフ形石器は縦長剥片を利用し，斜行する刃部を除き，他に刃潰し加工を施すもので，柳葉形状を呈すもの，73～79。

切出形の形状を呈すナイフ形石器で，斜行する刃部と器長が半々で，三角形状を呈すもの，80・81と斜行する刃部が器長に比べて短かく，胴部が長いもの，83・84。

縦長剥片の打面をそのまま基部に利用した幅広の二側縁加工のナイフ形石器，85。

縦長剥片の一側縁に刃潰し加工を施したもの，82。

以上のように，二側縁加工のナイフ形石器と一側縁加工のナイフ形石器が出土している。

83・85は第Ⅴ層，74・76は第Ⅵ層出土で，他は第Ⅲ層に出土する。

台形・台形様石器
(Fig. 16—86～89
Fig. 17—90～100)

小形の台形石器で，刃部と基部がほぼ平行し，両側縁部の2次加工は直角に近い刃潰し加工を施すもの，86～89。

刃部の一端が「へ」の字状に張り出した刃部をもち，側縁部の2次加工は錯交する調整剥離が施され，側縁部の一方は湾曲し，器表面に平坦剥離を施すもの，92。

曲線的な刃部の両端が突出し，側縁部の2次加工は錯交する剥離で調整し，器表面を平坦剥離により調整するという特徴をもつもの，93。

刃部に比べて胴部が長く，側縁部の調整加工は折断面をそのまま利用し，他方は主要剥離面側より2次加工を施し，器表面を平坦剥離で調整するもの，95。

斜行する刃部で，その刃部に比べて胴部が長く，両側縁部は折断面をそのまま利用し，器表面と主要剥離面側に調整加工を施したもの，98。

斜行する刃部で，両側縁部の2次加工は主要剥離面側より施すもの，96・97とそれに比べて小形で胴部が肥厚するもの，94など多様性を示す。

89は第Ⅴ層，87・91・93・96は第Ⅳ層，他は第Ⅲ層出土。

剥片尖頭器
(Fig. 18—101～105)

縦長剥片を利用し，打面部を基部に利用して，左右対称的に両端より刃潰し加工を施して，基部を作り出すもの，102・103。

同様な特徴をもち，側縁部および先端部から側縁部の一部に2次加工を施すもの，101・104。

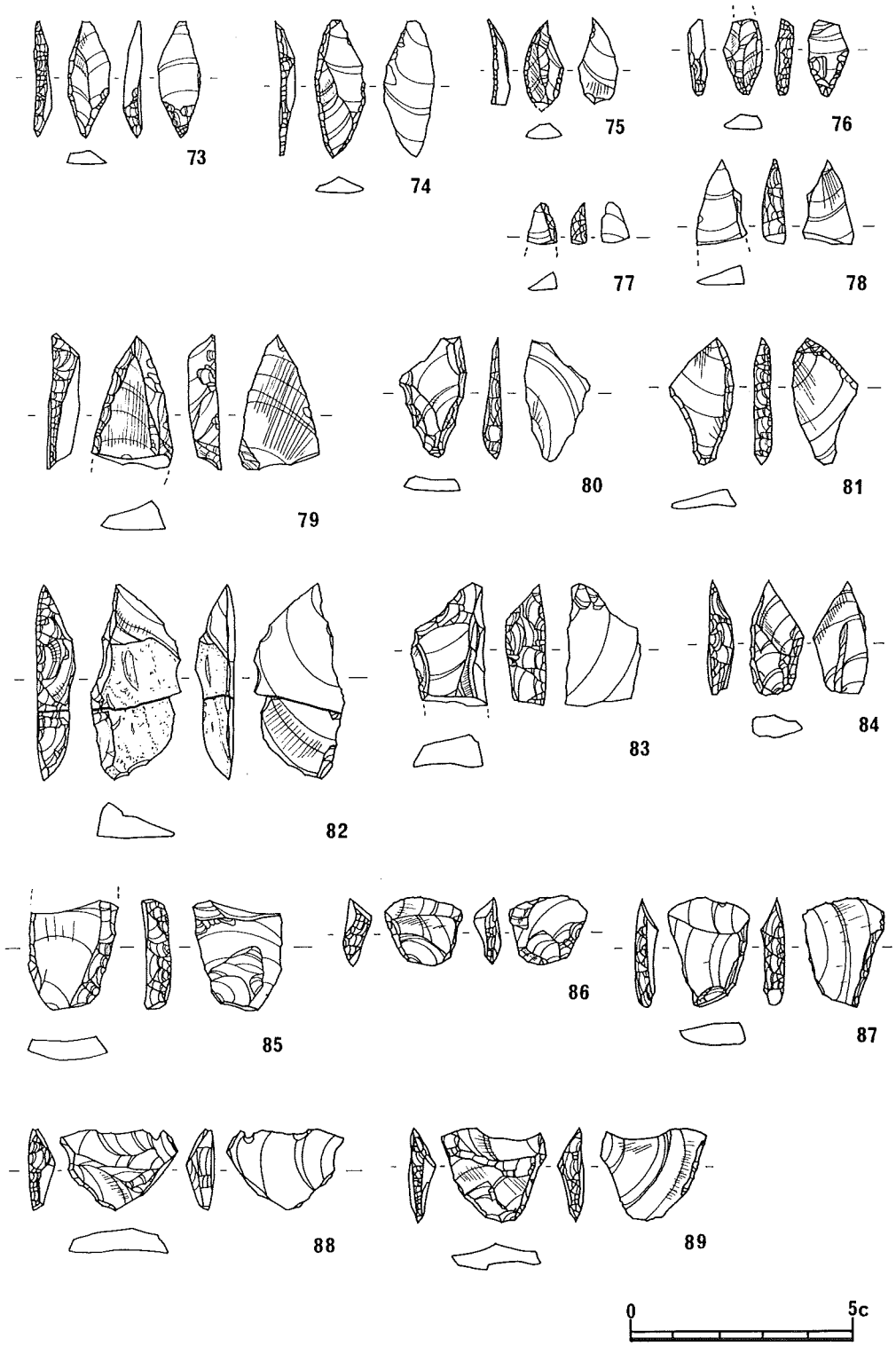


Fig. 16　先土器時代・上層出土石器（1）—ナイフ形石器・台形石器（2/3）

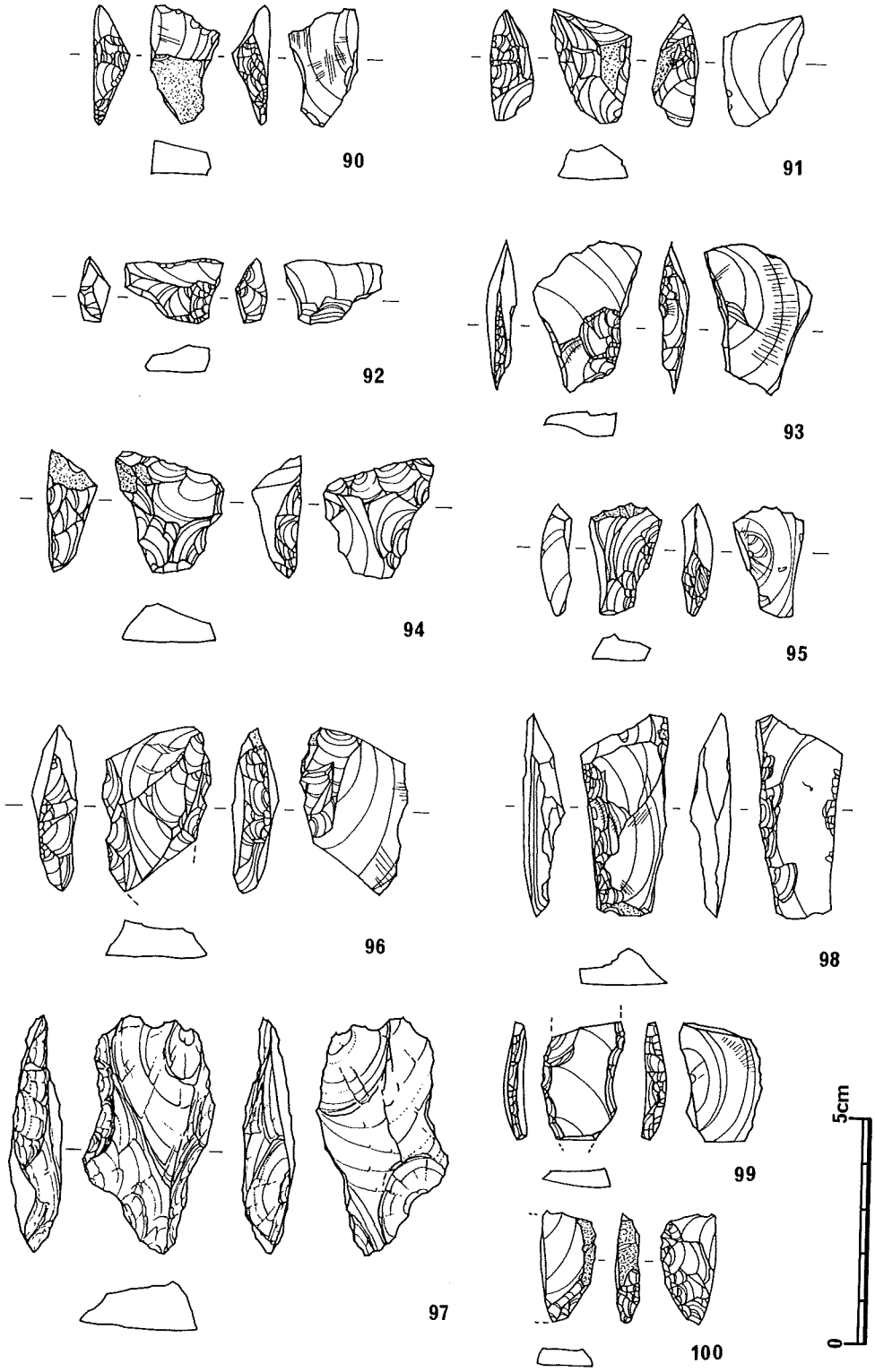


Fig. 17　先土器時代・上層出土石器（2）—台形様石器（2/3）

縦長剥片の打面部をそのまま基部に利用して，器表面より2次加工を施して，基部を作出しているもの，106。

以上のうち，101・104・105の石材は黒曜石製，102～104は安山岩製。102は第Ⅴ層，103～105は第Ⅲ層出土。

三稜尖頭器
(Fig. 18—108, Fig. 19—109, 110, 192)

横長剥片を利用し，主要剥離面側より急角度の2次加工を施し，断面が三角形状を呈すもの，109・192と断面が半円状および台形状を呈するもの，110・108がある。

特に接合資料の110（第Ⅴ層＋第Ⅲ層）は，器表面の稜上より細調整加工を施す。また，110は主要剥離面に先端部より細調整加工を施す。108・110・192は先端部が欠損している。192は第Ⅴ層，109・110は第Ⅳ層，108は第Ⅲ層出土。

角錐状石器
(Fig. 18—107)

横長剥片を利用し，素材の打面側および他側縁に直角に近い角度で主要剥離面側より2次加工を施し，先端部の加工は入念で，断面が台形状をなす石器。黒曜石製。第Ⅲ層出土。

尖頭状石器
(Fig. 19—111～115)

横長剥片を利用し，主要剥離面側より打面部のみに粗い2次加工を施すもの，112・113・115と二側縁部に2次加工を施すもの，108・111・114の2つに分れる。中でも113は縦長剥片を利用し，一側縁部の2次加工は粗い。111と115を除いて尖頭部を欠損している。111・112は第Ⅴ層，113～115は第Ⅲ層出土。

その他の尖頭器
(Fig. 19—116)

116は主要剥離面側の両側縁部より粗い2次加工を施し，断面が半円状を呈す尖頭器である。第Ⅲ層出土。

掻器・削器
(Fig. 20—117～120)

117・118は掻器である。117は器表面と主要剥離面側より2次加工を施して刃部を作り出している。

119・120は削器で，119は剥片の面端折断のノッチドスクレイパーである。安山岩製。120は第Ⅴ層，117は第Ⅳ層，他は第Ⅲ層出土。

使用痕のある剥片
(Fig. 20—121～127)

剥片の側縁部に刃こぼれが顕著にみられるもので，素材剥片の打面は121は線状，122・124・125は平坦，123は調整，126・127は自然面である。124・125は第Ⅲ層出土で，他は第Ⅴ層出土。

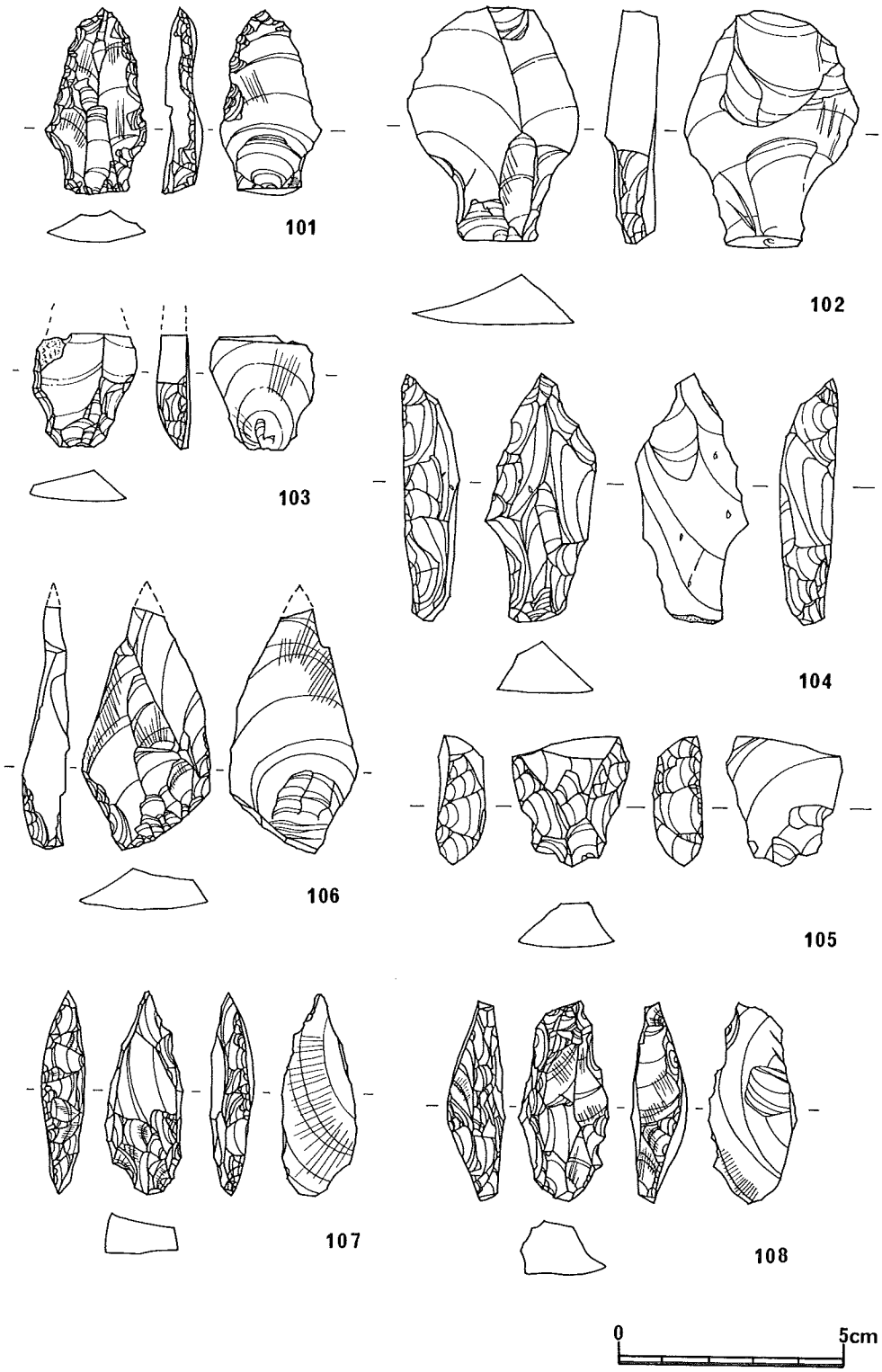


Fig. 18　先土器時代・上層出土石器（3）—尖頭器類（2/3）

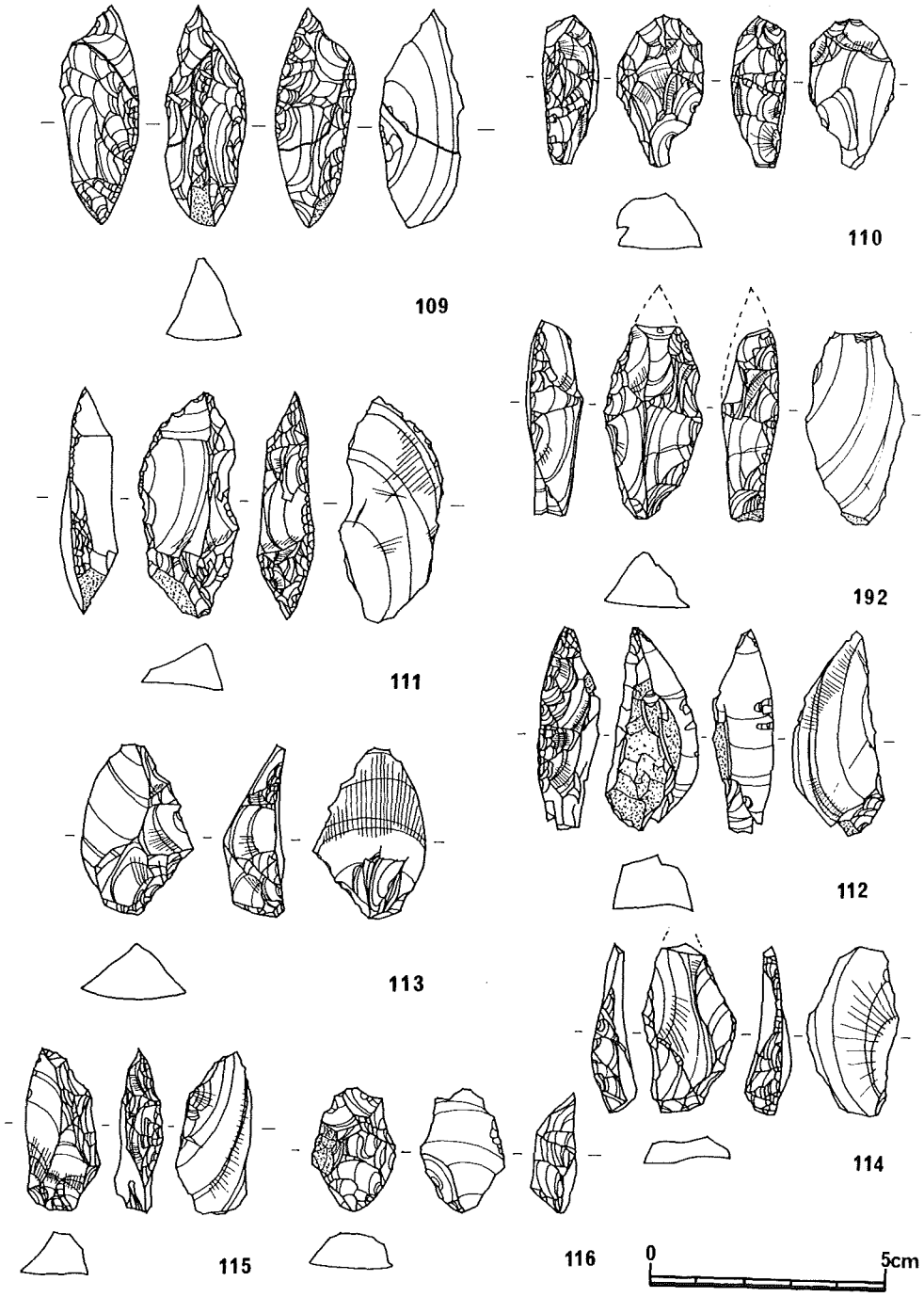


Fig. 19　先土器時代・上層出土石器（4）—尖頭器類（2/3）

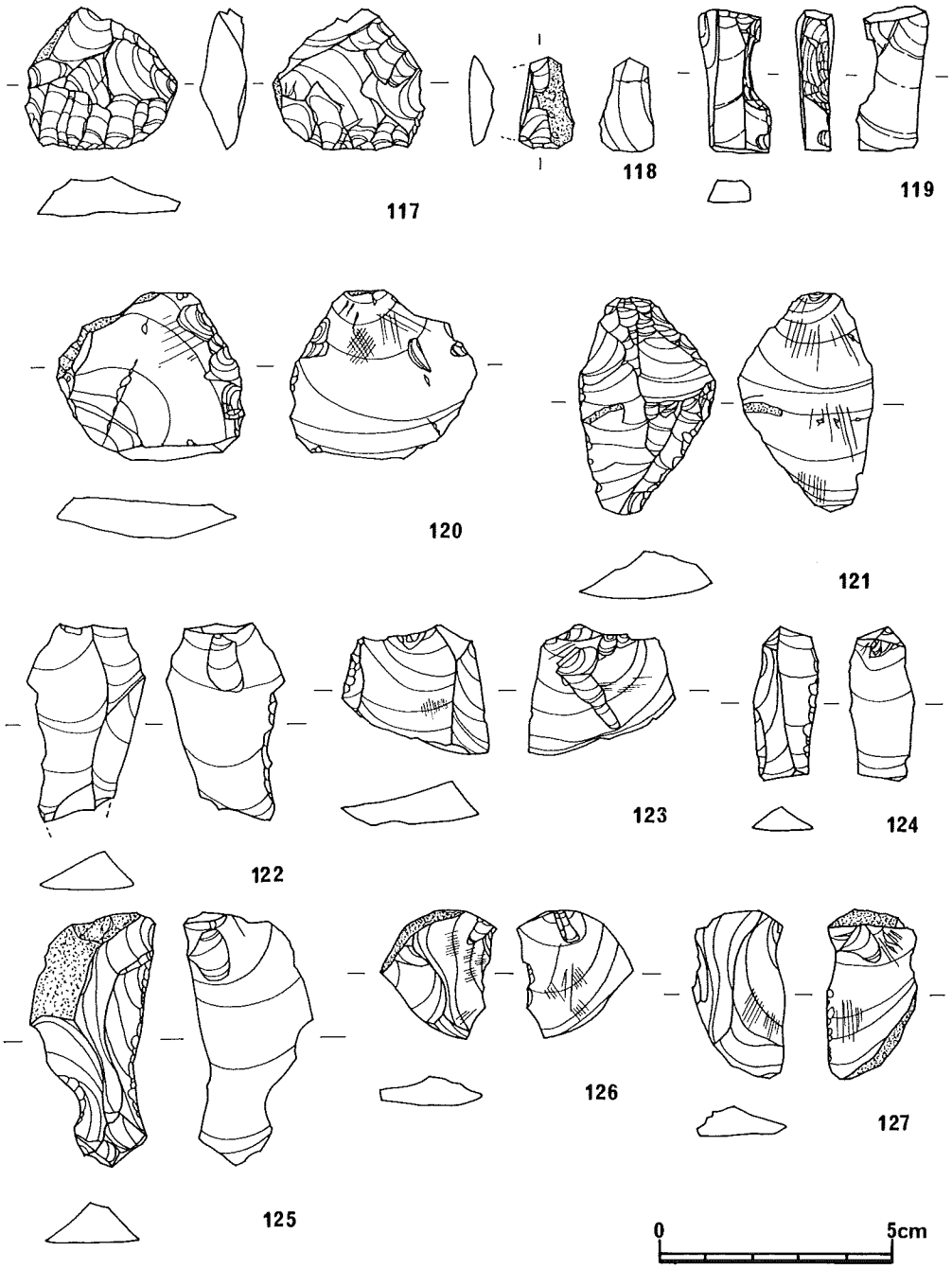


Fig. 20　先土器時代・上層出土石器（5）―掻器・削器・使用痕のある剝片（2/3）

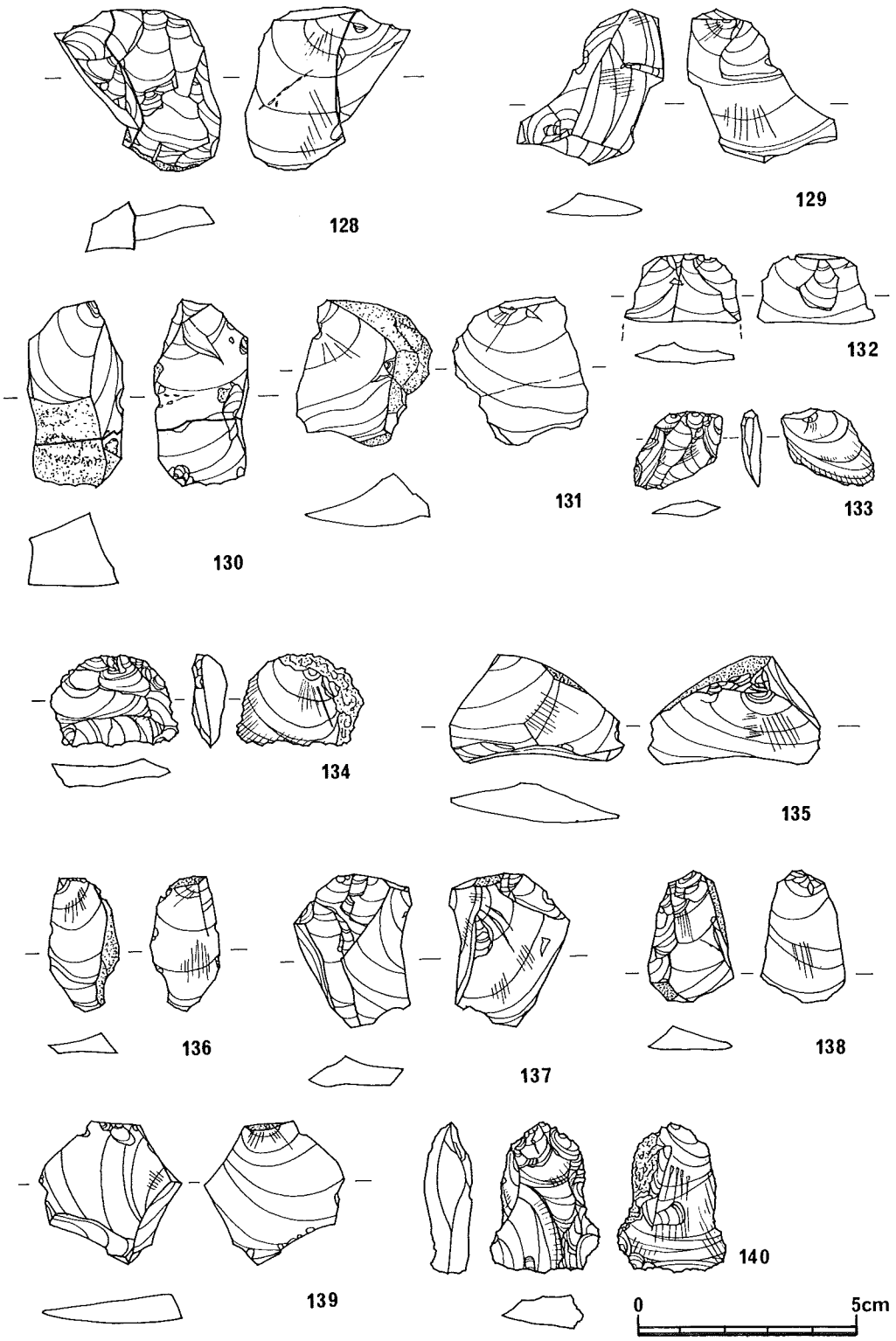


Fig. 21　先土器時代・上層出土石器（6）―剝片（2/3）

剥片
(Fig. 21—128～140)

剥片打面は平坦打面のもの，128～133，自然面，134～139，線状打面，140である。

剥片は幅広で不定形を呈し，平坦，自然面を打面にもつものが多いことが特徴である。

接合資料が，128（第Ⅳ層＋第Ⅲ層）と130（第Ⅳ層）の2例ある。132・135～137・140は第Ⅴ層出土，他は第Ⅳ層出土。

細石核
(Fig. 22—141)

細石核の側面観は台形状を呈し，一側縁部は平坦な剥離面を呈し，他方は背面より粗い調整加工を施し，背面に自然面を残す。打面部は平坦

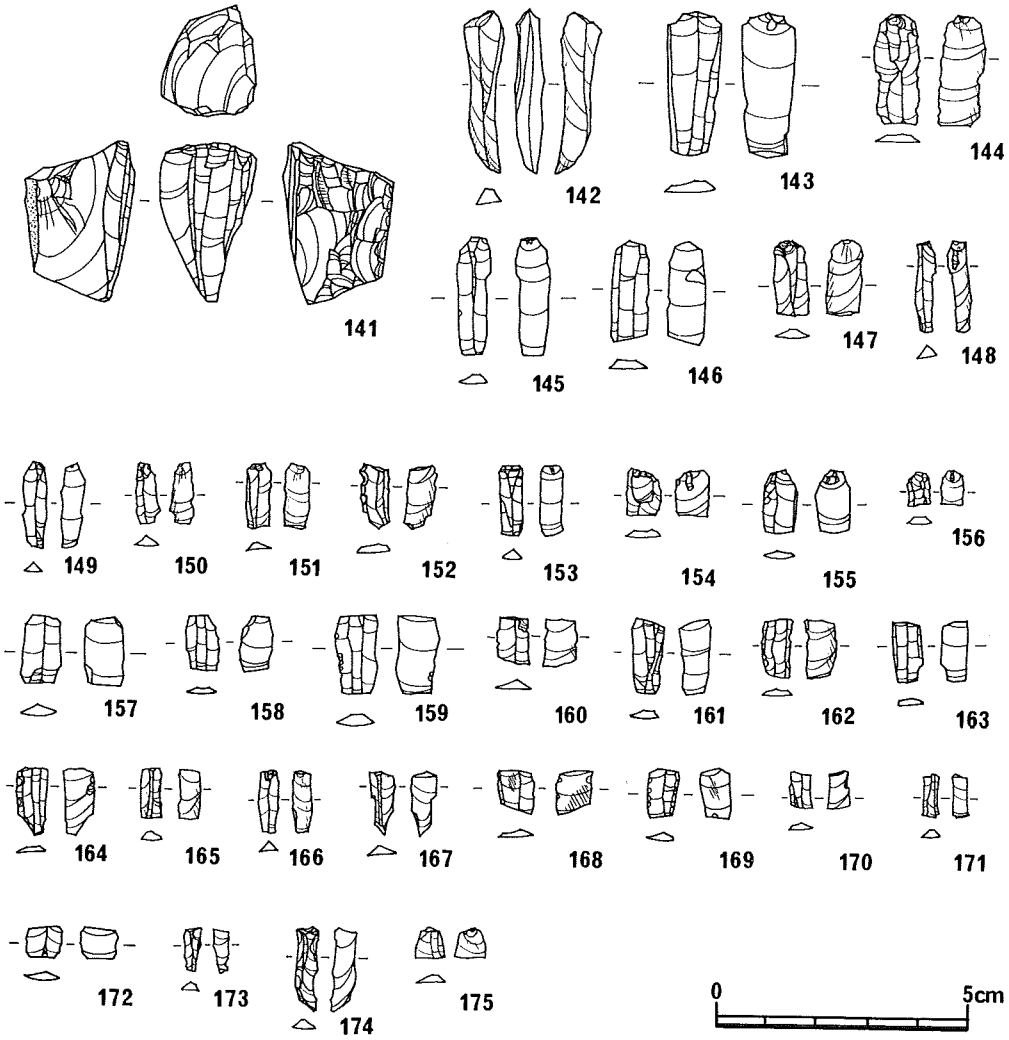


Fig. 22　先土器時代・上層出土石器（7）—細石核・細石刃（2/3）

打面で，6条の細石刃剥離痕が残る。半円錐形の細石核である。第Ⅳ層出土。

細石刃・スポール (Fig. 22—142～175)

細石刃は頭部13点，中間部18点，先端部2点の計33点を数える。その内，第Ⅴ層出土6点，第Ⅳ層出土4点，第Ⅲ層出土23点と第Ⅲ層に出土数が多い。

細石刃の頭部の打面についてみると，調整打面のもの7点，線状打面のもの3点，平坦打面のもの1点，打面自然面のもの1点である。

中間部は長さが2cm以下で細身のものが多い。

西輪久道下層出土石器

ナイフ形石器 (Fig. 23—176～181)

6点共に二側縁加工のナイフ形石器である。

176・177・179は縦長剥片を折断して，刃部を残し刃潰し加工を施し胴部が幅広なもの。176・177は基部裏面加工を施し，177は一側縁が内湾するという特徴をもつ。179は縦長剥片の打面部を基部に利用し，折断して2次加工を施したもので，基部裏面加工は無い。

180はナイフ形石器の先端部であるが，斜行する刃部を残し他を刃潰し加工を施した細身のものであろう。

181は縦長剥片を利用し，先端部および一側縁部を残して二側縁と基部にかけて急角度の刃潰し加工を施したもので，切出形の形状を呈す。

以上の石材は黒曜石製である。

台形・台形様石器 (Fig. 23—182～190)

台形・台形様石器は刃部および側縁部の2次加工に非常に特徴をもつ。

182は刃部と基部が平行し，刃部に最大幅をもち台形を呈すもので，側縁部の一端は折断面をそのまま利用し，他方は直角に近い刃潰し加工を施している。

188の形状は台形で，曲線的な刃部をもち，側縁部の2次加工は主要剥離面より急角度の刃潰し加工を施し，器表面に側縁部の一端より平坦な調整剥離を施している。186も同様で側縁部の2次加工は錯交する剥離で整えている。

190は縦長剥片の打面を基部に利用して，両側縁部の2次加工は主要剥離面側より施している。刃部に刃こぼれが顕著である。

185・187・189は刃部の一端が「へ」の字状に張り出し，直線的な刃部に斜行ないし直行する刃部を一側縁部にもつもので，側縁部の2次加

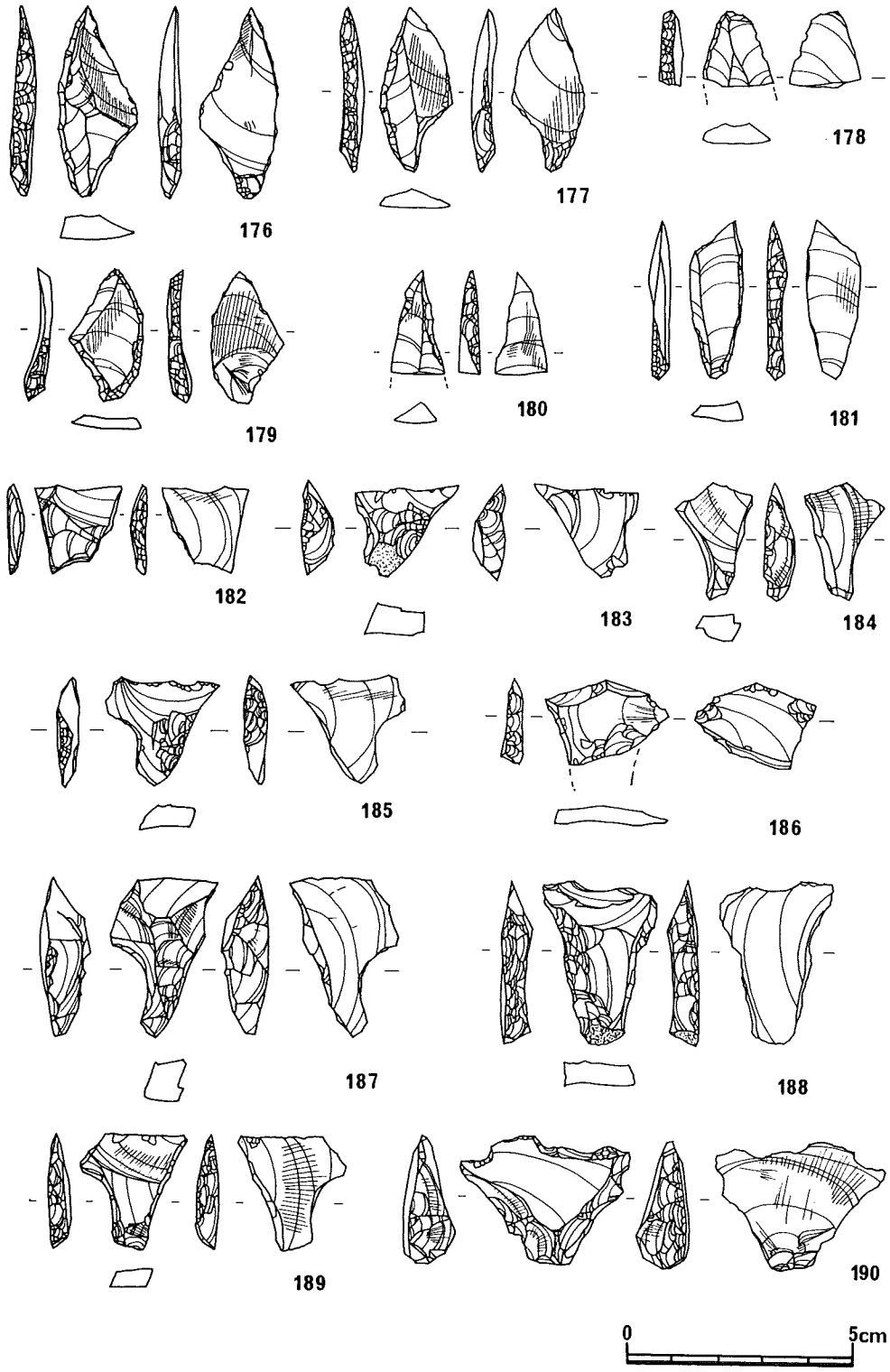


Fig. 23　先土器時代・下層出土石器（1）―ナイフ形石器・台形・台形様石器（2/3）

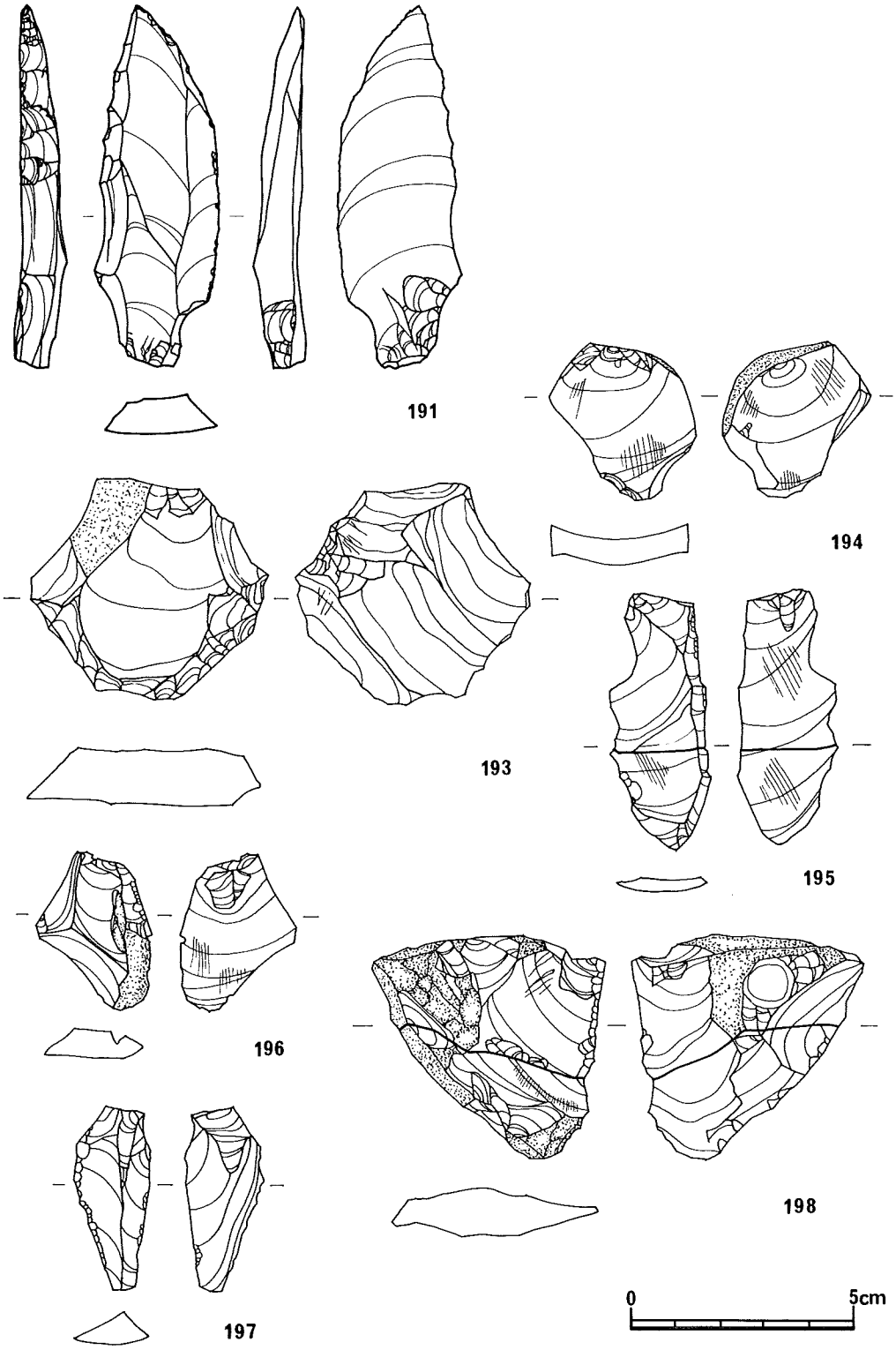


Fig. 24　先土器時代・下層出土器（2）—剝片尖頭器・三稜尖頭器・掻器・使用痕のある剝片（2/3）

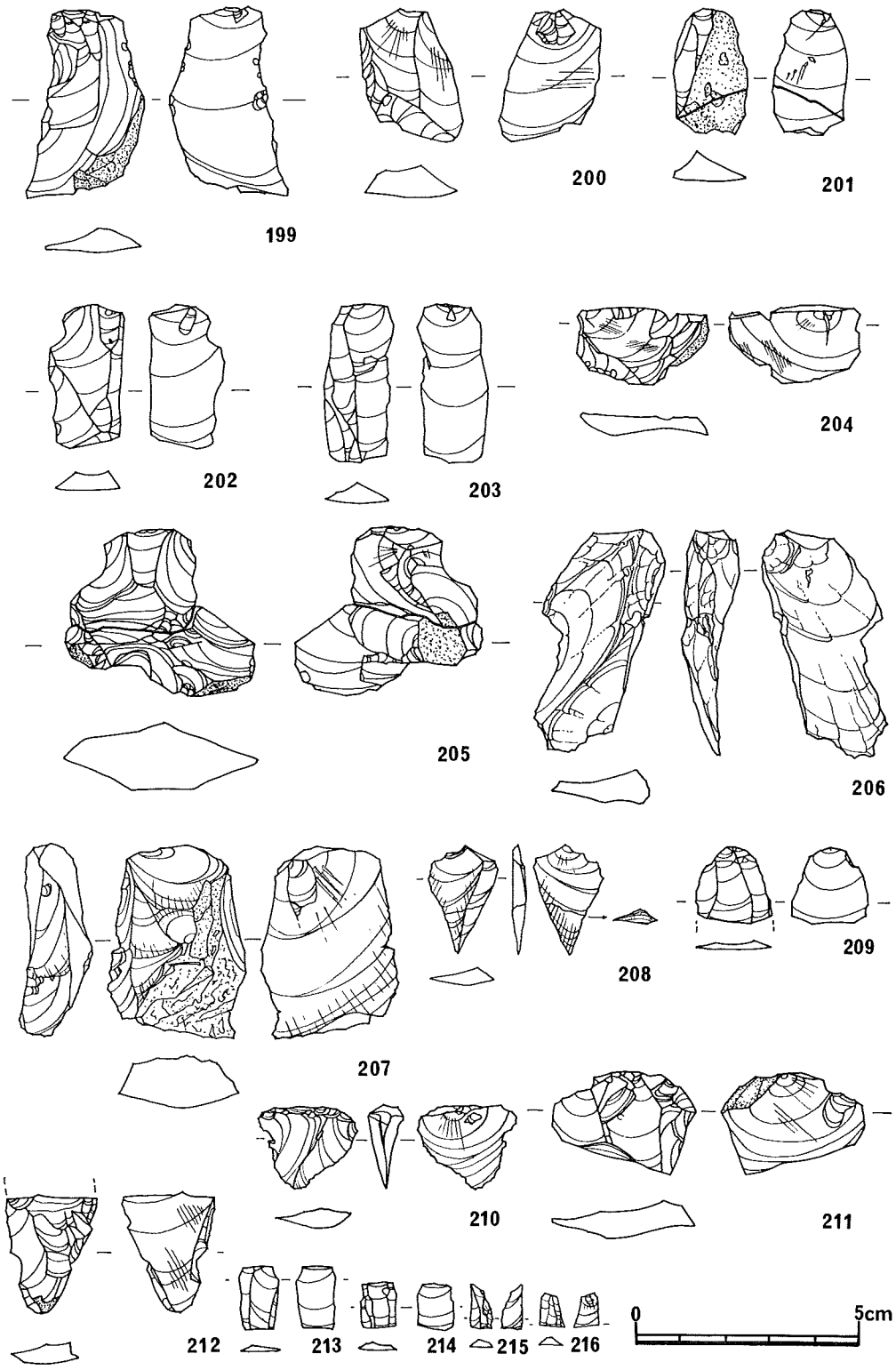


Fig. 25　先土器時代・下層出土石器（3）―剥片・細石刃（2/3）

工は一方は湾曲するように主要剥離面側より，他方は器表面より急角度に調整加工を施すもので，両側縁の２次加工は錯交する剥離で整える。

185・187は器表面に一端より平坦剥離を施している。

183・184は直線あるいは曲線的な刃部の一端が突出するもので，183は側縁部の２次加工は錯交し，器表面に平坦剥離を施し，184の一側縁部は折断面，他方は主要剥離面側より２次加工を施している。

剥片尖頭器
(Fig. 24—191)

縦長剥片の打面部を基部として利用し，一側縁および基部に２次加工を施したもので，器長9.1cm×最大幅3.9cm×厚さ１cm程の比較的大形の剥片尖頭器である。先端部から側縁部にかけ刃こぼれが顕著である。黒曜石Ｂ製。

掻器・加工痕のある石器・使用痕のある石器
(Fig. 24—193～198)

193は分厚な剥片の縁辺に急角度の２次加工を施した掻器である。安山岩製。

194は扁平な剥片の先端部に主要剥離面側より加工を施したもので，掻器の未製品であろうか。

195～198は使用痕のある剥片で，剥片の側縁部に刃こぼれが顕著なものである。195は第Ⅶ層，198は第Ⅵ層と第Ⅱ層の接合資料である。これらの剥片の打面は調整打面１点，平坦打面２点，自然面１点である。

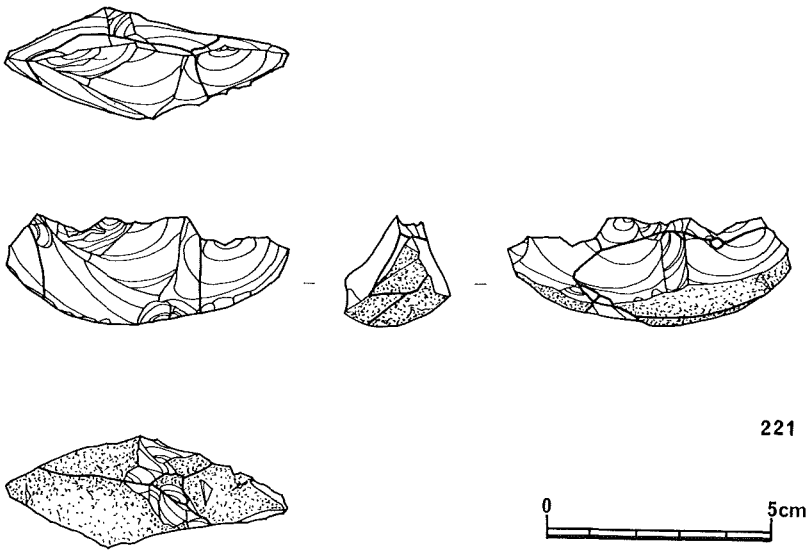


Fig. 26　先土器時代・下層出土石器（４)—石核①（2/3)

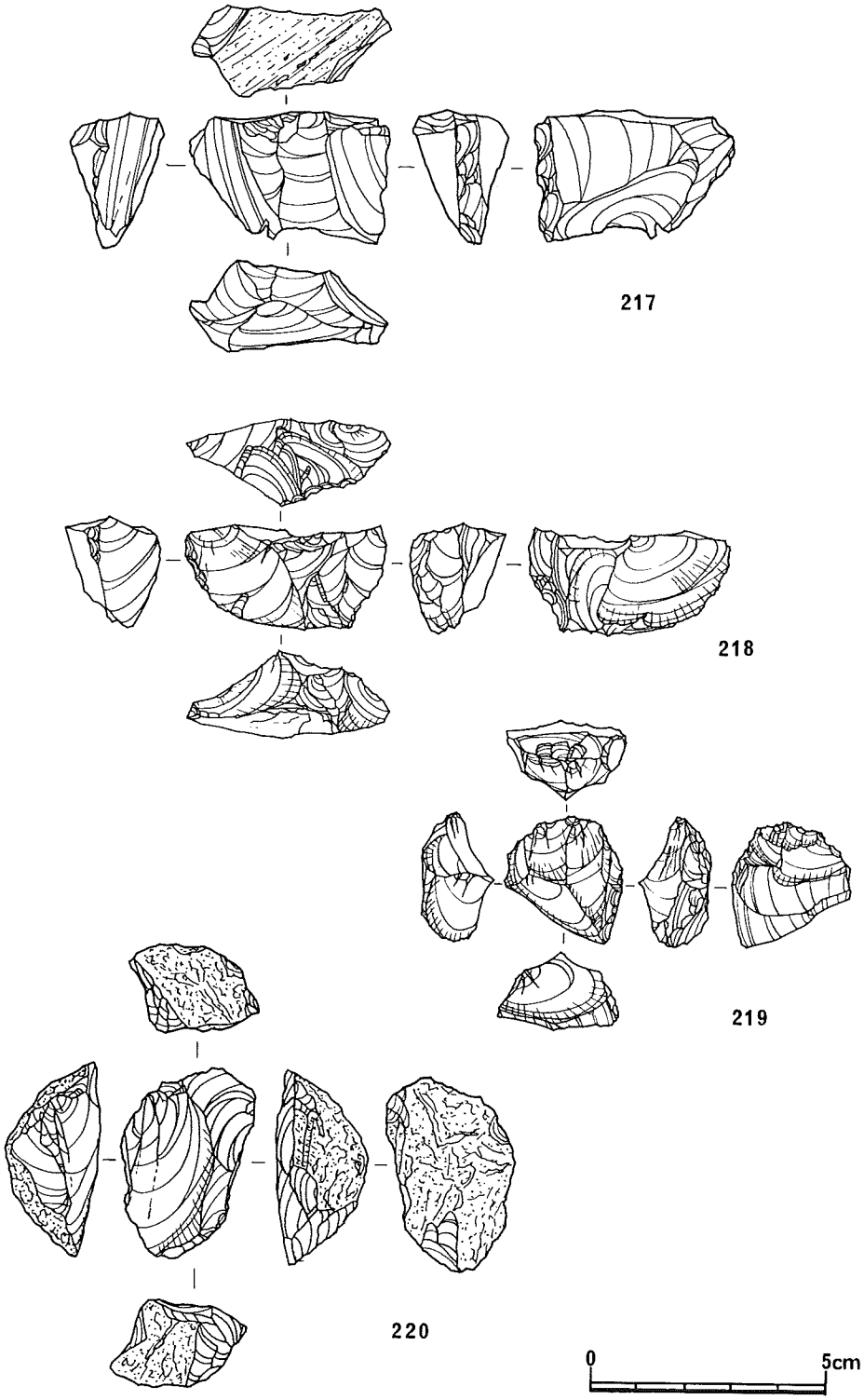


Fig. 27　先土器時代・下層出土石器（5）—石核②（2/3）

剥片
(Fig. 25—199～212)

剥片は幅広の縦長剥片および横長剥片が出土し，折断剥片が多い。これらの打面は，199～202は調整打面，203～207は平坦打面，208～209は線状打面，201～211は自然面である。

また接合資料が2例あり，201は第Ⅴ層と第Ⅶ層，205は第Ⅵ層の接合である。

細石刃
(Fig. 25—213～216)

細石刃は中間部で，幅0.5cm～1cm2点と0.5cm以下2点の4点が出土しているが，上層の文化層より混入したものであろう。

石核
(Fig. 26～28—217～222)

下層出土の石核は横長剥片を目的に剥片剥離した221・217・218と縦長剥片を剥離した219・220・222の大きく2つに分けることが出来る。

221はドーナツ状土壙1点と第Ⅴ層1点，第Ⅵ層2点の接合資料例で，横長剥片を目的に剥片剥離をしたもので，剥片剥離面と打面部とを交互に剥片剥離を行うもので，断面は三角形状を呈し，打面と剥片剥離面のなす稜は波状に凸凹を呈すもので，背面には自然面を残す。原石は拳大程の円礫を利用したものであろう。

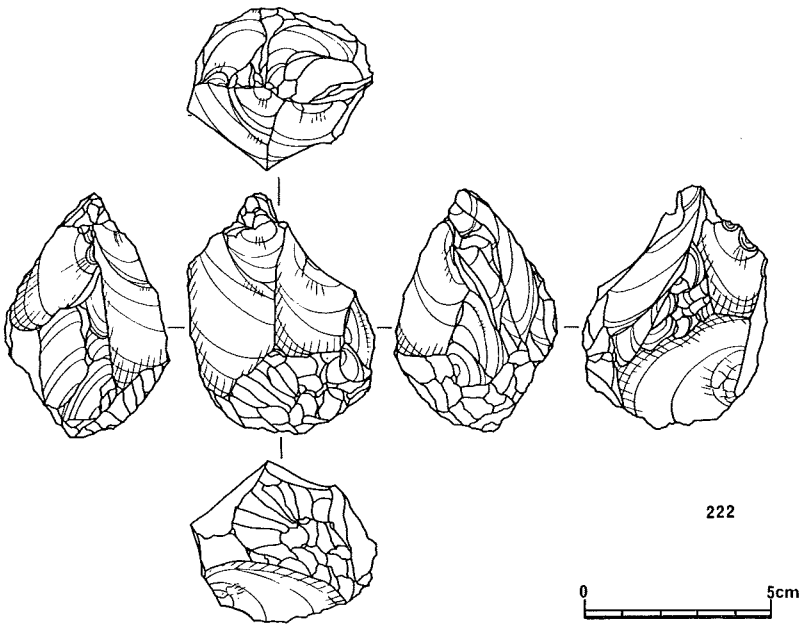


Fig. 28　先土器時代・下層出土石器（6）—石核③（1/2）

217・218は断面は短くて幅広の剥片を剥離したものであろう。断面は三角形状を呈す。217は側面，背面にも打面をもち，縦長剥片の剥片剥離痕が残り，その打面部に急角度の調整加工を施して打面部を切除し，新たに側面部の自然面を打面として剥片剥離作業を行ったもの。

219は石核再生剥片で，220は上下両設打面で，打面は自然面および平坦で，背面に自然面を残し，拳大程の黒曜石の円礫を利用。

222は幅広の剥片剥離痕が残る。剥片剥離面と打面は波状の稜を呈す。

217～222は黒曜石製で，第Ⅵ層出土。

出土遺物の形態分類について

遺物は第Ⅲ層～第Ⅴ層（上層）と第Ⅳ層～第Ⅶ層（下層）に分かれ，なかでも第Ⅲ層出土遺物と第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物では各器種において若干の相違が見られるようで，ここでは比較的多量に出土するナイフ形石器，台形・台形様石器，尖頭器類について，形態分類を行った。

ナイフ形石器

ナイフ形石器は表採２点，第Ⅱ層出土11点，上層出土14点，下層出土６点の総数35点を数える。

石器の製作技術，刃部形態で分類を行った。

二側縁加工のナイフ形石器―Ⅱ―１・２類，Ⅱ―１・２類，Ⅲ類。

一側縁加工のナイフ形石器―Ⅳ類。

剥片の一端に折断加工を施すナイフ形石器―Ⅴ類。

Ⅰ類　縦長剥片を利用し，斜行する刃部を残し，他は刃潰し加工を施したものである。

Ⅰ―１類（17，18，20，28，31，73～79，180）は柳葉形状を呈し，剥片に刃潰し加工を施したもの。黒曜石Ａ製９点，Ｂ製４点。

Ⅰ―２類（176～179）は剥片を折断し，刃部を残して刃潰し加工を施したもので，胴部がⅠ―１類に比べて幅広のもの。基部裏面加工を施すものと施さないものがある。また177は刃部の一端が湾曲するような２次加工が施され，基部調整を施す。黒曜石Ａ製。

Ⅱ類　切出形状を呈すもので，刃部長と器長の割合が半々か，器長がまさるもの。

Ⅱ―１類（４，22，80，81）は刃部長と器長の割合が同じで，三角形状を呈すもの。黒曜石Ａ製３点，Ｂ製１点。

Ⅱ－2類（3，23，24，83，84，181）は刃部長が器長に比べて短いもので，切出形状を呈すもの。黒曜石A製4点，B製2点。

Ⅲ類　剝片の打面部をそのまま基部に利用した幅広のもの（16，27，85）。黒曜石A製2点，B製1点。

Ⅳ類　剝片の一側縁部のみ刃潰し加工を施し，他方を刃部として利用したもの（19，21，82）。黒曜石A製1点，B製2点。

Ⅴ類　剝片の一端あるいは両端を折断して，刃潰し加工を施したもの（25，26）。黒曜石A製1点，安山岩製1点。

以上のようにⅠ～Ⅴ類に分類され，更に細分される。

遺跡での層位的出土は下層に縦長剝片を折断し，刃潰し加工を施すⅠ－2類が顕著でⅠ－1，Ⅱ－2類が出土し，上層ではⅠ－2類を除いて出土する。(Tab. 4)

ナイフ形石器の機能は切截を主にするもの（Ⅲ・Ⅴ類）と切截・刺突を主にするもの（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類）に分けられる。

利用石材　西輪久道遺跡の石材依存は黒曜石が80％を越える割合を占める。黒曜石は色調により三種類に分けられるようだ。

黒曜石Aは漆黒色を呈す。原産地は腰岳，針尾産。

黒曜石Bは灰青色を呈し，パテナーが著しい。針尾，淀姫東浜産。

黒曜石Cは灰白色を呈す。針尾産と産地不明。

文章中の黒曜石については，以上のような分類で使用した。

Tab. 4　ナイフ形石器の層位別出土一覧表

分類 / 層位		Ⅰ類 1	Ⅰ類 2	Ⅱ類 1	Ⅱ類 2	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	計	
下層		1	4		1				6	
上層	Ⅳ.Ⅴ層	2			1	1			4	14
	Ⅲ層	6		2	1		1		10	
Ⅱ層		2		1	2	2	2	2	11	
その他		2		1	1				4	
計		13	4	4	6	3	3	2	35	
		17		10						

台形・台形様石器の形態分類

出土石器は撹乱層2点，落ち込み・ドーナツ状土壙2点，第Ⅱ層14点，上層15点，下層9点の計42点を数える。

石器の刃部形態・石器製作技術よりⅠ～Ⅵ類に分類し，更に細分を行った。

Ⅰ類

小形の台形石器で縦長剥片を横位置に利用し，刃部と基部がほぼ平行のものである。

(石器の器長は1.5cm～3cm，刃部の長さは1.5cm～2.5cm，最大厚は0.3cm～0.7cm，重量は1g～3gの間に計る。)

Ⅰ－1類
(5，28，31，86，88，89，182)

台形状を呈し，両側縁部の調整加工は急角度に近い刃潰し加工を施すもの。側縁部の2次加工は主要剥離面側より施すもの2点，折断面をそのまま利用し，一方のみ主要剥離面側より加工を施すもの2点，錯交剥離を施したもの4点と非常に特徴をもつ加工形態である。断面は長方形状を呈す。

Ⅰ－2類
(29，32，33)

台形状を呈し，側縁部の2次加工が一方は急角度の刃潰し加工，他方は鈍角で面的な加工を施すもので，側縁部の2次加工は主要剥離面側より施している。断面は扁平な三角形状を呈す。

Ⅱ類

曲線的な刃部を呈し，側縁部の刃潰し加工は主要剥離面側より施し，基部より刃部にかけ直線的な側縁部で，台形の形状を呈す。

(石器の器長は3cm～4cm，刃部の長さは2.5cm～4cm，最大厚は2.5cm～3.5cm，重量は4g～8gの間に計る。)

Ⅱ－1類
(99，186，188)

両側縁部の2次加工は急角度の刃潰し加工で，刃部に比して胴部が長く，一側縁部より器表面に調整剥離を施すもの。

Ⅱ－2類
(36，190)

剥片の打面を石器の基部に利用したもので，側縁部の2次加工は鈍角に近い。胴部に比べて刃部が長い。

Ⅲ類
(34，41，92，185，187，189)

刃部の一端が「へ」の字状に張り出し，直線的な刃部に斜行ないし直行する刃部を一側縁部にもつもの。側縁部の2次加工は一方は湾曲するように主要剥離面側より，他方は器表面より急角度に調整加工を施し打瘤部分を除去し，緩やかな曲線を呈すもの。結果的には特徴的な刃部と幅狭な胴・基部を呈すもので，胴・基部の断面は菱形を呈す。

また，両側縁部の2次加工は錯交剥離で，器表面の一端から調整剥離が施されるという特徴を併せてもつものである。ただ，189の1点だけ器表面の調整剥離がみられない。

（石器の器長は２cm～４cm，刃部の長さは1.5cm～2.5cm，最大厚は0.5cm～0.7cm，重量は１ｇ～３ｇの間で，１点だけ５ｇを越す。）

Ⅳ類　Ⅳ類は曲線的な刃部を呈し，刃部の一端および両端が鋭利に尖ったもの。側縁部の２次加工は主要剥離面側より湾曲状に，他方は器表面より急角度の調整加工で整え，Ⅳ―２，３類を除いて錯交剥離を施している。

また，器表面に一端より調整剥離を施すのを特徴とする。

（石器の器長は２cm～3.5cm，刃部の長さは1.5cm～３cm，最大厚は0.5cm～0.8cm，重量は1.5ｇ～3.5ｇの間に計る。）

Ⅳ―１類（７，37，38，93）　刃部の両端が鋭利に突出するもの。側縁部の２次加工は錯交剥離による。

Ⅳ―２類（39，184）　刃部の一端のみ鋭利に突出するもの。側縁部の２次加工は錯交剥離のもの，主要剥離面側より一方向に施すもの，一側縁部は折断面を利用し他方は器表面より施すものがある。

Ⅳ―３類（35）　刃部の両端がⅣ―１・２類程に突出を見なく，側縁部の２次加工も一方は器表面より急角度に施し，他方は両面に鈍角で面的な調整加工を施すもので，形状はバチ形を呈す。器表面に一端より調整加工を施すもの。

以上のようにⅣ類は刃部と側縁部の２次加工に特徴をもち，１～３類に細分される。

Ⅴ類　直線ないし斜行する刃部を有し，刃部に比べて胴部が長く，平行的な側縁観をもつもので，器表面に平坦な調整加工を施す。

（石器の器長は３cm～５cm，刃部の長さは1.5cm～2.5cm，最大厚は0.7cm～0.9cm，重量は１ｇ～７ｇの間に計る。）

Ⅴ―１類（40，98）　側縁部の一端および両端に折断面を利用するもの。器表面に平坦な調整加工を施す。

Ⅴ―２類（８）　一側縁部に２次加工を施すもの。断面は扁平な三角形状を呈す。器表面に平坦な調整加工を施す。

Ⅵ類　縦長剥片を横位置に利用したもの。両側縁部の２次加工は急角度に主要剥離面側より施すもので，主要剥離面側に調整剥離を施すものと，施さないものがある。

（石器の器長は2.5cm～６cm，刃部の長さは1.5cm～2.5cm，最大厚は0.65cm～1.1cm，重量は0.5ｇ～1.5ｇの間に計る。）

VI—1類 (90, 91, 94)　小形で，刃部は斜行し，胴部が肥厚する。側縁部は粗い2次加工を施す。94は主要剥離面側にも面的な調整剥離を施している。

VI—2類 (96, 97)　大形で，縦長剥片を利用した幅広の胴部をもち，両側縁部がほぼ平行して短冊形の形状を呈す。

以上，刃部形態，側縁部の2次加工，器表面および主要剥離面に施される調整剥離等より分析して，I～VI類に分類し更に細分を行った。

I類は「百花台型」[註1]とされるものを含むI—1類と小形ではあるが台形様石器の2次加工に類似の調整剥離を施すI—2類に分れる。

小形で組合せ道具の一種であろう。

II類は「日の岳型」[註2]とされるものも含み，ナイフ形石器の刃潰し加工と同様な技術基盤をもち，III，IV類の2次加工の製作技術面とは相違がみられる。

III類とIV類は刃部形態，一側縁部が湾曲するような側縁部の2次加工と，その2次加工は錯交剥離が施されることと，器表面に調整剥離を施すなど類似している。またIII類は「原の辻型」[註3]，IV—3類は「枝去木型」[註4]とされるものである。

これらは，単体で使用された石器と考えられ，刃部の両端の欠損が多いのは機能的な面で刃部形態に固執するものであったのであろう。

V類は他類に比べて側縁部の2次加工が相違を示し，折断面を側縁部に利用する台形様石器である。また器表面に平坦な調整剥離を施すなど平面的な調整加工が著しい。

VI類は縦長剥片を横位置に利用したもので，小形と大形の石器でナイフ形石器と類似している。

I～VI類の出土層位はTab. 5のとおりでII・III・IV類は下層に，I

Tab. 5　台形・台形様石器の層位別出土一覧表

分類 / 層位		I類		II類		III類	IV類			V類		VI類		その他	計	
		1	2	1	2		1	2	3	1	2	1	2			
下層		1		2	1	3		2							9	
上層	IV.V層	2					1					1	1	1	6	15
	III層	2		1		1				2		2	1		9	
II層		2	3		1	2	2	1	1	1				1	14	
その他		1					1				1			1	4	
計		8	3	3	2	6	4	3	1	3	1	3	2	3	42	
		11		5		6	8			4		5		3		

・V・VI類は上層に集中する傾向が窺われる。その中で，V類は第Ⅲ層に出土する。

註1　麻生　優・白石浩之「百花台遺跡」1976　日本の旧石器文化―遺跡と遺物（下）雄山閣

註2　白石浩之『西南日本におけるナイフ形石器終末期の予察』神奈川考古第3号

註3　萩原博文『原の辻型台形石器について』人間・遺跡・遺物―わが考古学論集1―　麻生　優編　文献出版

註4　杉原荘層・戸沢充則「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」1971　考古学集刊4―4

尖頭器類の形態分類

尖頭器は剥片尖頭器10点，三稜尖頭器・角錐状石器7点，尖頭状石器7点，その他の尖頭器3点の27点を数える。

遺跡出土の各種の尖頭器類について，素材の利用，製作技術などから形態分類を行った。I類～IV類と更に細分した。

I類

I類は素材である剥片の原形を復元できる程度に保ち，尖頭器の形態として石器先端の尖鋭性を有すものという清水[註1]によって概念規定された剥片尖頭器である。

遺跡出土の石器は，製作加工技術によりI―1～4類に細分される。

I―1類　2次加工が基部のみに施されるもの。(102，103)

I―2類　2次加工が基部から一側縁部に施されるもの。(191)

I―3類　2次加工が基部から両側縁部にかけて施されるもの。(43，101，104)

I―4類　2次加工が基部に施されることはI―1類と同様であるが，I―1類に比べて基部の湾曲がないもの。(106)

以上に分類され，清水分類のI型→I類，Ⅲ型→Ⅲ類に含まれる。また，I―4類は源貞遺跡，日の岳遺跡，大分県今峠遺跡で類例がある。

II類

II類は三稜尖頭器[註2]，角錐状石器[註3]，舟底形石器[註4]等と呼称されている石器である。

遺跡出土のII類は，2次加工技術，形状等より3つに細分される。

II―1類　横長剥片の主要剥離面側より面的な2次加工，稜上より調整加工を施し，断面が三角形状で，平面観が三稜を呈す。また稜上よりの調整がないものもある。(44，46，109，192)

II―2類　II―1類と同様な面的な2次加工を施し，断面が台形状で，平面観が

四稜を呈すもの。(108，110)

Ⅱ－3類　横長剝片の主要剝離面側よりナイフ形石器の刃潰し加工と同様な2次加工を施し，断面が台形状で，正面観が四稜を呈すもの。(107)

以上に分類され，Ⅱ－1類は三稜尖頭器，角錐状石器，Ⅱ－2類はゴロゴロ石器[註5]，角錐状石器，三稜尖頭器として分類，報告されている。

Ⅲ類　Ⅲ類は尖頭状石器[註6]と呼ばれる石器である。

横長剝片を利用し，素材剝片の打面部に急角度の2次加工を施し，それは他側縁の一部までおよぶ。

Ⅲ－1類　断面が台形および扁平な三角形状を呈すもの。(47，111，114) このⅢ－1類はナイフ形石器と類似性をもつ。

Ⅲ－2類　素材の打面部のみ急角度の2次加工を施し，断面は台形状を呈すもの。(48，112，113) の2つに細分される。

Ⅳ類　Ⅳ類は断面が半円状を呈し，二面ないし三面に面的な加工を施し，平面観は三稜を呈す。(45，49，116)

以上のようにⅠ～Ⅳ類に分類される。

註1　清水宗昭　1973「剝片尖頭器について」古代文化　第25巻　11号

註2　橘　昌信　1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」考古学論叢3

註3　白石浩之　1985「旧石器時代における角錐状石器の様相」太平臺史窓　第三号

註4　松藤和人　1981「西日本における舟底形石器の編年的予察」『旧石器考古学』22号

註5　萩原博文　1984「金柑茶屋第2遺跡」平戸市教育委員会

註6　中村和正　1979「日の岳遺跡採集の一資料」長崎県の考古学Ⅰ　長崎県考古学会

Tab. 6　尖頭器類の層位別出土一覧表

分類 / 層位		Ⅰ類					Ⅱ類			Ⅲ類		Ⅳ類	計	
		1	2	3	4	他	1	2	3	1	2			
下層			1										1	
上層	Ⅳ.Ⅴ層	1					2	1		1			5	17
	Ⅲ層	1		2	1	1		1	1	1	3	1	12	
Ⅱ層				1		1	2			1	1	2	8	
その他						1							1	
計		2	1	3	1	3	4	2	1	3	4	3	27	
		10					7			7				

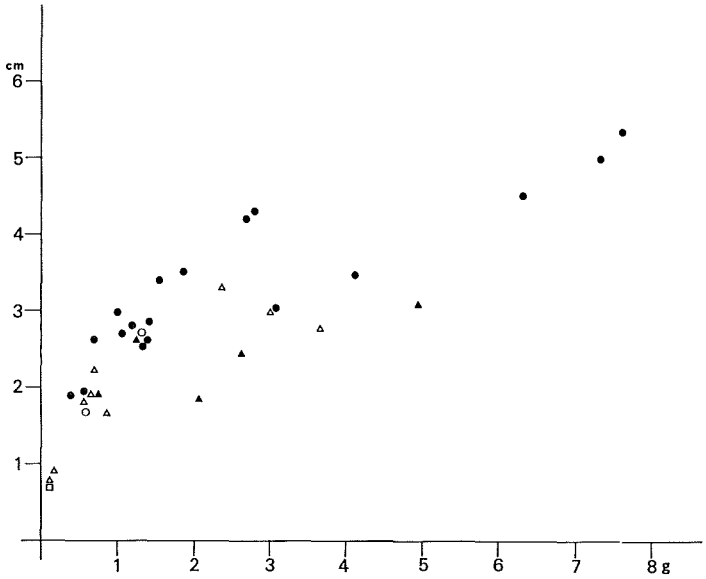


Fig. 29　ナイフ形石器計測図（1）（長・重量比）

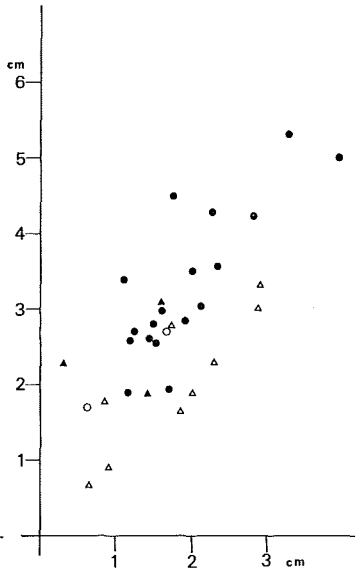


Fig. 30　ナイフ形石器計測図（2）
（長・刃部長比）

ナイフ形石器 ― ● Ⅰ類　○ Ⅱ類　▲ Ⅲ類　△ Ⅳ類　□ Ⅴ類
台形・台形様石器 ― ● Ⅰ類　★ Ⅱ類　■ Ⅲ類　▲ Ⅳ類
▬ Ⅴ類　⊛ Ⅵ類　╳ その他
尖頭器類 ― ● Ⅰ類　▲ Ⅱ類　■ Ⅲ類　★ Ⅳ類
細石刃 ― ● 完形　□ 中間部　▲ 頭部　△ 先端部

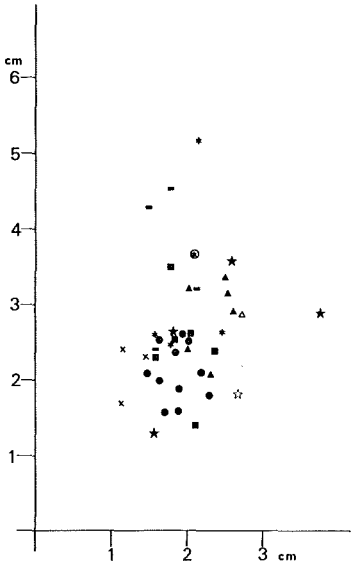


Fig. 31 台形・台形様石器計測図（1）
（長・刃部長比）

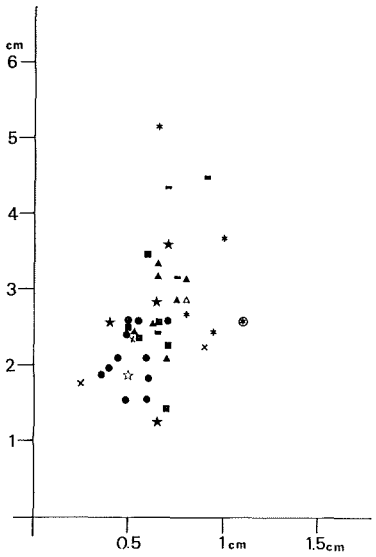


Fig. 32 台形・台形様石器計測図（2）
（長・厚比）

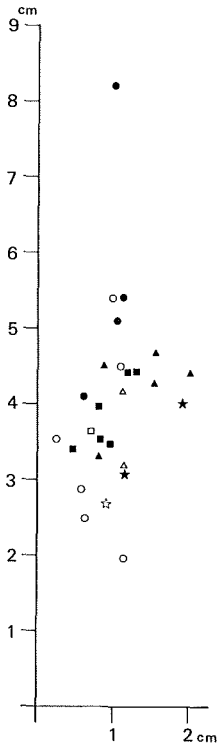


Fig. 33 尖頭器類計測図（1）
（長・厚比）

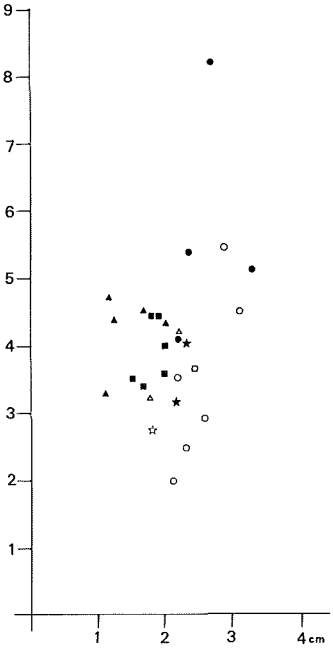


Fig. 35　尖頭器類計測図（2）
（長・幅比）

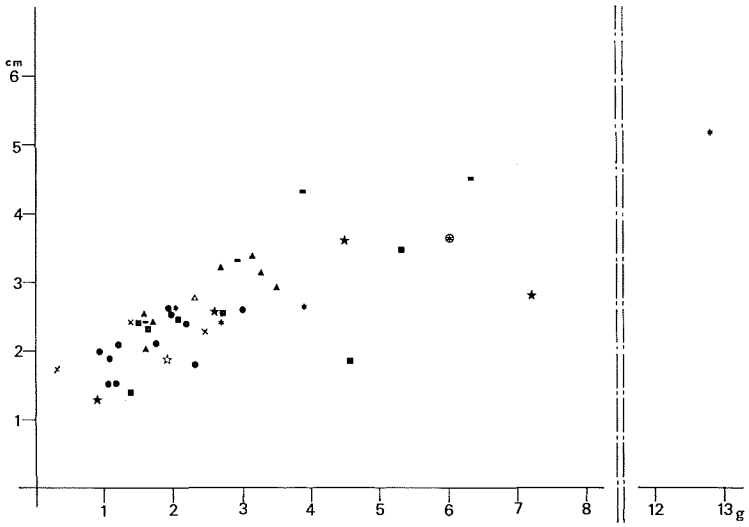


Fig. 34　台形・台形様石器計測図（3）
（長・重量比）

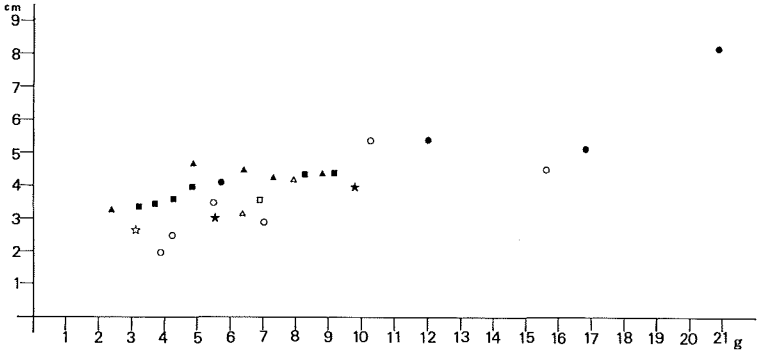


Fig. 36　尖頭器類計測図（3）
（長・重量比）

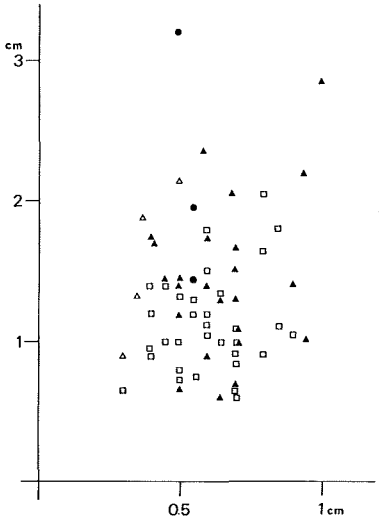


Fig. 37　細石刃計測図（1）
（長・幅比）

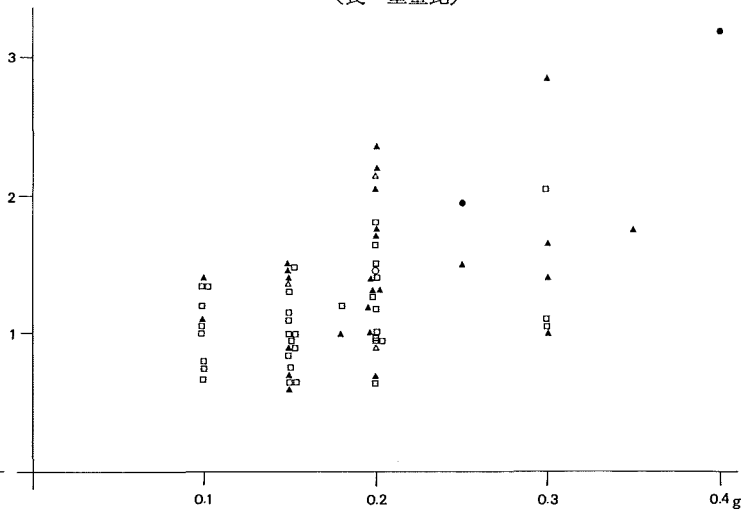


Fig. 38　細石刃計測図（2）
（長・重量比）

Tab. 7　先土器時代の石器計測表

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	形態分類	石材	計測値 (cm・g)				
						全長	最大幅	厚さ	刃部長	重量
12－1		表土P-1	ナイフ形石器	Ⅰ－1	黒曜石A	2.6	1.05	0.7	1.45	1.350
2		〃	〃	Ⅰ－1	〃 B	(3.3)	1.4	0.65	(2.9)	2.350
3	F－19	ドーナツ	〃	Ⅱ－2	〃 A	3.5	1.6	0.8	2.0	4.120
4	C－19	〃	〃	Ⅱ－1	〃 A	(1.8)	1.2	0.3	(0.85)	0.580
5	F－19	〃	台形石器	Ⅰ－1	〃 A	1.55	1.9	0.5	1.85	1.080
6	L－15	撹乱	台形様石器		〃 A	2.3	1.55	0.9	1.45	2.450
7	B－20	ドーナツ	〃	Ⅳ－1	〃 A	2.9	2.4	0.75	2.6	3.490
8	J－16	撹乱	〃	Ⅴ－2	〃 B	4.35	2.0	0.7	1.5	3.900
9		表採	剥片尖頭器		〃 A	4.5	3.1	1.2		15.6
10	D－10	ドーナツ	細石刃		〃 A	1.0	0.95	0.3		0.220
11	F－12	〃	〃		〃 A	1.45	0.55	0.15		0.180
12	I－15	撹乱	〃		〃 A	1.0	0.65	0.2		0.150
13	L－12	〃	〃		〃 A	0.9	0.6	0.15		0.080
14	P－18	〃	〃		〃 A	1.15	0.6	0.15		0.120
15	N－15	〃	細石核		〃 A	3.4	2.2	2.1		14.400
13－16	Q－21	Ⅱ	ナイフ形石器	Ⅲ	〃 B	5.0	2.3	0.75	3.95	7.300
17	F－18	〃	〃	Ⅰ－1	〃 B	1.95	1.1	0.4	1.7	0.570
18	Q－20	〃	〃	Ⅰ－1	〃 A	(0.7)	0.9	0.4	(0.75)	0.100
19	J－15	〃	〃	Ⅳ	〃 B	1.9	1.4	0.4	(1.4)	0.750
20	C－13	〃	〃	Ⅰ－1	〃 A	(0.7)	(1.35)	(0.45)		(0.100)
21	J－16	〃	〃	Ⅳ	〃 B	(2.6)	1.65	0.55	(0.3)	1.280
22	D－12	〃	〃	Ⅱ－1	〃 A	3.05	1.9	0.75	2.1	3.050
23	M－14	〃	〃	Ⅱ－2	〃 A	(1.85)	1.8	0.9	先端部欠損	2.090
24	K－13	〃	〃	Ⅱ－2	〃 A	4.5	1.8	1.1	1.75	6.300
25	F－16	〃	〃	Ⅴ	〃 A	2.7	1.0	0.6	1.65	1.300
26	E－11	〃	〃	Ⅴ	安山岩	(5.35)	2.0	0.8	(3.25)	7.620
27	G－10	〃	〃	Ⅲ	黒曜石A	(3.1)	2.4	0.8	(1.6)	4.950
14－28	O－17	〃	台形石器	Ⅰ－1	〃 A	2.0	1.75	0.35	(1.65)	0.950
29	D－12	Ⅱb	〃	Ⅰ－2	〃 B	2.6	2.1	0.7	1.95	2.400
30	B－8	Ⅱ	〃		〃 A	1.75	1.2	0.25	1.15	0.320
31	E－17	〃	〃	Ⅰ－1	安山岩	2.1	1.6	0.45	1.5	1.190
32	F－11	〃	〃	Ⅰ－2	黒曜石A	2.55	1.7	0.5	1.6	1.960
33	H－14	〃	台形様石器	Ⅰ－2	〃 A	2.6	2.0	0.55	2.0	3.020
34	O－17	〃	〃	Ⅲ	〃 B	2.6	2.9	0.65	2.0	2.690
35	L－14	〃	〃	Ⅳ－3	〃 A	2.85	2.65	0.8	2.7	2.300
36	J－13	〃	〃	Ⅱ－2	〃 A	1.3	1.55	0.65	1.55	0.870
37	Q－22	〃	〃	Ⅳ－1	〃 C	3.2	1.9	0.8	2.05	2.690
38	B－8	〃	〃	Ⅳ－1	〃 A	3.15	2.6	0.65	2.5	3.260

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	形態分類	石材	計測値（cm・g）				
						全長	最大幅	厚さ	刃部長	重量
14−39	N−16	II	台形様石器	IV − 2	安山岩	2.45	2.05	0.5	2.0	1.710
40	C−10	〃	〃	V − 1	黒曜石A	3.25	2.0	0.75	2.1	2.890
41	L−15	〃	〃	III − 1	〃 A	2.3	1.2	0.7	1.6	1.630
42	K−12	〃	剝片尖頭器	I − 1	〃 A	2.0	2.1	1.15		3.950
43	B−8	〃	〃	I − 3	〃 A	3.5	2.2	0.45		5.510
15−44	E−10	〃	三稜尖頭器	II − 1	〃 A	4.3	2.0	1.5		7.310
45	J−14	〃	尖頭器	IV	〃 B	4.0	2.35	1.8		9.780
46	E−16	〃	三稜尖頭器	II − 1	〃 A	3.3	1.1	0.8		2.390
47	E−13	〃	尖頭状石器	III − 1	〃 B	4.0	2.0	0.8		4.90
48	E−13	〃	〃	III − 2	〃 A	3.4	1.7	0.45		3.210
49	O−17	〃	尖頭器	IV	〃 B	3.1	2.2	1.15		5.510
50	N−14	〃	細石刃		〃 A	1.95	0.55	0.25		0.290
51	H−14	〃	〃		〃 A	1.45	0.55	0.2		0.120
52	I−12	〃	〃		〃 A	1.35	0.35	0.15		0.090
53	I−14	〃	〃		〃 A	1.2	0.55	0.18		0.100
54	O−19	〃	〃		〃 A	1.75	0.6	0.2		0.130
55	O−18	〃	〃		〃 B	1.4	0.5	0.1		0.100
56	Q−22	〃	〃		〃 A	1.1	0.7	0.1		0.100
57	C−7	〃	〃		〃 A	1.65	0.7	0.3		0.310
58	B−8	〃	〃		〃 B	1.4	0.6	0.3		0.200
59	I−12	〃	〃		〃 B	1.0	0.7	0.2		0.190
60	I−15	〃	〃		〃 B	0.7	0.7	0.2		0.110
61	D−21	〃	〃		〃 A	1.65	0.8	0.2		0.280
62	C−10	〃	〃		〃 B	1.8	0.85	0.2		0.300
63	D−9	〃	〃		〃 B	1.1	0.85	0.3		0.300
64	E−17	〃	〃		〃 A	0.85	0.7	0.15		0.110
65	O−17	〃	〃		〃 A	0.65	0.7	0.15		0.080
66	F−18	〃	〃		〃 A	0.75	0.5	0.1		0.030
67	F−13	〃	〃		〃 A	0.95	0.4	0.2		0.080
68	F−18	〃	〃		〃 B	1.35	0.5	0.1		0.040
69	C−8	〃	〃		〃 A	1.4	0.45	0.2		0.100
70	Q−20	〃	〃		〃 B	1.4	0.4	0.15		0.090
71	Q−22	〃	〃		〃 A	1.05	0.6	0.1		0.090
72	L−13	〃	〃		〃 A	0.65	0.3	0.1		0.050
16−73	F−14	III	ナイフ形石器	I − 1	〃 A	2.6	0.9	0.4	1.2	0.700
74	E−20	IV	〃	I − 1	〃 A	3.0	1.1	0.35	1.6	1.000
75	K−13	III	〃	I − 1	〃 B	(1.9)	0.9	0.35	1.15	0.400
76	F−14	IV	〃	I − 1	〃 A	(1.7)	0.9	0.4	(0.6)	0.600

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	形態分類	石材	計測値（cm・g）				
						全長	最大幅	厚さ	刃部長	重量
16−77	L−13	Ⅲ	ナイフ形石器	Ⅰ − 1	黒曜石A	(0.9)	0.65	0.35	(0.9)	0.140
78	K−15	〃	〃	Ⅰ − 1	〃 B	(1.9)	1.15	0.5	(2.0)	0.680
79	E−15	〃	〃	Ⅰ − 1	〃 A	(3.0)	1.8	0.7	(2.8)	3.000
80	J−16	〃	〃	Ⅱ − 1	〃 B	2.7	1.5	0.45	1.25	1.090
81	B−21	〃	〃	Ⅱ − 1	〃 A	2.8	1.5	0.4	1.5	1.190
82	E−13	Ⅱ	〃 ┐接	Ⅳ	〃 A					2.000
〃	〃	Ⅲ	〃 ↵合	Ⅳ	〃 A	4.3	2.0	0.85	2.25	2.800
83	E−13	Ⅳ	〃	Ⅱ − 2	〃 B	2.75	1.7	0.9	1.7	3.650
84	K−12	Ⅲ	〃	Ⅱ − 2	〃 B	2.55	1.2	0.5	1.5	1.330
85	E−14	Ⅴ	〃	Ⅲ	〃 A	(2.45)	2.0	0.55	先端部欠損	2.600
86	D−18	Ⅲ	台形石器	Ⅰ − 1	〃 A	1.55	1.75	0.6	1.7	1.150
87	H−14	Ⅳ	〃	Ⅰ − 1	〃 B	2.4	1.8	0.5	1.85	2.200
88	E−18	Ⅲ	〃	Ⅰ − 1	〃 B	1.8	2.65	0.6	2.3	2.300
17−90	B−20	〃	〃	Ⅵ − 1	〃 A	2.6	1.5	0.8	1.6	2.050
91	E−13	Ⅳ	〃	Ⅳ − 1	〃 B	2.45	1.8	0.95	1.8	2.710
92	N−15	Ⅲ	台形様石器	Ⅲ	〃 A	1.4	2.25	0.7	2.15	1.410
93	G−13	Ⅳ	〃	Ⅳ − 3	〃 A	3.35	2.35	0.65	2.5	3.150
94	D−18	Ⅲ	〃	Ⅳ − 1	〃 B	2.6	2.4	1.1	2.45	3.910
95	B−20	〃	〃	Ⅴ − 1	〃 A	2.45	1.6	0.65	1.55	1.610
96	E−13	Ⅳ	〃	Ⅵ − 2	〃 A	3.65	2.4	1.0	2.1	6.000
97	M−14	Ⅲ	〃	Ⅵ − 2	安山岩	5.2	3.0	0.65	2.15	12.810
98	E−13	〃	〃	Ⅴ − 1	黒曜石B	4.5	1.9	0.9	1.8	6.290
99	E−17	〃	〃	Ⅱ − 1	〃 A	(2.6)	1.8	0.4	1.6	2.600
100	K−12	〃	〃		〃 A	2.4	1.2	0.55	1.15	1.490
18-101	K−12	〃	剥片尖頭器	Ⅰ − 3	〃 A	4.1	2.2	0.7		5.800
102	F−14	Ⅴ	〃	Ⅰ − 1	安山岩	5.1	3.3	1.1		16.900
103	F−15	Ⅲ	〃	Ⅰ − 1	〃	2.5	2.3	0.7		4.200
104	H−15	〃	〃	Ⅰ − 3	〃	5.4	2.35	1.2		12.000
105	D−14	〃	〃		黒曜石B	2.9	2.6	0.6		7.020
106	H−14	〃	〃	Ⅰ − 4	〃 B	5.4	2.85	1.0		10.300
107	D−16	Ⅴ	角錐状石器	Ⅱ − 3	〃 A	4.5	1.7	0.9		6.390
108	F−14	Ⅲ	〃	Ⅱ − 2	〃 A	4.4	1.25	2.0		8.740
19-109	E−13	Ⅲ	三稜尖頭器 ┐接	Ⅱ − 1	〃 A					4.920
〃	F−15	Ⅳ	〃 ↵合		〃 A	4.7	1.25	1.6		4.900
110	F−14	〃	〃	Ⅱ − 1	〃 A	3.2	1.8	1.15		6.380
111	D−14	Ⅴ	尖頭状石器	Ⅲ − 1	〃 A	4.4	1.8	1.2		9.170
112	D−14	Ⅲ	〃	Ⅲ − 2	〃 A	4.4	1.85	1.25		8.290
113	E−15	〃	〃	Ⅲ − 2	〃 A	3.65	2.4	0.7		6.990

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	形態分類	石材	計測値（cm・g）				
						全長	最大幅	厚さ	刃部長	重量
19-114	E−16	Ⅳ	尖頭状石器	Ⅲ − 1	黒曜石B	3.6	2.0	0.85		4.310
115	E−12	〃	〃	Ⅲ − 2	〃 A	3.5	1.5	0.95		3.710
116	B−17	Ⅲ	尖頭器	Ⅳ	〃 A	2.7	1.8	0.9		3.100
20-117	C−17	Ⅳ	掻器		〃 B	3.0	3.25	1.0		7.040
118	I−12	Ⅲ	〃		〃 B	2.0	1.2	0.5		1.120
119	E−12	Ⅲ	削器		安山岩	3.0	1.5	0.7		3.700
120	D−14	Ⅴ	〃		黒曜石A	3.6	4.0	0.85		11.390
121	D−12	Ⅴ	使用痕のある剥片		〃 A	4.65	2.9	0.45		9.600
122	E−11	Ⅴ	〃		〃 B	4.25	2.5	0.8		6.100
123	D−13	Ⅴ	〃		〃 A	2.8	3.1	1.0		5.600
124	J−15	Ⅲ	〃		〃 B	3.3	1.35	0.5		1.990
125	K−13	〃	〃		〃 B	5.4	2.8	1.0		10.210
126	D−12	Ⅴ	〃		〃 A	3.3	2.55	0.75		3.320
127	F−14	〃	〃		〃 A	3.6	1.95	0.65		4.410
21-128	K−12	Ⅲ	剥片 接合		〃 A					2.700
〃	K−12	Ⅳ			〃 A	3.65	3.9	1.05		6.480
129	E−13	Ⅳ	〃		〃 A	4.3	2.1	1.0		5.190
130	B−19	Ⅳ	〃 接合		〃 A					8.500
〃	B−19		〃		〃 A	4.2	2.15	1.8		2.700
131	D−16	Ⅳ	〃		〃 A	3.3	3.1	0.7		8.030
132	E−12	Ⅴ	〃		〃 B	1.55	2.7	0.5		1.600
133	K−12	Ⅳ	〃		〃 A	1.8	2.1	0.4		1.200
134	B−19	Ⅳ	〃		〃 A	2.1	2.75	0.75		3.710
135	E−14	Ⅴ	〃		〃 A	2.5	4.0	0.7		6.950
136	D−13	Ⅴ	〃		〃 A	3.05	1.6	0.6		2.020
137	E−14	Ⅴ	〃		〃 A	3.5	2.7	0.9		5.800
138	F−15	Ⅳ	〃		〃 A	3.0	2.0	0.5		2.400
139	E−13	〃	〃		〃 A	3.2	3.25	0.7		5.800
140	D−11	Ⅴ	〃		〃 A	3.4	2.5	1.05		6.900
22-141	D−21	(Ⅴ)	細石核		〃 B	3.1	1.9	2.15		10.490
142	I−15	Ⅲ	細石刃		〃 B	3.2	0.5	0.4		0.890
143	D−13	Ⅴ	〃		〃 B	2.85	1.0	0.3		0.820
144	E−19	〃	〃		〃 B	2.2	0.95	0.2		0.400
145	D−21	〃	〃		〃 B	2.35	0.6	0.2		0.200
146	D−16	Ⅲ	〃		〃 A	2.05	0.7	0.2		0.290
147	D−10	Ⅲ	〃		〃 A	1.5	0.7	0.25		0.210
148	B−20	〃	〃		〃 B	1.75	0.4	0.35		0.200
149	D−13	〃	〃		〃 A	1.7	0.4	0.2		0.090

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	形態分類	石材	計測値（cm・g）				
						全長	最大幅	厚さ	刃部長	重量
22-150	D−20	Ⅲ	細石刃		黒曜石A	1.2	0.5	0.2		0.110
151	B−19	〃	〃		〃 A	1.45	0.5	0.15		0.110
152	C−17	Ⅳ	〃		〃 A	1.3	0.65	0.2		0.140
153	E−13	Ⅲ	〃		〃 B	1.4	0.45	0.2		0.120
154	K−15	〃	〃		〃 B	1.0	0.7	0.18		0.100
155	B−21	〃	〃		〃 A	1.3	0.7	0.2		0.100
156	D−17	〃	〃		〃 B	0.7	0.5	0.15		0.070
157	E−16	〃	〃		〃 A	0.9	0.8	0.2		0.230
158	B−21	〃	〃		〃 A	1.1	0.7	0.15		0.110
159	E−18	〃	〃		〃 A	2.05	0.8	0.3		0.300
160	I−13	Ⅳ	〃		〃 A	1.0	0.7	0.1		0.100
161	C−19	Ⅲ	〃		〃 A	1.5	0.6	0.2		0.130
162	G−15	〃	〃		〃 A	1.2	0.6	0.1		0.120
163	C−21	〃	〃		〃 A	1.3	0.55	0.15		0.100
164	D−14	〃	〃		〃 A	1.35	0.65	0.1		0.100
165	K−12	〃	〃		〃 A	1.0	0.45	0.15		0.100
166	D−18	Ⅴ	〃		〃 A	1.2	0.4	0.2		0.100
167	B−18	Ⅲ	〃		〃 B	1.3	0.6	0.2		0.100
168	N−15	〃	〃		〃 A	0.9	0.7	0.15		0.100
169	D−21	Ⅳ	〃		〃 A	1.0	0.65	0.2		0.100
170	I−14	Ⅲ	〃		〃 A	0.8	0.5	0.1		0.050
171	E−21	〃	〃		〃 A	0.9	0.4	0.15		0.040
172	D−21	Ⅴ	〃		〃 A	0.65	0.7	0.2		0.090
173	C−18	〃	〃		〃 A	0.9	0.3	0.2		0.050
174	F−18	Ⅳ	〃		〃 B	2.15	0.5	0.2		0.140
175	H−14	Ⅲ	〃		〃 A	0.6	0.65	0.15		0.080
89	E−18	Ⅴ	台形石器	Ⅰ−1	〃 A	2.1	2.4	0.6	2.2	1.780
192	D−21	Ⅴ	三稜尖頭器	Ⅱ−1	〃 A	4.2	2.2	1.23		7.970
23-176	C−19	Ⅵ	ナイフ形石器	Ⅰ−2	〃 A	4.2	1.8	0.5	2.8	2.700
177	C−17	Ⅳ	〃	Ⅰ−2	〃 A	3.55	1.6	0.45	2.35	1.850
178	D−20	Ⅶ	〃	Ⅰ−2	〃 A	(1.65)	1.6	0.45	(1.85)	0.850
179	C−21	〃	〃	Ⅰ−2	〃 A	2.85	1.65	0.5	1.9	1.410
180	D−12	Ⅵ	〃	Ⅰ−1	〃 A	(2.3)	1.2	0.5	(2.3)	0.700
181	C−17	Ⅶ	〃	Ⅱ−2	〃 A	3.4	1.15	0.45	1.1	1.520
182	D−17	〃	台形石器	Ⅰ−1	〃 B	1.9	1.9	0.4	1.9	1.080
183	D−21	Ⅵ	〃	Ⅳ−2	〃 A	2.05	2.3	0.7	2.3	1.600
184	B−18	Ⅶ	台形様石器	Ⅳ−2	〃 A	2.55	1.7	0.65	1.8	1.600
185	C−21	Ⅵ	〃	Ⅲ	〃 A	2.4	2.55	0.55	2.35	1.500

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	形態分類	石材	計測値（cm・g）				
						全長	最大幅	厚さ	刃部長	重量
23-186	D－21	Ⅵ	台形様石器	Ⅱ－1	黒曜石A	1.85	2.7	0.5	2.65	1.890
187	C－18	Ⅶ	〃	Ⅲ	〃 B	3.5	2.4	0.6	1.8	5.300
188	C－21	〃	〃	Ⅱ－1	〃 B	3.6	2.5	0.7	2.55	4.500
189	B－18	〃	〃	Ⅲ	〃 A	2.5	2.4	0.5	1.8	2.010
190	D－13	Ⅵ	〃	Ⅱ－2	〃 A	2.85	3.8	0.65	3.75	7.220
24-191	D－19	Ⅶ	剥片尖頭器	Ⅰ－2	〃 C	8.2	2.7	1.0		20.950
193	D－16	Ⅵ	掻器		安山岩	5.0	5.3	1.5		37.810
194	D－13	〃	加工痕のある石器		黒曜石A	3.55	3.3	1.1		8.400
195	D－21	Ⅷ	使用痕のある剥片 ┐接		〃 A					3.050
〃	D－19	Ⅶ	〃 ↵合		〃 A	5.8	2.25	0.3		1.580
196	D－13	Ⅵ	〃		〃 A	3.6	2.65	0.85		5.290
197	D－16	〃	〃		〃 B	4.2	1.75	0.9		4.390
198	D－13	〃	〃 ┐接		〃 A					16.600
〃	E－13	Ⅱ	〃 ↵合		〃 A	5.0	5.25	1.2		8.020
25-199	C－21	Ⅵ	剥片		〃 A	4.2	2.65	0.8		5.790
200	E－20	Ⅷ	不定形剥片		〃 A	3.0	2.25	7.0		3.850
201	D－21	Ⅴ	剥片 ┐接		〃 A					1.850
〃	D－19	Ⅶ	〃 ↵合		〃 A	2.75	1.65	0.6		0.400
202	D－12	Ⅵ	〃		〃 B	3.2	1.65	0.7		3.180
203	D－20	Ⅶ	〃		〃 B	3.6	1.5	0.6		2.600
204	D－13	Ⅵ	〃		〃 A	1.75	2.9	0.5		2.090
205	D－11	〃	〃 ┐接		〃 A					5.520
〃	〃	〃	〃 ↵合		〃 A	3.75	4.25	1.6		0.600
206	E－13	〃	〃		安山岩	5.0	2.9	1.15		9.100
207	D－19	Ⅶ	〃		黒曜石A	4.3	3.1	1.4		18.970
208	D－42	Ⅵ	〃 ┐接		〃 A					0.650
〃	〃	〃	〃 ↵合		〃 A	2.4	1.6	0.3		0.170
209	C－11	Ⅵ	剥片		〃 A	1.85	0.8	0.4		0.720
210	E－20	Ⅸ	〃		〃 A	1.8	2.3	0.8		1.500
211	D－12	Ⅵ	〃		〃 A	2.35	3.2	0.6		3.620
212	D－20	〃	〃		〃 A	2.2	2.1	0.45		2.150
213	D－20	〃	細石刃		〃 B	1.4	0.9	0.15		0.190
214	D－19	Ⅶ	〃		〃 B	1.05	0.9	0.3		0.100
215	E－19	Ⅵ	〃		〃 A	1.0	0.5	0.15		0.050
216	C－17	〃	〃		〃 A	0.75	0.55	0.15		0.100
27-217	D－11	ドーナツ	石核 ┐接		〃 A					9.000
〃	〃	Ⅴ	〃		〃 A					2.980
〃	〃	Ⅵ	石核 合		〃 A					8.610

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	形態分類	石材	計測値（cm・g）				
						全長	最大幅	厚さ	刃部長	重量
27-217	D－11	Ⅵ	石核 接合		黒曜石A	2.5	6.3	2.35		0.110
218	D－13	〃	〃 接合		〃 A					11.150
〃	D－14	Ⅴ	〃 接合		〃 A	2.8	4.3	2.0		5.400
219	E－13	Ⅵ	〃		〃 A	2.2	4.3	2.0		12.760
220	B－19	Ⅶ	〃		〃 A	2.7	2.5	1.6		6.910
26-221	D－14	Ⅵ	〃		〃 A	4.1	2.8	2.0		17.800
28-222	C－21	Ⅶ	〃		〃 A	6.4	5.0	4.4		110.000

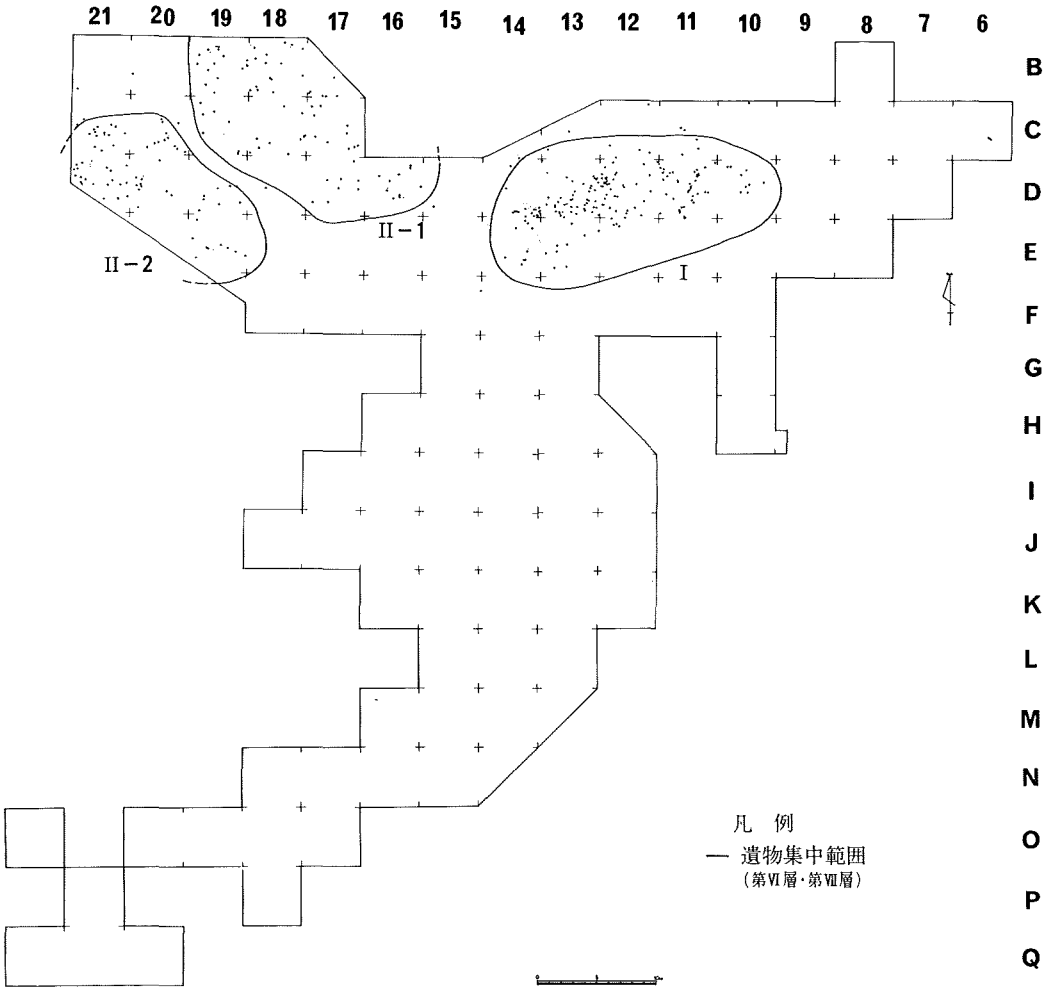


Fig. 39　下層出土遺物の集中範囲位置図

③ 遺物分布について

西輪久道遺跡の先土器時代の遺物遺存状況は基本層位第Ⅲ層～第Ⅶ層に遺物が出土する。遺跡では西輪久道上層・下層について遺物の集中する範囲内における石器組成について集中範囲別に述べる。

西輪久道下層の石器群
(Fig. 39)

西輪久道下層は遺物集中範囲Ⅰ，Ⅱ－1・2群に分れる。

出土石器は上層に比べて数量的にも少ないが，遺物遺存状況は非常に特徴をもっている。

下層Ⅰ群　この遺物遺存状況はC～E－10～14区に集中範囲を呈すものである。範囲は東西25m×南北7～12m程の長楕円状を呈す。

この中でもD－11区とD－12～14区を中心にして特に集中する傾向を見せるが，積極的に区分可能な状況でなく，ここでは一群として捉えることにする。

出土石器はナイフ形石器1点，台形様石器1点，使用痕のある剥片7点，加工痕のある石器1点，石核4点，石核再生剥片1点，剥片173点，砕片118点の総数306点である。

ナイフ形石器はⅠ－1類で，先端部を欠損している。台形様石器はⅡ－2類，石核は横長剥片および縦長剥片剥離を目的としたものが出土。また，使用痕のある剥片・加工痕のある石器が8点と他の器種に比べて多い。

この石器群の中で接合資料がある。使用痕のある剥片（Ⅵ層＋Ⅱ層），石核（Ⅵ層＋Ⅴ層），石核（Ⅵ層＋Ⅵ層＋Ⅴ層＋ドーナツ状土壙），剥片（Ⅵ層＋Ⅵ層），剥片（Ⅵ層＋Ⅵ層）の5例ある。その中でD－11区とD－12～14区の範囲内にて接合例がみられ，D－11区には石核と剥片砕片のみで，他の器種の出土例はなく，D－12～14区に集中している。また，D－10・11区に礫群1が帯状に検出され，D－13・14区に礫群2が検出され，いずれの礫も熱を受けた痕跡はないようだ。ただ礫群1，2共に遺物が集中する地点に存ることは，何らかの意味で，場の一端として利用されたのである。

以上の下層－Ⅰ群の遺物集中範囲は，石器群の組成が非常に乏しい傾向を示す。

下層Ⅱ群　この遺物遺存状況はB～E－16～21区に集中範囲を呈すものである。範囲は東西30m×南北15m程の帯状で，地形的要因で東西および南西へ

の拡がりは余り期待出来ない。

このⅡ群はⅠ群程の遺物集中度がみられないが，それに比べて主要器種の遺存状況はよい。

出土石器はナイフ形石器５点，台形・台形様石器８点，剥片尖頭器１点，掻器２点，使用痕のある剥片６点，石核８点，剥片109点，砕片69点の総数206点である。（細石刃が４点出土しているが混入であろう。）

この組成の中で，ナイフ形石器（Ⅰ－２類４点とⅡ類１点）に台形・台形様石器（Ⅰ－１類１点，Ⅱ－１類２点，Ⅲ類３点，Ⅳ－２類２点）と剥片尖頭器１点が共伴する石器群である。

ナイフ形石器を主体とする石器群の中で，各種の台形・台形様石器が量的に卓越し，それに剥片尖頭器が共伴することは下層の石器群の特徴を呈すものである。

この遺物集中範囲内で遺物の遺存状況がＢ～Ｄ－16～19区とＣ～Ｅ－19～21区に集中する傾向がみられる。この傾向は遺物の集中度からすると明確でないが，石器の主要器種の遺存状況からみると２分して集中する傾向が強いので，Ⅱ群の中でＢ～Ｄ－16～19区をⅡ－１群，Ｃ～Ｅ－19～21区をⅡ－２群として区分する。これらの主要器種の組成についてみてみよう。

Ⅱ－１群　この遺物集中範囲ではナイフ形石器３点（Ⅰ－２類２点，Ⅱ類１点）と台形・台形様石器４点（Ⅰ－１類１点，Ⅲ類２点，Ⅳ－２類１点），掻器２点，使用痕のある剥片３点，石核４点，剥片・砕片で，特にⅠ－２類，Ⅱ類のナイフ形石器にⅠ－１類の台形石器，Ⅲ類「原の辻型」・Ⅳ－２類の台形様石器が共伴して出土する。

Ⅱ－２群　この遺物集中範囲ではナイフ形石器２点（Ⅰ－２類），台形様石器（Ⅱ－１類２点，Ⅲ類１点，Ⅳ－２類１点）に剥片尖頭器１点，使用痕のある剥片３点，石核４点，剥片・砕片が出土している。

ここではⅠ－２類のナイフ形石器にⅡ－１類「日の岳型」類似資料・「原の辻型」・Ⅳ－２類の台形石器と剥片尖頭器が伴って出土している。また，接合例があり，使用痕のある剥片（第Ⅶ層＋Ⅶ層）の接合距離は13.50ｍ，剥片（第Ⅶ層＋Ⅴ層）は11ｍを計る。

Ⅱ群の中でも１・２は集中範囲での石器組成に相違がみられる。

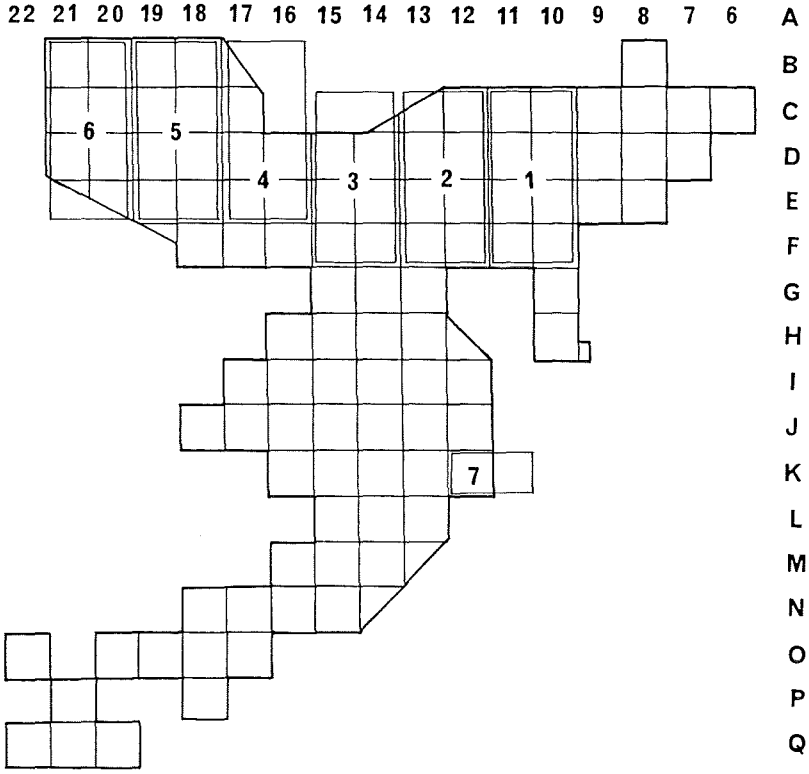
以上のように，西輪久道下層の石器群はⅠ・Ⅱ－１，２群に分けることが可能で，それぞれの特徴はナイフ形石器を主体とする石器群の中で

Ⅰ群は，ナイフ形石器＋台形様石器

Ⅱ－1群は，ナイフ形石器＋台形石器＋台形様石器（「原の辻型」）

Ⅱ－2群は，ナイフ形石器＋台形様石器（「原の辻型」「日の岳型」）
＋剥片尖頭器

以上のような主要器種での組合せは，それぞれの石器群で若干の時間的差が見られることが考えられる。



凡　例

ナイフ形石器	☆	剥片尖頭器	◐	細石核	⊠
台形様石器	◬	尖頭状石器	★	剥　片	●
スクレイパー	◆	尖頭器	＊	石核再生剥片	◒
加工痕のある剥片	◑	石　核	▲	砕　片	•
使用痕のある剥片	◎	細石刃	▬	原　石	◫

Fig. 40　下 層 遺 物 出 土 区

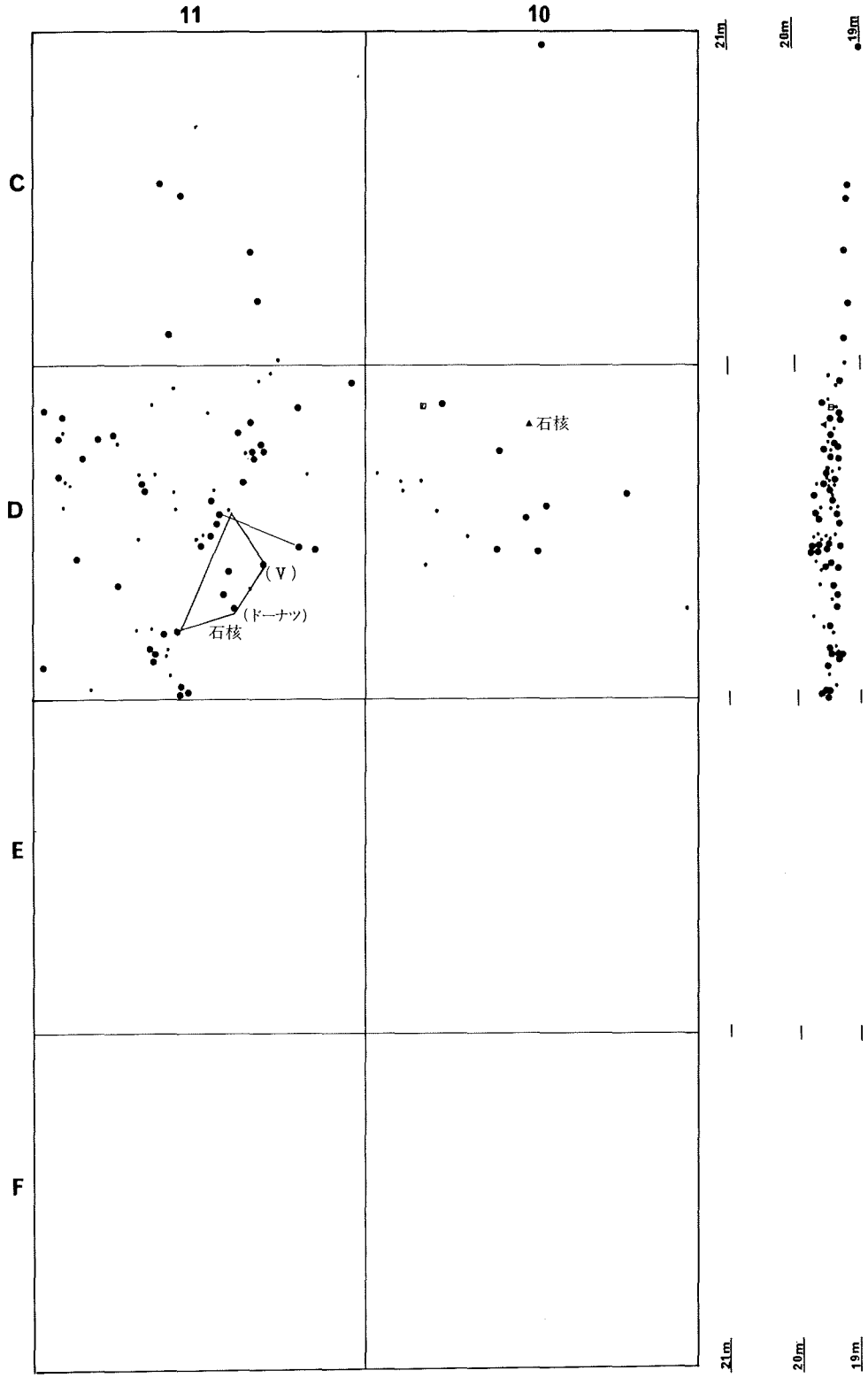


Fig. 41　C～F－10・11区・下層遺物分布図（1）

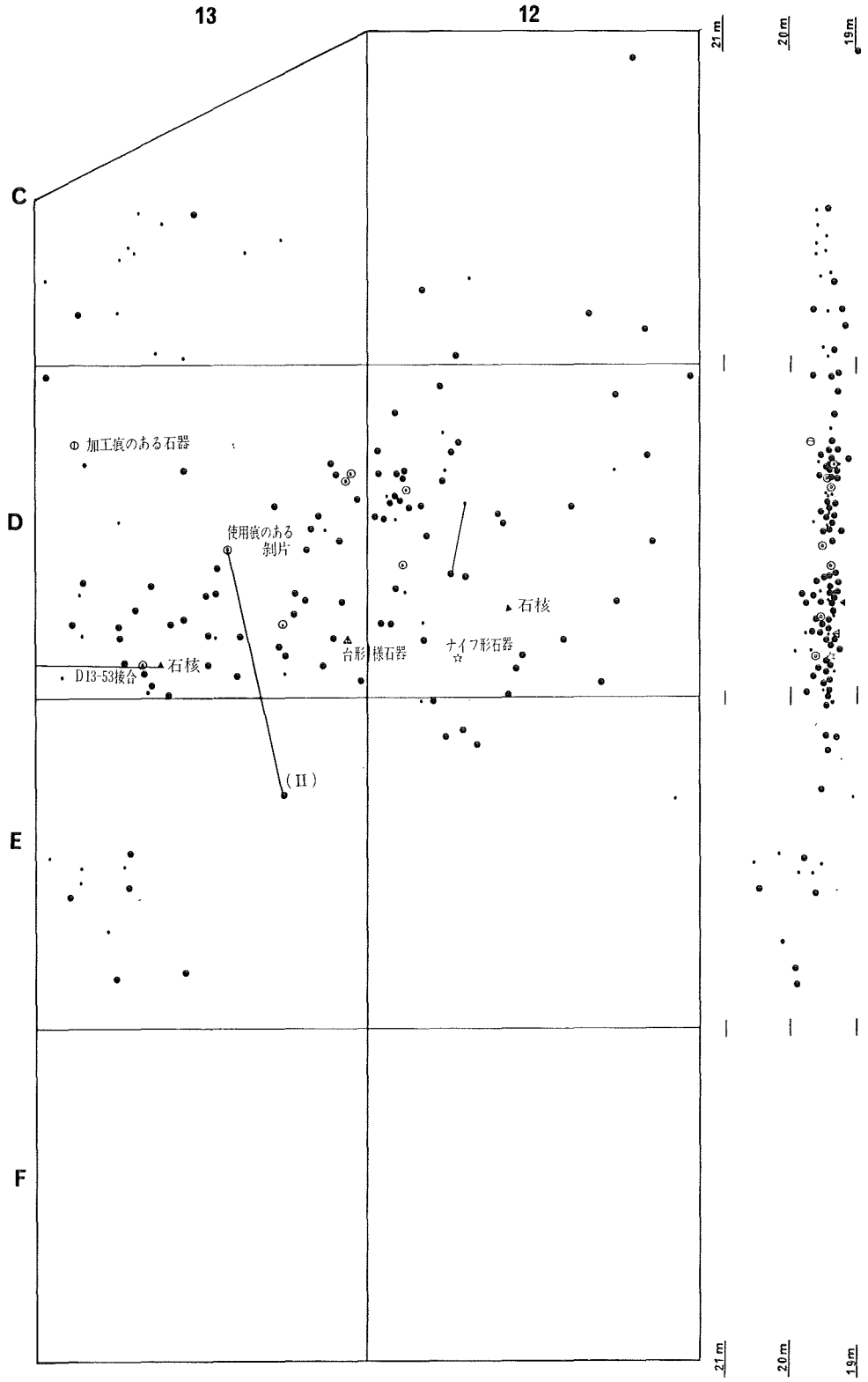


Fig. 42　C～F—12・13区・下層遺物分布図（2）

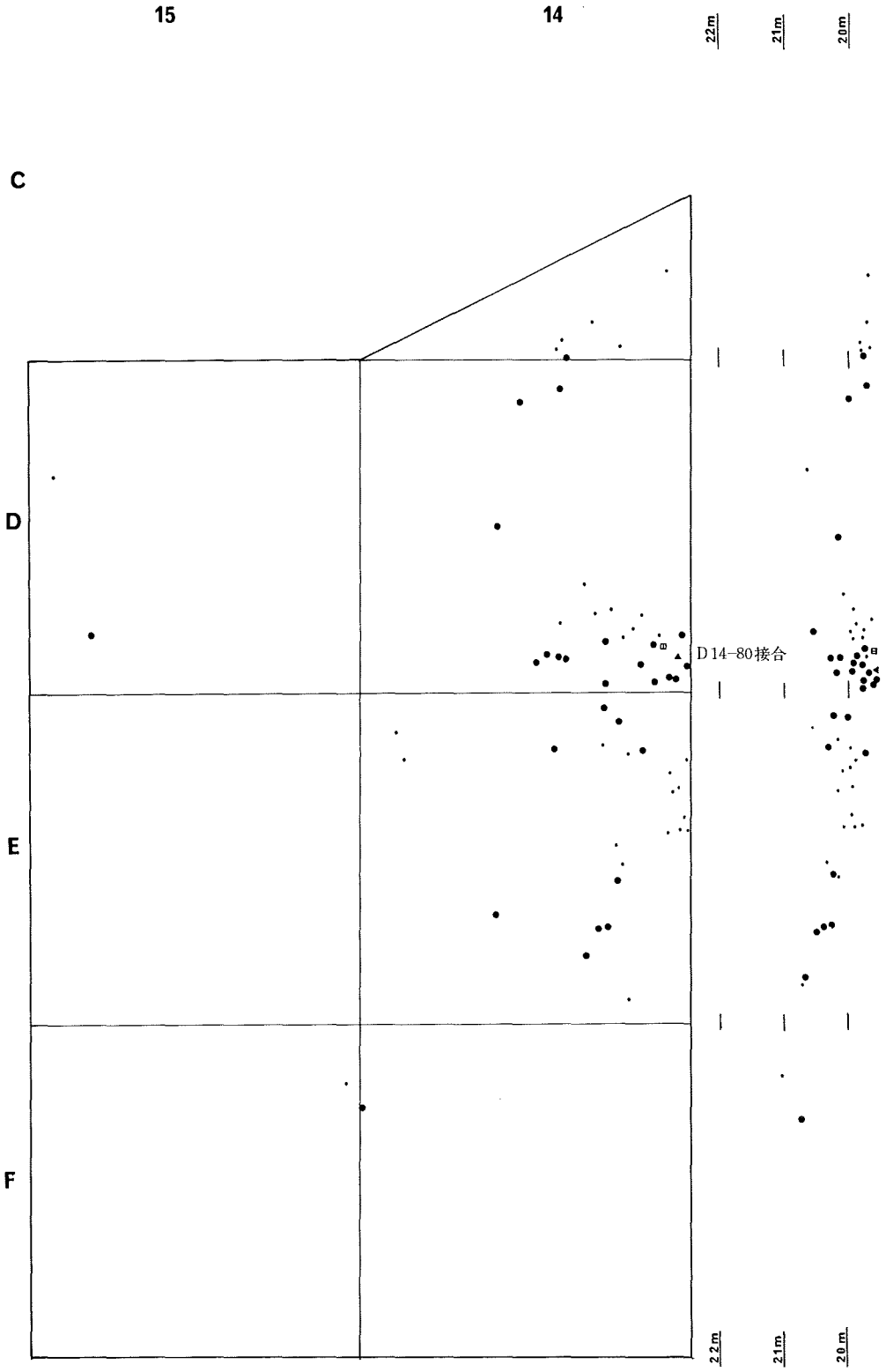


Fig. 43　C～F−14・15区・下層遺物分布図（3）

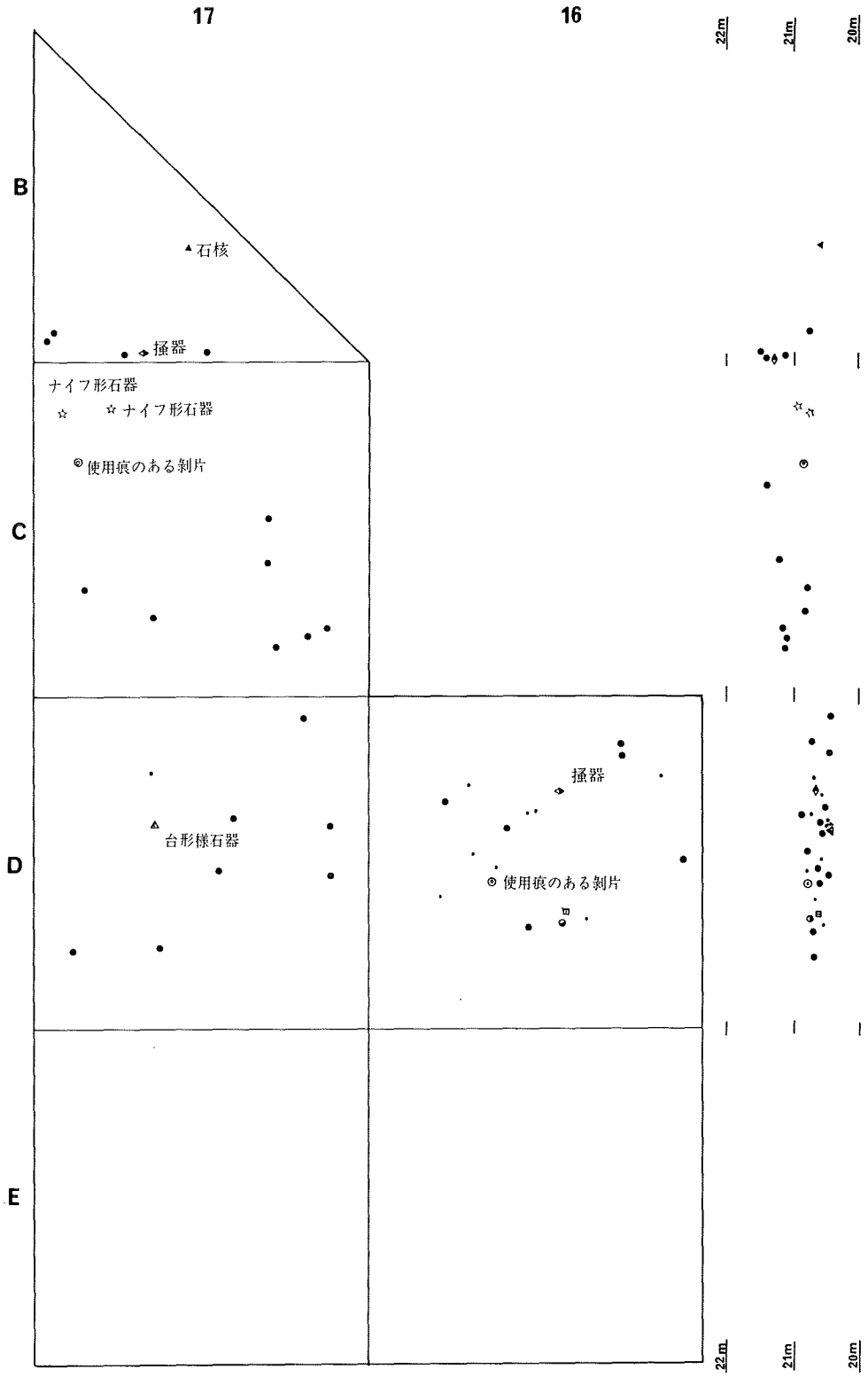


Fig. 44　B～E—16・17区・下層遺物分布図（4）

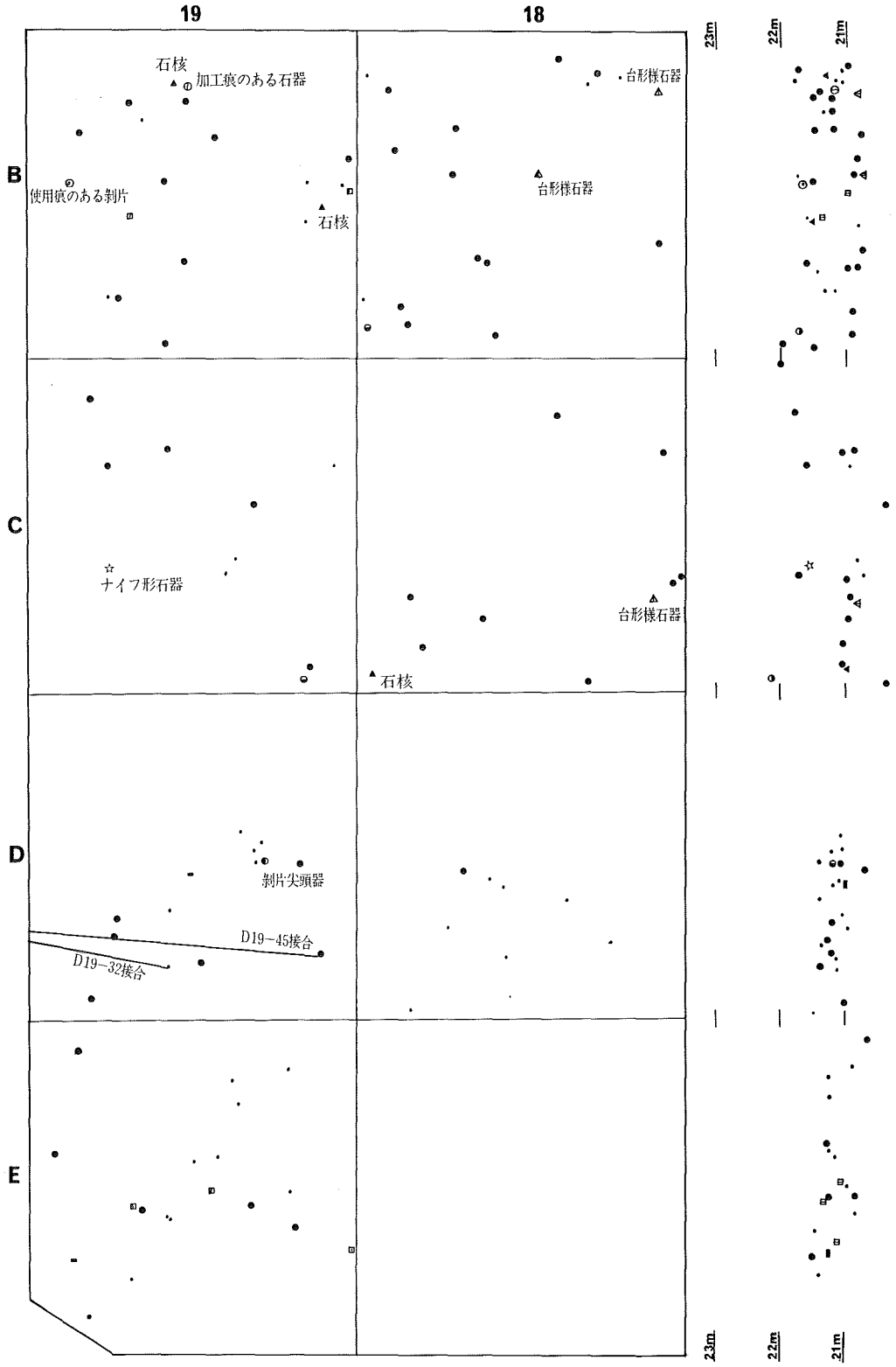


Fig. 45　B～E—18・19区・下層遺物分布図（5）

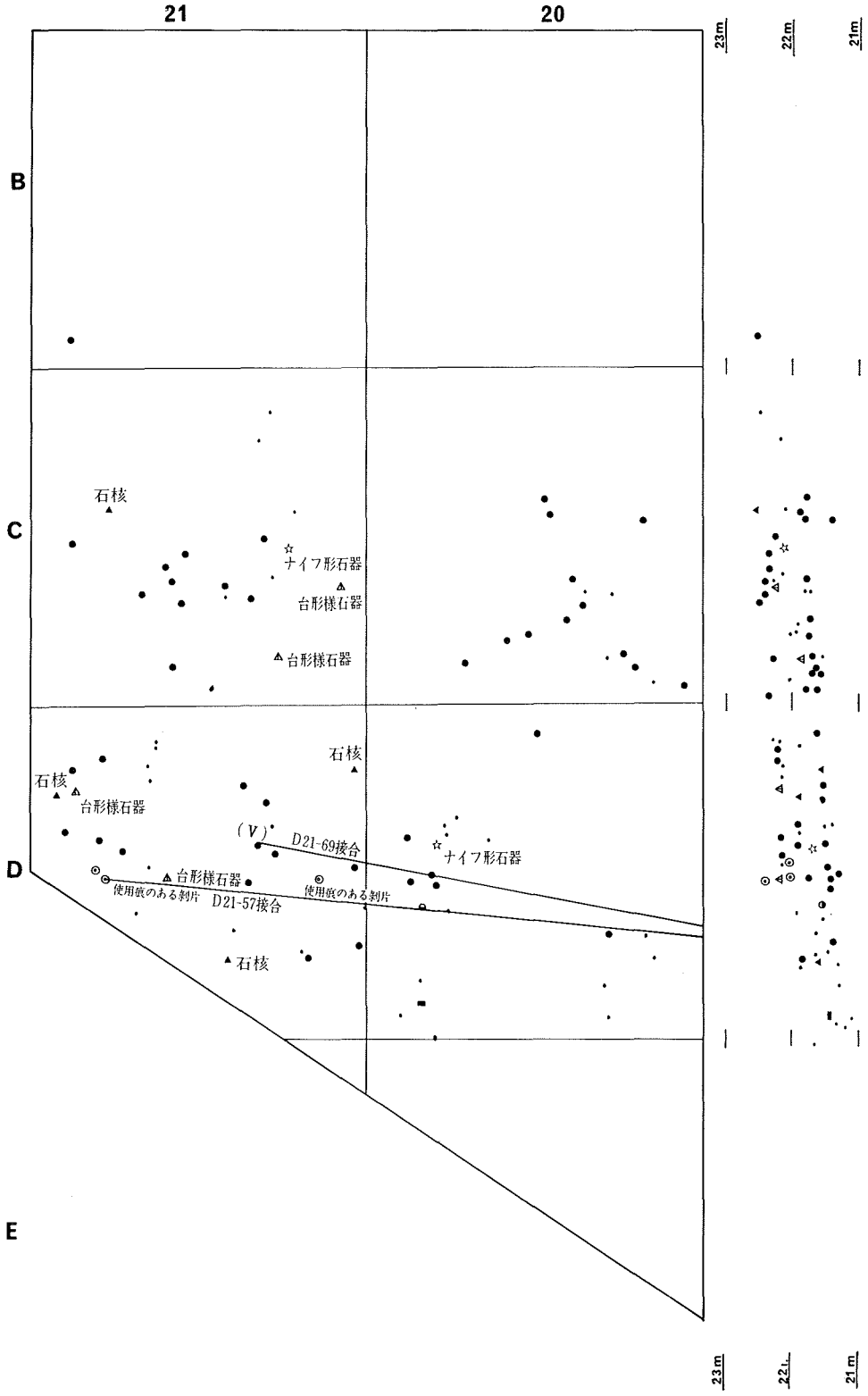


Fig. 46　B～E—20・21区・下層遺物分布図（6）

西輪久道上層の石器群
(Fig. 47)

西輪久道上層は遺物集中範囲Ⅲ～Ⅳ，Ⅴ－１・２，Ⅵ群に分れる。

出土石器は下層に比べて数量的に多い。遺物の遺存状況は第Ⅲ層出土石器が主体を呈するものと，第Ⅳ・Ⅴ層が主体を呈するものなど石器群の中でも，石器組成が相違するものもある。(西輪久道下層の石器群をⅠ・Ⅱ群，上層の石器群をⅢ～Ⅵ群とする。)

上層Ⅲ群

この遺物遺存状況はD～F－11～15区に集中範囲を呈するもので，範囲は，東西24m×南北15m程の長楕円形を呈す。

この中でもE－13・14区，F－14区に密に集中する傾向が見られる。また，Ⅲ群で接合資料がナイフ形石器（Ⅲ層＋Ⅱ層）と三稜尖頭器（Ⅳ層＋Ⅲ層）の２例ある。ナイフ形石器は１m，三稜尖頭器は68mの接合

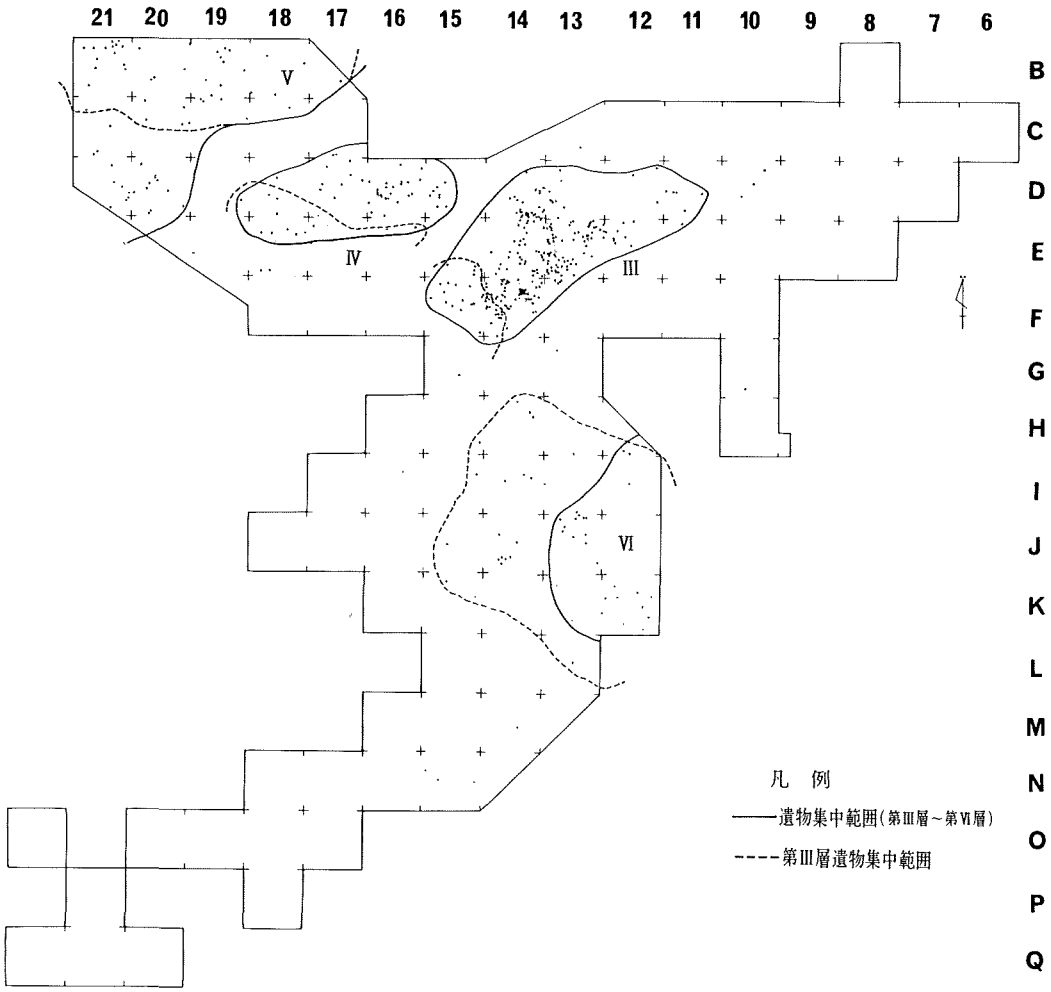


Fig. 47 上層出土遺物の集中範囲位置図

距離をもつ。

出土石器はナイフ形石器6点，台形様石器3点，剥片尖頭器3点，三稜尖頭器3点，尖頭状石器4点，削器2点，使用痕のある剥片5点，石核3点，剥片207点，細石刃5点，砕片149点の総数390点である。

石器群の組成はナイフ形石器（Ⅰ—1類3点とⅡ—2類1点，Ⅳ類1点）と，台形様石器（Ⅴ—1類1点，Ⅵ—1・2類2点），それに，尖頭器類10点が共伴するもので，特に尖頭器類が他の主要石器類を上まわる。また，尖頭器類の中でも，剥片尖頭器（1類2点，不明1点），三稜尖頭器（Ⅰ類1点，Ⅱ類2点）に尖頭状石器（Ⅰ類1点，Ⅱ類3点）の各種で，上層に新たに三稜尖頭器と尖頭状石器が伴っている。

細石刃は4点の出土をみる。

このⅢ群の中で，E—13・14区，D—14区とF—14・15区の範囲に，第Ⅲ層出土の主要器種が，わりと固まって出土する部分がみられるので，この石器群の中で，第Ⅲ層とⅣ・Ⅴ層の主要器種について別々に取り上げることにする。

第Ⅳ・Ⅴ層の出土遺物はナイフ形石器3点（Ⅰ—1類，Ⅱ—1類，Ⅳ類），台形石器2点（Ⅵ—1・2類）と尖頭器類6点（剥片尖頭器1点，三稜尖頭器2点，尖頭状石器3点），削器1点，使用痕のある剥片5点，細石刃1点，石核3点等である。

Ⅲ層出土遺物はナイフ形石器3点（Ⅰ—1類2点，Ⅲ類2点），台形様石器1点（Ⅴ—1類），尖頭器類4点（剥片尖頭器2点，三稜尖頭器1点，尖頭状石器1点），削器1点，細石刃4点である。

石器組成の面では第Ⅳ・Ⅴ層も第Ⅲ層も，余り変化は見られないが，ナイフ形石器のⅢ類（一側縁加工）および，台形様石器のⅤ類が第Ⅲ層に出土し，細石刃は第Ⅲ層に集中して出土をみる。

Ⅳ群　この遺物遺存状況はD～E—15～18区に集中範囲を呈すもので，Ⅲ群程の集中度はない。範囲は東西16m×南北7m程の長楕円形状を呈す。

出土石器は台形様石器5点，尖頭器類2点，掻器1点，細石刃6点，剥片34点，砕片29点の総数77点を数える。

このⅣ群にはナイフ形石器の出土は無く，台形様石器（Ⅰ—1類3点，Ⅱ—2類1点，Ⅵ—1類1点）と角錐状石器・尖頭状石器が伴うもので，細石刃が出土している。

このⅣ群の中でも，第Ⅳ・Ⅴ層と第Ⅲ層での遺物の出土状況が違っている。第Ⅳ・Ⅴ層はD—15～17区に，第Ⅲ層はD・E—17・18区に片寄

って出土する傾向を示す。

第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物は台形石器１点（Ⅰ－１類），角錐状石器１点，掻器１点，細石刃２点，剥片等で，第Ⅲ層は台形・台形様石器４点（Ⅰ－１類２点，Ⅱ－１類１点，Ⅵ－１類１点，尖頭状石器１点に細石刃４点が出土。

このⅣ群では，角錐状石器が第Ⅴ層，尖頭状石器が第Ⅲ層より出土することと，細石刃が第Ⅲ層に出土する傾向がみられる。

Ⅴ群　この遺物遺存状況はＢ～Ｄ－17～21区に集中範囲を呈すもので，範囲は東西20ｍと南北15ｍ程である。遺物の集中傾向は粗であるが，第Ⅳ・Ⅴ層の遺物はＤ－20・21区に，第Ⅲ層はＢ・Ｃ－17～21区に片寄った出土状況を呈す傾向がある。

Ⅴ群出土石器はナイフ形石器３点，台形様石器２点，尖頭器類２点，細石核１点，細石刃14点，剥片41点，砕片53点の総数116点が出土する。

Ⅴ群の中で第Ⅳ・Ⅴ層にはナイフ形石器１点（Ⅰ－１類），三稜尖頭器１点，細石核１点，細石刃４点，剥片，砕片類で，第Ⅲ層にはナイフ形石器２点（Ⅰ－３類，Ⅲ－２類），台形様石器２点（Ⅴ－１類，Ⅵ－１類），尖頭器１点，細石刃10点が出土する。

第Ⅲ層～Ⅴ層までナイフ形石器，台形様石器と細石刃が出土するが，それぞれ，ナイフ形石器を主体とする石器群と細石器を主体とする石器群のもので，共伴関係はないものと考えられる。

また，第Ⅳ層に接合資料が剥片（第Ⅳ層＋Ⅳ層）の１例ある。

Ⅵ群　この遺物遺存状況はⅠ～Ｋ－12・13区に集中範囲を呈すもので，その範囲の周囲にもナイフ形石器・剥片尖頭器等が出土するが，まとまって出土をみる状況では無い。範囲は東西10ｍ×南北15ｍ程で，更に東側で分布範囲が延びることが予想される。

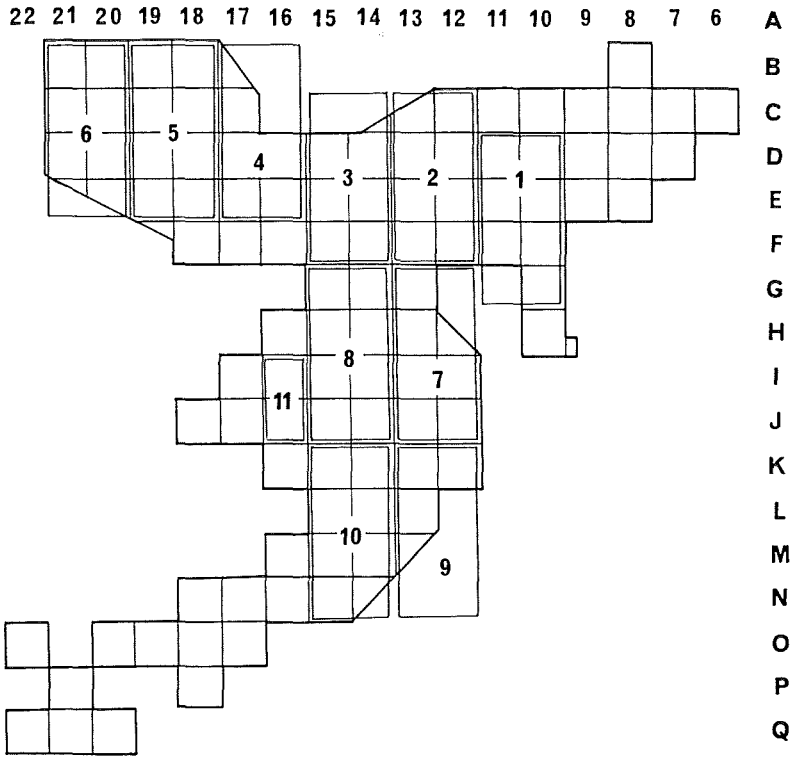
このⅥ群および周囲の出土遺物は第Ⅳ・Ⅴ層の剥片・砕片等を除いて，他の主要器種のほとんどが第Ⅲ層に出土する。

Ⅵ群出土石器はナイフ形石器１点，台形・台形様石器１点，剥片尖頭器１点，掻器１点，細石刃２点，剥片18点，砕片51点の総数75点である。その内，第Ⅳ層出土は剥片，砕片のみで，他は第Ⅲ層に出土する。

このⅥ群は第Ⅲ層の出土遺物を主体とする石器群である。

以上，西輪久道上層は遺物集中範囲がⅢ～Ⅵ群の４つの石器群に分かれる。これらの石器群はⅢ群を除いては遺物の出土点数が少なく，石器

組成が乏しい。また第Ⅲ層と第Ⅳ・Ⅴ層の遺物は，主要器種においても第Ⅲ層出土石器が多い傾向が窺われる。



凡　例

ナイフ形石器	☆	三稜尖頭器	⊖	剥　片	●
台形石器	⧈	尖頭状石器	★	石核再生剥片	◒
台形様石器	⧋	石　核	▲	砕　片	•
スクレイパー	◆	細石刃	■	スポール	⊗
使用痕のある剥片	◎	細石核	⧇	原　石	◫
剥片尖頭器	◐				

Fig. 48　上 層 遺 物 出 土 区

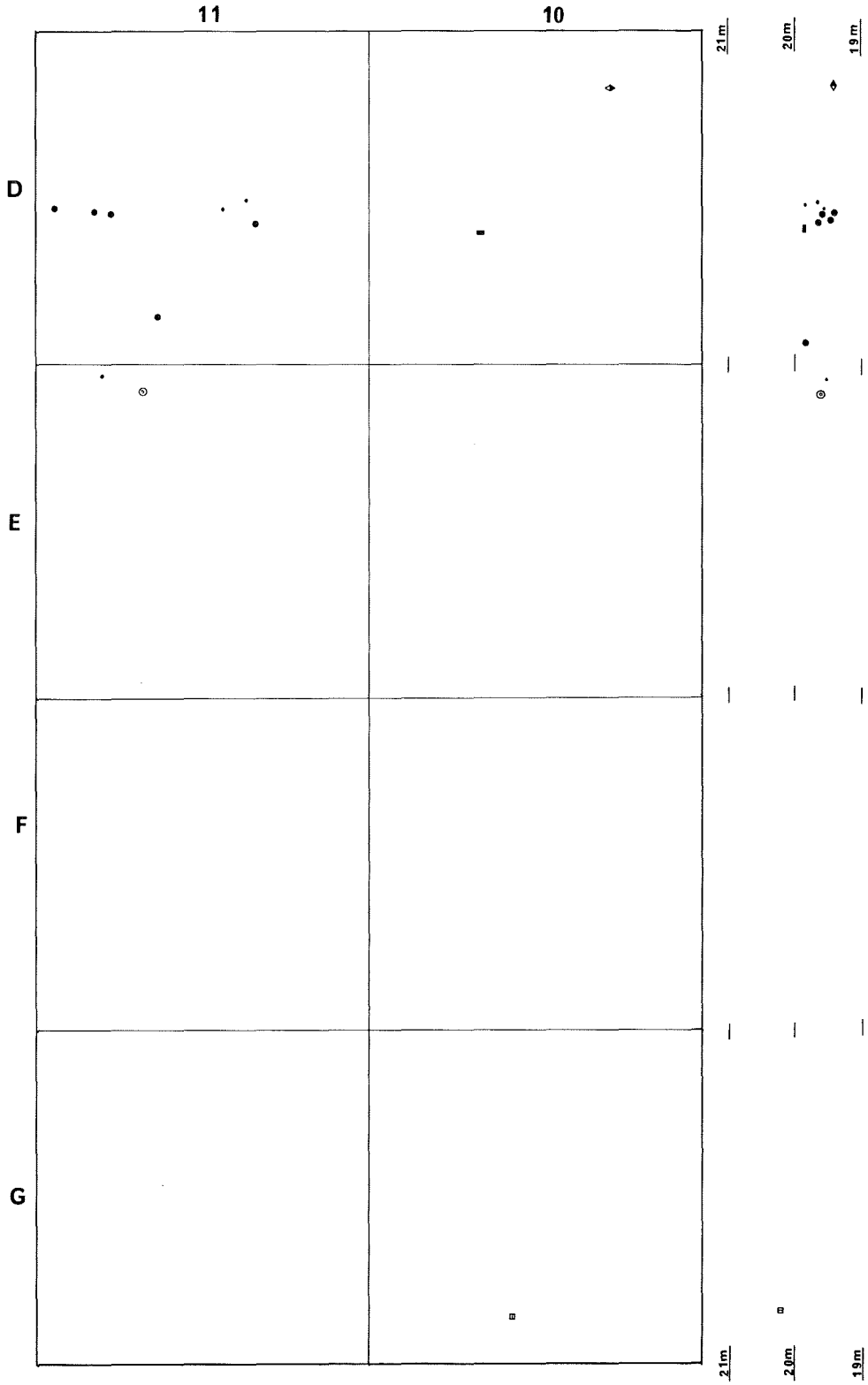


Fig. 49　D～G—10・11区・上層遺物分布図（1）

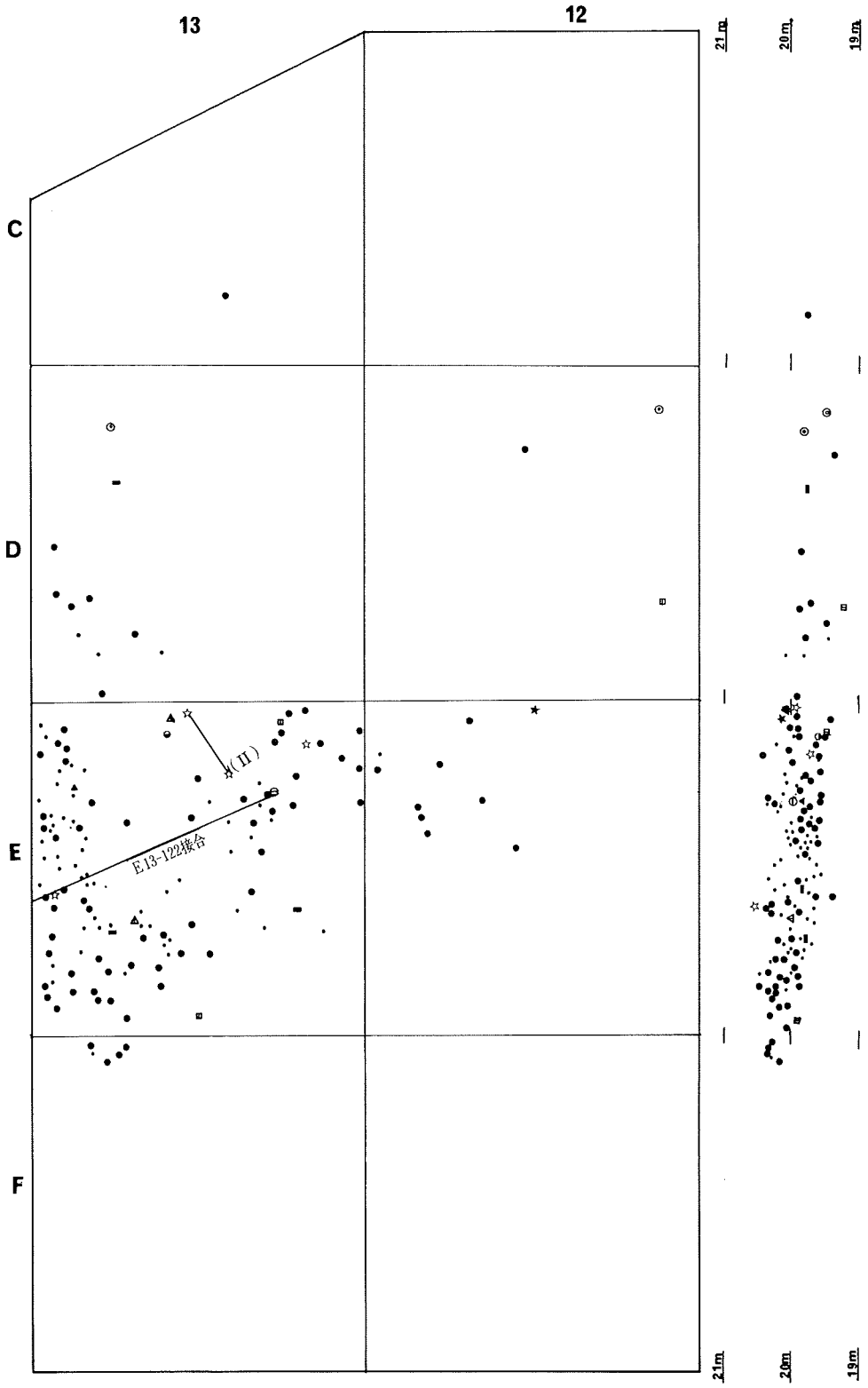


Fig. 50　C～F—12・13区・上層遺物分布図（2）

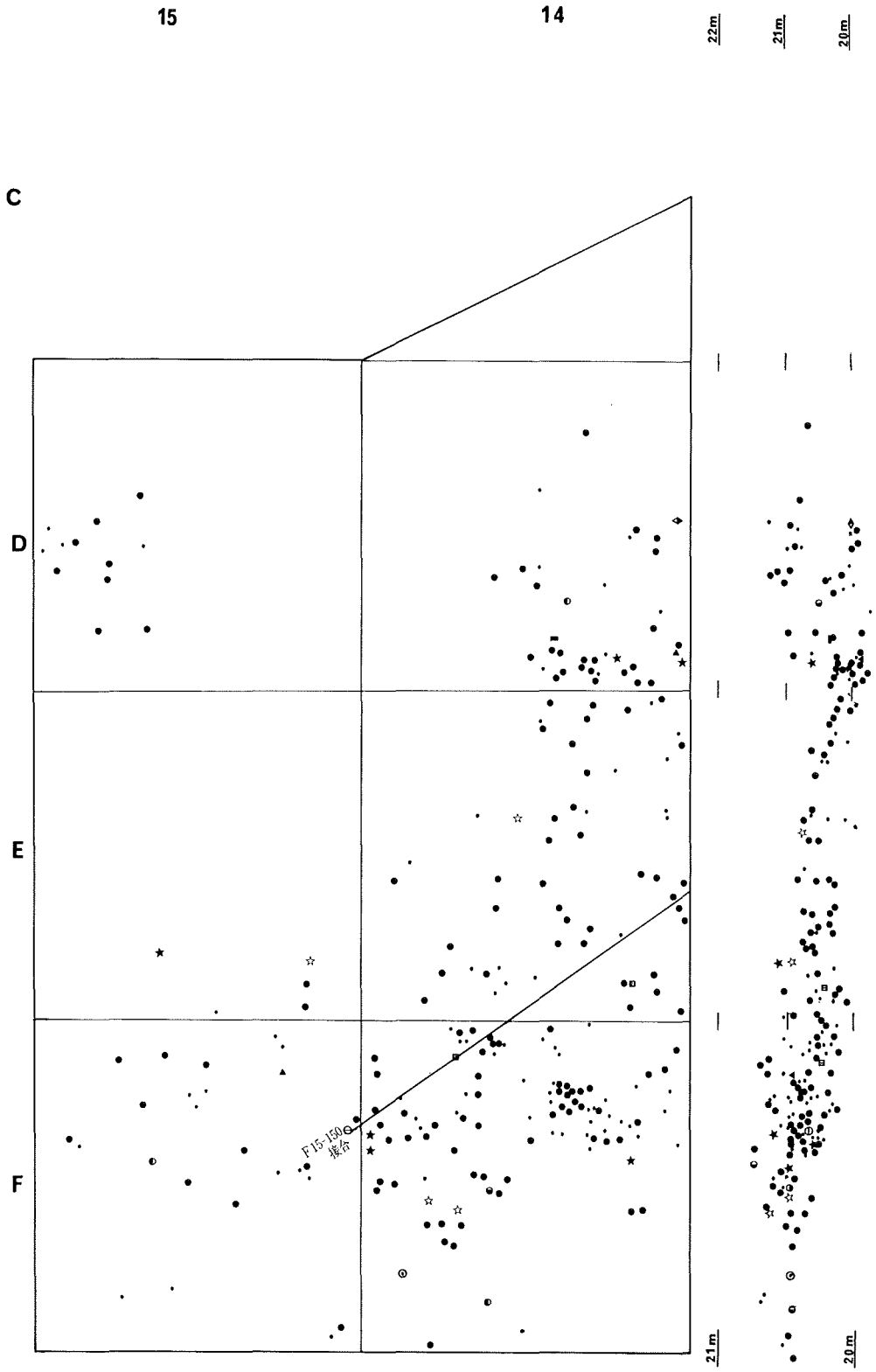


Fig. 51　C～F—14・15区・上層遺物分布図（3）

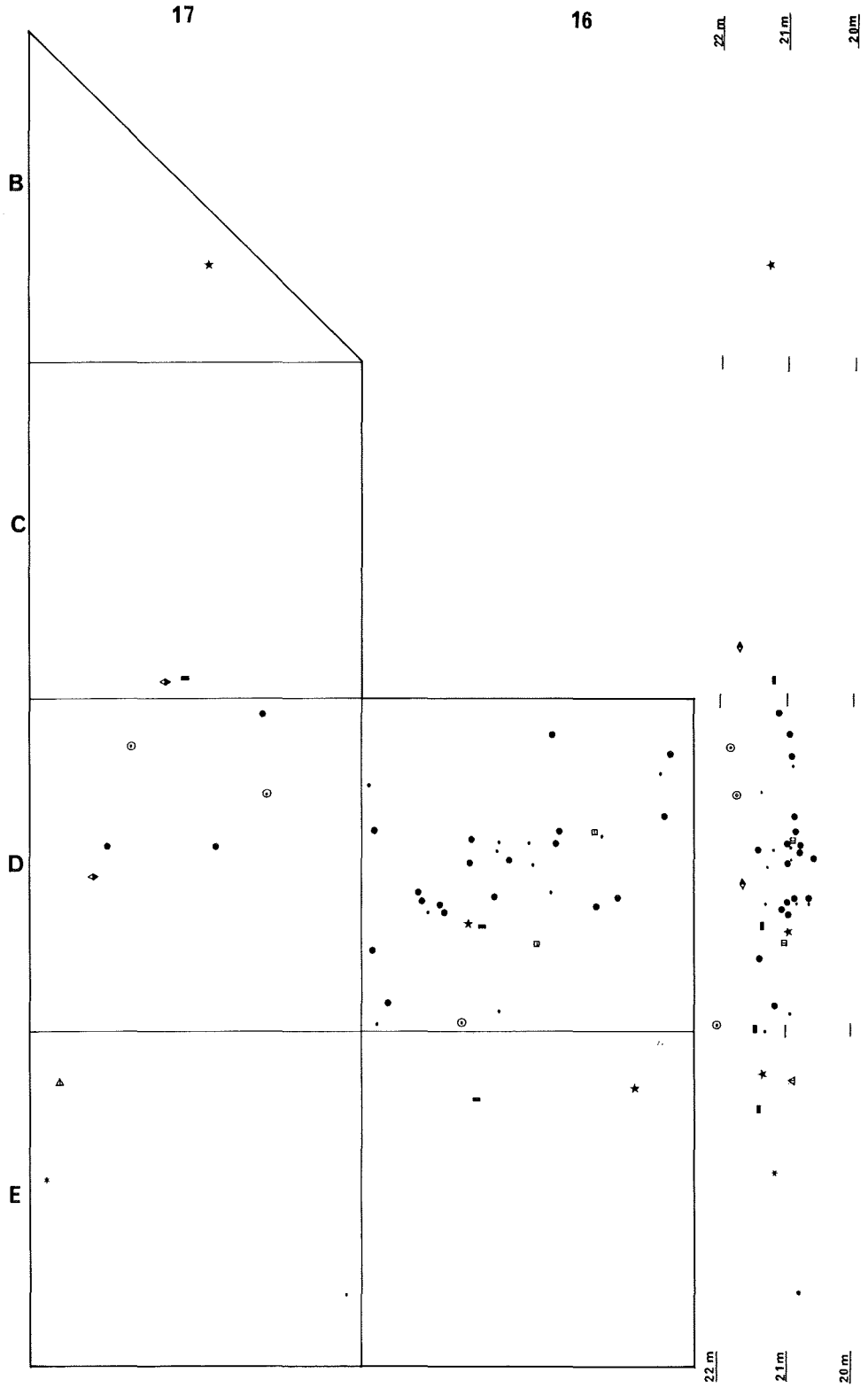


Fig. 52　B～E—16・17区・上層遺物分布図（4）

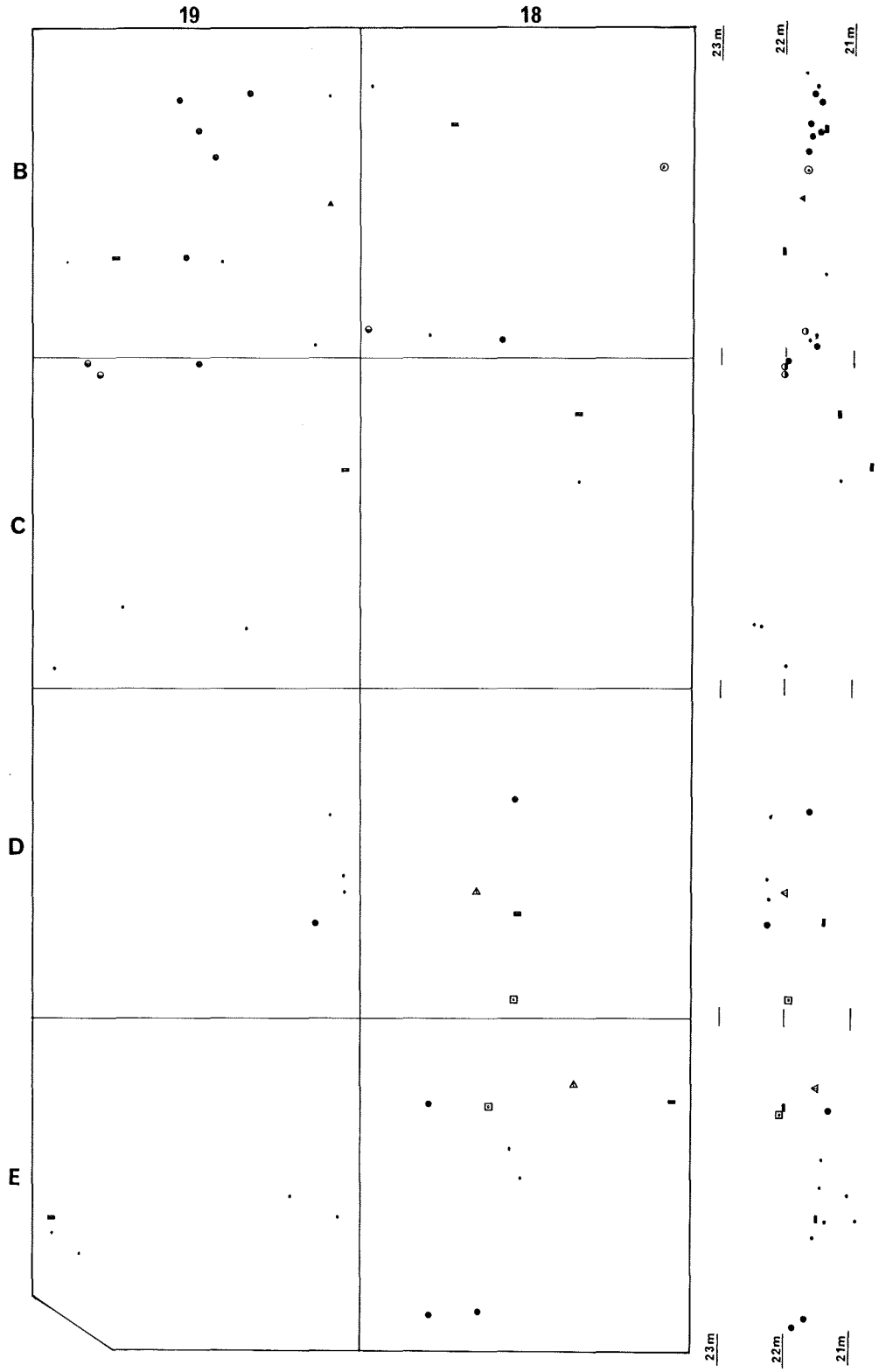


Fig. 53　B～E—18・19区・上層遺物分布図（5）

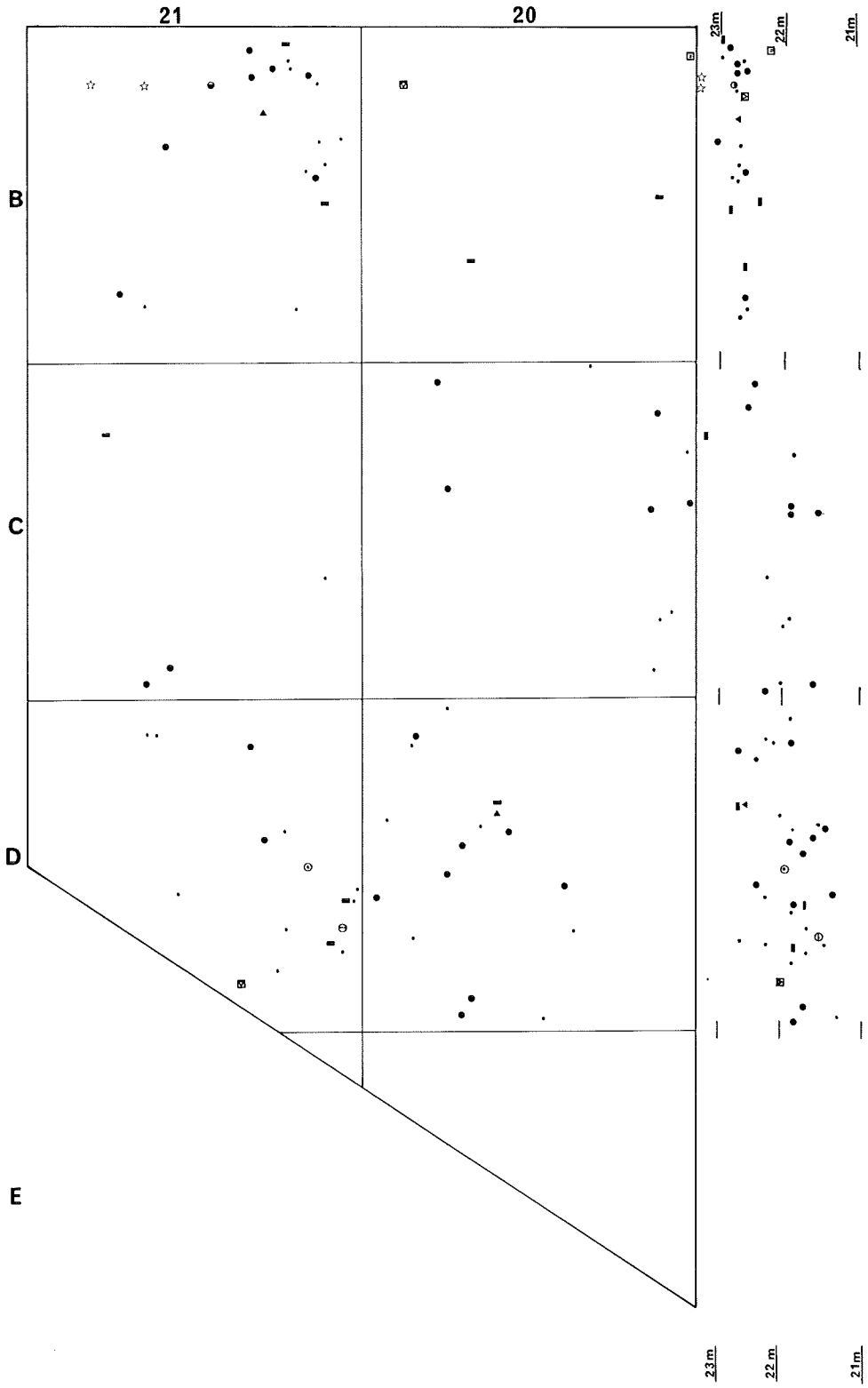


Fig. 54　B～E—20・21区・上層遺物分布図（6）

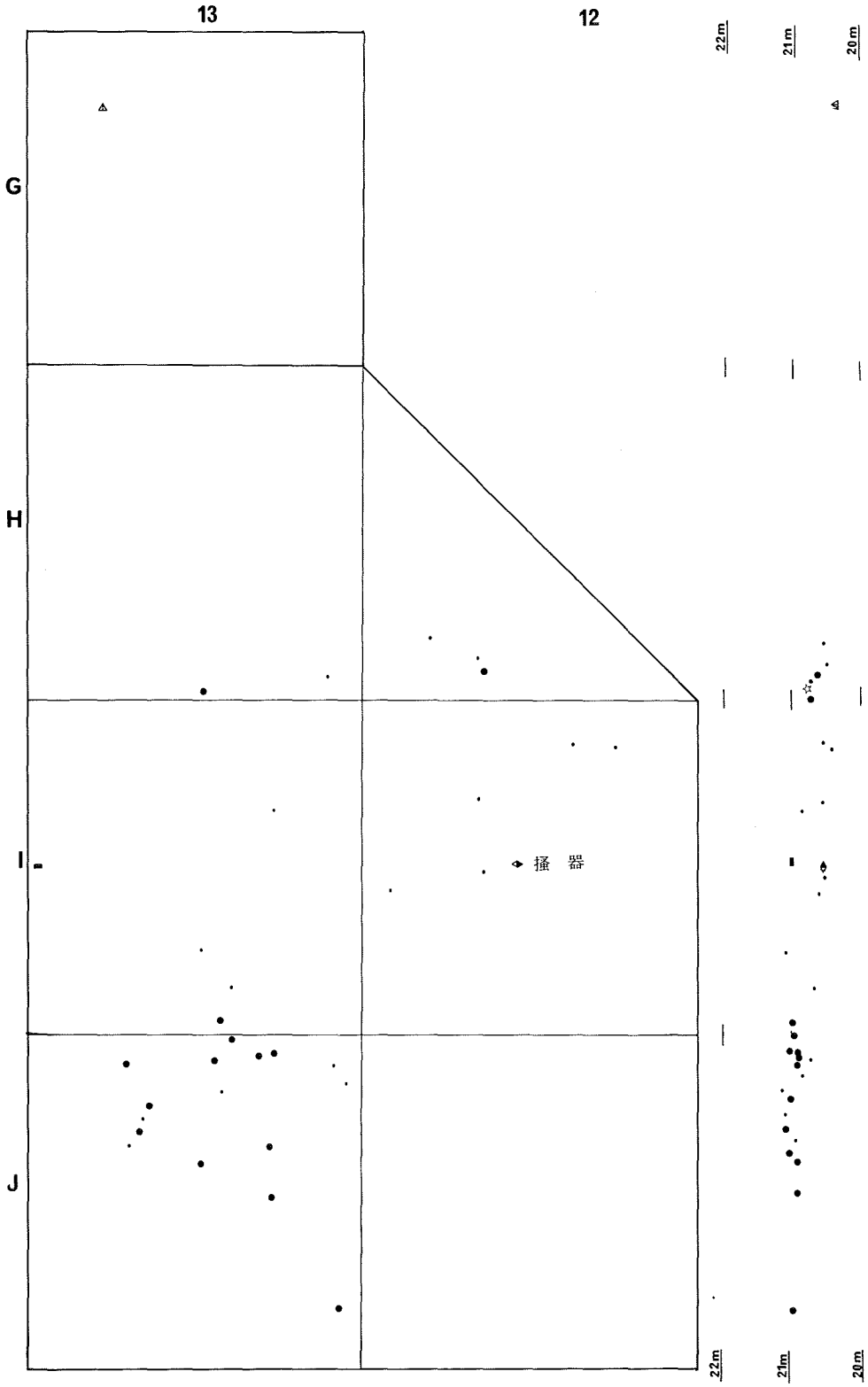


Fig. 55　G～J—12・13区・上層遺物分布図（7）

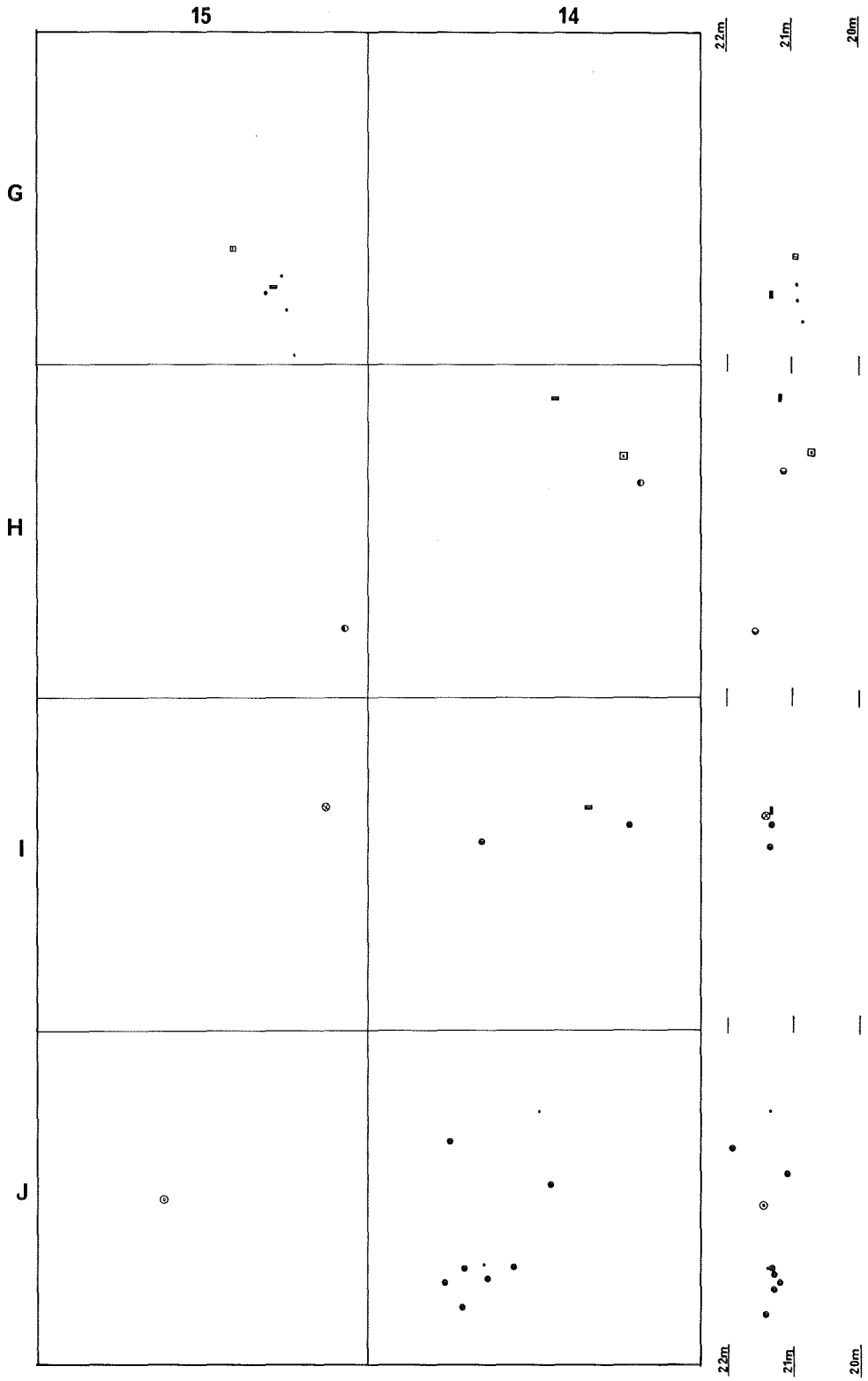


Fig. 56　G～J—14・15区・上層遺物分布図（8）

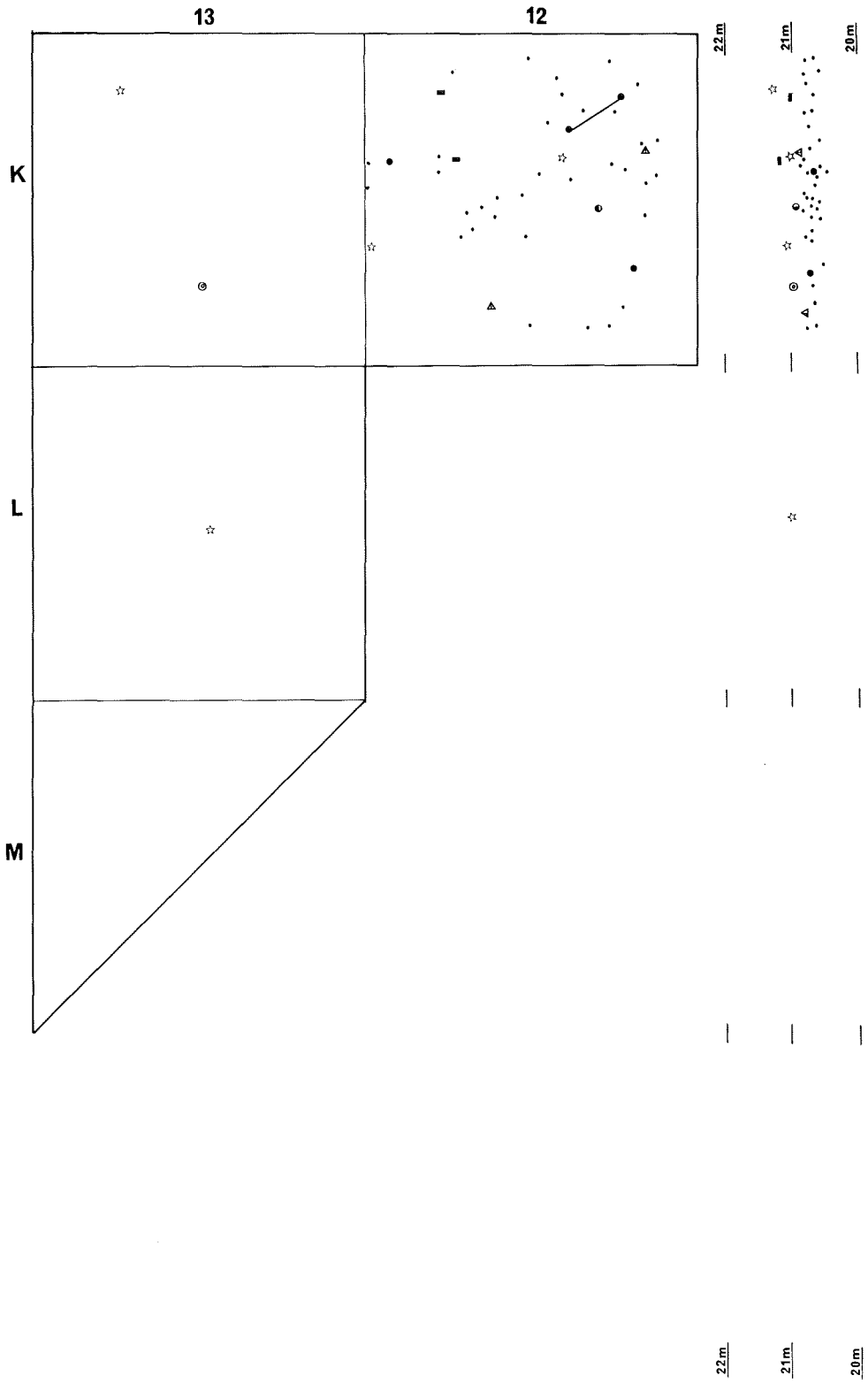


Fig. 57　K～M—12・13区・上層遺物分布図（9）

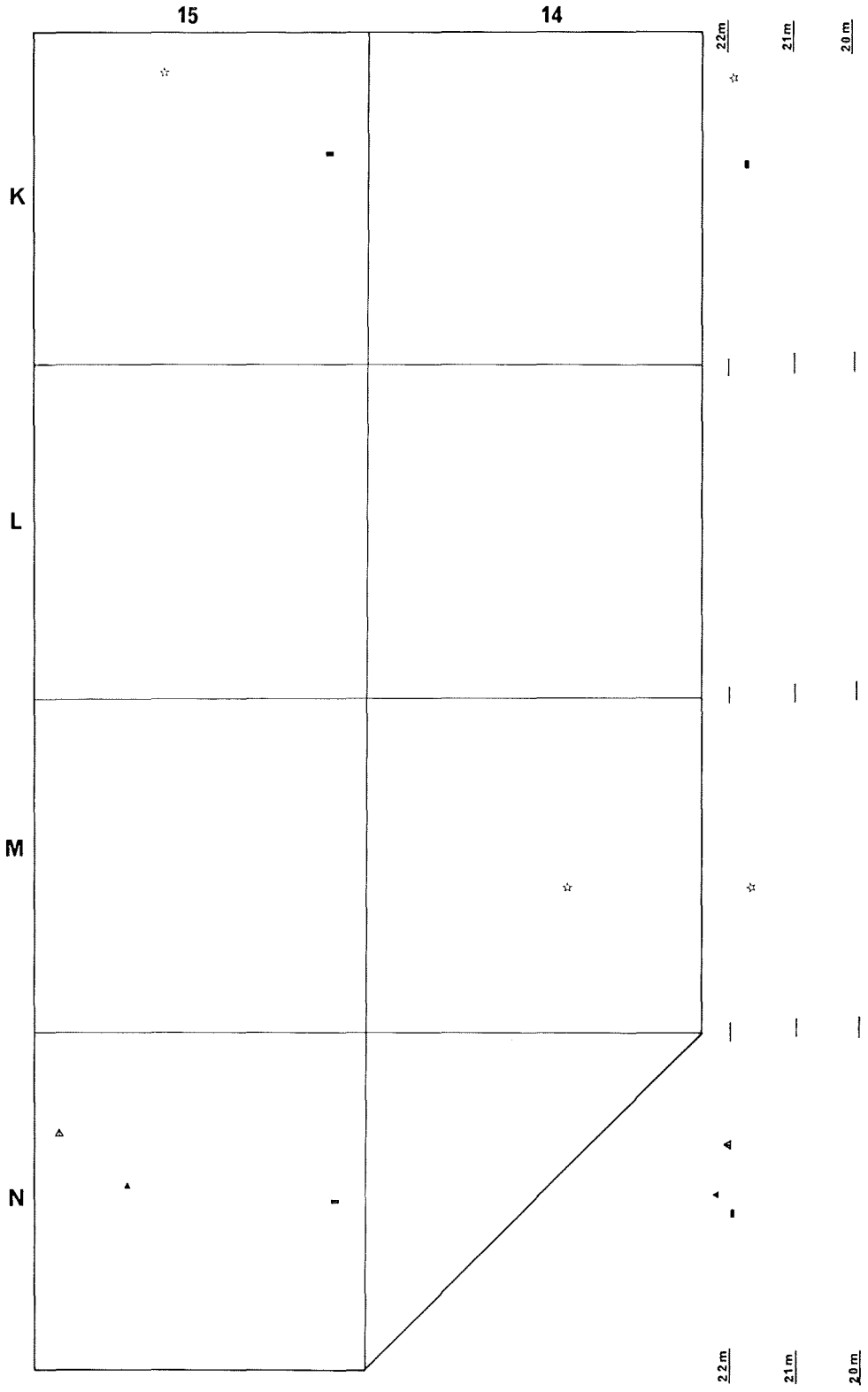


Fig. 58　K～N—14・15区・上層遺物分布図（10）

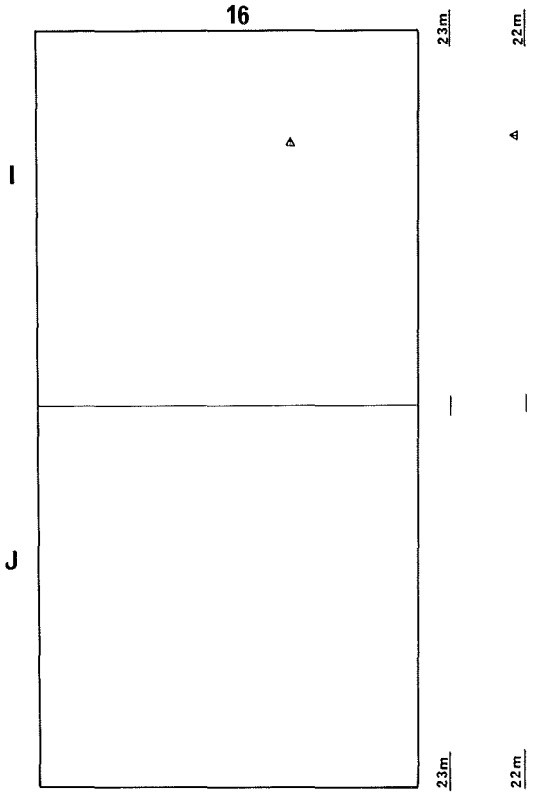


Fig. 59　I・J—16区・上層遺物分布図（11）

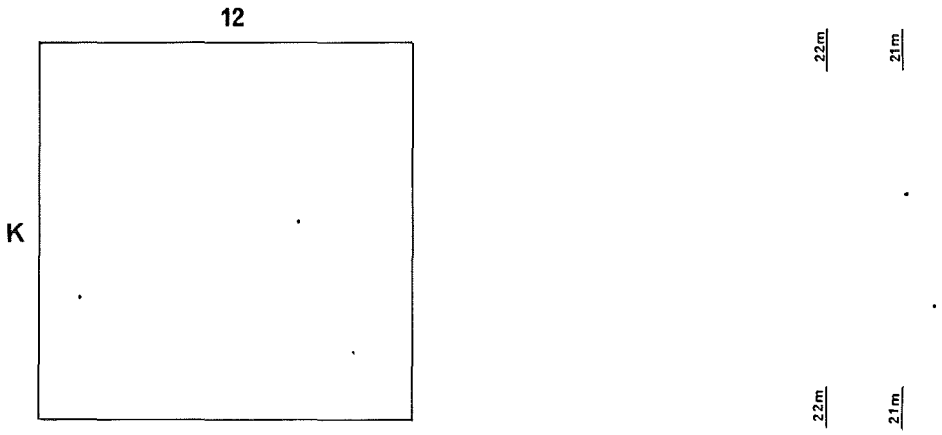


Fig. 60　K—12区・下層遺物分布図（7）

④ 小　　結

遺跡は西大川の旧河川の蛇行により形成された凹地を利用した生活の痕跡が窺われる。

遺物は第Ⅶ層～第Ⅲ層に出土し，その状況よりD・E—10～14区の調査で第Ⅴ層にほとんど遺物の出土がなく間層として，第Ⅵ層下部～第Ⅶ層に集中する遺物を下層，第Ⅲ層～第Ⅳ層に中心をもち，一部第Ⅴ層にかけて出土する遺物を上層の石器群として捉え，上・下層石器群として分離した。下層出土石器は528点，上層は733点を数える。

下層石器群　下層の石器群は遺物集中範囲Ⅰ，Ⅱ—1，2群に分れ，ナイフ形石器を主体とする石器群である。Ⅰ群はナイフ形石器と横長剥片の打面を基部とし，刃部の長い台形様石器が伴う石器群で，Ⅱ—1群はナイフ形石器，台形石器（折断面利用）・台形様石器（原の辻型）を伴い，Ⅱ—2群はナイフ形石器，台形様石器（原の辻型，日の岳型類似），剥片尖頭器が伴う石器群である。以上のような西輪久道下層石器群はナイフ形石器，台形・台形様石器，剥片尖頭器が伴う石器群と考えられ，Ⅰ，Ⅱ—1群に礫群を伴っている。

上層石器群　上層の石器群は遺物集中範囲Ⅲ～Ⅵ群に分れ，第Ⅲ層と第Ⅳ・Ⅴ層の遺物遺存状況が若干相違を示しているようだ。Ⅲ群はナイフ形石器，台形様石器，剥片尖頭器，三稜尖頭器，尖頭状石器が伴う。Ⅳ群は台形・台形様石器，三稜尖頭器・角錐状石器，尖頭状石器が伴う。Ⅴ群はナイフ形石器，台形様石器，三稜尖頭器が伴い，第Ⅴ層に細石核1点と細石刃4点が出土しているが，細石器を主体とする石器群の所産で，別個に捉えることにする。Ⅵ群は第Ⅲ層出土の遺物が主でナイフ形石器，台形・台形様石器，剥片尖頭器を伴う石器群である。以上のような西輪久道上層石器群はナイフ形石器，台形・台形様石器，剥片尖頭器，三稜尖頭器・角錐状石器が伴う石器群と九州横断自動車道関係調査区での細石器を主体とする石器群が時間的差異を呈し遺存する文化層である。

出土石器　ナイフ形石器はⅠ～Ⅴ類に形態分類され，下層にⅠ，Ⅱ—2類，上層にⅠ～Ⅴ類が出土する。36点出土。

台形・台形様石器は42点を数え，Ⅰ～Ⅵ類に形態分類を行った。また，側縁部の2次加工が錯交剥離を施すもの15点，主要剥離面側より施すもの11点，折断面を利用するもの6点，面的な加工を施すもの3点で，器表面に平坦な調整加工を施すもの16点と非常に特徴をもつ。更に錯交剥

離で平担な調整加工を施すものはⅢ・Ⅳ類，折断面利用で平担な調整加工を施すⅤ類と錯交剥離を施すⅠ類，主要剥離面側より施すものⅠ，Ⅴ，Ⅵ類の様に平坦な剥離を施さないものと形態により２次加工が斉一性をもつ傾向がみられる。その中でⅢ，Ⅳ―１・２類は製作技術に類似性をもつものである。層位的な傾向は下層にⅡ，Ⅲ，Ⅳ―２類が，上層にⅠ，Ⅳ―１・３，Ⅴ，Ⅵ類が出土する傾向がある。

尖頭器類はⅠ～Ⅳ類に形態分類され，Ⅰ類は剥片尖頭器，Ⅱ類は三稜尖頭器・角錐状石器，Ⅲ類は尖頭状石器，Ⅳ類は尖頭器と呼称されている石器である。遺跡では下層にⅠ―２類，上層にⅠ～Ⅳ類が出土し，Ⅰ―３・４，Ⅲ―２，Ⅳ類は第Ⅲ層に出土する傾向がみられる。

Ⅰ類はナイフ形石器の製作技術の基盤的な影響を受けていることは明らかで，側縁部に刃こぼれがあり，先端部の欠損が多いことも事実である。ここでは切截的機能をもち，尖頭器的な機能性が重視された石器として尖頭器類の範疇として扱った。Ⅱ類は地域的な系統の発展を踏まえ，多種の名称で呼ばれている石器であるが，類似性が強く，今後残された課題の一つであろう。Ⅲ類は日の岳，鷹野遺跡等類例が知られるが今の所地域的な分布範囲を見せるのであろう。また，Ⅲ類はナイフ形石器と三稜尖頭器類の２次加工に類似性をもつものに分れ，第Ⅲ層に出土し，ナイフ形石器文化の終末頃に位置付けされよう。

利用石材　遺跡での石材利用は黒曜石Ａ製985点，Ｂ製236点，Ｃ製２点，安山岩製98点で，主要器種における利用度も台形・台形様石器を除き，黒曜石Ａ製が多い。黒曜石Ａは針尾，腰岳，Ｂは針尾，淀姫産の原石と考えられ，また針尾産黒曜石の原石の平均値より算定した原石数は43個程度と考えられる。（諫早中核工業団地関係のみ）

九州横断自動車道関係調査成果について　調査報告書が刊行され，層位的な遺存状況でなく，器種レベルにおいて，細石器を主体とするもの，尖頭器を主体とするもの，台形石器を主体とする石器群と捉えられている。遺物はＪ～Ｔ―７～11区に集中して出土する傾向がみられ，当該報告分と同様な石器群で，野岳型類似の細石核を出土する細石器文化の石器群が明らかにされている。

西輪久道遺跡の石器群の位置　石器群の変遷で石器組成と共に，台形・台形様石器の器種間で日の岳型，原の辻型が百花台型の先行形態として捉えられる。百花台遺跡Ⅶ層文化層（ＡＴ下位）で枝去木型，第Ⅵ層で枝去木型，原の辻型および錯交剥離をもつ台形様石器が出土し，日の岳型の出土例を見ない。日の岳型は類例が少なく地域的に限られる状況を示しているようだ。

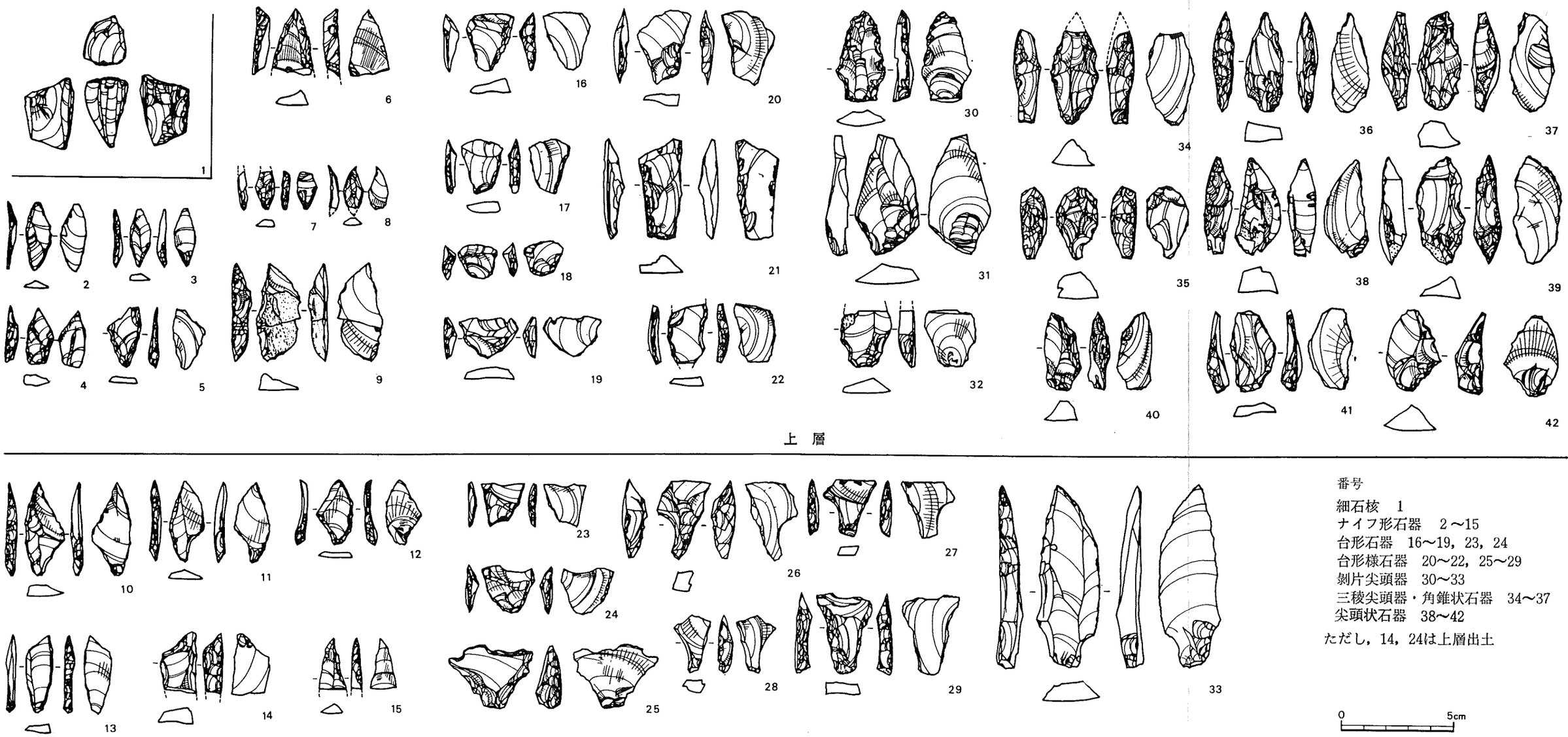


Fig. 61 西輪久道遺跡・先土器時代 上・下層出土遺物

西輪久道下層石器群は日の岳Ⅲ併行頃，上層のナイフ形石器を主体とする石器群は日の岳Ⅱに併行あるいは先行する。上層の細石器を主体とする石器群は野岳併行に位置付けられよう。

最後に「西輪久道遺跡・鷹野遺跡」の写真集刊行の折，下層出土石器とした83・89は出土層を検討した結果，第Ⅴ層下部出土であることが判明し，今回の報告書で出土層位を訂正したい。

参考文献　百花台遺跡の調査成果の一部を写真集として刊行した。「百花台遺跡」長崎県文化財調査報告書　第78集　長崎県教育委員会　1985

長崎県教育委員会・地域振興整備公団　1981「西輪久道遺跡・鷹野遺跡」

長崎県教育委員会　1983「西輪久道遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書　第64集

下川達弥・萩原博文　1983「西北九州における旧石器時代の石器群の編年（下）」古代文化　第35巻6号

Tab. 8　出土石器石材別・層位別出土一覧表

出土		石材＼器種	ナイフ形石器	台形石器・台形様石器	スクレイパー	加工痕のある石器	使用痕のある剥片	剥片尖頭器	三稜尖頭器	尖頭状石器	尖頭器	石核	細石核	細石刃	石核再生剥片	石核調整剥片	剥片	スポール	砕片	原石	計
包含層	Ⅱ・Ⅲ	黒曜石A	13	15			1	3	4	4	1			33			3	1			78
		〃B	7	5	1		2	2		2	1			14							34
		〃C		1																	1
		安山岩	1	3	1			2						3							10
	Ⅳ・Ⅴ	黒曜石A	4	3	1		5		4	1		5		6	3	1	219		210	9	471
		〃B	1	2	1		1				1	1	1	4	1		76		53	2	144
		〃C																			
		安山岩					1	1									31		30		63
	Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ	黒曜石A	6	6	1	2	10					8		2	2	2	240		169	14	462
		〃B		3			1					2		2			27		19		54
		〃C						1													1
		安山岩			1												14		10		25
		その他															1		1		2
ドーナツ状土壙		黒曜石A	3	3				1				1	1	1			1				11
		〃B	1	1										1							3
		〃C																			
計			36	42	6	2	21	10	8	7	3	17	2	66	6	3	612	1	492	25	1,359

4. 縄文時代

① 遺　　構

西輪久道遺跡の調査で検出された縄文時代の遺構は，集石遺構６基，炉址３基，溝状遺構１基の計10基である。集石遺構は，ピット状や土壙状の掘り込みを有するもの，或いは，平面的に集石（礫）だけより成るものがある。集石（礫）の数も数個のものから数十個に至るものまである。炉址は，２基が炉穴と思われる掘り込みをともなった炭化物の集中する遺構である。もう１基は，礫を配した石組炉である。溝状遺構は，長短２本の溝より成り，長い方の溝は曲線を描き半楕円形状を呈する。これらの遺構は遺物がほとんどなく，その時期など不明な点が多い。

なお，この他にドーナツ状土壙が多く検出されたが，ここでは人為的な遺構とは別のものと判断したので除外する。

１集石遺構
(Fig. 62～67)
〔PL. 40～43〕

１号は，D—20・21，E—20・21区の，第Ⅱ層（褐色粘質土層）中より検出された遺構である。礫は指頭大から人頭大程のものである。集石の状況は４区の交点付近が特に密となり，若干下り傾斜となる東側にやや散在する。その広がり範囲は南北に２ｍ，東西に約４ｍである。なお断面図を見てもわかるように，礫と礫の上下の重複はあまり無く，平面的な密集を成していると言えよう。また，集石の下には掘り込みらしきものは認められなかったものの，浅いもの深いもの計４基のピットが近接していた。ピットはすべて集石の確認された最下面より掘り込まれており，それぞれピットａ～ピットｄとした。ピットａは南北約40cm×東西約55cm程の不整楕円形状で深さ50cmである。底面に拳大の礫をともなっていた。ピットｂは南北・東西ともに30cm程の円形状で，深さ40cmである。ピットｃは南北約38cm×東西約30cm程の不整楕円形状である。深さは約８cmでピットａと同様に底面に拳大の礫をともなっていた。ピットｄは南北約23cm×東西26cm程で，深さは５～７cmである。これら４基のピットと集石との関係がいかなるものか判然としないが，集石のレベルとピットの確認面がほぼ一致すること，ピットａとｃには拳大の礫をともない，集石のものと類似することなどより同一時期のものと考えたい。個々の礫は焼成を受けた痕跡は無く，焼土・炭水化物・出土遺物も認められない。本遺構がいつの時期のどのような性格を有したものかは

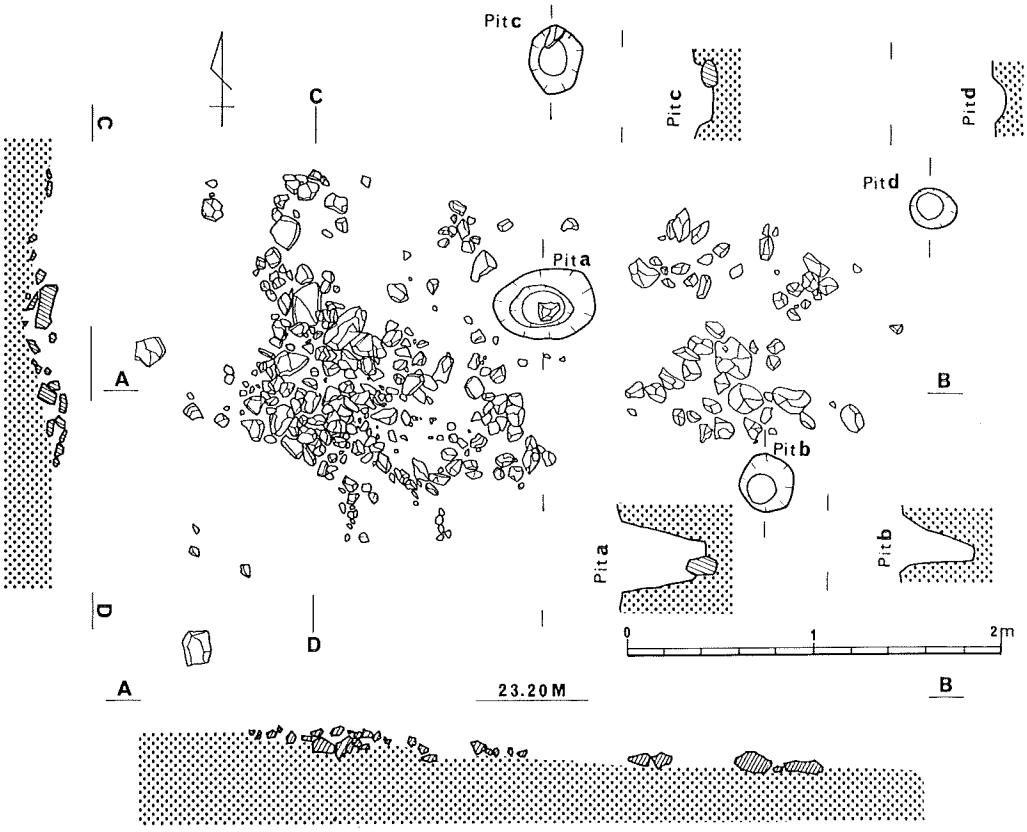


Fig. 62　1 号 集 石 遺 構 (1/40)

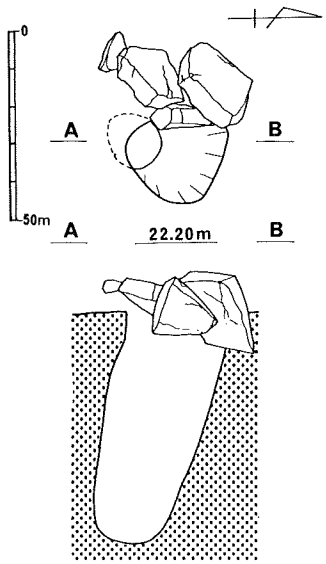


Fig. 63　2 号集石遺構 (1/20)

不明である。

2 号は，調査域のほぼ中央にあたる，Ⅰ—15 区，第Ⅱ層（褐色粘質土層）中より検出された遺構である。10〜20cmの板状の礫が 4 枚程出土している。集石の東側直下には，南側へオーバーハングした直径約30cm，深さ約60cm程のピットをともなっていた。ピットの覆土は，ボサボサでしまりのない黄褐色土が充満していた。出土遺物は 1 点もなく，時期・性格ともに不明である。

なお，集石は最下面が第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中までにおよび，しかもピットとやや位置をずらしていることなどより，時期的には全く別のものである可能性も考えられる。

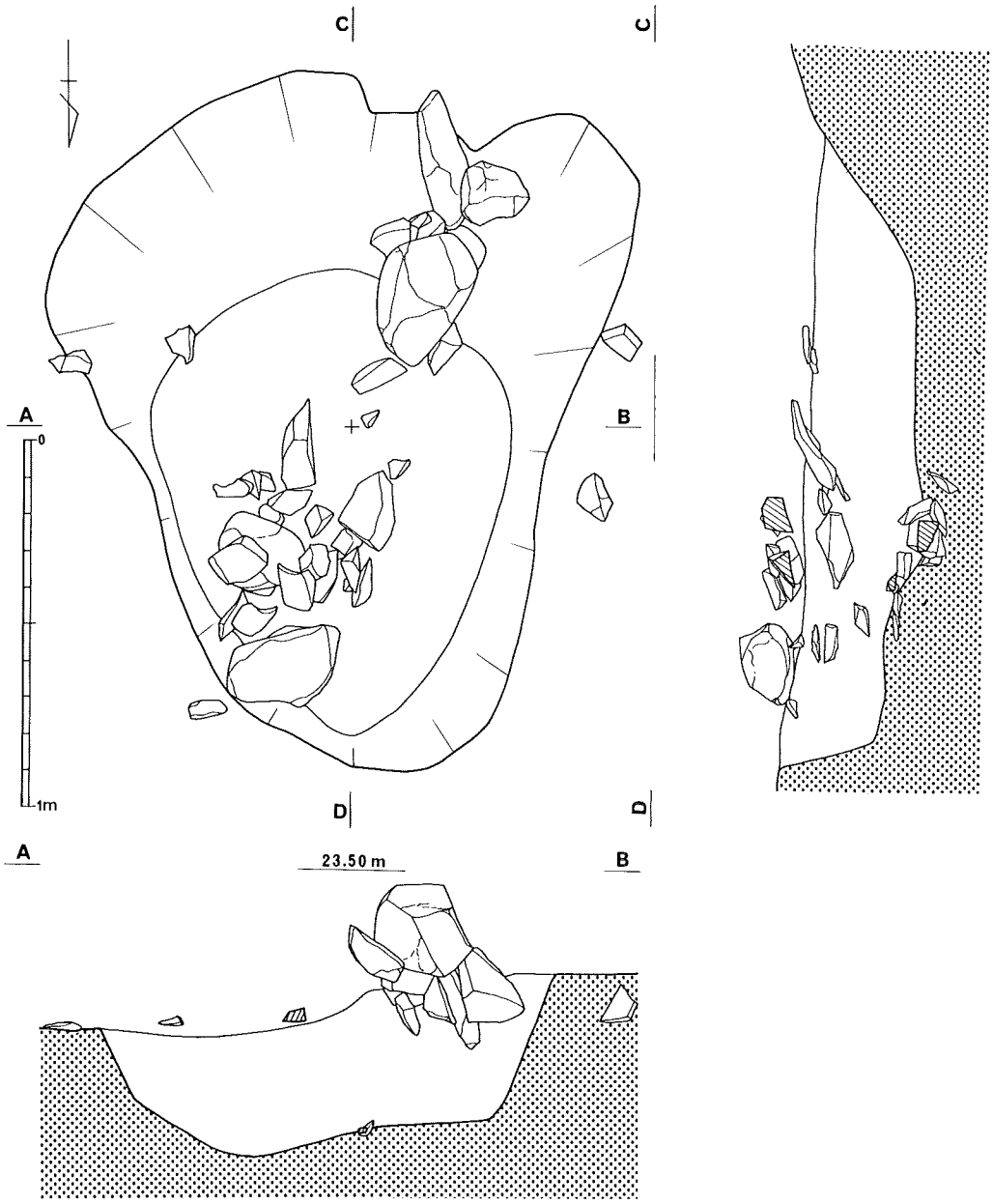


Fig. 64　3 号 集 石 遺 構 (1/20)

3号は，調査域の北西端，B—21区，第Ⅱ層（褐色粘質土層）中より検出された遺構である。南北約2m×東西約1.5m×深さ約0.5m程の掘り込みの中に数十個の礫が認められた。礫の大きさは，拳大から人頭大をやや上回るものまでに至る。礫は掘り込み内，北側にやや密集するが，全体的にやや浮いた状況であった。B—21区，第Ⅱ層（褐色粘質土

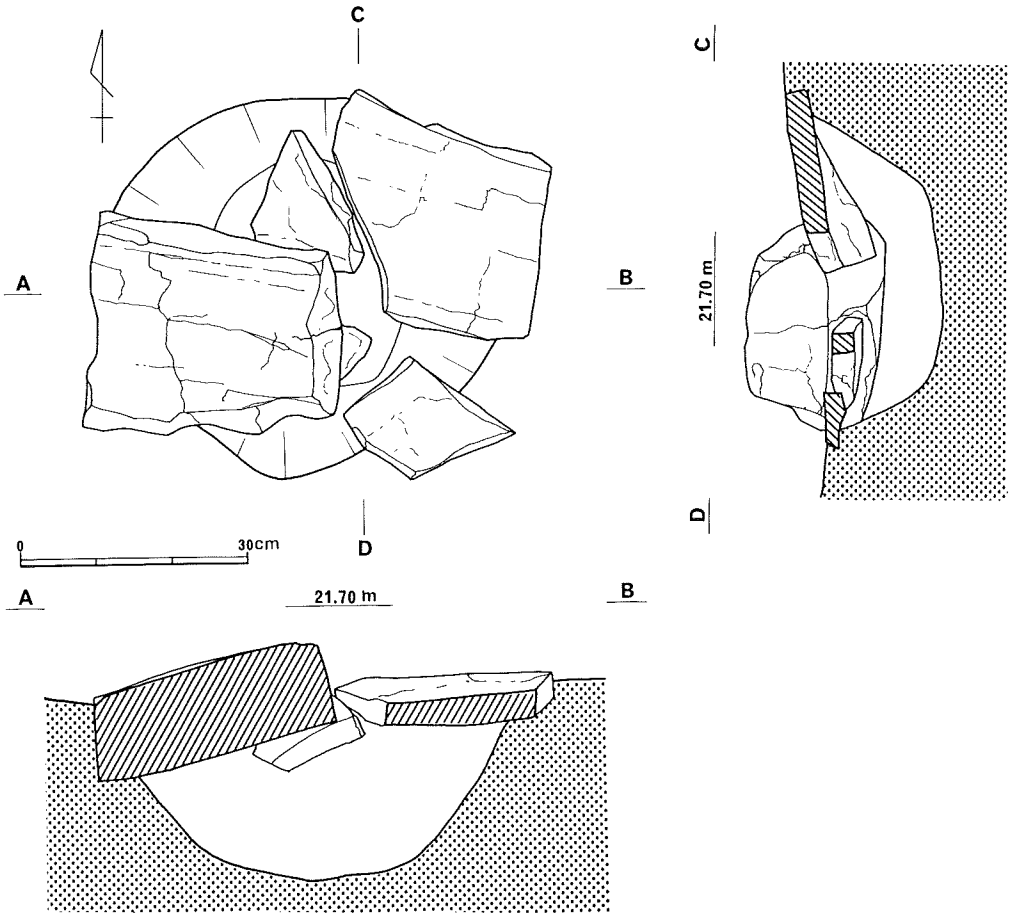


Fig. 65　4 号 集 石 遺 構 (1/10)

層）からの出土遺物は，石鏃やチップ・フレイクなど数点出土しているが，本遺構内からの出土はない。しかも，礫が焼成を受けた痕跡も無く，焼土や炭水化物も認められない。何らかに用いられた遺構ではあろうが，時期・性格ともに現段階では不明である。

4号は，C—17区，第Ⅱ層（褐色粘質土層）中に検出された遺構である。南北約50cm×東西約60cm×深さ約25cm程の不整円形の掘り込みの中に，20〜30cmの板状の礫を数枚敷いた様な状態で認められた。礫の状況や礫と掘り込みの関係などより，元位置よりあまり動いていないものと考えられる。また，礫は風化が著しいものもあり，割れたり，ひびが入っているなどややもろい状況であった。（焼成を受けたためであろうか？）本遺構内からは，焼土・炭化物，および遺物は全く認められなかったため，時期・性格ともに不明である。

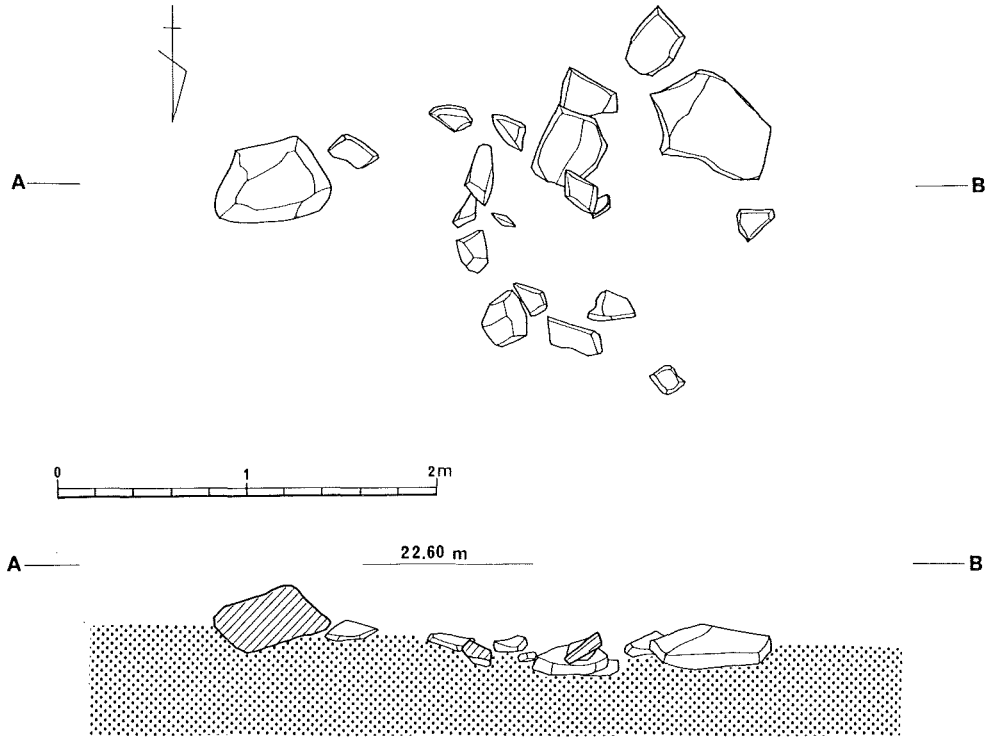


Fig. 66　5 号 集 石 遺 構 (1/40)

5号は，E—19・20区の第Ⅱ層（褐色粘質土層）中より検出された遺構である。ピットや土壙などの掘り込みは確認されなかった。東西約3m×南北約2m程の広がりをもつ。約20個程の礫によって構成されている。礫の大きさは，拳大のものから，60cm程のものまでに及び，全体的に板状のものが目につくようである。出土遺物は1点も無く，炭化物や焼土等の検出もされなかった。従って，時期・性格は判然としない。なお，すぐ西に，1号集石があり，頭初同一のものではないかと考えられていたが，明確に分れるものと判断し2者に区別した。

6号は，B—17区の第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中より検出された遺構である。先の5号集石遺構と同様に，ピットや土壙などの掘り込みはともなっていない。礫の広がりは，東西に約2m×南北に約1.5m程である。礫の大きさは，拳大程のものから人頭大程までに及ぶ。ここでは，板状の石はほとんど見られず，角礫が多くを占めている。出土遺物，及び炭化物，焼土等の出土は認められず，時期・性格ともに判然としていない状況である。

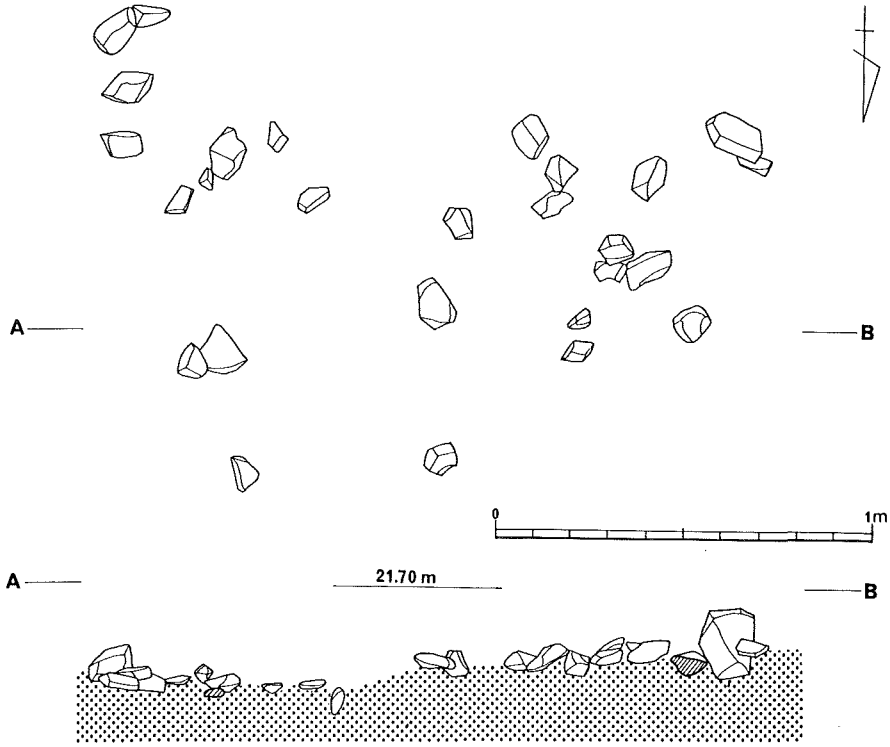
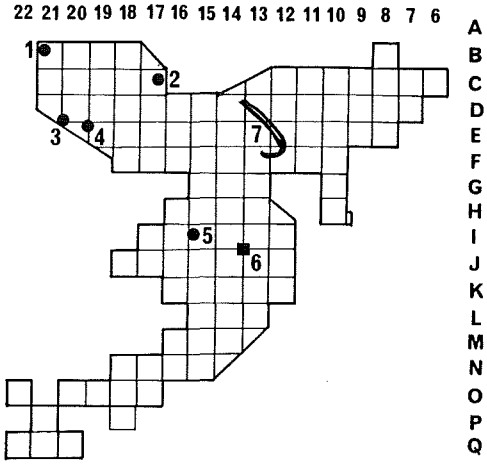
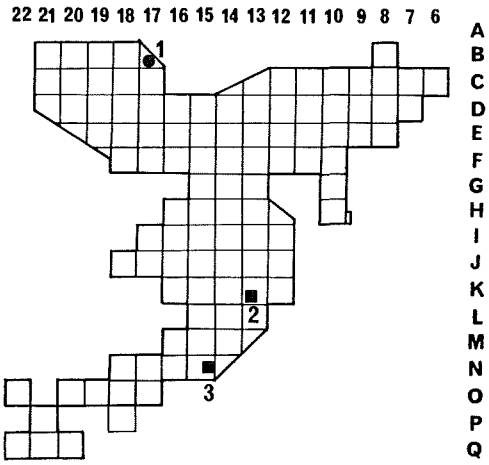


Fig. 67　6 号 集 石 遺 構 (1/20)



第Ⅱ層(褐色粘質土層)検出遺構

1	3 号集石遺構
2	4 号集石遺構
3	1 号集石遺構
4	5 号集石遺構
5	2 号集石遺構
6	3 号炉址 (石組炉)
7	溝状遺構



第Ⅲ層(黒褐色軟質土層)検出遺構

1	6 号集石遺構
2	1 号炉址(炭化物集中遺構)
3	2 号炉址(炭化物集中遺構)

Fig. 68　第Ⅱ層・第Ⅲ層検出遺構位置図

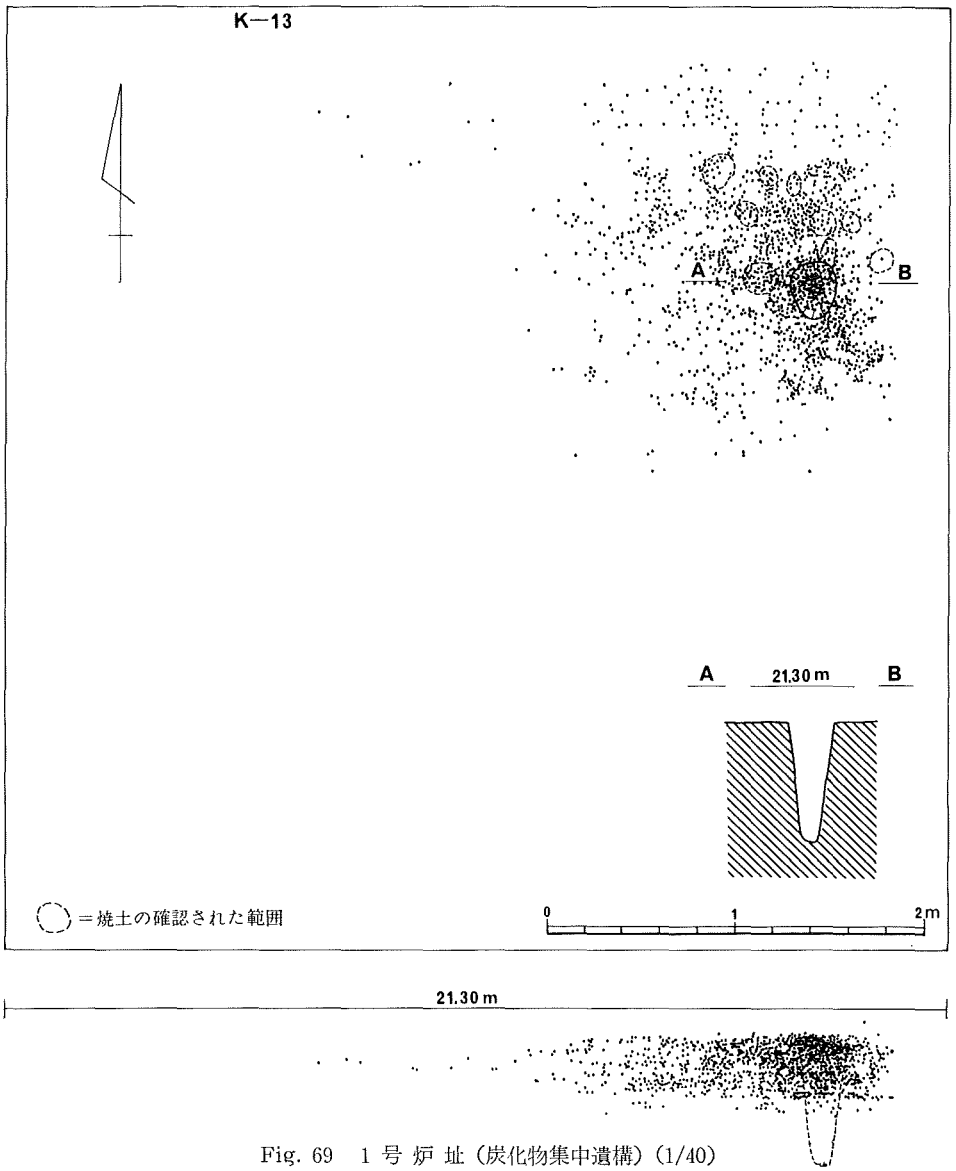


Fig. 69　1 号 炉 址（炭化物集中遺構）(1/40)

2 炉址
（炭化物集中遺構）
(Fig. 69～70)
〔PL. 38〕

1号炉址は，K—13区，第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中に検出された遺構である。本調査区の北東部分に，南北約 2 m×東西約 3 m程の広がりをもつ炭化物の集中が認められた。径20～30cm×深さ約60cm程の炉穴と考えられるピットを1基ともなっていた。特にピット内やその周辺に炭化物が顕著に集中しており，薄くではあるが焼土も数ケ所に確認することができた。また，本遺構からの出土遺物は，チップ・フレイクが数点出土している他には無く，遺物より遺構の時期をつかむことはできなか

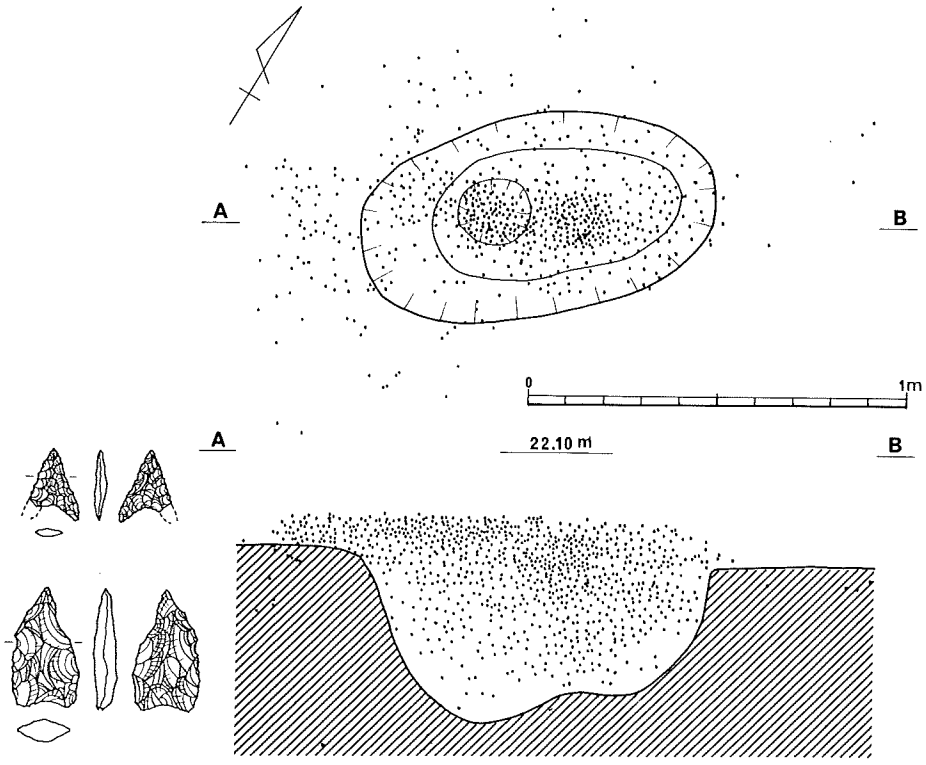


Fig. 70　2 号 炉 址（炭化物集中遺構）(1/20)

った。しかし，調査において，ピット内の炭化物を中心に１点１点採集し，後にＣ—14年代測定にかけたところ，現在より7740±105年と言う数値が得られた。この数値は，おおよそ本遺跡における，縄文時代早期～前期に位置付けできよう。すなわち本遺跡出土の土器とも一致するところでもある。

２号炉址は，Ｎ—15区，第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中に検出された遺構である。長径約85cm×短径約50cm×深さ40～45cm程の楕円形状の炉穴と考えられる土壙をともなっており，炭化物が土壙内や上部に，或いは周辺に顕著に認められた。特に上図（Fig. 70）でもわかるように，土壙の中央やや上部に著しい集中を成している。これらの炭化物は，下に行くに従い大形化し，中には木ノ実と思われるものも認められた。土壙の覆土は，しまりのない黄褐色土で，焼土は認められない。また，本調査区においては，第Ⅲ層（黒褐色粘質土層）より石鏃・チップ・フレイクや土器（風化が著しく，文様・時代ともに不明）などの出土が認められた。

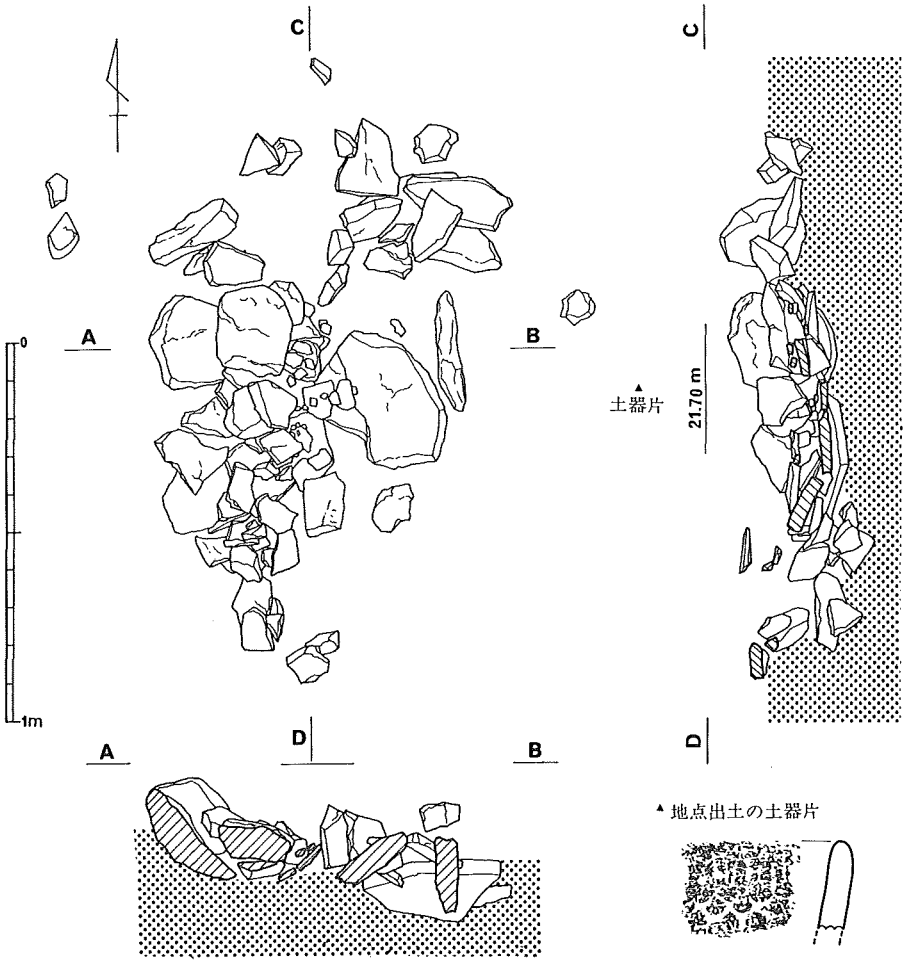


Fig. 71　3 号 炉 址（石組炉）(1/20)

本遺構は，炭化物が集中し焼土こそ認められなかったものの，付近には出土遺物も多く，縄文時代の炉址と考えたい。

（石組炉）
(Fig. 71)
〔PL. 39〕

3号は石組炉で調査域のほぼ中央にあたる，Ⅰ—13・14，Ｊ—13・14の４区，第Ⅱ層（褐色粘質土層）より検出された遺構である。礫を設置するための掘り込みは確認できなかった。付近に散在する礫も数個認められるが，礫の集中する部分においては，南北約1.5ｍ×東西約1.5ｍ×深さ約0.5ｍ程の規模を有する。使用されている礫（炉石）は砂岩・玄武岩の２種で，計50個程から成っていた。礫の大きさは指頭大から50cm前後のものまでにおよび，板状もしくは角礫がほとんどである。特に，炉床面には扁平な礫を敷き並べ，炉側石は南北をややみだすものの，花

弁状に開くように施してあり，明確に人為的行動をうかがえるものと考えられる。また，炉内は板状の砂岩が焼成を受けたため，赤色化し，ボロボロになっている状況であった。（先に述べた指頭大の礫はこれらのもので，炉の中央に多く認められる。）なお，炉址内などより焼土の検出はできなかったが，本遺構周辺には炭化物がかなり広い範囲にわたって認められ，柱穴などの遺構も無く，屋外炉としての使用が想定される。出土遺物は，炉址の中心から東へほぼ90cm程の所に，楕円押型文土器の口縁部片が出土しており※，およそ同時期の遺構として考えられる。

※ 1981年に刊行された，西輪久道遺跡・鷹野遺跡の写真集[註]において文中に，「出土遺物は炉内より縄文早期の土器片が出土」とあるが，これは間違いであり，上記が正しい。

3 溝状遺構
(Fig. 72)
〔PL. 44〕

調査域北側にあたる，D—13・14，E—12・13，F—12・13区の第Ⅱ層（褐色粘質土層）上面より検出された遺構である。Fig. 72 でもわかるように，長短2本の溝が認められる。短い溝は若干蛇行するが，ほぼ一直線上で南東へ向いている。途中より長い溝に切られている。規模は，長さ約11m50cm，溝幅30〜50cm，深さ約20cm程である。長い溝は，短い溝とほぼ並行する形で南東へ向くが，D—12区において大きくカーブを描き，短い溝を切り込んで南西方向へと向きを変え半楕円形状を呈する。規模は長さ約17m30cm，溝幅30〜90cm，深さ20〜35cmである。この両者を比較してみると，長い溝は全体的に深く，南側においては，やや広くなっている。また，新旧関係においては切り合いにより明確で，長い溝の方が後の所産である。

また，上記の2本の溝と近接して，何基かのピットが同レベルより検出された。大小および，浅いもの深いものさまざまである。しかし，D—13区においては，溝状遺構が取り囲むかのようにして，南東へ一列に並んでおり注目される。

以上のように本遺構は，長短2本の溝とその周辺のピットで構成されており，その関係は判然としない。更に，出土遺物もなく，性格・時期ともに不明である。しかし，遺構の確認面が第Ⅱ層（褐色粘質土層）上面からであり，他の遺構より幾分新しいものではないかと考えられる。なお，本遺構西側部分においては，農業用の生活道路が通っており，削平を受けたためか，その延長にあたる部分の検出はできなかった。

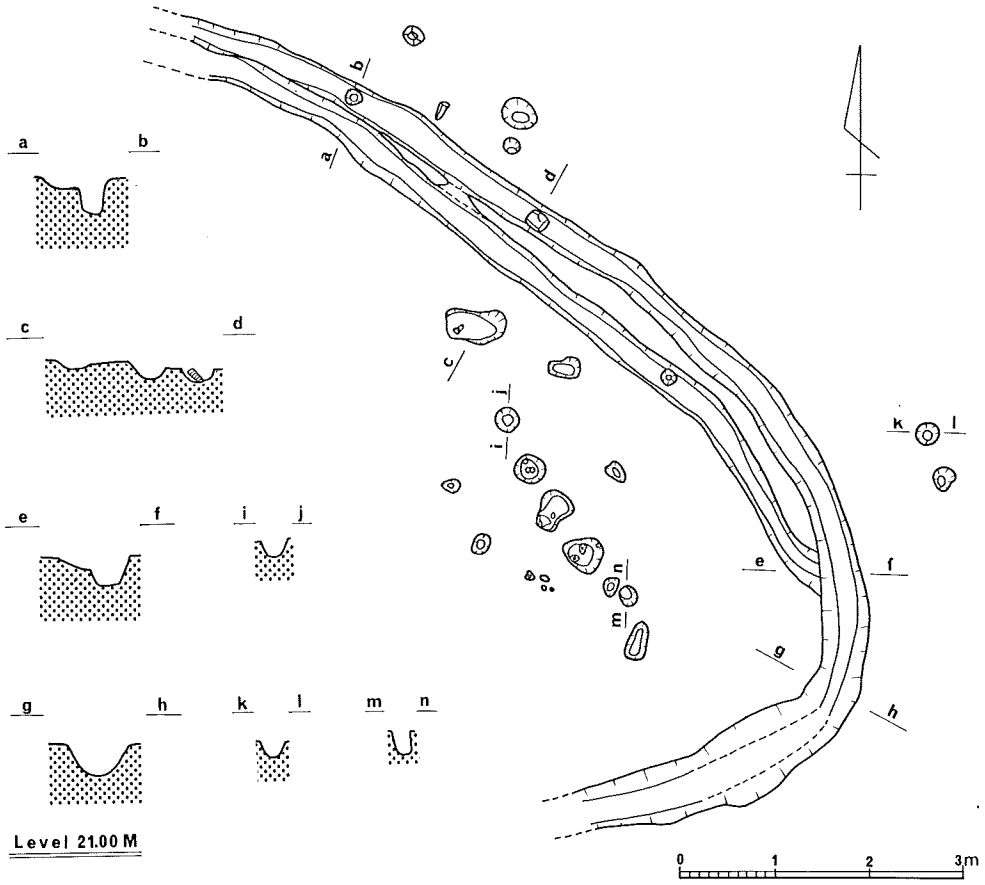


Fig. 72 溝 状 遺 構 (1/80)

以上のように，集石遺構（1～6号）6基，炉址（炭化物集中遺構1～2号の2基，石組炉1基）3基，溝状遺構1基の計10基の遺構が検出されたのであるが，炉址の炭化物集中遺構1号，2号の2基と6号集石遺構が第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）より検出されている他はすべて，第Ⅱ層（褐色粘質土層）からのものである。

特に，第Ⅱ層（褐色粘質土層）における遺構の検出は，遺物の多く出土している北東側には認められず，むしろやや遺物の出土が少ない部分に位置しているようである。このようなことは，第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中の炭化物集中遺構にも言えており，著しく遺物が認められる北西部には位置していない。

註　地域振興整備公団・長崎県教育委員会　1981「西輪久道遺跡・鷹野遺跡」

② 遺物出土状況

(Fig. 73〜106)　西輪久道遺跡においての縄文時代の遺物の出土状況をみると，全体的に土層などの乱れが比較的なかったためか，第Ⅱ層（褐色粘質土層）と第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）の両層にわたって，それぞれ特徴的な出土状況を見せている。

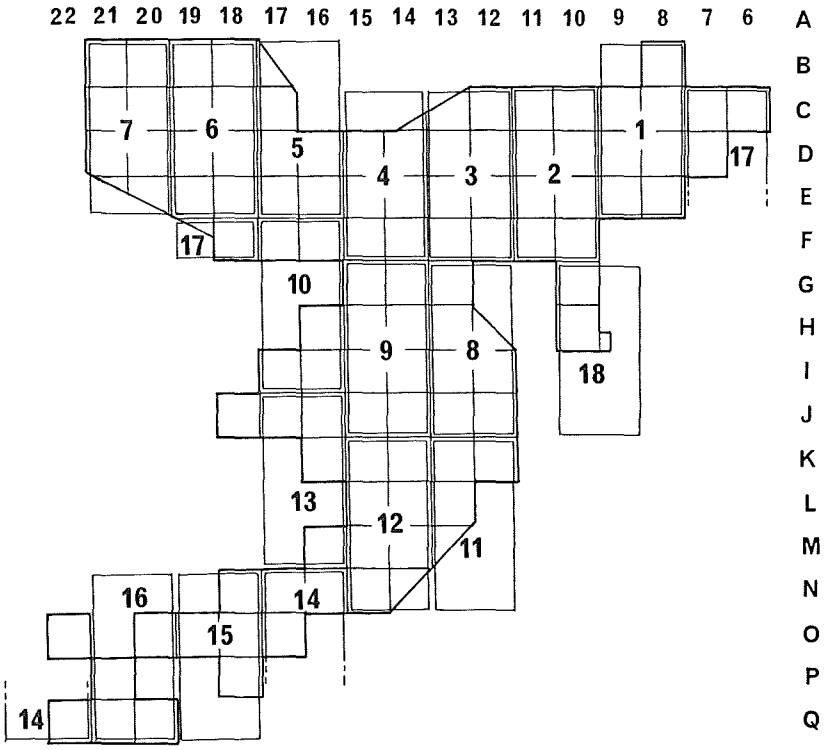
先ず，第Ⅱ層（褐色粘質土層）中の遺物の出土をみると，土器は，その出土が調査域の中央からほぼ北側もしくは北東側に多く認められる。特に押型文土器がC—7区などを中心に目立つようである。他に塞ノ神式土器・貝殻条痕文土器（轟式系土器）の出土も押型文土器の出土分布と重複してみられる。石器（チップ・フレイクも含める）においては，調査域の南端や中央部に若干少ない観があるが，石鏃などを中心に全体的な出土を有していると言えよう。また，石匙やスクレイパー類の出土が際立っているようであり，その分布が押型文土器とほぼ出土範囲を同じにしており注目される。

第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）においての土器の出土状況は，著しく北西側に集中して認められる。しかも，塞ノ神式土器・貝殻条痕文土器（轟式系土器）の2者から形成されており，押型文土器はその部分においてはほとんど見られない。(第Ⅲ層における押型文土器は，調査域中央のⅠ—12・13・14，J—13・14区などにわずかに認められるのみである。)石器についても，土器と同様な出土分布であり，北西側に顕著である。特に石鏃においては，第Ⅱ層（褐色粘質土層）でみられたような状況と異なり，B—20・21，C—17区などに著しく出土している。また，上層には認められなかった，異形石器や敲石なども出土している。

以上の様に，両層の遺物の出土においての石器や土器の差異，或いは，出土量など，いくつかの特徴が認められる。また，地形的にやや急な斜面中央部の西側や南西端側など，出土遺物がやや少なく，地形的影響を有する一端を表わしていると言えよう。なお，これら遺物の集中あるいは，組成などについては，後の「遺物集中範囲」の項で述べる。

縄文時代の土器，石器の各地区別出土状況は，Fig. 73〜106の各地区遺物分布図，付図5・6の遺物分布図（Ⅱ・Ⅲ）により，全体的分布は明確である。

なお，各地区の遺物の出土状況は次のとおりで，土器および石器の器種別に記号で表示した。



■ 石　鏃
◇ スクレイパー
◐ 加工痕ある石器
◎ 使用痕ある剥片
□ 石　匙
△ 石　槍
◆ 磨　石
▥ 原　石
⊟ 敲　石
▲ 石　核
⊠ 石　錐
異形石器
★ 砥　石
石　皿
● フレイク
・ チップ
＊ 土器片

Fig. 73　第Ⅱ層における遺物分布図の順番と記号

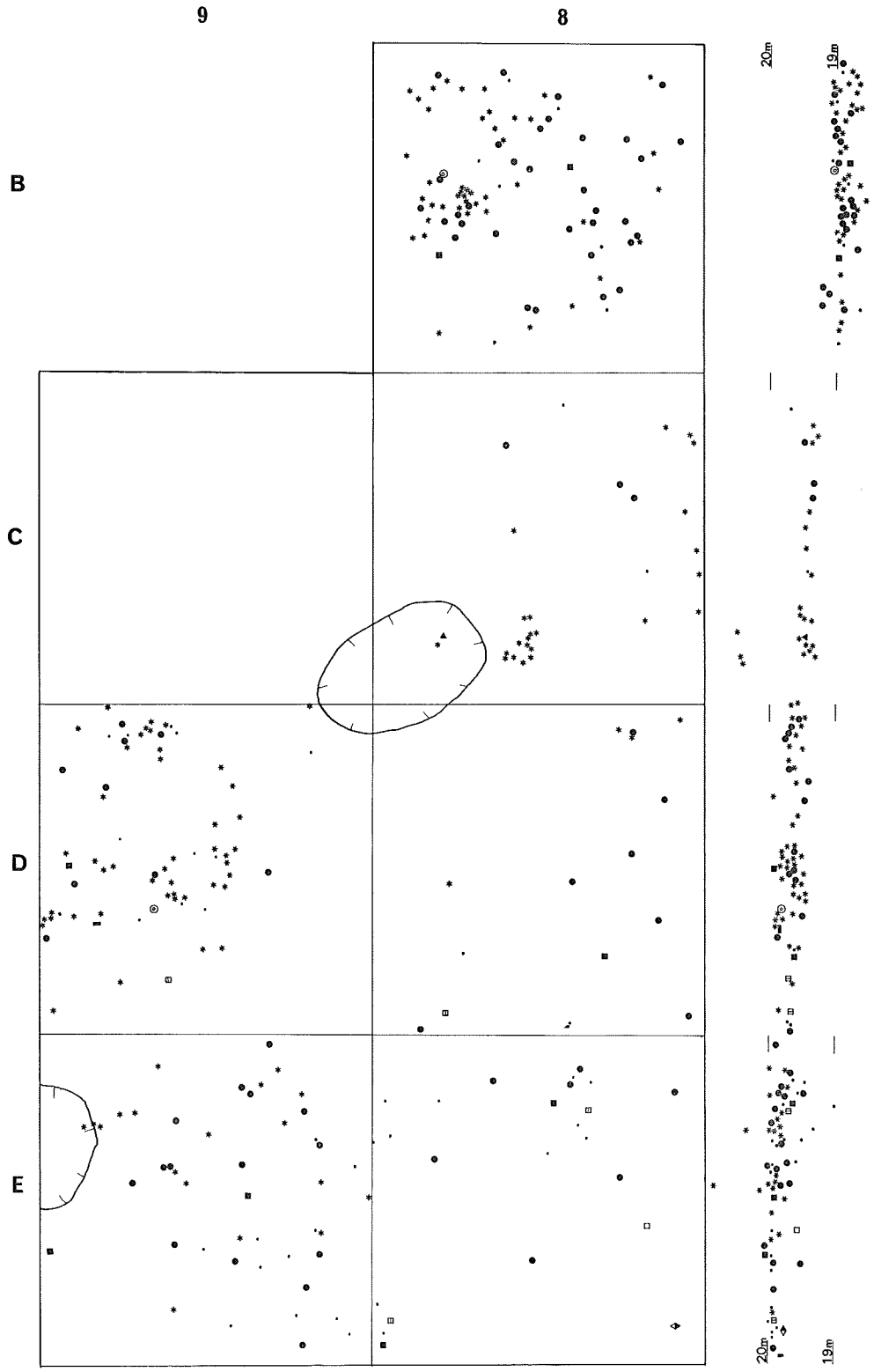


Fig. 74　B～E－8・9区第Ⅱ層遺物分布図1

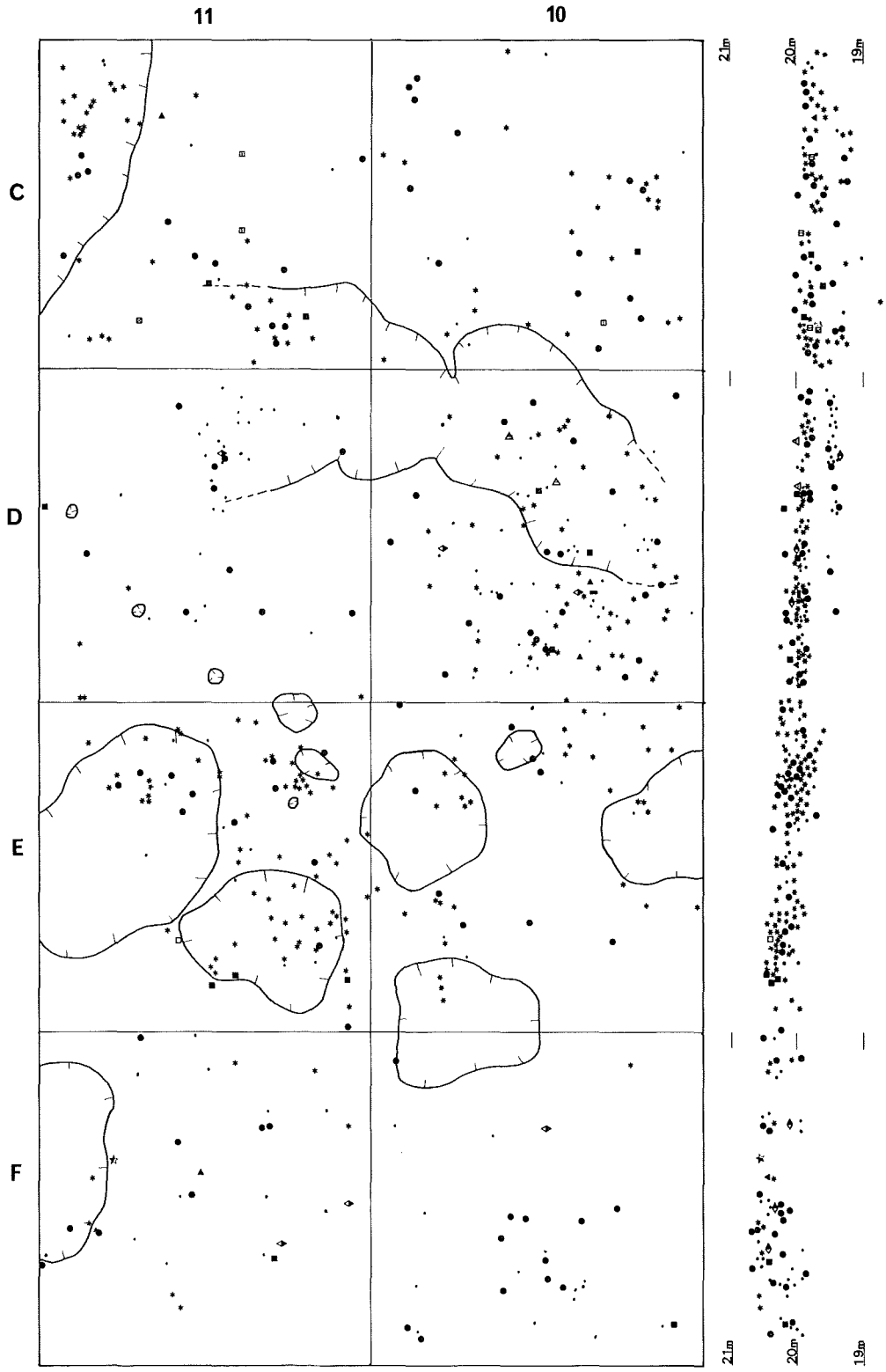


Fig. 75　C～F—10・11区第Ⅱ層遺物分布図2

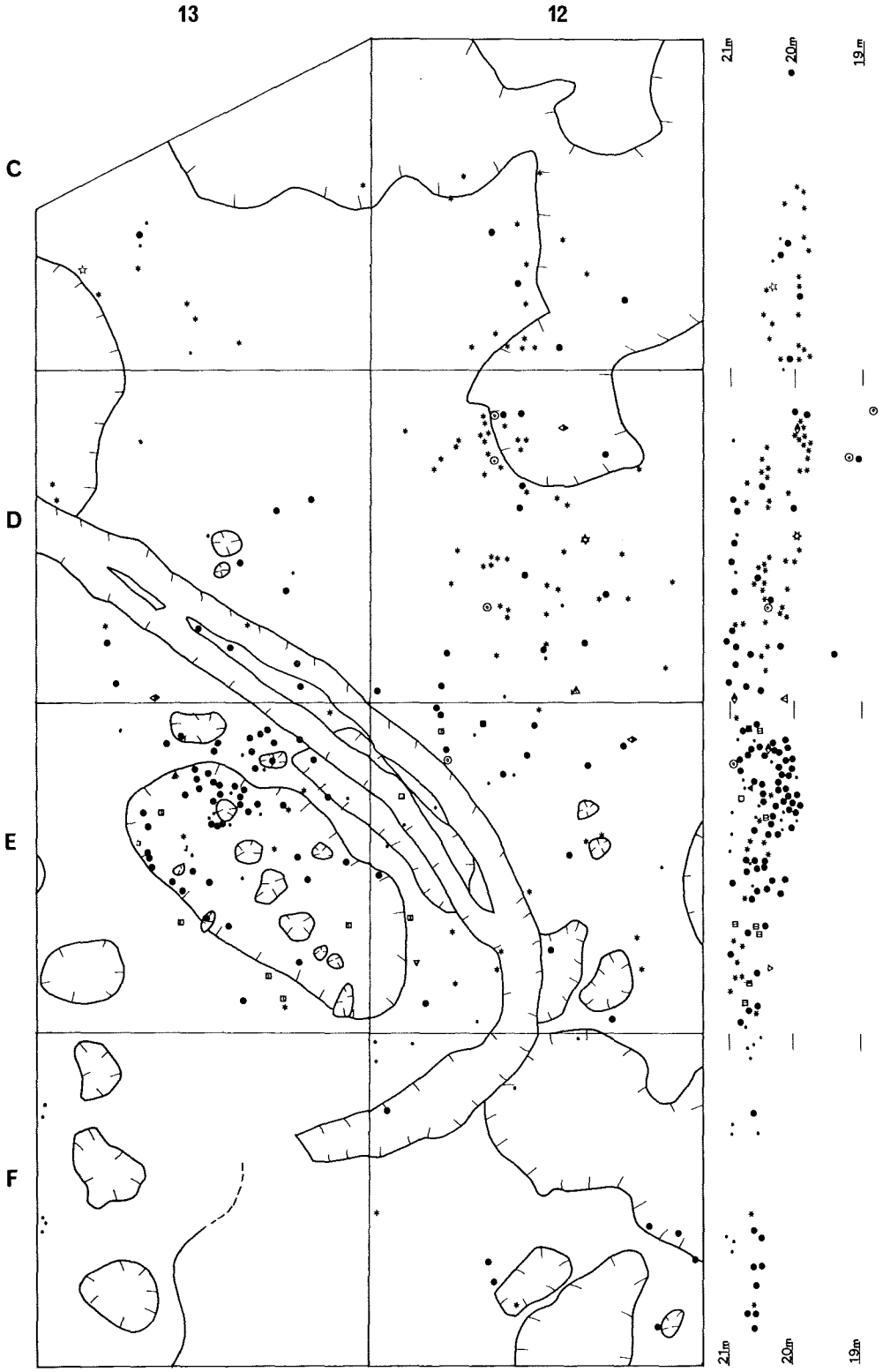


Fig. 76　C～F—12・13区第Ⅱ層遺物分布図3

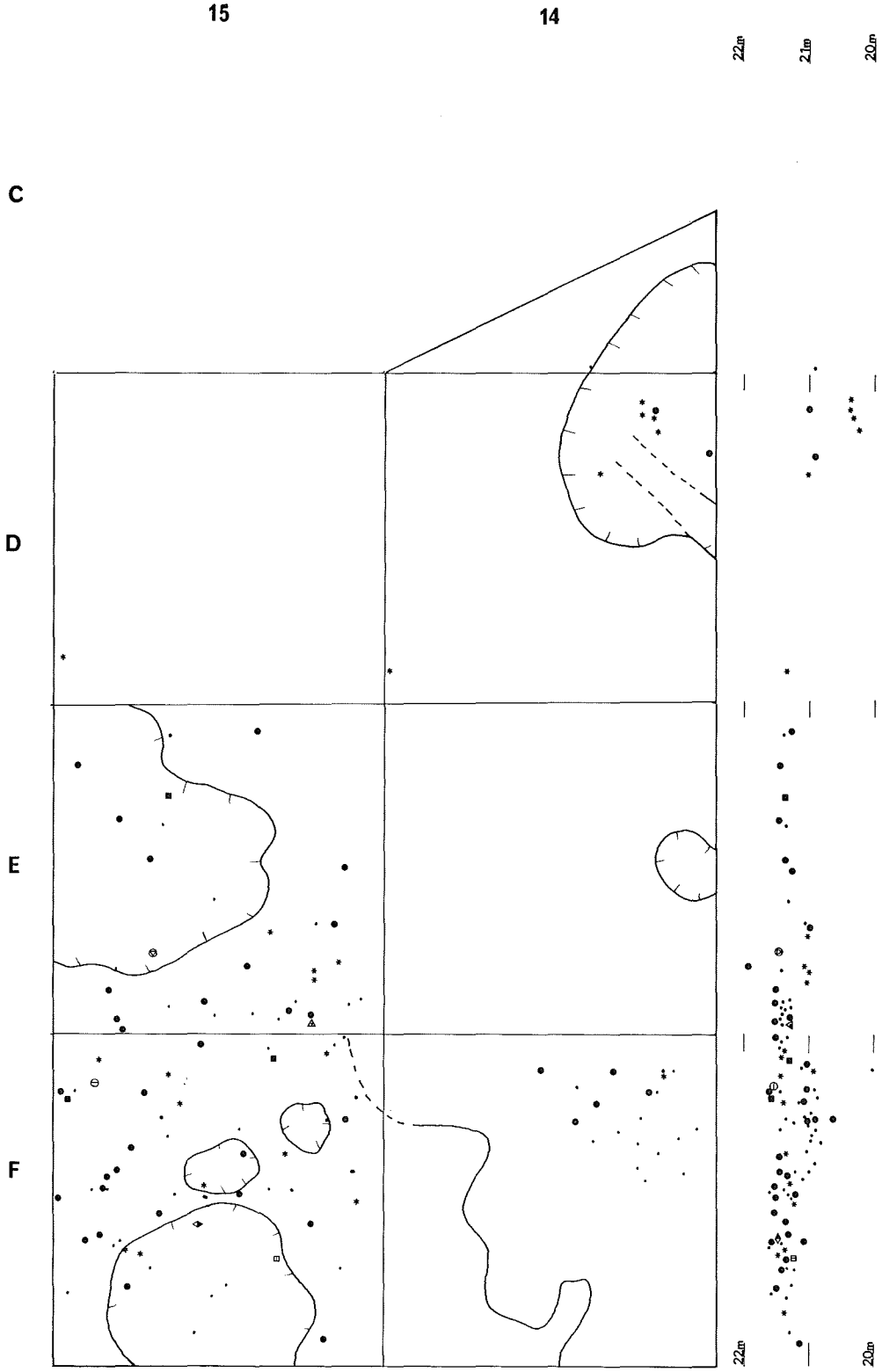


Fig. 77　C～F—14・15区第Ⅱ層遺物分布図4

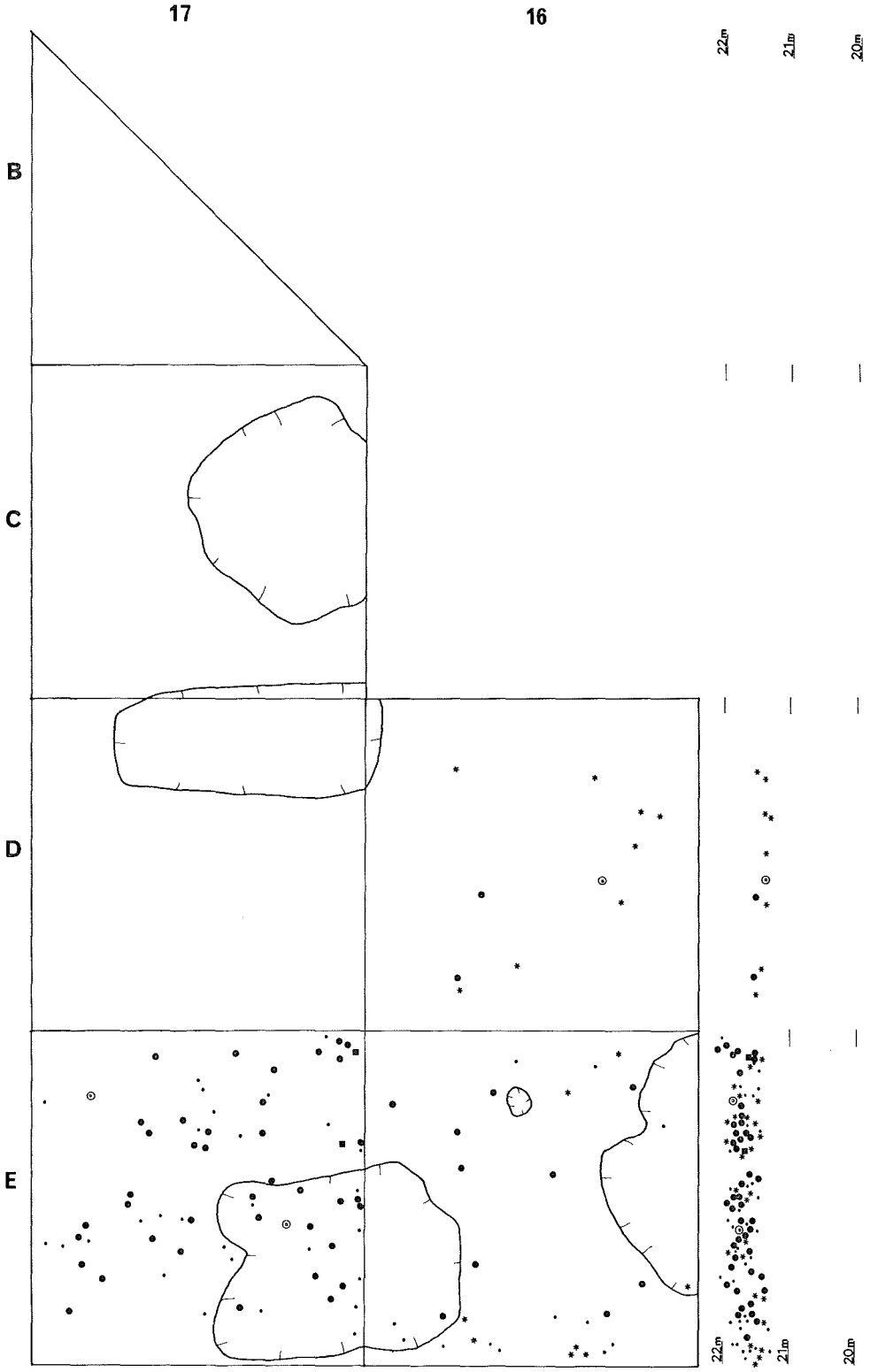


Fig. 78　B～E—16・17区第Ⅱ層遺物分布図5

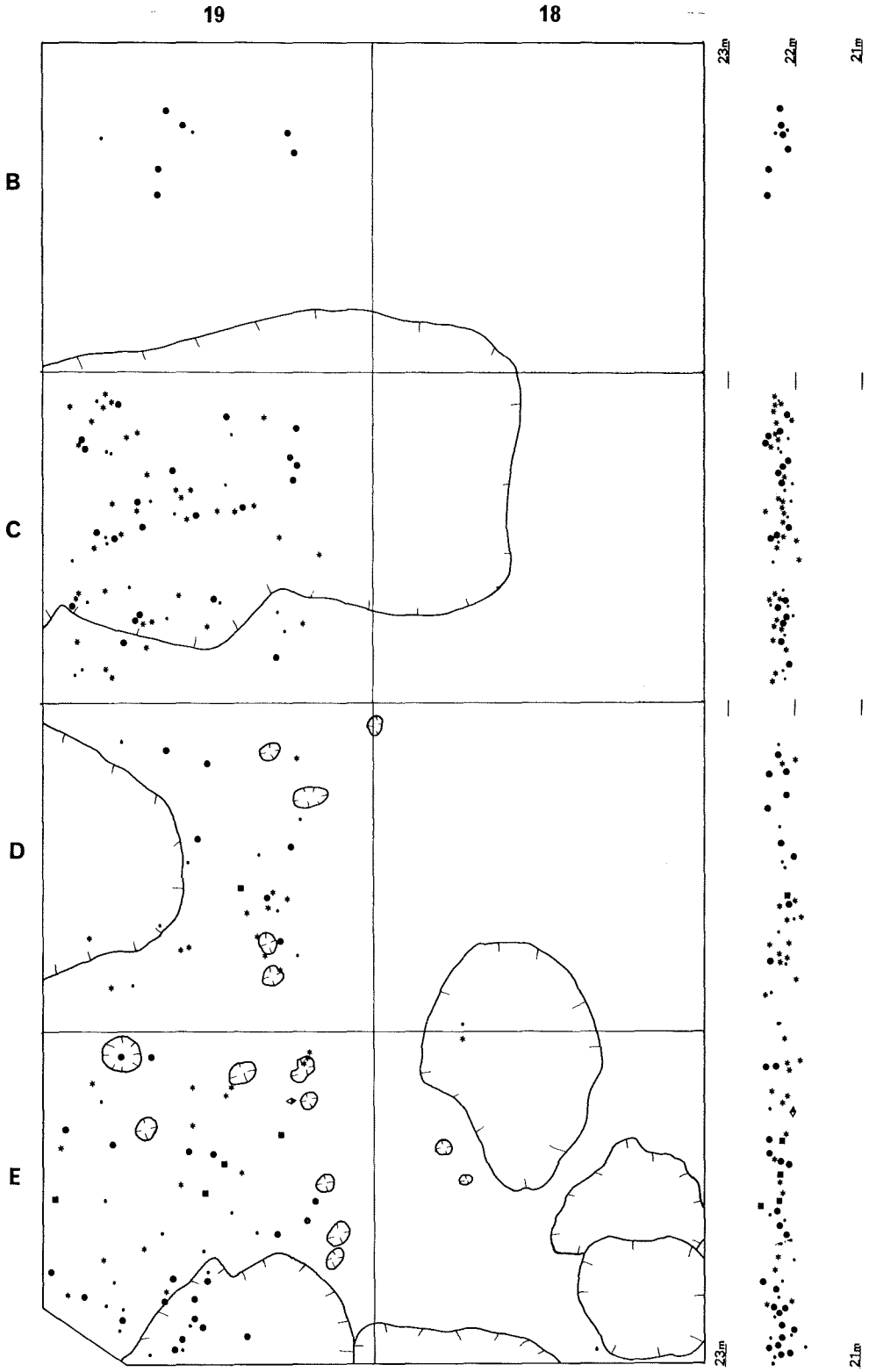


Fig. 79　B～E—18・19区第Ⅱ層遺物分布図6

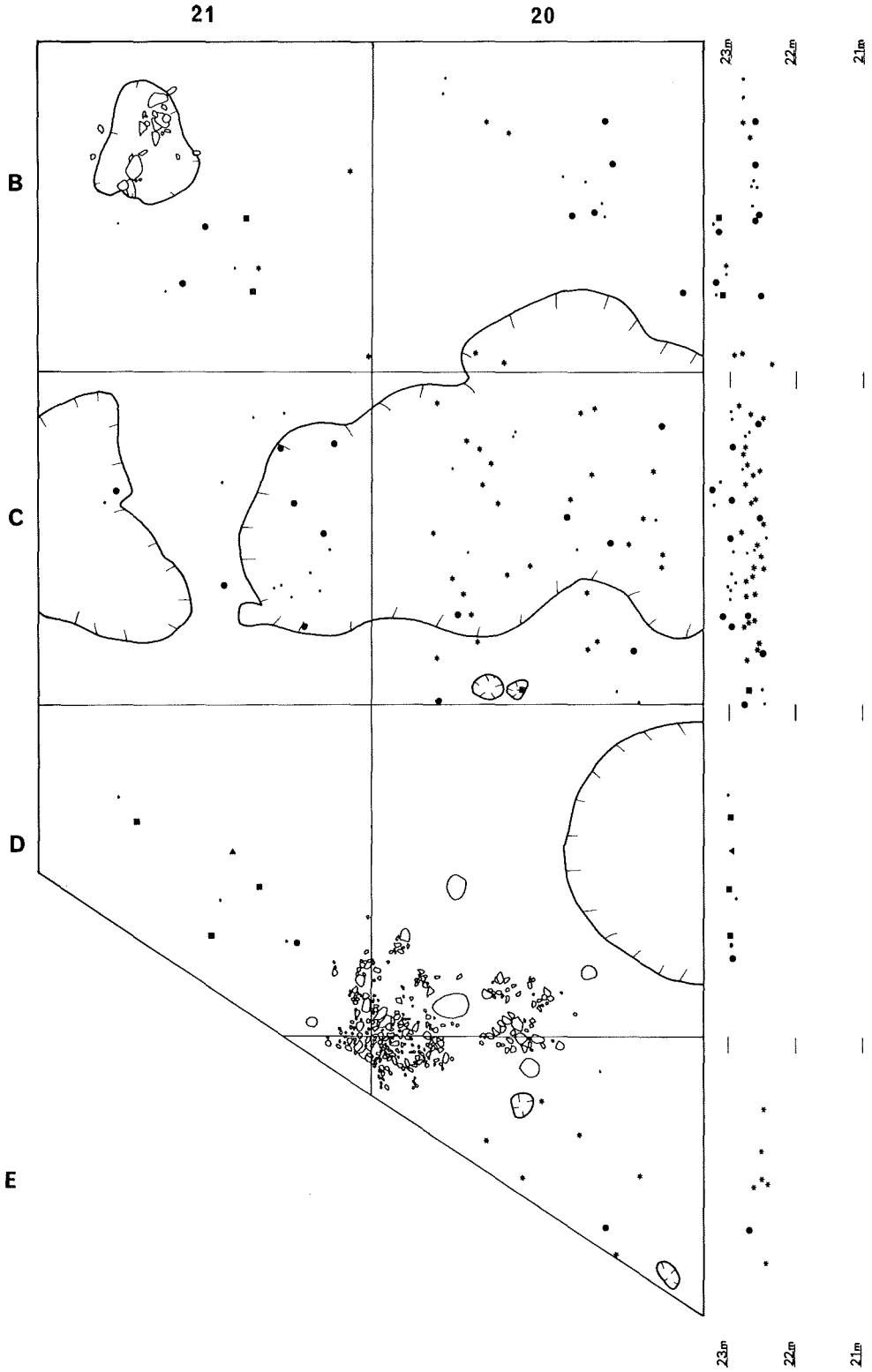


Fig. 80　B～E—20・21区第Ⅱ層遺物分布図7

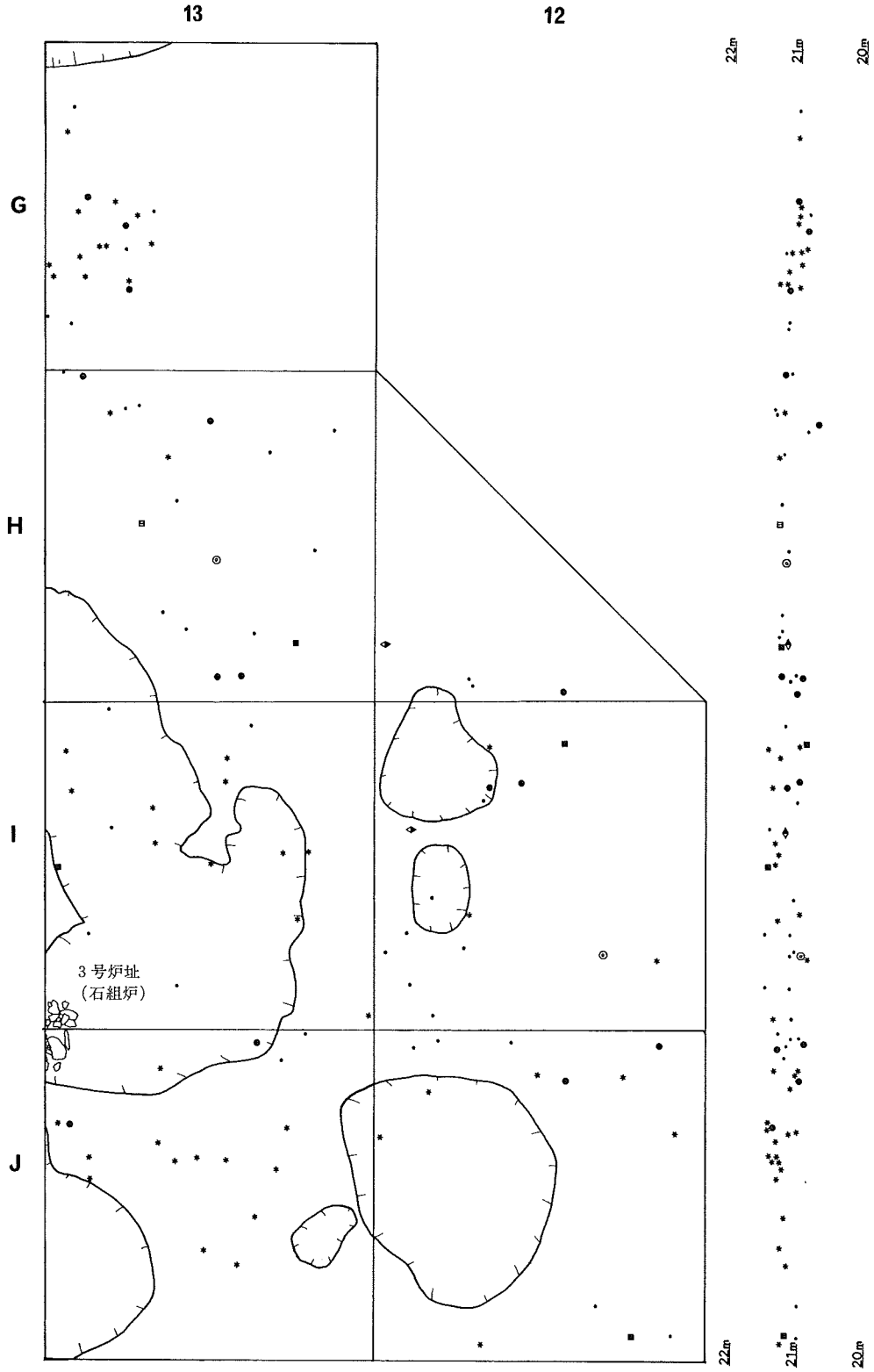


Fig. 81　G～J—12・13区第Ⅱ層遺物分布図8

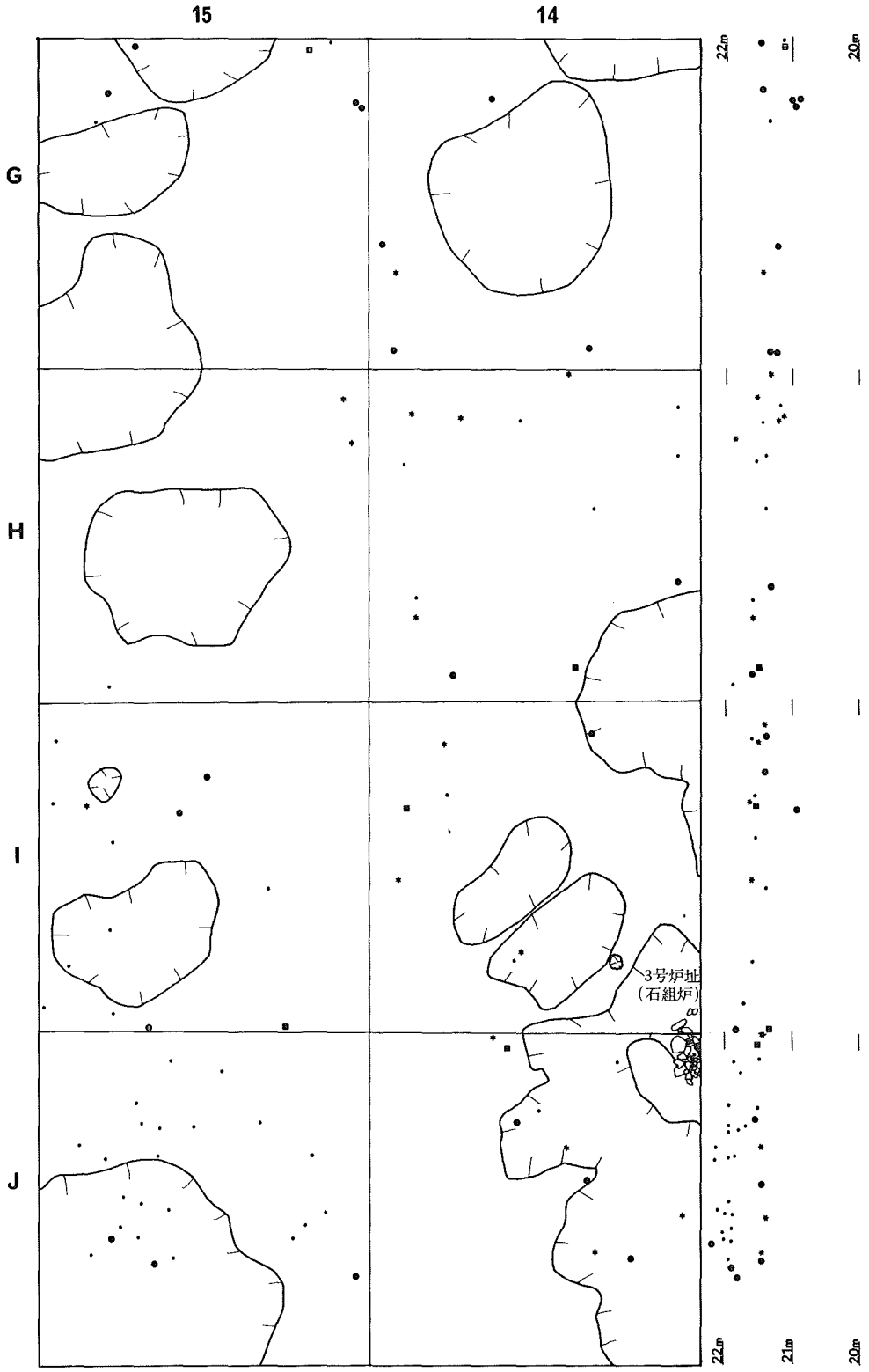


Fig. 82　G～J—14・15区第Ⅱ層遺物分布図9

Fig. 83　F～Ⅰ—16・17区第Ⅱ層遺物分布図10

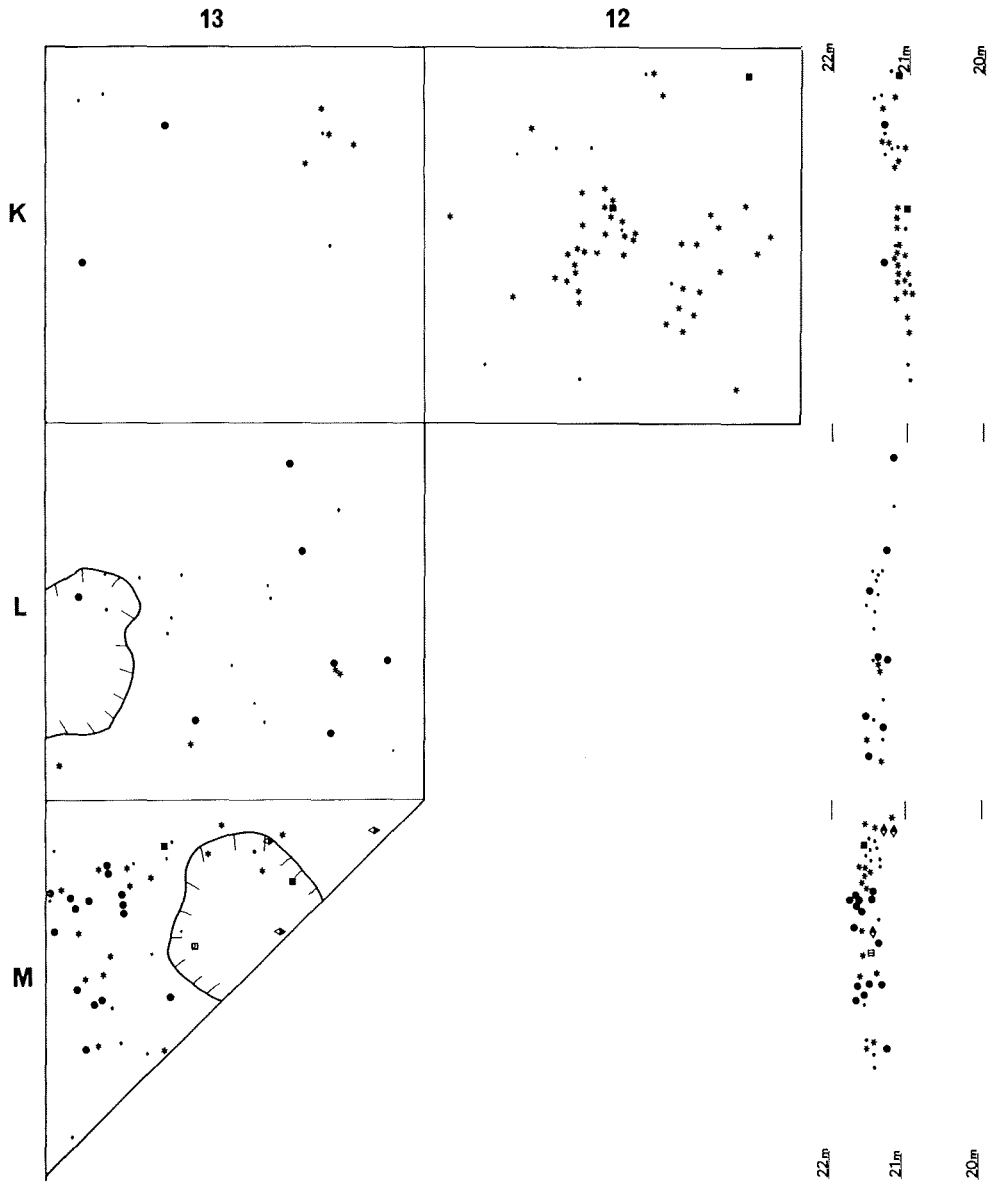


Fig. 84　K～M—12・13区第Ⅱ層遺物分布図11

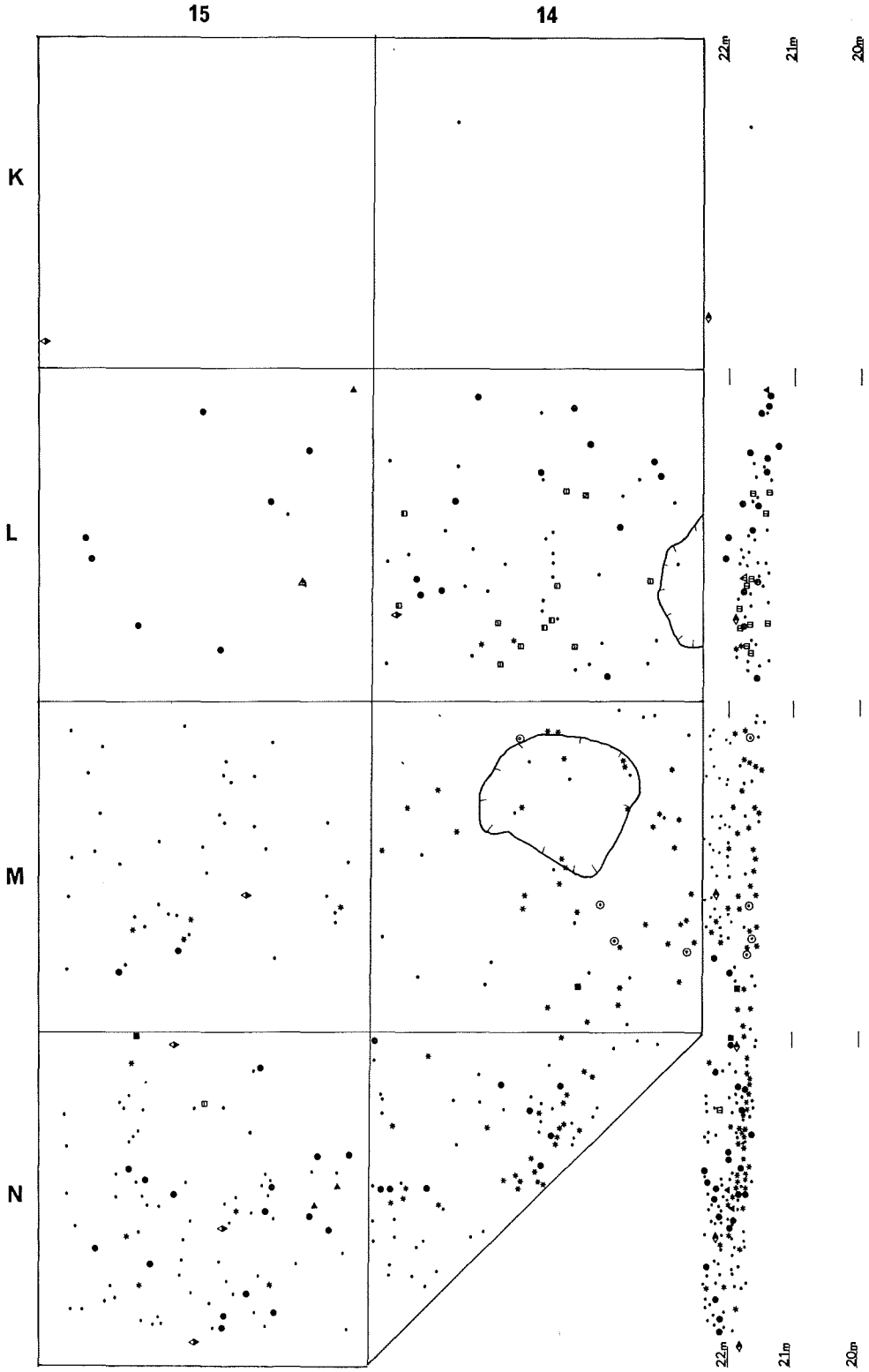
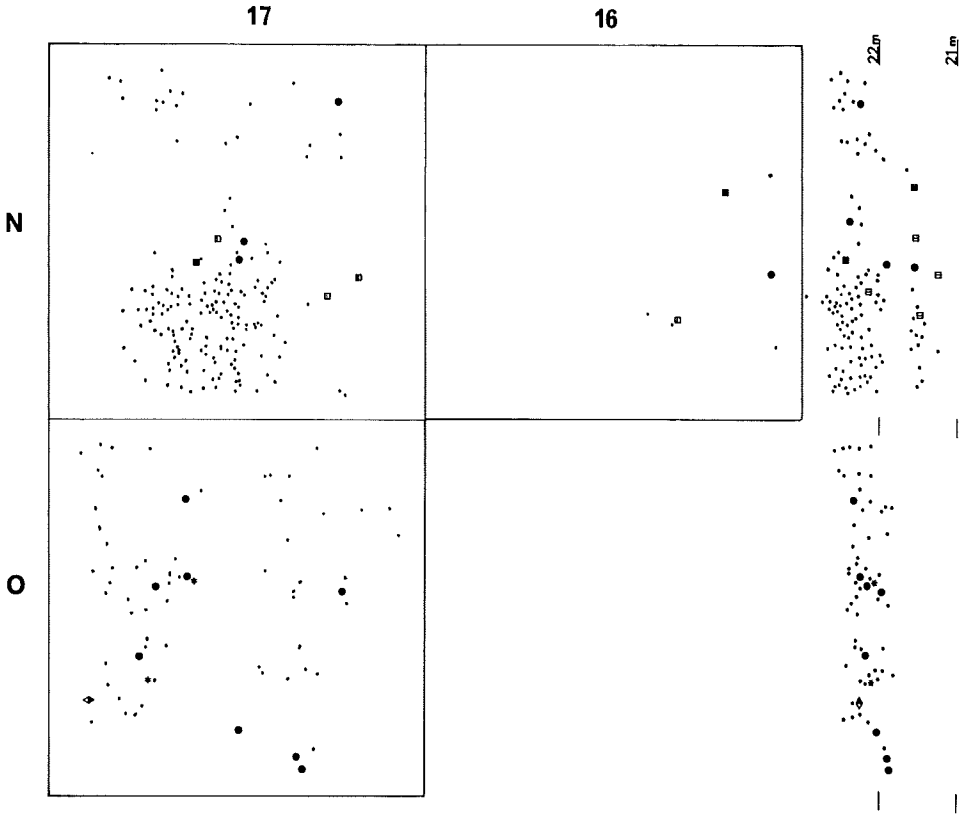


Fig. 85　K～N—14・15区第Ⅱ層遺物分布図12

Fig. 86　J～M—16・17区第Ⅱ層遺物分布図13



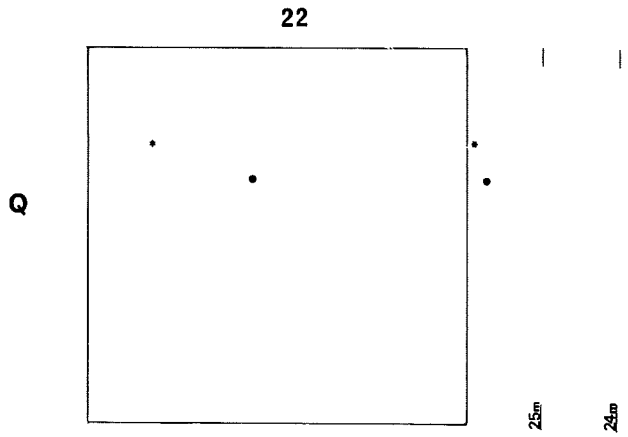


Fig. 87　N～O—16・17区，Q—22区第Ⅱ層遺物分布図14

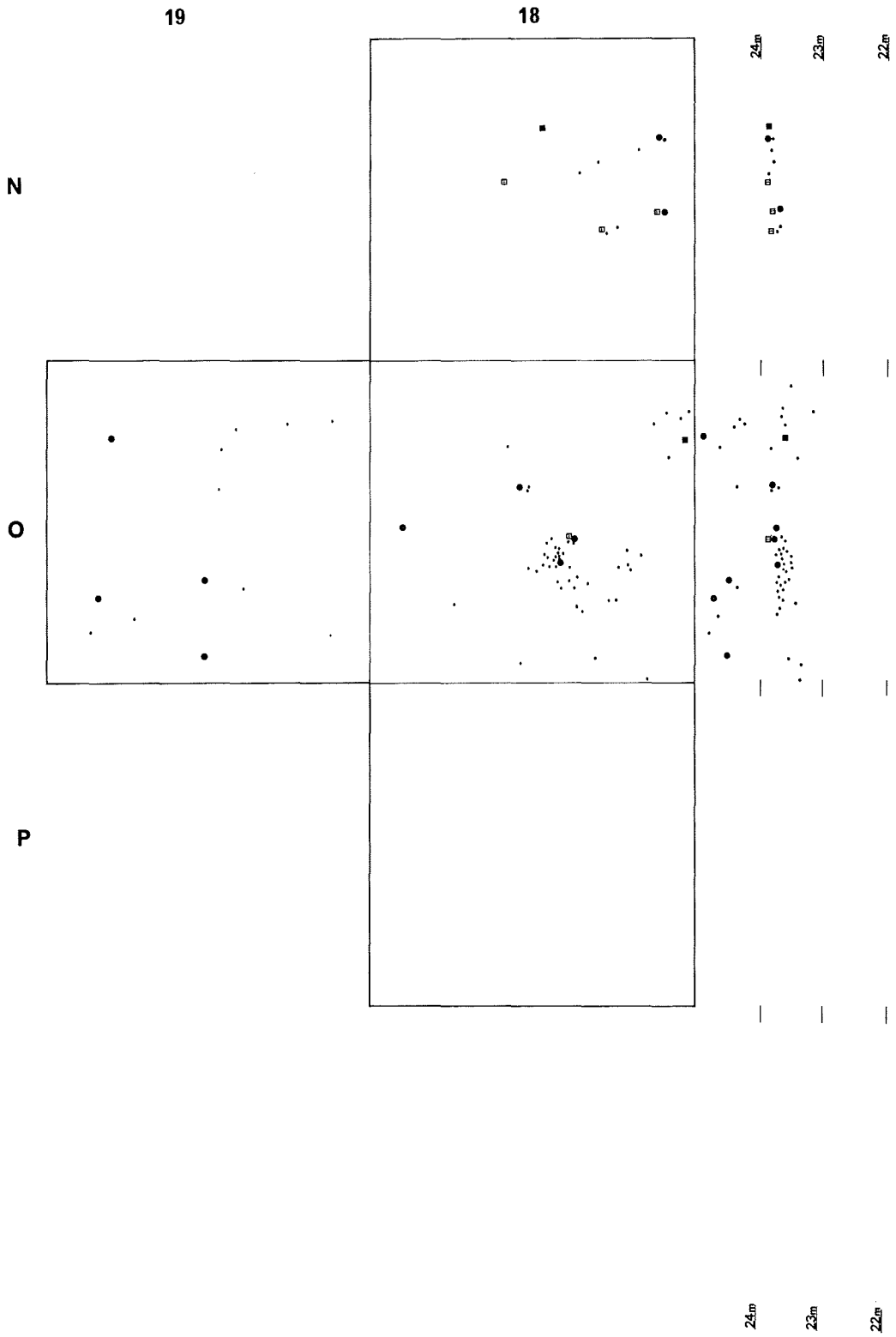


Fig. 88　N～P—18・19区第Ⅱ層遺物分布図15

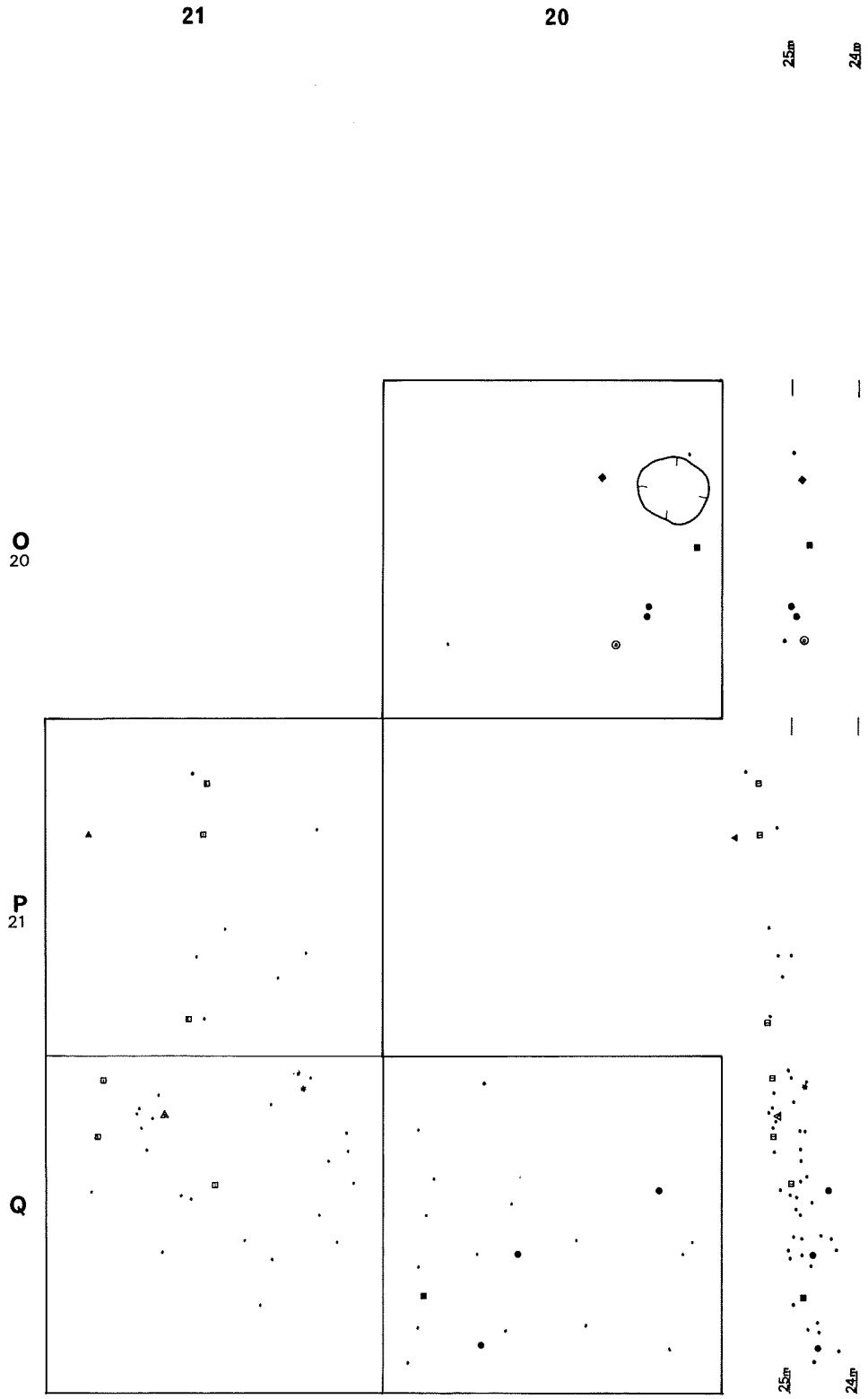


Fig. 89　O～Q—20・21区第Ⅱ層遺物分布図16

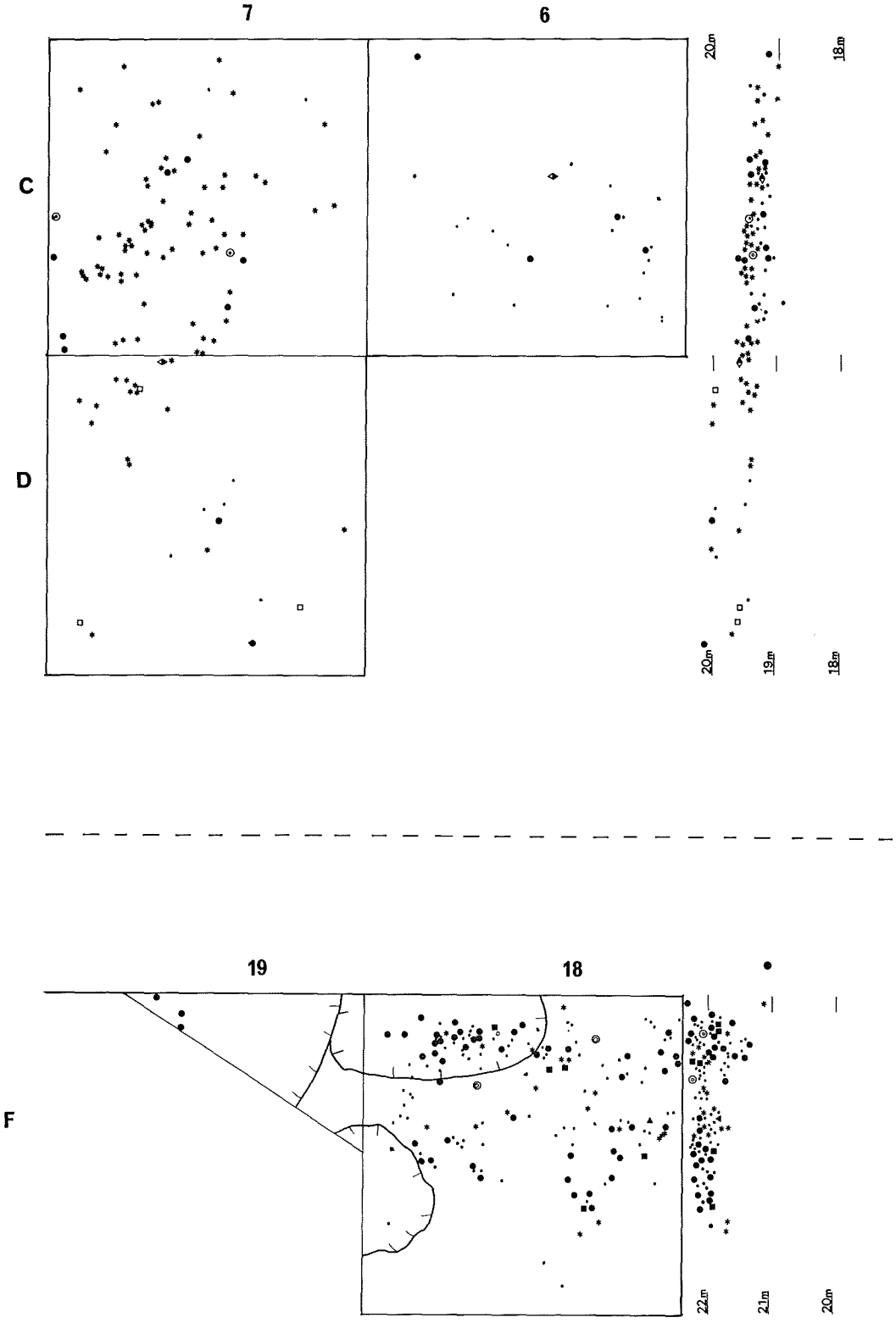


Fig. 90　C～D－6・7区，F－18・19区第Ⅱ層遺物分布図17

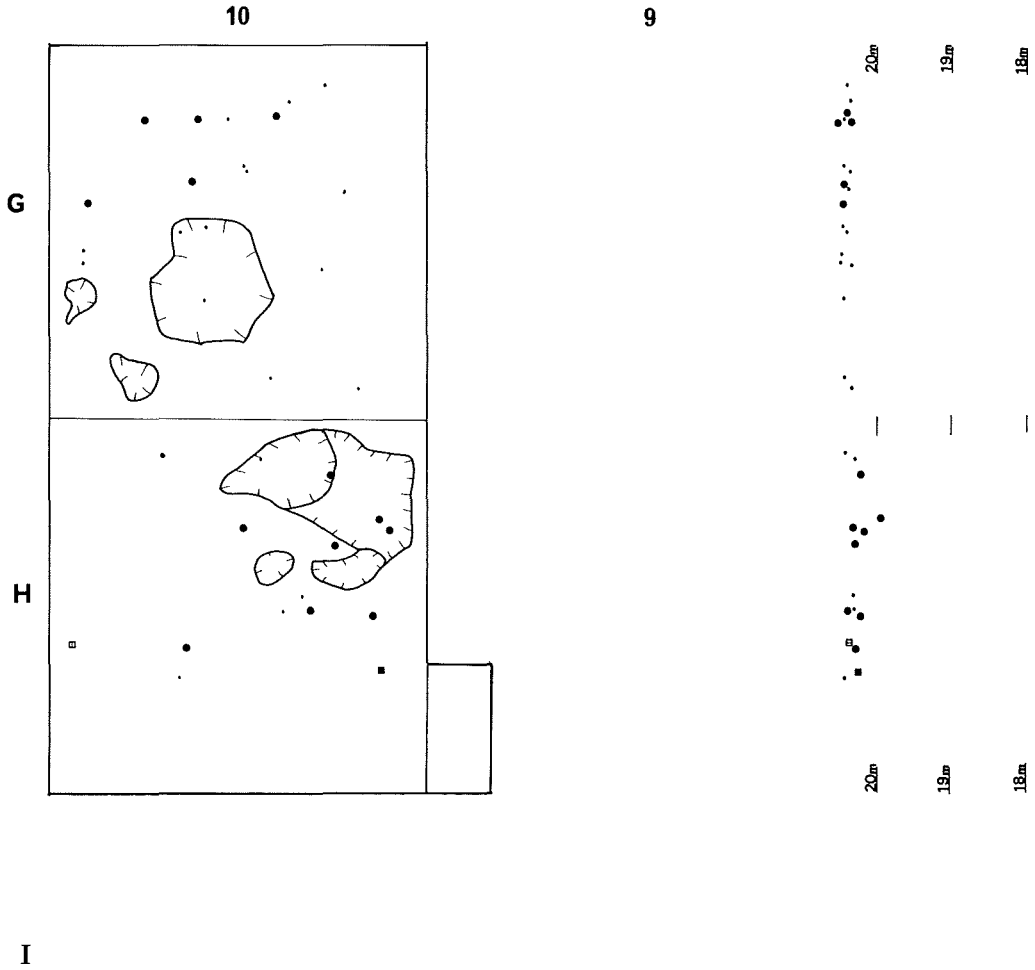
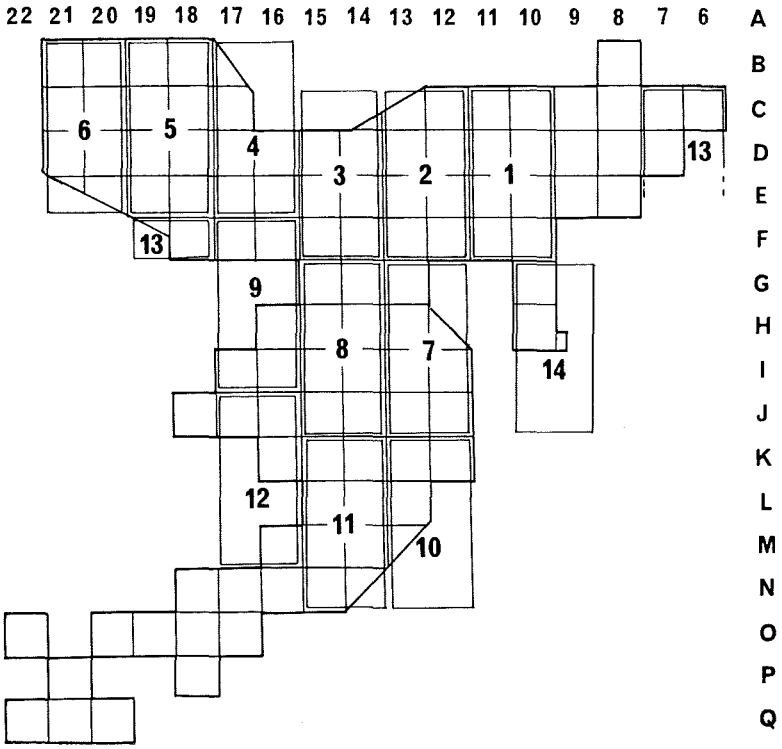


Fig. 91　G～I－9・10区第Ⅱ層遺物分布図18



■ 石　鏃
◇ スクレイパー
⦶ 加工痕ある石器
◎ 使用痕ある剥片
□ 石　匙
△ 石　槍
◆ 磨　石
⊞ 原　石
⊟ 敲　石
▲ 石　核
⊠ 石　錐
☗ 異形石器
☆ 砥　石
◓ 石　皿
● フレイク
• チップ
* 土器片

Fig. 92　第Ⅲ層における遺物分布図の順番と記号

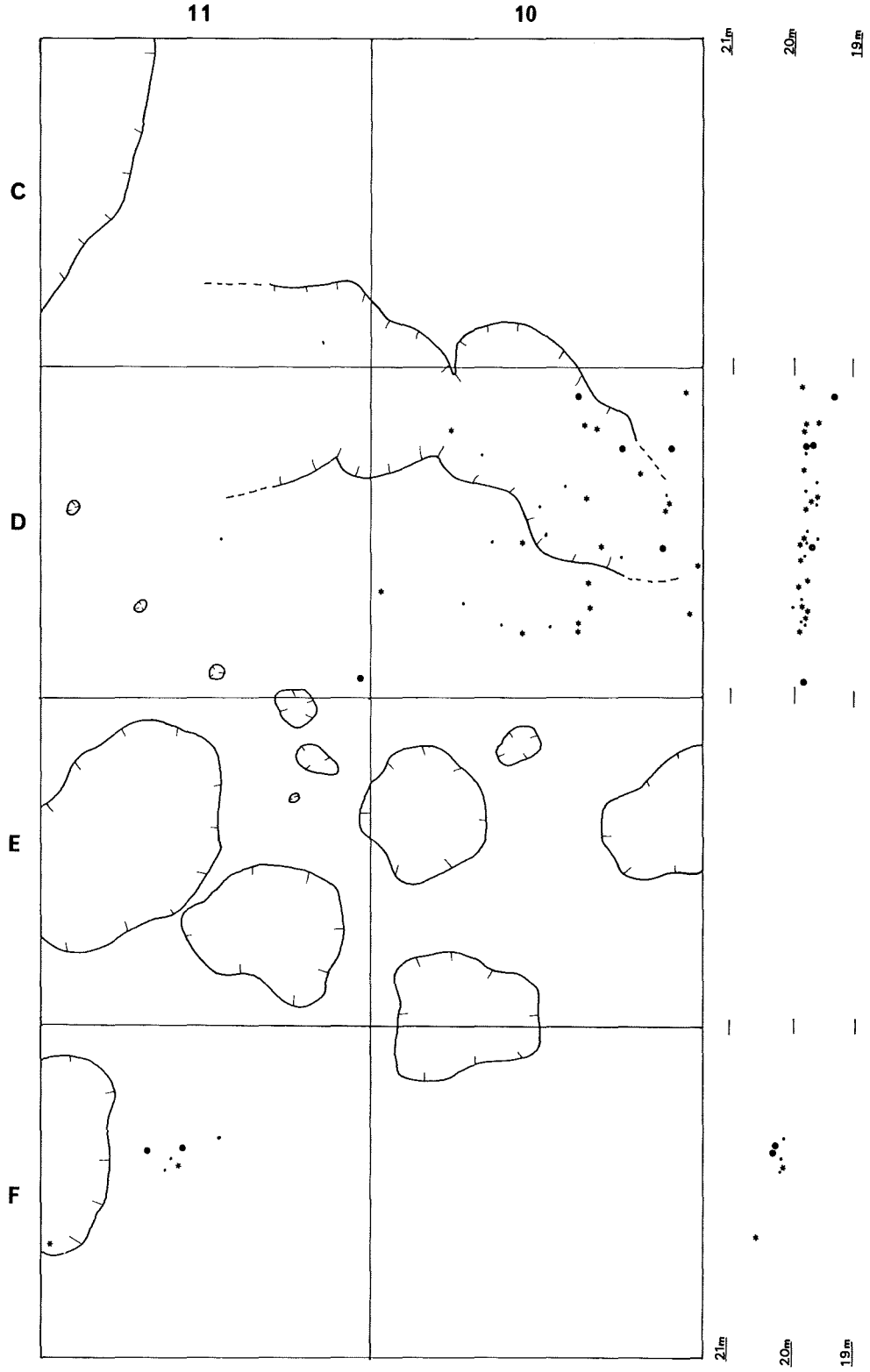


Fig. 93　C～F—10・11区第Ⅲ層遺物分布図1

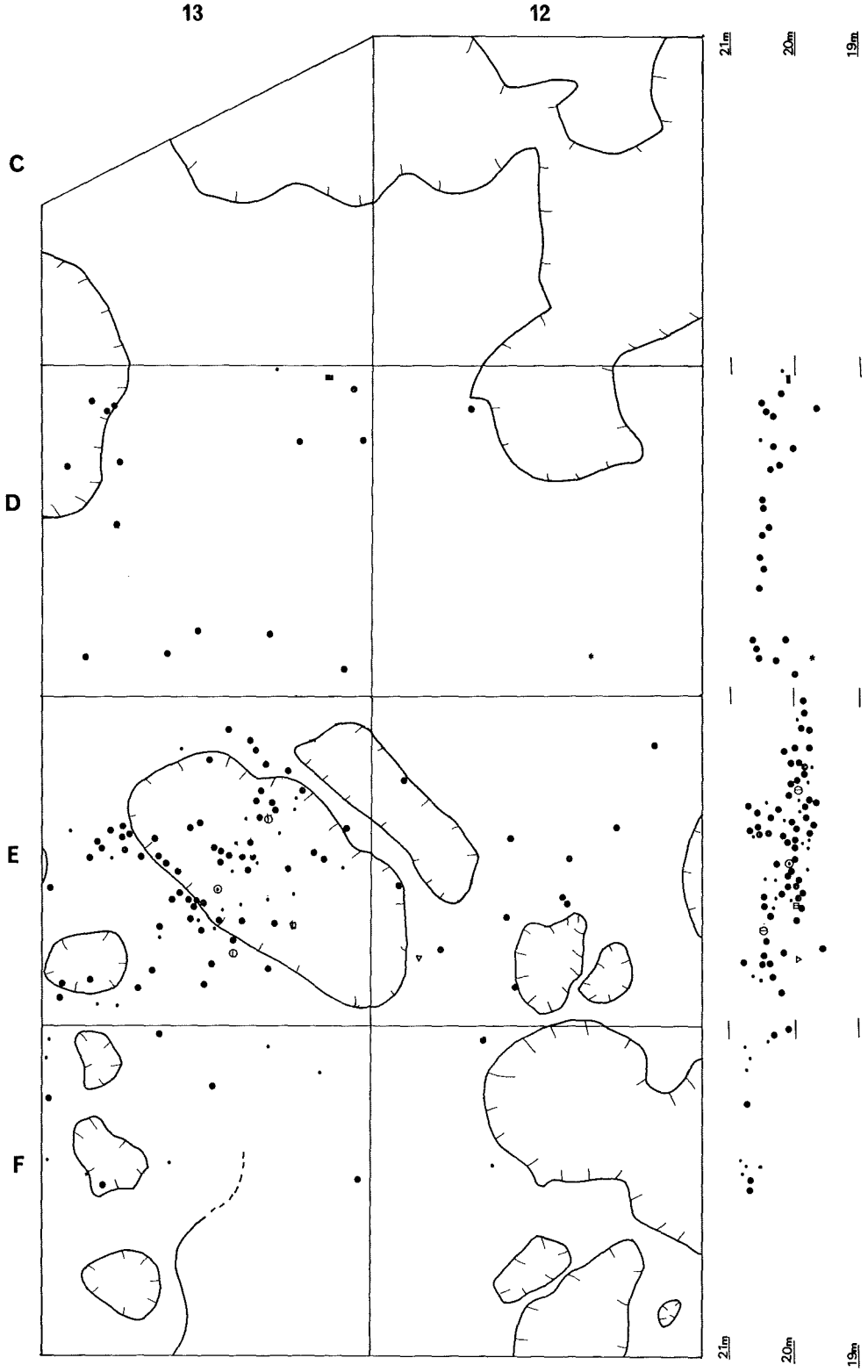


Fig. 94　C～F—12・13区第Ⅲ層遺物分布図2

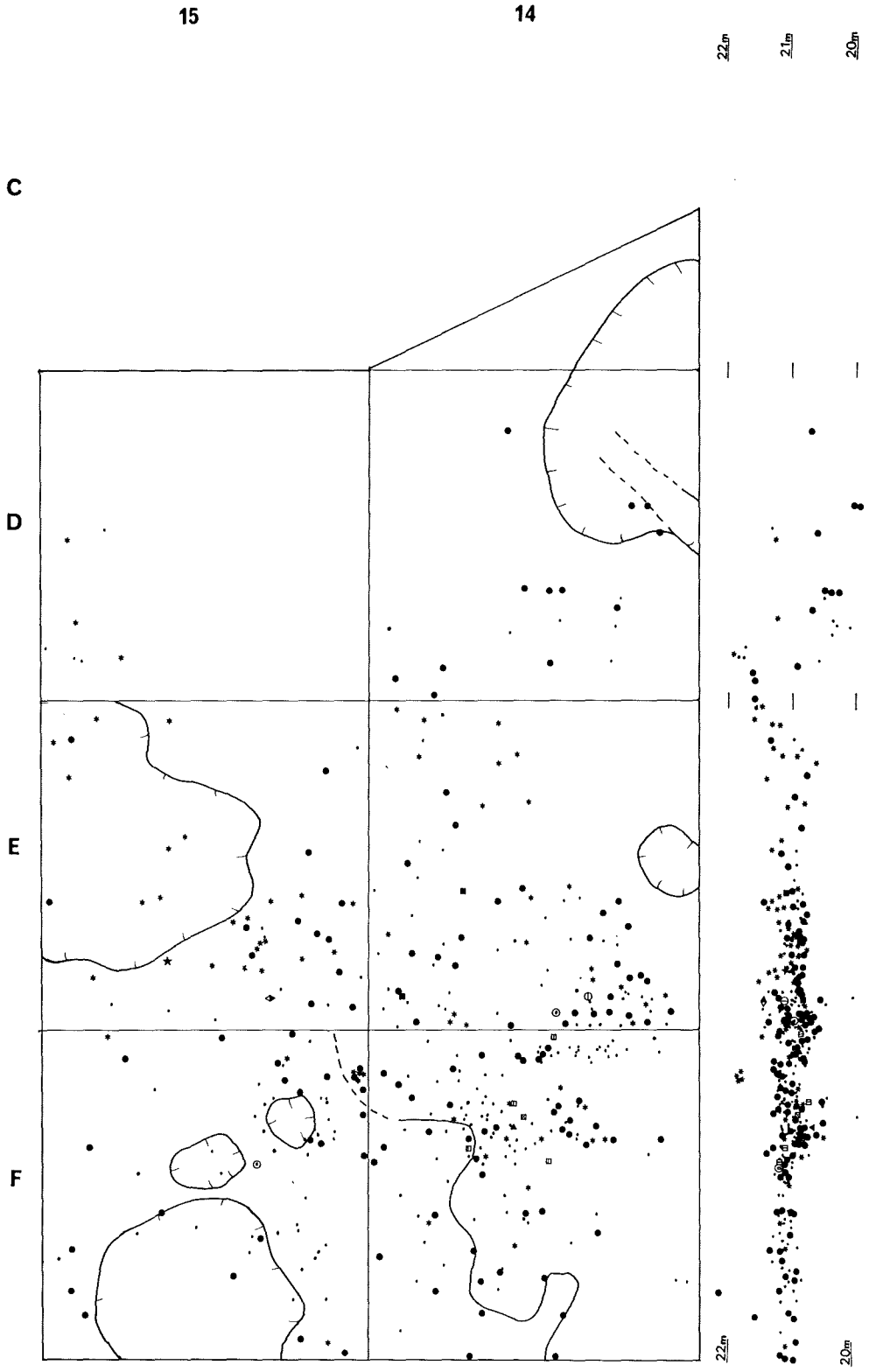


Fig. 95　C～F—14・15区第Ⅲ層遺物分布図3

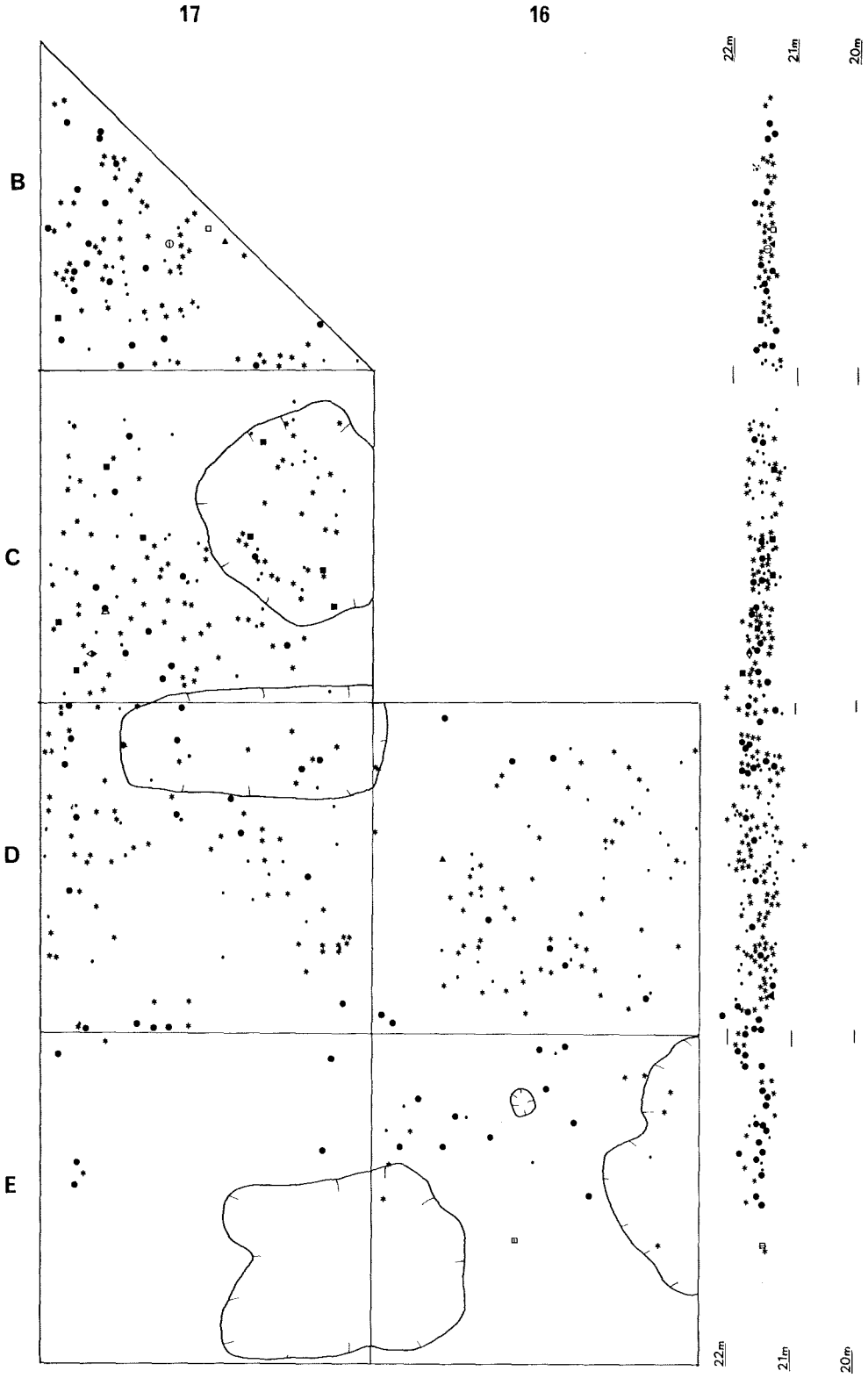


Fig. 96　B～E—16・17区第Ⅲ層遺物分布図 4

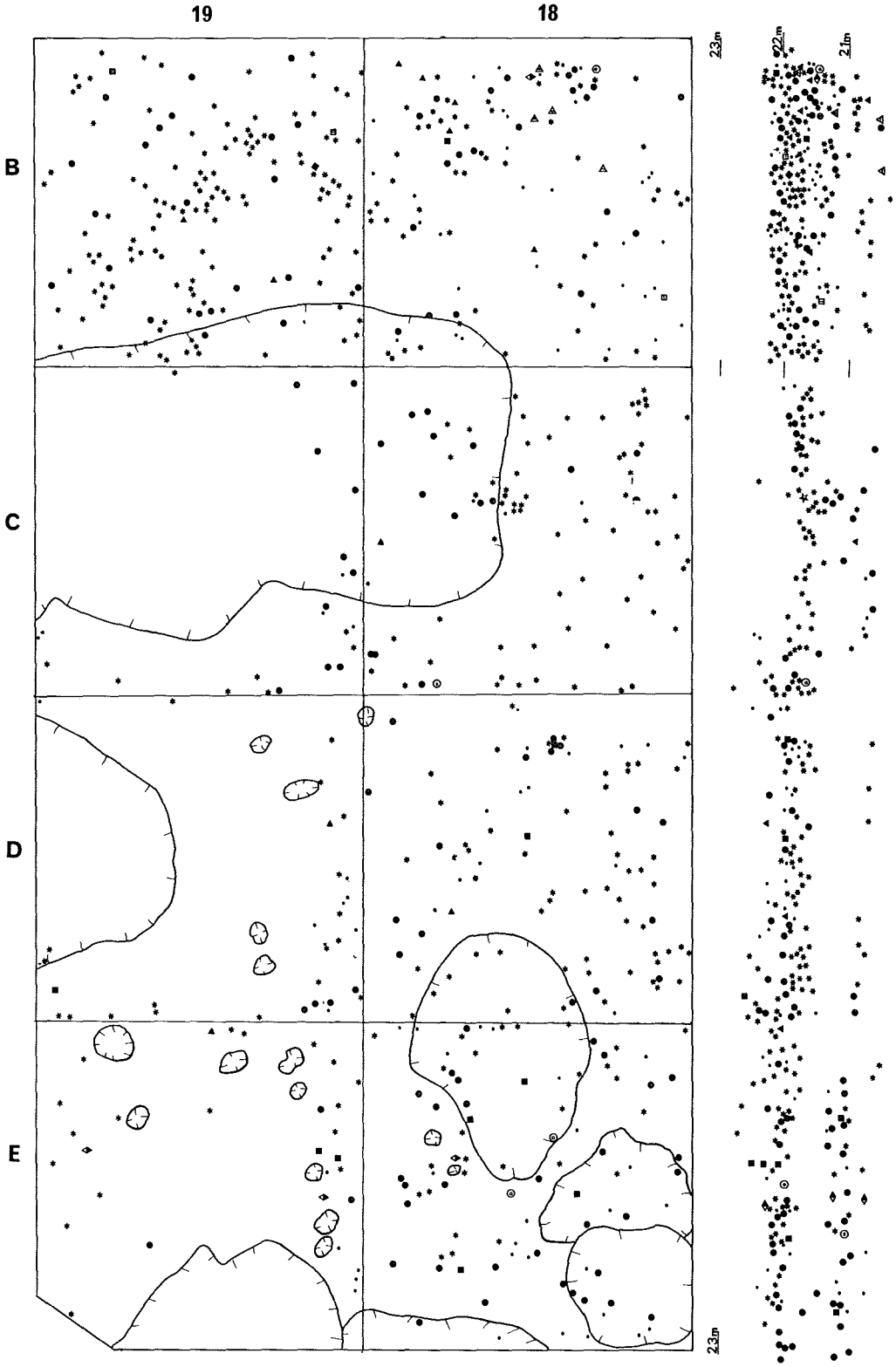


Fig. 97　B～E—18・19区第Ⅲ層遺物分布図5

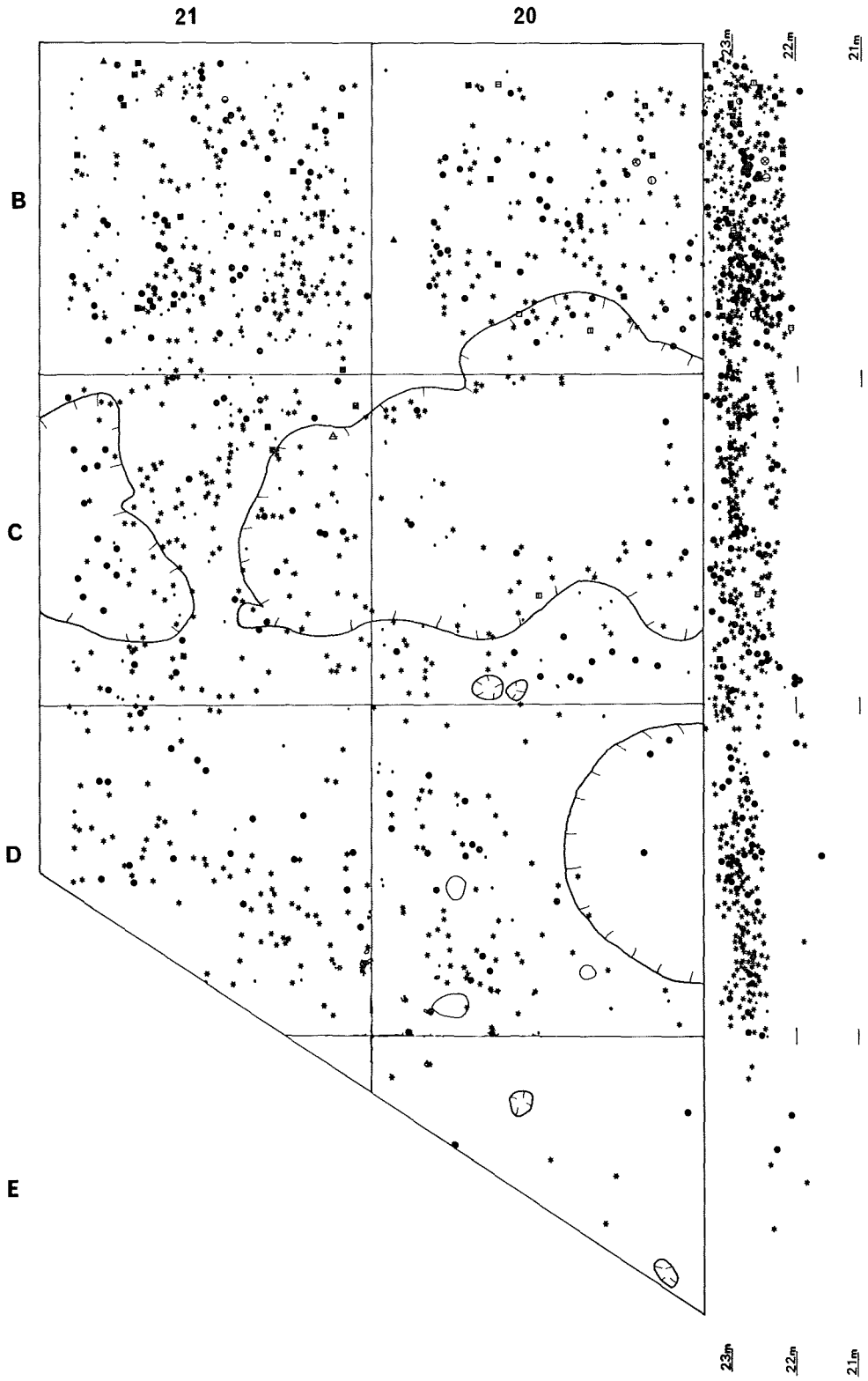


Fig. 98　B～E—20・21区第Ⅲ層遺物分布図6

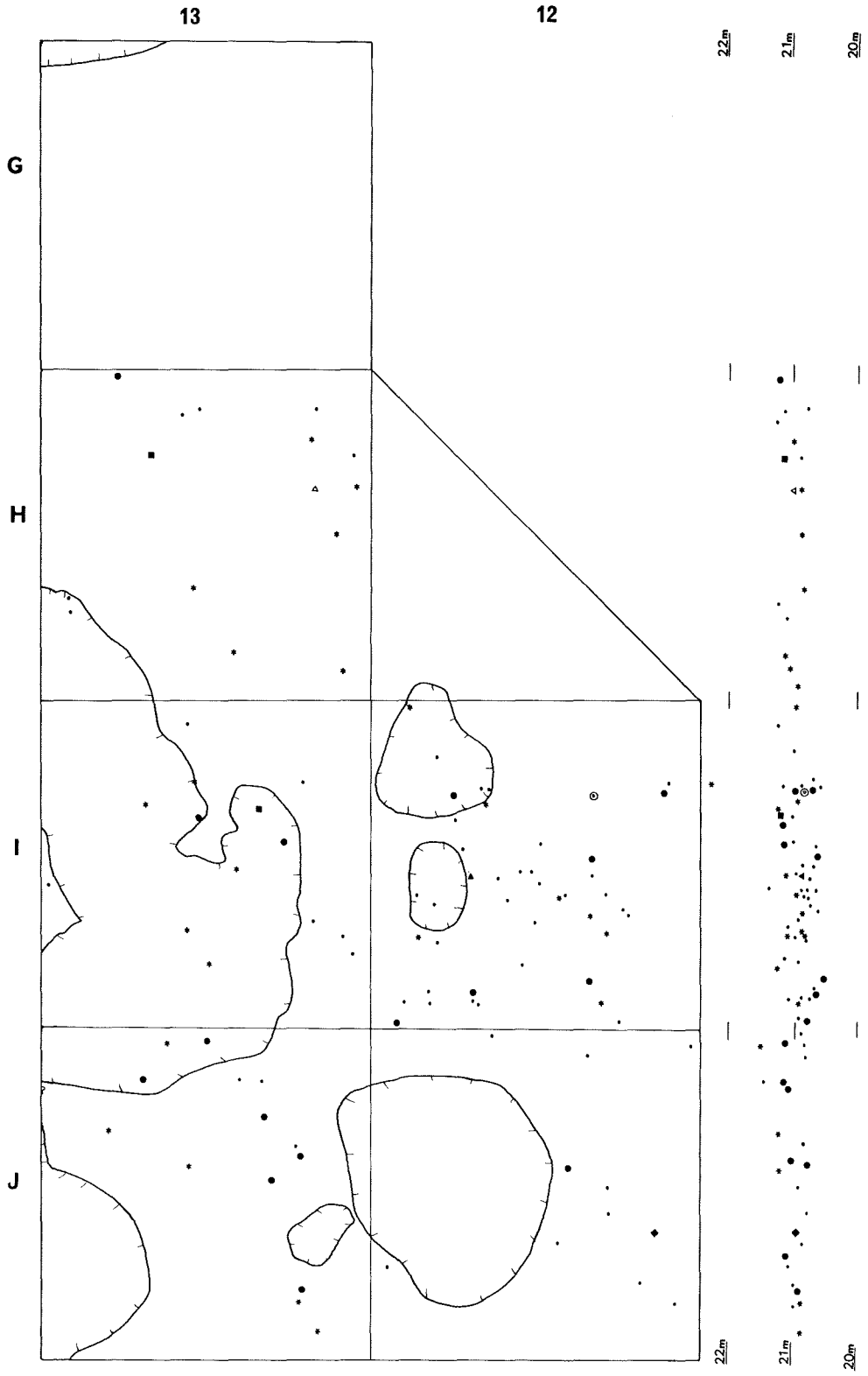


Fig. 99　G～J—12・13区第Ⅲ層遺物分布図7

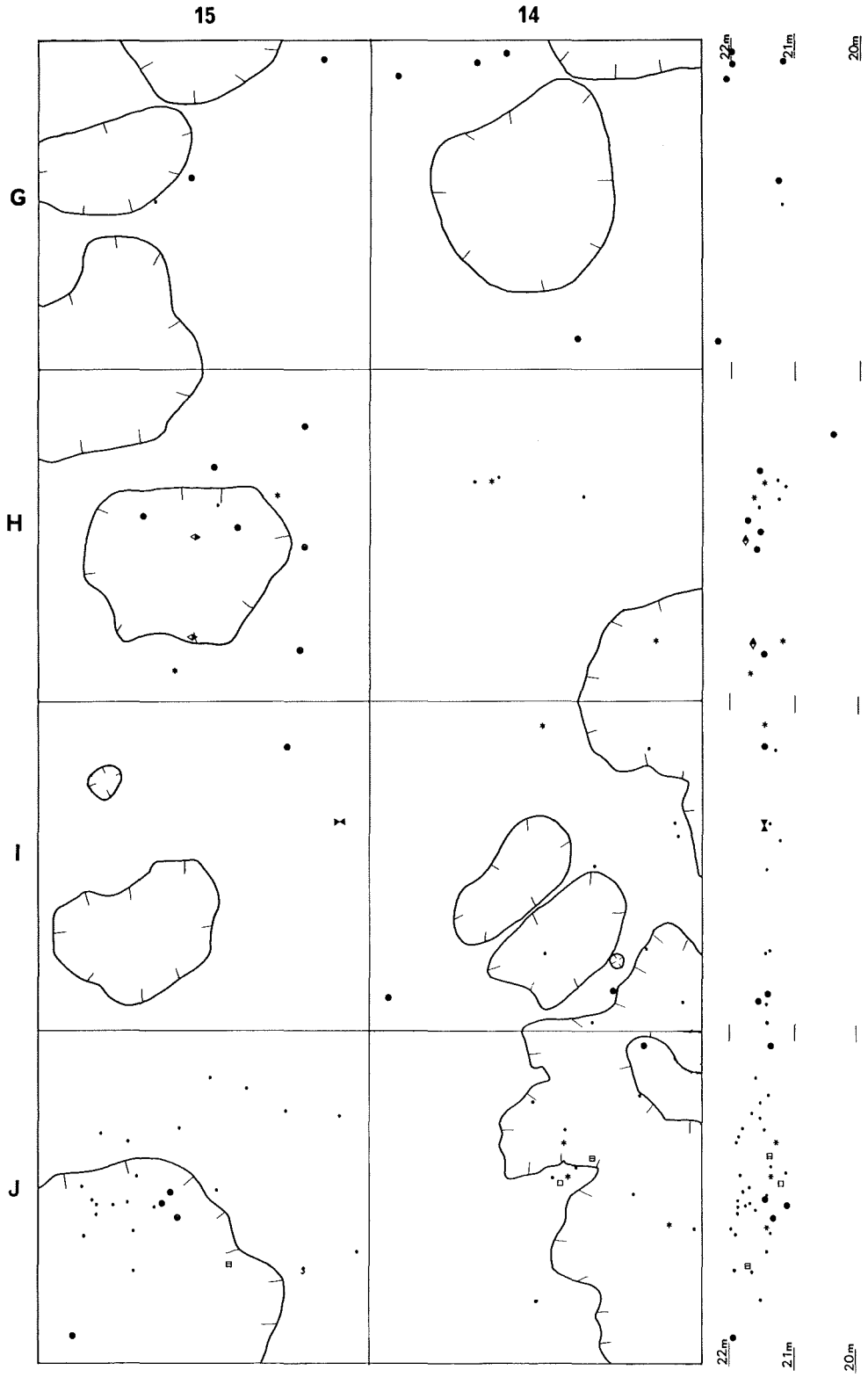


Fig. 100　G～J—14・15区第Ⅲ層遺物分布図8

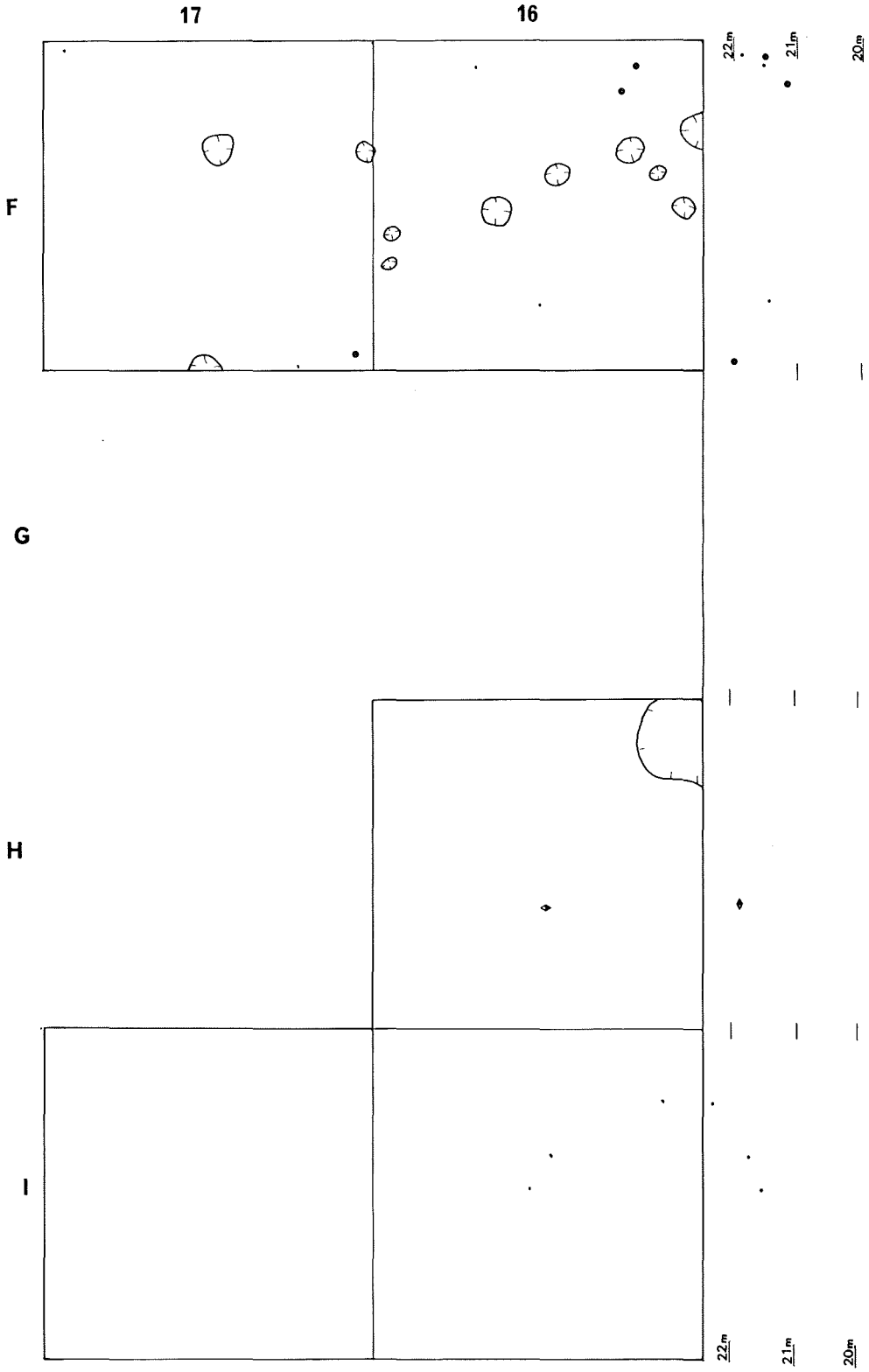


Fig. 101　F～I—16・17区第Ⅲ層遺物分布図9

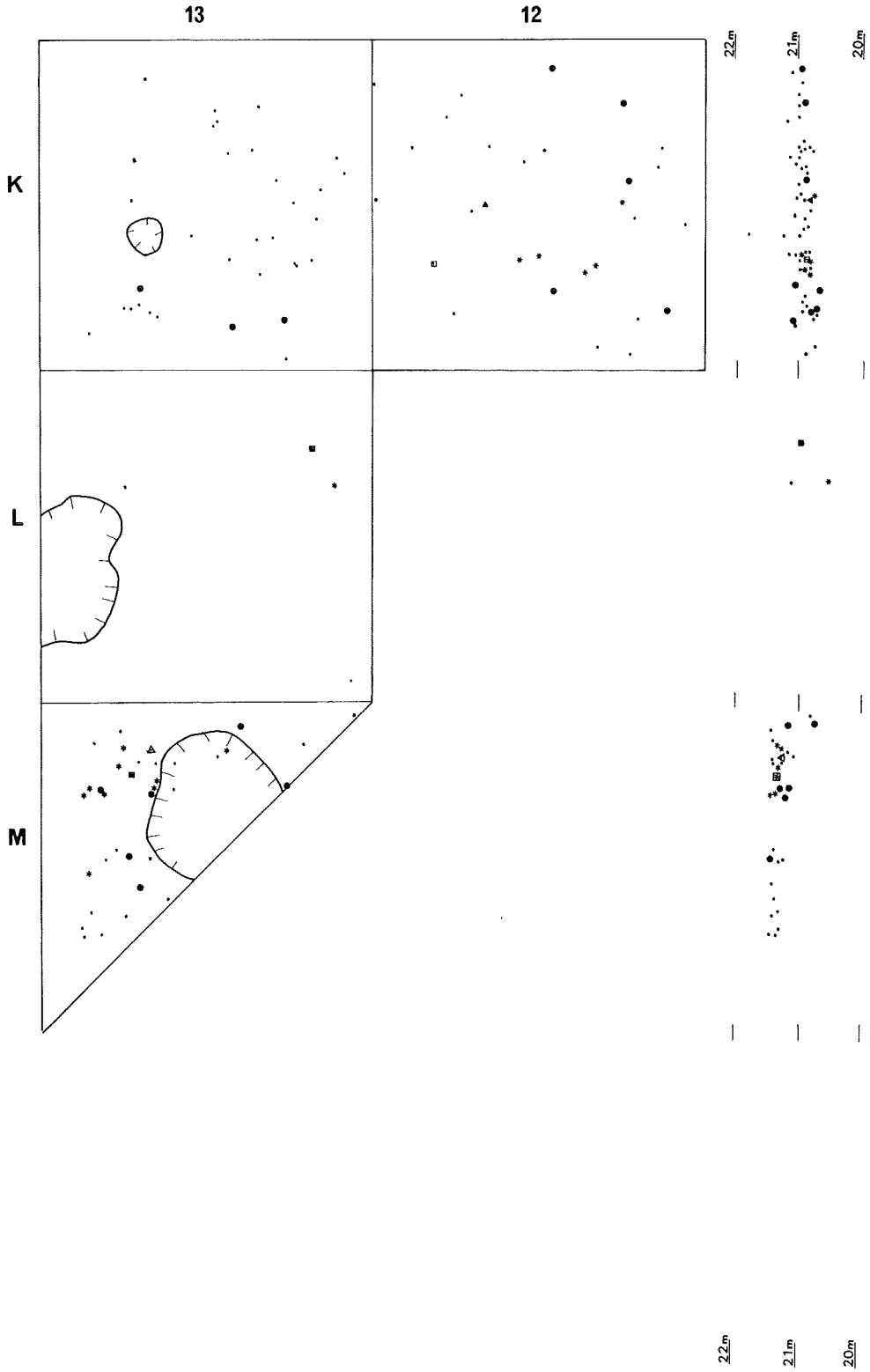


Fig. 102　K～M—12・13区第Ⅲ層遺物分布図10

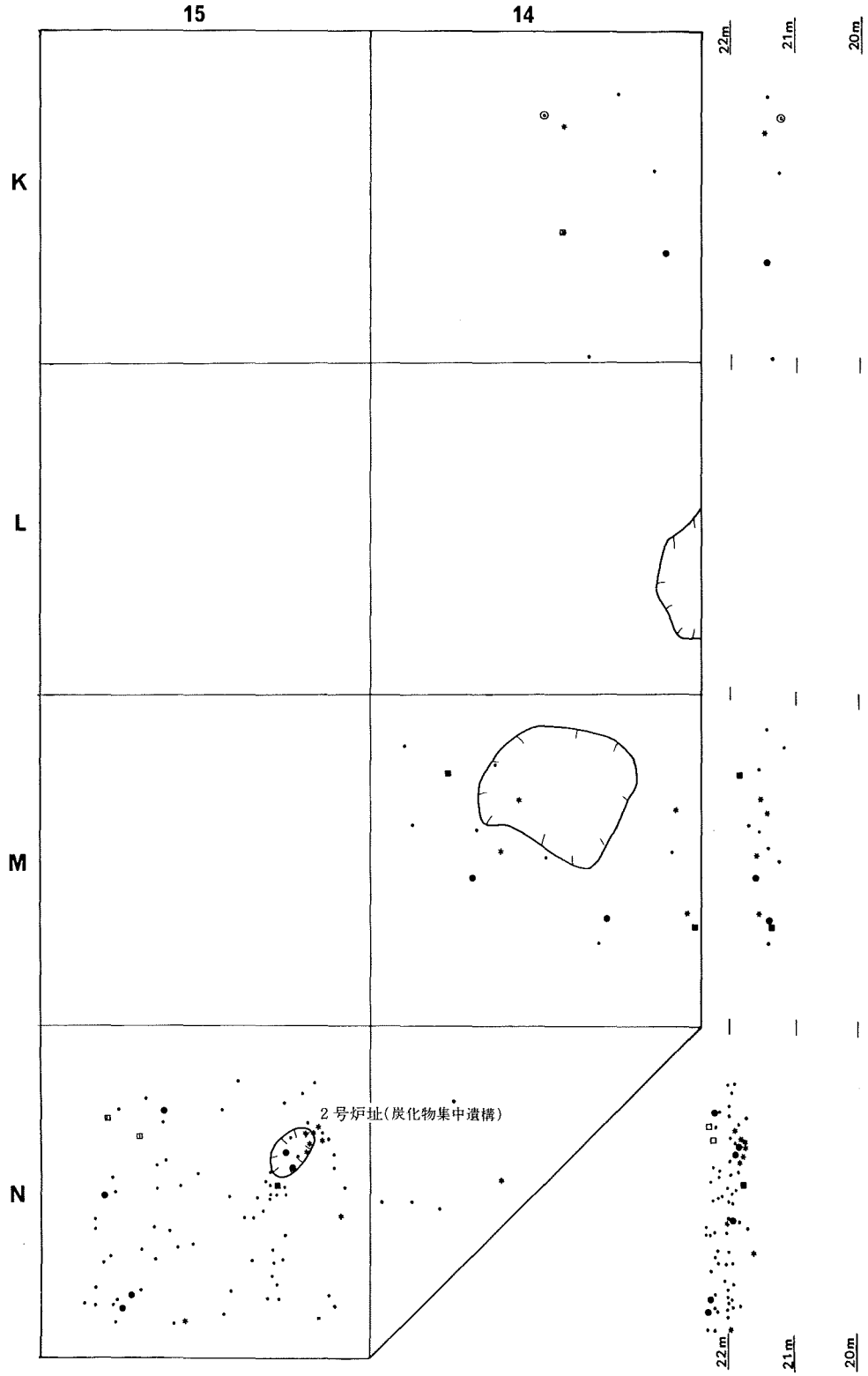
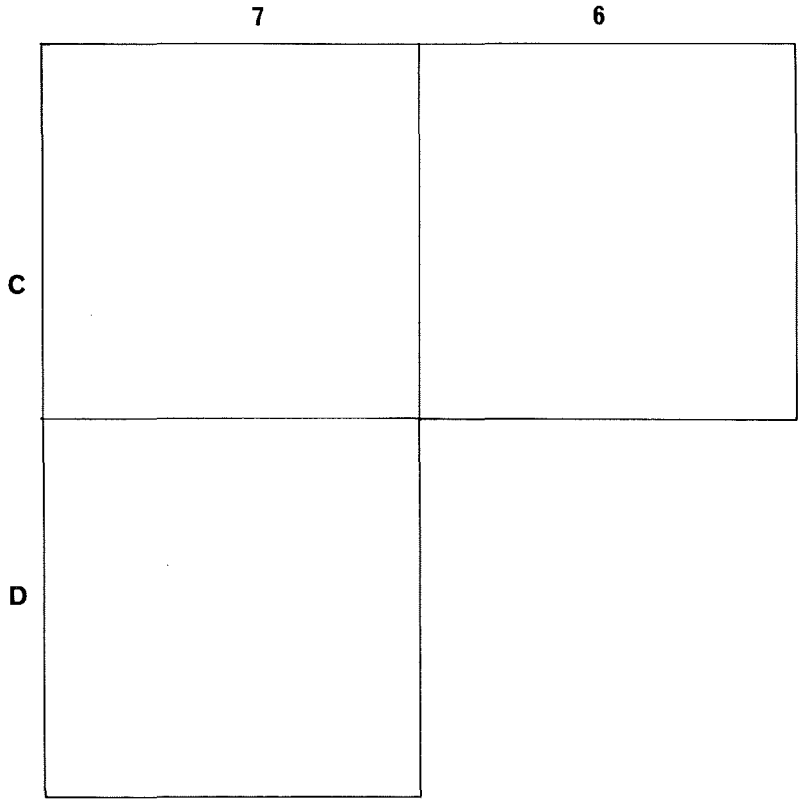


Fig. 103　K～M—14・15区第Ⅲ層遺物分布図11

Fig. 104　J～M—16・17区第Ⅲ層遺物分布図12



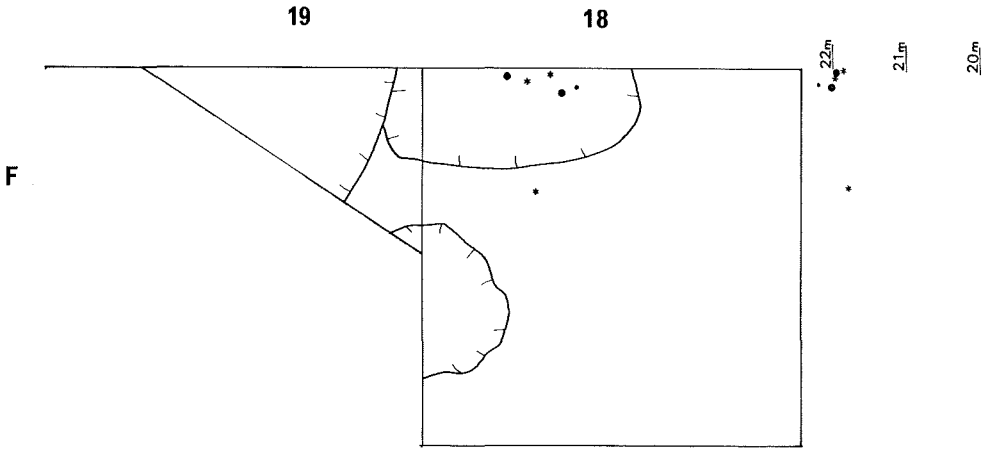


Fig. 105　C～D－6・7区，F－18・19区第Ⅲ層遺物分布図13

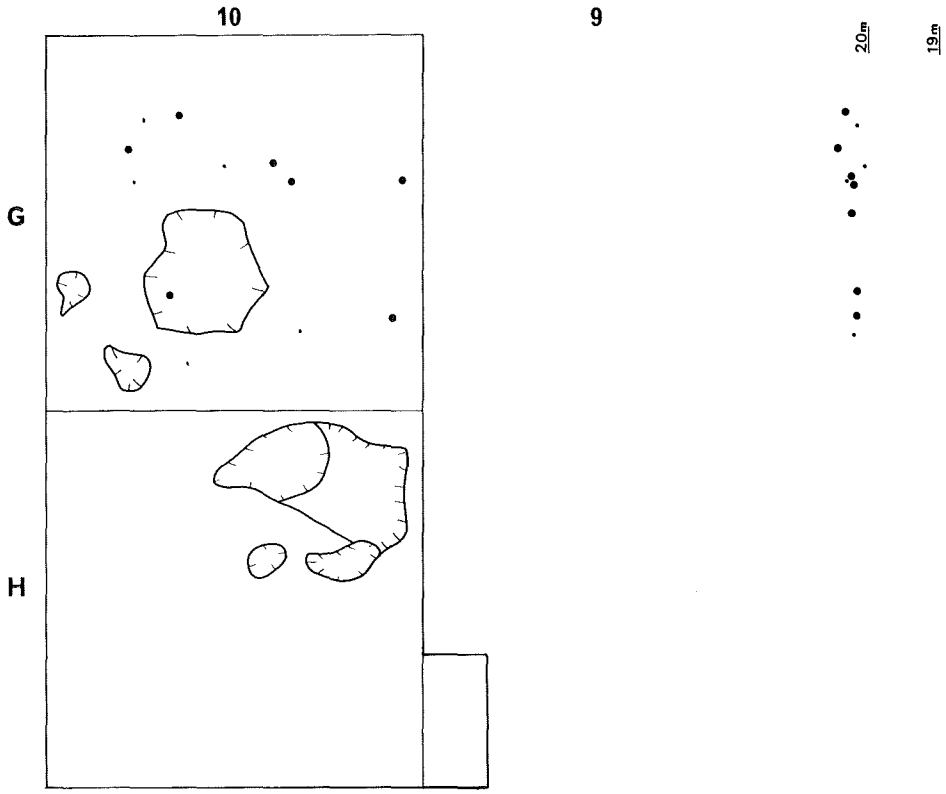


Fig. 106　G～I－9区第Ⅲ層遺物分布図14

③ 土　　器

(Fig. 107)
〔PL. 45〕

縄文時代早期から前期に属すると思われる，押型文土器・塞ノ神式土器・貝殻条痕文土器（轟式系土器）を主として，総計2,869点の土器の出土があった。しかしそのほとんどが細片で著しく風化を受けているものが多く，明確に図化できたものは48点である。Fig. 107 は押型文土器で，1～4は楕円押型文土器，5～15は山形押型文土器である。1は口縁部片で，特に口唇から下1㎝程の所には縦に数条の浅い沈線が施されている。やや風化が進む。J—13区・褐色粘質土層より出土。2は薄手の口縁部片である。風化が著しく表面の楕円文は摩耗する。J—13区・黒褐色軟質土層より出土。3は口縁部片で口唇が平坦になっている。J—13区・褐色粘質土層より出土。4は胴部の一部と考えられるもので風化が進む。E—13区・褐色粘質土層より出土。5は山形の文様をゆるい斜位に施文している。胎土に砂粒子を混入。焼成は良く，やや風化する。C—7区・褐色粘質土層より出土。6は横位施文，わずかに砂粒子を混入する。C—7区・褐色粘質土層より出土。7・8は細片であるが斜位の施文が明確である。2点とも砂粒子を混入，D—7区・褐色粘質土層より出土。9は斜位施文。砂粒子混入。風化が進む。C—7区・褐色粘質土層より出土。10は斜位施文であるが，部分的に山形の文様が乱れている。砂粒子を混入，焼成は良い。C—7区・褐色粘質土層より出土。11は横位施文，砂粒子混入。焼成は良好，やや風化する。C—7区・褐色粘質土層より出土。12は大形の破片で，上部は斜位，中程より下部は横位の施文となる。砂粒子混入，焼成は良い。C—7区・褐色粘質土層より出土。13は横位施文であるが，上部は乱れている。砂粒子混入，焼成は良い。D—7区・褐色粘質土層より出土。14は横位施文で砂粒子混入，やや風化する。C—7区・褐色粘質土層より出土。15は横位施文で上部は若干乱れる。やや風化する。D—7区・褐色粘質土層より出土。

全体的に押型文土器を観察すると，楕円押型文土器より，山形押型文土器の方がやや厚いつくりで，しかも胎土中の砂粒子の混入が顕著で，また，山形の文様は斜位のものもあるが，これらはゆるい傾斜のものであり横位のものとさほど変わりがなく基本的には横位施文が主体と考えられる。加えて山形の文様は，やや間のびしたもの，中には部分的に施文が乱れるものもある。なお押型文土器は第Ⅱ層の褐色粘質土層出土のものが多くを占める。

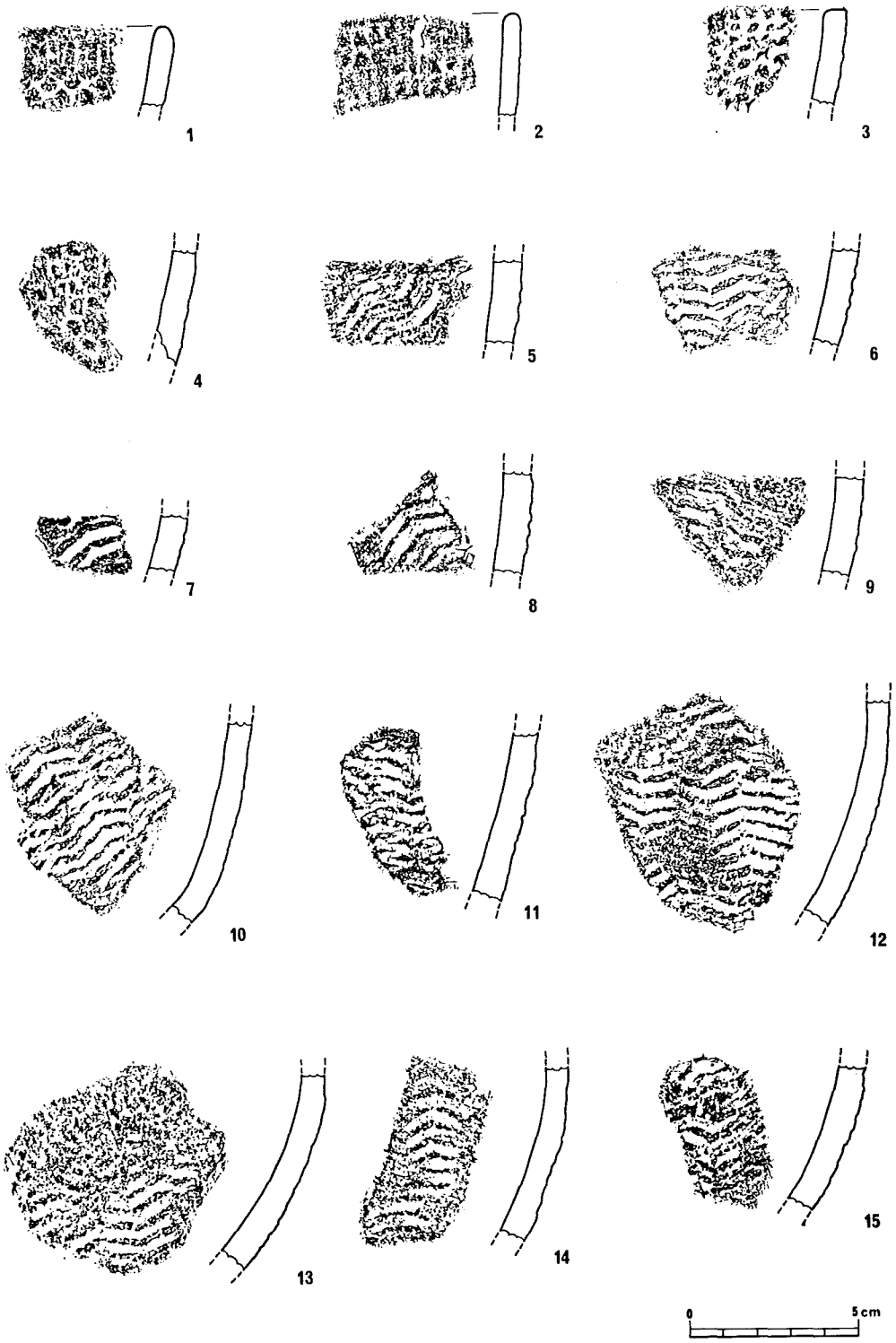


Fig. 107　縄文時代の土器―押型文土器（1/2）

(Fig. 108)
〔PL. 46〕

Fig. 108 は，塞ノ神式土器である。分布は，調査区域の北西部に集中して出土しており，押型文土器の出土地区と若干重複するものの，その出土中心は互いに東西に分れて認められるようである。層位的にみても押型文土器のように著しく，褐色粘質土層（第Ⅱ層）に集中して出土した状況はなく，褐色粘質土層（第Ⅱ層）・黒褐色軟質土層（第Ⅲ層）のⅡ層に及んで出土している。16〜21は屈曲した口縁を有するものである。16はやや内湾しながらラッパ状に開く。口唇端部と屈曲部には刻み目を有しその間に平行沈線と連点文による文様を斜位に施している。胴部と接する部分には，2条ほどの平行沈線が横位に廻る。風化が著しく，文様は鮮明でない。D—17区・黒褐色軟質土層より出土。17は口縁上部で屈曲部より欠損するものである。口唇端部と欠損部には刻目を有する。文様は平行沈線と連点文で構成されるが，斜位のものと横位のものの組み合わせである。C—13区・ドーナツ状土壙より出土。18は口縁上部の細片である。2条ほどの平行沈線とその外側に1条ずつの連点文を施している。風化が著しい。E—10区・ドーナツ状土壙より出土。19は口唇端部と屈曲部に刻目を有し，口唇直下には，横位に廻ると考えられる1条の連点文が施されている。D—10区・黒褐色軟質土層より出土。20は口唇端部と屈曲部には刻目をもち，その間には，平行沈線と連点文が施されている。風化が著しい。E—10区・褐色粘質土層より出土。21は口縁端部と屈曲部に刻目を有する。沈線と連点文による文様構成である。特に連点文は曲線を描く。D—16区・黒褐色軟質土層より出土。22は頸部片でラッパ状に開く口縁を有するものと考えられる。沈線と連点文による文様構成であるが，風化が著しく鮮明ではない。胎土に砂粒子を混入。色調は赤褐色を呈する。E—13区・褐色粘質土層より出土。23は胴部片で，平行沈線と連点文による文様を有する。極めて保存状況は良好で，内・外面ともヘラ磨きによると考えられる仕上げ痕が認められる。E—15区・黒褐色軟質土層より出土。24は胴部片で沈線と連点文に加えて，縦位の撚糸文が施されている。E—11区・褐色粘質土層より出土。25は胴部片で文様構成は，区画のないと考えられる縦位の撚糸文を施した後，その上に横位2条の平行沈線を廻らせている。D—13区・褐色粘質土層より出土。26は胴部の細片である。縦位の区画のない撚糸文が施されていることがわかる。先の25に似た文様構成を有するものと考えられる。E—15区・黒褐色軟質土層より出土。27は口縁部片で，口唇直下より貝殻の腹縁により施されたと考えられる帯状の押引き

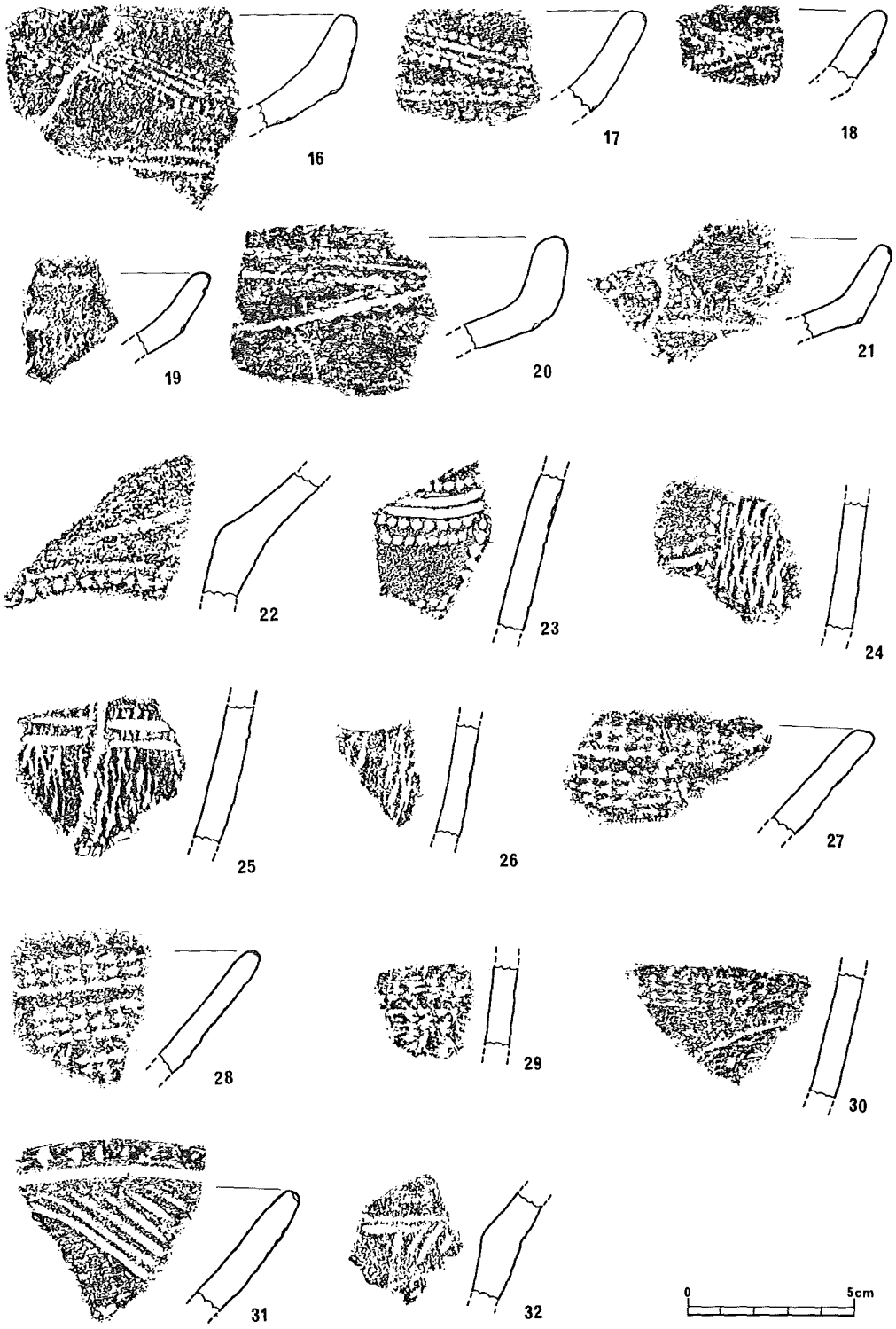


Fig. 108　縄文時代の土器―塞ノ神式土器（1/2）

文を有する。外面は赤褐色を呈する。B—21区・黒褐色軟質土層より出土。28は口縁部片で27と同様，貝殻の腹縁によると考えられる帯状の押し引き文を有する。口唇には浅い刻みをもつ。B—19区・黒褐色軟質土層より出土。29・30は胴部片で先の27・28よりやや細やかな，貝殻の帯状押引き文を有する。出土区はそれぞれ，E—21区・E—18区で同じ黒褐色軟質土層からの出土である。31は口縁部片で，口唇端部には刻み目を施す。文様はやや幅広の浅い沈線のみで構成される。色調は赤褐色を呈する。D—12区・黒褐色軟質土層より出土。32は頸部の細片で，2～3条の横位・斜位の平行沈線を施す。D—16区・褐色粘質土層より出土。

本遺跡出土の塞ノ神式土器もラッパ状に開く口縁，ややふくらみをもつ円筒形の胴部といった従来の特徴を顕著に有する。文様構成も，平行沈線・連点文・撚糸文・貝殻押引き文と多種に及ぶ。

(Fig. 109)
〔PL. 47〕

Fig. 109，33～43は貝殻条痕文を主体文様とする轟式系の土器と考えられるものである。器形は口縁部に向かって，やや開きながら直立する円筒状のものと考えられる。口唇直下には，一条の突帯を有する。文様は，口唇及び突帯に刺突文を施す他は，内・外面とも二枚貝の腹縁で粗雑になでられる不規則な条痕文である。色調は，暗茶褐色・茶褐色を呈し，胎土には砂粒子を混入する。分布は褐色粘質土層（第Ⅱ層）・黒褐色軟質土層（第Ⅲ層）両方の北部に認められるが，特に黒褐色軟質土層（第Ⅲ層）中のものは，B—19区をはじめとする，調査区域の北西部に著しく集中して出土している。33は比較的大きな口縁部片である。口唇直下に一条の突帯を有し，口唇及び突帯には，刺突文を施す。外面は突帯直下より，斜位また横位の条痕文である。内面は左下りの条痕文を施した上に，右下りの条痕文が1度重ねられており，格子目状になる。B—19区・黒褐色軟質土層より出土。34は胴部片で，内面には文様を施していない。外面は，粗雑な条痕文を横位と若干の斜位に行なっている。部分的にやや風化が進む。B—19区・黒褐色軟質土層より出土。35は口縁部片で，一条の突帯をもつ。口唇・突帯には刺突文を施す。内面は左下りの条痕文の上に重ねて曲線の条痕文を描く。外面は横位・斜位の粗雑な条痕文が入る。B—19区・黒褐色軟質土層より出土。36は胴部片で風化がやや進み，明確な拓影はとれなかった。外面のみに，横位・斜位・縦位に条痕文を施している。D—12区・ドーナツ状土壙より出土。37は口縁部片で，一条の突帯を有する。口唇や突帯には33や35と同

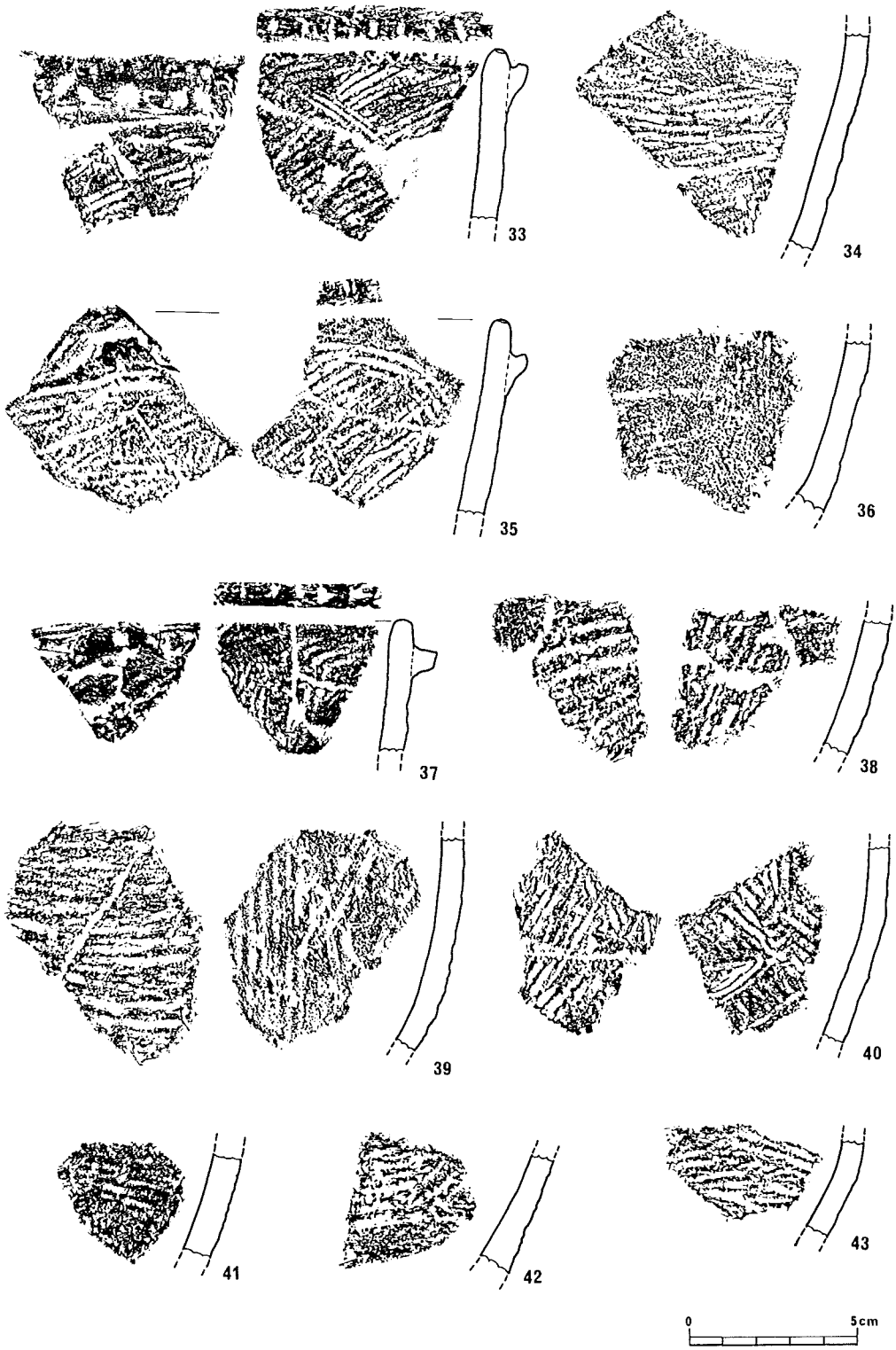


Fig. 109　縄文時代の土器—貝殻条痕文土器（轟式系土器）(1/2)

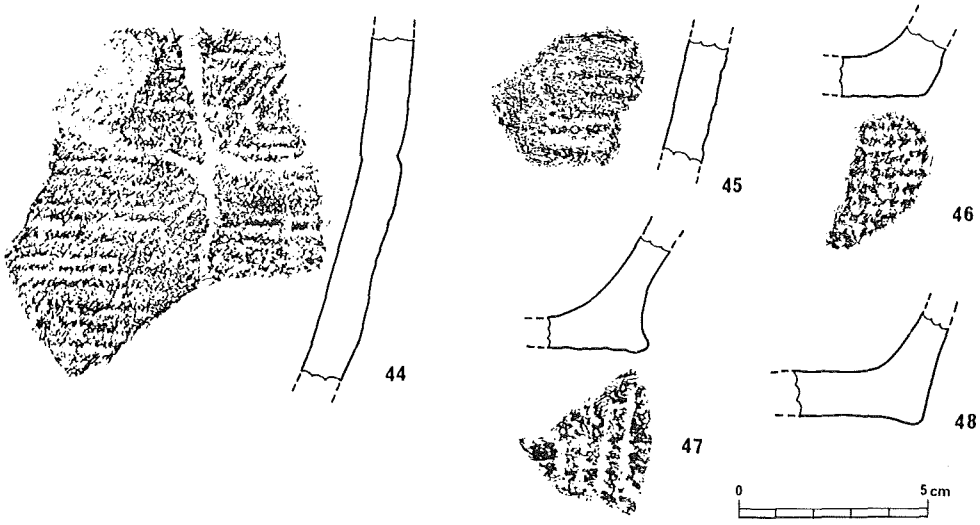


Fig. 110　縄文時代の土器―その他の土器（1/2）

様に刺突文を施す。内面にはやや曲線がかった斜位の条痕文を施す。外面はやや風化し条痕文は鮮明でない。B―19区・黒褐色軟質土層より出土。38は胴部片で若干風化する。内面は縦位の条痕文を，外面は横位のやや荒い条痕文を施している。B―17区・黒褐色軟質土層より出土。39は胴部のやや大きな破片である。内面は縦位の条痕文を基本として，その上に若干の斜位のものが施され，格子目文を成している。外面は横位に荒い条痕文が入る。やや風化が進む。B―19区・黒褐色軟質土層より出土。40は胴部片で，内面は斜位の条痕文の上に，幾可学的な曲線の条痕文が施されている。外面は左下りの条痕文が比較的に整っている。B―19区・黒褐色軟質土層より出土。41は胴部小片でやや風化が進む。外面に横位の条痕文が施されている。E―19区・黒褐色軟質土層より出土。42はやや底部に近い胴部片と考えられる。やや風化が進む。外面に横位と斜位の荒い条痕文が施されている。D―10区・褐色粘質土層より出土。43は胴部小片で，外面に横位・斜位の条痕文が施されている。

以上のように，33～43の土器は，外面あるいは内・外面に貝殻による条痕文を施すものである。特に口縁部については3点しかないものの，はりつけられた突帯を一条もつことや，胎土に砂粒子を混入，色調も同じであることなどより同一類の土器で，轟式系土器であろうと考えられる。また底部については，判然としないものの円筒形土器に多くみられる。平底を呈すものと考えられる。

(Fig. 110)　44・45は胴部片である。文様は，横位に整ったやや幅広の条痕文を施

〔PL. 47〕　す。それぞれE・D—11区・褐色粘質土層より出土。この2点を先の轟式系土器としたものと比較してみると，条痕文ではあるもののその性質は全く異なる。加えて胎土に砂粒子を混入せず，色調も赤褐色を呈し，やや厚いつくりであることより別の種類の土器と考えられ，あえて轟式系土器の範疇より除外した。

(Fig. 110)　46・47・48は土器底部の小片である。本遺跡出土のいずれの時期のもの
〔PL. 47〕　に関係するものかは不明である。46・47は底面に網代痕が認められるものである。2点とも網代の編み方は酷似するが，46はより密なものである。それぞれ，E—19区・黒褐色軟質土層，C—21区・ドーナツ状土壙より出土。48は平底の底部で，若干ではあるが上げ底ぎみになっている。径はおよそ15cm前後なるものと考えられる。D—16区・黒褐色軟質土層より出土。

参考文献　長崎県吾妻町教育委員会　1983「弘法原遺跡」吾妻町の文化財　7

鹿児島県教育委員会　1980「石峰遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告　Ⅳ

鹿児島県加世田市教育委員会　1977「村原（栫ノ原）遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書

鹿児島県教育委員会　1979「三代寺遺跡・木佐貫原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

鹿児島県日置郡会峰町教育委員会　1978「阿多貝塚」

鹿児島県教育委員会　1978「西之薗遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（8）

新東晃一　1982「塞ノ神式土器」『縄文文化の研究』第3巻　縄文土器Ⅰ　所収　雄山閣出版株式会社

松本雅明　富樫卯三郎「轟式土器の編年」『考古学雑誌』第47巻　第3号

Tab. 9　土器一覧表

挿図番号	出土区	出土層位	種類	部位	色調	特徴及び備考
107-1	J－13	褐色粘質土層	楕円押型文	口縁	褐	口唇に浅い沈線が数条縦に入る。やや風化する。
2	J－13	黒褐色軟質土層	〃	〃	黒褐	風化が著しく文様も摩耗する。
3	J－13	黒褐色軟質土層	〃	〃	褐	口唇は平坦になっている。
4	E－13	褐色粘質土層	〃	胴	〃	やや風化が進む。
5	C－7	褐色粘質土層	山型押型文	〃	赤褐	ゆるい斜位施文,砂粒子混入,やや風化する。
6	C－7	褐色粘質土層	〃	〃	〃	横位施文。砂粒子混入。
7	D－7	褐色粘質土層	〃	〃	〃	斜位施文。砂粒子混入。
8	D－7	褐色粘質土層	〃	〃	〃	斜位施文。砂粒子混入。
9	C－7	褐色粘質土層	〃	〃	〃	斜位施文。砂粒子混入。やや風化進む。
10	C－7	褐色粘質土層	〃	〃	〃	斜位施文であるが部分的に乱れる。やや風化する。
11	C－7	褐色粘質土層	〃	〃	〃	横位施文。砂粒子混入,やや風化する。
12	C－7	褐色粘質土層	〃	〃	〃	上部は斜位、中程より下は横位の施文。
13	D－7	褐色粘質土層	〃	〃	〃	上部は施文が乱れる。砂粒子混入。
14	C－7	褐色粘質土層	〃	〃	〃	横位施文。砂粒子混入。やや風化する。
15	D－7	褐色粘質土層	〃	〃	〃	横位施文。上部は乱れる。砂粒子混入。
108-16	D－17	黒褐色軟質土層	塞ノ神式	口縁	茶褐	ラッパ状口縁。平行沈線と連点文による文様。
17	C－13	ドーナツ状土壙	〃	〃	〃	ラッパ状口縁。平行沈線と連点文による文様。
18	E－10	ドーナツ状土壙	〃	〃	〃	ラッパ状口縁。平行沈線と連点文による文様。
19	D－10	黒褐色軟質土層	〃	〃	黒褐	ラッパ状口縁。口唇直下に連点文が巡る。
20	E－10	褐色粘質土層	〃	〃	茶褐	ラッパ状口縁。平行沈線と連点文による文様。
21	D－16	黒褐色軟質土層	〃	〃	〃	ラッパ状口縁。沈線と連点文が曲線を描く。
22	E－13	褐色粘質土層	〃	頸	赤褐	ラッパ状口縁。沈線と連点文が横位に巡る。
23	E－15	黒褐色軟質土層	〃	胴	茶褐	平行沈線と連点文による文様。保存状況が良い。
24	E－11	褐色粘質土層	〃	〃	〃	沈線と連点文及び縦位の撚糸文による文様。
25	D－13	褐色粘質土層	〃	〃	〃	縦位の撚糸文の上に、横位の平行沈線を施す。
26	E－15	黒褐色軟質土層	〃	〃	〃	縦位の区画されない撚糸文。
27	B－21	黒褐色軟質土層	〃	口縁	〃	貝殻の腹縁による押引き文が横位に巡る。
28	B－19	黒褐色軟質土層	〃	〃	〃	貝殻の腹縁による押引き文が横位に巡る。
29	E－21	黒褐色軟質土層	〃	胴	〃	貝殻の腹縁による押引き文が横位に巡る。
30	E－18	黒褐色軟質土層	〃	〃	〃	貝殻の腹縁による押引き文が横位に巡る。
31	D－12	黒褐色軟質土層	〃	口縁	赤褐	やや幅広の沈線が斜位に数条施される。
32	D－16	褐色粘質土層	〃	頸	茶褐	やや幅広の沈線が横位と斜位に施される。
109-33	B－19	黒褐色軟質土層	貝殻条痕文	口縁	暗茶褐	口唇直下に突帯。口唇と突帯には刻目。表裏条痕文。
34	B－19	黒褐色軟質土層	〃	胴	〃	表面のみ、貝殻の腹縁による条痕文が粗雑に入る。
35	B－19	黒褐色軟質土層	〃	口縁	〃	口唇下に突帯。口唇と突帯には刻目。表裏条痕文。
36	D－12	ドーナツ状土壙	〃	胴	黒褐	表面のみに粗雑な条痕文が入る。風化が著しい。
37	B－19	黒褐色軟質土層	〃	口縁	暗茶褐	口唇下に突帯。口唇と突帯には刻目。表裏条痕文。
38	B－17	黒褐色軟質土層	〃	胴	〃	表裏条痕文。やや風化が進む。
39	B－19	黒褐色軟質土層	〃	〃	〃	表裏に粗雑な条痕文。
40	B－19	黒褐色軟質土層	〃	〃	〃	表裏条痕文。特に内面は曲線を描く。
41	E－19	黒褐色軟質土層	〃	〃	〃	表に粗雑な条痕文。やや風化する。
42	D－10	褐色粘質土層	〃	〃	〃	表に粗雑な条痕文。やや風化する。
43	D－18	黒褐色軟質土層	〃	〃	〃	表に粗雑な条痕文。
110-44	E－11	褐色粘質土層	条痕文	〃	茶褐	表に幅広の整った横位の条痕文。
45	D－11	褐色粘質土層	〃	〃	〃	表に幅広の条痕文。やや風化する。
46	E－19	黒褐色軟質土層	——	底	暗茶褐	やや密な網代底。風化進む。
47	C－21	ドーナツ状土壙	——	〃	〃	網代底。やや風化進む。
48	D－16	黒褐色軟質土層	——	〃	茶褐	中央へやや上げ底状になっている。

④ 石　　器

石鏃
(Fig. 112～119)
〔ＰＬ.48～59〕

西輪久道遺跡で出土した石鏃は，総計143点である。層位中より出土のものがそのほとんどであるが，他に表採資料が１点，撹乱中より12点，Ｆ―17区の赤褐色土中より２点の出土がある。また遺構出土のものとしては，ドーナツ状土壙より７点が出土している。

本遺跡においても，石鏃の分類を試みてみた。先ず，完形品と破損している部位によりＡ～Ｆに分け，次に，基辺の形状により平基，もしくは平基に近いものをⅠ類，凹基をⅡ類とした。Ⅰ類は，やや下に丸く張り出すもの，一直線状に近いものをそれぞれ，Ⅰa，Ⅰb 類とした。Ⅱ類は，抉りの幅が深さより大きいものを，Ⅱc 類，幅と深さがほぼ等しいか，若干幅が大きいものをⅡd 類，幅より深さが上まわるものをⅡe類，抉りも深く幅も広く脚先端が尖るものをⅡf 類とした。そして更に，石鏃の長幅広に着目し，２：３に近いものを**1**，１：１に近いものを**2**，３：２に近いものを**3**，２：１に近いものを**4**，２：５に近いものを**5**とし５段階に分けた（Fig. 119)。なお上記の分類においては，欠損部位はあるものの，数値が推定できるものも含めた。また，ＥやＦを初めとする推定できないものは最後に図示した。

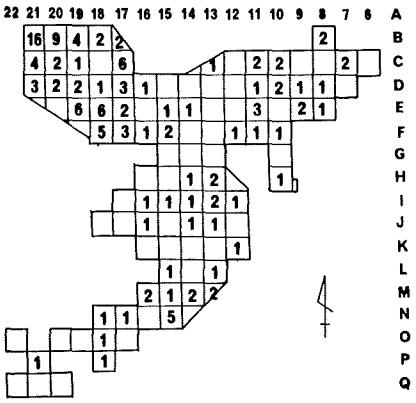
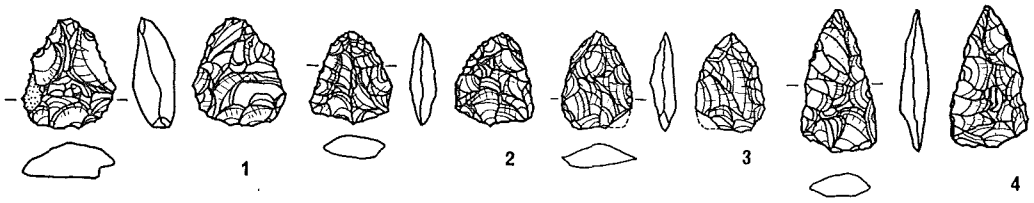


Fig. 111　各地区出土石鏃

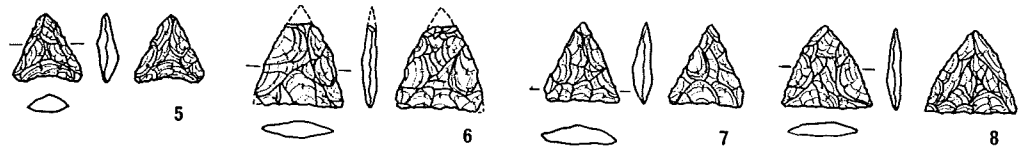
Tab. 10　石鏃破損部位別一覧表

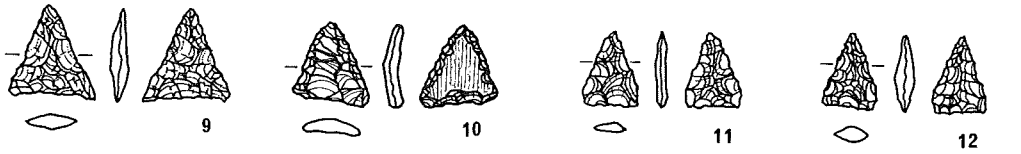
記号	破損部位		黒曜石	安山岩	計
完		完形品	37	16	53
A		先端部破損	12	2	14
B		両脚破損	14	0	14
C		片脚破損	22	3	25
D		先端部両脚破損	10	2	12
E		先端部片脚破損	4	1	5
F		脚部のみ	19	0	19
計			118	24	142

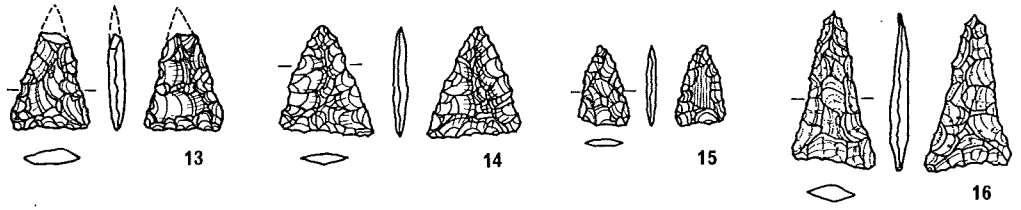
Ⅰb類



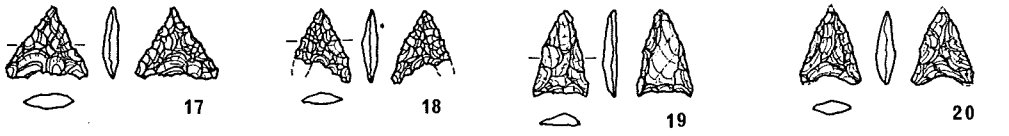
Ⅰa類







Ⅱc類



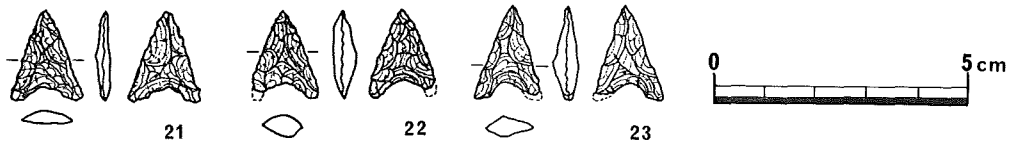


Fig. 112　縄文時代の石器―石鏃①（2/3）

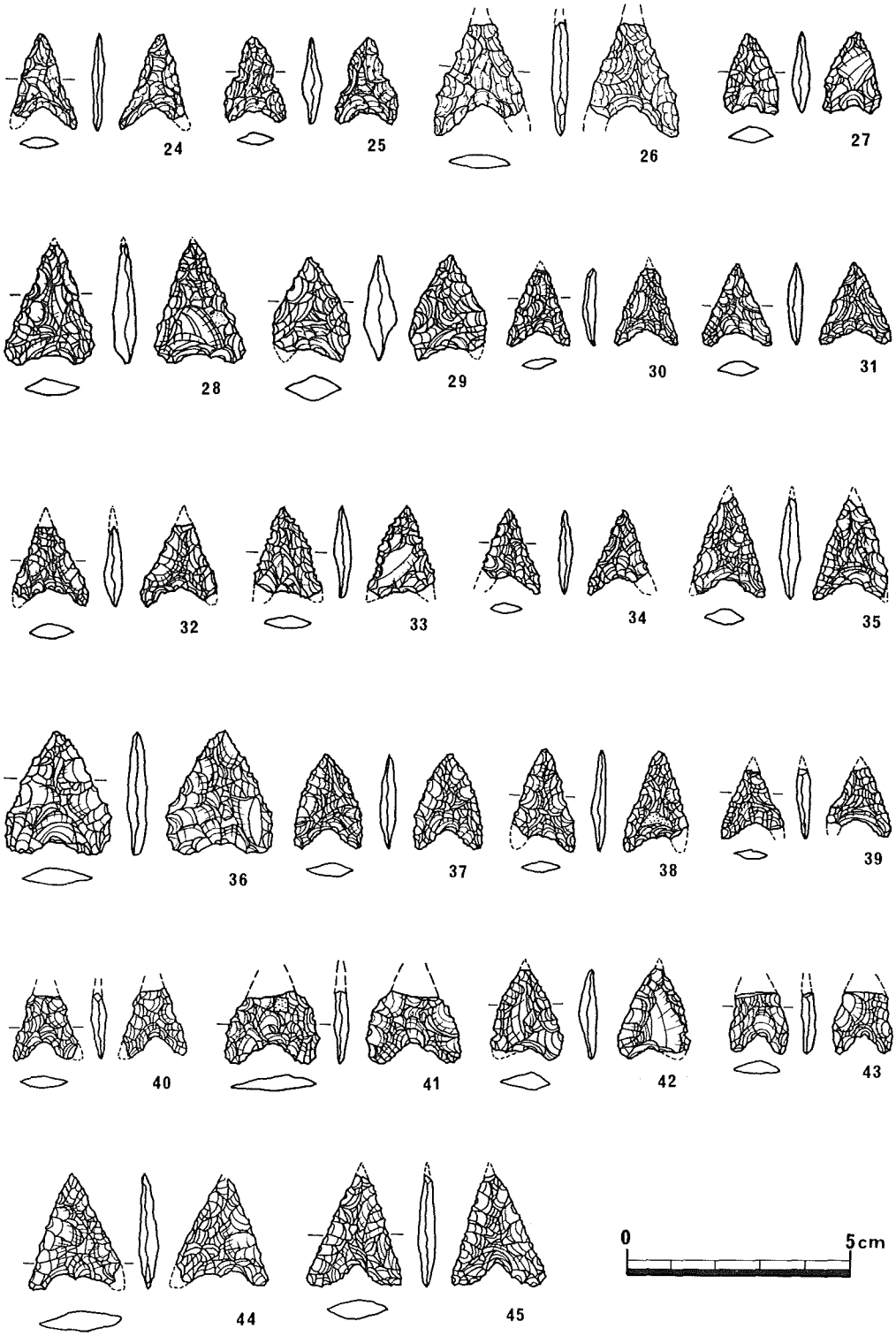


Fig. 113 縄文時代の石器—石鏃② (2/3)

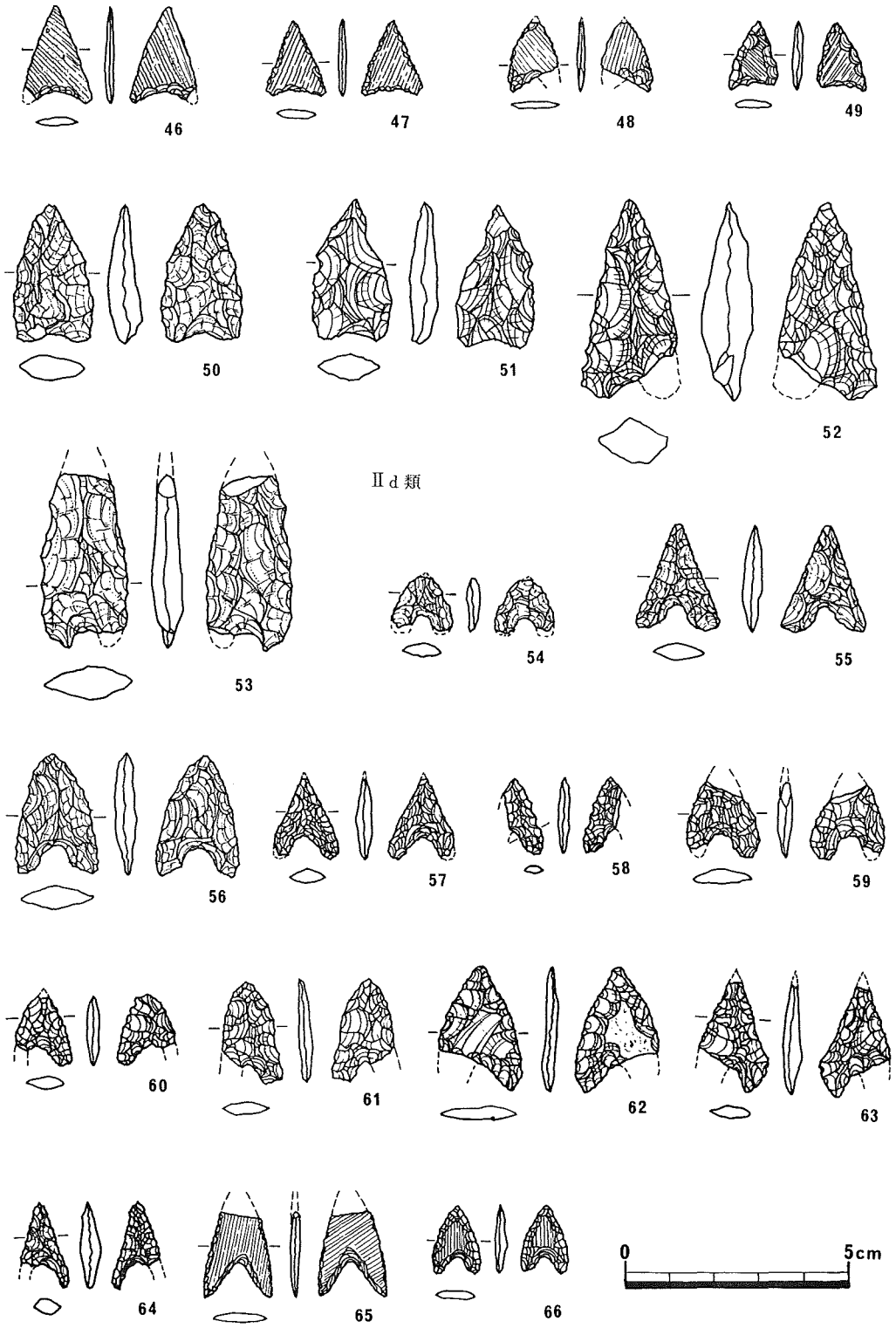


Fig. 114 縄文時代の石器—石鏃③ (2/3)

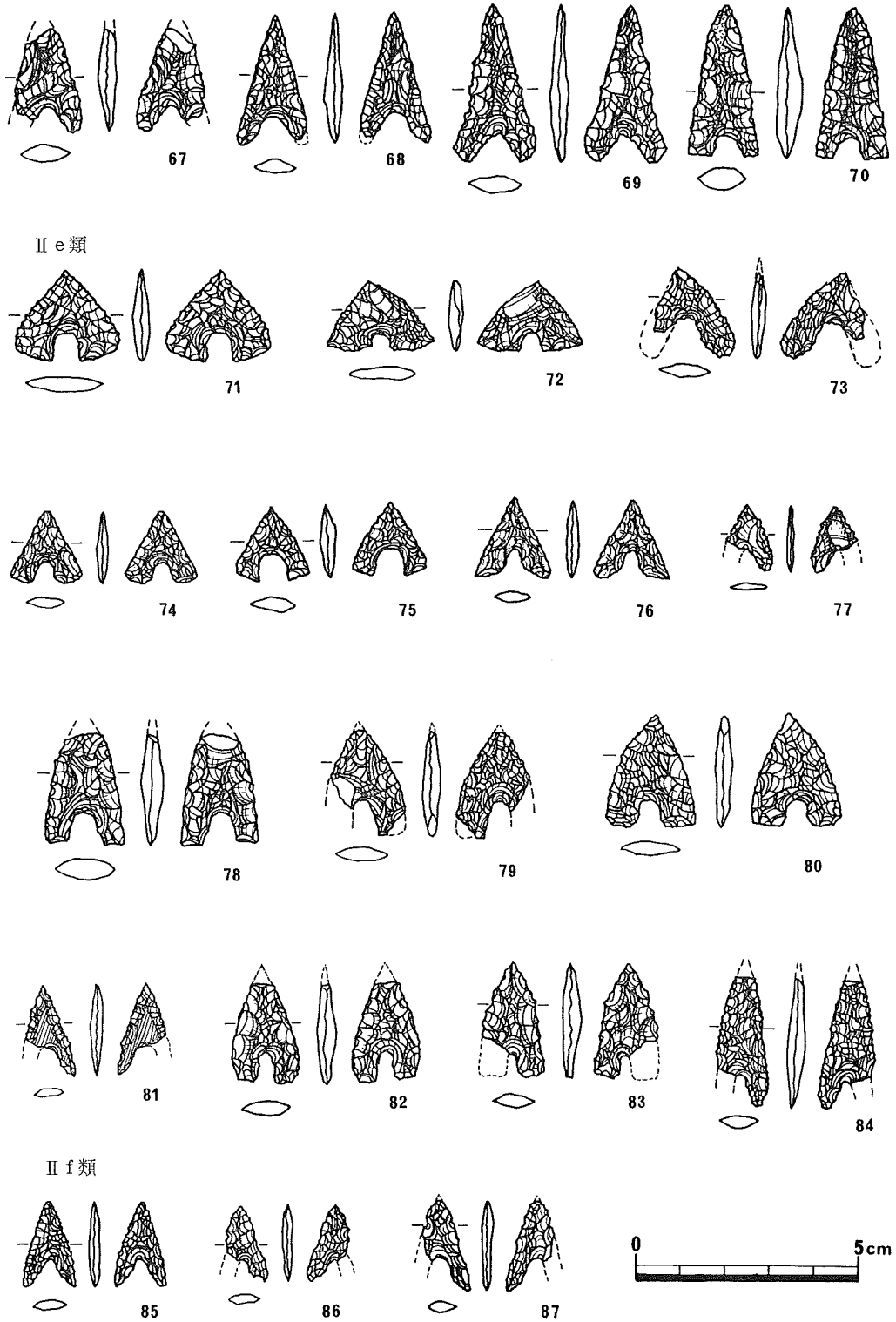


Fig. 115 縄文時代の石器—石鏃④ (2/3)

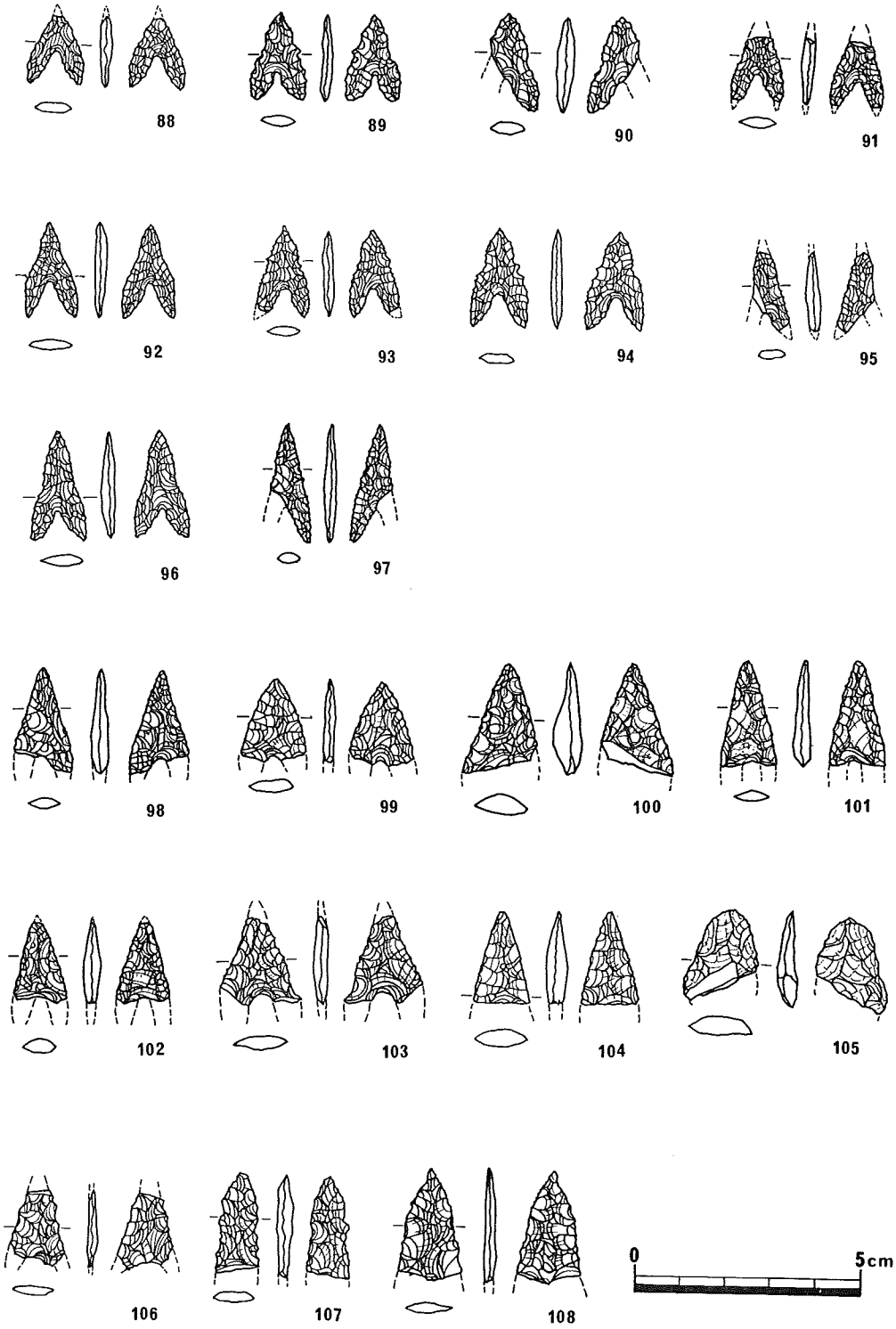


Fig. 116 縄文時代の石器—石鏃⑥ (2/3)

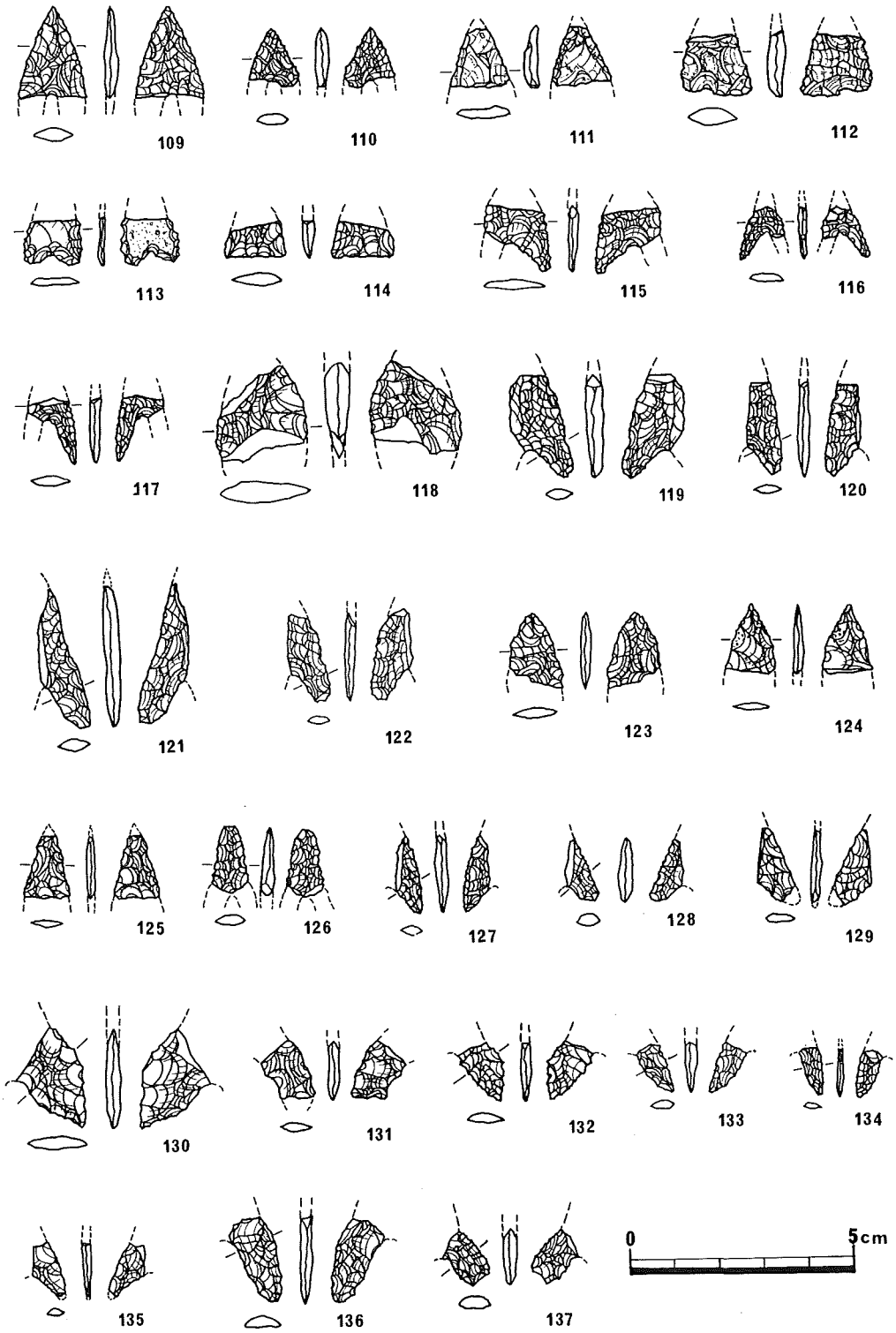


Fig. 117　縄文時代の石器—石鏃⑥ (2/3)

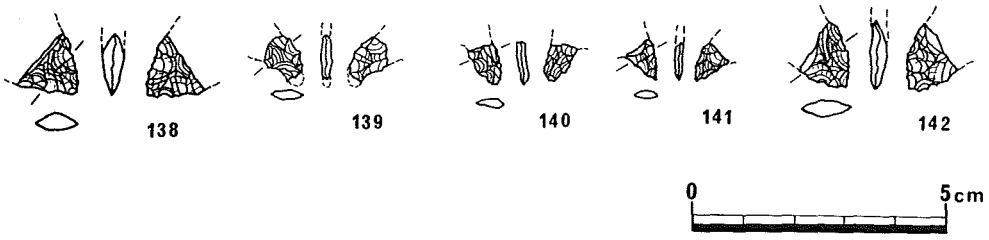


Fig. 118 縄文時代の石器—石鏃⑦ (2/3)

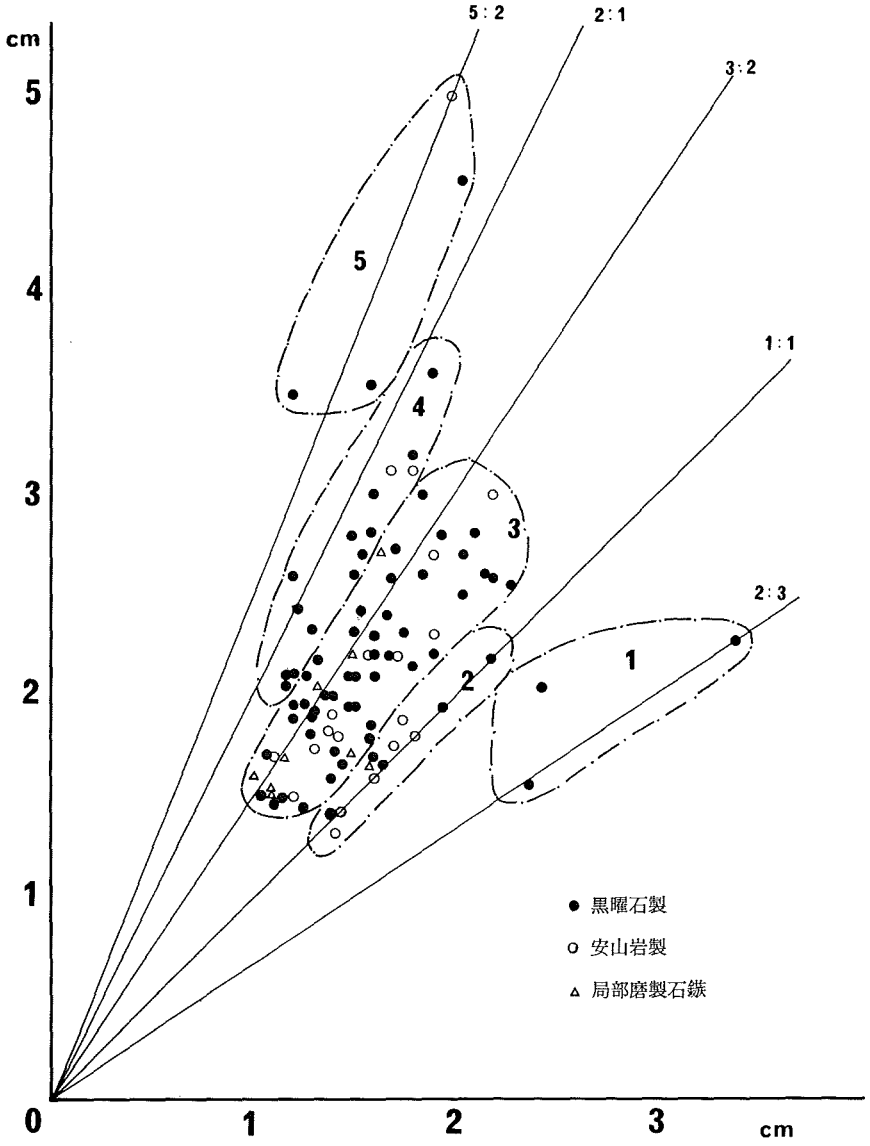


Fig. 119 石鏃長幅比

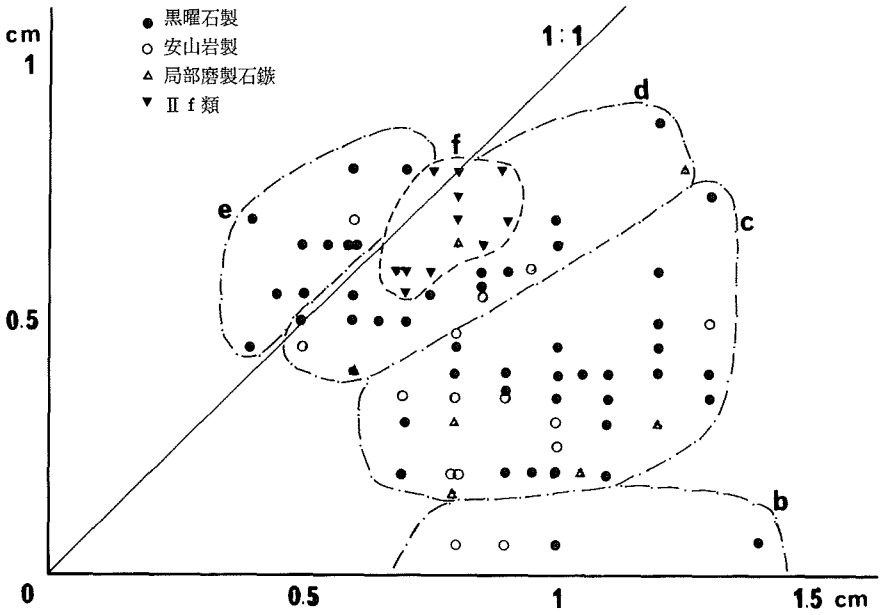
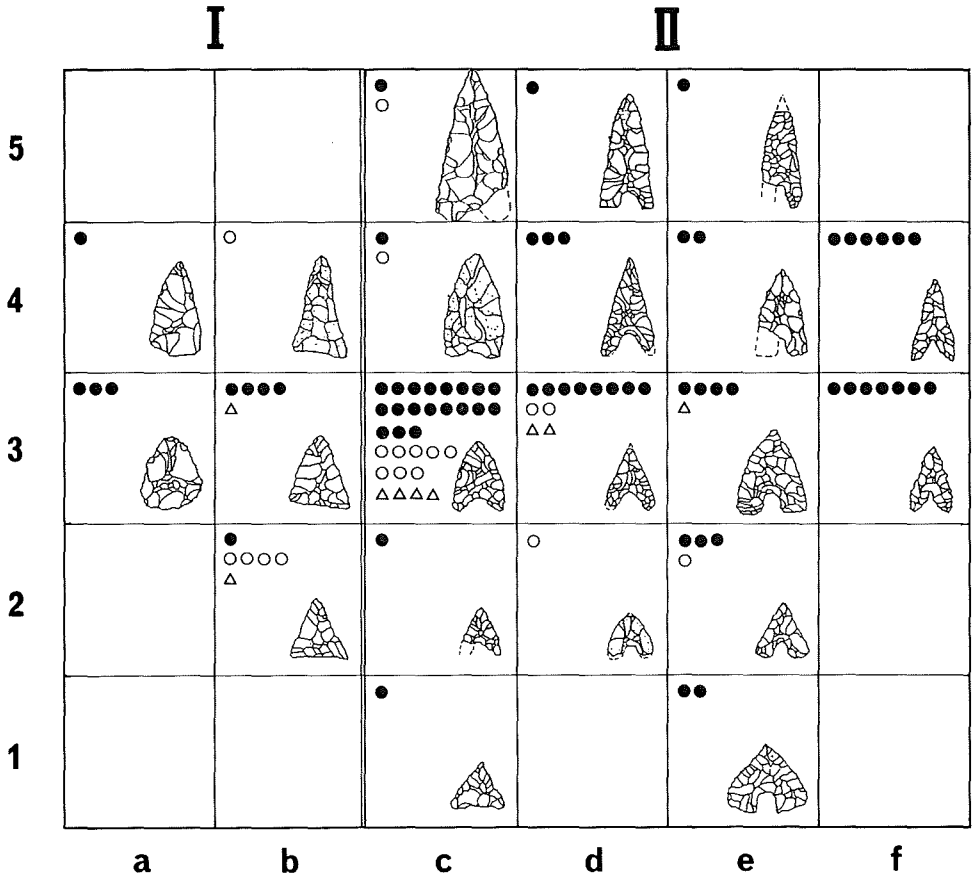


Fig. 120 石鏃抉り長幅比



Tab. 11 石鏃分類表

Tab. 12　石鏃計測表　　〈 〉は推定置　(　)は現寸。

挿図番号	出土区	出土層位	石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(cm) 長	幅	厚	抉り(cm) 深度	幅	先端角度	分類
112-1	B－20	黒褐色軟質土層	黒曜石A	完	2.7	2.15	1.8	0.8	0		75°	Ia3
2	I－12	褐色粘質土層	〃 B	完	1.3	1.8	1.6	0.5	0		87°	〃
3	B－21	黒褐色軟質土層	〃 A	完	1.0	1.95	1.4	0.45	0		85°	〃
4	B－19	黒褐色軟質土層	〃 B	完	2.0	2.8	1.5	0.6	0		55°	Ia4
5	D－10	褐色粘質土層	安山岩	完	0.5	1.3	1.4	0.5	0.05	0.8	60°	Ib2
6	B－20	黒褐色軟質土層	〃	A	0.9	(1.7)	1.7	0.35	0	0	〈60°〉	〃
7	B－18	黒褐色軟質土層	〃	完	0.6	1.6	1.6	0.4	0		57°	〃
8	N－15	褐色粘質土層	〃	完	0.7	1.6	1.8	0.25	0		80°	〃
9	E－9	褐色粘質土層	〃	完	0.7	1.8	1.8	0.4	0.05	1.4	53°	〃
10	B－19	褐色粘質土層	黒曜石C	完	0.7	1.65	1.5	0.25	0.05	0.8	69°	〃
11	D－21	褐色粘質土層	〃 C	完	0.4	1.5	1.05	0.4	0		47°	Ib3
12	D－17	黒褐色粘質土層	〃 C	完	0.3	1.5	1.1	0.25	0		37°	〃
13	C－13	撹乱中	〃 A	A	1.0	(1.9)	1.55	0.3	0		〈45°〉	〃
14	F－15	褐色粘質土層	〃 B	完	0.7	2.2	1.9	0.3	0		70°	〃
15	M－16	褐色粘質土層	〃 A	完	0.3	1.6	1.0	0.2	0		52°	〃
16	C－7	褐色粘質土層	安山岩	完	1.4	3.1	1.7	0.35	0.05	1.3	56°	Ib4
17	C－7	褐色粘質土層	黒曜石A	完	0.6	1.4	1.6	0.3	0.1	1.0	55°	IIc1
18	D－9	褐色粘質土層	〃 A	C	0.3	1.4	(1.3)	0.3	0.4	〈0.8〉	61°	IIc2
19	J－14	褐色粘質土層	安山岩	完	0.4	1.7	1.1	0.3	0.1	1.0	55°	IIc3
20	F－11	褐色粘質土層	〃	完	0.5	1.5	1.2	0.4	0.2	0.8	56°	〃
21	D－11	褐色粘質土層	〃	完	0.5	1.8	1.4	0.3	0.3	1.0	60°	〃
22	C－11	褐色粘質土層	〃	完	0.7	1.7	1.3	0.45	0.3	0.9	63°	〃
23	E－19	褐色粘質土層	〃	完	0.7	1.85	1.3	0.5	0.35	0.7	55°	〃
113-24	M－14	褐色粘質土層	〃	C	0.6	2.2	(1.5)	0.25	0.5	〈1.3〉	40°	〃
25	E－18	黒褐色軟質土層	〃	完	0.6	1.9	1.4	0.45	0.25	1.1	68°	〃
26	E－19	褐色粘質土層	〃	D	1.4	(2.6)	(2.0)	0.35	0.75	〈1.3〉	〈50°〉	〃
27	C－21	黒褐色軟質土層	黒曜石A	完	0.7	1.8	1.3	0.4	0.2	0.7	60°	〃
28	C－17	黒褐色軟質土層	〃 B	完	2.0	2.7	2.05	0.5	0.2	1.1	52°	〃
29	B－17	撹乱中	〃 A	C	1.9	2.3	1.75	0.7	0.3	〈1.1〉	60°	〃
30	F－15	褐色粘質土層	〃 C	完	0.5	1.7	1.4	0.3	0.35	1.0	50°	〃
31	C－10	褐色粘質土層	〃 A	完	0.6	1.85	1.6	0.35	0.35	1.1	51°	〃
32	C－17	黒褐色軟質土層	〃 B	D	0.8	(1.8)	(1.7)	0.4	0.4	〈1.3〉	〈46°〉	〃
33	E－11	ドーナツ状土壙	〃 C	B	0.8	(2.1)	(1.6)	0.35	—	—	60°	〃
34	N－15	黒褐色軟質土層	〃 B	C	0.4	1.9	(1.35)	0.3	0.4	〈1.0〉	63°	〃
35	F－12	ドーナツ状土壙	〃 B	A	1.1	(2.3)	(1.7)	0.45	0.4	1.2	48°	〃
36	F－18	褐色粘質土層	〃 B	完	2.4	2.3	2.4	0.45	0.2	1.0	76°	〃
37	F－17	赤褐色土層	〃 B	完	0.8	2.1	1.6	3.5	0.4	1.0	73°	〃
38	F－17	赤褐色土層	〃 B	C	0.7	2.3	(1.5)	0.3	0.4	〈1.1〉	54°	〃

挿図番号	出土区	出土層位	石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(cm)			抉り(cm)		先端角度	分類
						長	幅	厚	深度	幅		
39	D－17	撹乱中	黒曜石A	D	0.5	(1.5)	(1.4)	0.3	0.4	〈0.9〉	〈40°〉	Ⅱc4
40	B－21	黒褐色粘質土層	〃 C	A	0.6	(1.5)	1.45	0.35	0.45	1.0	—	〃
41	F－18	褐色粘質土層	〃 B	A	1.0	(1.6)	2.2	0.35	0.45	1.2	60°	〃
42	E－17	褐色粘質土層	〃 B	C	0.9	(2.0)	1.65	0.4	0.2	〈1.05〉	58°	〃
43	C－21	黒褐色軟質土層	〃 C	A	0.6	(1.35)	1.3	0.35	0.4	0.8	—	〃
44	E－18	黄褐色軟質土層	〃 A	完	1.5	2.6	2.1	0.4	0.3	1.5	58°	〃
45	M－14	撹乱中	〃 C	完	1.4	2.5	2.1	0.4	0.5	1.2	50°	〃
114-46	I－16	褐色粘質土層	安山岩	C	0.6	2.2	(1.5)	0.25	0.3	〈1.1〉	50°	〃
47	F－10	褐色粘質土層	黒曜石C	完	0.4	1.7	1.4	0.2	0.2	1.1	49°	〃
48	N－17	褐色粘質土層	〃 C	C	0.3	1.6	(1.15)	0.2	0.3	〈0.8〉	48°	〃
49	D－20	ドーナツ状土壙	〃 C	完	1.0	1.5	1.1	0.2	0.15	0.9	60°	〃
50	C－17	黒褐色軟質土層	〃 B	C	1.1	2.6	(1.45)	0.45	0.5	〈0.8〉	53°	Ⅱc4
51	N－15	黒褐色軟質土層	〃 B	完	3.6	3.2	1.8	0.65	0.2	0.9	60°	〃
52	C－21	黒褐色軟質土層	〃 A	C	7.1	4.6	(2.2)	1.15	0.35	〈0.9〉	46°	Ⅱc5
53	E－8	褐色軟質土層	安山岩	D	5.9	(3.9)	2.0	0.7	0.35	0.8	—	〃
54	I－13	黒褐色軟質土層	〃	B	0.5	(1.4)	(1.4)	0.3	(0.35)	〈0.5〉	82°	Ⅱd2
55	D－21	褐色粘質土層	〃	完	1.1	2.3	1.9	0.4	0.6	0.8	45°	Ⅱd3
56	B－21	黒褐色軟質土層	〃	完	2.1	2.7	1.9	0.5	0.6	0.9	80°	〃
57	P－18	撹乱中	黒曜石A	完	0.7	1.95	1.5	0.35	0.55	0.9	45°	〃
58	D－18	黒褐色軟質土層	〃 C	C	0.3	1.7	(0.85)	0.25	0.5	〈0.5〉	65°	〃
59	D－18	褐色粘質土層	〃 A	D	0.4	(1.8)	1.7	0.3	0.6	0.7	—	〃
60	F－18	褐色粘質土層	〃 B	C	0.5	(1.6)	(1.3)	0.3	0.5	〈0.7〉	75°	〃
61	B－21	黒褐色軟質土層	〃 B	C	0.8	2.3	(1.4)	0.3	0.5	〈0.6〉	80°	〃
62	B－19	黒褐色軟質土層	〃 B	C	1.1	2.8	(1.9)	0.3	0.8	〈1.2〉	65°	〃
63	E－17	褐色粘質土層	〃 B	D	0.9	(2.5)	(1.6)	0.4	0.55	〈0.6〉	43°	〃
64	C－11	褐色粘質土層	〃 B	C	0.5	2.0	1.2	0.45	0.6	〈0.8〉	64°	〃
65	C－20	ドーナツ状土壙	〃 B	A	0.6	(1.9)	(1.6)	0.2	0.8	〈1.4〉	—	〃
66	B－21	黒褐色軟質土層	〃 C	完	0.3	1.5	1.05	0.25	0.4	0.5	68°	〃
115-67	N－15	撹乱中	〃 A	D	1.3	(2.3)	(1.6)	0.4	0.6	〈0.8〉	〈48°〉	Ⅱd4
68	B－17	黒褐色軟質土層	〃 C	完	1.2	3.0	1.6	0.5	0.7	1.0	35°	〃
69	B－8	褐色粘質土層	〃 A	完	1.5	3.6	1.9	0.45	0.65	1.0	32°	Ⅱd5
70	L－13	黒褐色軟質土層	〃 A	完	2.4	3.4	1.6	0.55	0.5	0.6	54°	〃
71	E－11	褐色粘質土層	〃 B	完	1.2	2.1	2.4	0.4	0.65	0.55	77°	Ⅱe1
72	H－13	黒褐色軟質土層	〃 A	完	1.0	1.6	2.4	0.35	0.5	0.4	96°	〃
73	M－16	撹乱中	〃 B	C	0.8	(2.2)	(2.2)	0.3	0.9	〈1.2〉	56°	Ⅱe2
74	L－15	表採	〃 B	完	0.5	1.65	1.6	0.3	0.55	0.45	60°	〃
75	E－11	褐色粘質土層	〃 B	完	0.5	1.65	1.65	0.35	0.6	0.6	71°	〃
76	E－18	褐色粘質土層	安山岩	完	0.5	1.75	1.7	0.3	0.7	0.6	55°	〃
77	C－19	ドーナツ状土壙	黒曜石C	C	0.2	1.5	(1.05)	0.15	0.5	〈0.5〉	65°	Ⅱe3

挿図番号	出土図	出土層位	石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(cm)			抉り(cm)		先端角度	分類
						長	幅	厚	深度	幅		
78	H－13	褐色粘質土層	黒曜石B	A	1.9	(2.5)	1.8	0.5	0.8	0.7		Ⅱe3
79	I－14	褐色粘質土層	〃 A	C	1.1	(1.9)	(1.7)	0.4	(0.8)	〈0.7〉	70°	〃
80	N－15	撹乱中	〃 C	完	1.8	2.5	2.05	0.4	0.6	0.6	75°	〃
81	B－20	黒褐色軟質土層	〃 B	C	0.3	2.05	(1.3)	0.25	0.65	〈0.8〉	50°	〃
82	C－17	黒褐色軟質土層	〃 B	A	1.3	(2.25)	(1.55)	0.4	0.7	0.4	〈52°〉	Ⅱe4
83	C－17	黒褐色軟質土層	〃 B	C	1.1	2.6	(1.45)	0.45	0.5	〈0.4〉	63°	〃
84	D－20	黒褐色軟質土層	〃 A	D	1.0	(2.9)	(1.2)	0.4	0.6	〈0.8〉	〈40°〉	Ⅱe5
85	C－20	褐色粘質土層	〃 C	完	0.4	1.9	1.2	0.25	0.6	0.8	40°	Ⅱf3
86	B－21	黒褐色軟質土層	〃 B	C	0.2	1.7	(0.9)	0.2	0.5	〈0.8〉	56°	〃
87	B－20	黒褐色軟質土層	〃 C	C	0.4	2.0	(1.15)	(0.25)	0.8	〈0.9〉	58°	〃
116-88	B－21	黄褐色軟質土層	〃 B	A	0.4	(1.6)	1.3	0.25	0.75	0.8	〈57°〉	〃
89	B－20	黒褐色軟質土層	〃 A	完	0.4	1.95	1.25	0.25	0.6	0.7	60°	〃
90	C－17	黒褐色軟質土層	〃 C	C	0.6	2.1	(1.2)	0.35	0.65	〈1.3〉	〈65°〉	〃
91	B－20	黒褐色軟質土層	〃 C	A	0.5	(1.5)	1.2	0.3	0.6	0.7	〈38°〉	Ⅱf4
92	B－21	黒褐色軟質土層	〃 C	完	0.4	2.1	1.2	2.5	0.8	0.8	45°	〃
93	B－21	黒褐色軟質土層	〃 B	完	4.1	1.9	1.15	0.25	0.6	0.7	60°	〃
94	E－18	黒褐色軟質土層	〃 B	完	0.5	2.2	1.3	0.3	0.7	1.0	60°	〃
95	B－21	黒褐色軟質土層	〃 C	D	0.4	(1.8)	(0.8)	0.35				〃
96	B－21	黒褐色軟質土層	〃 B	完	0.6	2.4	1.25	0.3	0.7	0.8	45°	〃
97	B－20	黒褐色軟質土層	〃 C	C	0.4	2.7	(1.1)	0.3	0.8	〈0.8〉	31°	〃
98	D－19	黒褐色軟質土層	〃 A	B	0.6	(2.3)	(1.4)	0.4			40°	
99	F－18	黒褐色軟質土層	〃 B	B	0.6	(1.9)	(1.5)	0.25			62°	
100	B－19	黄褐色軟質土層	〃 B	B	1.4	(2.5)	(1.6)	0.65			45°	
101	B－ 8	褐色粘質土層	〃 B	B	0.8	(2.4)	(1.3)	0.4			33°	
102	D－10	褐色粘質土層	〃 B	B	0.7	(1.8)	(1.3)	0.4			55°	
103	P－21	撹乱中	〃 B	E	1.0	(2.0)	(1.8)	0.3			〈45°〉	
104	E－19	黒褐色軟質土層	〃 A	B	1.0	(2.1)	(1.3)	0.5			40°	
105	E－18	黒褐色軟質土層	安山岩	C	1.1	2.1	1.2	0.5			95°	
106	B－21	黒褐色軟質土層	〃 C	E	0.4	(1.7)	(1.3)	0.2				
107	B－21	黒褐色軟質土層	〃 B	B	0.7	(2.3)	(1.0)	0.35			52°	
108	J－13	褐色粘質土層	〃 B	B	0.8	(2.5)	(1.5)	0.2			35°	
117-109	J－16	黒褐色軟質土層	〃 B	B	0.8	(2.0)	(1.6)	0.3			57°	
110	D－ 8	褐色粘質土層	〃 B	B	0.4	(1.3)	(1.3)	0.3			67°	
111	E－ 9	褐色粘質土層	安山岩	E	0.5	(1.4)	(1.4)	0.3			〈50°〉	
112	C－10	ドーナツ状土壙	〃	A	1.0	(1.4)	1.6	0.4	0.5	0.3		
113	B－21	褐色粘質土層	〃 B	A	0.3	(1.15)	1.4	0.15	0.3	0.6		
114	D－16	黄褐色軟質土層	〃 C	A	0.3	(0.9)	1.4	0.3	0			
115	N－18	褐色粘質土層	〃 B	D	0.4	(1.5)	(1.5)	2.25	0.6	〈0.8〉		
116	B－21	ドーナツ状土壙	〃 A	D	0.2	(1.2)	(1.0)	0.2	0.6	〈0.8〉		

挿図番号	出土区	出土層位	石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(cm)			抉り(cm)		先端角度	分類
						長	幅	厚	深度	幅		
117	B－20	撹乱中	黒曜石A	D	0.2	(1.5)	(1.1)	0.3	1.0	⟨1.0⟩		
118	M－15	撹乱中	〃 A	E	2.2	(2.1)	(2.1)	(0.6)				
119	D－21	褐色粘質土層	〃 B	D	1.2	(2.3)						
120	D－17	黒褐色軟質土層	〃 B	F	0.4							
121	B－20	黄褐色軟質土層	〃 C	F	0.9							
122	E－14	黒褐色軟質土層	〃 B	F	0.4							
123	I－15	褐色粘質土層	〃 B	B	0.4	(1.7)	(1.2)	0.3			65°	
124	I－13	褐色粘質土層	〃 B	B	0.4	(1.6)	(1.2)	0.2			50°	
125	M－13	褐色粘質土層	〃 B	E	0.3	(1.4)	(1.1)	0.2			(53°)	
126	C－21	黄褐色軟質土層	〃 A	B	0.4			0.3			60°	
127	M－13	褐色粘質土層	〃 A	F	0.3							
128	K－12	褐色粘質土層	〃 B	F	0.3							
129	E－19	黒褐色軟質土層	〃 B	F	0.2							
130	F－16	褐色粘質土層	〃 B	F	0.9							
131	F－17	褐色粘質土層	〃 B	F	0.4							
132	D－19	黒褐色軟質土層	〃 A	B	0.6	(2.3)	(1.4)	0.4			38°	
133	E－17	褐色粘質土層	〃 B	C	0.9	0.2	1.65	0.4	0.2	⟨0.6⟩	⟨43°⟩	
134	E－19	褐色粘質土層	〃 A	F	0.2							
135	H－14	褐色粘質土層	〃 B	F	0.2							
136	E－18	黒褐色軟質土層	〃 A	F	0.5							
137	H－10	褐色粘質土層	〃 A	F	0.3							
118-138	B－18	黒褐色軟質土層	〃 A	F	0.4							
139	E－15	褐色粘質土層	〃 A	F	0.1							
140	B－21	褐色粘質土層	〃 A	F	0.1							
141	F－18	褐色粘質土層	〃 A	F	0.1							
142	Q－20	褐色粘質土層	〃 B	F	0.4							

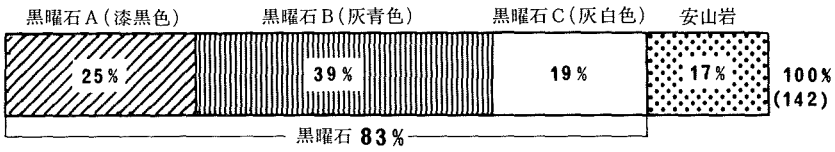


Fig. 121 石鏃石材別依存度

Ia 類
(Fig. 112-1～4)

1～4は基部が張り出すものでIa 類に分類し，1～3をIa3，4をIa4 とした。

• Ia3　1は自然面を若干有す。2・3はパテナが顕著にみられる。3点とも全体的に，二次加工は粗雑である。

• Ia4　4の1点のみで，黒曜石B製である。左右非対照の基部をなす。

Ib 類
(Fig. 112-5～16)

平基式のもので，基部がほとんど一直線状になるもの，あるいは，わずかに内湾するもので，5～16を，Ib 類とした。うち，Ib2を5～10，Ib3 を11～15，Ib4 を 16 とした。

• Ib2　ほぼ正三角形状を呈するタイプである。5・6・7・8・9は安山岩製で風化がやや進み，10は片面に磨製面をもつ局部磨製石鏃である。

• Ib3　11・12は小形のものである。15は小形の局部磨製石鏃である。

• Ib4　16は安山岩製である。基部は左右非対象で若干内湾する。

Ⅱc 類
(Fig. 112-17～54)

Ⅱ類は基部に抉りのあるもので，抉りの幅・深さの違いにより，Ⅱc，Ⅱd，Ⅱe，Ⅱf 類の4段階に分けた。Ⅱc 類は，抉りの幅が深さより大きいものである。17～54である。うち，Ⅱc1を17，Ⅱc2を18，Ⅱc3 を19～50，Ⅱc4 を51・52，Ⅱc5 を53・54とした。

• Ⅱc1　18は，黒曜石A製である。先端部は細かな二次加工により鋭利に作られており，石錐としての用途も考えられるものである。

Ⅱc2　19の1点のみで黒曜石A製，片脚を欠損する。

Ⅱc3　長幅比が3：2に近いもので，このタイプが最も多い。25は安山岩製で抉りは浅いものの，形状はⅡf 類に近似すると考えられる。33は黒曜石C製である。主要剥離面を片面に残すが，周辺部は細かな二次加工により，鋸歯状となる。46・47・48・49は局部磨製石鏃である。

• Ⅱc4　51は黒曜石B製でパテナがある。二次加工は粗雑である。

• Ⅱc5　52は黒曜石A製で，片脚を欠損する。長さ4.3cm，幅約2.3cm（片脚欠損のため推定）厚さ1.2cmを計測するもので，中央に最大厚をもつ菱形に近い断面である。本遺跡出土石鏃中で最大のものである。53は安山岩製で，先端と片脚を欠損する。52と同じく大形のものである。風化が進み，剥離痕は不鮮明である。52と比較するとやや薄型となり，断面もレンズ状となる。

Ⅱd 類
(Fig. 114-54～70)

抉りの幅と深さがほぼ1：1もしくは，幅がやや大きいもので，54～70を，Ⅱd 類とした。うち，54をⅡd2，55～66をⅡd3，67・68・69をⅡd4，70をⅡd5 とした。

• Ⅱd2　54は小形の安山岩製である。先端は鈍角で，両脚端部を欠損している。

• Ⅱd3　62は片面に自然面があり，もう片面には主要剥離面を中央に残す薄平のものである。63は脚部に特徴がある。65・66は局部磨製石鏃。

• Ⅱd4　68・69は，全体に細かな二次加工を施す。先端は鋭利で，断面はレンズ状となる。

• Ⅱd5　70は，若干の自然面を残し，黒曜石A製である。脚端部は平たく角ばっており，側辺部はやや張る。比較的に厚手である。

Ⅱe 類　(Fig. 115-71～84)　この類は，抉りの幅より深さの方が大きくなるもので，71～84がⅡe類である。71・72・73をⅡe1，74・75・76をⅡe2，77～81をⅡe3，82・83をⅡe4，84をⅡe5 とした。

• Ⅱe1　71は黒曜石B製である。左右対照になっており，二次加工も全体に緻密に施され，側辺は鋸歯状となる。72は黒曜石A製で，先端角は鈍角となり，最も幅広のものである。加工は全体的に細く，先端部にやや大きな剥離痕がある。71・72ともに断面は薄いレンズ状となる。73は先端の一部と片脚を欠損する。黒曜石A製で，いわゆる鍬形鏃とされる縄文時代早期末などに多くみられる石鏃である。

• Ⅱe2　75は身に比べて，抉り部分の占める割合が大きい。脚部は内側で，鋭角となる。76は安山岩製の石鏃のなかで唯一抉りの深いもので，脚部の外側で鋭角となる。

• Ⅱe3　77は，表裏に主要剥離面を有す。周辺部において二次加工を施し，鋸歯状の側辺部を作り出している。81は脚部に特徴をもつ局部磨製石鏃である。

• Ⅱe4　82・83ともに，黒曜石B製で，パテナが若干みられる。

• Ⅱe5　84は黒曜石A製で，先端と片脚を欠損するが全体の形状は推定できる。細型のもので，二次加工は細かく鋸歯状側辺となる。

Ⅱf 類　(Fig. 115·116-85～97)　抉りも深く，先端及び脚端部が鋭く尖る。側辺部がやや内湾し，鋸歯状となるもので，85～97をⅡf 類とした。うち，85～90をⅡf3，91～97をⅡf4 とした。

• Ⅱf3　87・88・89・91は鋸歯状の側辺部が顕著である。全体的に，次のⅡf4 より若干扁平な観がある。

• Ⅱf4　Ⅱf3 と比べると幾分二次加工はやや細かになる。脚部も長くなり一層細身となる。特に97は，片脚を欠損するがその特徴をよく表わすものである。

その他
(Fig. 116〜118)

100は抉りの深いものと考えられる。98・101・102・104・107・108は先端部が細長い。特に107は，縦に細長くなっており，特徴的である。115・116・117は先端部と脚部を欠損するもので形状は明確ではないが，抉りが深く，脚端部は尖るものである。118は，先端部と両脚を欠くものである。130は大形の石鏃の片脚部分と思われる黒曜石B製である。133・134は，脚部のみであるが，おそらくⅡf 類に属するタイプのものであると考えられる。

西輪久道遺跡出土の石鏃を全体的にみると，石材別依存度（Fig. 121）では，全体の83%を黒曜石が占める。黒曜石は平遺跡と同様，色調により三種類にA・B・C類と分類した。黒曜石A（漆黒色黒曜石）。黒曜石B（灰青色黒曜石）は，パテナの発達が著しく39%と最も出土率が高い。黒曜石C（灰白色黒曜石）は，透明度をもつものである。また，幅・長さ・重量を集計したグラフ（Fig. 122）によれば，幅は1〜2.5cmの間に，長さは1〜4cm弱の間にそれぞれ集中している。重量も0.5g前後のものが最も多く，軽量のものが多いことがわかる。先端角度は(Fig.122）約60度をピークにして，30度〜100度までに及ぶ。石鏃の先端角度は石鏃の長幅比とのかねあいを考慮しなければならない。一般に石鏃の側縁は，直線的なものより，ややふくらみをもつものが多い。本遺跡での長幅比は，3：2になるものが最も多く，この類の石鏃が60度前後の先端角をもつのであろう。

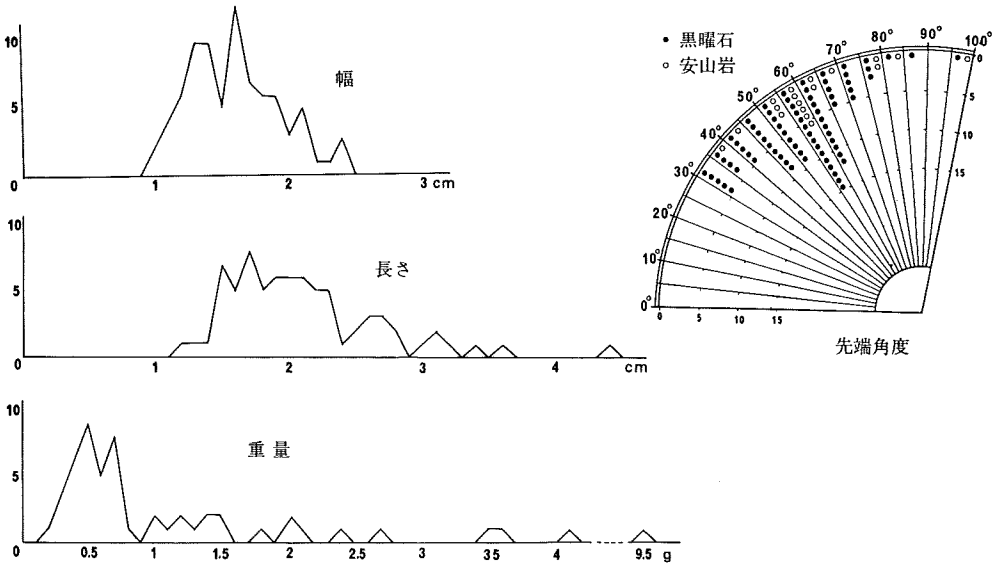


Fig. 122　石鏃幅・長さ・重量・先端角度グラフ

石匙
(Fig. 123, 124)
〔ＰＬ.60～63〕

石匙は，横型が８点，縦型が４点，計12点の出土で，横型が縦型の倍の出土をみる。石材はすべて安山岩である。１は横に長く厚みをもち，二次加工を全体に施す。つまみ部は大きくしっかりとつくられており，両側先端は尖る。下端刃部は一直線状となる。２は下端刃部が内湾し，両先端部は鈍く尖る。表裏ともに主要剥離面を残し，周辺とつまみ部において両面より二次加工を施している。つまみ部をはじめ全体的に，幅広の観があり，片側一部と上部に自然面を有する。３は横に細長く，つまみ部を欠損する。両側は均等でなく片側へいくに従い序々に厚く大きくなっている。全体に二次加工を表裏より施し，両端部は尖らない。幅広の側は若干の自然面を有する。下端刃部は内湾せず，かつ平坦となっている。４は12点中最も薄いもので，表裏に主要剥離面を残す。周辺のみ二次加工が施され，刃部，つまみ部をつくり出している。つまみ部は抉りが浅く小さいものである。片側の先端のみ尖り，下端刃部は内湾し孤状となる。５は両側の先端が欠損しており，表裏に主要剥離面を残す。３に近い形状で片側の方へと大きくなる。つまみ部は抉りも深く丁寧につくり出している。下端刃部はやや内湾する。６は小形のもので片側とつまみ部の一部を欠損する。つまみ部は抉りも深く加工も丁寧でしっかりとつくられている。刃部はわずかに内湾すると考えられる。７は両側を欠損するものである。主要剥離面を残し，周辺を細かく二次加工している。８は縦長のもので左右対照を成す。加工も細やかで全体に施され，薄いつくりとなっている。周辺全体が刃部と考えられる。９は縦型のもので，つまみ部において最大を測り中心を成す。左右は非対照である。表面には自然面を有し，裏面には主要剥離面を残す。刃部両側にあり，全体的に二次加工は粗雑である。10は比較的に粗雑なつくりで，裏面には主要剥離面を残す。刃部は両側と下端が使用されたものと考えられる。11・12は双方とも，表裏に主要剥離面を残し，つまみ部も幅広で二次加工は粗雑である。11は幅広のつまみ部が身部に対し斜めにつき，刃部は下端である。上部と片側に自然面を残す。12は縦型と考えられるもので，刃部は片側のみに確認できる。

全体的にみると，横型・縦型とも表裏にあるいは片面に，主要剥離面を大きく残すものが多い。また，幅広のつまみ部を有するものは，つまみ部上端に自然面を残しており，平遺跡のものと同じである。

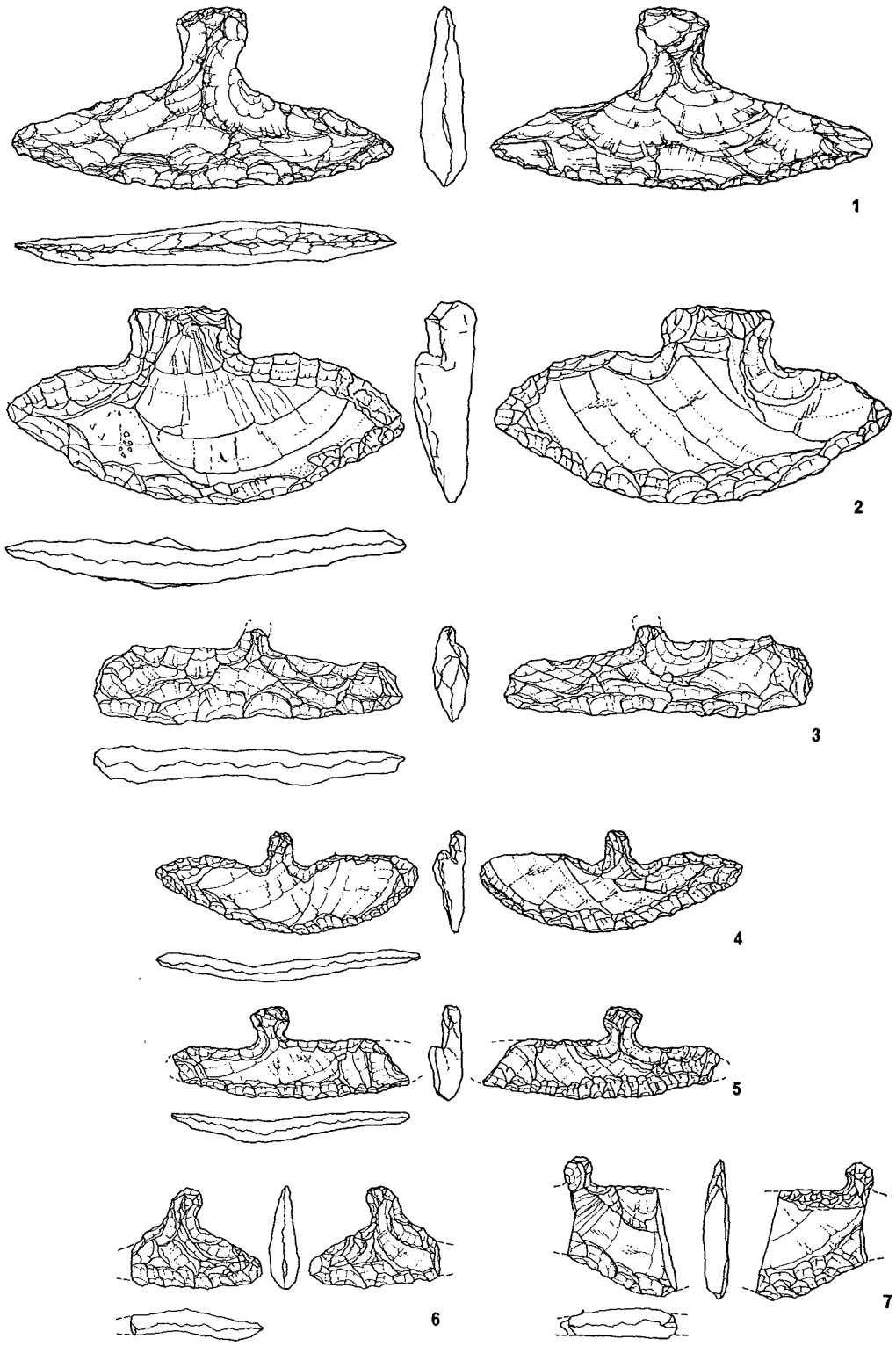


Fig. 123　縄文時代の石器—石匙① (1/2)

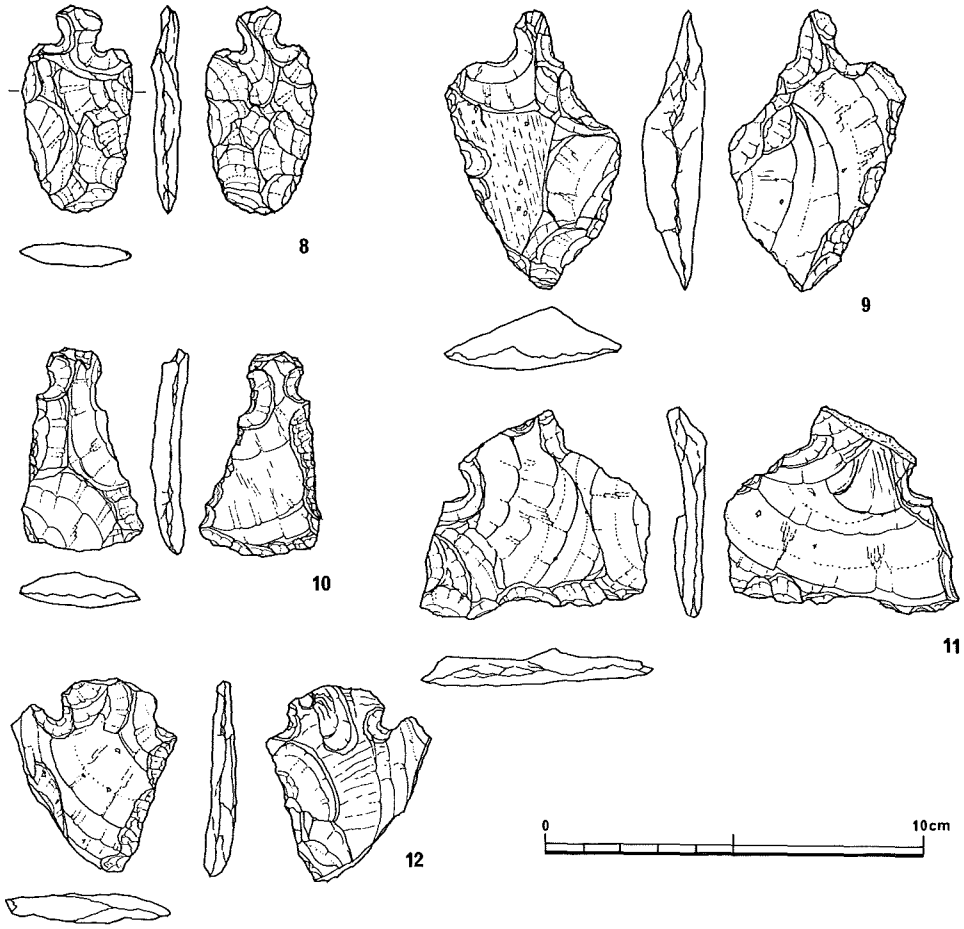


Fig. 124 縄文時代の石器—石匙② (1/2)

Tab. 13 石匙計測表 ( )は現寸

挿図番号	分類	出土区	出土層位	石材	重さ(g)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
123-1	横形	D－7	褐色粘質土層	安山岩	44.2	5.4	11.5	1.3	
2	〃	J－16	褐色粘質土層	〃	74.9	6.0	12.0	1.2	
3	〃	D－7	褐色粘質土層	〃	23.0	2.9	9.3	1.0	つまみ部先端欠損
4	〃	M－13	褐色粘質土層	〃	10.2	3.1	7.9	0.6	
5	〃	E－11	褐色粘質土層	〃	8.2	2.9	(7.3)	0.7	両側端部欠損
6	〃	C－11	撹乱中	〃	7.0	3.1	(4.0)	0.8	片側欠損
7	〃	E－8	溝内	〃	11.6	4.2	(3.5)	0.8	両側欠損
124-8	縦形	E－12	褐色粘質土層	〃	33.1	7.4	4.7	1.6	
9	〃	J－14	黒褐色軟質土層	〃	11.7	5.5	3.0	0.6	
10	〃	D－11	撹乱中	〃	10.0	5.5	3.2	0.8	
11	横形	D－11	ドーナツ状土壙	〃	24.6	5.6	6.2	0.8	
12	縦形	B－17	黒褐色軟質土層	〃	14.3	5.3	4.4	0.7	

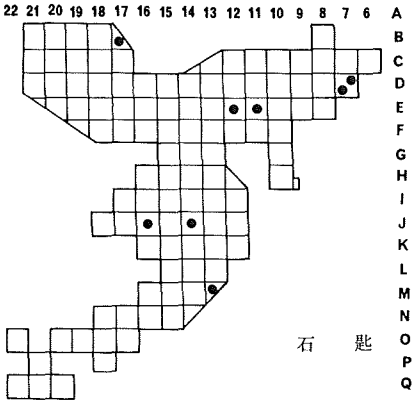


Fig. 125　各地区出土石匙

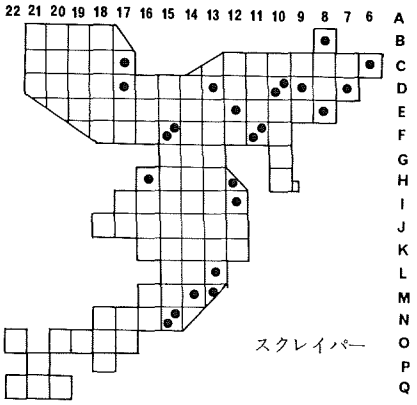


Fig. 126　各地区出土スクレイパー

スクレイパー
(Fig. 127～129)
〔ＰＬ.64～71〕

28点の出土である。グリッド別(Fig. 126)にみると，北東側にやや多くみられるようである。層位別の出土においてはドーナツ状土壙より２点，撹乱中より３点，層位中より23点の出土であるが，そのほとんどが第Ⅱ層である褐色粘質土層中からの出土である。石材では28点中15点が安山岩製で過半数を占める。長側縁に刃部をもつ，いわゆるサイドスクレイパーが極めて多い。１は黒曜石Ｃ製で，二次加工により鋭角な刃部を全周にわたって作りだしているラウンドスクレイパーである。同類と考えられるものが，九州横断自動車道に関係した，西輪久道遺跡[註1]からも出土している。２は安山岩製で，一側縁の一部に刃部である細やかな二次加工がみられる。３は黒曜石Ｂ製で，両長側縁に刃部をもつ。中央は抉れて凹んでおり比較的薄手のものとなっている。４は一側縁に刃部をもつもので安山岩製である。厚手の作りで，断面は三角形状を呈する。５・７は全体的に大まかな剥離である。６は上部に礫面をもち，一側縁全体が刃部でほぼ一直線状となっている。８は安山岩製の大形の横長剥片を使用している。全体的に大まかな剥離であるが，刃部においては細やかな二次加工を施している。９は黒曜石Ｂ製で刃部は細やかな二次加工を施す。10は安山岩製で下部を欠損する。断面は三角形を呈しやや厚手となっている。11は安山岩製で表面の一部に自然面をもち，一側縁に刃部をもつ。12は安山岩製で大まかな剥離である。13は黒曜石Ｂ製で，パテナが著しい。14は下端に自然面をもち，上部は欠損していると考えられる。15は黒曜石Ｂ製で，一側縁に二次加工により刃部を作りだしている。断面は扁平な三角形状で，薄いものとなる。一部に自然面を有す

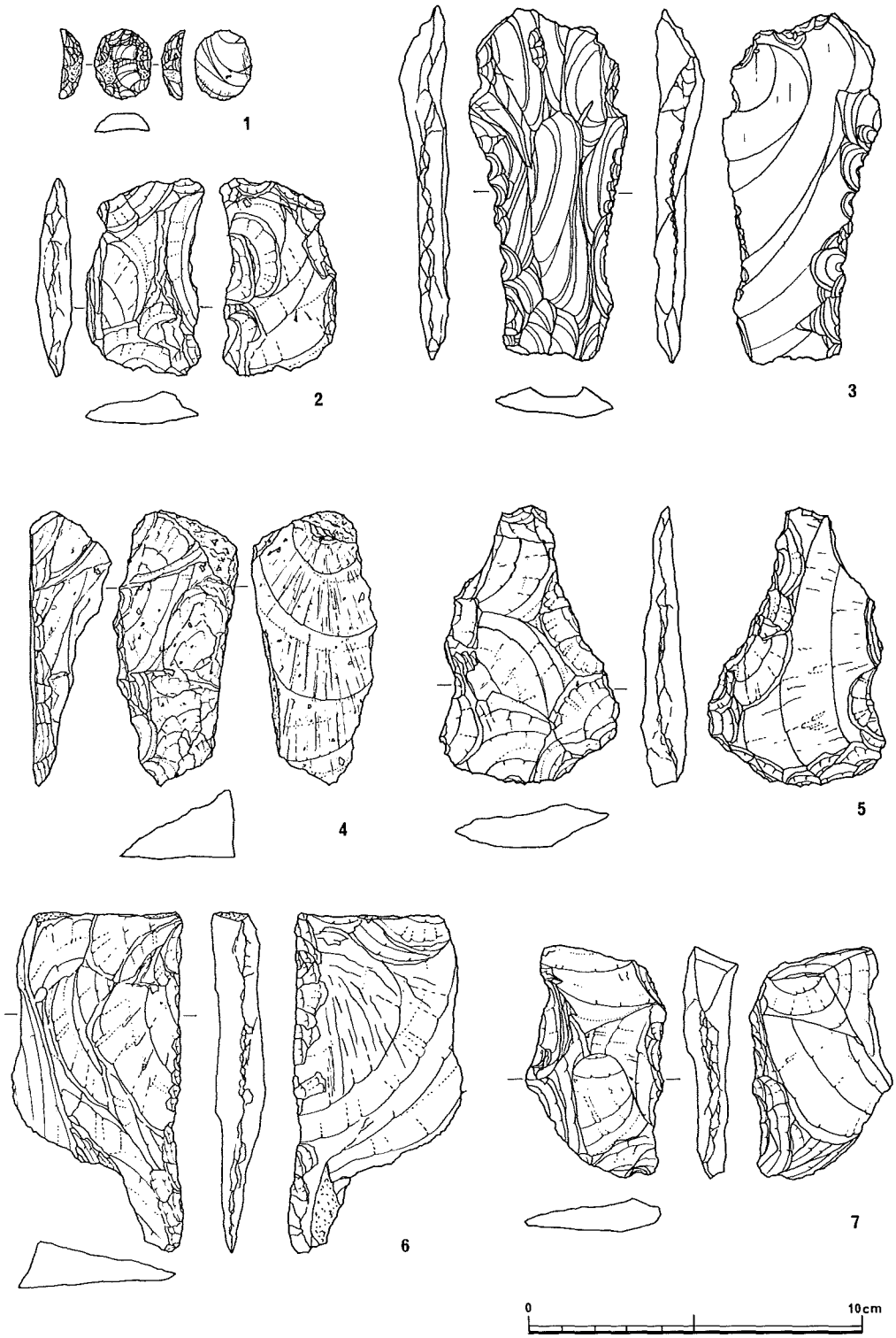


Fig. 127　縄文時代の石器―スクレイパー① (1/2)

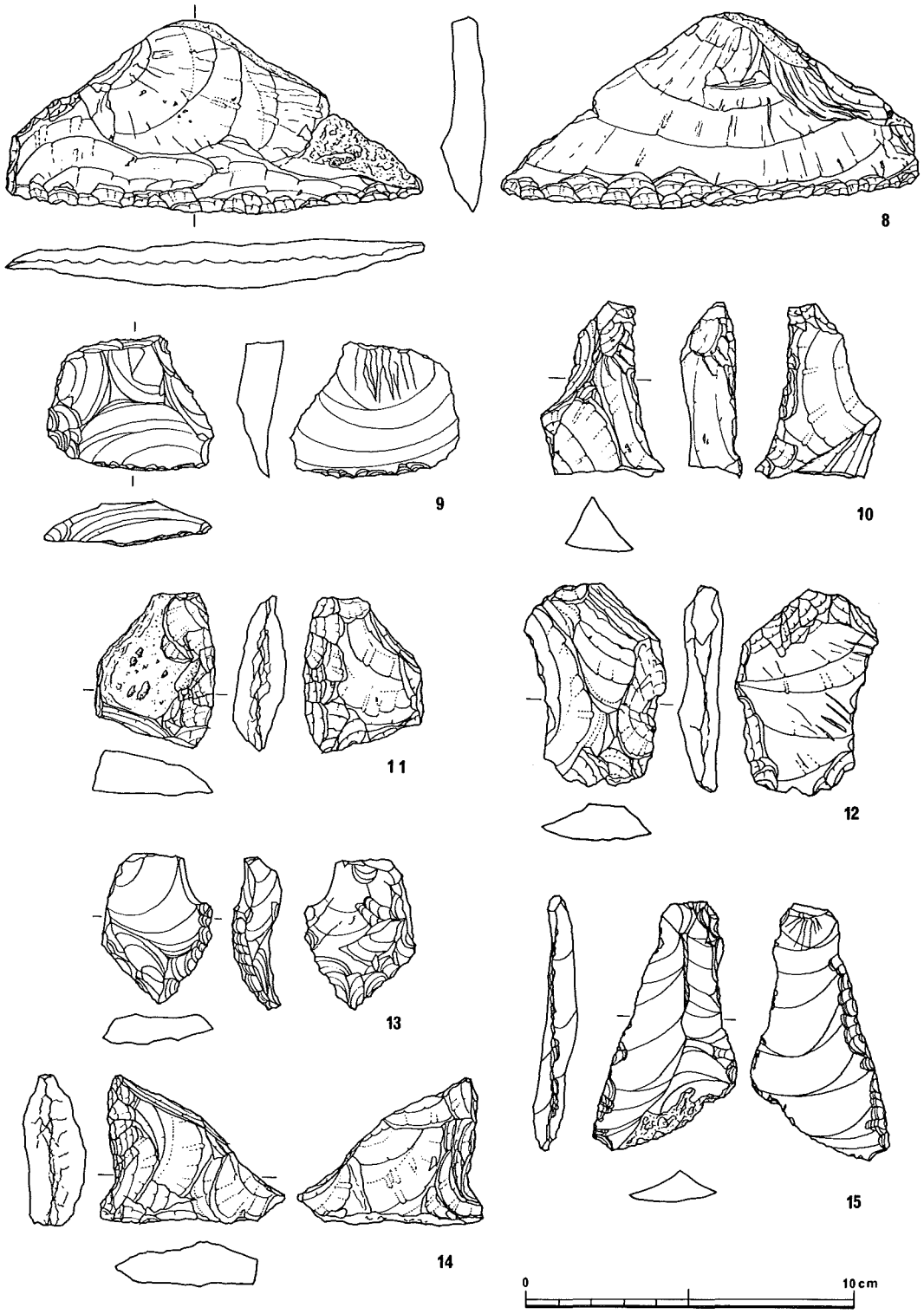


Fig. 128　縄文時代の石器―スクレイパー② (1/2)

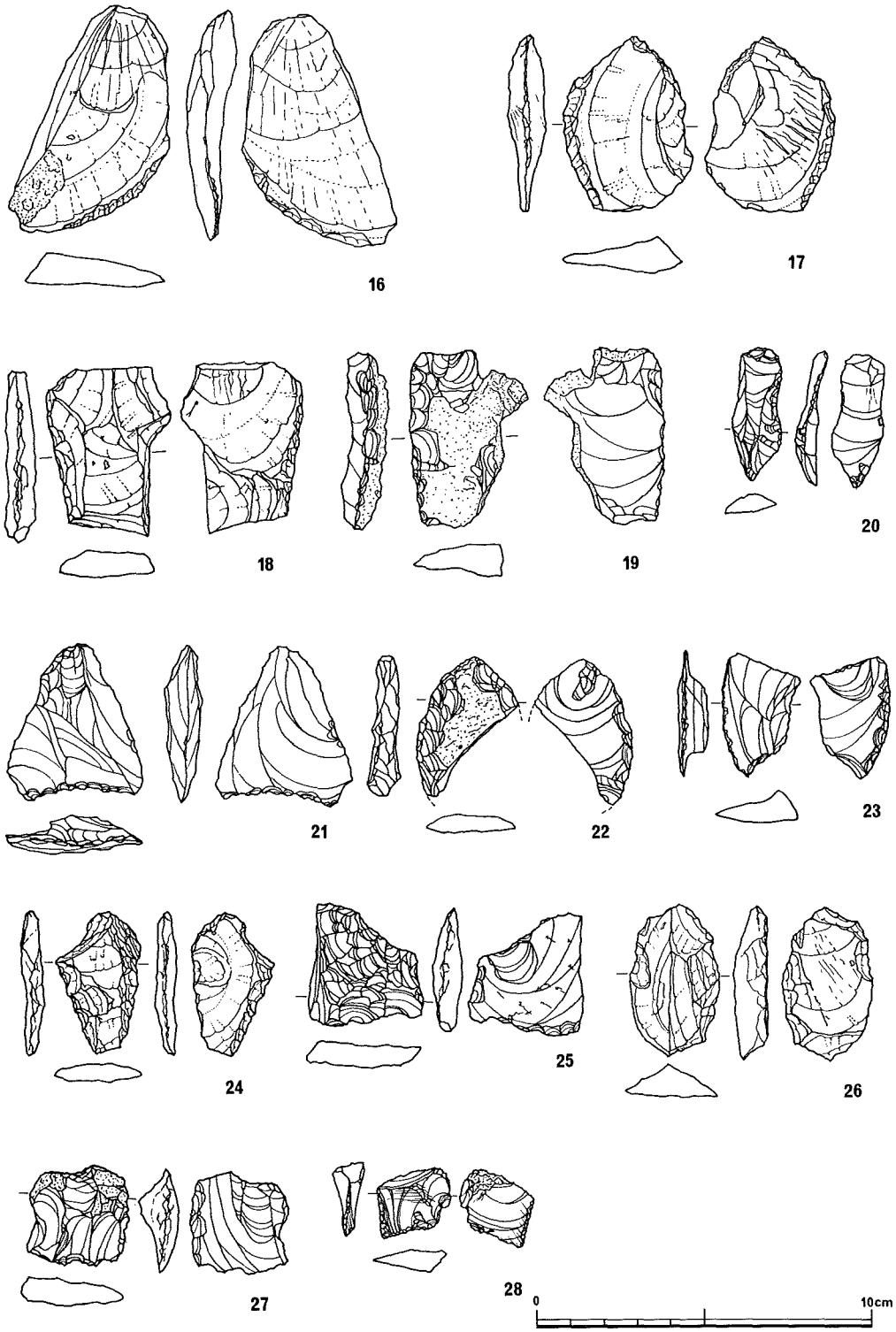


Fig. 129　縄文時代の石器―スクレイパー③（1/2）

Tab. 14　スクレイパー計測表　　( )は現寸

挿図番号	出土区	出土層位	石材	重さ(g)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
127-1	D－7	褐色粘質土層	黒曜石C	2.0	2.0	1.7	0.6	若干自然面あり。
2	M－13	褐色粘質土層	安山岩	20.5	7.8	3.4	0.9	
3	C－13	ドーナツ状土壙	黒曜石B	46.8	10.6	4.7	1.2	両側縁に刃部あり。
4	F－15	褐色粘質土層	安山岩	53.3	8.2	4.8	2.3	
5	E－12	褐色粘質土層	〃	47.4	8.4	5.4	1.3	
6	H－16	黒褐色軟質土層	〃	62.2	10.2	5.0	1.4	
7	F－11	褐色粘質土層	〃	36.0	6.9	4.1	1.1	
128-8	C－10	撹乱中	〃	78.7	16.0	12.8	1.4	大型の横長剝片。
9	D－13	褐色粘質土層	黒曜石B	19.1	5.1	4.0	1.0	
10	C－17	黒褐色軟質土層	安山岩	20.1	5.4	3.9	1.7	
11	D－17	黒褐色軟質土層	〃	26.1	4.8	3.8	1.3	自然面あり。
12	B－20	ドーナツ状土壙	〃	31.0	6.3	5.3	1.3	
13	F－11	褐色粘質土層	黒曜石B	18.3	4.5	3.5	1.1	
14	C－6	褐色粘質土層	安山岩	37.3	4.7	5.6	1.3	自然面あり。
15	H－12	褐色粘質土層	黒曜石B	21.0	7.8	4.5	1.0	自然面あり。
129-16	I－12	褐色粘質土層	安山岩	30.5	6.9	4.5	1.3	
17	J－16	撹乱中	〃	16.0	5.1	3.7	1.0	
18	D－10	褐色粘質土層	〃	13.5	5.2	3.8	0.8	
19	F－15	褐色粘質土層	黒曜石B	19.8	5.2	3.5	0.9	自然面あり。パテナあり。
20	B－8	褐色粘質土層	〃 A	3.0	4.0	1.5	0.6	
21	D－10	褐色粘質土層	〃 B	12.5	4.7	4.0	0.9	
22	C－21	撹乱中	〃 C	7.2	(4.2)	(2.7)	0.8	一部欠損。
23	E－8	褐色粘質土層	〃	5.1	3.8	2.4	0.9	
24	N－15	褐色粘質土層	安山岩	5.2	4.5	2.4	0.5	
25	N－15	褐色粘質土層	黒曜石B	9.7	3.7	3.6	0.9	
26	M－14	褐色粘質土層	安山岩	11.2	4.5	2.8	1.0	
27	D－9	褐色粘質土層	黒曜石B	8.0	3.1	3.1	1.2	
28	L－13	褐色粘質土層	〃 A	5.2	(2.2)	(2.3)	0.8	一部欠損。

る。16は安山岩製で刃部は細やかな二次加工が施され，ゆるやかな孤状を呈している。17・18は安山岩製。19は黒曜石B製で，刃部は一直線上である。一部に自然面をもつ。パテナがみられる。20は黒曜石A製で小形のスクレイパーと考えられる。刃部は細やかな二次加工を表面のみに施している。先端は尖り石錐として使用された可能性が強く若干のつぶれがみられる。21は黒曜石B製。22・23は黒曜石C製である。22は欠損品である。24・26は安山岩製で，25・27は黒曜石B製である。4点とも

刃部はわずかな加工が施されているものの判然としない。28は黒曜石A製で欠損していると思われる。刃部は細かい二次加工を施しており，小形のスクレイパーと考えられる。

全体的にみると，大形のものに安山岩製のものが多く，小形のものに黒曜石製のものが多いと言えよう。また，第Ⅱ層出土のものが圧倒的に多く興味深いところである。

註1　長崎県教育委員会　1983「九州横断自動車道に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　Ⅲ」

加工痕ある石器
(Fig. 130)
〔ＰＬ.72・73〕

1は黒曜石B製で一部に自然面をもち，表裏より全体に二次加工を施す。両側縁を鋭利な刃状に加工しており，歯こぼれの様相もうかがえる。2は黒曜石A製で扁平な剥片を利用している。主要剥離面を表裏に残し，両側縁に二次加工を施す。下端は途中で折れている。スクレイパー的なものと考えられる。3は黒曜石B製である。欠損しており現存部のみでみると三角形状を呈しており，一縁を両面より刃状に加工している。4・5は安山岩製で双方とも比較的に厚い剥片を利用している。裏面には，二次加工はみられず主要剥離面を残す。特に一側縁の中央部を若干抉るようにして二次加工を施している。

使用痕ある剥片
(Fig. 130・131)
〔ＰＬ.72～75〕

11点の出土である。黒曜石製9点，安山岩製2点で縦長剥片がそのほとんどを占める。使用痕である刃こぼれはすべて長側縁のみに形成されている。そこで使用痕の形成部に注目し次の3タイプに分類した。先ず6・7・8・9・10は一側縁の表面，裏面のいずれかに使用痕が形成されるもの。11・12・13・14は一側縁の表裏面に形成されるもの。15・16は両側縁に形成されるものである。6は一側縁裏面に刃こぼれが顕著で上部はやや厚くなり自然面をもつ。7・8・9・10は黒曜石A製で一側縁の表面に刃こぼれがみられるものである。9はパテナが著しい。1は黒曜石C製，2は黒曜石B製，3は安山岩製，4は黒曜石A製で9点とも一側縁表裏に刃こぼれがみられる。12・14はパテナがみられる。15は安山岩製で下部が欠損するものである。両側縁表裏に刃こぼれがみられる。16は黒曜石B製で小形ではあるが唯一の横長剥片であり，両長側縁表裏にそれぞれ刃こぼれがみられる。なお，7・9は刃こぼれの部分が若干抉れており，抉入状石器としての要素も考えられる。

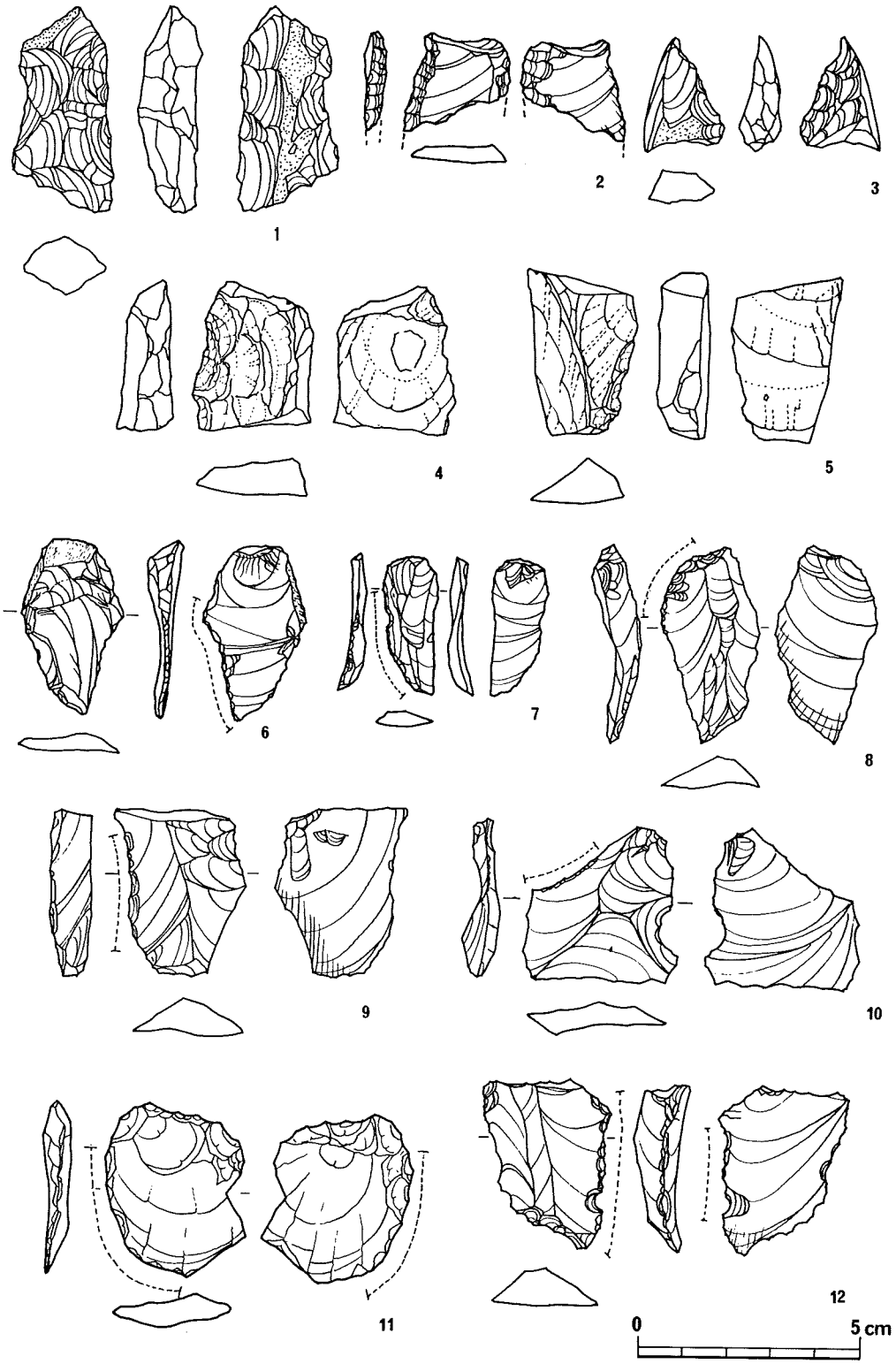


Fig. 130　縄文時代の石器—加工痕ある石器・使用痕ある剥片（2/3）

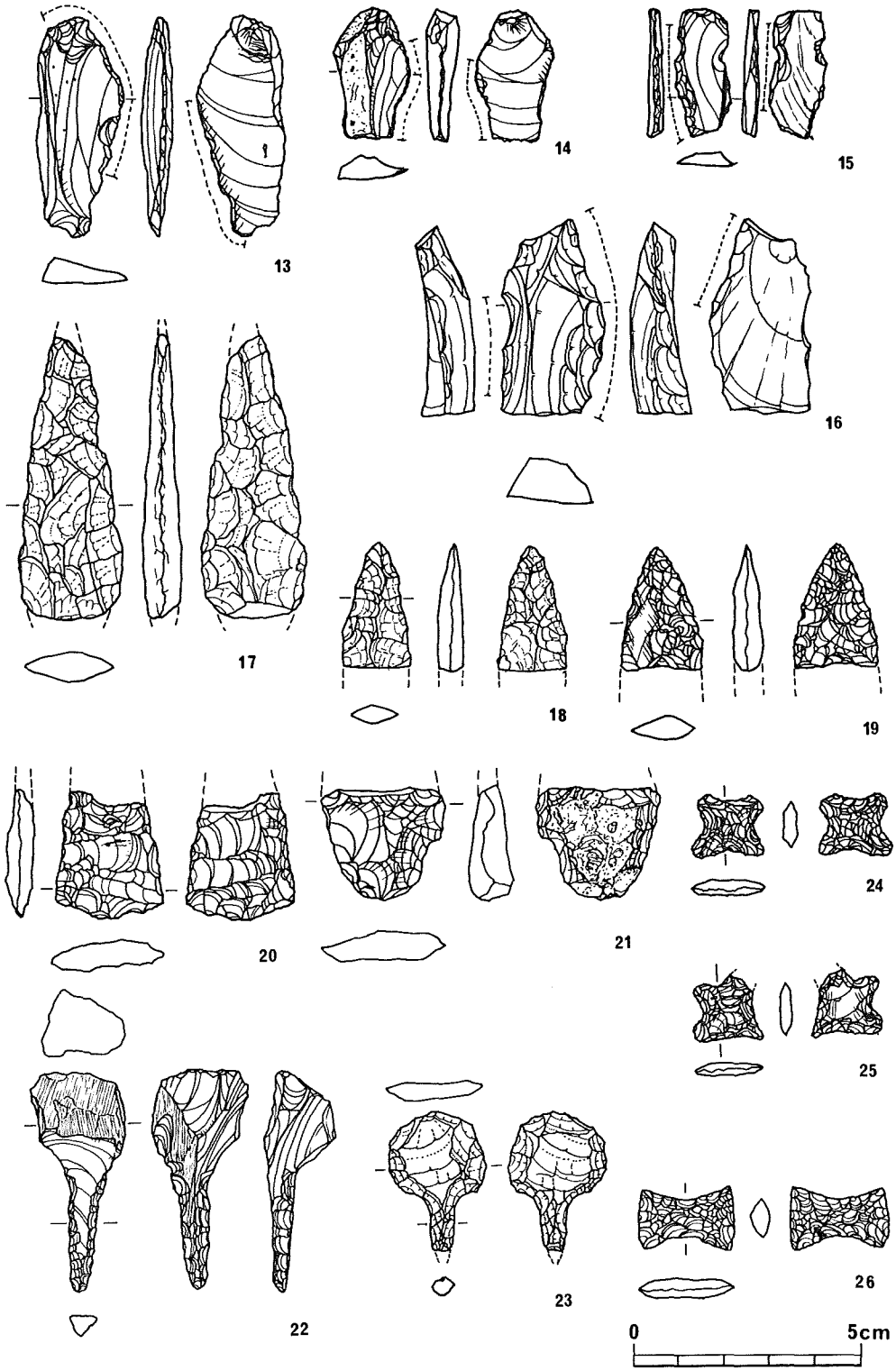


Fig. 131　縄文時代の石器—使用痕ある剝片・石槍・石錐・異形石器（2/3）

石槍
(Fig. 131)
〔ＰＬ.74・75〕

17は安山岩製で表裏より加工を施す。先端部と基部末端を欠くものであるが，概観は想定できる。長さ７～８cmほど，幅は約2.2cmを最大とする，やや細身の形状を呈すものと考えられる。18は安山岩製の槍先端部である。基部に至るまで，極端な変化をしないならば，おおよそ17に類似するやや細身のものと考えられる。19は黒曜石Ａ製で先端部である二次加工は表裏より細やかに施されている。18と比較してみるとやや幅広であり，17・18より横張りの強い石槍が想定される。20は黒曜石Ａ製で基部と思われる。やや角張っており薄いつくりである。二次加工は，

Tab. 15　加工痕ある石器・使用痕ある剥片・石槍・石錐・異形石器一覧表

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	石材	備考	重量(g)
130-1	Ｆ－18	褐色粘質土層	加工痕ある石器	黒曜石Ｂ	全体に加工を施す。	11.8
2	Ｂ－19	褐色粘質土層	〃	〃　Ａ	両側縁に加工あり。下部欠損。	2.3
3	Ｅ－12	褐色粘質土層	〃	〃　Ｂ	一部欠損。	2.8
4	Ｆ－10	褐色粘質土層	〃	安山岩	一側縁に加工を施す。	12.6
5	Ｈ－12	黒褐色軟質土層	〃	〃	上部欠損。	10.0
6	Ｆ－17	褐色粘質土層	使用痕ある剥片	黒曜石Ｂ	一側縁裏面に刃こぼれ顕著。	4.6
7	Ｅ－14	褐色粘質土層	〃	〃　Ａ	一側縁表面に刃こぼれ。	1.1
8	Ｄ－20	黒褐色軟質土層	〃	〃　Ａ	一側縁表面に刃こぼれ、パテナあり。	5.1
9	Ｆ－16	褐色粘質土層	〃	〃　Ａ	一側縁表面に刃こぼれ。	7.6
10	Ｆ－15	褐色粘質土層	〃	〃　Ａ	一側縁表面に刃こぼれ。	5.8
11	Ｄ－12	褐色粘質土層	〃	安山岩	一側縁表裏に刃こぼれ。	7.6
12	Ｅ－13	黄褐色軟質土層	〃	黒曜石Ｃ	一側縁表裏に刃こぼれ顕著。	9.5
131-13	Ｂ－18	黒褐色軟質土層	〃	〃　Ｂ	一側縁表裏に刃こぼれ。	5.0
14	Ｎ－14	褐色粘質土層	〃	〃　Ａ	一側縁表裏に刃こぼれ。	2.6
15	Ｂ－20	黒褐色軟質土層	〃	〃　Ｂ	両側面、表面、裏面にそれぞれ刃こぼれ。	1.3
16	Ｅ－15	黒褐色軟質土層	〃	安山岩	両側面、表裏に刃こぼれ。	11.2
17	Ｂ－18	黒褐色軟質土層	石槍	〃	先端と基部末端を欠損。	11.0
18	Ｄ－10	褐色粘質土層	〃	〃	先端部のみ。	2.2
19	Ｄ－10	褐色粘質土層	〃	黒曜石Ａ	先端部のみ。	2.5
20	Ｎ－15	撹乱中	〃	〃　Ａ	基部のみ。	3.6
21	Ｅ－17	黒褐色軟質土層	〃	〃　Ｂ	基部のみ。	5.5
22	Ｆ－14	黒褐色軟質土層	石錐	〃　Ｂ	先端は長く、断面は三角形を呈する。	7.8
23	Ｂ－８	撹乱中	〃	安山岩	扁平なつくりである。	2.7
24	Ｃ－17	黒褐色軟質土層	異形石器	黒曜石Ａ	方形に近く、４辺を抉入状に加工。	0.8
25	Ｋ－16	黒褐色軟質土層	〃	〃　Ｂ	一部欠損、４辺を抉入状に加工。	0.9
26	Ｂ－17	黒褐色軟質土層	〃	〃　Ｂ	長方形に近く、長辺の２辺の抉入状に加工	1.3

表裏より細かく施されている。長さは不明であるが，幅は基部末端で最大を測ると思われる。21は黒曜石Ｂ製で，片面の一部に自然面を残すもので基部と考えられる。

石錐
(Fig. 131)
〔ＰＬ.74・75〕

22は黒曜石Ｂ製で，基部は大まかに加工され一部に礫面をもつ，先端部は細かく丁寧な二次加工を施し長い作りとなっており，断面は三角形状を呈する。23は安山岩製の薄い剝片を使用している。先端部から基部に至るまで，表裏より二次加工を施す。風化が進んでおり，先端は折れている。

異形石器
(Fig. 131)
〔ＰＬ.74・75〕

３点出土している。24は黒曜石Ａ製で，方形に近く，四辺に抉りを入れＸ字状に仕上げている。加工は表裏より細かく施されている。25は24と近似するが，突出部の一つが鋭利に加工されている。有茎石鏃もしくは石錐としての可能性も考えられるが，本遺跡では異形石器として扱った。裏面に主要剝離面を残す。黒曜石Ｂ製である。26は24・25と形状が異なるタイプのものである。長方形に近く，長側縁である２辺に，ゆるやかな抉りを入れており，チョウネクタイ状に仕上げている。黒曜石Ｂ製である。加工は極めて丁寧で細かく施している。同類と思われるものが，[註1]牛込Ｂ遺跡，[註2]上水計遺跡からも出土している。

一般に異形石器と呼ばれるこの種の石器は，出土例も少なく，[※]時期，用途ともに判然としていない。形状にもいくつかのタイプがみられるようである。まだこの石器については不明な点が多く，今後類例資料の増

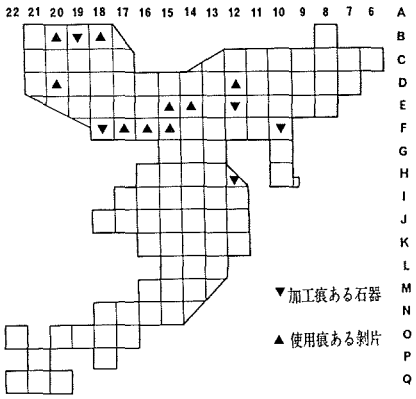


Fig. 132　各地区出土加工痕ある石器・使用痕ある剝片

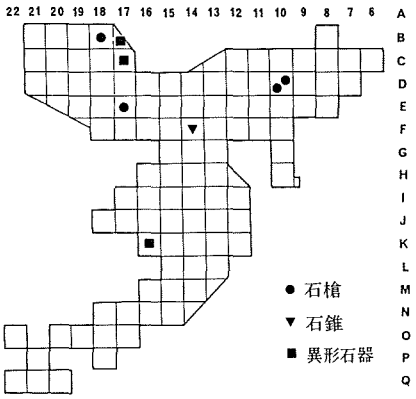


Fig. 133　各地区出土石槍・石錐・異形石器

加の待たれる次第である。……※（なお，熊本県，山口遺跡[註3]の資料報告によると，同県，舞ノ原遺跡[註4]。本県，明賀谷遺跡[註5]をとりあげ，伴出石器や時代性の関連より，縄文時代早期頃の所産であると考えたいとしており本遺跡とも一致するところである。

註1　長崎県教育委員会　1982「牛込A・B遺跡」九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　Ⅱ

註2　長崎県教育委員会　1983「上水計遺跡」九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　Ⅲ

註3　小畑弘己　1982「矢部町名蓮川の縄文時代遺物」赤れんが No. 1
③山口遺跡の資料紹介文において，次の様に記載されている。「まだこの石器の類例は少なく，その時期，用途については不明な点が多い。しかし，本遺跡と同じく舞ノ原遺跡においてトロトロ石器と共に発見されている点，明賀谷遺跡の時代性も考慮して縄文時代早期頃の所産であると考えたい。」

註4　豊崎晃一　1978「熊本県舞ノ原遺跡発見の異形石鏃」九州考古学　No. 53

註5　力武一成・正林護　1979「松浦市明賀谷遺跡の異形石器」　長崎県の考古学〔1〕

参考文献　福岡県教育委員会　1977「福岡県山門郡瀬高町所在大道端遺跡の調査」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ーXIVー
岡本東三　1983「トロトロ石器考」麻生優編　人間・遺跡・遺物　ーわが考古学論集1ー　所収　株式会社文献出版

磨石
(Fig. 134)
〔PL.82〕

1は比較的小形の磨石である。上面観はほぼ卵形を呈している。長さ7cm，幅5.6cm，厚さ4.7cm，重量190gをはかる。やや軟質の砂岩製のためか，摩耗痕は若干荒くなっている。

敲石
(Fig. 134)
〔PL.82・83〕

2・3・4・5・6は敲石として扱ったが，5点とも表裏面には摩耗痕を有しており磨石と併用して使われたものと考えられる。石材はすべて砂岩であるが，特に3・4・5・6は硬質のものである。また6がC—19区のドーナツ状土壙より出土している他は，第Ⅲ層出土のものである。2は楕円形状のもので，手に握るのにほどよい大きさである。

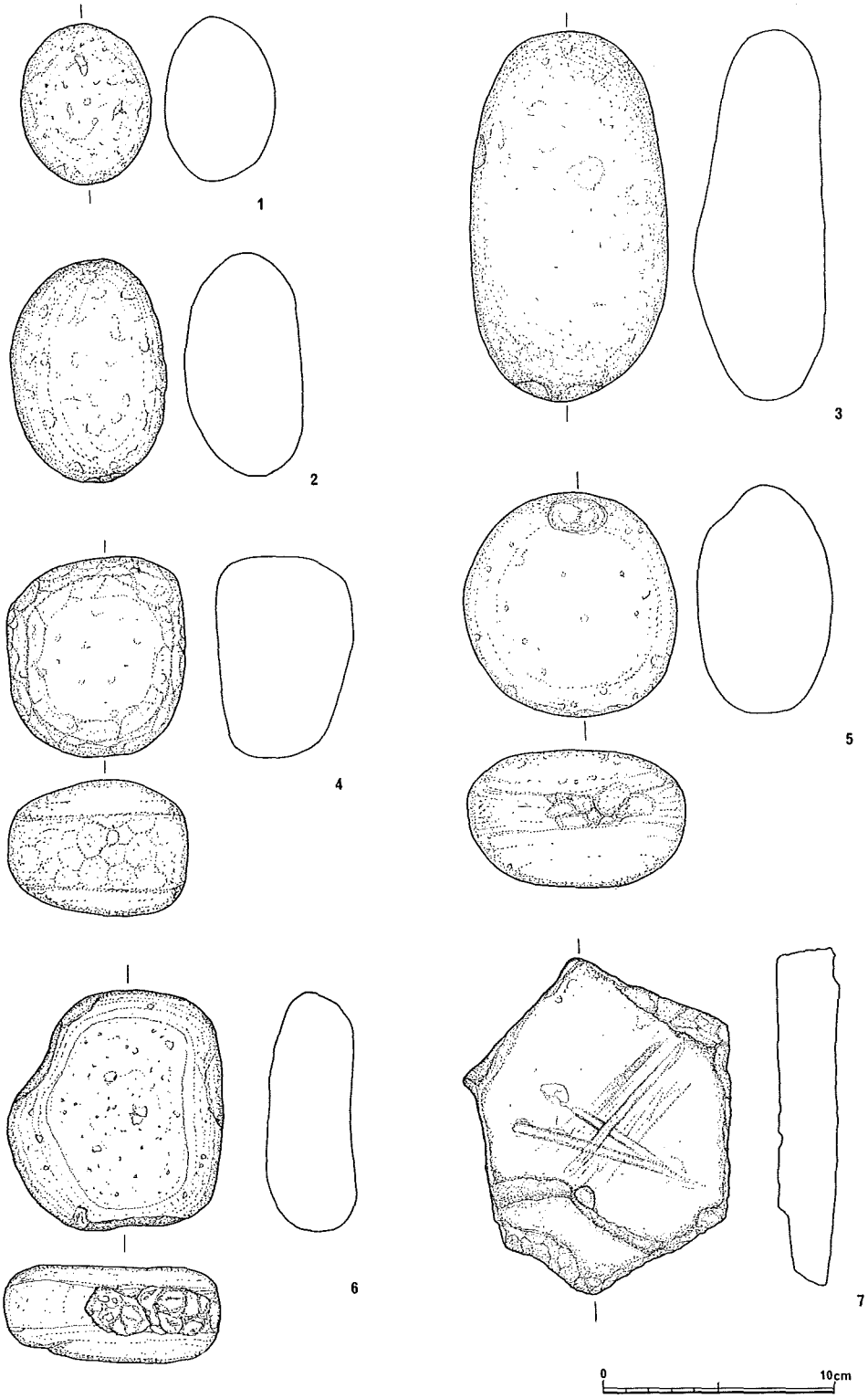


Fig. 134　縄文時代の石器―磨石・敲石・砥石（1/3）

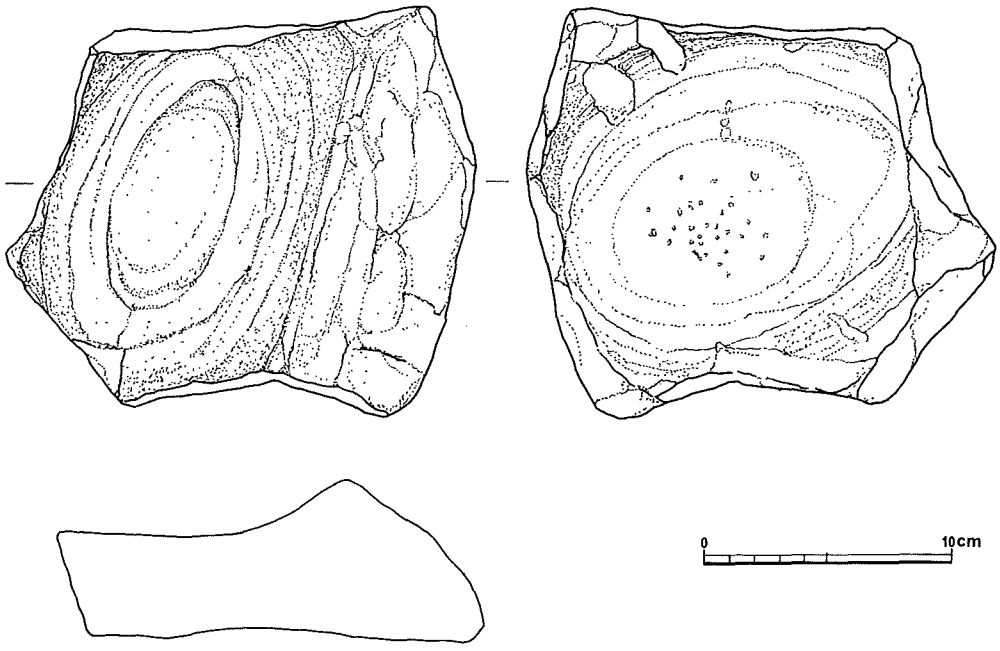


Fig. 135 縄文時代の石器—石皿 (1/3)

Tab. 16 磨石・敲石・砥石・石皿一覧表 ( )は現寸

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	石材	重さ (g)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備考
134-1	B－20	黒褐色軟質土層	磨石	砂岩	190	7.0	5.6	4.8	
2	J－12	黒褐色軟質土層	敲石	〃	310	9.6	6.7	5.0	両端部に敲打痕。
3	B－19	黒褐色軟質土層	〃	硬質砂岩	890	16.0	8.5	5.6	両端部に敲打痕。
4	C－21	黒褐色軟質土層	〃	〃	530	8.7	7.6	5.9	周縁全体に敲打痕。
5	M－14	黒褐色軟質土層	〃	〃	710	9.7	9.4	5.8	周縁一部に敲打痕。
6	C－19	ドーナツ状土壙	〃	〃	630	10.3	9.3	4.0	周縁一部に敲打痕。
7	F－11	褐色粘質土層	砥石	砂岩	475	14.5	11.5	2.6	U字形の浅い溝。
135-8	C－18	黒褐色軟質土層	石皿	〃	2,275	(16.3)	(18.3)	(6.2)	表・裏両面使用。

3は長楕円形状で長さ16cm，重量890gをはかる比較的大形のものである。2・3ともに長軸の両端部分に敲打痕が認められる。4は隅丸の方形状を呈するもので，周縁部全体に敲打痕がある。5はほぼ円形状で，周縁の一部に敲打痕がある。6は長さ10.3cm，幅9.3cmをはかり上面観は不整形である。厚さは2.6cmと比較的薄いものである。周縁の一部に敲打痕が顕著に認められる。

砥石
(Fig. 134)
〔ＰＬ.83〕

Ｆ―11区，第Ⅱ層より出土した。六角形状をした扁平な砂岩製である。長さ14.5cm，幅11.5cm，厚さ2.6cm，重量475ｇをはかる。表面は全体に摩耗痕が認められ中央部には，数条の浅いＵ字形の溝がある。裏面は風化による薄い板状の欠損がうかがえる。

石皿
(Fig. 135)
〔ＰＬ.83〕

Ｃ―18区，第Ⅲ層より出土した。やや赤色をおびた砂岩製である。欠損品のため，本来の大きさ，形状は不明である。表・裏の両面に摩耗痕が認められ，両面使用されたものと考えられる。表面は摩耗状態も深くかなりの使用の痕跡をうかがわせるものであると考えられる。裏面は，摩耗状態も極めて浅く，表面より明らかに使用度は少ないことがわかる。また，裏面には，敲石などにおけると思われる打痕が認められ台石として使用された可能性もある。この石皿の表面・裏面における使用の時間的な関連は，同時性的なものか，いずれかの面が先に使用されたものかは判然とせず不明である。

その他の石器
(磨製石斧)
(Fig. 136)

Ｉ―14区の撹乱中より磨製石斧の一部分と思われるものが出土している。長さ３cm，幅・厚さ１cmほどで，欠損面の他は，丁寧な研磨が施されている。おそらく磨製石斧の側縁部の一部分にあたるものと思われる。玄武岩製である。

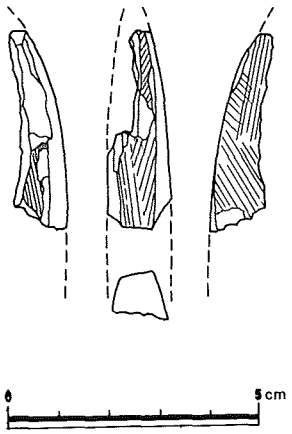


Fig. 136　縄文時代の石器―石斧（2/3）

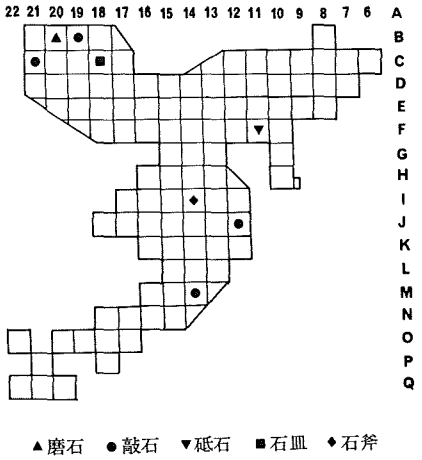


Fig. 137　各地区出土磨石・敲石・砥石・石皿・石斧

剝片
(Fig. 134・135)
〔ＰＬ.76〜79〕

剝片は打面部が平坦なもの，自然面なもの，調整痕があるものの３つに分類し最後に，切断もしくは折れているものをつけ加えて記載した。

１〜８は打面部が平坦なものである。うち，２・３・４・７は剝離角が鋭角を成しているものである。２はやや大形の幅広の剝片で，一部に自然面を有する。黒曜石Ｂ製でパテナが著しい。３は黒曜石Ａ製で表面には横からの剝離が入っている。４は黒曜石Ｂ製でパテナが認められる。７は表面1/3ほど自然面を有し，幾度かの小さな剝離痕が認められる。黒曜石Ａ製である。５・８は剝離角が直角に近いものである。５は下半を欠損している。黒曜石Ａ製。８は扁平なもので，表面の一部に自然面を有する。黒曜石Ａ製である。１は黒曜石Ａ製のもので，表面の過半に自然面を有する。６は表面に横からの剝離痕があり，また側縁にかけては自然面を有する。黒曜石Ａ製でパテナが著しく認められる。

打面部が自然面のものは，９・10である。２点とも黒曜石Ａ製である。９は打面部のみが自然面で鋭角な剝離角を有する。表面にはいくつかの剝離痕がうかがえる。10は打面部と側縁の一部に自然面を有する。剝離角は，先の９と同様に鋭角になっている。断面は扁平な三角形状を呈す。

調整された打面部を有するものは，11・12・13・14である。11は小形の横長剝片で打面と側縁の一部に調整痕を有する。黒曜石Ｂ製で著しいパテナをみる。12は若干の調整痕を有するものである。中央に稜をもち，断面は扁平な三角形に近い形状である。黒曜石Ｂ製でパテナが顕著である。13はやや幅広の剝片で，わずかな調整痕が認められる。中央に鋭い稜を有し断面も三角形状を呈する。黒曜石Ｂ製でパテナが認められる。14は打面部と側縁の一部に調整痕を有する。黒曜石Ａ製でパテナがみられる。

15・16は切断されたもの，もしくは折れていると考えられるものである。16は上下ともに切断されたものではないかと考えられる。表面のやや左に鈍い稜をもち，断面は扁平な三角形状を呈する。黒曜石Ｃ製でパテナが認められる。15は上半部が欠損により判然としないが，切断面がやや新しいことなどにより，折れにより欠損したものと考えられる。黒曜石Ｂ製でパテナが著しい。

なお，本遺跡は剝片及び次の石核を打形の形状により，３つに分類して記載したが，これは前回に刊行した平遺跡にならうものとする。

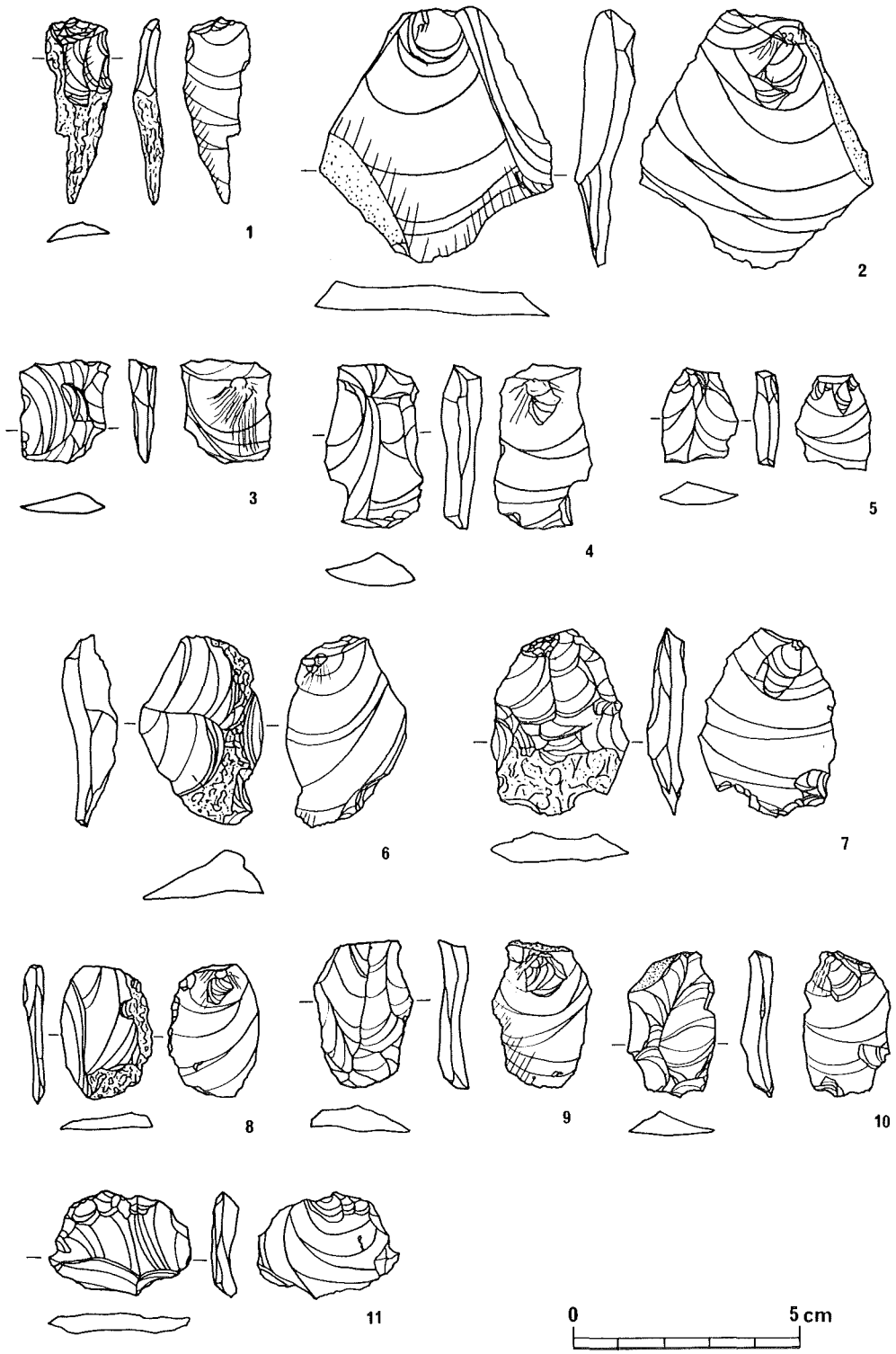


Fig. 138 縄文時代の石器—剥片① (2/3)

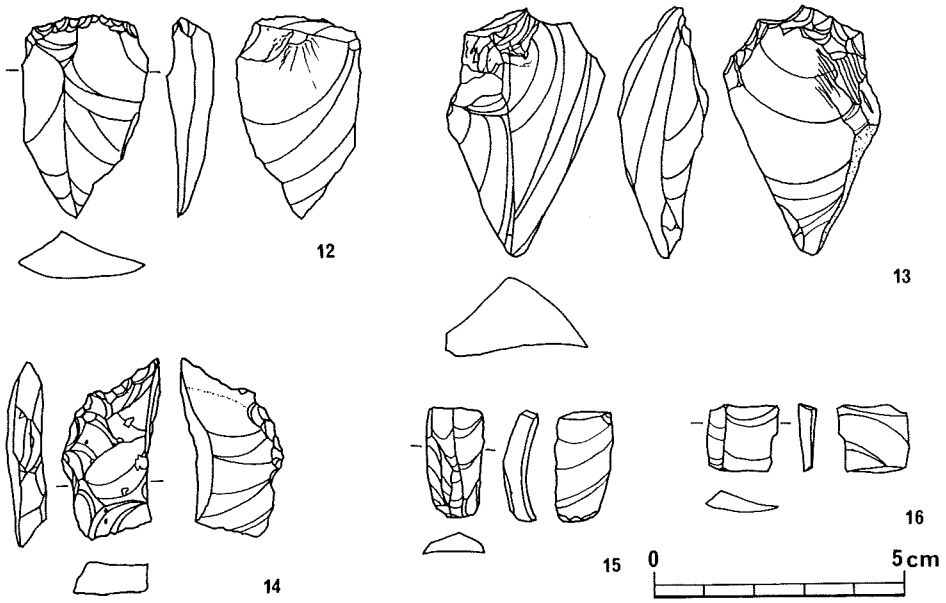


Fig. 139　縄文時代の石器—剥片②（2/3）

石核
(Fig. 136～138)
〔ＰＬ.78～81〕

剥片と同様に，打面部が平坦なもの，自然面のもの，調整が行われているものと３分類して記載した。

平坦打面を有するものは，１・２・３・４・５・６・７である。１は一部に自然面を有しており，原石もさほど大きくなかったものと考えられる。打面を転移しながら多方向よりの剥片剥離を行っている。また剥片そのものも大きいものはなく，一定の剥片を取りだしている状況も認められない。黒曜石Ａ製。２は１と同じく打面を転移しながら多方向より不定形の小さい剥片剥離を行っている。黒曜石Ａ製で自然面は有さない。３は背部に自然面を有するもので，黒曜石Ａ製である。上面の切断されたと考えられる面を打点にして，上からの剥片剥離を多く行っている。剥片は不定形である。４はやや扁平なものでクサビ状を呈している。上下から，やや幅広の剥片剥離を行っている。黒曜石Ａ製。５は黒曜石Ａ製，背面に自然面を有する。上下からやや幅広の剥片剥離を行っている。なお，下からのものは自然面を打面としているが，ここでは平坦打面として扱った。６は黒曜石Ｃ製で自然面を有さないものである。上下よりやや縦長の剥片剥離を行っている。若干のパテナが認められる。７は黒曜石Ｂ製でパテナが顕著である。極一部に自然面を有する。多方向より打面を転移しながらやや大形の剥片剥離をなっている。

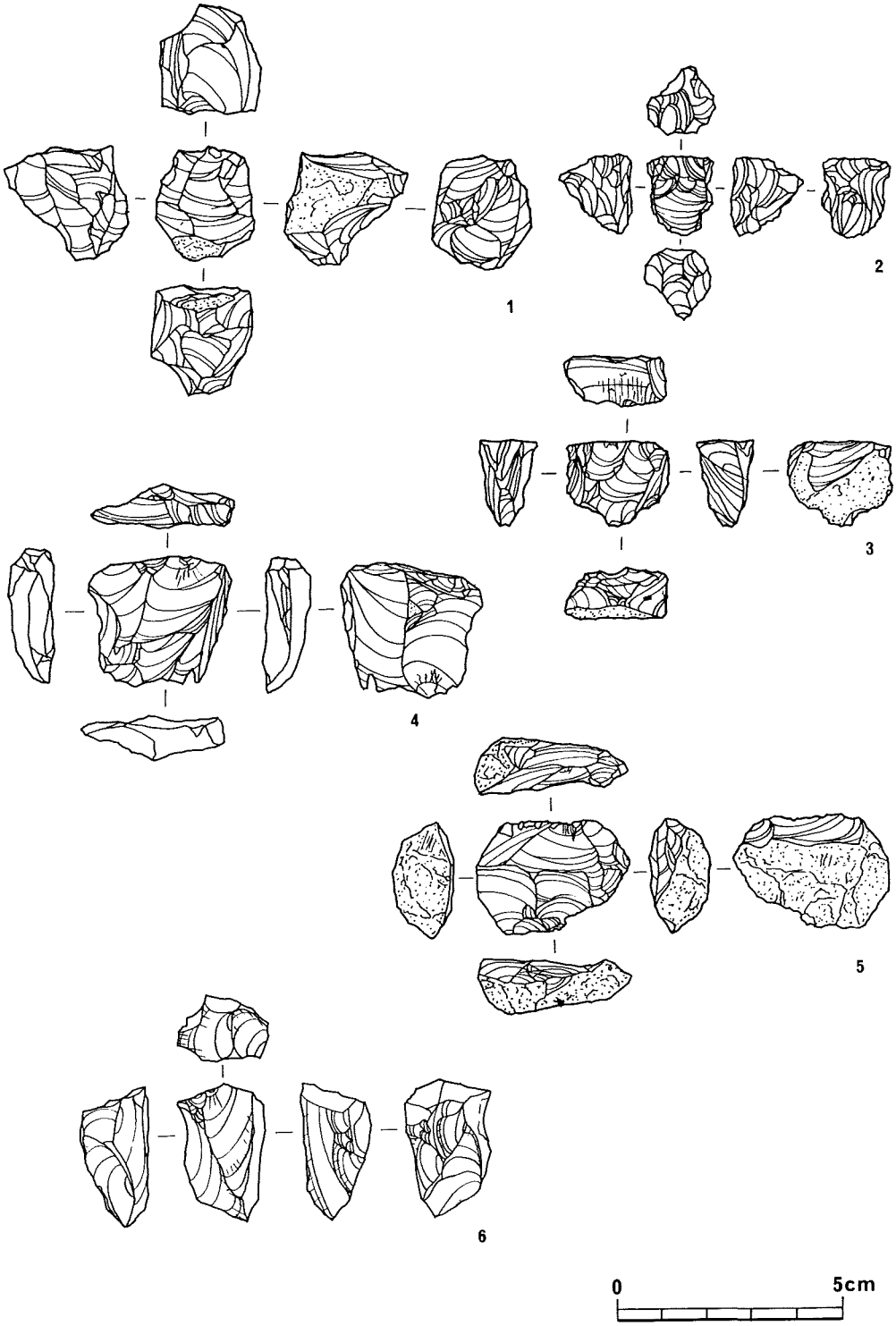


Fig. 140 縄文時代の石器—石核① (2/3)

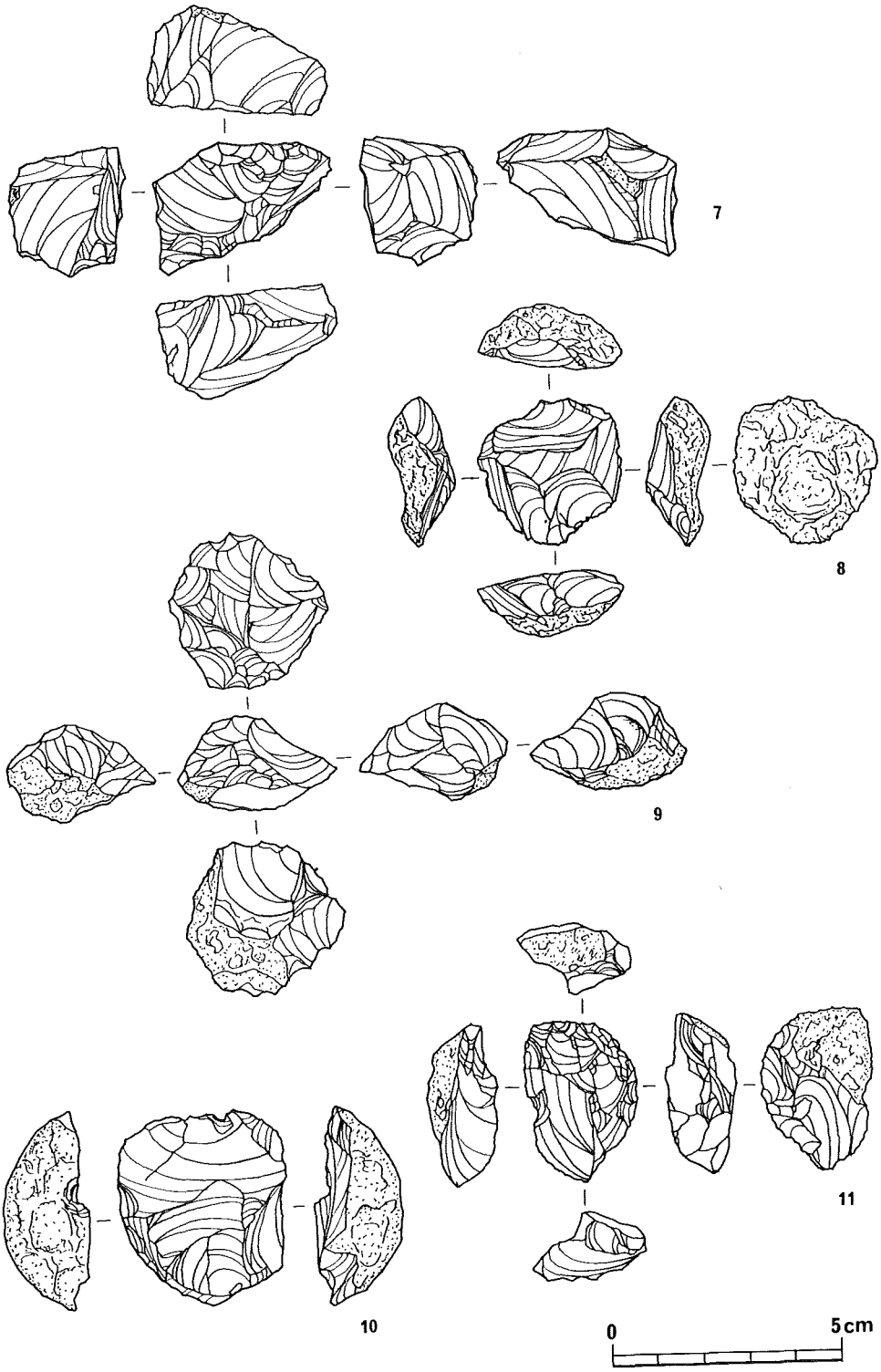


Fig. 141 縄文時代の石器—石核② (2/3)

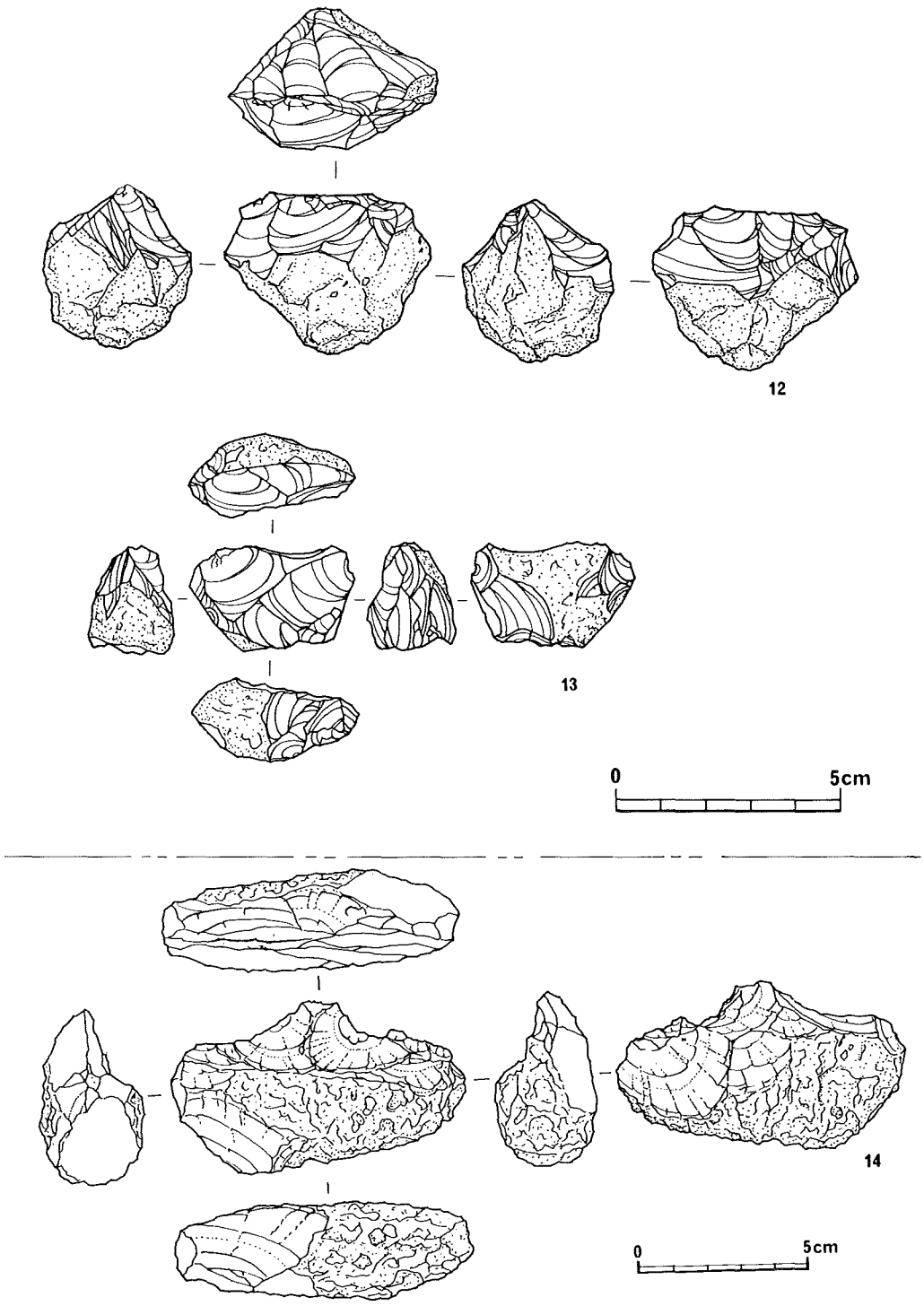


Fig. 142 縄文時代の石器—石核③ (2/3), 〔14は(1/3)〕

Tab. 17　剥片・石核一覧表

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	石材	備考	重量(g)
138-1	G-15	黒褐色軟質土層	剥片	黒曜石A	打面部平担。表面下半に自然面を有す。	1.85
2	E-18	黒褐色軟質土層	〃	〃 B	打面部平担。パテナ顕著。	20.7
3	N-14	褐色粘質土層	〃	〃 A	打面部平担。	2.4
4	K-15	褐色粘質土層	〃	〃 B	打面部平担。パテナ有り。	6.2
5	E-16	褐色粘質土層	〃	〃 A	打面部平担。下端欠損。	1.7
6	K-13	黒褐色軟質土層	〃	〃 A	打面部平担。表面一部に自然面を有す。	9.4
7	L-14	褐色粘質土層	〃	〃 A	打面部平担。表面下半に自然面を有す。	7.8
8	G-15	褐色粘質土層	〃	〃 A	打面部平担。表面一部に自然面を有す。	2.45
9	E-16	褐色粘質土層	〃	〃 A	打面部自然面。	3.65
10	E-16	撹乱中	〃	〃 A	打面部自然面。側縁の一部に自然面を有す。	3.1
11	E-14	褐色粘質土層	〃	〃 B	横長剥片。打面部と側縁の一部に調整痕有り。	3.2
139-12	J-16	褐色粘質土層	〃	〃 B	打面部若干の調整痕有り。パテナ顕著。	5.9
13	D-17	黒褐色軟質土層	〃	〃 B	打面部若干の調整痕有り。パテナ有り。	14.7
14	F-13	撹乱中	〃	〃 A	打面部及び側縁の一部に調整痕有り。パテナ有り。	4.8
15	G-14	褐色粘質土層	〃	〃 C	切断剥片か。パテナ有り。	0.65
16	E-8	褐色粘質土層	〃	〃 B	打面部欠損。パテナ有り。	1.25
140-1	B-21	黒褐色軟質土層	石核	黒曜石A	平担打面。背部に自然面を一部有する。	12.4
2	D-8	撹乱中	〃	〃 A	小形。平担打面。自然面無し。	3.15
3	D-19	黒褐色軟質土層	〃	〃 A	平担打面。背部に自然面を有する。	4.95
4	D-13	褐色粘質土層	〃	〃 A	平担打面。自然面無し。	6.8
5	B-17	撹乱中	〃	〃 A	平担打面。背部全面に自然面を有する。	9.8
6	D-18	黒褐色軟質土層	〃	〃 C	平担打面。自然面なし。	6.9
141-7	G-14	撹乱中	〃	〃 B	平担打面。ごく一部に自然面有り。パテナ有り。	20.4
8	E-15	ドーナツ状土壙	〃	〃 A	自然面打面。背部全面に自然面を有する。	10.3
9	K-12	黒褐色軟質土層	〃	〃 B	自然面打面。背部の一部に自然面を有する。	16.8
10	E-16	ドーナツ状土壙	〃	〃 B	自然面打面。背部全面自然面。パテナ有り。	24.35
11	D-9	撹乱中	〃	〃 A	自然面打面。上面と背部の一部に自然面有り。	9.3
142-12	B-17	黒褐色軟質土層	〃	〃 A	調整打面。上からのみ剥片剥離。自然面あり。	39.2
13	D-21	褐色粘質土層	〃	〃 A	若干の調整打面。背部に自然面を有する。	13.55
14	N-15	褐色粘質土層	〃	安山岩	幅広もしくは横長の大形の剥片取りを行っている。	103.7

打面部が自然面であるものは，8・9・10・11の4点である。8は黒曜石A製で，背面はすべて自然面である。円礫より分割して使用されたものであることがわかる。剥片も小形で，横長のものかやや幅広のものを剥離している。9は黒曜石B製でパテナが顕著である。背部に自然面を多く残す。多方向よりやや幅広の剥片剥離を行っている。10は黒曜石

B製でパテナがやや顕著である。背部はすべて自然面である。幅広もしくは横長の剥片剥離を行っている。先の8・9の前の段階のものと考えられる。11は黒曜石A製で部分的にパテナが著しく認められる。上部から背部の上半にかけて自然面を有する。表裏面において，上下からの剥片剥離が行われている。自然面を打面とする以上4点のうち，特に8・9・10は円礫より分割され，背部に自然面を有すること，多方向より剥片剥離を行い，円盤状の形状となることなど共通しており，同一タイプもしくは，類似するものと考えられる。

調整打面を有するものは，12・13である。12は底面を中心に自然面が過半を占めるものである。剥離は上からのみで，表裏に若干の調整をしながら，互いにややまとまった剥片取りを行っている。黒曜石A製。13は黒曜石A製でパテナが認められる。背部に自然面を有する。若干の調整の跡があり，やや幅広の剥片剥離を行っている。

14は唯一安山岩製のもので，自然面がほぼ半分を占める。上からの剥片剥離を多く行っている。取りだされた剥片はかなり大形の幅広もしくは横長の剥片で，背部に自然面をもつものであろうと考えられる。

以上，石核は自然面を有しているものが圧倒的に多い。また，剥片剥離の技術を剥離痕よりうかがうならば，4・6はやや縦長のものを取りだし，8・9・10はやや幅広のものを取りだしているが，全体的にみると，粗雑な不定形のものが多いと言えよう。

玉
(Fig. 143)
〔PL.83〕

B—18区，第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）より出土した。上面観は，直径1.6cmほどのほぼ円形である。厚さ1.1cm，重量4.1gをはかる。材質は玉髄[註1]である。穿孔は両側より行っていると考えられる。ほぼ中央にあり径約0.4cmである。外側でやや広くなり，内側においては若干ズレのような微妙な段を有する。また，表面に擦痕が部分的に認められる。なお，器形こそ異なるものの，平遺跡からも玉髄の出土がある[註2]。

註1　長崎大学教養学部教授鎌田泰彦氏の鑑定による。「玉髄」とは，石英の微小結晶が網目状に集まり，超顕微鏡的小孔をもつ珪酸の，緻密集合体をいう。SiO_2。（地学事典による）

註2　平遺跡のものは印籠形状のものである。

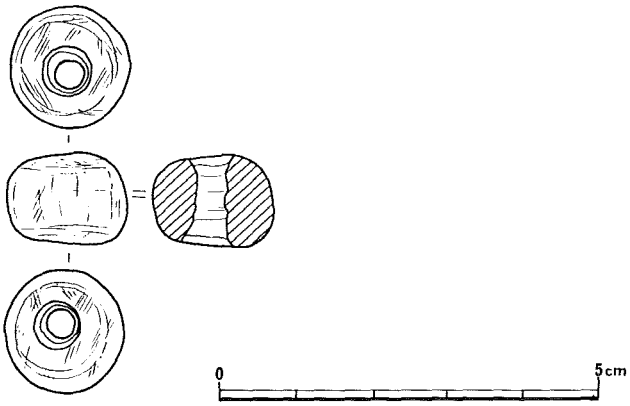


Fig. 143　玉（1/1）

⑤　遺物の分布について

西輪久道における出土遺物や伴出遺構についてはこれまでに述べてきたような事であるが，ここではそれらを更に個々の遺物の集中する範囲としてとらえ，層位ごとにまたは地域ごとに分類して，出土土器や石器の組成などについてみていくことにする。

次に述べる遺物集中範囲は，第Ⅱ層（褐色粘質土層）中のものを８箇所（１～８），第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中のものを４箇所（９～12）に分けることができた。

なお，落ち込み，ドーナツ状土壙より出土の遺物は，この集中範囲の石器組成の中には含めず，別途に石器の器種・数量を記した。

遺物集中範囲１　北東端域に位置する遺物集中範囲である。土器159点，石器152点出土する。

土器は，貝殻条痕文土器（轟式系土器）がわずかに認められるが，ほとんど押型文土器である。特に，Ｃ―７区などを中心に山形押型文土器の出土が卓越している。

石器の組成は，石鏃８点，スクレイパー４点，石匙２点，フレイク78点，チップ60点である。ここでは石鏃の他に，スクレイパーと石匙しか認められていない。

本遺物集中範囲において，その北側であるＢ―８，Ｃ―７区を中心にして土器・石器の出土が多いようである。また，先の項で述べた，集石や炉址などの遺構は検出されていないが，Ｃ―８・９，Ｄ―８・９の４

区にわたる 性格不明の落ちこみが１基認められた。（この落ち込みの周辺には極めて遺物が少ない状況である。）

分布範囲は，南北に約23ｍ×東西に約18ｍ程である。

遺物集中範囲２　先の遺物集中範囲１のすぐ西隣りの遺物出土数が卓越した集中範囲でＣ・Ｄ・Ｅ－９区の中ほどより東西に分離し区別した。土器346点，石器457点出土。

土器は，押型文土器，塞ノ神式土器，貝殻条痕文土器（轟式系土器）がみられる。Ｅ－11区においては貝殻条痕文土器が多くみられるようである。全体的には押型文土器が多い様である。

石器の組成は，石鏃12点，スクレイパー７点，加工痕ある石器２点，使用痕ある剥片２点，石匙２点，石槍２点，石核２点，砥石１点，フレイク233点，チップ196点である。この組成の特徴は，スクレイパー・加工痕ある石器・使用痕ある剥片・石匙など，掻器や削器的な石器が多い割り合いを占めていることである。また，石槍は２点ともＤ－10区より出土している。

ドーナツ状土壙が数基認められるが，本遺物集中範囲の西側部分Ｄ－12・13，Ｅ－13など６区に及び，第Ⅱ層（褐色粘質土層）上面より溝状遺構が検出されている。

分布範囲は，南北に約30ｍ×東西に約25ｍ程である。

遺物集中範囲３　本遺跡調査域のほぼ中央に位置する遺物集中範囲である。土器63点，石器121点の出土で数量的にはやや少ない。

土器は押型文土器が出土数のほとんどを占める。他に塞ノ神式土器がＩ－13区に若干認められる。特に押型文土器は，Ｊ－13区を中心として顕著にみられ，しかも楕円押型文土器が目だつ様である。

石器の組成は，石鏃９点，スクレイパー２点，石匙１点，フレイク31点，チップ78点である。遺物集中範囲１と同様な石器組成である。

本遺物集中範囲内において検出された遺構は，Ｉ－15区にピットをともなった集石遺構（２号）とＩ－13・14，Ｊ－13・14区に石組炉（３号炉址）が検出されている。遺構からの出土遺物はほとんどなく石組炉近辺より楕円押型文の口縁片が１点出土しているのみである。

特に，土器や石器の遺物は，著しく集中する所は見られず，全体に疎に出土している。

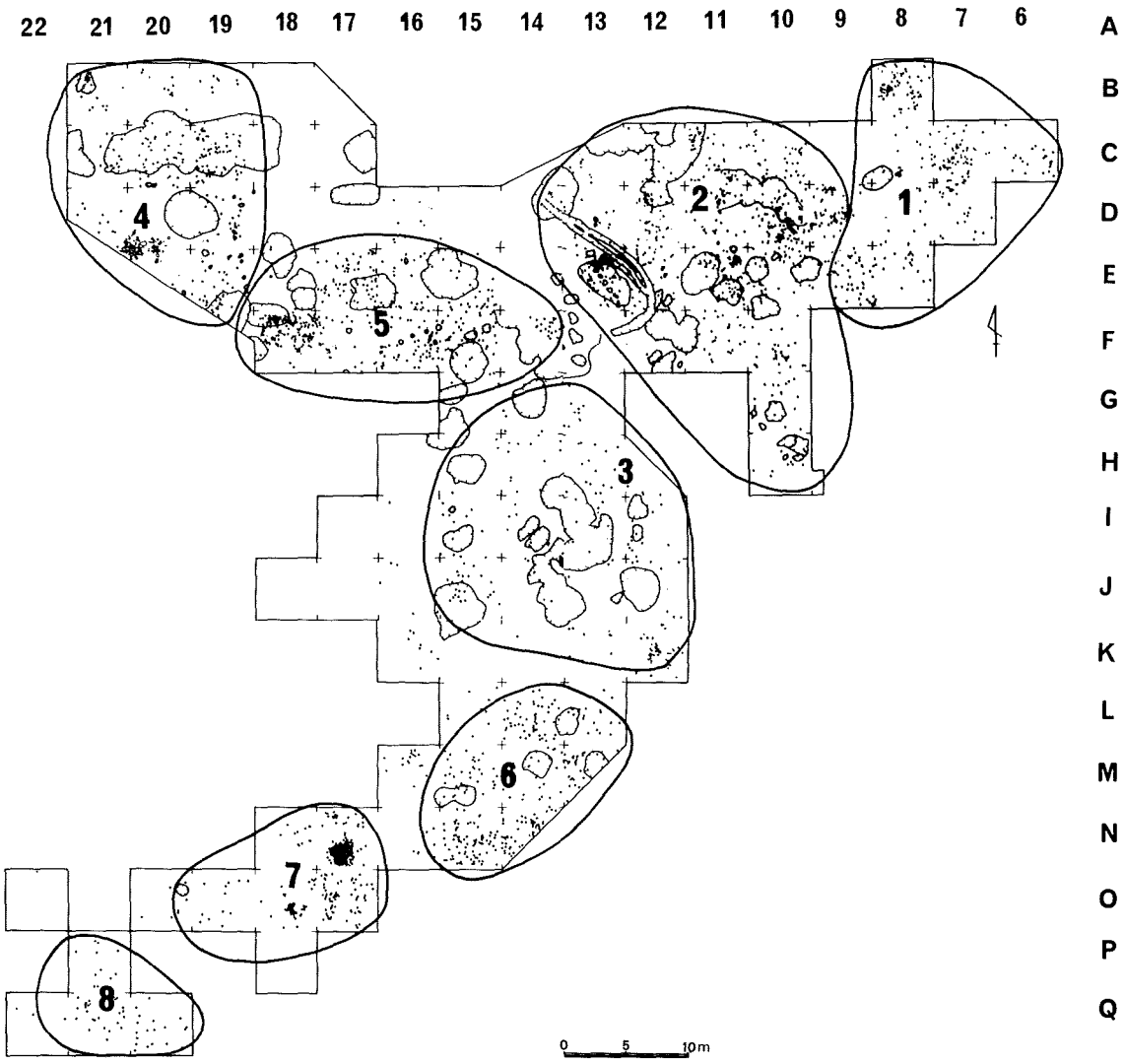


Fig. 144 第Ⅱ層における遺物集中範囲

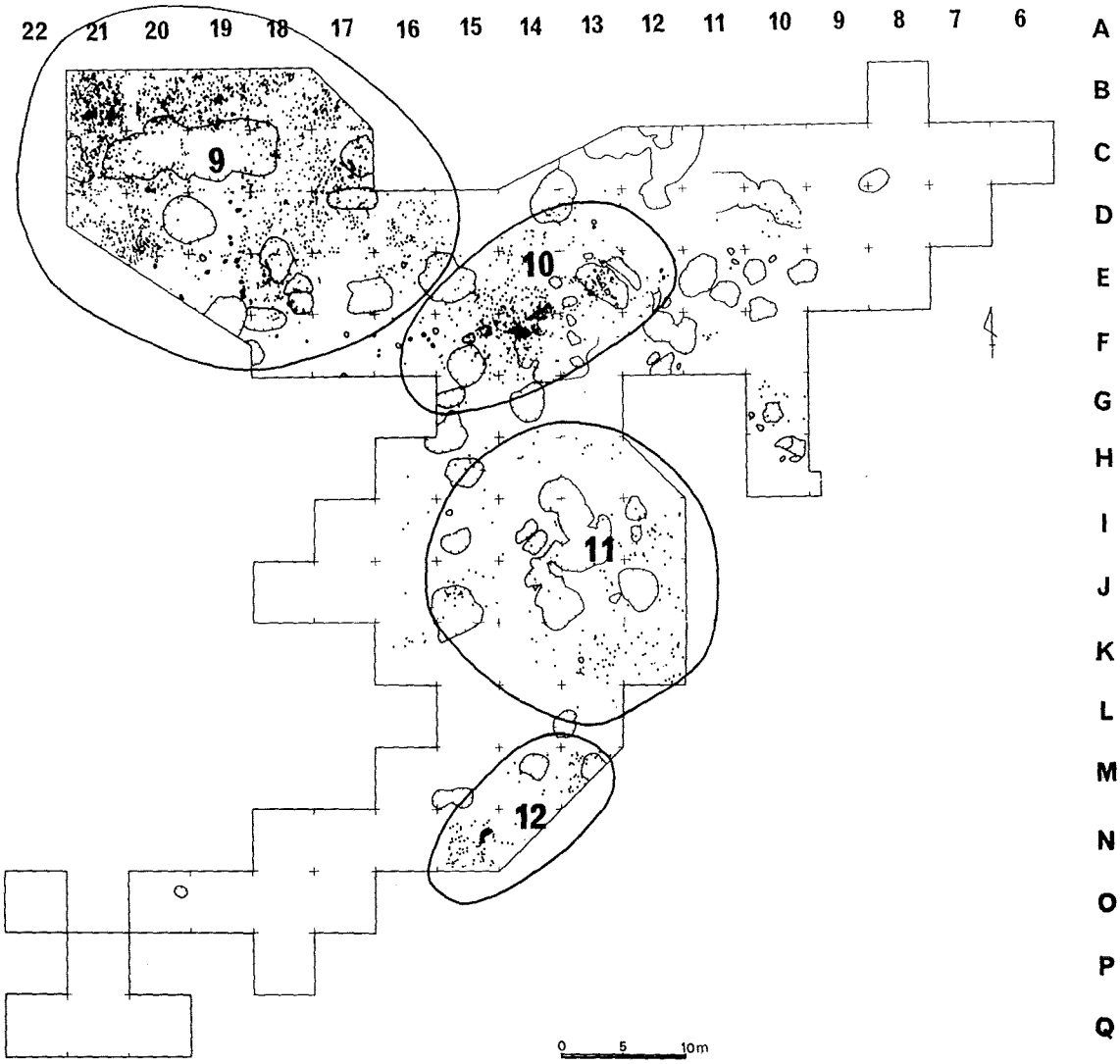


Fig. 145 第Ⅲ層における遺物集中範囲

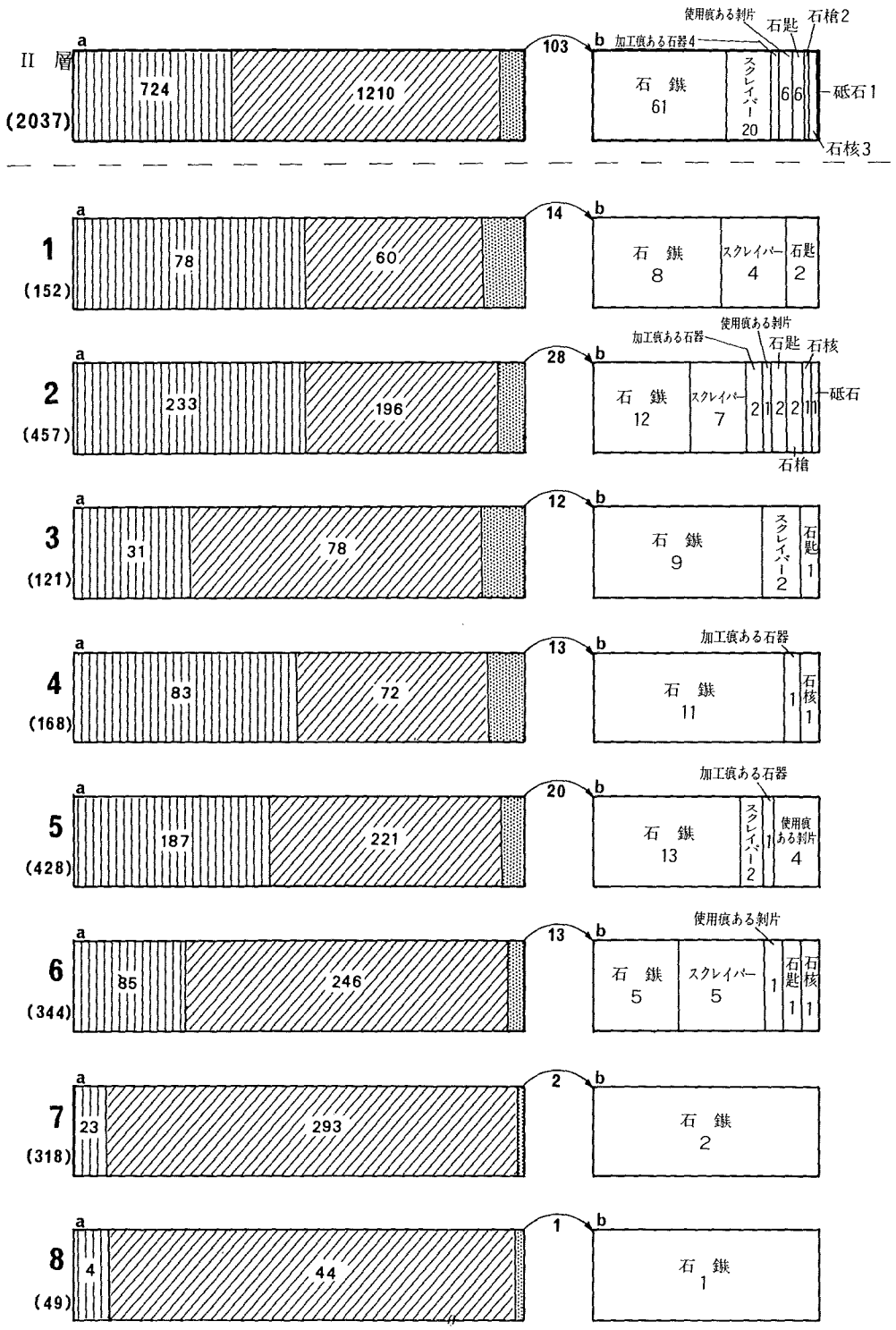


Fig. 146　第Ⅱ層遺物集中範囲における石器組成比

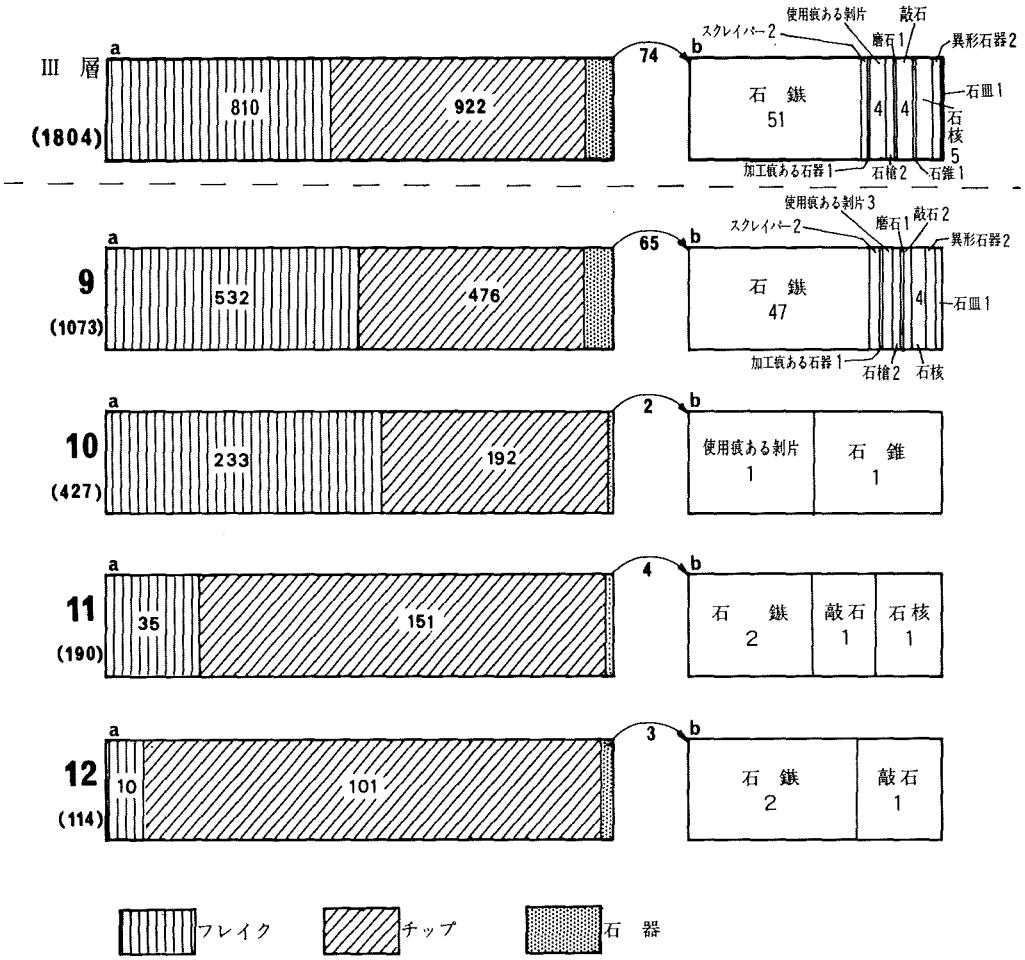


Fig. 147 第III層遺物集中範囲における石器組成比

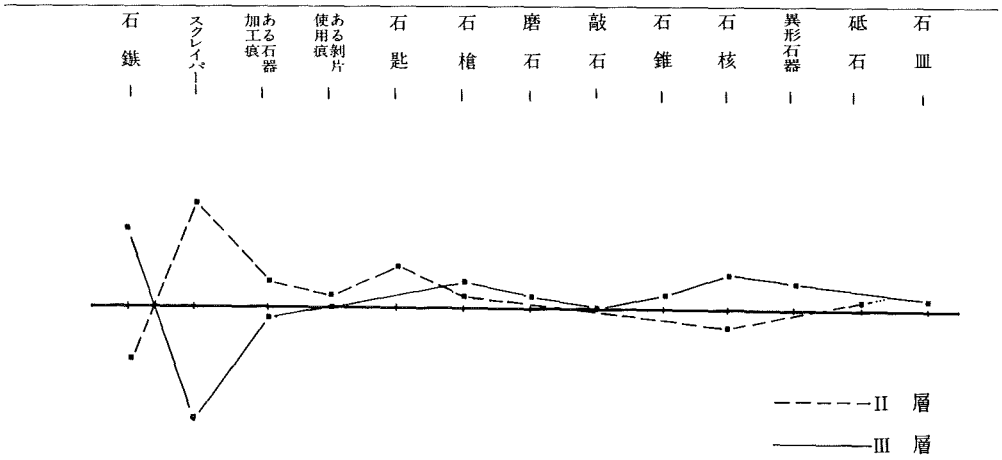


Fig. 148 第II層・第III層出土の各石器対比グラフ

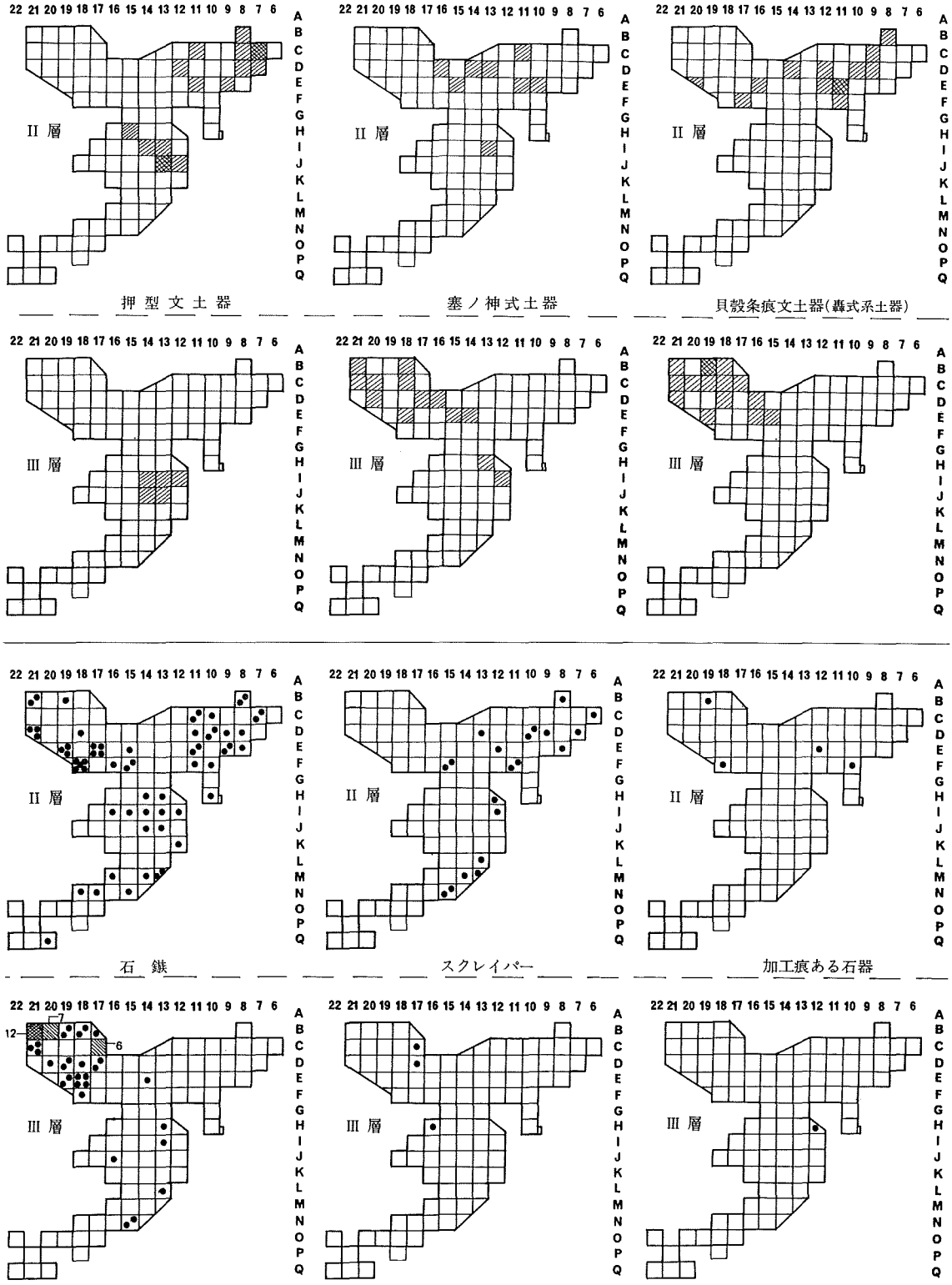


Fig. 149 各遺物出土区①

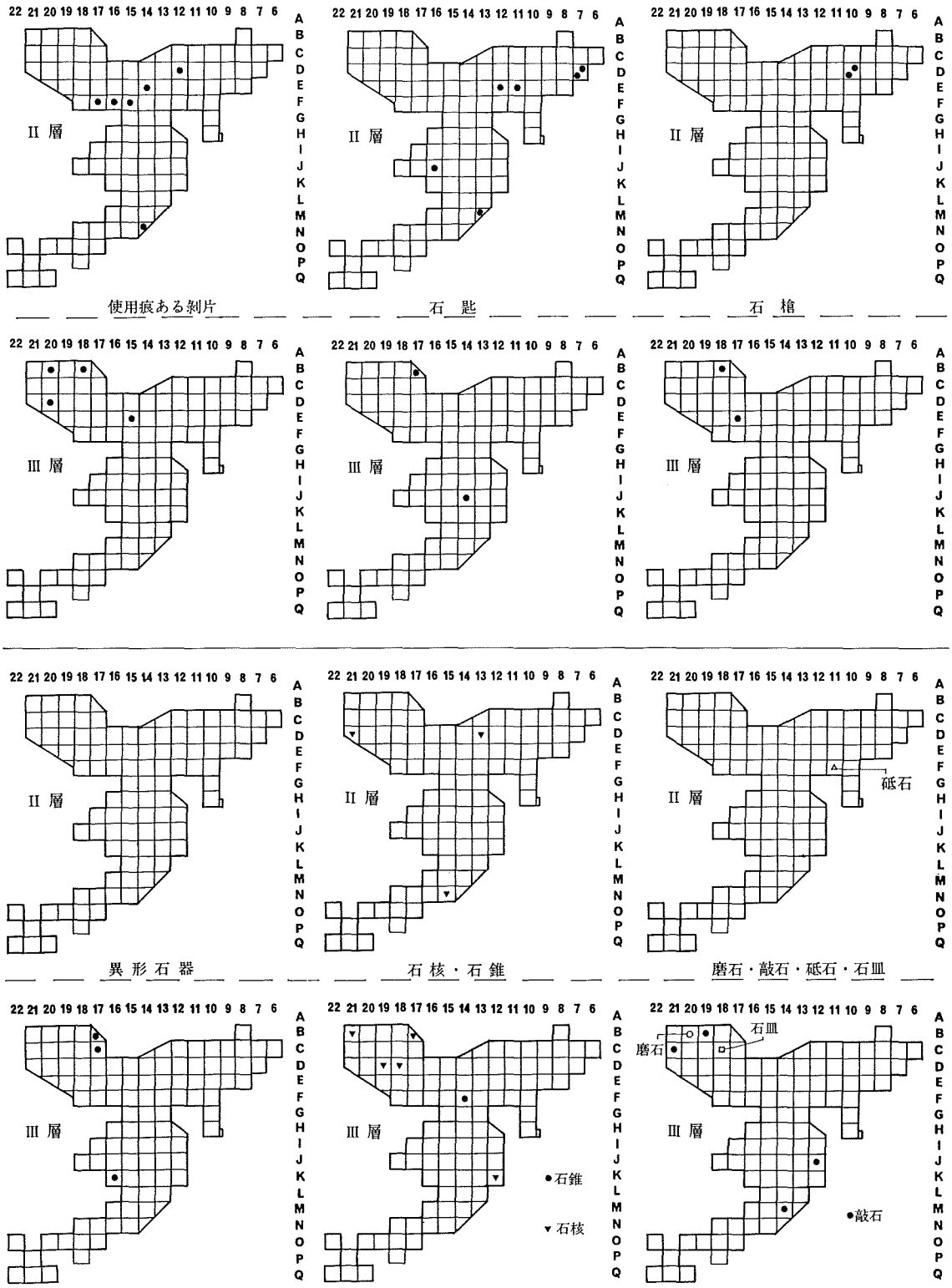


Fig. 150 各遺物出土区②

分布範囲は，南北に約23m×東西に約22m程で不整円形状を呈する。

遺物集中範囲4　北西端域にある遺物集中範囲である。土器95点，石器168点出土。

土器は，95点の出土を見るもののそのほとんどが著しく風化した細片で時期を識別できるものはわずかで，E—20区などに貝殻条痕文土器（轟式系土器）が数点みられるだけである。

石器の組成は，石鏃11点，加工痕ある石器1点，石核1点，フレイク83点，チップ72点である。石鏃の出土比率が高いというより，むしろ他の石器の出土が顕著に認められていない状況である。

ドーナツ状土壙が数基検出されているが，他にD—20・21，E—20・21区に集石遺構（1号）とB—21区集石遺構（3号）が検出されている双方とも出土遺物はない。

分布範囲は，東西に約15m×南北に約20m程である。

遺物集中範囲5　遺物集中範囲4の南西側に位置する。土器72点，石器428点出土。

土器は，E—16，F—17区を中心に貝殻条痕文土器（轟式系土器）が認められる他は，時期・文様を判別できるものは出土していない。

石器の組成は，石鏃13点，スクレイパー2点，加工痕ある石器1点，使用痕ある剥片4点，フレイク187点，チップ221点の出土である。掻器・削器類の出土が目立ち，すぐ東側に位置する遺物集中範囲2と似かよった石器組成を成していると言えよう。

本遺物集中範囲より検出された遺構は，性格不明の落ち込み・ドーナツ状土壙以外には認められない。

分布範囲は，東西に約28m×南北に約13m程の長楕円形状を呈する。

遺物集中範囲6　先の遺物集中範囲3の南側に位置する。土器88点，石器344点出土。土器は，ほとんど細片で，文様・時期を判別できるものはなかった。石器の組成は，石鏃5点，スクレイパー5点，使用痕ある剥片1点，石匙1点，石核1点，フレイク85点，チップ246点である。特にスクレイパーの出土が目立つ。他にチップの出土比率が多いようであるが，これはN—14・15区を中心に出土するものである。

検出された遺構はドーナツ状土壙が数基あるのみで，他にはない。分布範囲は，東西に約18m×南北に約15m程で楕円形状となる。

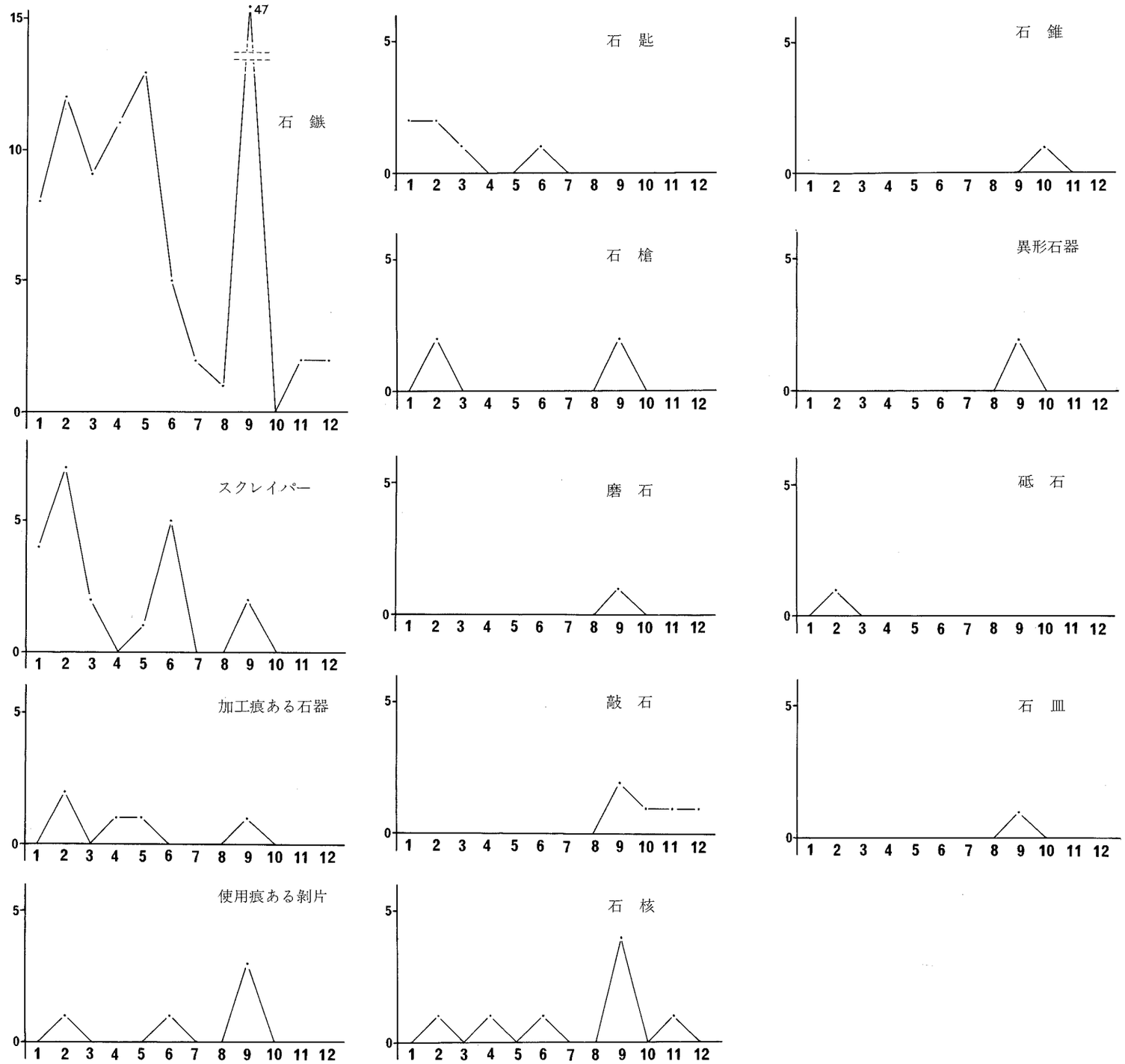


Fig. 151　各遺物集中区における各石器の出土数グラフ

遺物集中範囲7　本調査域の南側よりに位置する遺物集中範囲である。土器2点，石器318点の出土である。

土器は2点とも細片で風化が進み，文様・時期ともに不明である。

石器の組成は，石鏃2点，フレイク23点，チップ293点である。Fig. 144でもわかるように，N—17区に石器のマーク（●）の著しく集中する部分があるが，これはほとんど黒曜石製のチップから成っている。推察するに何らかの石器作成における工作址的な状況を伝えるものであろうか。

本遺物集中範囲より検出された遺構は，O—20区に性格不明のピット状の遺構がある。

分布範囲は，東西に約18m×南北に約13m程の楕円形状を呈する。

遺物集中範囲8　本調査域の第Ⅱ層（褐色粘質土層）における，最南端の遺物集中範囲である。土器3点，石器49点の出土で，非常に少ない。

土器は，その文様，及び時期は細片のため不明である。

石器の組成は，石鏃1点，フレイク4点，チップ44点である。著しく集中する所は無く疎に散在している状況である。

分布範囲は，東西に約15m×南北に約10m程である。

遺物集中範囲9　最も出土数が卓越した範囲である。土器1,118点出土，石器1,073点出土。

土器は，塞ノ神式土器と貝殻条痕文土器（轟式系土器）の2者で構成され，押型文土器の出土はない。特に貝殻条痕文土器はB—19区に集中してみられる様である。

石器の組成は，石鏃47点，スクレイパー2点，加工痕ある石器1点，使用痕ある剥片3点，石槍2点，磨石1点，敲石2点，石核4点，異形石器2点，石皿1点，フレイク532点，チップ476点である。本遺跡で出土している石器のほとんどの器種を含んでいる。特にB—21区に石鏃が多くみられる。また，第Ⅱ層（褐色粘質土層）中の遺物集中範囲と比較して全体的にスクレイパー類の出土比率が極めて少なく，新たに敲石や異形石器などの器種がみられる。

本遺物集中範囲においては，C—17，B—19・20・21，D—10区など数ケ所に著しく集中する部分がブロック状に認められる。

検出された遺構は，ドーナツ状土壙が数基のみで他にはない。

分布範囲は，図において範囲を示したものの，調査域外（西側及び北側）にまだ延びるものと考えられ，東西30ｍ×南北30ｍを越えるものと思われる。

遺物集中範囲10　遺物集中範囲９の南東側に位置する。土器112点，石器427点出土。

土器は，文様及び時期の判別できるものは無い。

石器の組成は，使用痕ある剥片１点，石鏃１点，フレイク233点，チップ192点である。特にＥ・Ｆ—14区の２区に及んで，石器の集中が著しく認められるが，これらはほとんどフレイクやチップである。第Ⅱ層（褐色粘質土層）中の遺物集中範囲７にも認められたものと同様の性格であろうか。

ドーナツ状土壙及び，性格不明の落ち込みが数基検出されている他は無い。

分布範囲は，東西に約23ｍ×南北に約18ｍ程で，長楕円形状を呈する。

遺物集中範囲11　ほぼ中央に位置する。土器31点，石器190点の出土である。

土器は，Ｉ—12・13・14，Ｊ—13・14区などに押型文土器の出土がみられる他は，文様・時期の判別できるものは出土していない。

石器の組成は，石鏃２点，敲石１点，石核１点，フレイク35点，チップ151点である。この組成は他と比べて貧弱であり，またスクレイパー類の出土が見られない。

全体的に疎な状況で，南東に若干集中するかのようである。

検出された遺構としては，炉址と考えられるピットをともなった炭化物の集中する遺構がある。他にもドーナツ状土壙なども検出されている。

分布範囲は，東西に約23ｍ×南北に約25ｍ程の円形状を呈する。

遺物集中範囲12　第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中，最も南側に位置する遺物集中範囲である。土器19点，石器114点の出土である。

土器は19点と非常に少なく，しかも文様・時期など判別するものを得るに至らなかった。

石器組成については，石鏃２点，敲石１点，フレイク10点，チップ102点の出土である。貧弱な組成と言えよう。特に，Ｍ—Ｂ区やＮ—15区においてチップの密集する部分が認められる。

Ｍ—15区には土壙をともなった，おそらく炉と考えられる炭化物の集

中する遺構が検出されている。

分布範囲は，東西に約15m×南北に約13m程で，長楕円形状を呈する。

以上のように遺物の集中範囲1～12について，出土土器，石器の組成伴出遺構などの状況についてみてきたが，各層の各範囲に特徴がみられるようである。

土器においては，第Ⅱ層（褐色粘質土層）において北東側に押型文土器が多くみられる。第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）においては，北西側に，塞ノ神式土器，貝殻条痕文土器（轟式系土器）の2種が多くみられる。しかも，両層ともに南側部分の土器は希薄で，時期を判別できるものがない状況である。このように，土器においては分布の差異がはっきりとしており，各層独自の出土分布を有している。

石器は，スクレイパー，石匙，加工痕ある石器などのいわゆる掻器，削器として用いられたと考えられる器種のものが，第Ⅱ層（褐色粘質土層）に圧倒的に多い。しかもこれらの石器は，押型文土器と分布をほぼ重複している。また第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）においては，敲石，石核，異形石器などの出土を比較的多くみる。石器においても各層，あるいは土器との関係などで，種々の特徴を有していることがわかる。

⑥ 出土遺物について

土　器

土器の項において若干触れた様に，本遺跡出土の土器は，そのほとんどが，細かい破片か，著しく風化を受けているものである。従って，文様器形・時期形成など識別できたものは150点（土器図版 Fig. 107～110も含む）である。

出土土器は，押型文土器，塞ノ神式土器，貝殻条痕文土器（轟式系土器）と，3種の土器により構成されているが，それぞれにおいて層位的・地域的な個性や特徴を有しているようである。

押型文土器は楕円押型文土器と山形押型文土器の2種から成るがそのほとんどは山形押型文土器が占める。（楕円押型文土器は，土器の項において述べた4点で，J—13区に3点，E—13区に1点の出土である。）次図 Fig. 152 をみてもわかるように，文様・時期が識別できた土器のうち第Ⅱ層（褐色粘質土層）中出土のものに至っては，半数以上を占めており，圧倒的に多い出土となる。しかもこの第Ⅱ層（褐色粘質土層）

中においても，先の遺物の出土状況や遺物集中範囲の項で述べたように，北東部一帯（遺物集中範囲1～3）に最も多い出土となっている。そしてこれと分布域を同じにするかのようにして，貝殻条痕文土器と塞ノ神式土器がみられる。また，山形押型文土器の文様そのものを観察してみると，一つ一つの山形はシャープさに欠け，間延びした感じのするものである。中には器面の途中より施文の方向を変えたりして粗雑な感じをあたえるものもある。器形についても確実なことは言えないが，いくつかの胴下部片を見て推察するに，鈍角的に丸底か，若干の平底をもつものと考えられる。

塞ノ神式土器は，3種類の土器の内最も少ない出土数であるが，その文様構成は，連点文，平行沈線，撚糸文，貝殻押引文など，バラエティーに富んでいる。先刊の平遺跡においても，塞ノ神式土器の報告がなされているが，今回のものはより多種に渡っているようである。本遺跡における出土分布をみると，第Ⅱ層（褐色粘質土層）中に極めて少ない検出状況（文様時期が識別できている土器の中において）であり，北側に疎に散在する。第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中においては，次の貝殻条痕文土器と分布をほぼ同じにしており，比較的にまとまった出土である。今回，双方の層位の違いによって，文様構成における傾向とか，差は得られなかった。また，器形については，従来から言われている様な屈曲しラッパ状に開く口縁をもつもので，胴部はほぼ垂直状に近い円筒形になるものと考えられる。なお底部に至っては，明確な資料を有せず判然としていないが，挿図土器（P. 138 Fig. 110）の48は色調，胎土もよく似ており，やや広めの平底で上げ底状となることなどより塞ノ神式土器の底部の可能性が最も強いものと考えられる。

貝殻条痕文土器（轟式系土器）は，Fig. 152 でも明確なように，著しく第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中に出土している。しかもそれの平面的な

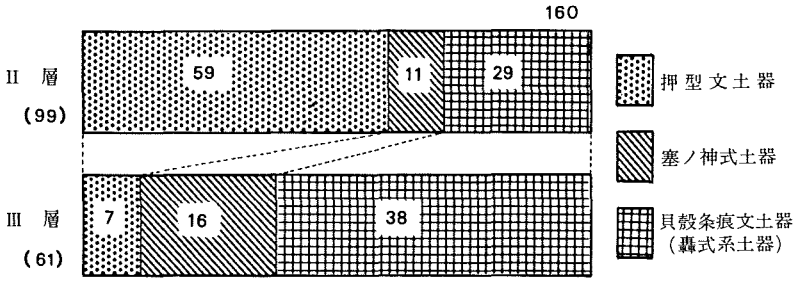


Fig. 152　第Ⅱ層・第Ⅲ層における土器分類比

出土区をみると（Fig. 149）北西端に密集する。つまり，遺物集中範囲9に相当する部分において，極立った出土分布を示している。第Ⅱ層（褐色粘質土層）の分布においては北側に散在してみられ，E—11区など，ややまとまって出土しているようである。この土器の文様の特徴は，器面の表裏又は，表面のみに二枚貝（ハイガイ等）の腹縁によって，横方向・縦方向・ななめ方向，或いは格子状，曲線状と粗雑になでられている。しかも口縁に関しては，口唇直下にやや強い，はり付けられた隆起突帯を施し突帯と口唇には刻目を有するものである。器形は，円筒形の土器群の範疇でとらえられるもので，口縁部に向って広がりながら直立するものである。底部に関しては不明であるが，おそらくさほど広くない平底状を呈するものと考えられる。本土器は，かつて阿多式土器とも呼ばれ，現在轟式土器と呼ばれているものであると考えられる。[註1] 轟式土器は轟貝塚でA～Dの4式に分けられ，その後各遺跡においていくつかの分類が試みられているようである。本遺跡においては，茶褐色，黒褐色を呈し，砂粒子を多く含む胎土。器表の剝脱がうかがえるものもあり類似性は強く，轟B式・C式と考えられるものが主体を成すようである。しかしながら，筆者の認識・理解において不足しており，厳密に分類するには至らなかった次第であり，今回出土の貝殻条痕文土器を（轟式系土器）として記した。

なお，土器44・45は土器の項でも述べたように，同じ条痕文土器ではあるが，横位に整った施文で，器厚も厚く赤褐色を呈しており，あえて轟式系土器の範疇より徐外したものである。

以上のように，押型文土器・塞ノ神式土器・貝殻条痕文土器の3種類に本遺跡出土の土器は分類できる。この3者は，編年的にもさほどかけはなれたものでなく，ほぼ同一時期，または近似する時期である。押型文土器と塞ノ神式土器の共伴は，本県でも岩下洞穴[註2]，牛込A・B遺跡[註3]，百花台遺跡[註4]，平遺跡[註5]などが知られており，それらとともに貝殻条痕文土器を加えて考えると，本遺跡は縄文時代早期末～前期の初頭に位置づけできるものと考えられる。

また，当西輪久道遺跡（諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査）より，先刊された西輪久道遺跡（九州横断自動車道に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査）の報告[註6]においては，押型文土器・塞ノ神式土器及び，若干ではあるが轟式土器らしきものも出土しており，本遺跡と同

様の出土関係を示している。

石　器　　縄文時代の石器の項で個々の遺物について述べたが，ここでは前記の土器と同様，石鏃，スクレイパー，異形石器など特徴的な石器についても若干触れてみた。

石鏃は，分布においては第Ⅱ層（褐色粘質土層）では調査域全体に散在してみられ，第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）では，北西側一帯つまり遺物集中範囲9に集中している。特にB—20・21区に著しい。全体の出土数は142個で，黒曜石製と安山岩製の2石材に大別できる。その数は，前者が118，後者が24である。下図 Fig. 153 をみてもわかるように，142個の内，完形のものが黒曜石製37，安山岩製16の計53個である。また，脚などの欠損においては黒曜石のものの破損率が高く，かつ脚部のみのもの（F）では，安山岩製のものは1点もない。このような，数量の結果から黒曜石製のものは比較的石材においてもろく折れやすく，安山岩製のものは欠損しにくいということが言えよう。ただし，安山岩製のものは黒曜石製のものと比べて材質上，加工が簡素化しており，細身の石鏃や抉りの深いものがほとんどみられないと言うことを留意しておかねばならない。

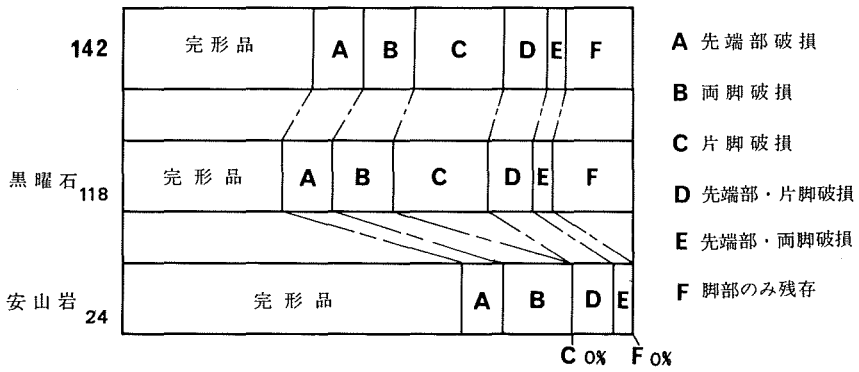


Fig. 153　石鏃破損度比

また，本遺跡出土の石鏃でⅡf類（脚部の抉りが深く，先端及び脚端部が鋭く尖る。側辺部がやや内湾し，鋸歯状となるもの）があるが，極めて特徴的な形態を有しており，あまり類例をみるに至っていない。このⅡf類（Fig. 115・116—85〜97）は，先に述べた第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中，遺物集中範囲9のB—20・21区に密集してみられる。この部分は土器においては，貝殻条痕文土器・塞ノ神式土器が共伴している

所で，これらの時期の所産であるかどうか，今後注意していかねばならない。

なお，第Ⅱ層（褐色粘質土層）において，押型文土器が過半をしめており，この土器に伴う石鏃として，従来より鍬型鏃や局部磨製石鏃[註7]などが言われているが，前者の鍬型鏃は，それらしきものが1点出土するのみで，ほとんどみられていない。しかし後者の局部磨製石鏃は多くみられる。この両者の石鏃は押型文土器の時間的な差異によるものだろうか。

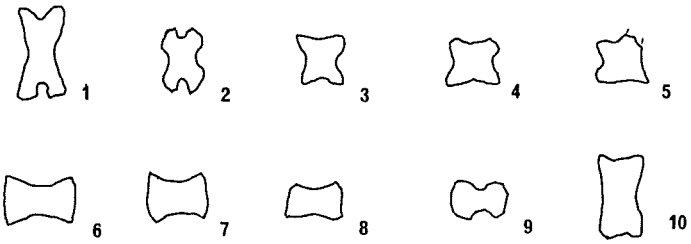
スクレイパーは，本遺跡出土の石器の中でも最も特異的な出土である。第Ⅱ層（褐色粘質土層）中より20点，第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中より3点，ドーナツ状土壙より2点，撹乱中より3点，計28点の出土である。このように，全体の70%以上もの比率を第Ⅱ層中のものが占める。本項，土器のところでも述べたように，これら20点のスクレイパーは，押型文土器を出土範囲と同じにしている。このような状況を推察すると，当遺跡において，第Ⅱ層（褐色粘質土層）における，生活形態と第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）のものとでは明らかに異なっていたのではないだろうか。つまりスクレイパーを主体とし石匙や加工痕ある石器・使用痕ある剥片などといった掻器・削器類が重要な役割を有していたと考えられる。これらの石器が通称されている獲物の解体や，皮をなめしたりしたものであるならば，その生活形態は恒久的な持続性のあるものではなく，季節的なキャンプサイトとしてのものであったと考えられる。

28点のスクレイパーで大形のものは，ほとんど安山岩製のものが多く小形のものに黒曜石製のものが多い。これは，石材からの剥片摘出の差から生じたもので，意図的なものではないと考えられる。また，本遺跡のスクレイパーは，ほとんどが長軸に刃部を形成するサイドスクレイパーである。

異形石器は第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中より3点の出土がある。出土層位・出土地区から考えるに，押型文土器に共伴したものである可能性は薄く，塞ノ神式土器か貝殻条痕文土器のいずれかであろう。X字状のものが2点，チョウネクタイ（糸まき）状のものが1点の2つのタイプに分れる。このタイプ差は，性格・使用目的を異にするものであるかどうか現段階においては，判然としない。熊本県，山口遺跡[註8]のものは，本遺跡と同様に，塞ノ神式土器・轟式土器に共伴して，X字状の異形石器が，トロトロ石器とともに報告されている。また，同県舞ノ原遺跡[註9]でも山形押型文土器に伴って，トロトロ石器とやや縦長のX字状の異形石器

が報告されている。なお神奈川県，夏島貝塚[註10]においては，糸まき状石器として1点。縄文時代前期であるが，福井県，鳥浜貝塚[註11]においても（下図には入れていない）異形石器としてチョウネクタイ状のものが4点程，酷似するものが出土している。

この様な異形石器がどの様な性格のものか，何を目的として作られたものか，現段階においては判然としていない。しかも異形石器という呼称の範疇には，様々な要素・形態のものがあり，これらは何らか区別されなければいけないのではないだろうか。今日において時期的なものは伴出遺物の共通性などより一般には縄文時代早期頃とされているが，その性格は不明であり，資料蓄積の段階である。なお，筆者の浅識において，類似資料としてその遺跡名とおおよその輪郭を下図に挙げてみた。



（スケールはそろえていない）

1	明賀谷遺跡（長崎県・松浦市）（表採）	黒曜石製
2	舞ノ原遺跡（熊本県・下益城郡・城南町）	チャート製
3	山口遺跡（熊本県・上益城郡・矢部町）	サヌカイト製
4	西輪久道遺跡（長崎県・諫早市）	黒曜石製
5	〃	〃
6	〃	〃
7	牛込B遺跡（長崎県・諫早市）	〃
8	上水計遺跡（長崎県・大村市）	〃
9	〃	安山岩製
10	夏島貝塚（神奈川県・横須賀市）	黒曜石製

Fig. 154 異形石器出土の遺跡

本遺跡において，石斧の出土は，それらしき小片が1点Ⅰ—14区の撹乱中より出土（P. 177 Fig. 136）する他には認められない。しかも，九州横断自動車道に伴った西輪久道遺跡[註6]からも出土報告が無く，遺跡全体に及んで極めて希薄な出土状況である。時期をほぼ同じにする周辺の遺跡においても，平遺跡で3点，鷹野遺跡[註12]で3点ほどで，牛込A・B遺跡[註3]においては1点の出土も無く，これら全体的にも少ない出土比率を有している様である。この様な結果は，この時期の人々が石斧という石器を

必要としなかったのか，何かでその機能を代用していたものか，また本遺跡周辺の遺跡特有の性格的なものか，或いはこの時期に限っての一般的傾向なのであろうか，疑問の残る所である。

石器は，おのおのの器種の差，または大小によって剝片剝離の段階より目的性をもって加工がなされており，本遺跡でも黒曜石などは母材そのものが大きくなかったものと考えられ，大形の石器は安山岩へ依存している比率が極めて高い。

特に，本遺跡において顕著な特徴を有する石鏃（Ⅱｆ類）や異形石器など，今後資料となる遺跡及び遺物の増加を待たねばならない。

⑦　検出遺構について

当遺跡，第Ⅱ層（褐色粘質土層）と第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）において，ドーナツ状土壙や，性格不明の落ちこみを除くと，次に挙げる計10基の遺構が検出された。集石遺構６基（５基は第Ⅱ層中），炉址３基（炭化物などの２基は第Ⅲ層中），溝状遺構１基である。

本遺跡において集石遺構としたものは，統一制などは認められず，その性格も判然としていない。今日において諸遺跡で報告されているような焼石を有する炉的な意味を含むものではない（この様な意味のものは，次に述べる「石組炉」とし，炉址としてあった）。６基の集石遺構はほとんど伴出遺物が認められず，その時期において判然としていない。従って同調査区内や周辺の遺物とともに層位的なとらえかたをしなければならないであろう。

炉址は炭化物の集中が見られたものが２基・石組炉が１基である。炭化物集中遺構の２基は，両者とも出土遺物において直接的に時期の判断できるものはないものの第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）中より検出されており，層位的に同じである。同時期，もしくは近い時期に使用されたものであろうと考えられる。なお，Ｋ―13区に検出された炭化物集中遺構（１号炉址）をＣ―14年代測定（日本アイソトープ協会に依頼）を行ったところ，今日（西暦1950年を基準として〔years. B. P.〕）よりさかのぼって，7740±105 Y. B. P.（7520±100 Y. B. P.）という数値が得られた。この数量は，おおよそ縄文時代早期頃に位置づけでき，出土している土器などの編年においても一致するところである。石組炉（３号炉址）は，第Ⅱ層（褐色粘質土層）中に検出されたもので，扁平な石を炉

床に敷き並べ，花弁状の炉側石を有するもので，明らかに人為的な行動がうかがえるものである。しかも，礫は焼成の痕跡を有している。近くより楕円押型文土器を伴出しており，その土器に相当する縄文時代早期頃に使用されたものであろう。なお，石組炉内及び周辺の土を採取し，花粉分析（パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼）を行った。その結果は，石組炉の周辺の土には，ヒカゲノカズラ属・ウラボシ科等のシダ類の胞子が多くみられ，炉内においては樹木及び，草木の花粉が多く，中には植物片もみられるということである。

溝状遺構は，第Ⅱ層（褐色粘質土層）の上面から切り込んでいる遺構であり，これまでの9基の遺構より新しいものである。性格については不明である。

⑧ 小　　結

西輪久道遺跡では，表土剝ぎからすべて手掘りによって発掘調査した。調査は，いわゆる全点記録の方法（撹乱中のものを除く）をとり，出土遺物は細大もらさずに記録し持ち帰った。このような方法により，当遺跡における遺物の分布状況が，ほぼ当時の生活面に相当する層位でとらえることができた。縄文時代においては，第Ⅱ層（褐色粘質土層）と第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）の二つの遺物を包含する層が認められ，それぞれにいくつかの特徴がうかがえるようである。

なお，石器・土器については先の項においてもそれぞれ述べており，ここでは詳細は省き，遺跡全体における若干のまとめとして，遺物全般及び，遺構との関係について述べるものである。

本遺跡における遺物の分布は，第Ⅱ層（褐色粘質土層）と第Ⅲ層（黒褐色粘質土層）とでは明確にその違いを見せている。先の「遺物の分布について」でも述べたように，第Ⅱ層（褐色粘質土層）においては，全体的に広く分布を示し，著しく集中する所はみられない。しかし，第Ⅲ層（黒褐色軟質土層）では，Fig. 155 においても明確なように，標高21～23mの間に等高線に沿うかのようにして帯状に認められる。しかも北西側に著しく集中する。また，遺構については，第Ⅱ層中に集石遺構が多くみられる。しかもこれらは遺跡の西側一帯に集中しており，遺物の出土層とまた異なった出土状況を表わしている。縄文時代にあって，土器や石器が「生活用具」として多量に使用されたことは，誰も疑いの

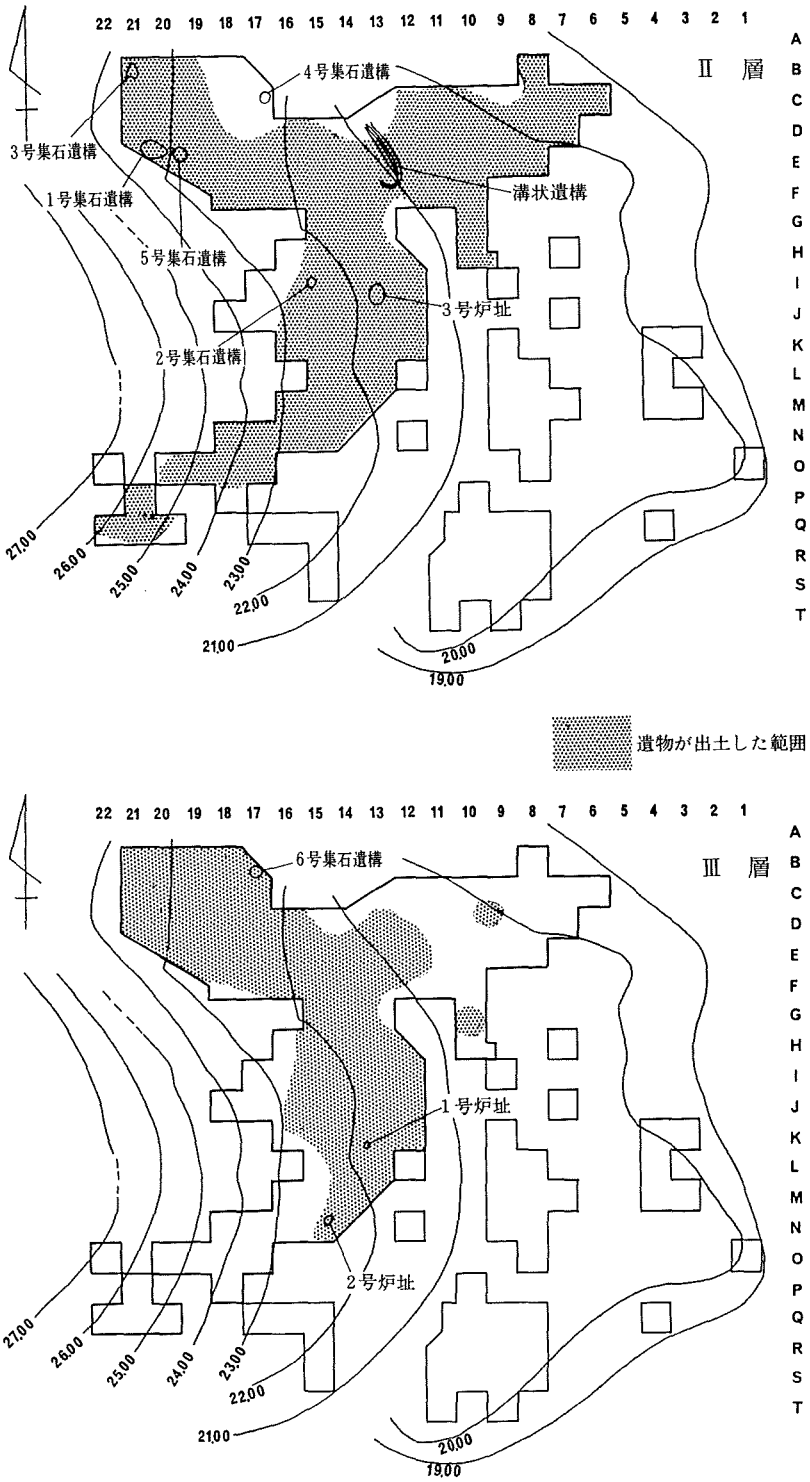


Fig. 155　西輪久道遺跡の発掘区と遺物が出土した範囲

ないところであろうが，この様な結果は何らか意味しているものであろうか。

このように層位の差において，つまり時間の違いにより，同一の場所でありながらも，明確に生活の場の範囲として，異なった様相を有していたことがあったことを表わしているものである。一般に，縄文時代前期頃より集落としての住居址の形成がうかがわれ関東地方などにおいては，中期に至って，環状ないし馬蹄形状の住居址群をなす集落を構成する。住居址周辺には出土遺物が著しく密集する傾向にあり，中央広場的なところには，比較的に少ない様である。これらを考慮して本遺跡をみると，第Ⅲ層において北西部あたりなどは，住居址的な要素も想定が可能であろう。とはいえ，本遺跡が縄文時代当時に絶好な場所とは必ずしも言えないと考えられる。つまり，平遺跡と同じく西大川に沿う河岸段丘上に立地しており，河川の氾濫など避けがたいものであったと考えられる。その痕跡をうかがわせるものとして，やや低くなる東側には所によって礫層が認められる。また，本遺跡を地形的にみても，山や海が近接しており，狩猟・採集生活に適していたものであろう。しかも，当時の海進の影響などを考えると，更に海は近接していた事になる。しかし本遺跡においては，貝類の検出は全く無い。海や川に近接しておりながら，この種の食物には依存することが極めて少なかったものであろうか。逆にスクレイパーなどの掻器・削器具類が第Ⅱ層（褐色粘質土層）より多く出土しており狩猟的な遺跡であったかを示唆しているとも考えられる。

以上のような事を考えても，当遺跡は，時間的に季節的な一時期のキャンプ地的性格をより表わしている遺跡であると言えよう。

今日に至って，長崎県内でも縄文時代早期から前期にかけての遺跡がいくつか報告されている。その中でも本遺跡は大遺跡として今後残るものである。しかも西輪久道遺跡全体からみると，北側部分などを中心にまだ未発掘の部分もあり，今後の保存については，関係者を中心に地域住民の人も含めて，より一層の理解と行動が要求されよう。

また，大村湾に沿った諫早市西部の沖積地は，各種・各時期の遺跡が多くあるところでもあり，近辺の遺跡との関係を加味して，全体的な理解も必要となってくるであろう。

註1　鹿児島県日置郡金峰町教育委員会　1978「阿多貝塚」

註2　麻生優　1968「岩下洞穴の発掘記録」

註3　長崎県教育委員会　1982「牛込A・B遺跡」九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　Ⅱ

註4　長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事　田川肇氏の教授による。

註5　長崎県教育委員会　1983「平遺跡」諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　Ⅰ

註6　長崎県教育委員会　1983「西輪久道遺跡」九州横断自動車道に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　Ⅲ

註7　下川達彌　1973「局部磨製石鏃について　――長崎県佐世保市岩下洞穴出土資料をとりあげて――」長崎県立美術博物館研究紀要第1号

註8　小畑弘巳　1982「矢部町名蓮川の縄文時代の遺物　③山口遺跡」赤れんが　No.1

註9　豊崎晃一　1978「熊本県舞ノ原遺跡発見の異形石鏃」九州考古学　No.53

註10　杉原荘介・芹沢長介　1957「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学部研究報告　考古学第二冊

註11　福井県教育委員会　1979「鳥浜貝塚　―縄文時代前期を主とする低湿地遺跡の調査1―」

註12　地域振興整備公団　長崎県教育委員会　1981「西輪久道遺跡・鷹野遺跡」

参考文献

長崎県吾妻町教育委員会　1983「弘法原遺跡」吾妻町の文化財7

松永幸男　1984「押型文土器にみられる様相の変化について」古文化談叢　第13集　九州古文化研究会

鹿児島県教育委員会　1980「石峰遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告　Ⅳ

鹿児島県教育委員会　1978「西之薗遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（8）

松本雅明・富樫卯三郎　1961「轟式土器の編年―熊本県宇土市轟貝塚調査報告」考古学雑誌　第47巻　第3号

加藤晋平・小林達雄・藤本強　編集　1982　「縄文文化の研究３　縄文土器　Ⅰ」雄山閣出版

福岡市教育委員会　1983　「柏原遺跡群　Ⅰ　―縄文時代遺跡Ｆ遺跡の調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第90集

阿部祥人　1982　「剝離痕による石鏃の分析　―試論―」東京埋蔵文化財センター　研究論集　Ⅰ

長崎県教育委員会　1983　「上水計遺跡」九州横断自動車道に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　Ⅲ

力武一成・正林護　1979　「松浦市明ケ谷遺跡の異形石器」長崎県の考古学〔1〕

小薬一夫　1979　「縄文時代における焼石遺構」小田原考古学研究会会報

明治大学杉原荘介・芹沢長介　1957　「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」

5. 落ち込み・ドーナツ状土壙について

落ち込みとドーナツ状土壙は形成状況が非常に似かよっているが，これらの土層堆積土の形成が相違を呈す為に，検出の際に区別を行った。

落ち込み　遺跡において落ち込みが1～9号まで検出されている。(Tab. 19) 検出範囲はD～F—12～19区に渡り，特にD～F—16～19区に集中する。

規模は長径が3mを越えるものとそれ以下のものに分れ，深さも1mを越えるものはない。形状は楕円形がほとんどであるが，意図的な規格性は見られない。

落ち込み内出土遺物は，2・7・9号を除いて，少量であるが出土している。3～6号に縄文土器が出土しているが，砕片の為に文様等不明である。他に比べて比較的多いのは8号で，先土器時代の台形石器，ナイフ形石器を含み，18点の遺物が出土している。また，落ち込みは縄文時代の遺物集中範囲5～9に含まれて，検出されている。性格については不明であるが，形成時期は縄文早期～前期にかけてと考えられる。

ドーナツ状土壙　ドーナツ状土壙は各地で検出例が増加しているが，その検出土壙に対しての性格付け等推察されている。地層の逆転現象，地層横転，ローム盛土遺構，竪穴状遺構，その他の名称で呼ばれている。

西輪久道遺跡のドーナツ状土壙の呼称は仮称で，平遺跡の報告書の中で述べているように，土壙平面観がドーナツ状を呈すので呼んでいる。

西輪久道遺跡のドーナツ状土壙は46箇所で検出されている。範囲はC～M—9～21区に渡るが，特にC～J—10～15区に集中する傾向がみられることは遺跡の地形的な土層堆積状況に在るものと考えられる。

このドーナツ状土壙も形状的，および土壙内覆土の堆積状況にも若干の相違を呈すので，A～B類の2つに分類を行った。

また，A，B類の分類については，平遺跡の分類[註1]を使用することにする。土壙内覆土について，土壙底面と同一層の覆土を①，上層からの流入で形成された覆土を②とする。

A類は土壙内覆土の堆積状況で，半円形状の覆土①の下底面に覆土②が堆積したものである。覆土①が整層状況を呈し，下底面に覆土②が全周するように堆積するものである。(平遺跡でのA—1類)

B類は覆土①が土壙の片側に，他方に覆土②が堆積したものである。

ドーナツ状土壙の形状は検出等の平面観で，円形，楕円形，長楕円形不定形に分け記した。

遺跡検出のドーナツ状土壙はほとんどがA類で，B類は4箇所を数えるだけである。また29・35・37・40号のように一旦ドーナツ状土壙が形成され，その後に再度形成された痕跡を示している。29・40号は覆土の堆積状況より，形成に時間差を持って2つのドーナツ状土壙が重なっており，37号は覆土①が時間差を経て形成されたものである。

また36号のように連続して形成されるものや，28号のように2枚の覆土②が堆積する状況もある。32号は径4.6m，短径3.8m，深さ0.7m程の大形で，土壙内に礫石が堆積を示すものである。

検出面の平面観は円形，楕円形，不定形とほぼ同数である。

土壙の規模は計測平均値が長径3m，短径2.2m，深さ0.65mを計る。長径が3mを越えるものが19箇所で，2m未満のものが11箇所と形成的に大小がみられる。38号は長径が5m，短径4.4m，深さ1.2mの円形状を呈し，単独のドーナツ状土壙としては最も大きい。44号は長径13.8m，短径4.4mと大形であるが，この土壙内に複数のドーナツ状土壙が形成されている。

土壙内出土遺物は26箇所の覆土②とした堆積土中にほとんど包含される。特に44号には台形様石器，ナイフ形石器，石鏃，敲石，削器,掻器，剥片，砕片等76点と土器片124点の多量の遺物が出土する。

これらの土壙内出土遺物の多少は，土壙の形成時における周囲の遺物遺存状況によって遺物量が増減する傾向が窺われる。それは縄文時代の遺物集中範囲2・3・4・6・9・10・12の分布範囲内に形成されていることが出土遺物を包含する要因ではないだろうか。

また，44号土壙内より縄文前期の轟式土器が出土し，他の土壙内出土土器が細片で形成は不明である。石器類は第Ⅱ・Ⅲ層出土の他の石器類と相違がないようで，これらの土壙の形成時期は縄文早期末～前期にかけて形成されたのであろう。

ドーナツ状土壙は長崎県内[註1]および全国的に呼称は別にしても，同様な現象がみられる。時期的には先土器時代～縄文時代，中世と幅広くみられ，その中でも縄文早期～前期頃にかけての時期にほとんどが形成されている状況があるようだ。

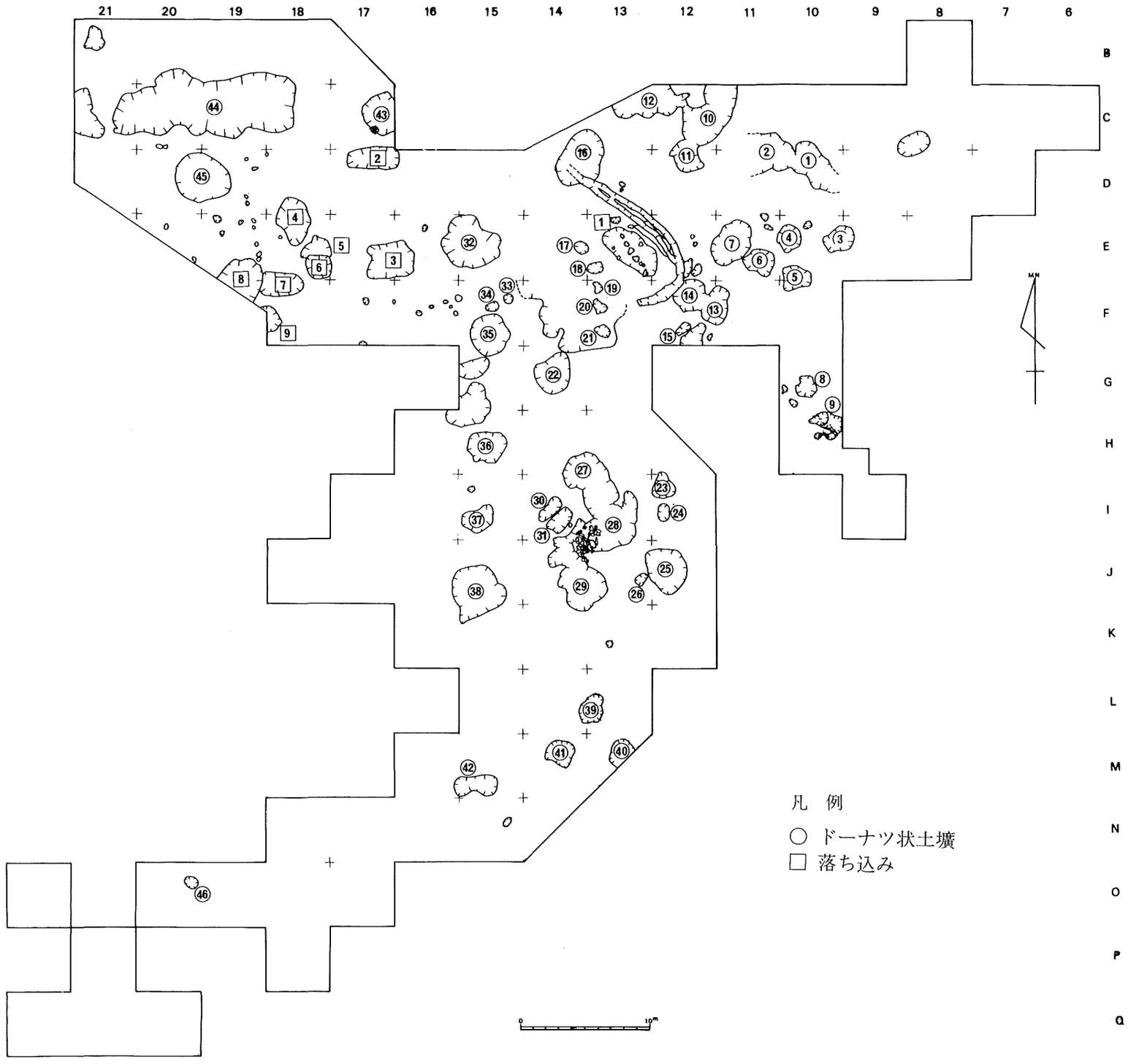


Fig.156 落ち込み・ドーナツ状土壙配置図

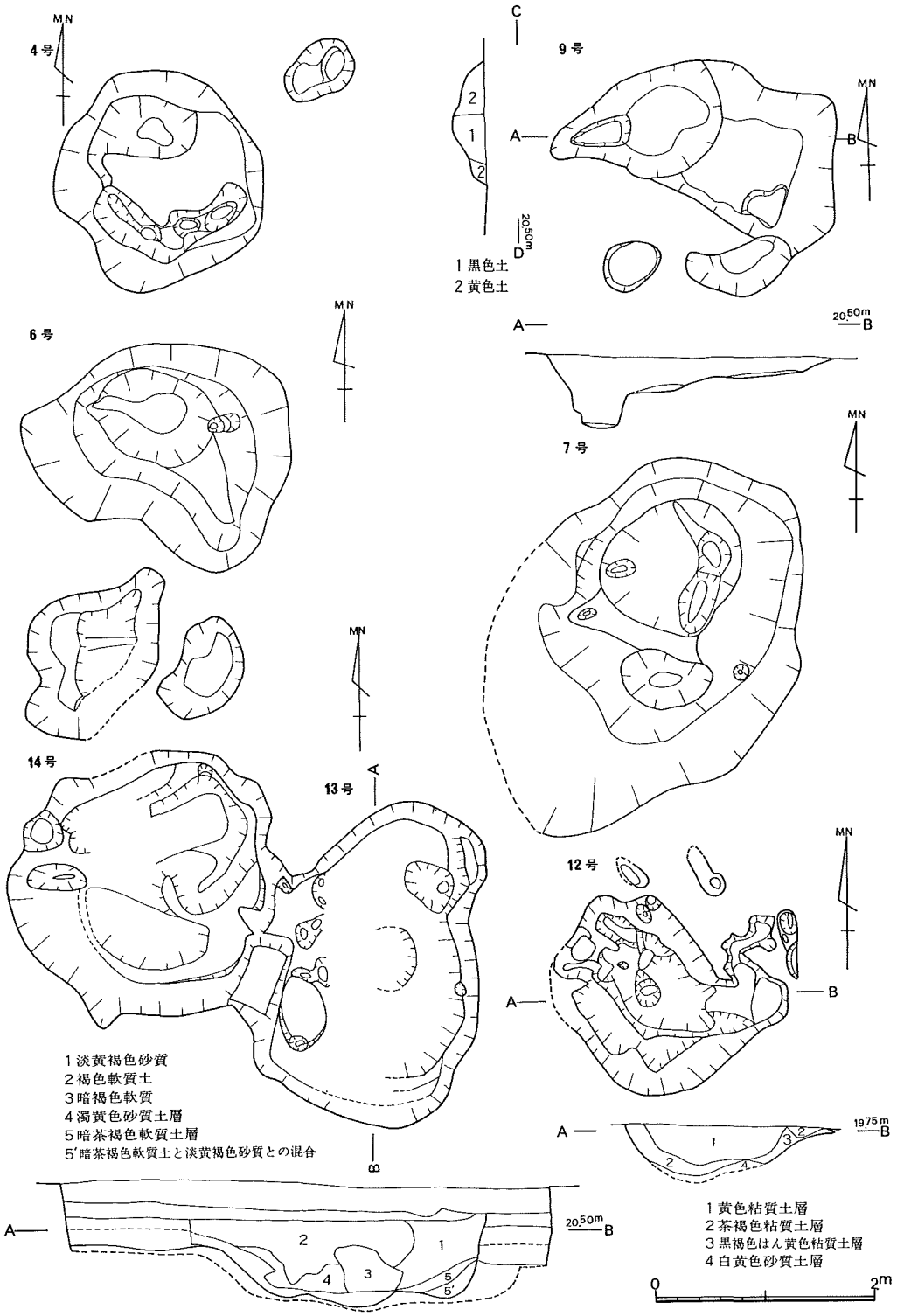


Fig. 157　ドーナツ状土壙（1）(1/60)

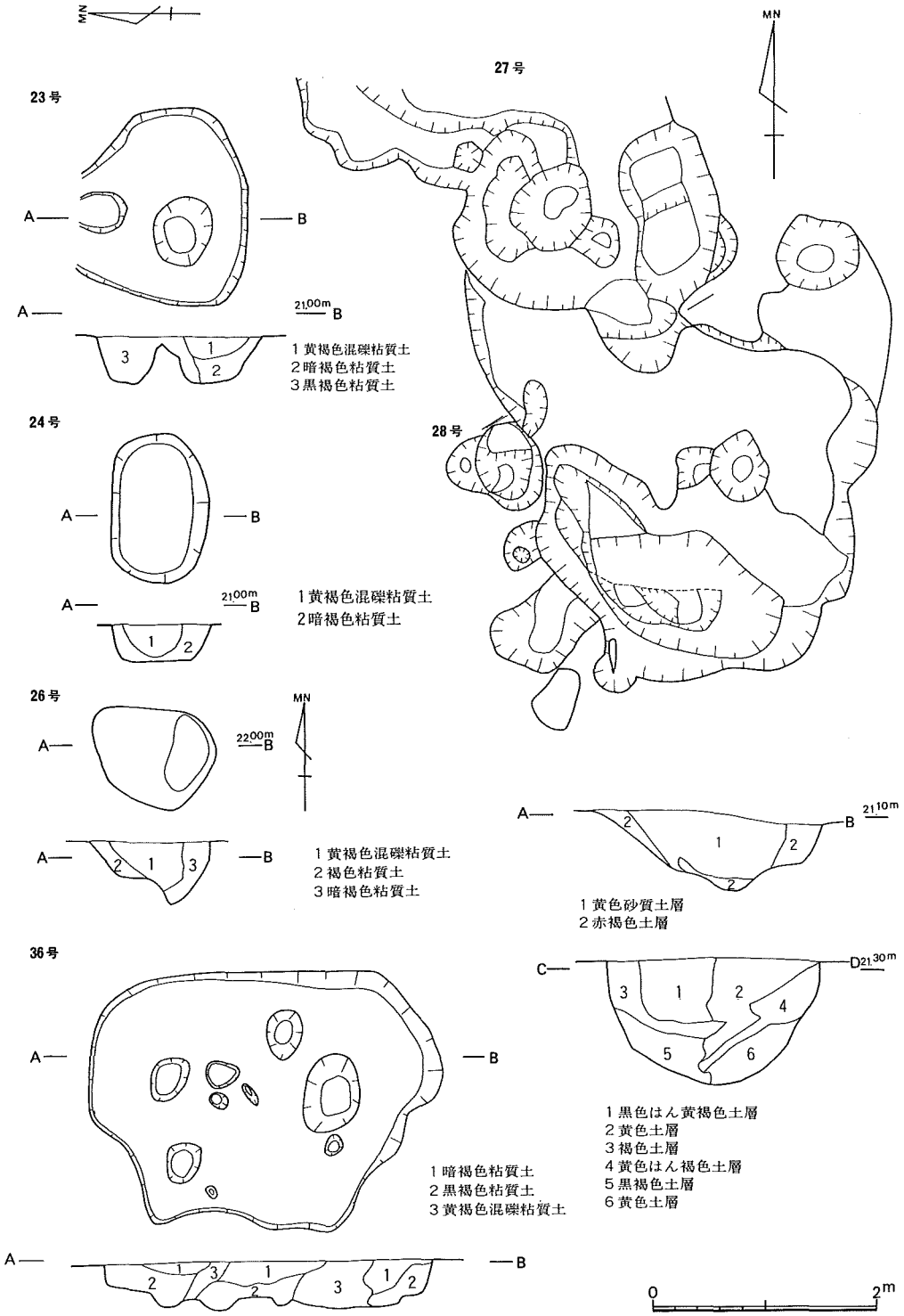


Fig. 158　ドーナツ状土壙（2）(1/60)

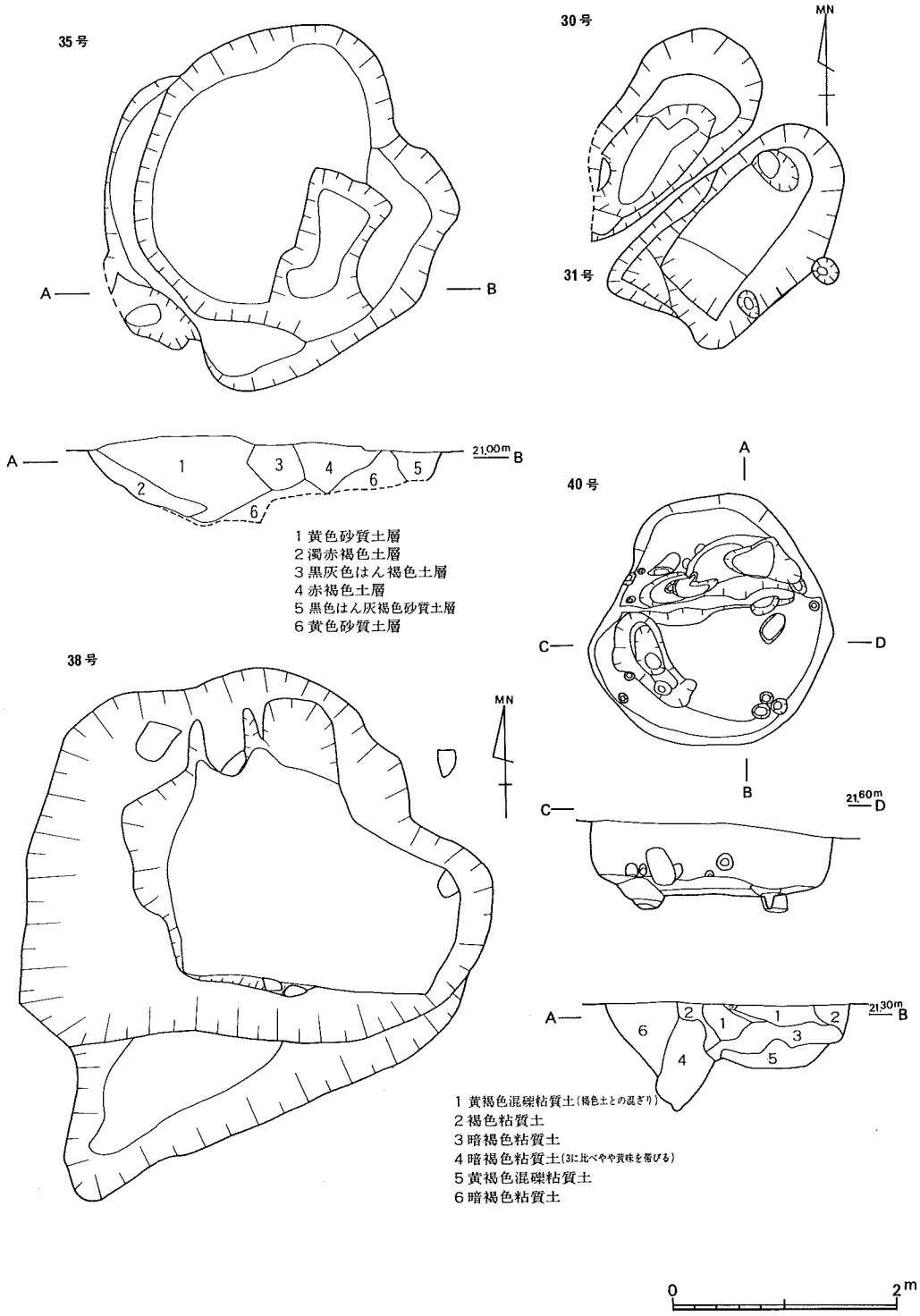


Fig. 159　ドーナツ状土壙（3）(1/60)

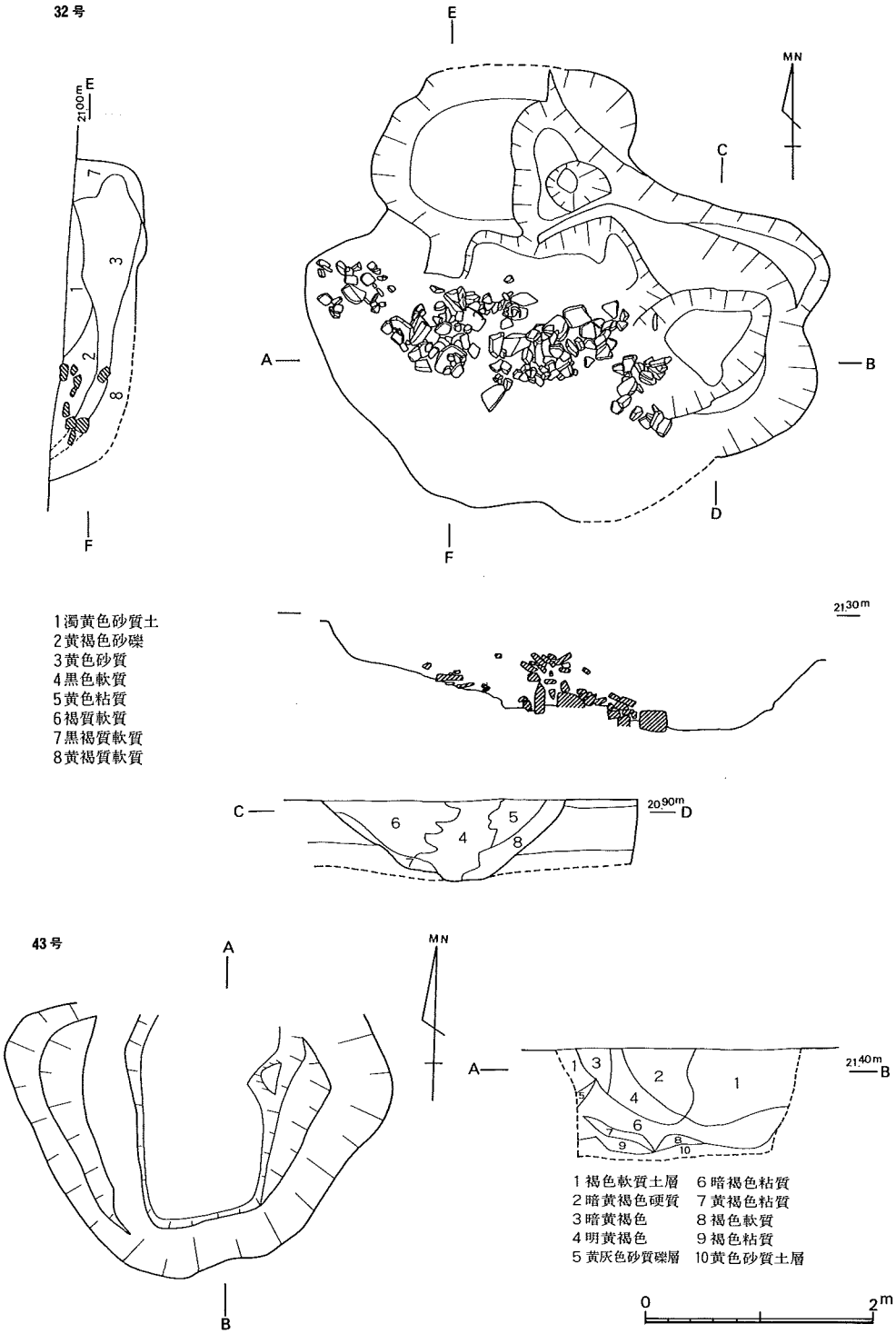


Fig. 160　ドーナツ状土壙（4）(1/60)

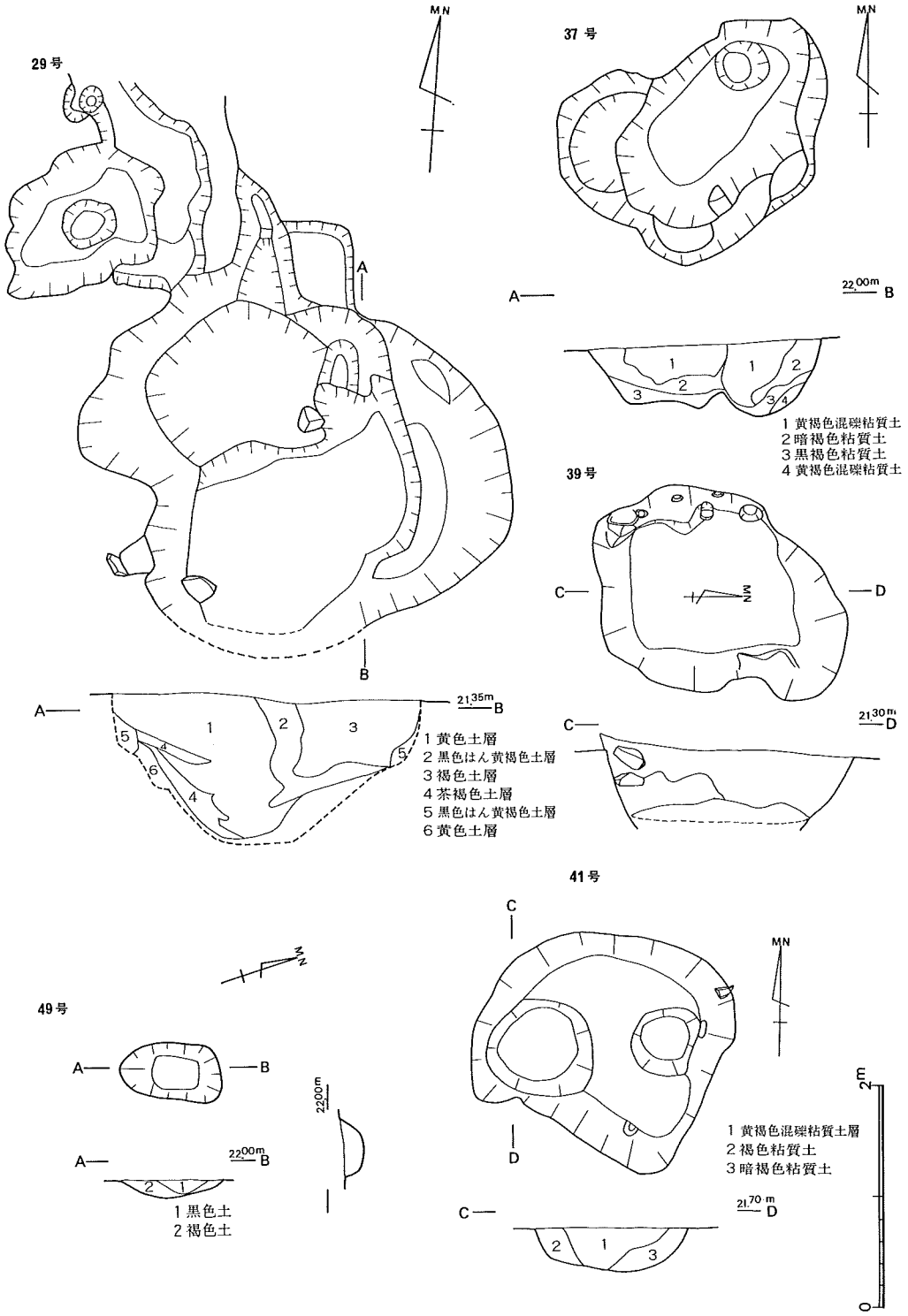


Fig. 161　ドーナツ状土壙（5）(1/60)

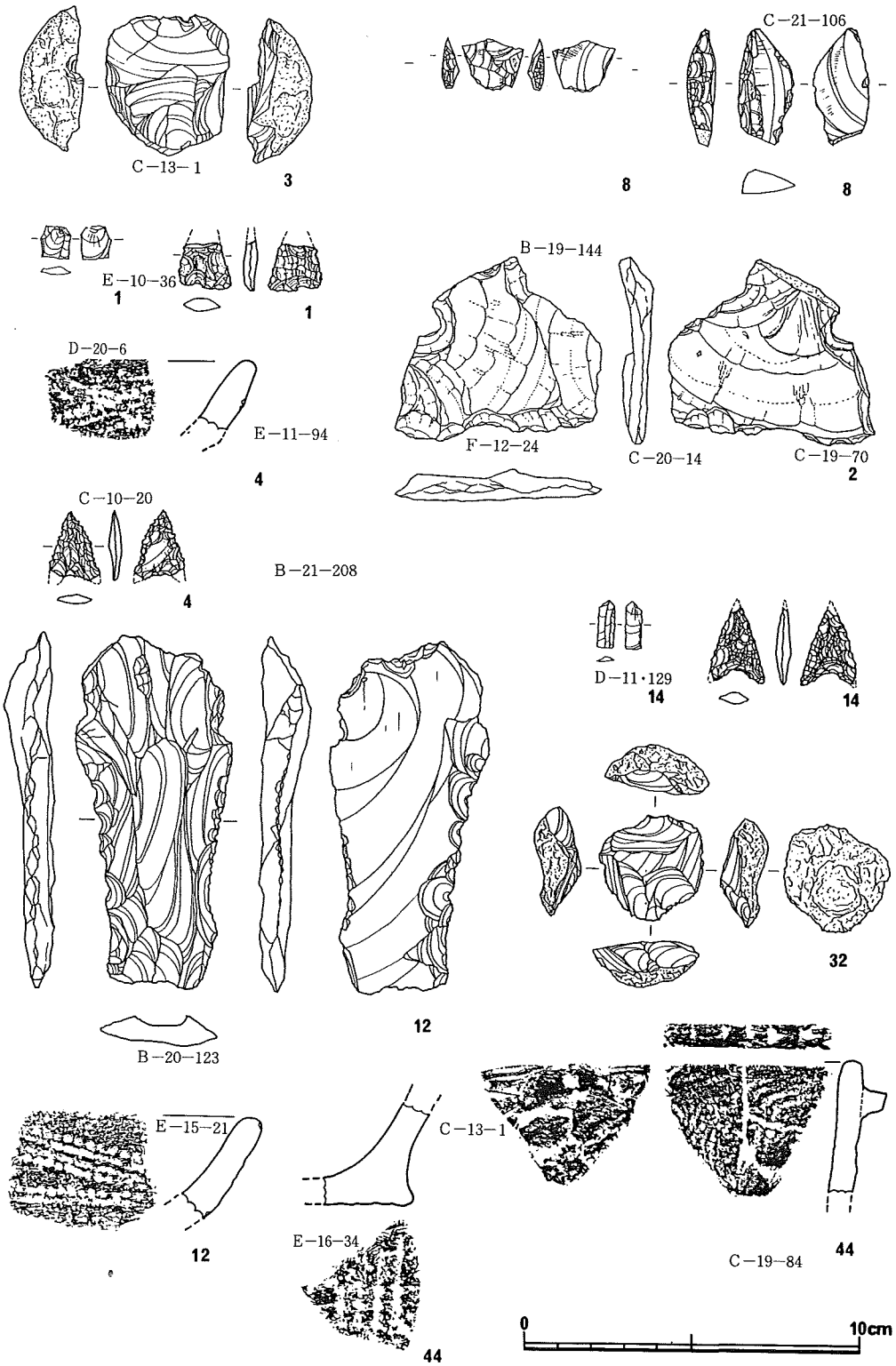


Fig. 162　落ち込み，ドーナツ状土壙出土遺物（1）（番号は落ち込み・ドーナツ状土壙の号数）

ドーナツ状土壙の成因は能登[註2]により風などの自然の営力によって一気に倒れたとする風倒木痕説があり，また平遺跡の調査で第５号の検出状況より，人為的な構築物でなく，自然的現象によるものと考えられる検出状況がみられ，この西輪久道遺跡も同様で，人為的な構築の状況はなく，自然的要因によって起きた現象と考えられる。また土壙の形成範囲は旧河川が形成した凹地状に堆積した部分に集中する傾向が見られる。

このことは，当時の環境が浅い谷部に住居空間があり，大木が繁った中で，生活していたことが花粉分析等でも窺われるようだ。

註１　長崎県内では鷹野，平，雀ノ倉，牛込Ａ・Ｂ，峰ノ原，平山Ｂ遺跡などで検出され，鷹野遺跡のＲ―12のドーナツ状土壙のＣ―14年代測定で，＞37,800 YB. P の年代が得られ，平山Ｂ遺跡では古墳時代以降の所産とされ，他は縄文早期末～前期にかけての所産とされている。

註２　能登健　1974「発掘調査と遺跡の考察―いわゆる性格不明の落ち込みを中心として」信濃　26巻３号

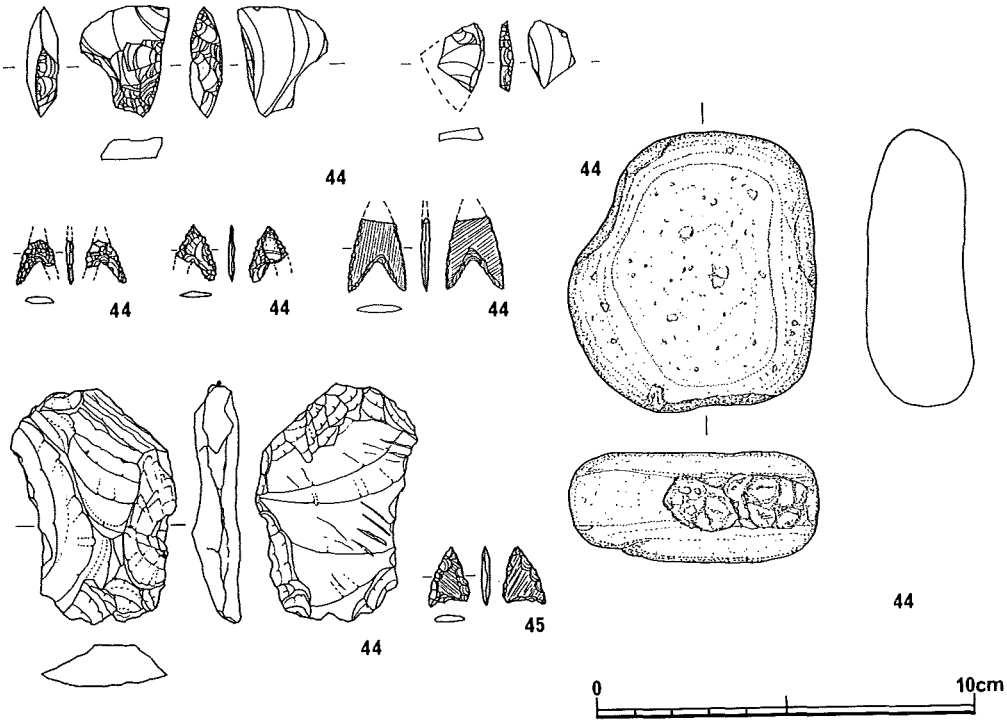


Fig. 163　ドーナツ状土壙出土遺物（２）（番号はドーナツ状土壙の号数）

Tab. 18—1　ドーナツ状土壙一覧表

番号	形状分類	形状	法量			出土遺物
			長径(m)	短径(m)	深さ(m)	
1	A	不定形	3.3	2.5	0.62	石鏃片2・剥片2・砕片1
2	A	不定形	2.7	2.9	0.43	石匙1・剥片12・砕片9・土器17
3	A	楕円形	2.4	1.8	0.55	剥片1・砕片1
4	A	円形	2.0	1.9	0.39	土器3
5	A	不定形	2.1	1.8	0.48	土器3
6	A	円形	2.4	2.0	0.64	土器4
7	A	楕円形	3.8	2.7	0.95	石鏃片1・砕片3
8	A	円形	1.8	1.6	0.42	
9	A	不定形	2.6	1.9	0.63	
10	A	不定形	5.7	3.3	0.29	剥片2・砕片1・土器17
11	A	不定形	2.4	1.8	0.40	スクレイパー1・剥片1・土器19
12	B	不定形	4.7	2.4	0.94	石匙1・土器13
13	A	楕円形	2.9	2.1	0.81	石鏃片1・細石刃1・砕片2
14	A	円形	2.6	2.5	0.79	剥片1・砕片2・土器1
15	A	不定形	1.3	1.7	0.49	剥片3
16	B	楕円形	4.6	3.3	0.65	剥片1・砕片1・土器1
17	A	楕円形	1.0	0.8	0.31	剥片1
18	A	楕円形	1.2	0.8	0.27	剥片1
19	A	不定形	0.9	0.7	0.33	
20	A	円形	1.2	0.7	0.13	
21	A	楕円形	1.2	0.9	0.32	
22	A	円形	3.2	2.9	1.03	
23	A	不定形	2.0	1.8	0.48	
24	A	楕円形	1.3	0.9	0.42	
25	A	円形	3.5	2.9	1.30	
26	A	円形	1.1	0.9	1.00	
27	A	不定形	4.6	3.2	0.79	剥片1・砕片1・土器1
28	A	不定形	5.6	2.8	1.13	
29	A＋B	円形	5.8	3.6	1.07	剥片2・砕片1
30	A	楕円形	2.5	1.0	0.69	
31	A	楕円形	2.3	1.3	0.72	
32	A	円形	4.6	3.8	0.70	残核1・砕片3・剥片4・土器3
33	A	円形	0.8	0.8	0.29	
34	A	楕円形	1.1	0.8	0.35	
35	A＋B	円形	3.3	3.1	0.54	砕片1
36	A	円形	3.2	2.4	0.42	
37	A	楕円形	2.6	1.8	0.90	砕片1
38	A	円形	5.0	4.4	1.19	

Tab. 18—2

番号	形状分類	形状	法量			出土遺物
			長径(m)	短径(m)	深さ(m)	
39	A	楕円形	2.6	1.8	0.63	砕片4
40	A	円形	3.1	4.3	0.96	土器2
41	A	円形	2.3	2.1	0.41	
42	A	楕円形	3.3	1.6		
43	A	不定形	3.3	2.3	0.96	剥片4・砕片1
44	A	長楕円形	13.8	4.4	1.19	台形様石器1・ナイフ形石器1・石鏃片1・磨製石鏃1・敲石1 削器1・スクレイパー1・剥片39・砕片32・土器124
45	A	円形	4.3	3.8	1.22	石核再生剥片1・剥片3・砕片7・土器9
46	A	楕円形	1.1	0.8	0.22	

Tab. 19 落ち込み一覧表

番号	地区分類	形状	法量			出土遺物
			長径(m)	短径(m)	深さ(m)	
1	E-12・13	楕円形	5.0	2.4	0.64	剥片1
2	C-17・D-16・17	楕円形	4.0	1.8	0.36	
3	E-16・17	方形	3.4	2.8	0.78	石核1・剥片10・砕片6・土器4
4	D-18・E-18	楕円形	3.6	2.7	0.63	剥片2・砕片2・土器1
5	E-17・18	不定形	2.5	1.6	0.77	残核1・剥片7・土器1
6	E-17・18	円形	2.2	2.0	0.93	剥片2・砕片2・土器2
7	E-18・19 F-18・19	楕円形	3.3	1.8	0.59	
8	E-19・F-19	楕円形	3.4	3.1	0.78	台形石器1・ナイフ形石器1・スクレイパー1 剥片14・砕片1
9	F-18・19	不定形	2.0	0.7	0.26	

Ⅴ　ま　と　め

西輪久道遺跡は大村湾に注ぐ西大川流域の先土器時代から縄文時代にかけての遺跡群の中の一つである。

遺跡は縄文早期～前期にかけての炉址群（石組炉，炉穴）や礫群（1～5号）などの遺構と共に遺物が第Ⅱ層・第Ⅲ層に出土する。

住居址は検出出来なかったが，これらの遺構群および遺物の遺存状況より，一定期間生活の場として利用していたことは十分窺い知れる。（九州横断自動車道関係調査範囲でも縄文早期～前期にかけ同様な遺物の出土状況を示すようだ。）

先土器時代の西輪久道は下層（第Ⅵ層～第Ⅶ層）と上層（第Ⅲ層～第Ⅴ層）に遺物を包含する文化層が検出された。

下層石器群はナイフ形石器と台形・台形様石器と剝片尖頭器が伴う石器群で，2箇所に礫群を伴う遺物集中範囲がある。

上層石器群はナイフ形石器，台形・台形様石器，剝片尖頭器，三稜尖頭器・角錐状石器，尖頭状石器を伴う石器群に細石核1点，細石刃40点が出土するが，細石器を主体とする石器群が九州横断道関係調査自動車区で検出（細石核23点，細石刃348点）され，上層ではナイフ形石器を主体とする石器群と細石器を主体とする石器群に分離出来るようだ。上層石器群も4箇所に遺物集中範囲を見せ，その中でも第Ⅲ層と第Ⅳ・Ⅴ層との遺物遺存状況が若干異なり，細分可能な様相を示している。

西輪久道下層はナイフ形石器を主体とする石器群で，上層はナイフ形石器，台形・台形様石器，剝片尖頭器と石器製作技術が異なる尖頭器類が伴ったナイフ形石器を主体とする石器群と細石器を主体とする石器群が遺物遺存状況を異にして検出された。上層と下層の石器における技術的基盤は余り変化がないが，上層における尖頭器類の多様化は往時の環境変化に順応する状況下で，新たな要素として影響を受けて発展したものであろう。

また，遺跡周辺には鷹野，平，長牟田，牛込，雀ノ倉，柿崎遺跡等の先土器時代，縄文早期～前期にかけての遺跡群がある。

これらの遺跡は各時代においても時間的な差異はあれ，共通した要素をもつもので，西大川流域遺跡群として地域的な様相を明らかにすることが，今後の課題であろう。

Ⅵ　長崎県諫早市西輪久道遺跡 試料花粉分析結果報告

はじめに　長崎県教育委員会殿より，西輪久道遺跡の花粉分析の御依頼を受けました。このほど分析が終了しましたので，その結果を御報告致します。

試　料　試料は，西輪久道遺跡の石組炉址及びその周辺で採取された５点である。下記試料表に各々の岩質等を示す。

Tab. 20　西輪久道遺跡試料表

試料番号		地区	岩質
西輪久道遺跡	No. 6	C地区 石組炉址直下	褐色土
	No. 12		暗赤褐色土
	No. 16		暗赤褐色土
	No. 9	E地区 石組炉址周辺	暗赤褐色土
	No. 10		暗赤褐色土
鷹野遺跡	W－35	23号炉穴の側壁部分	

分析方法　花粉・胞子化石の抽出は，試料20ｇ（濕重）を秤量し48％ＨＦ→比重選別法（$ZnBr_2$・比重2.15）→アセトリシス処理→10％ＫＯＨの順に物理・化学処理を行なった。残渣をグリセリンゼリーで封入し検鏡に供した。検鏡にあたってはプレパラート全面を走査し，その間に出現したすべての分類群及びその個数を表２に示す。

分析結果及び考察　今回の分析で検出された花粉・胞子化石は別紙に記載したものである。

次に両遺跡ごとに分析結果を述べる。

西輪久道遺跡　石組炉址直下及び周辺ともに出現花粉化石数は少なく，№16を除いては全体で50個前後である。№16では100個体を超えるものの，分類群が不明な三溝孔型花粉Ａタイプが大半を占める。図版１の№６に示した花粉で，孔は不明瞭である。石組炉址直下と周辺における花粉組成は，少ないなかでの傾向は，周辺ではヒカゲノカズラ属，ウラボシ科等のシダ類胞子が多いのに対し，直下では胞子は少なく樹木及び草本花粉が多い。出現した分類群の数は，直下の方が多く，また植物片も多い（状況写真参照）。花粉の保存上においてはそれほど違わず有意な差は認められない。従って花粉組成及び植物片の量は幾分異なるものの分析結果に

Tab. 21　西輪久道遺跡試料花粉分析結果報告（1）

試料採取地点及び試料番号 / 花粉、胞子化石名	C地区石組炉址直下 No. 6	〃 No.12	〃 No.16	E地区石組炉址周辺 No. 9	〃 No.10
Tsuga	1				
Pinus	1			1	
Cryptomeria				2	4
Ap－1	2	0	0	3	4
Corylus	1		1	2	
Quercus subgen. Lepidobalanus	5	8	5	1	1
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	3	4	5	1	
Castanopsis			1		
cf. Daphniphyllum			1		
Acer		2			
AP－2	9	14	13	4	1
AP	11	14	13	7	5
Typha			1		
Gramineae		3		1	1
Ranunculaceae		3			
Cruciferae	1		1		
Geranium	2	2	3		
Haloragis	1				
Justicia					1
Artemisia	2	6	2		
Carduoideae		2	1	1	
Cichorioideae		9			
NAP	6	25	8	2	2
Trizonoporate pollen	1				
Trizonocolpate pollen	5				1
Trizonocolporate pollen A－type	13	3	96	3	5
Trizonocolporate pollen	5	5	24	4	15
FP	24	8	120	7	21
Lycopodium				16	11
Osmunda					5
Polypodiaceae	4	3	2	4	6
Monolete spore		1			
Trilete spore	1				
FS	5	4	2	20	22
Total Number	46	51	143	36	50

Tab. 22　西輪久道遺跡試料花粉分析結果報告（2）

学　　名	和　　名
Tsuga	ツ ガ 属
Pinus	マ ツ 属
Cryptomeria	ス ギ 属
AP－1	針葉樹花粉
Corylus	ハシバミ属
Quercus　subgen.　Lepidobalanus	コナラ亜属
Quercus　subgen.　Cyclobalanopsis	アカガシ亜属
Castanopsis	シイノキ属
cf.　Daphniphyllum	ユスリハ属
Acer	カエデ属
AP－2	広葉樹花粉
AP	樹木花粉
Typha	ガ マ 属
Gramineae	イ ネ 科
Ranunculaceae	キンポウゲ科
Cruciferae	アブラナ科
Geranium	フウロウソウ属
Haloragis	アリノドウグサ属
Justicia	キツネノマゴ属
Artemisia	ヨモギ属
Carduoideae	キク亜属
Cichorioideae	タンポポ亜科
NAP	草本花粉
Trizonoporate　pollen	三孔型花粉
Trizonocolpate　pollen	三溝型花粉
Trizonocolporate　pollen　A－type	三溝孔型花粉　Aタイプ
Trizonocolporate　pollen	三溝孔型花粉
FP	形態分類花粉
Lycopodium	カニクサ属
Osmunda	ゼンマイ属
Polypodiaceae	ウラボシ科
Monolete　spore	単条溝型胞子
Trilete　spore	三条溝型胞子
FS	羊歯類胞子

おいては，熱の加わり方という点では石組炉址直下と周辺で著しい違いは認められない。

註　三溝孔をもつ花粉は樹木，特に広葉樹に多いので，孔と溝の構造が明瞭に保存されていないと，化石の鑑定はむずかしい。
化石の保存は，推積後の自然環境の変化（風化・浸水等）によって左右される。

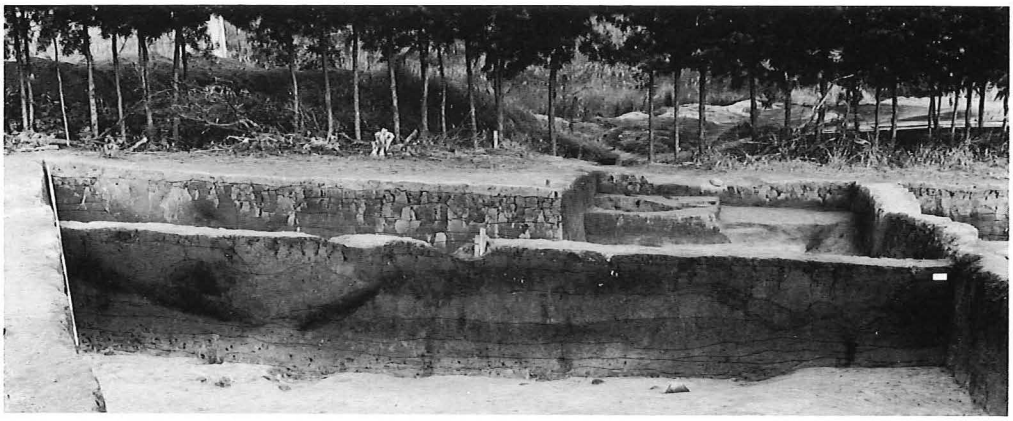
PLATES

調査前の遺跡周辺航空写真（日本道路公団提供）

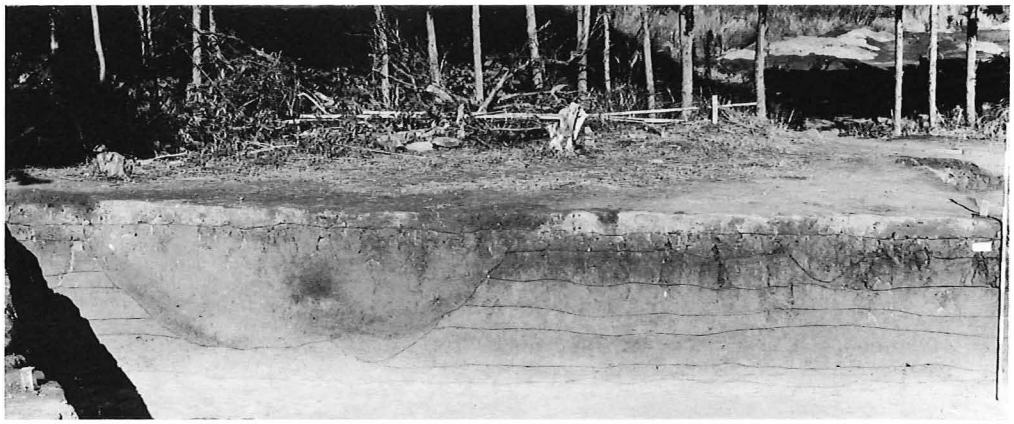
西輪久道遺跡遠景（試掘調査時）

遺跡遠景（中核工業団地・九州横断自動車道関係調査区）

遺跡遠景（中核工業団地関係調査区）



Ｅ―12・13区北壁面



Ｄ―13・14区北壁面

Ｄ―20区西壁面

Ｅ―8・9区北壁面

Ｅ―19・20区北壁面

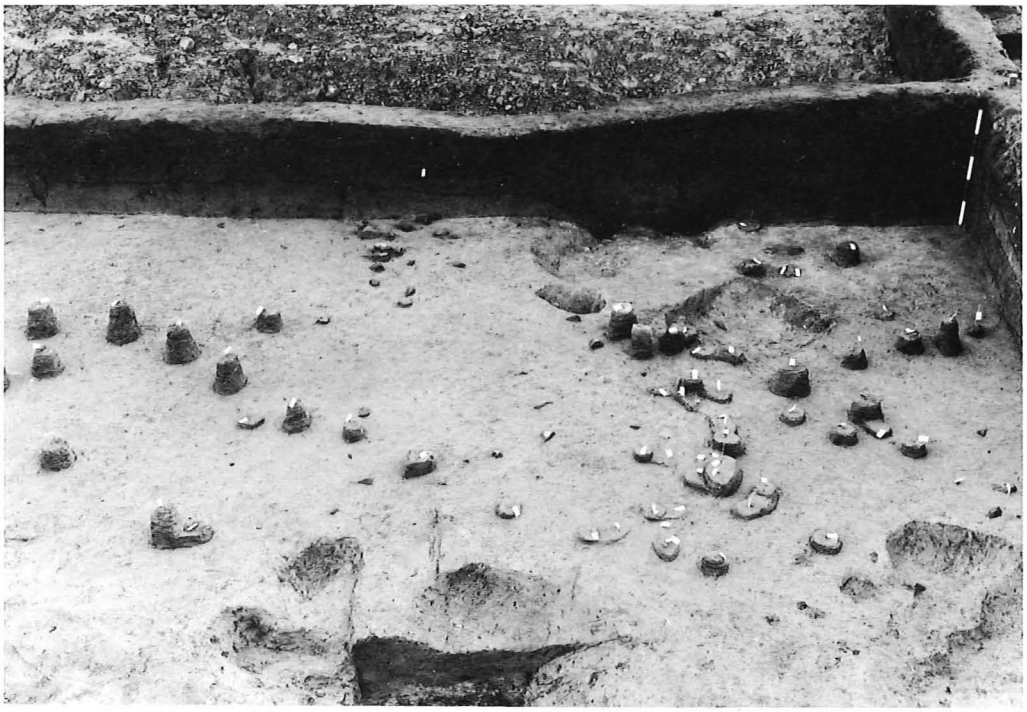
Ｋ―12区北壁面

上層検出礫群（３）（Ｄ―16区）

Ｄ―13・14区遺物出土状況（東より）

Ｄ―13・14区遺物出土状況（東より）

Ｄ―12・13区遺物出土状況（北より）



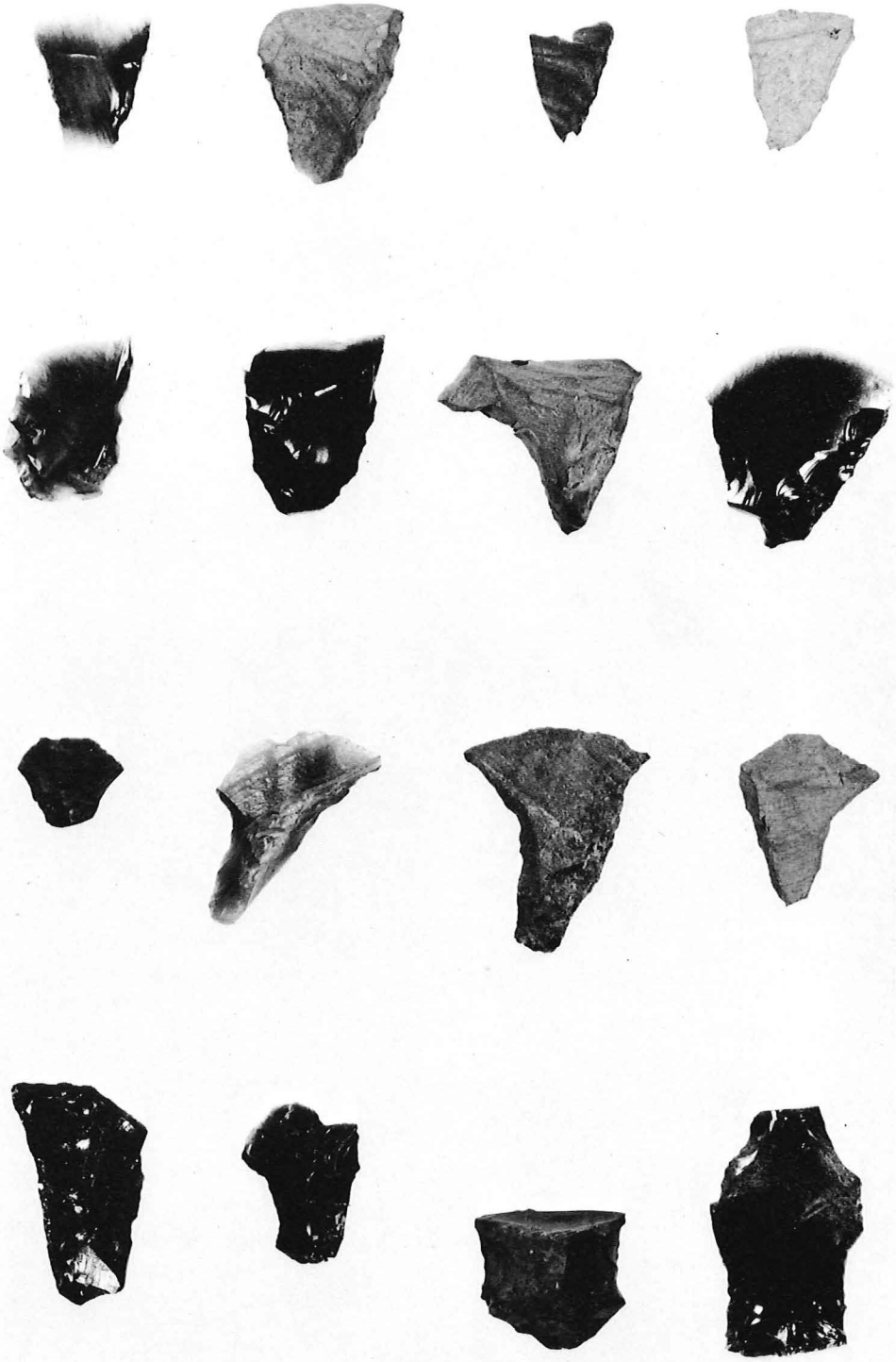
Ｄ―10・11区遺物出土状況（北より）

先土器時代の石器・表土，ドーナツ状土壙出土（表）（1/1）

先土器時代の石器・表土，ドーナツ状土壙出土（裏）(1/1)

先土器時代・第Ⅱ層出土石器（１）ーナイフ形石器（表）（1/1）

先土器時代・第Ⅱ層出土石器（１）―ナイフ形石器（裏）(1/1)

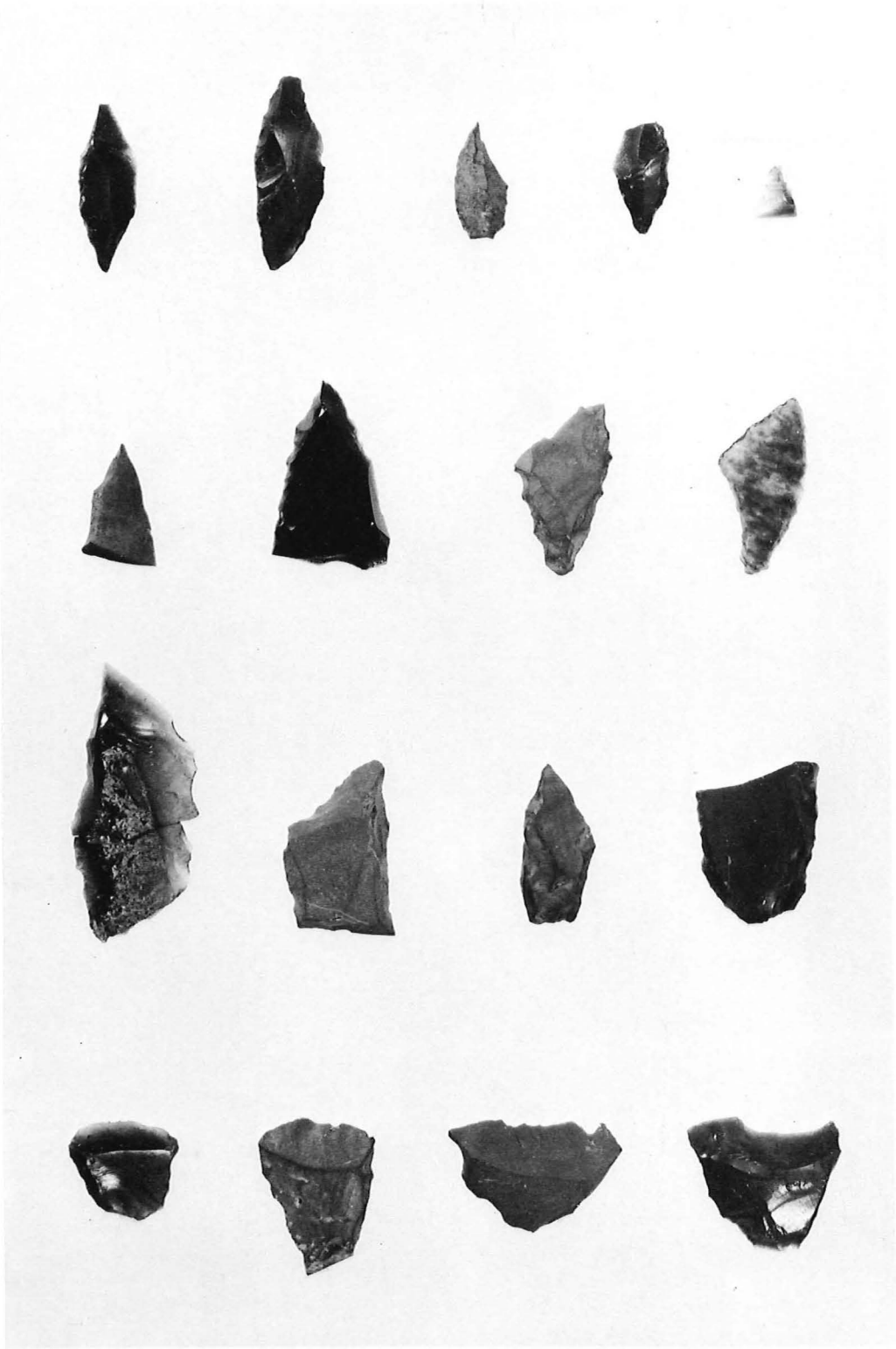


先土器時代・第Ⅱ層出土石器（２）―台形・台形様石器・尖頭器類（表）(1/1)

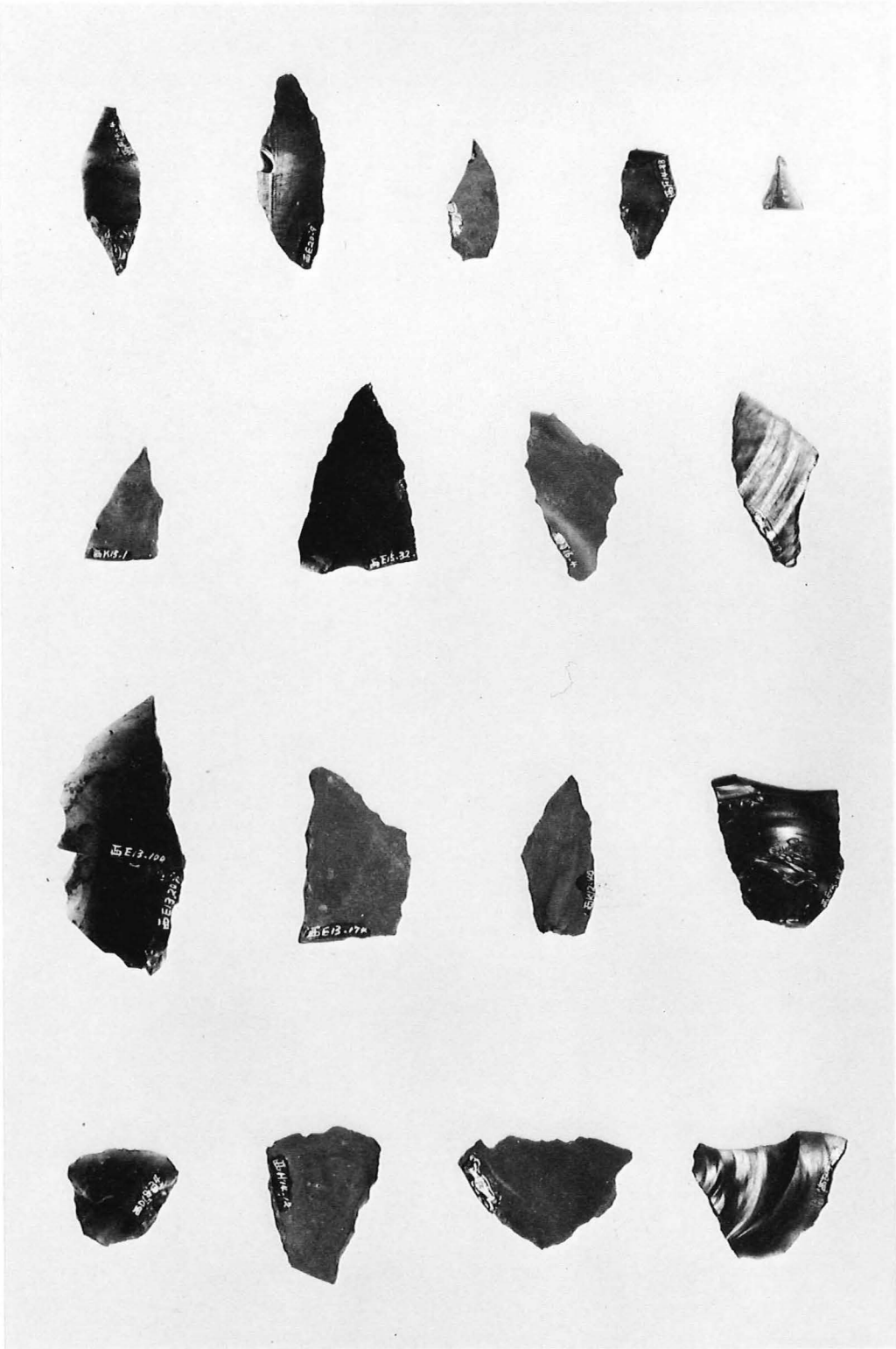
先土器時代・第Ⅱ層出土石器（２）―台形・台形様石器・尖頭器類（裏）(1/1)

先土器時代・第Ⅱ層出土石器（３）―尖頭器類・細石刃（表）（1/1）

先土器時代・第Ⅱ層出土石器（３）―尖頭器類・細石刃（裏）（1/1）



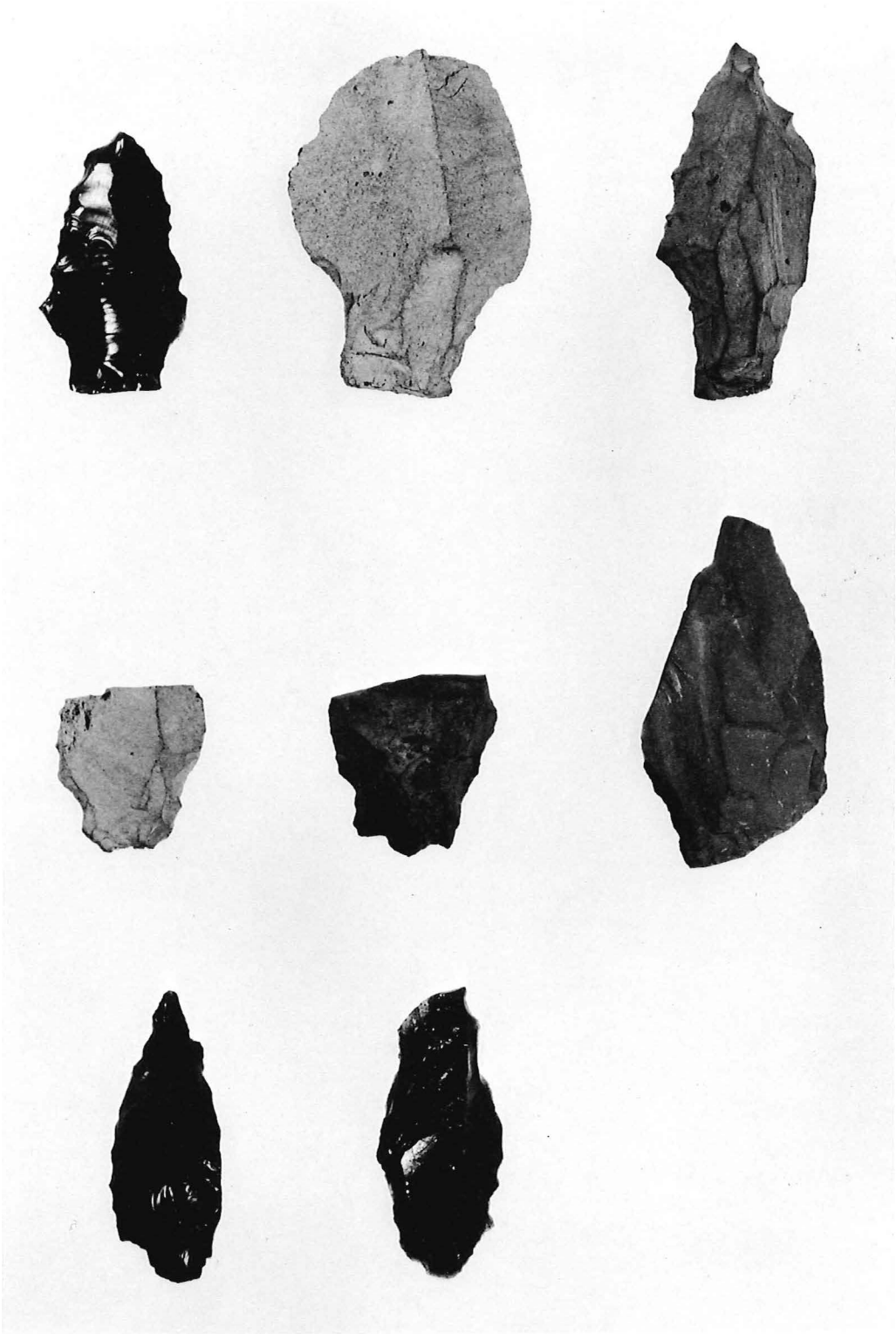
先土器時代・上層出土石器（１）―ナイフ形石器・台形石器（表）（1/1）



先土器時代・上層出土石器（１）ーナイフ形石器・台形石器（裏）（1/1）

先土器時代・上層出土石器（２）―台形様石器（表）（1/1）

先土器時代・上層出土石器（２）―台形様石器（裏）（1/1）

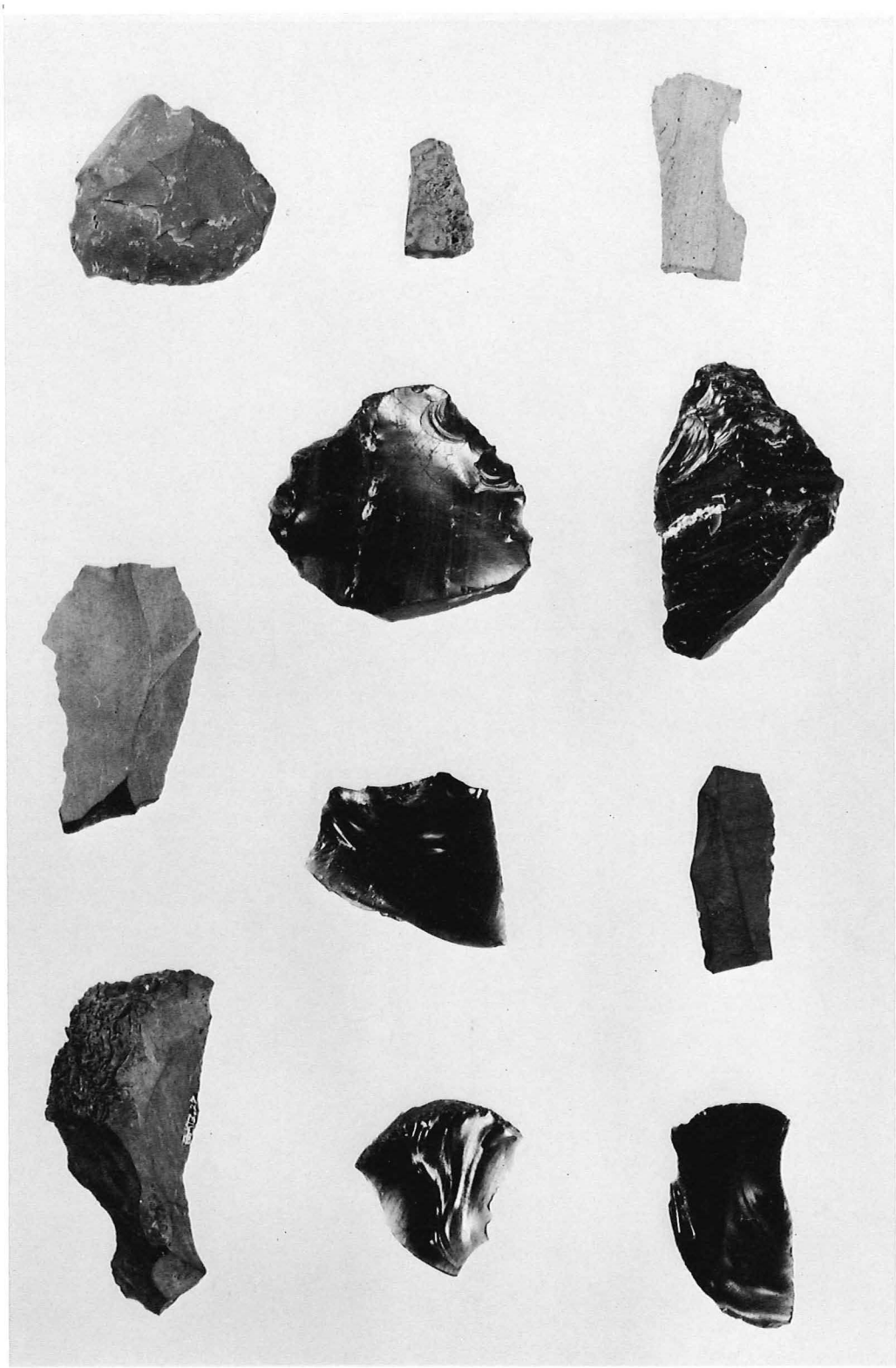


先土器時代・上層出土石器（３）―尖頭器類（表）（1/1）

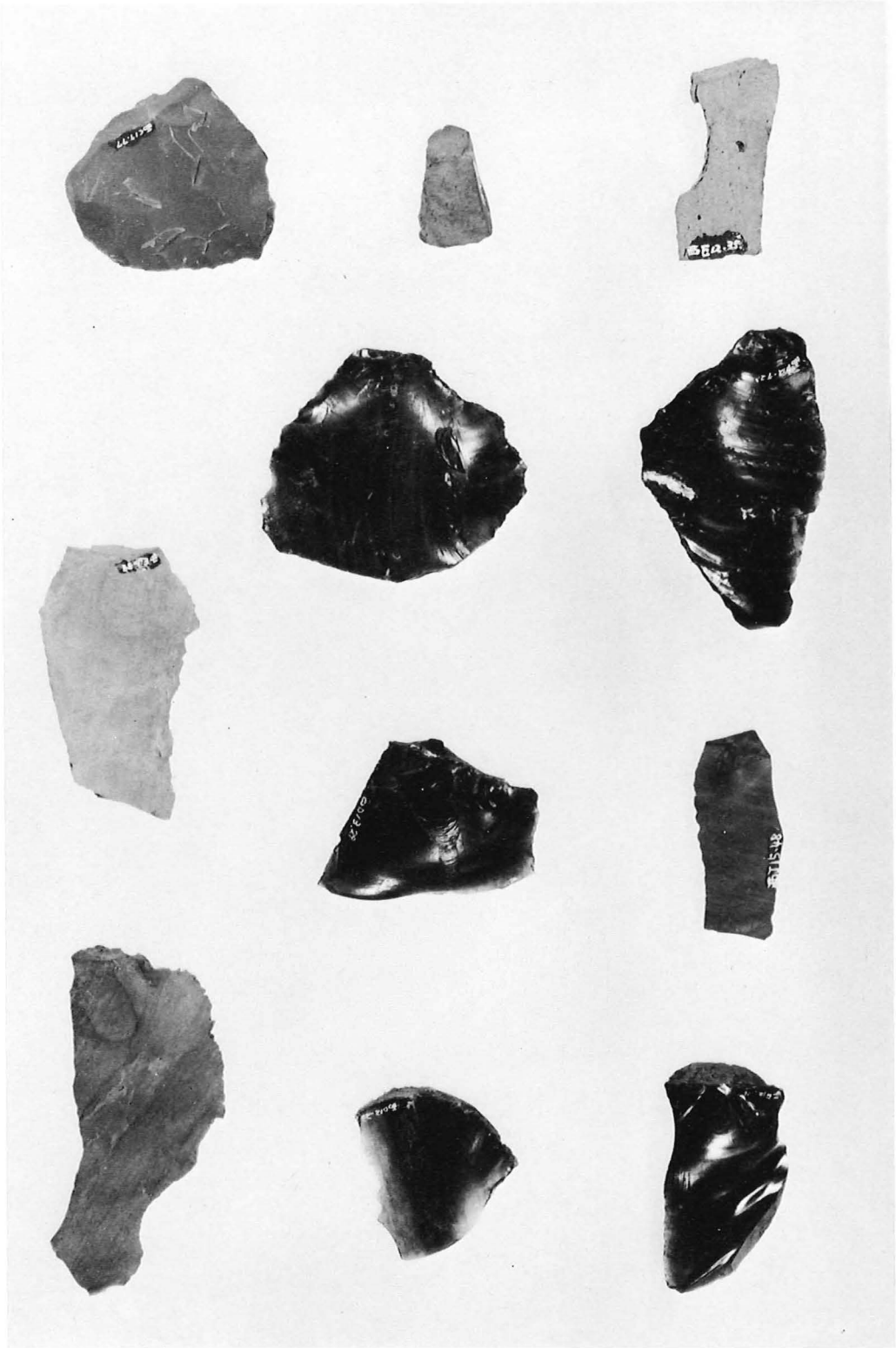
先土器時代・上層出土石器（３）―尖頭器類（表）（1/1）

先土器時代・上層出土石器（４）—尖頭器類（表）（1/1）

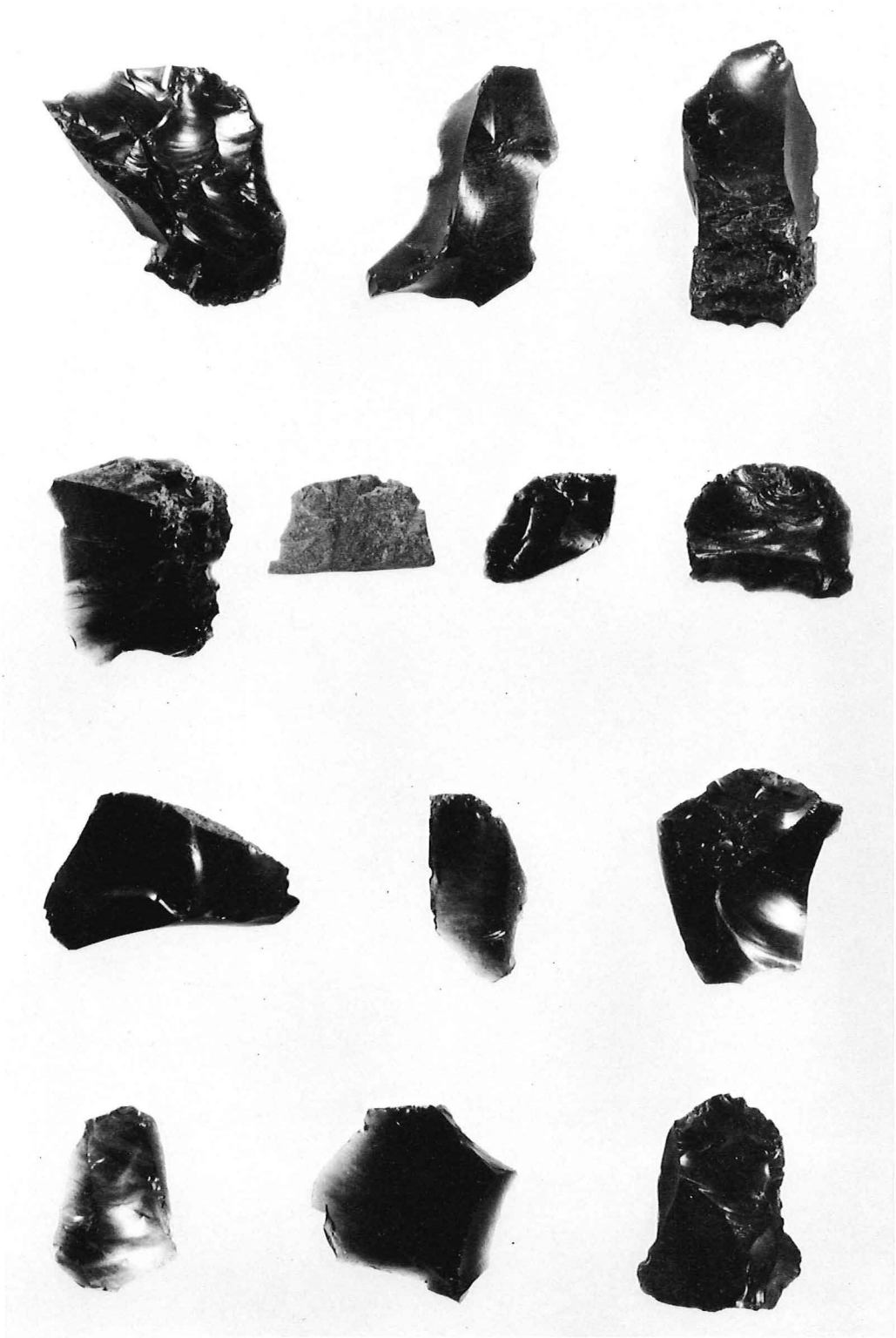
先土器時代・上層出土石器（４）―尖頭器類（裏）（1/1）



先土器時代・上層出土石器（５）―掻器・削器・使用痕ある剝片（表）（1/1）

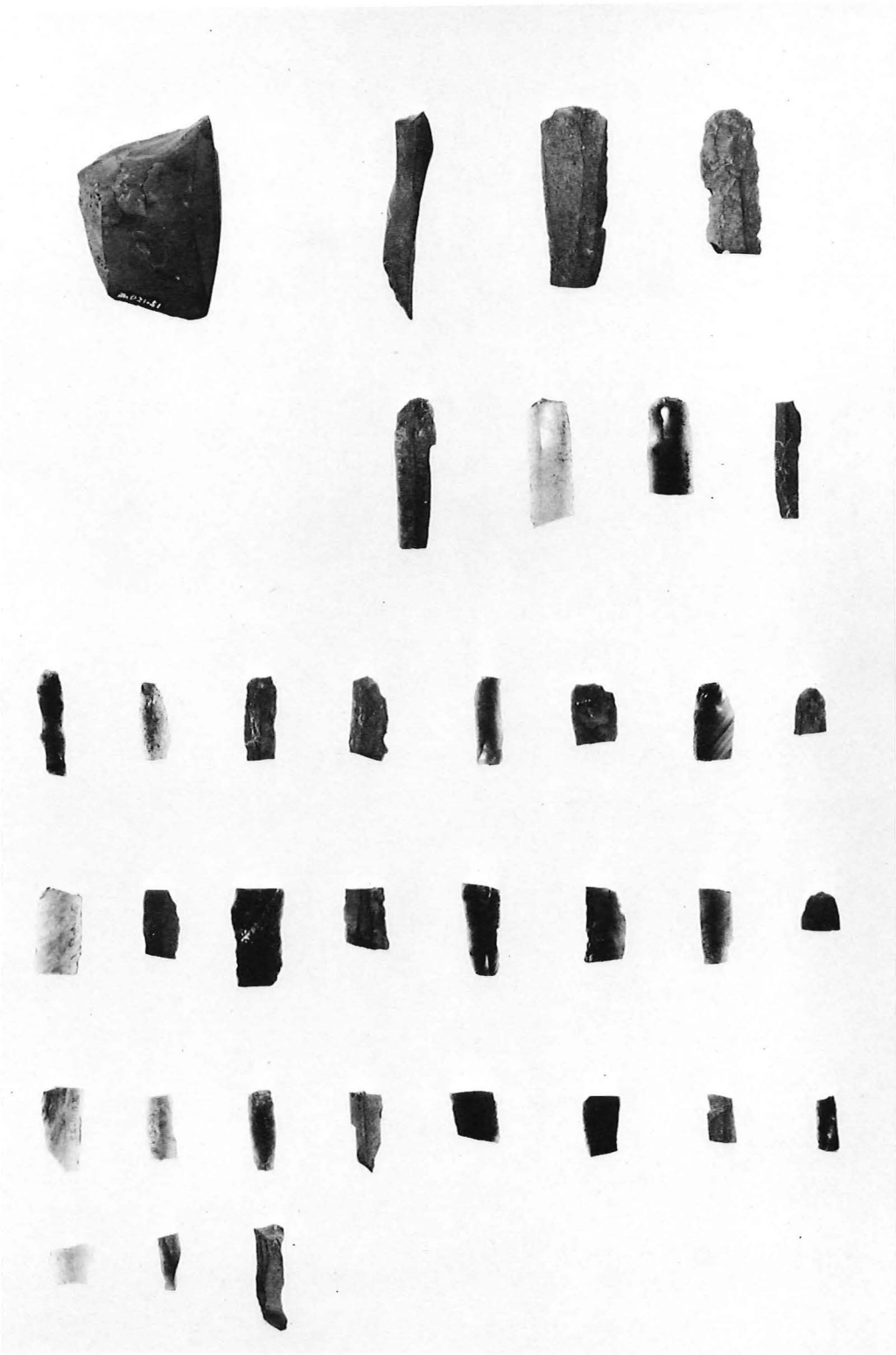


先土器時代・上層出土石器（５）―掻器・削器・使用痕ある剝片（裏）（1/1）



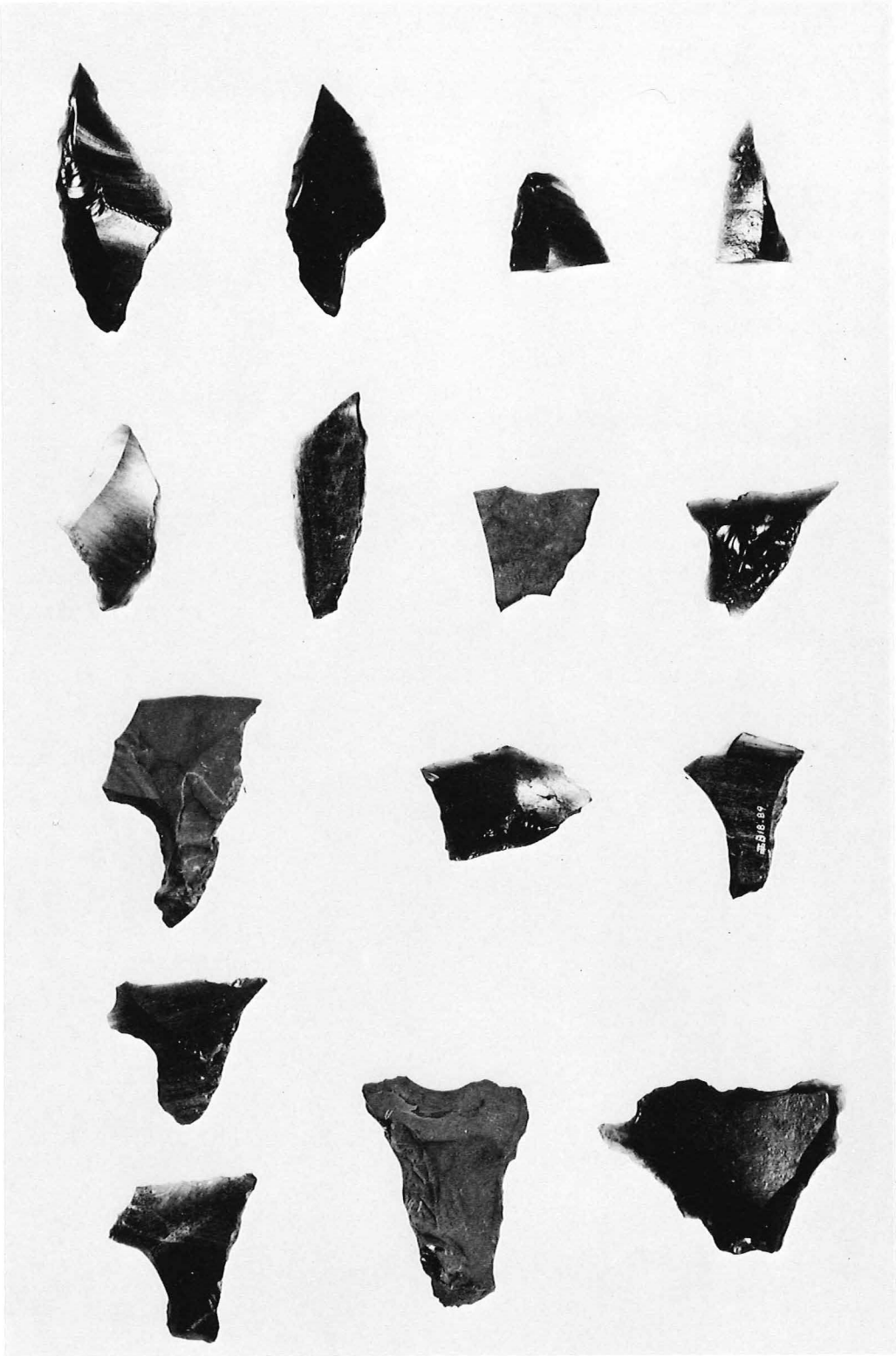
先土器時代・上層出土石器（６）―剝片（表）（1/1）

先土器時代・上層出土石器（６）―剝片（裏）（1/1）

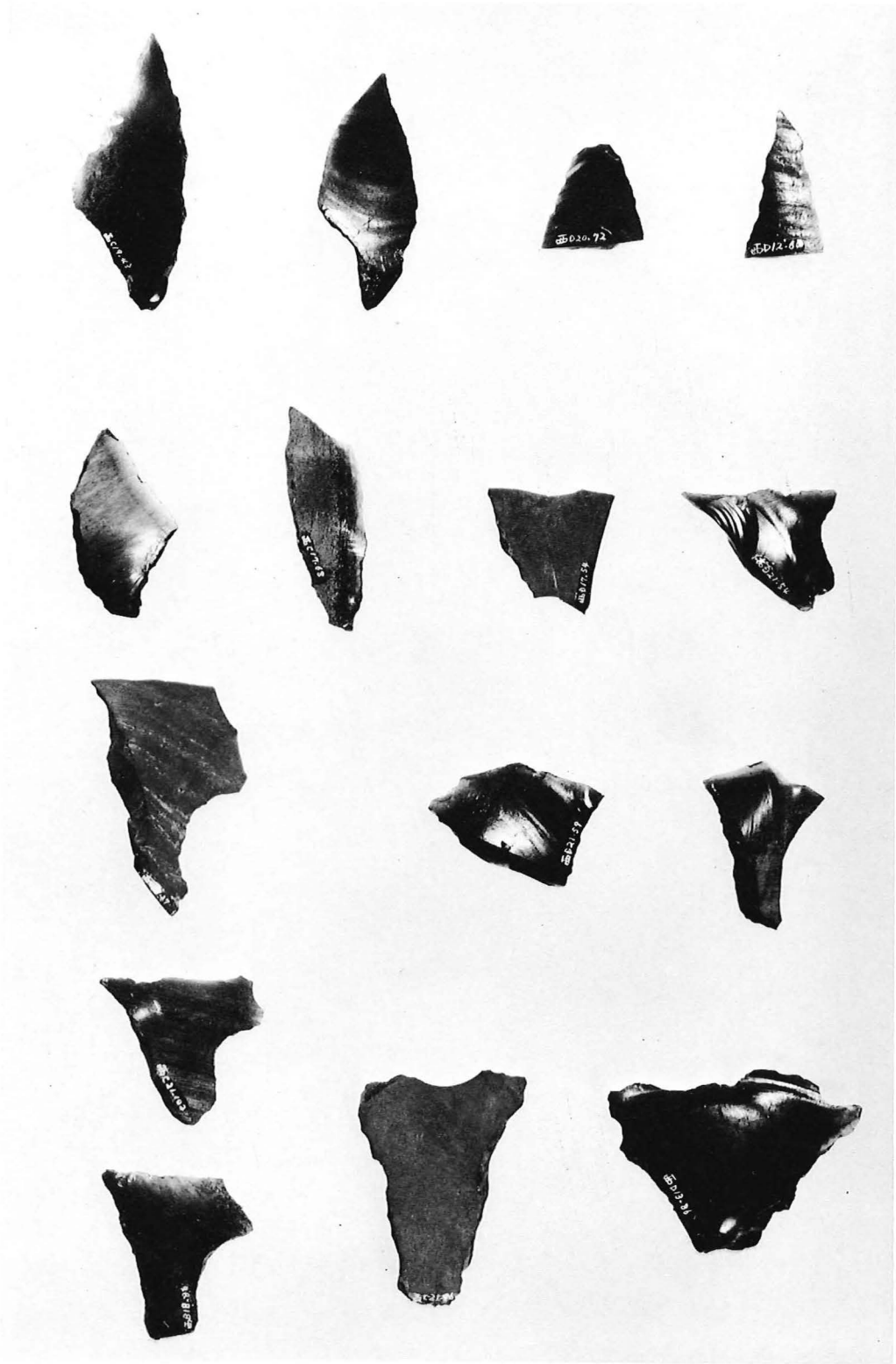


先土器時代・上層出土石器（７）―細石核・細石刃（表）（1/1）

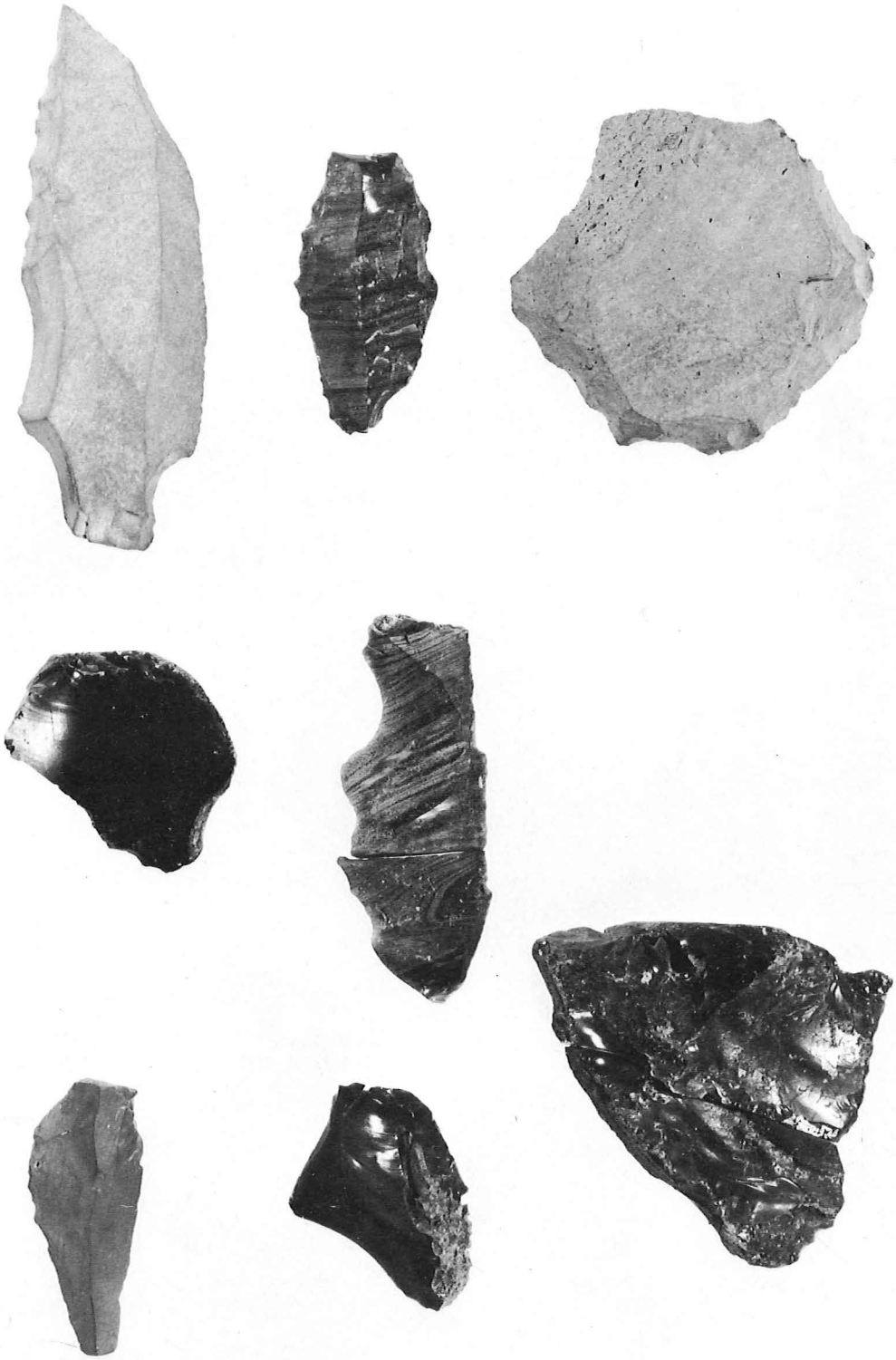
先土器時代・上層出土石器(７)―細石核・細石刃（裏）(1/1)



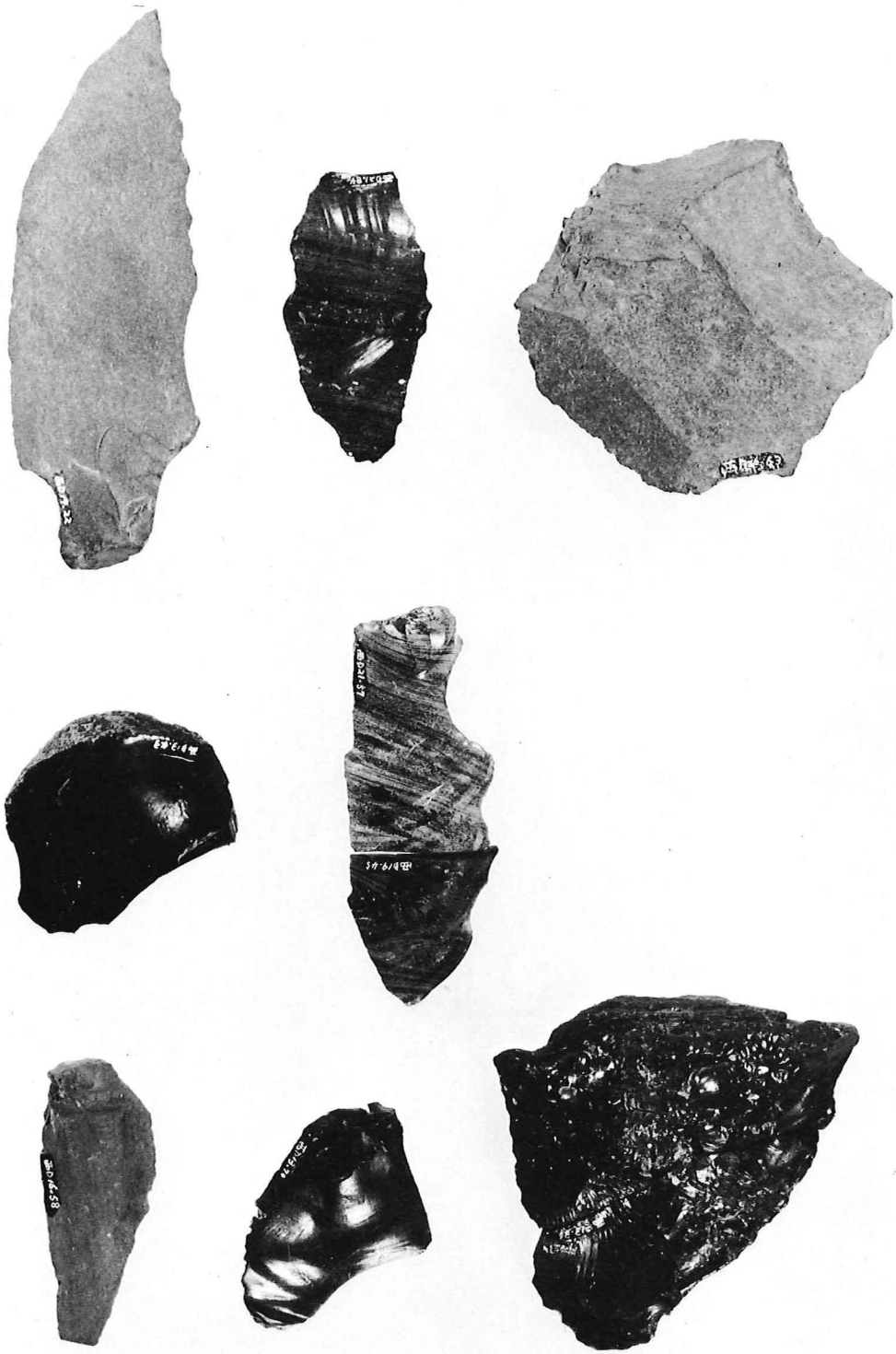
先土器時代・下層出土石器（１）―ナイフ形石器・台形・台形様石器（表）（1/1）



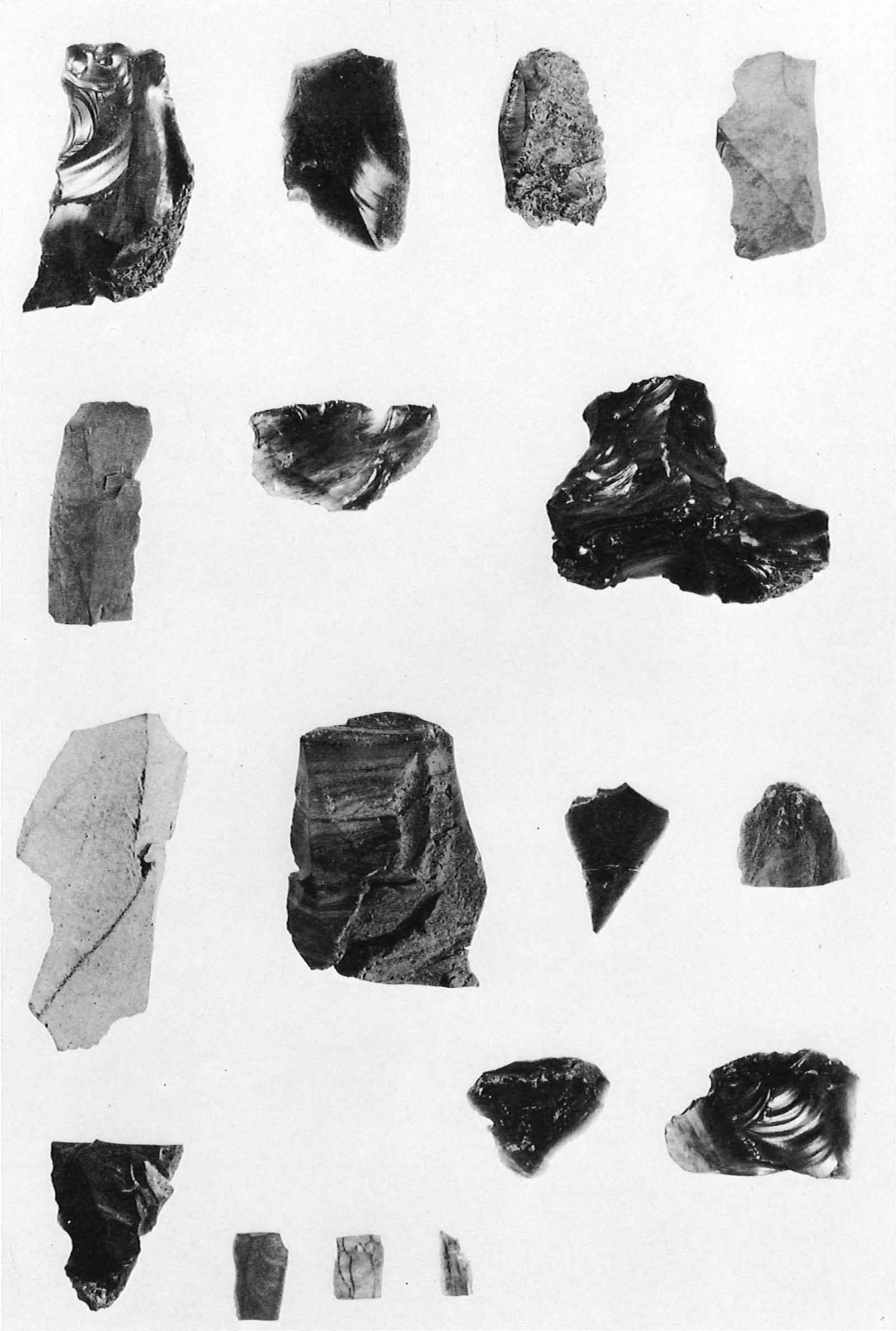
先土器時代・下層出土石器（１）―ナイフ形石器・台形・台形様石器（裏）（1/1）



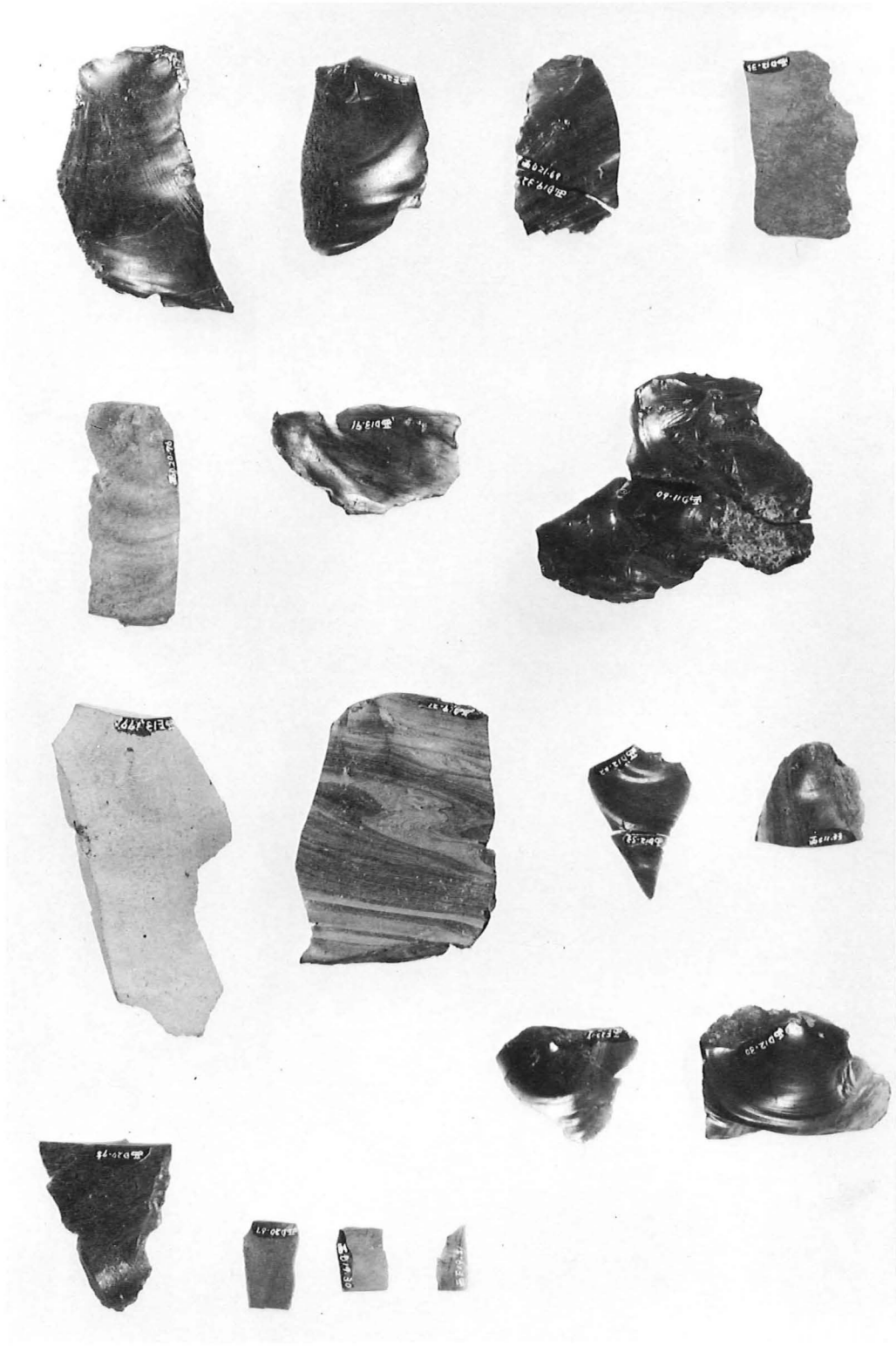
先土器時代・下層出土石器（２）―尖頭器類・掻器・使用痕ある剝片（表）（1/1）



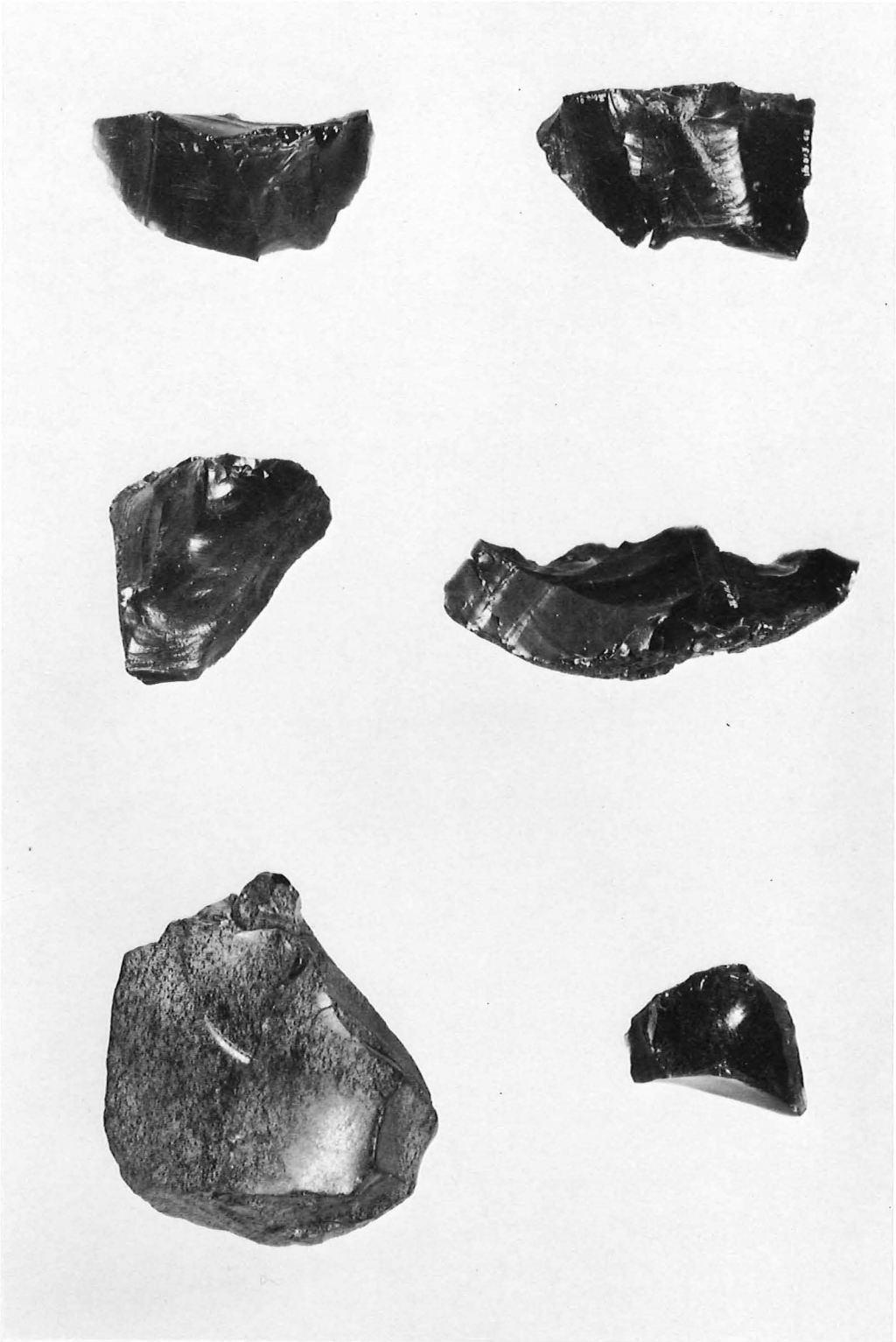
先土器時代・下層出土石器（２）―尖頭器類・掻器・使用痕ある剝片（裏）（1/1）



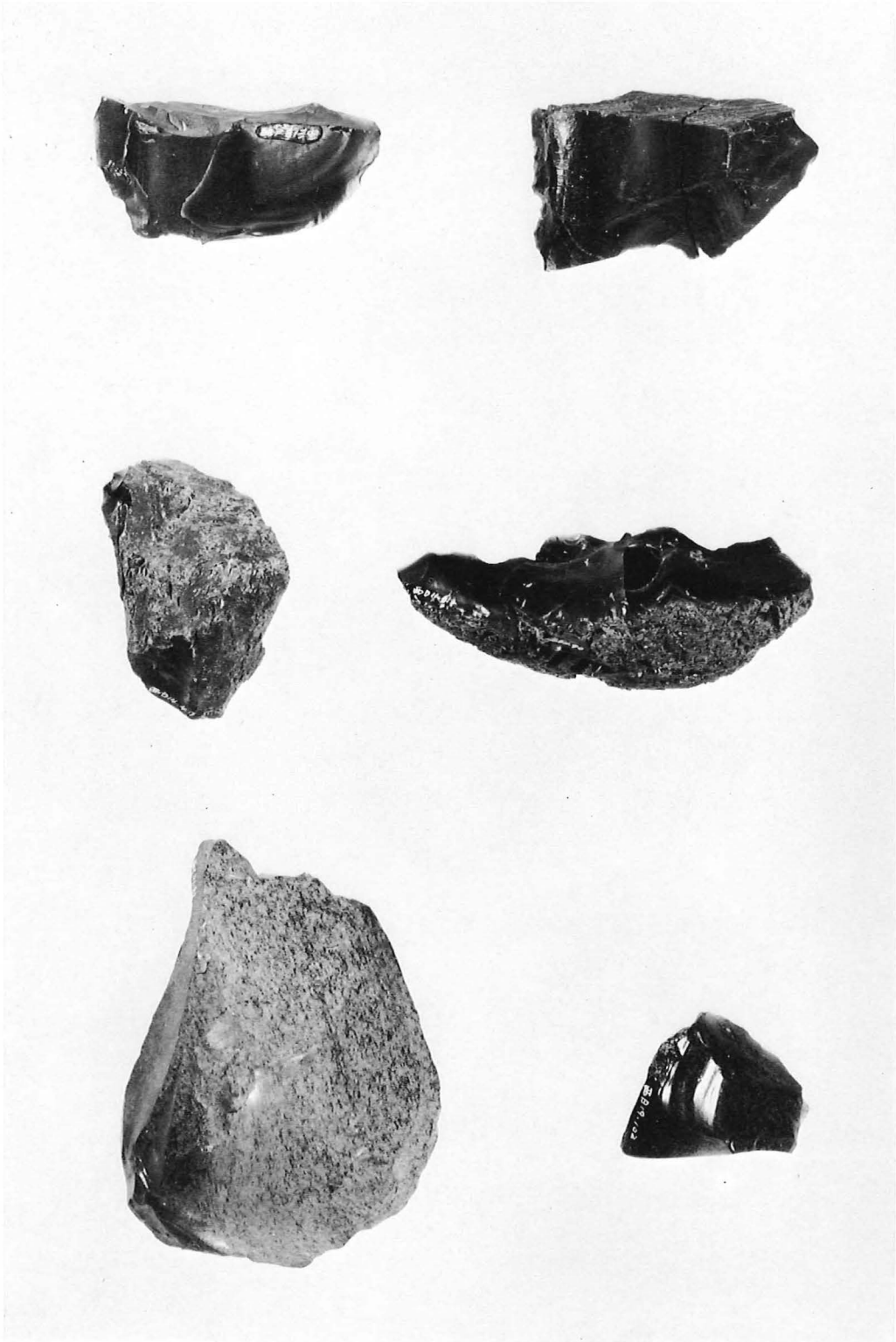
先土器時代・下層出土石器（３）―剝片・細石刃（表）(1/1)



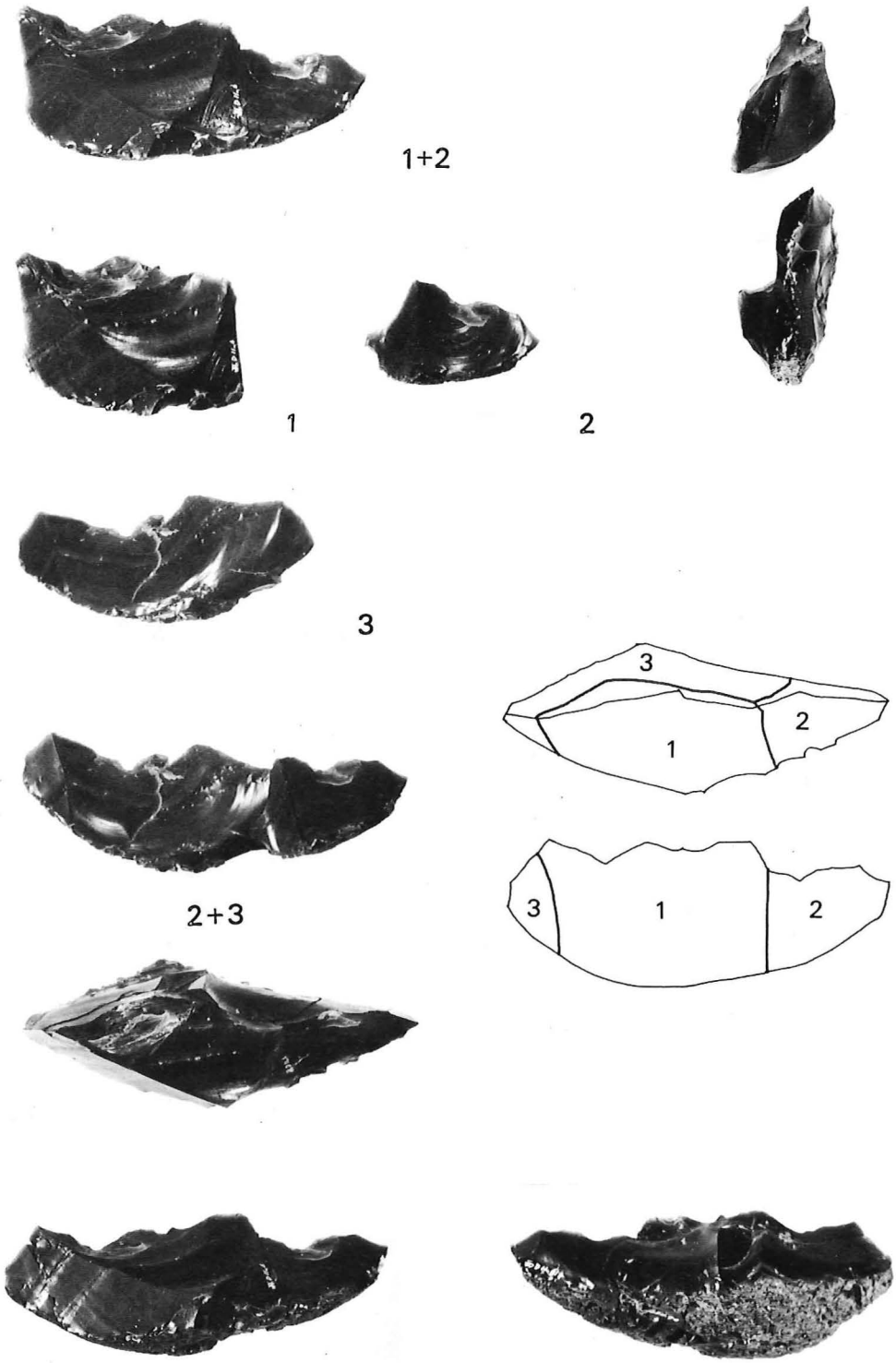
先土器時代・下層出土石器（３）―剝片・細石刃（裏）(1/1)



先土器時代・下層出土石器（４）―石核（表）（1/1）



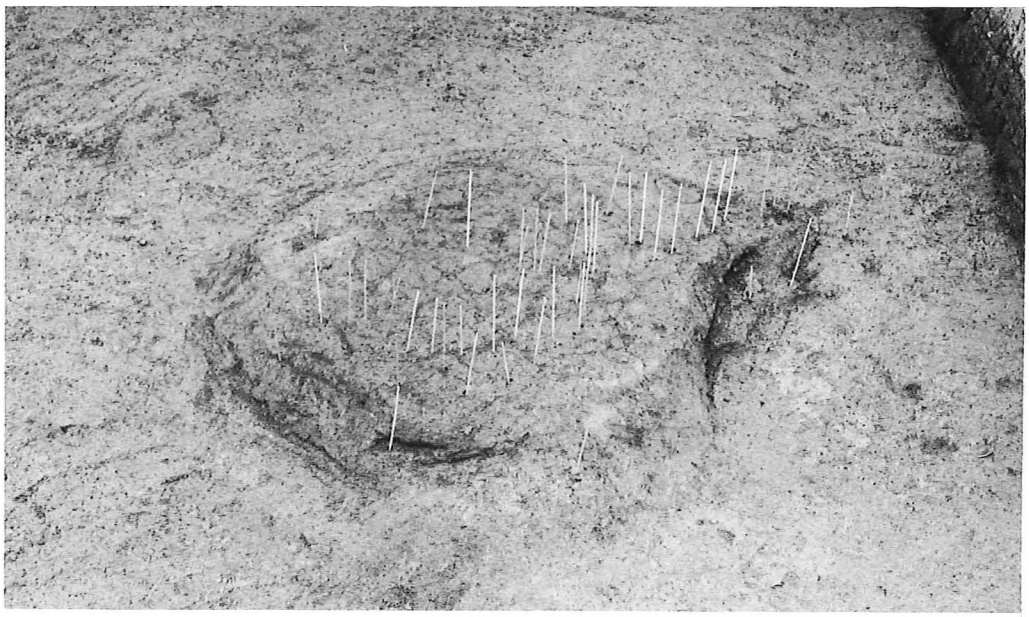
先土器時代・下層出土石器（４）―石核（裏）（1/1）



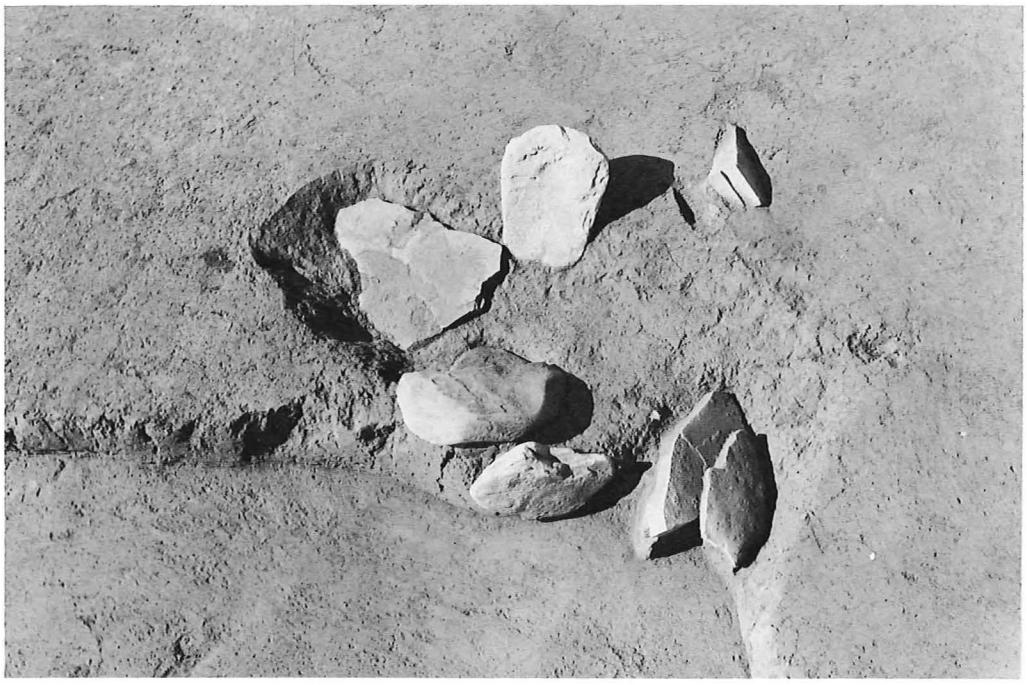
先土器時代・下層出土の遺物接合資料―石核・三稜尖頭器（2/3）

1号炉址（炭化物集中遺構）
（K—13区）

2号炉址（炭化物集中遺構）
（N—15区）



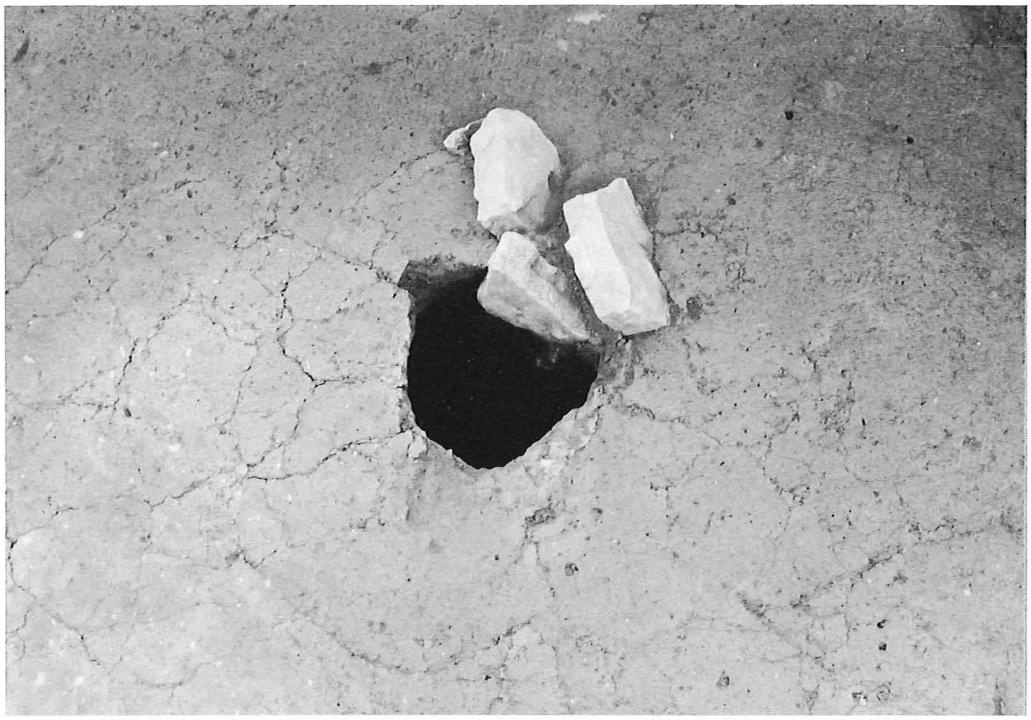
3号炉址（石組炉）（Ｉ・Ｊ—13・14区）



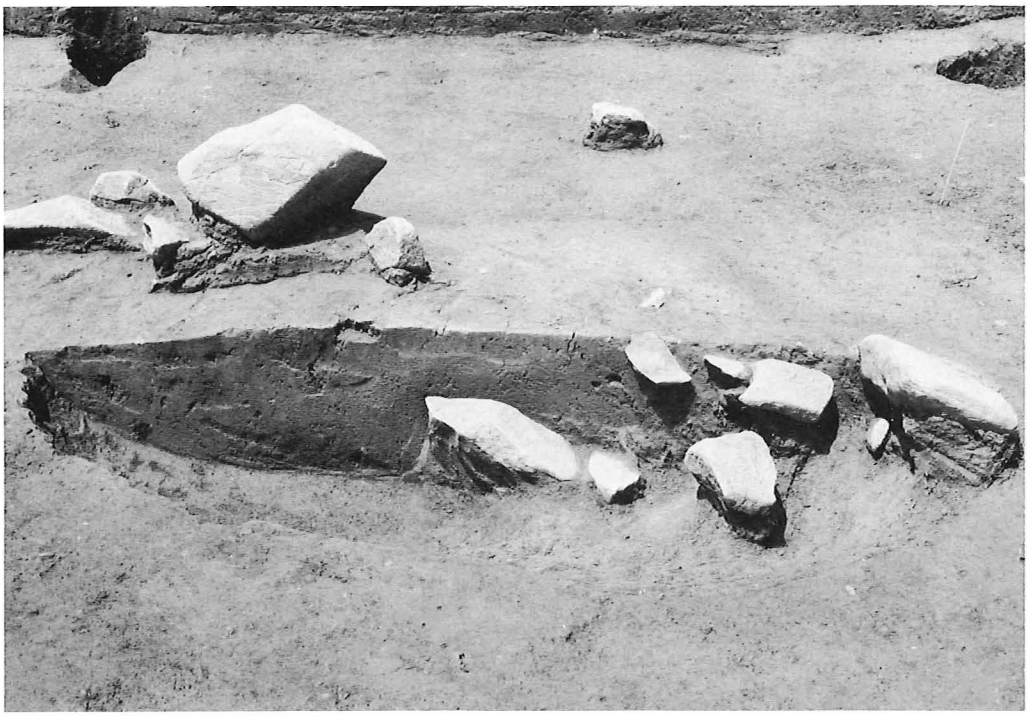
3号炉址・石組状況

１号集石遺構（Ｄ・Ｅ―20・21区）

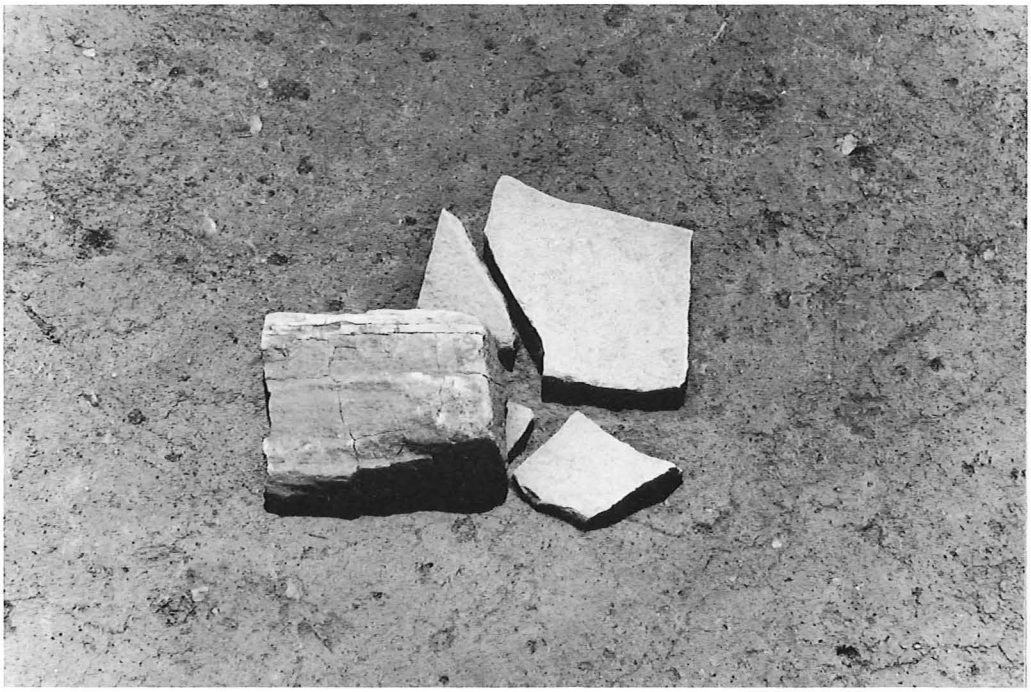
１号集石遺構（Ｄ・Ｅ―20・21区）



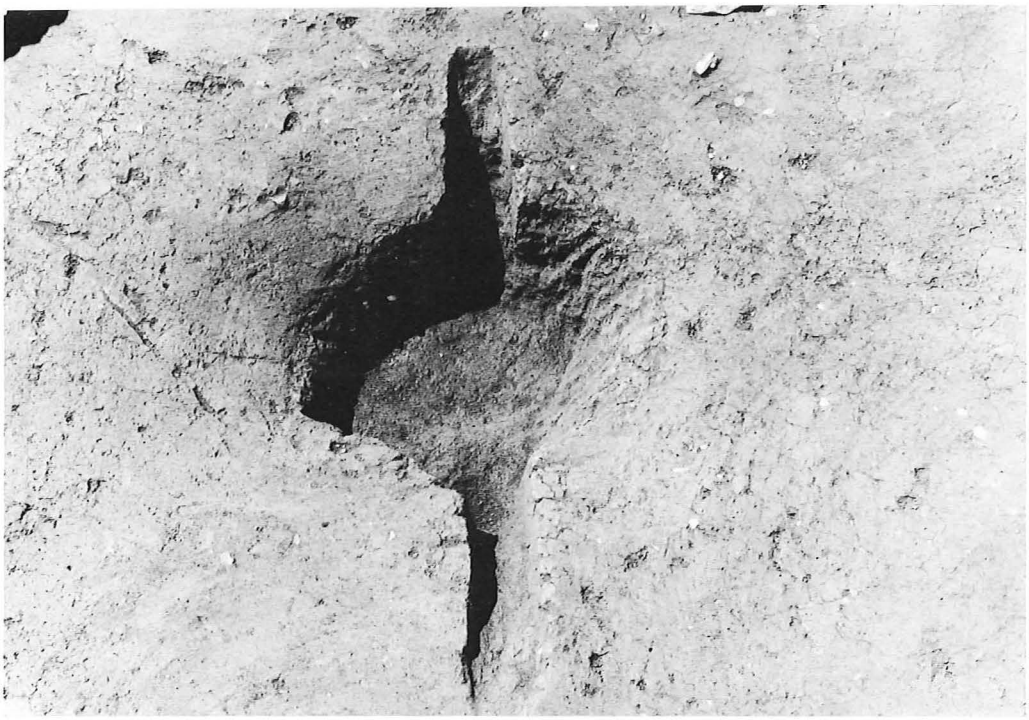
2号集石遺構（Ｉ―15区）



3号集石遺構・断面（Ｂ―21区）

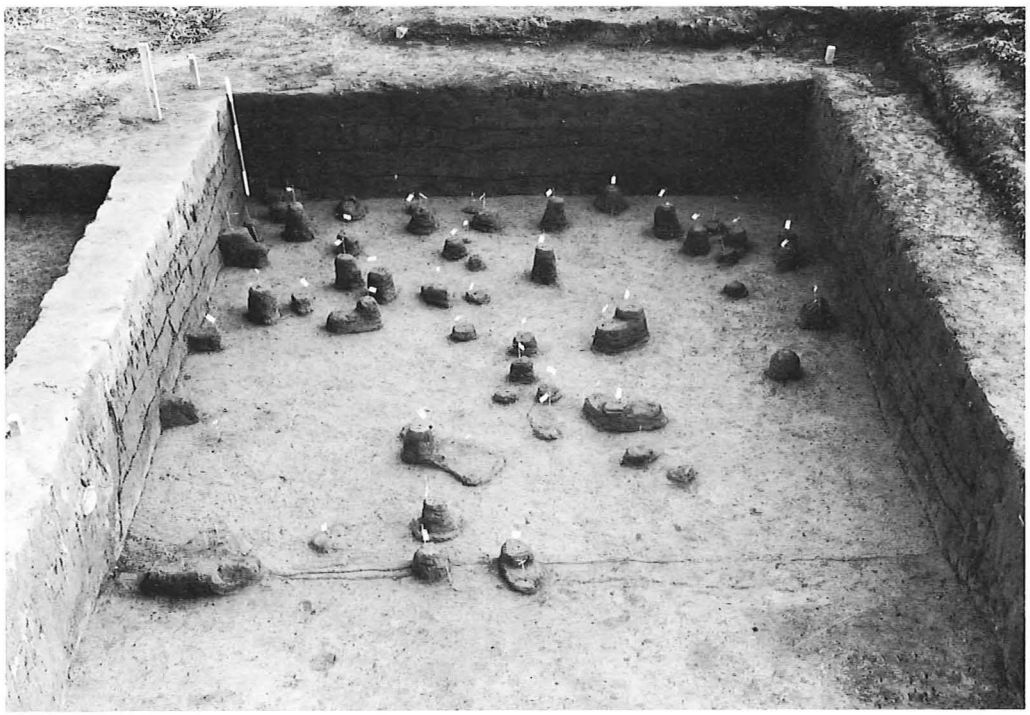


4号集石遺構（C—17区）



4号集石遺構・土壙部分

6号集石遺構（B—17区）

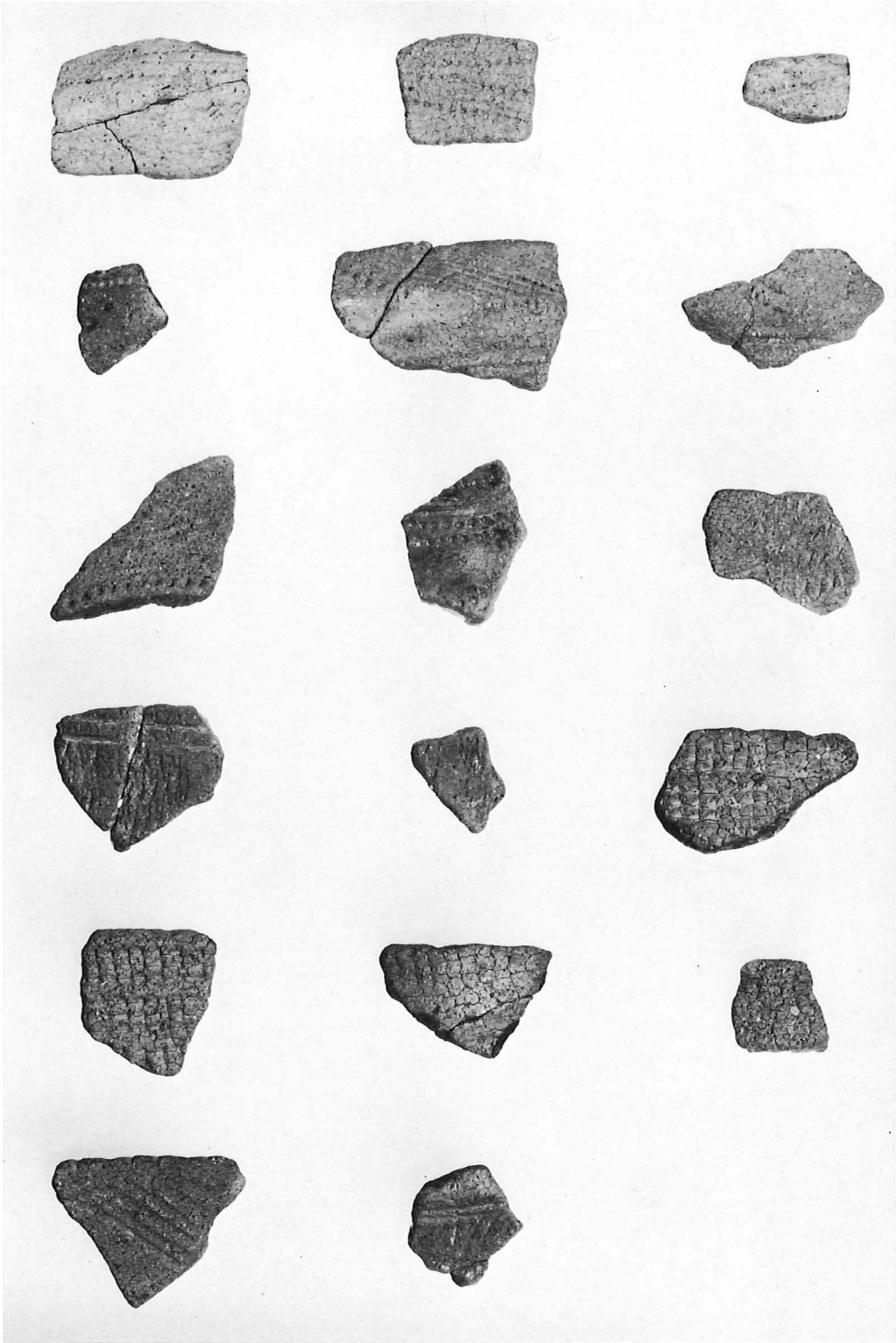


縄文時代・第Ⅱ・Ⅲ層遺物出土状況（K—12区）

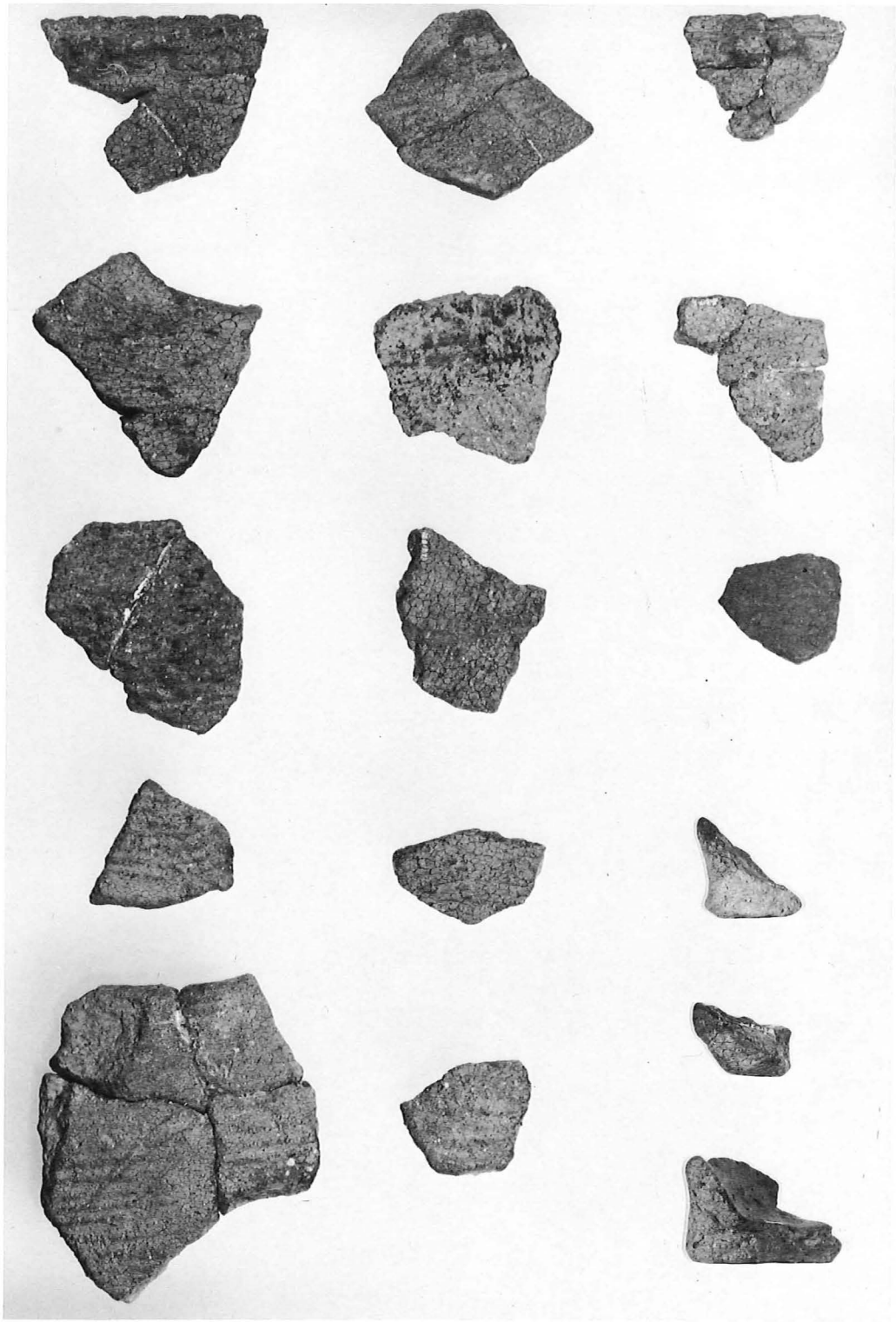
溝状遺構（Ｄ―13・14，Ｅ・Ｆ―12・13区）

溝状遺構内覆土

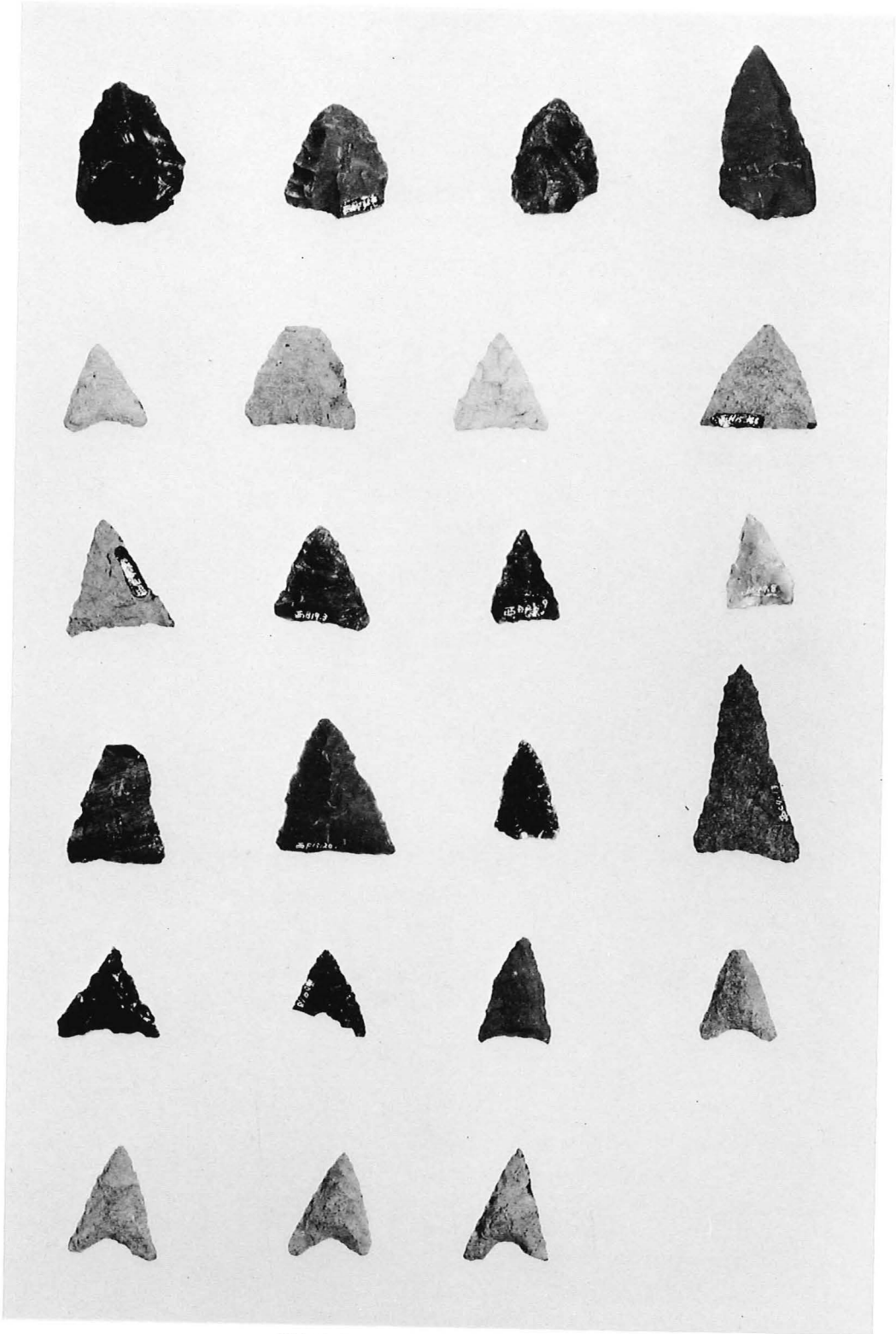
縄文時代の土器―押型文土器（1/2）



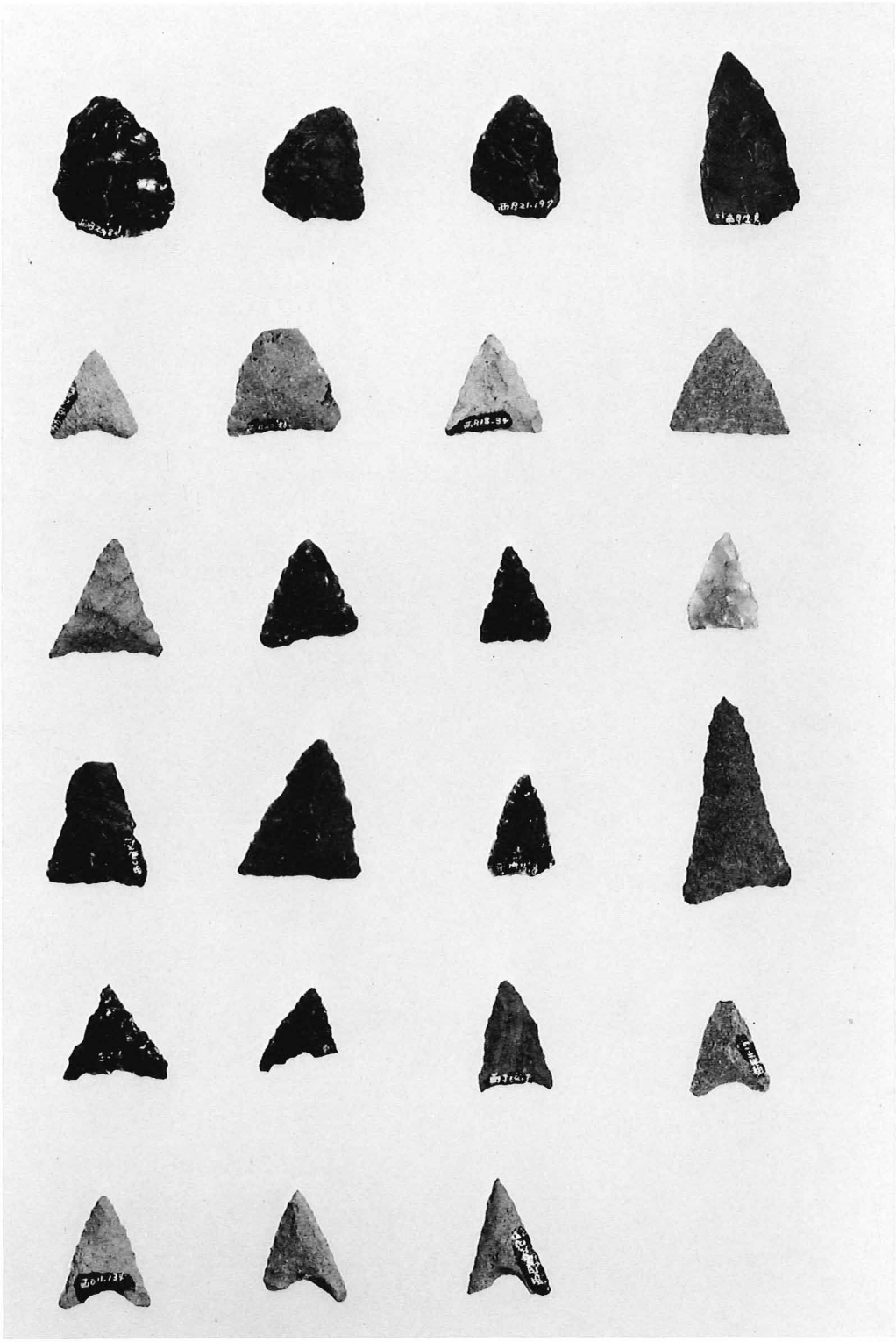
縄文時代の土器―塞ノ神式土器（1/2）



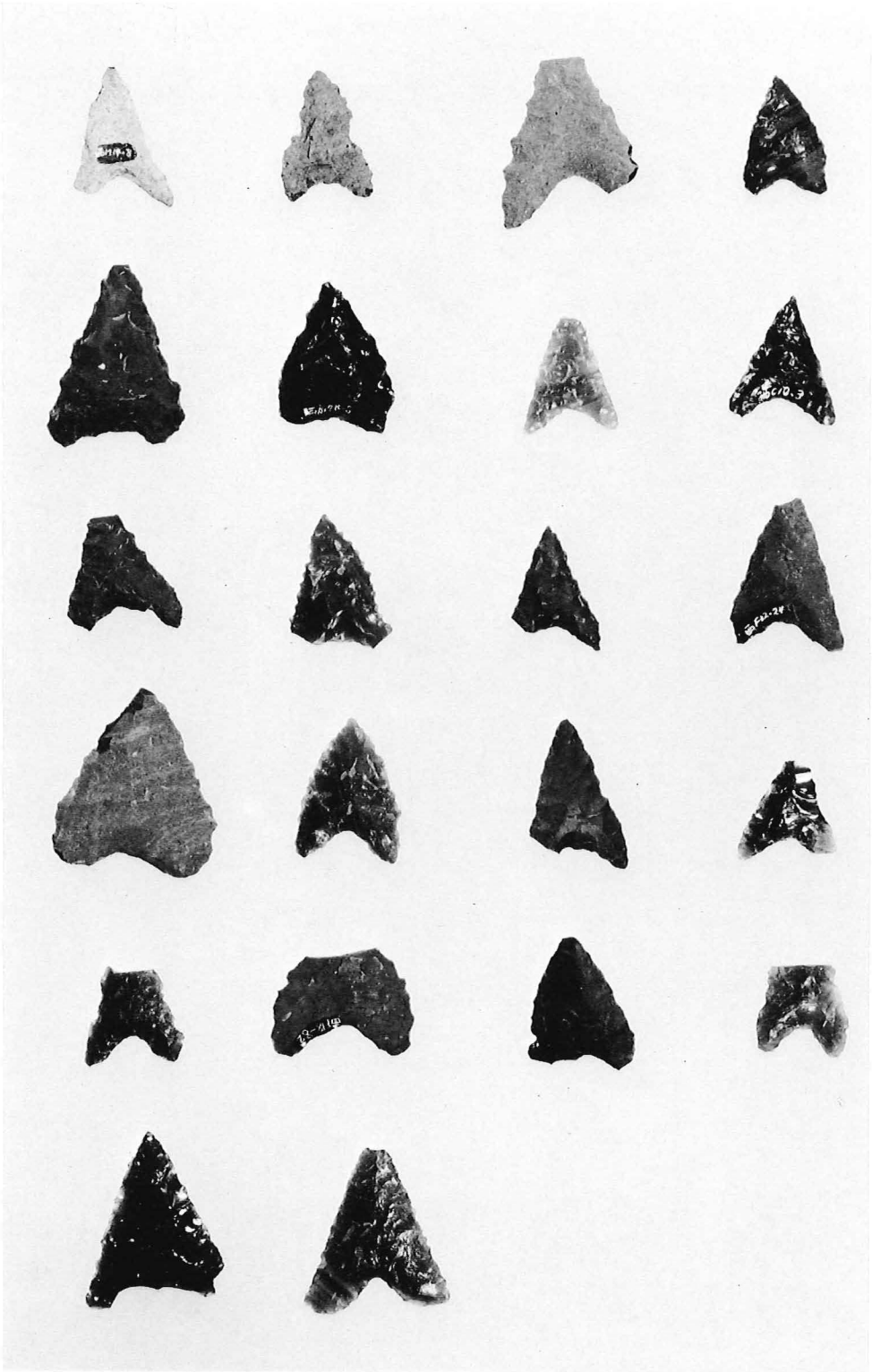
縄文時代の土器ー貝殻条痕文土器（轟式系土器）・その他の土器（1/2）



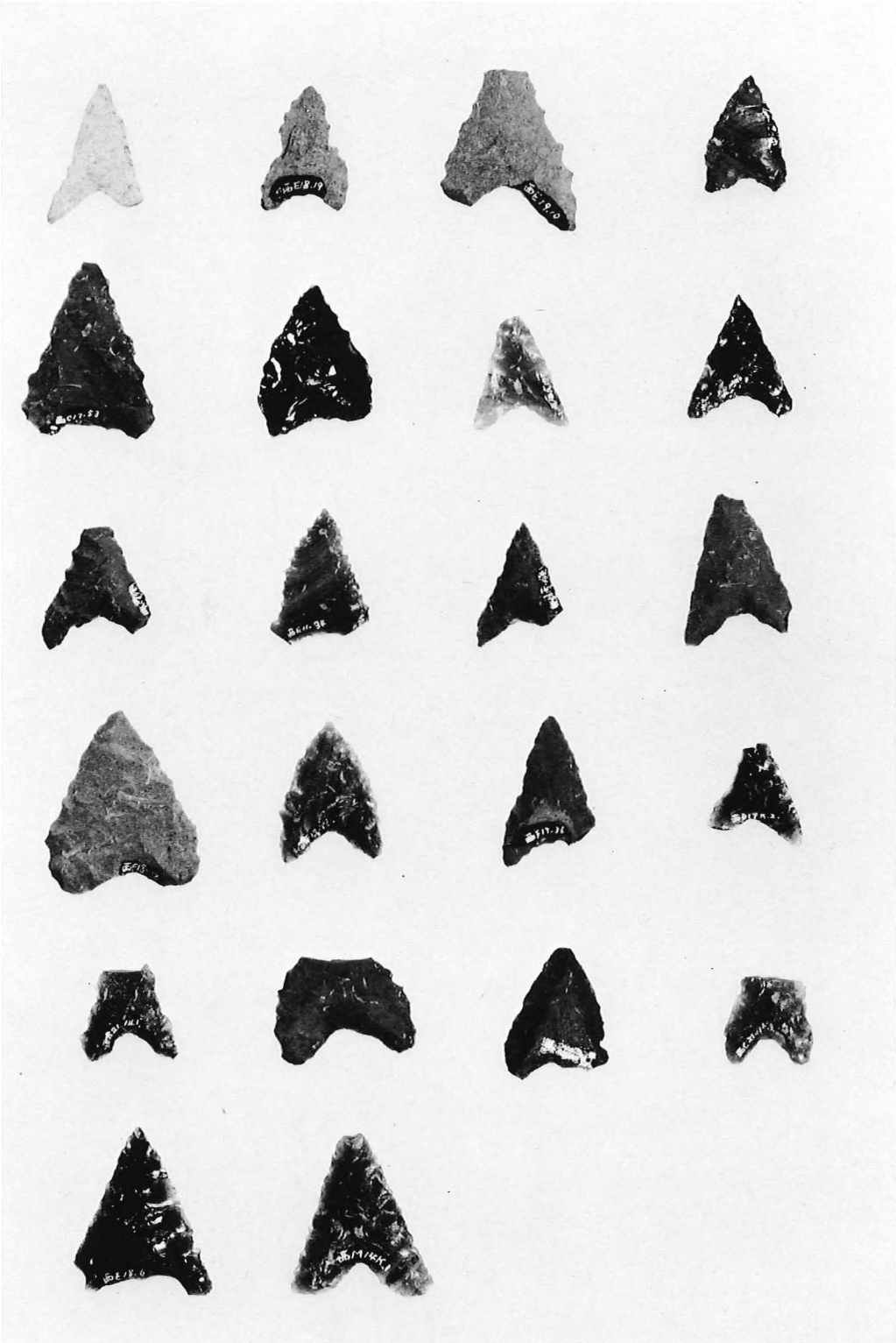
縄文時代の石器―石鏃（１）（表）（1/1）



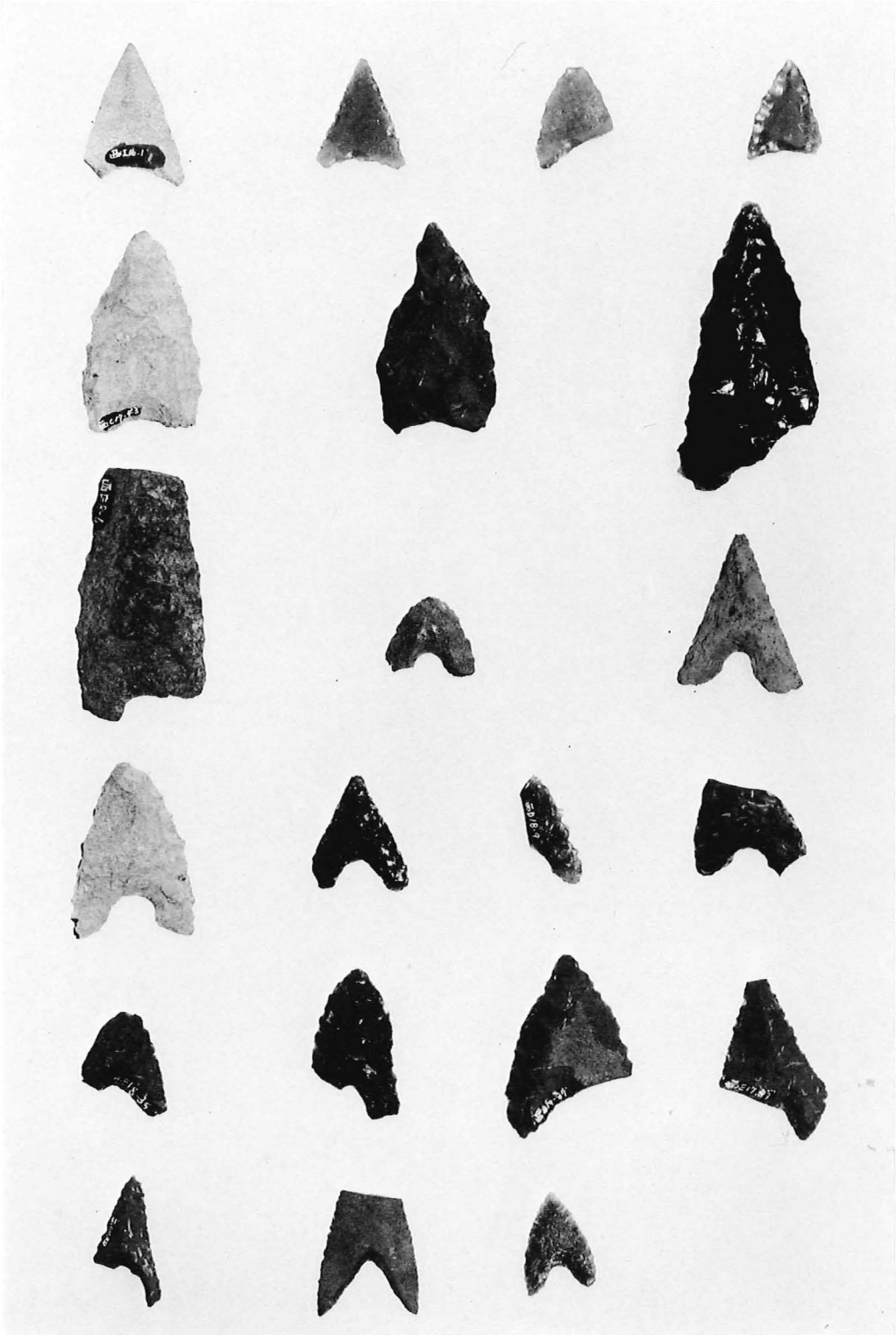
縄文時代の石器―石鏃（１）（裏）（1/1）



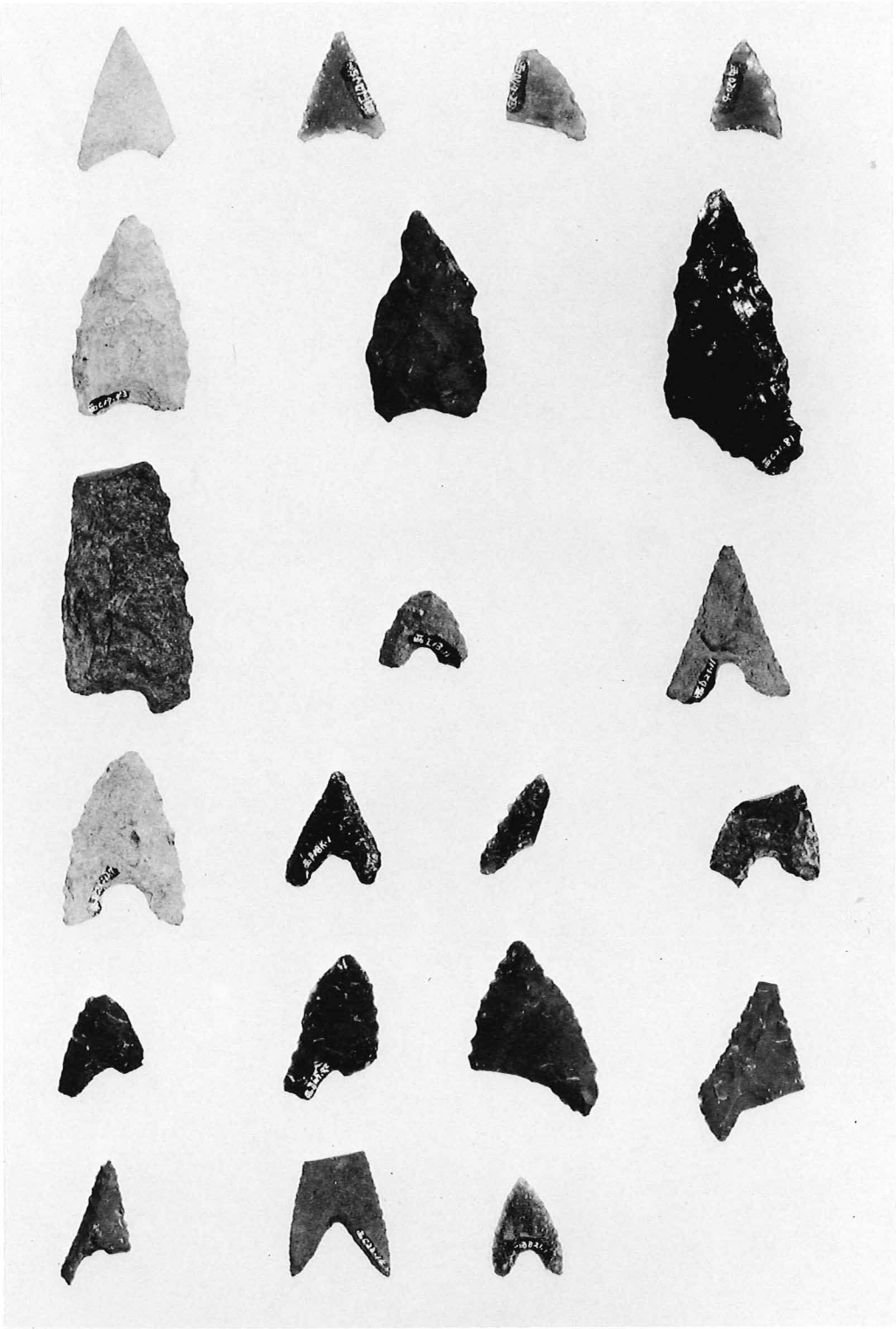
縄文時代の石器―石鏃（２）（表）（1/1）



縄文時代の石器―石鏃（２）（裏）（1/1）



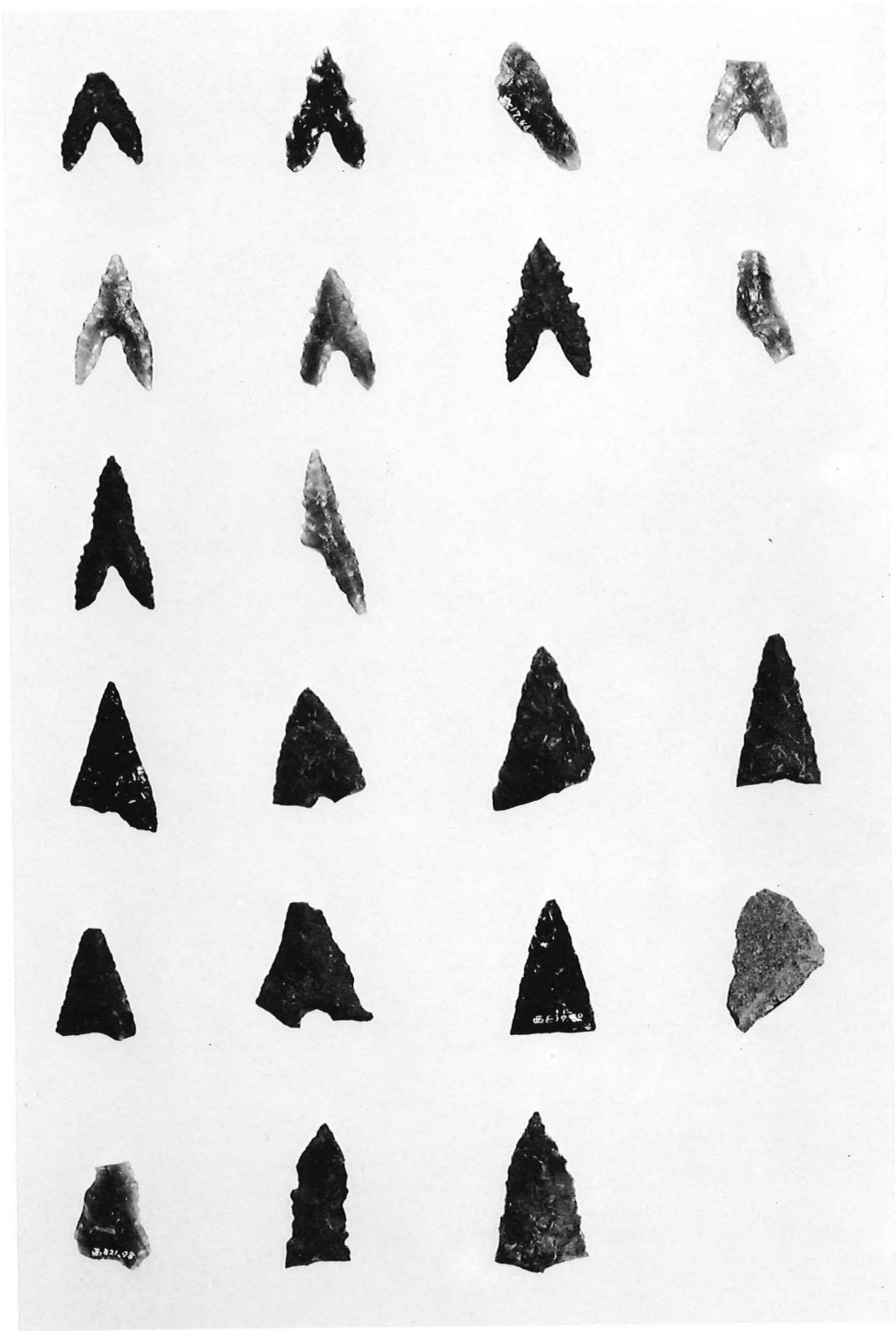
縄文時代の石器―石鏃（３）（表）（1/1）



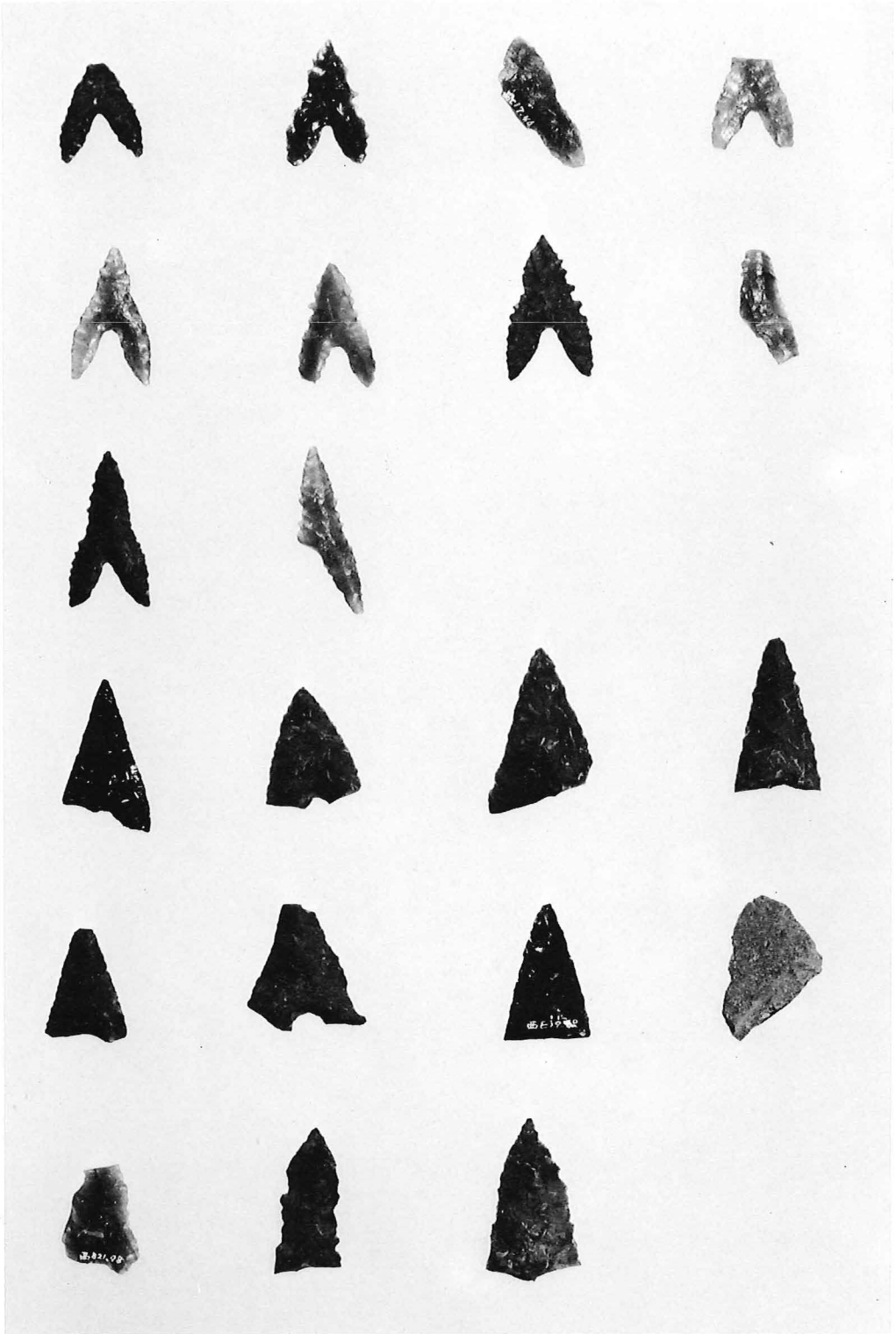
縄文時代の石器―石鏃（３）（裏）（1/1）

縄文時代の石器―石鏃（４）（表）（1/1）

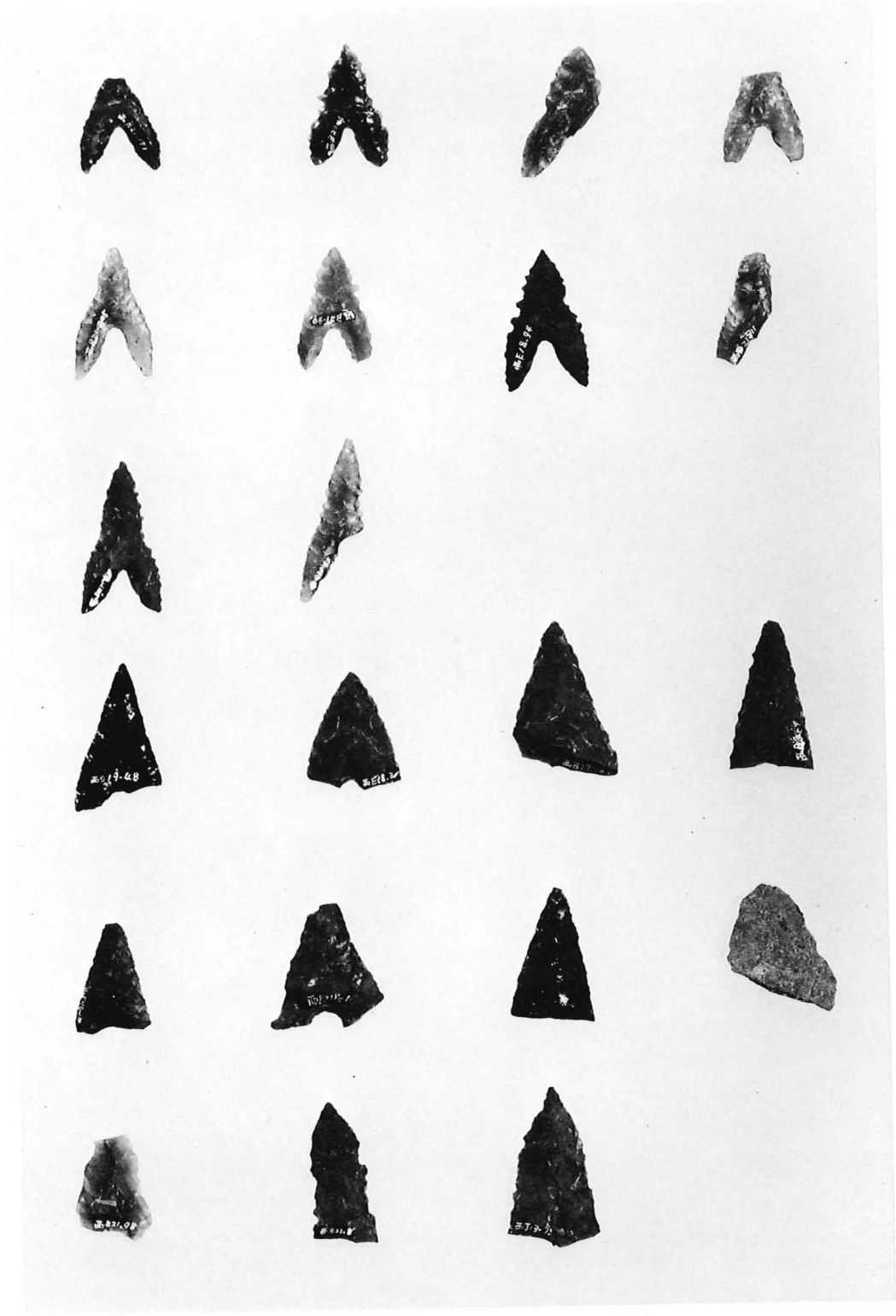
縄文時代の石器―石鏃（４）（裏）（1/1）



縄文時代の石器―石鏃（５）（表）（1/1）



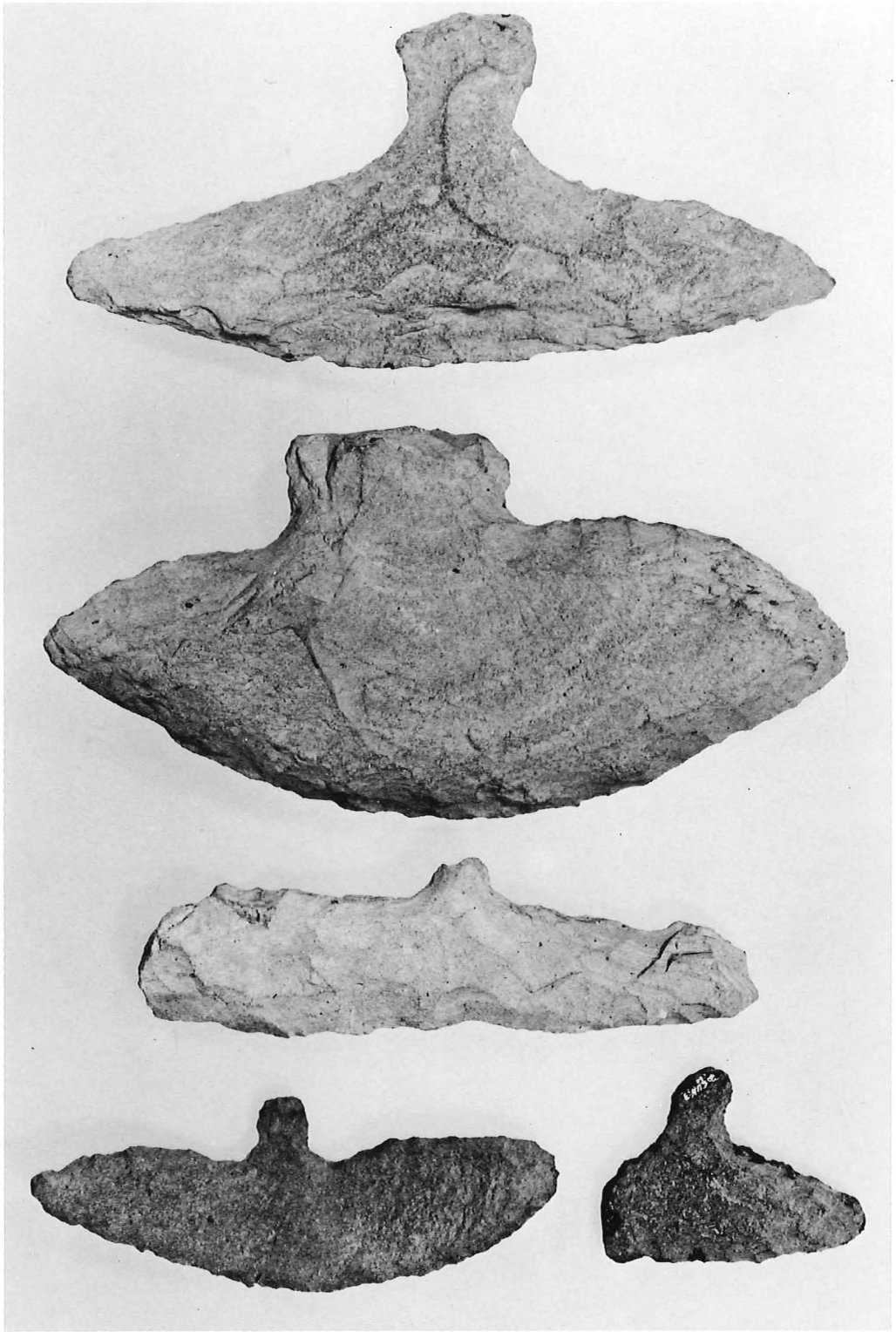
縄文時代の石器―石鏃（５）（表）（1/1）



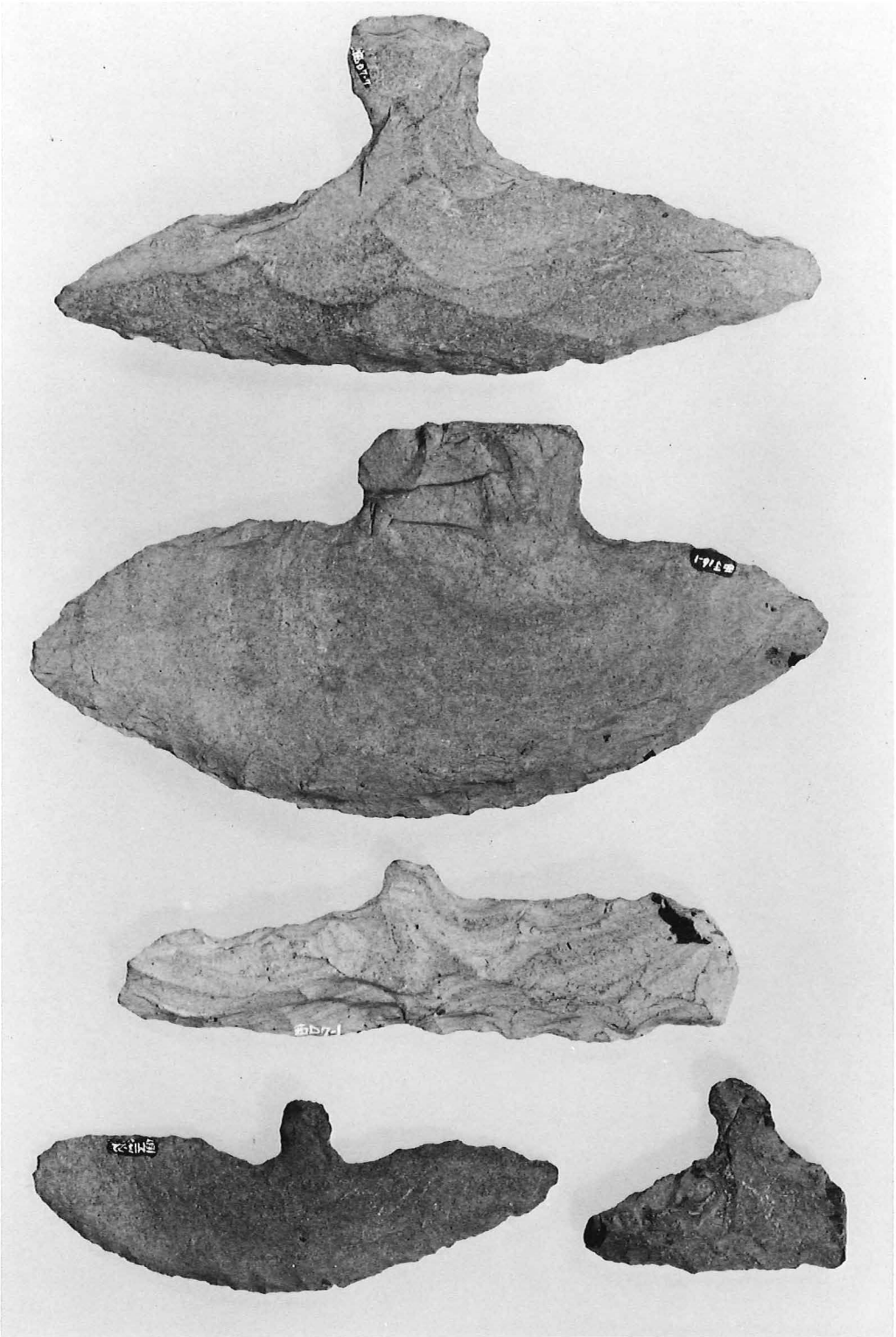
縄文時代の石器―石鏃（５）（裏）（1/1）

縄文時代の石器―石鏃（６）（表）（1/1）

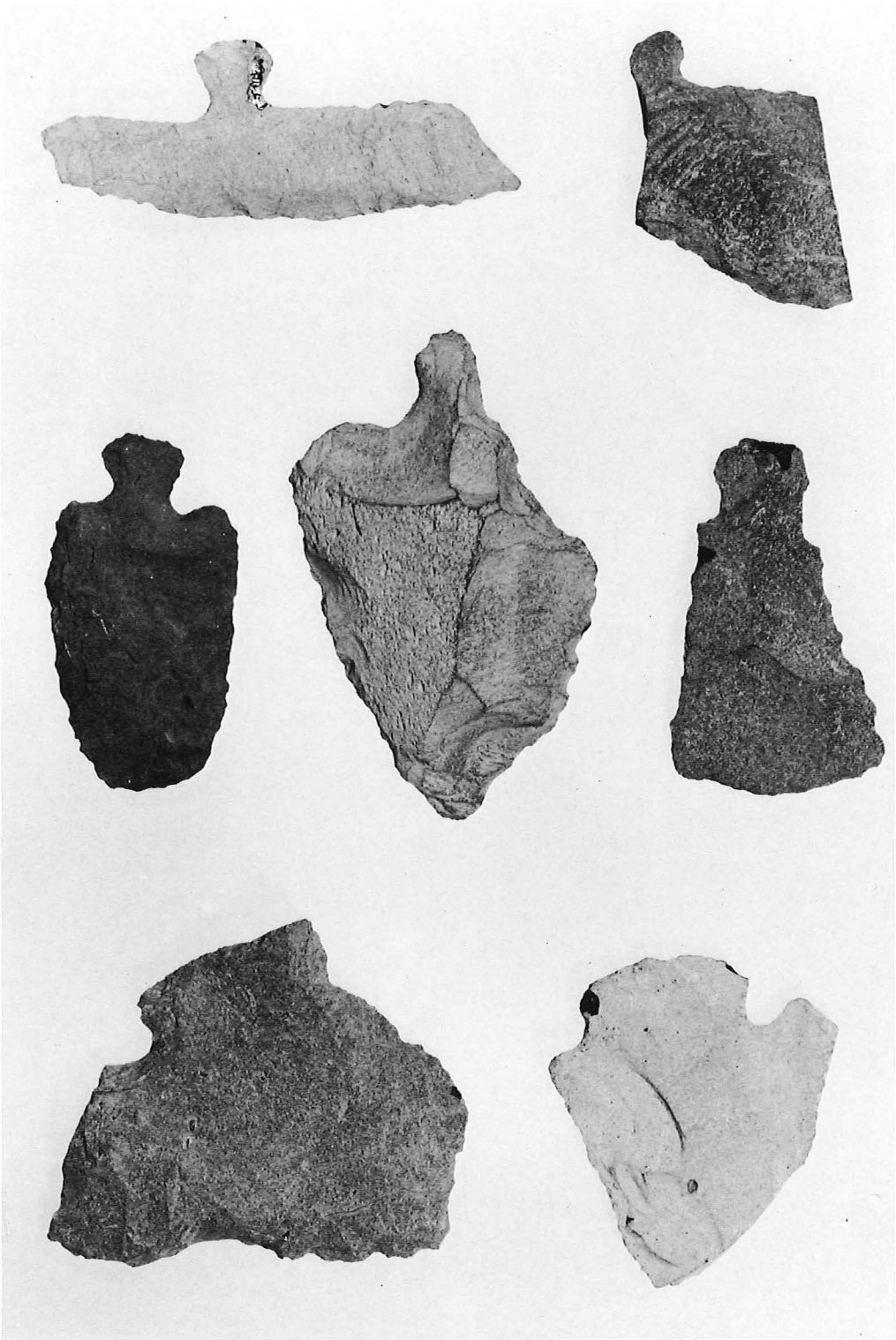
縄文時代の石器―石鏃（６）（裏）（1/1）



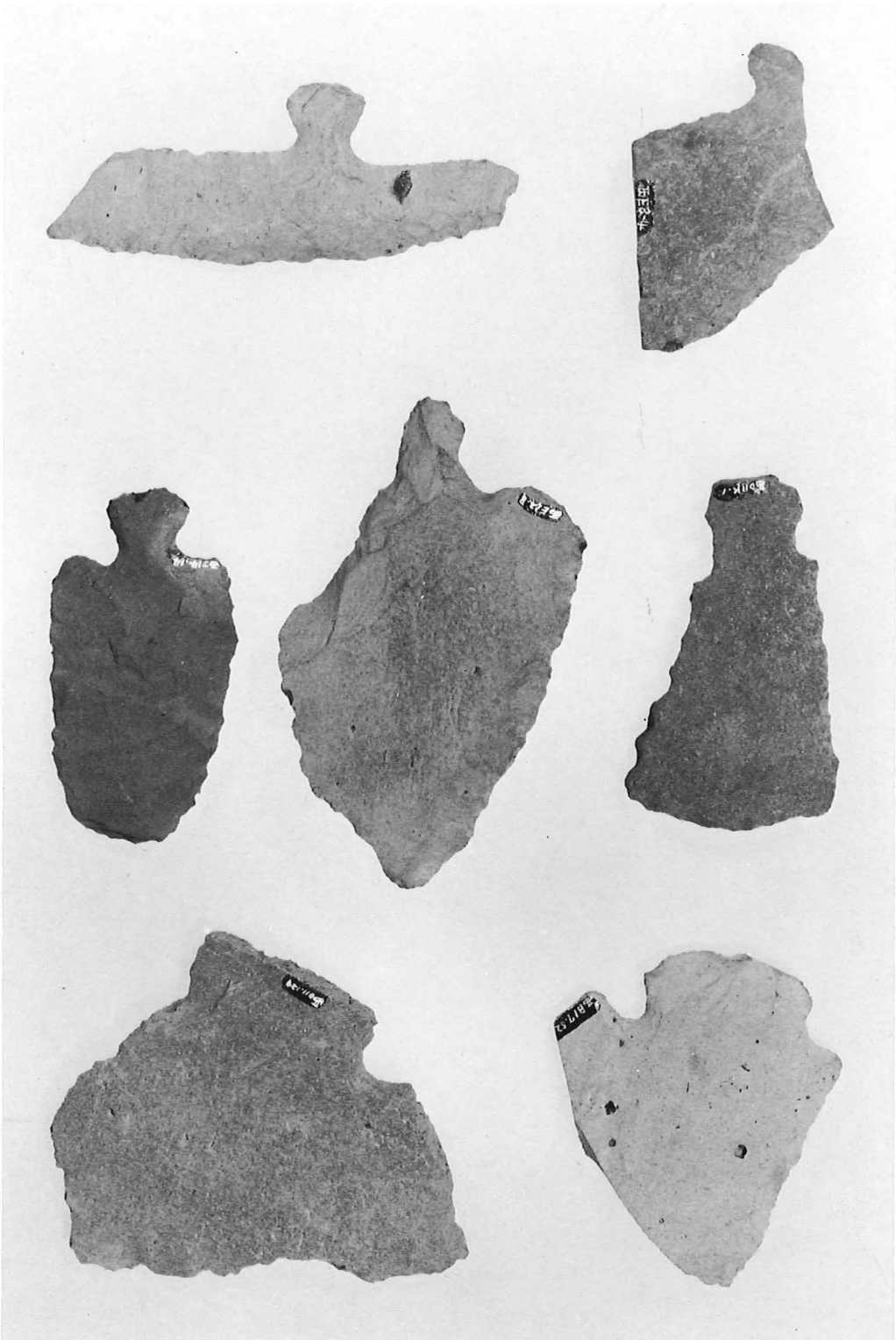
縄文時代の石器―石匙（１）（表）（1/1）



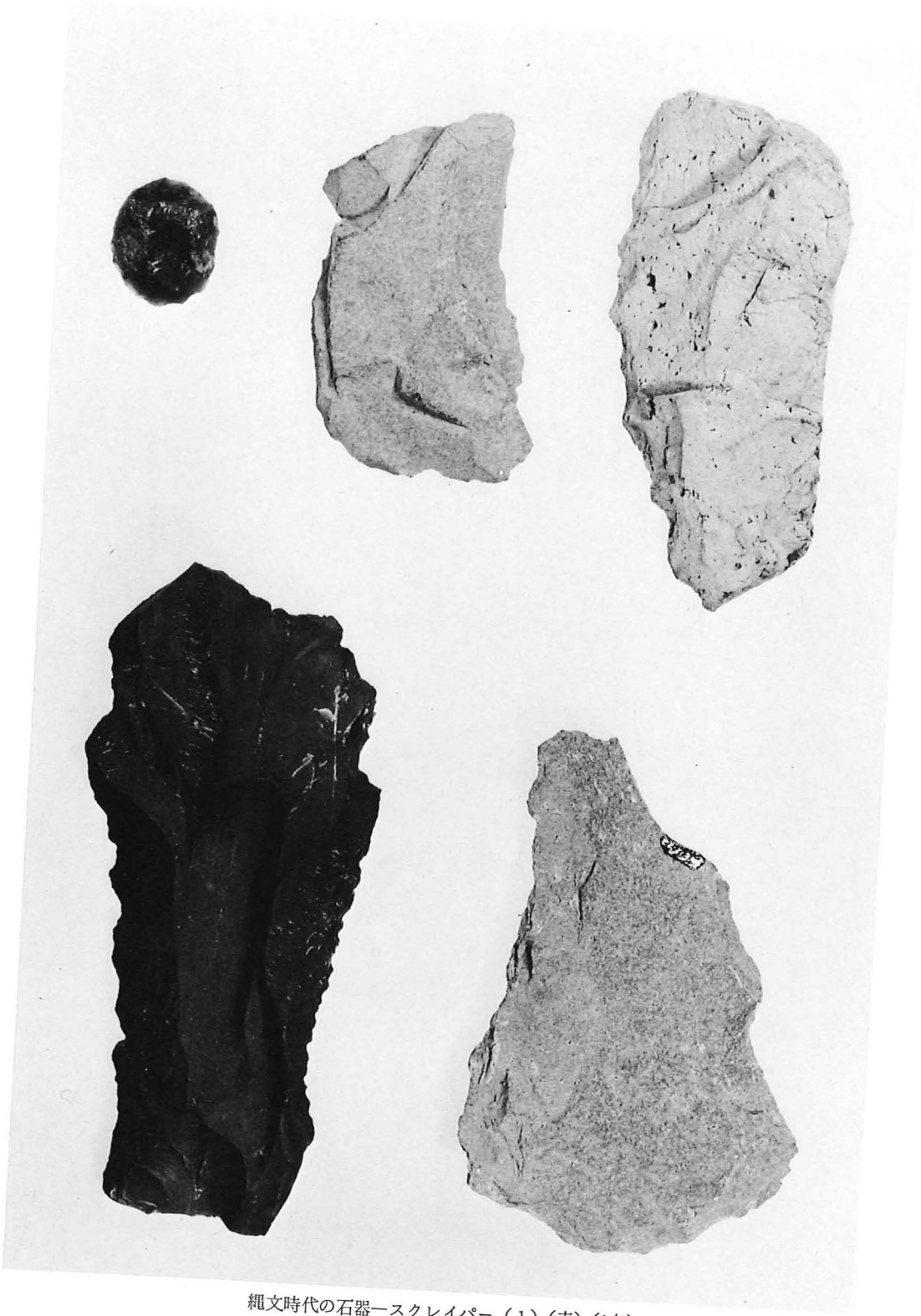
縄文時代の石器―石匙（１）（裏）（1/1）



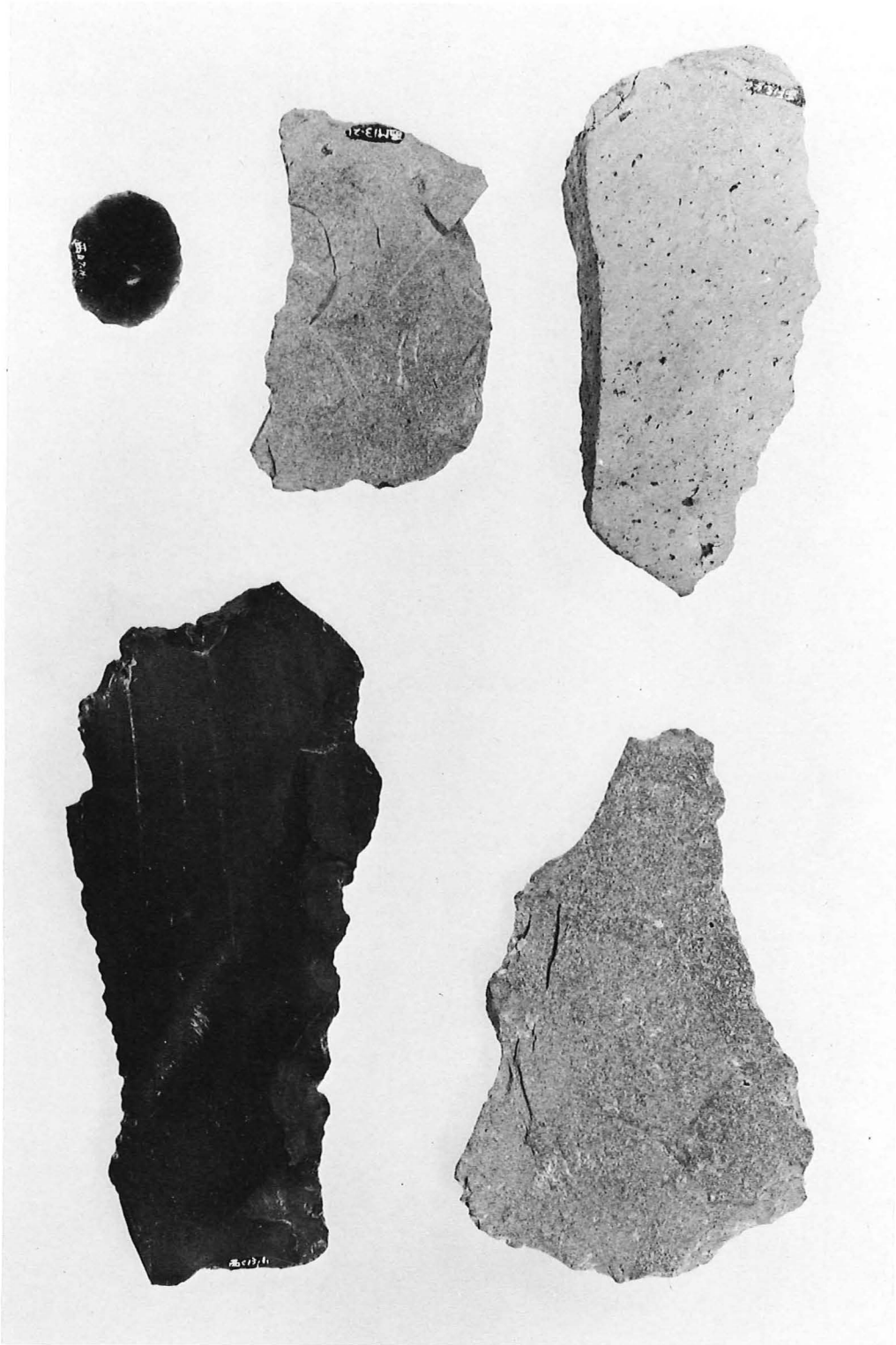
縄文時代の石器―石匙（２）（表）（1/1）



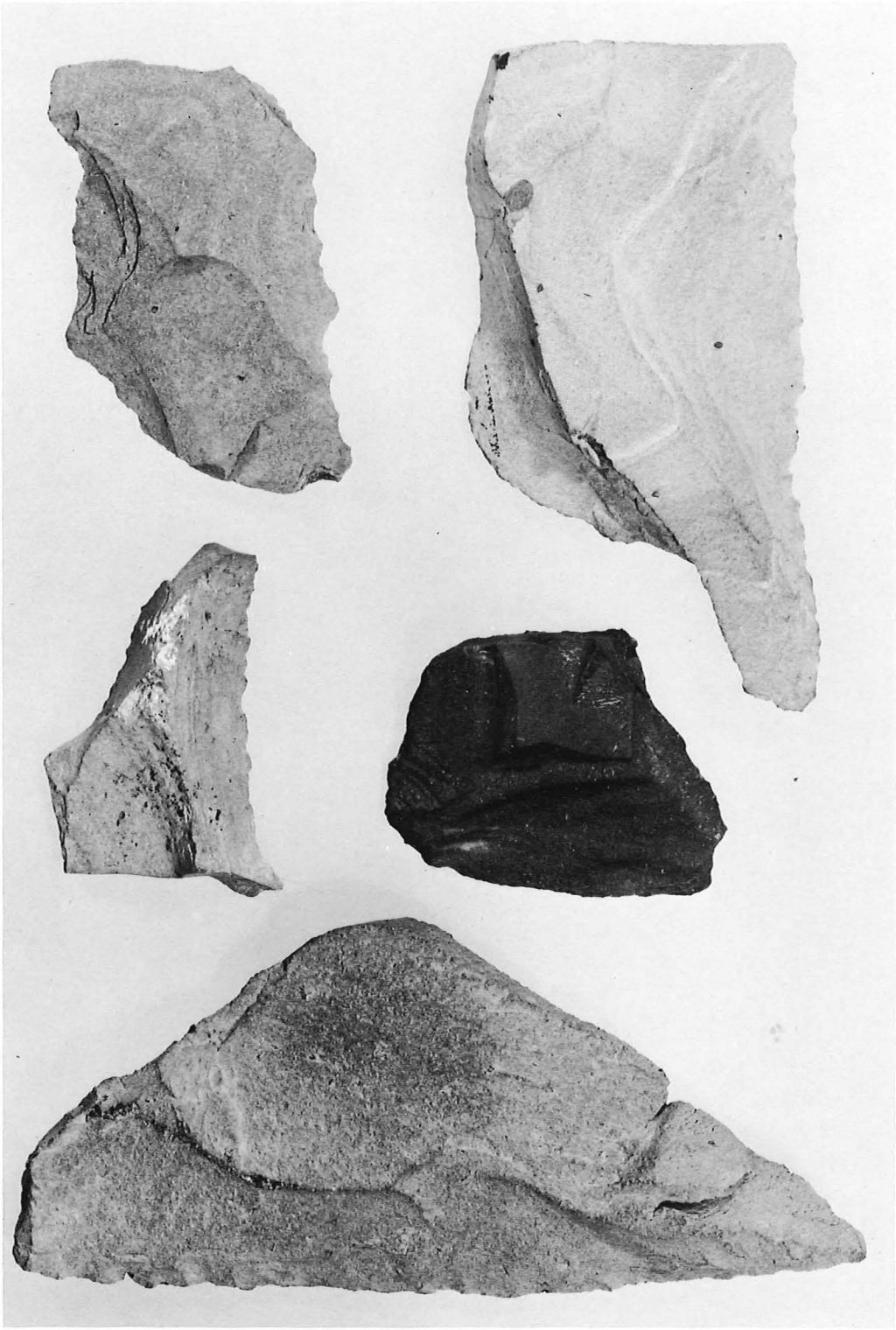
縄文時代の石器―石匙（２）（裏）（1/1）



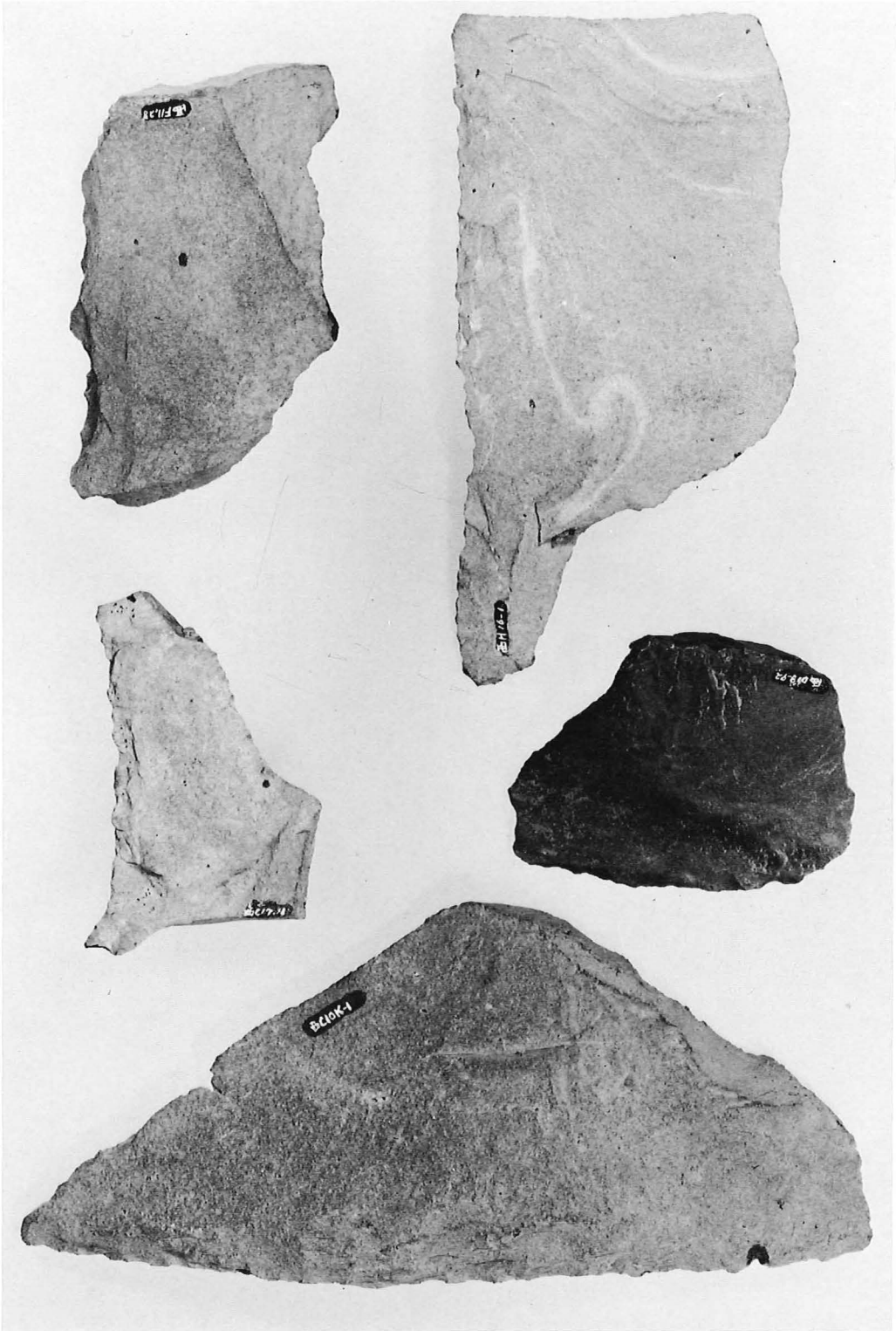
縄文時代の石器―スクレイパー（1）（表）(1/1)



縄文時代の石器―スクレイパー（1）（裏）（1/1）



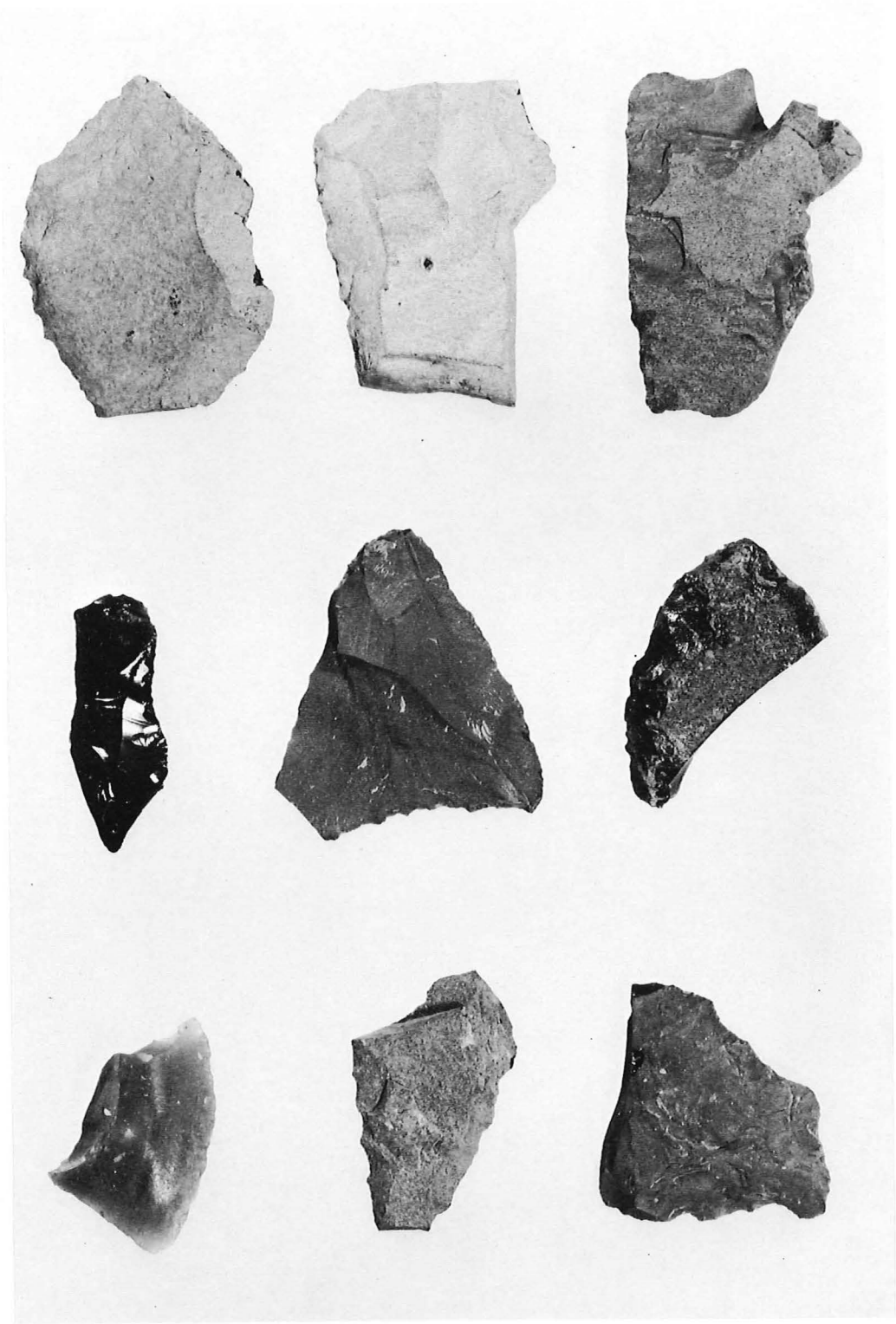
縄文時代の石器―スクレイパー（２）（表）（1/1）



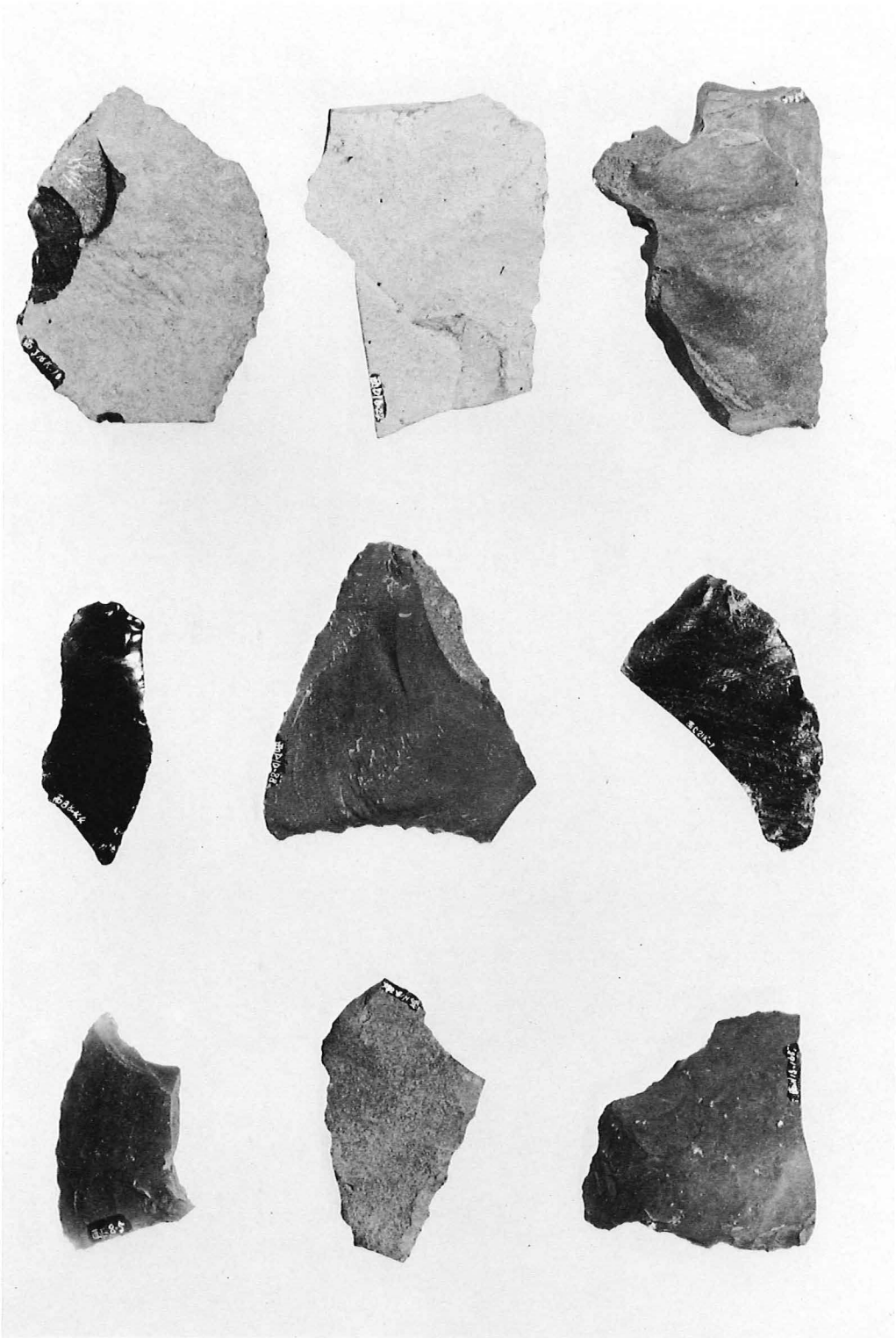
縄文時代の石器―スクレイパー（２）（裏）（1/1）

縄文時代の石器―スクレイパー（３）（表）（1/1）

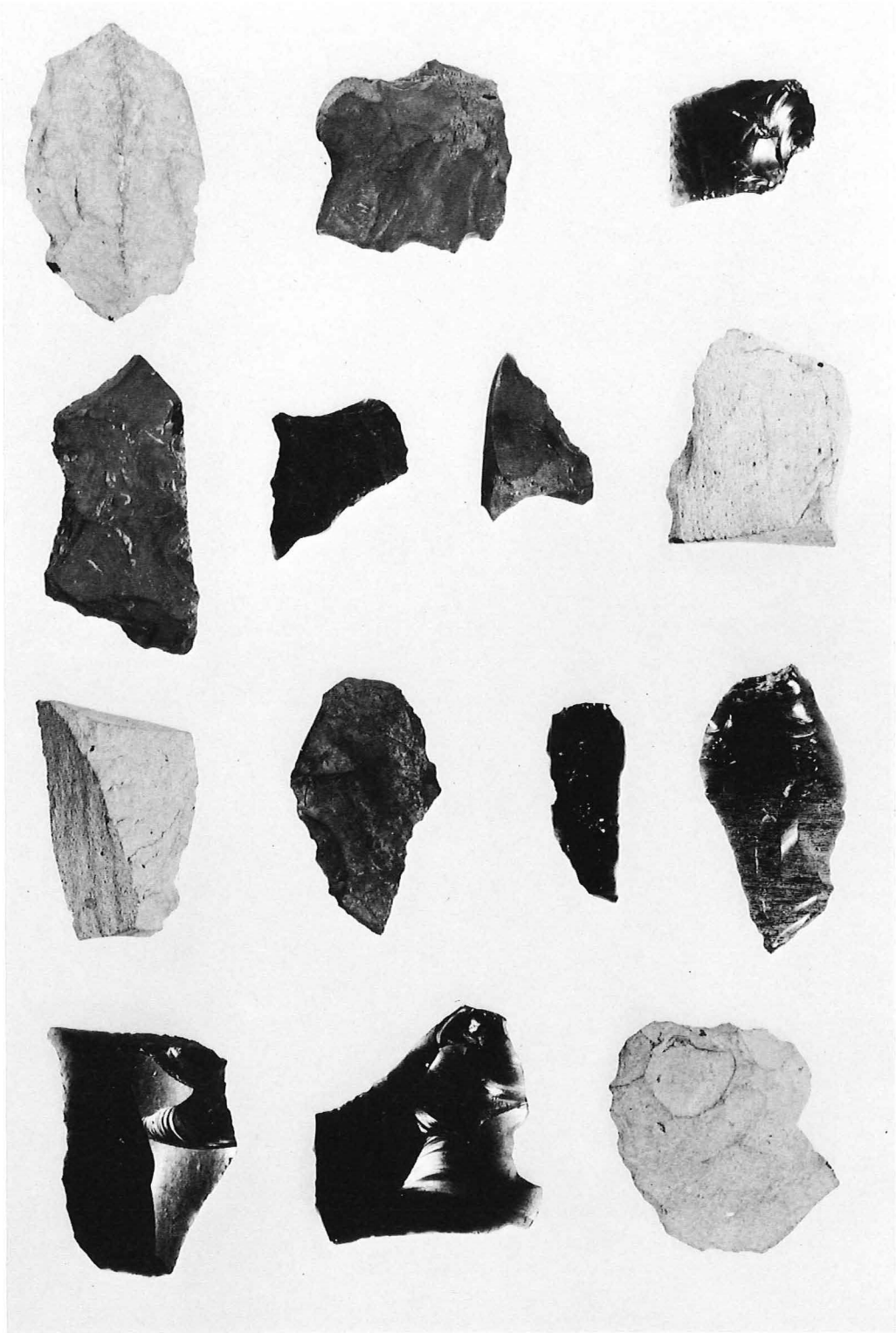
縄文時代の石器―スクレイパー（３）（裏）（1/1）



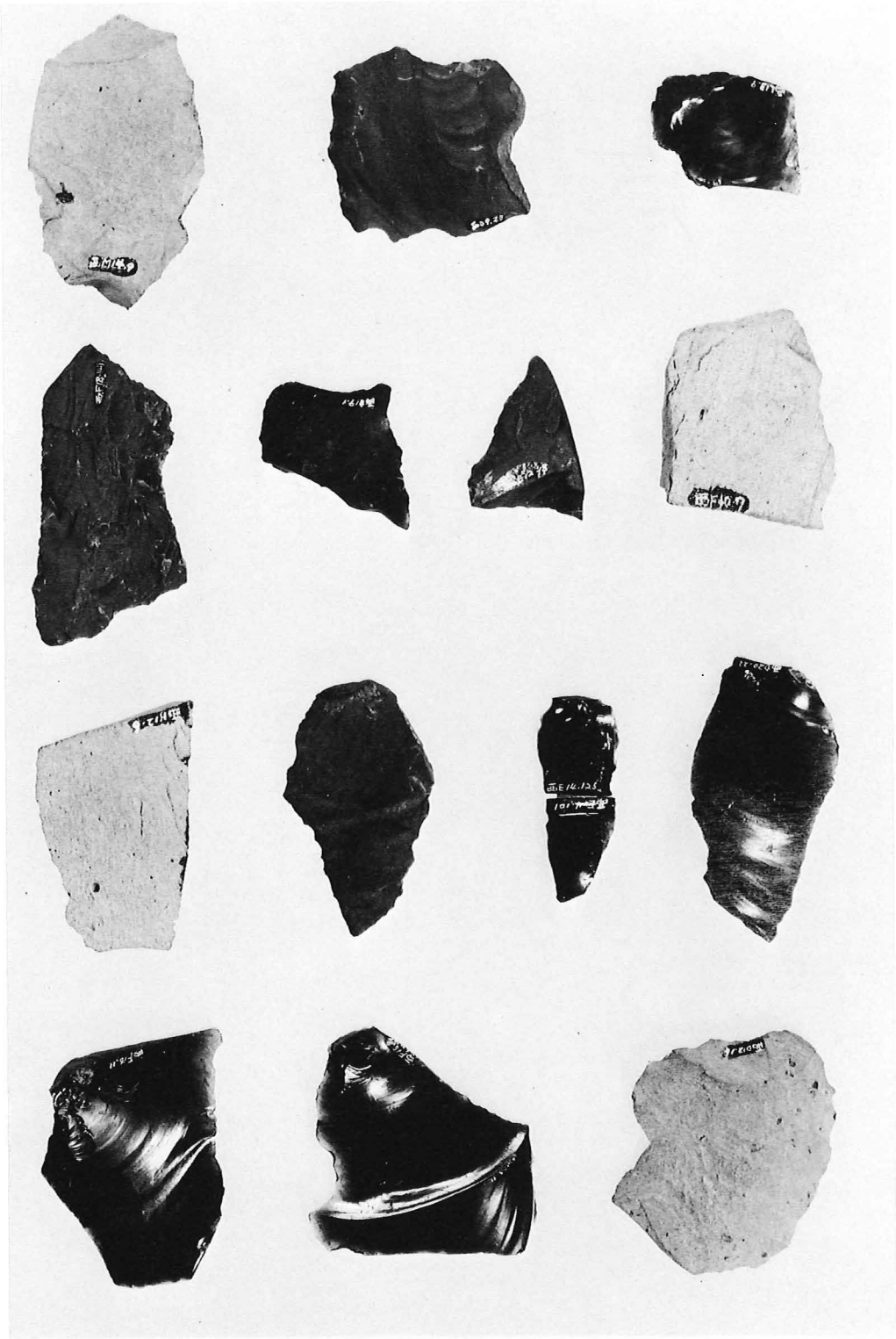
縄文時代の石器―スクレイパー（4）（表）（1/1）



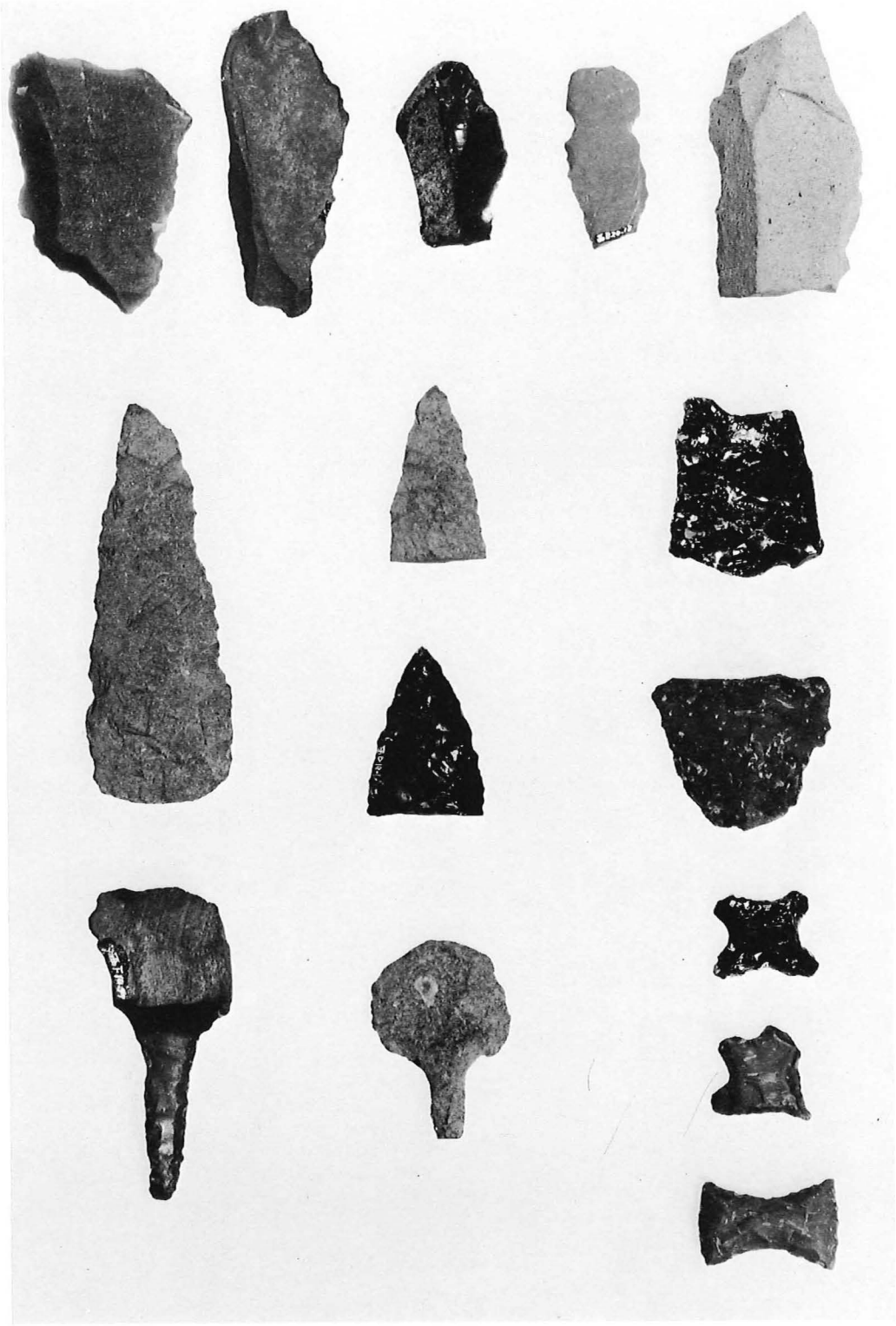
縄文時代の石器―スクレイパー（４）（裏）(1/1)



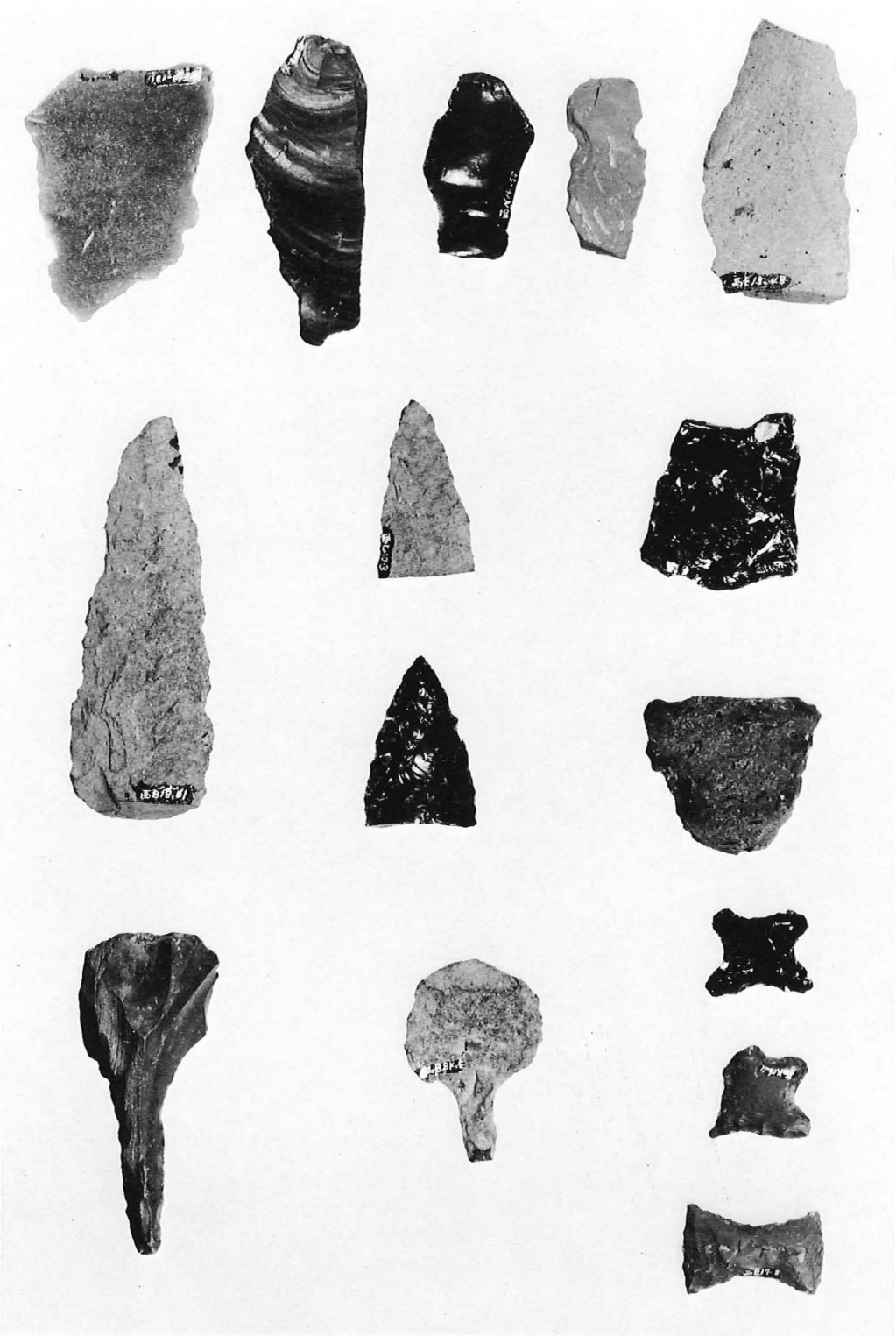
縄文時代の石器―加工痕ある石器・使用痕ある剝片（表）（1/1）



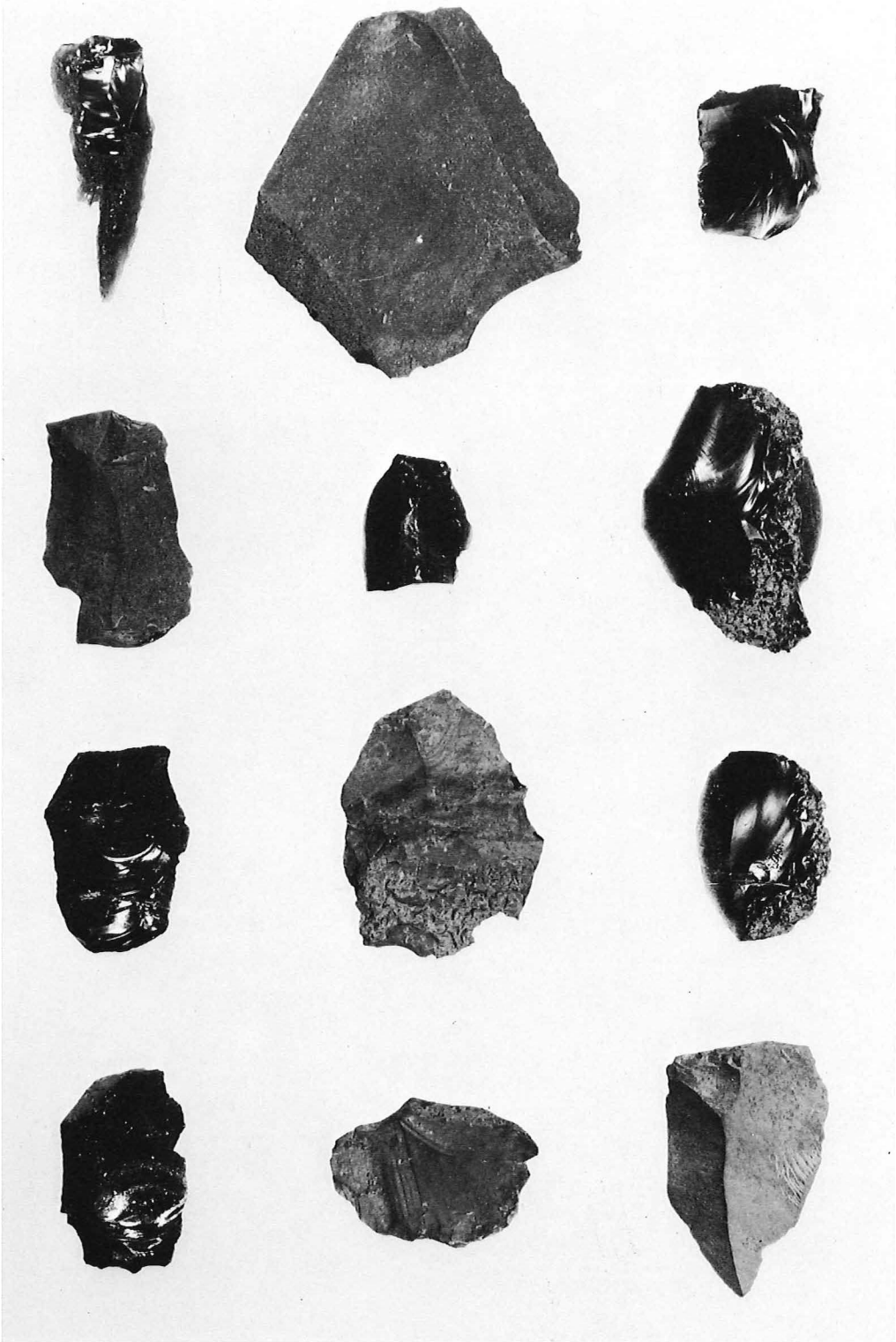
縄文時代の石器―加工痕ある石器・使用痕ある剝片（裏）（1/1）



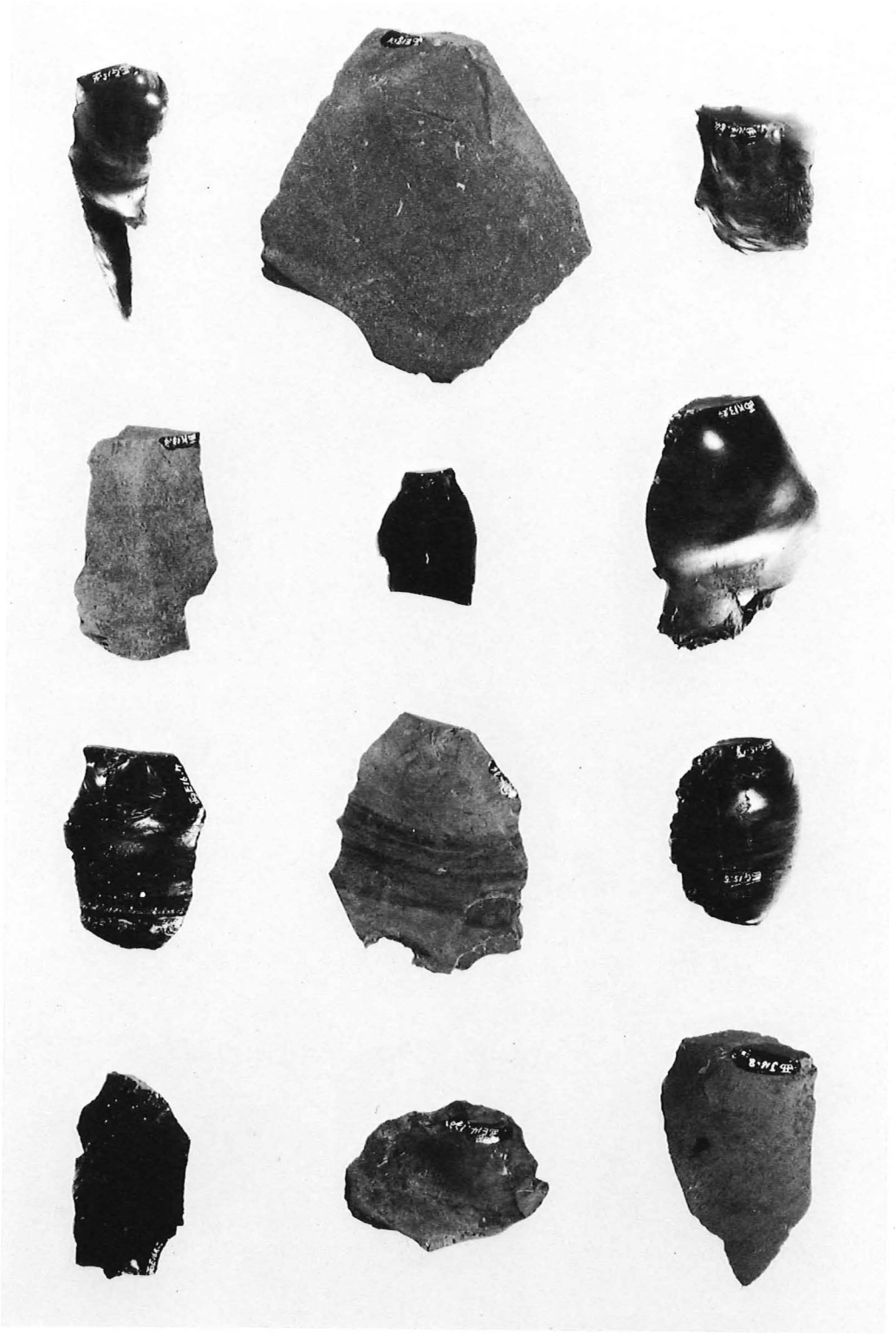
縄文時代の石器―使用痕ある剝片・石槍・石錐・異形石器（表）（1/1）



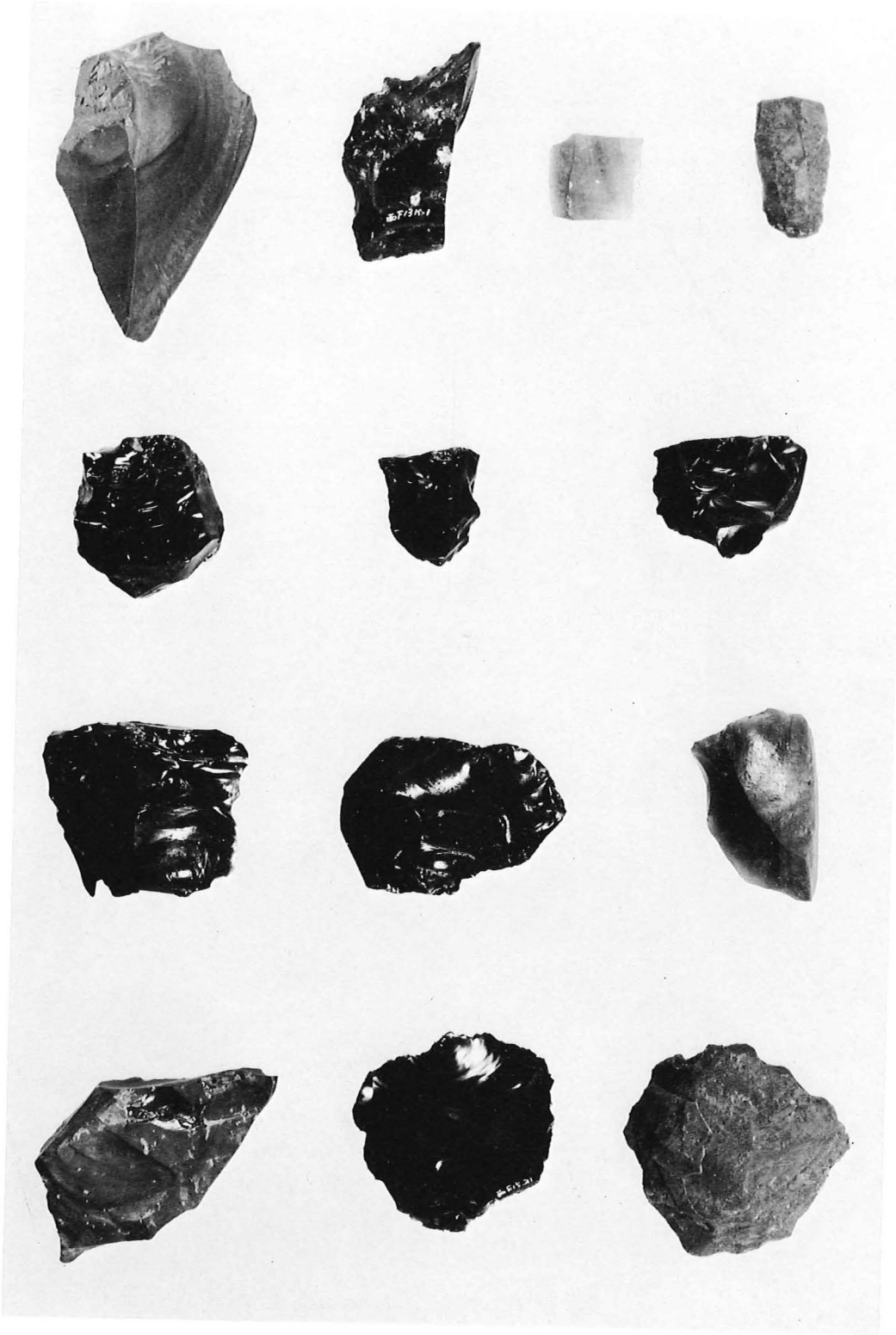
縄文時代の石器―使用痕ある剝片・石槍・石錐・異形石器（裏）（1/1）



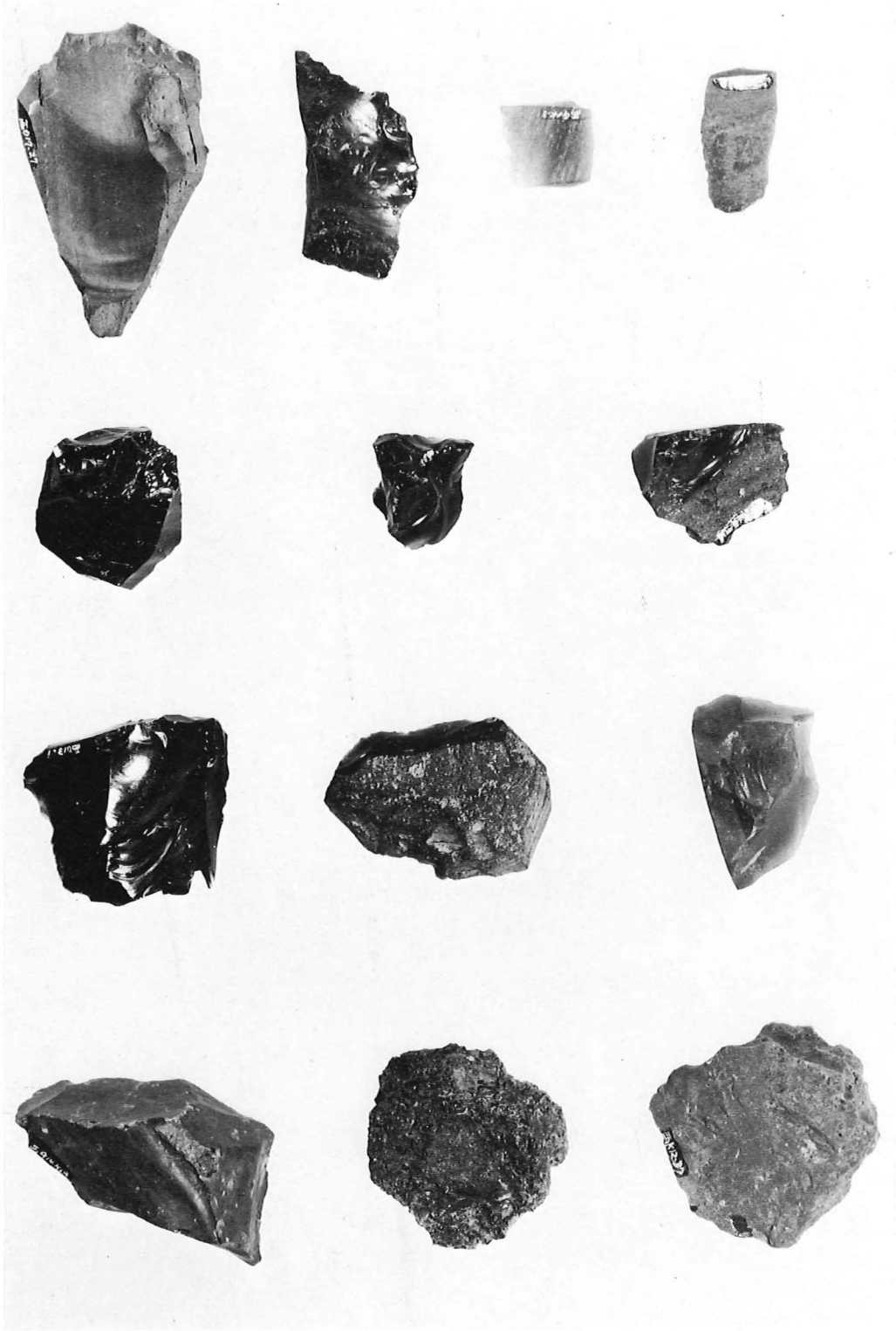
縄文時代の石器―剝片（表）(1/1)



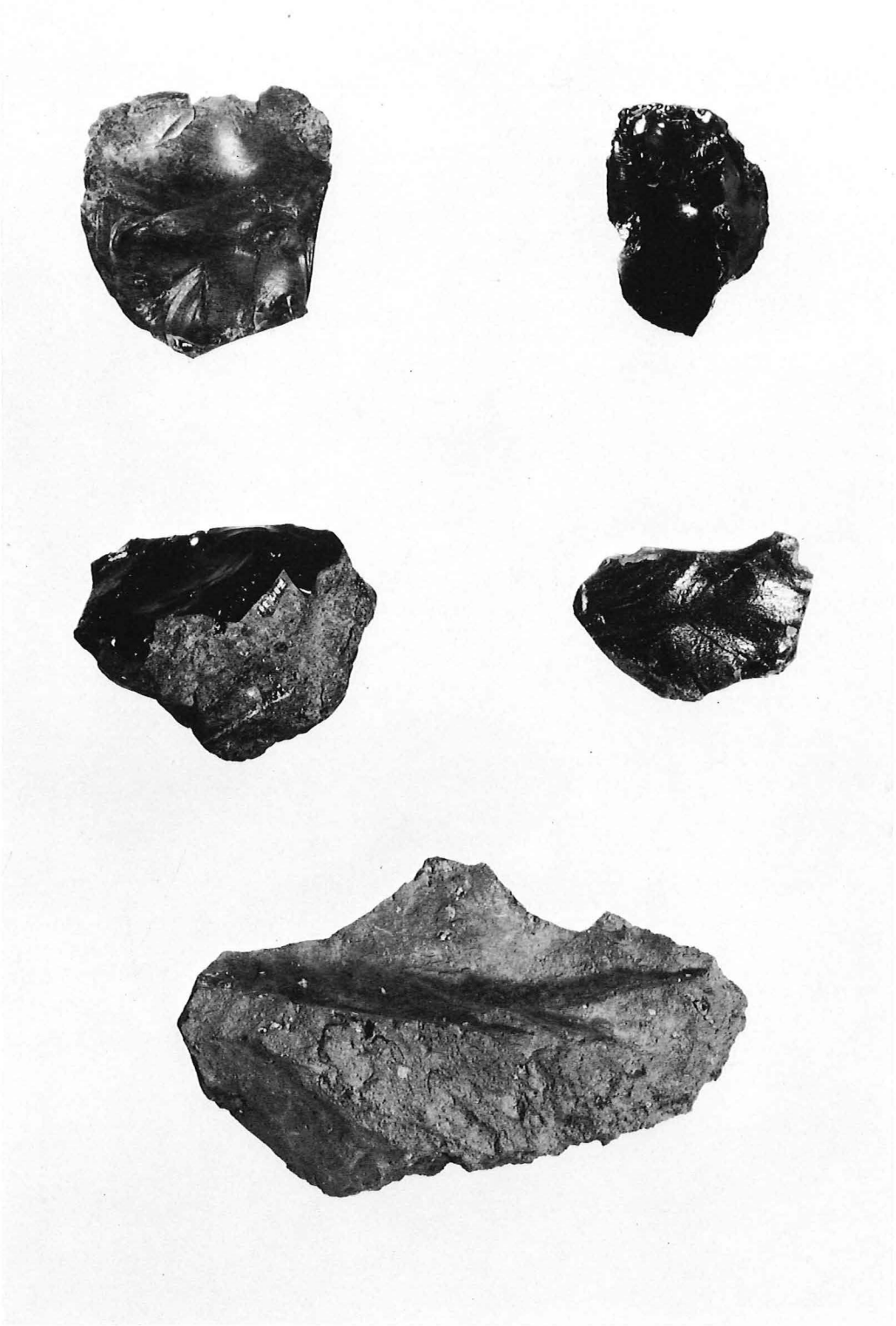
縄文時代の石器―剝片（裏）(1/1)



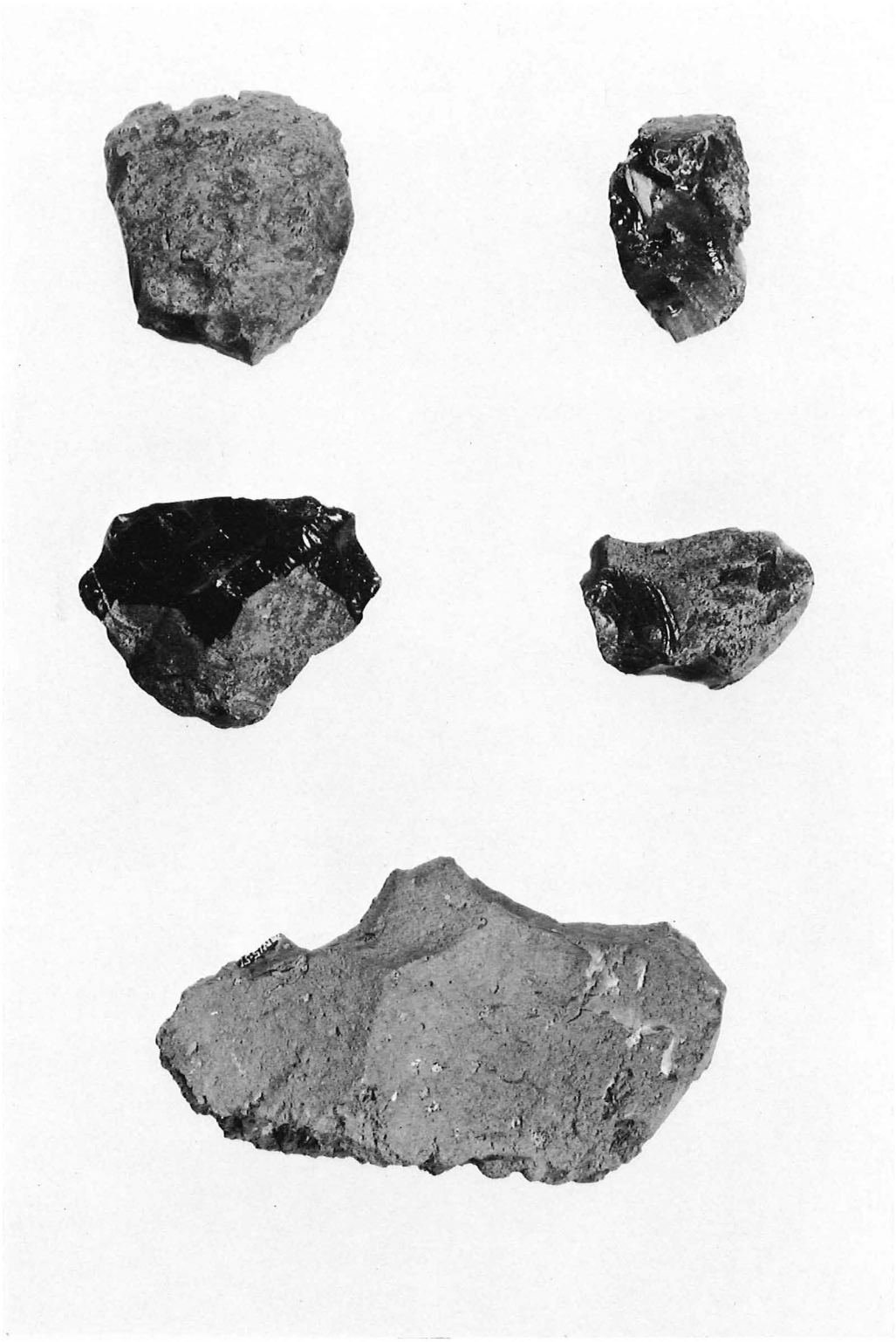
縄文時代の石器―剝片・石核（表）(1/1)



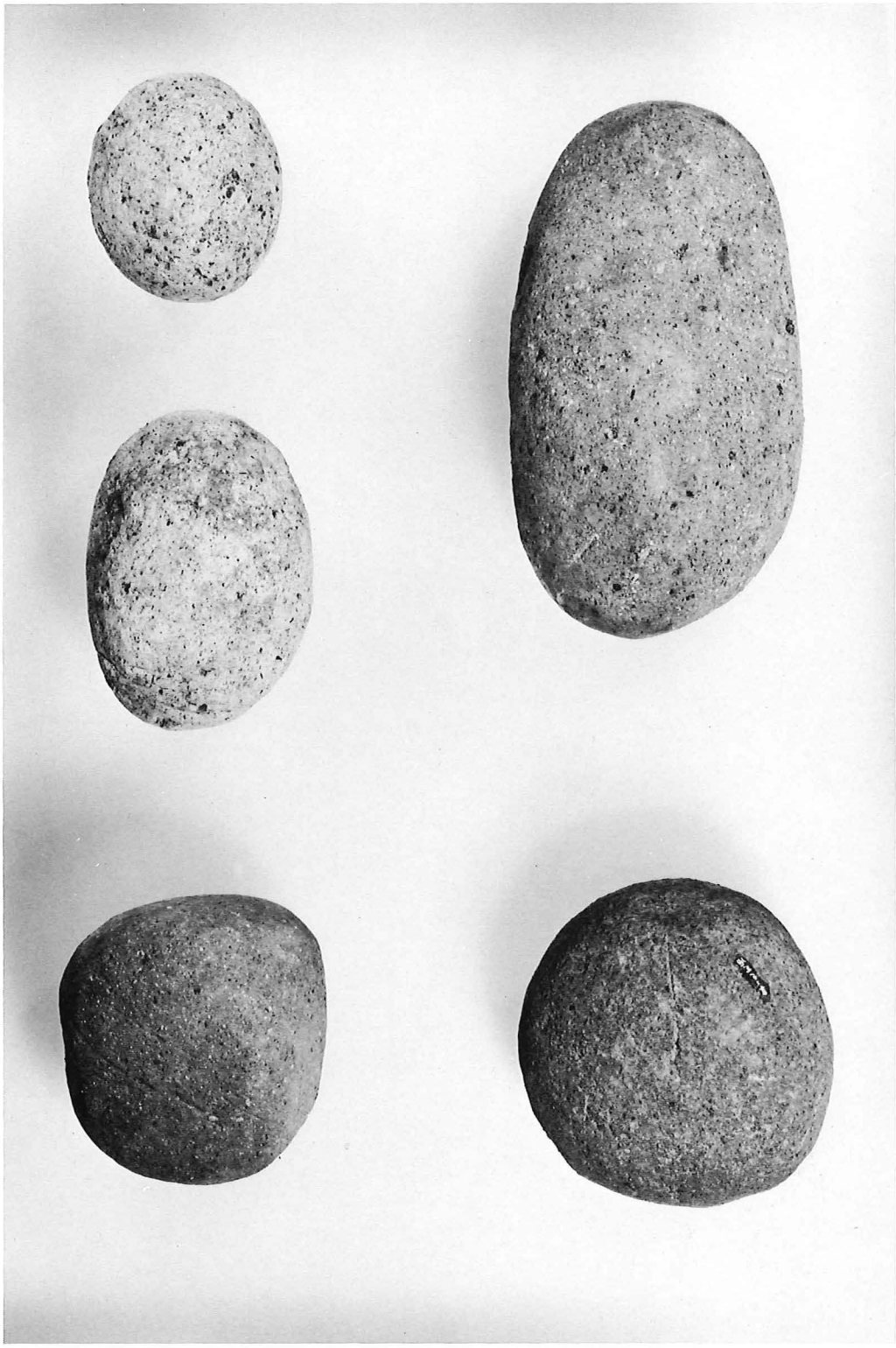
縄文時代の石器―剝片・石核（裏）(1/1)



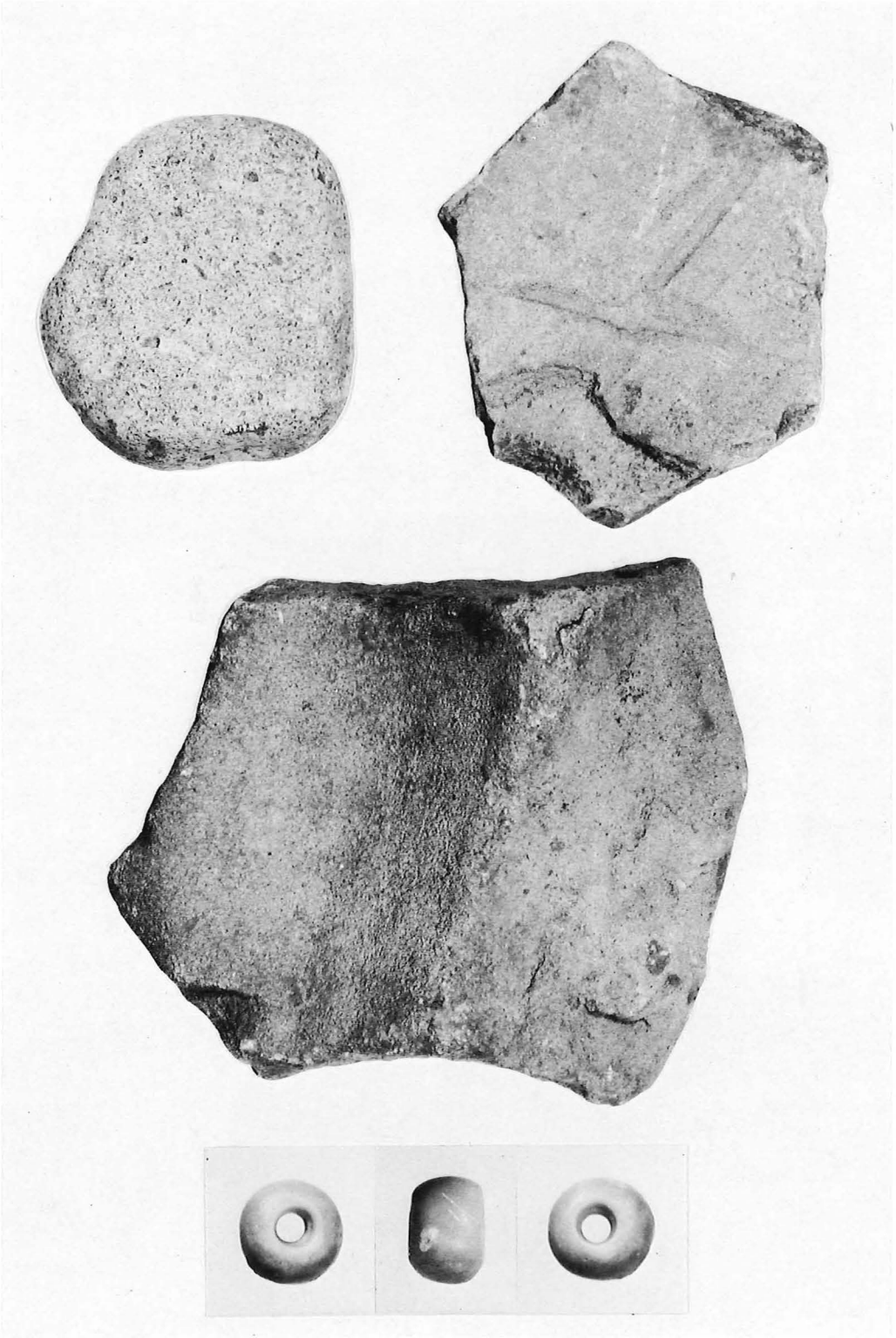
縄文時代の石器―石核（表）（1/1）



縄文時代の石器―石核（裏）（1/1）



縄文時代の石器―磨石・敲石（1/2）



縄文時代の石器・玉類―敲石・砥石・石皿（1/2）・玉類（1/1）

ドーナツ状土壙32号

ドーナツ状土壙M—13・14区

Ｉ・Ｊ—12～14区・ドーナツ状土壙

ドーナツ状土壙25・26号

ドーナツ状土壙22・35号

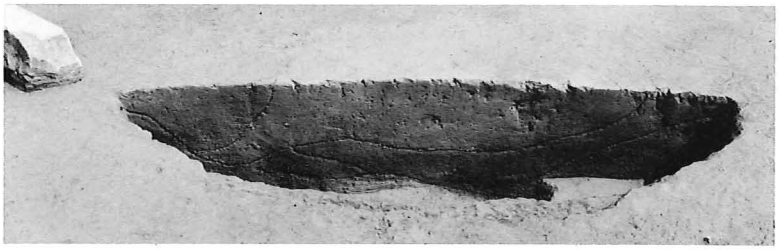
ドーナツ状土壙13～15号

ドーナツ状土壙40号

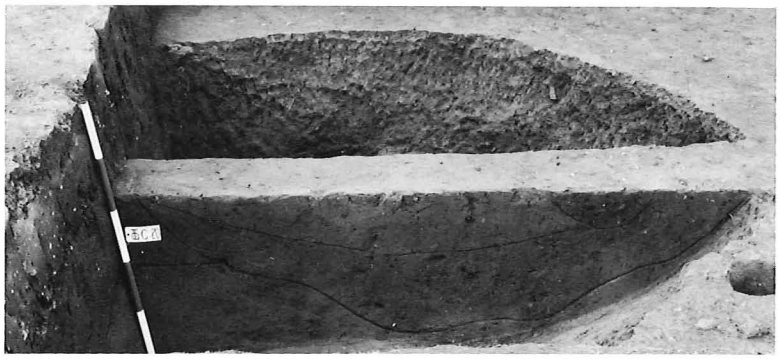
ドーナツ状土壙22号

ドーナツ状土壙37号

ドーナツ状土壙検出状況12号

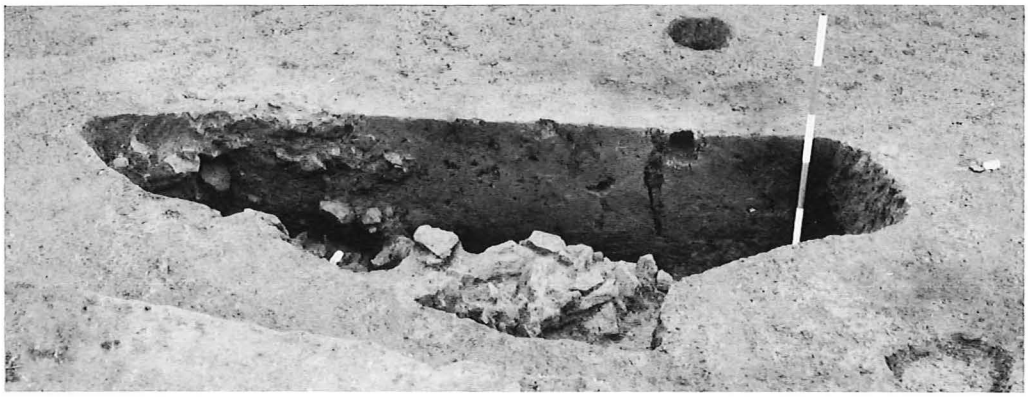


ドーナツ状土壙断面22号



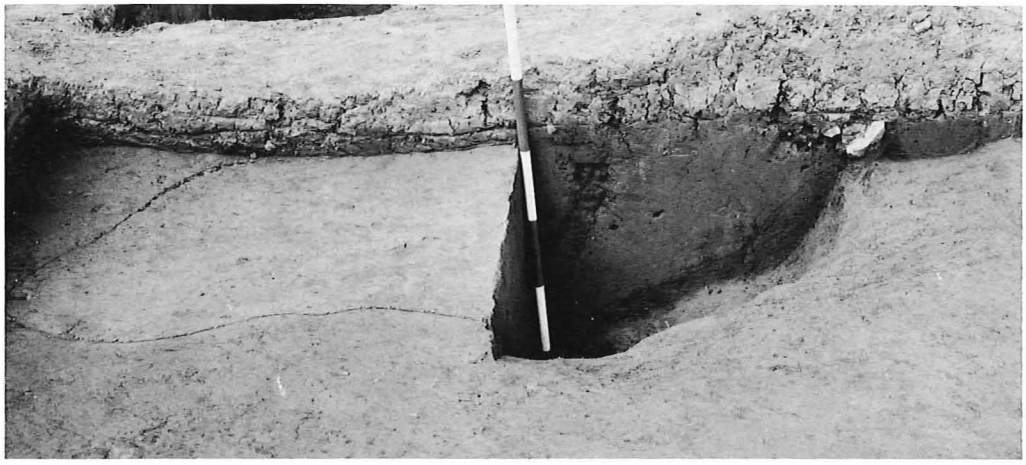
ドーナツ状土壙断面44号

ドーナツ状土壙断面38号



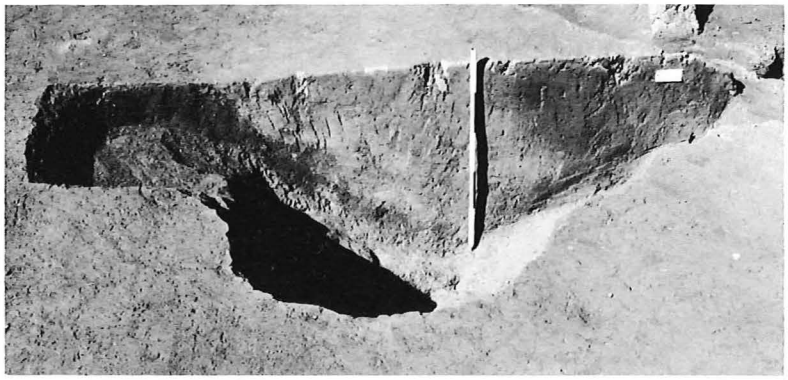
ドーナツ状土壙断面32号

ドーナツ状土壙断面12号

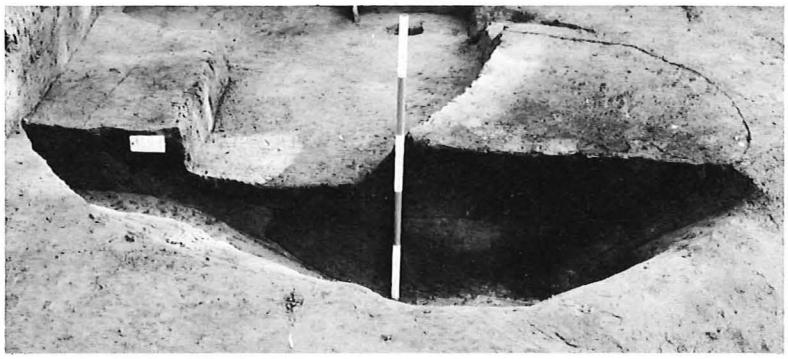


ドーナツ状土壙断面２号

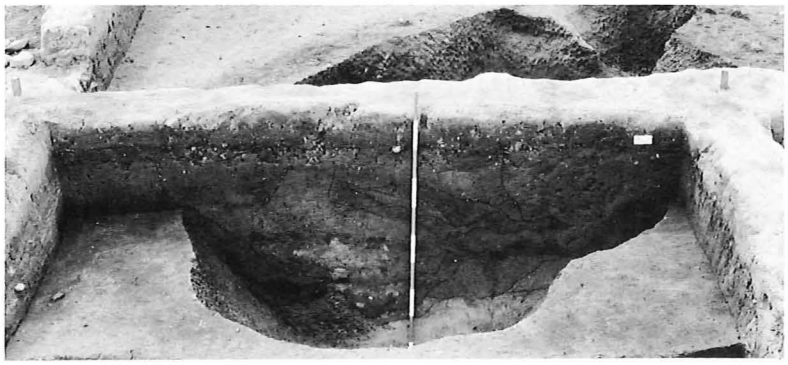
ドーナツ状土壙断面11号



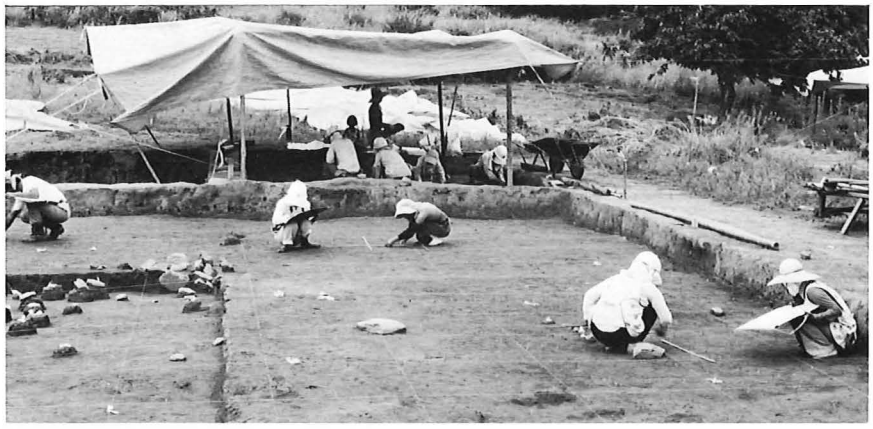
ドーナツ状土壙断面13号



ドーナツ状土壙断面７号



ドーナツ状土壙断面45号



調査風景

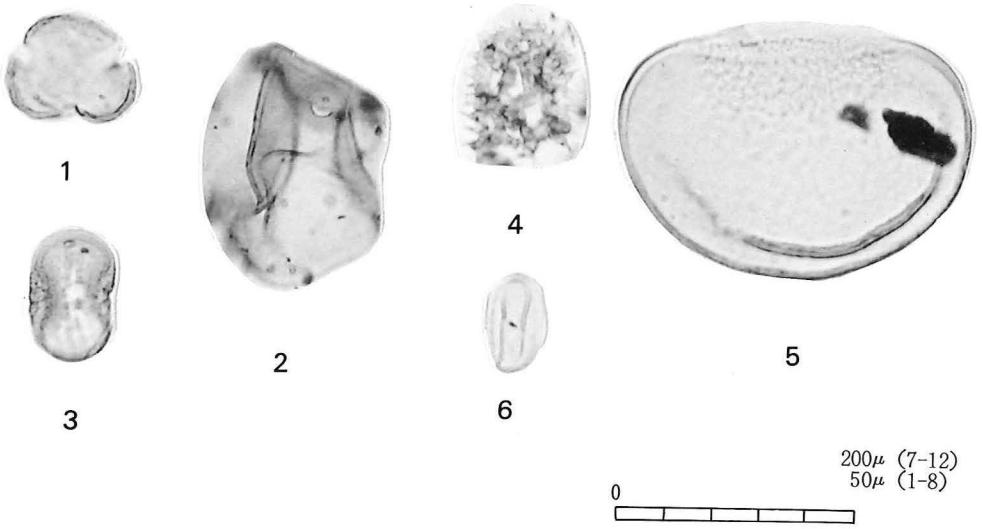
調査風景

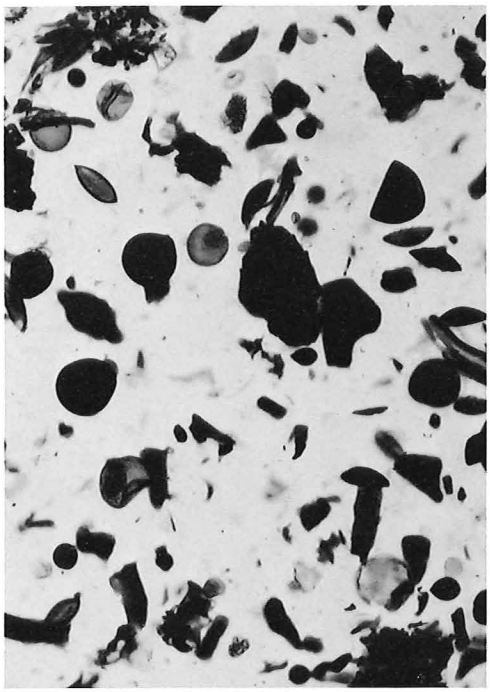
調査風景

調査風景

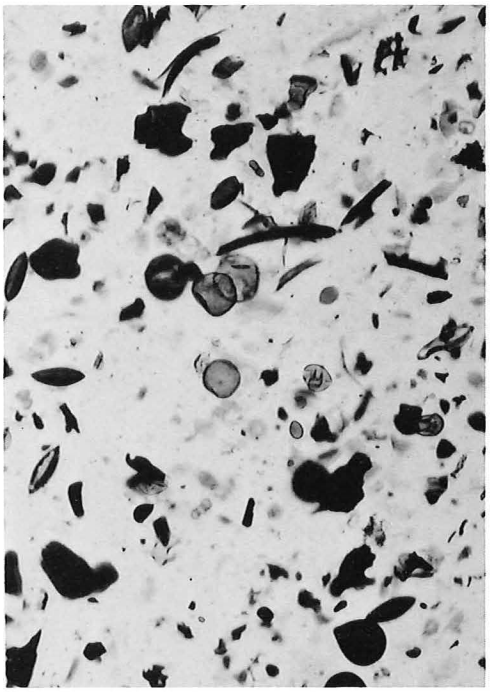
調査風景

調査風景





7　状　況　写　真　　No. 9



8　状　況　写　真　　No. 10

1	Quercus subgen. Lepidobalanus	No. 16	4	Cichorioideae	No. 12
2	Gramineae	No. 12	5	Monolete spore	No. 9
3	Justicia	No. 10	6	Trizonocolporate pollenA-type	No. 16

花粉・胞子化石名・状況写真

9 状 況 写 真　　No. 6

10 状 況 写 真　　No. 12

11 状 況 写 真　　No. 16

12 状 況 写 真　　No. 23

状況写真

長崎県文化財調査報告書　第74集

諫早中核工業団地造成に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
Ⅱ

昭和60年３月

発　行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2—13

印　刷　株式会社　隆　文　社
佐世保市瀬戸越町260